英雄後談

カイラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄後談

【Ｎコード】
Ｎ９１２５Ｐ

【作者名】
カイラ

【あらすじ】
俺、ゴドリック・グリフィンドールは“城にかけた魔法”が継続されているかを確認するため再びホグワーツへと降り立つ。しかし数十年後、教員から新入生として再び入学する事になった。
「何で二回も入学しないといけないんだ！」
子世代で主人公はゴドリックです。原作沿いですが少し映画も入っています。下手な文章でもＯＫな方のみどうぞ。
※初めの方は原作に忠実なのでオリジナルがありません。

設定（前書き）

設定が少し分からないと感想に書いてありましたので書きました。
しかし大雑把です。そして関係がない設定（創設者時代等）があります。
申し訳ありませんが英雄後談に関わりがない設定は全力で無視して下さい。
また上記のような状態なので設定も変わると思います。…すみません。
作者は鳥頭でその上馬鹿なので設定、説明等が足りないと思います。
ので聞きたい事があるなら感想に書いてください。返事の後にここにも書き加えます。
これからも英雄後談をよろしくお願いします。

設定

主人公　ゴドリック・グリフィンドール
偽名（親世代）　火淵竜季―ヒブカタツキ―
偽名２（子世代）　火淵来夏―ヒブカライカ―
年齢　？
誕生日　？
血液型　自称Ｏ型
身長　１４８ぐらい（伸びなかった）
性格
後世には勇猛果敢と残っている。…が実際には他の創設者には時々逆らえなかったりするヘタレ。
基本ポジティブで考え無しの悪戯好き。サラザール・スリザリン曰く馬鹿で単細胞。しかし思考が分からないなど掴みにくい性格。だが創設者と一緒に居る時のみ上記の性格。
親世代、子世代では何処かしら一線を引いている。
追記
ゴドリック・グリフィンドールの容姿は赤色混じりの金色の髪の毛（訳あり）に蒼い目。髪型は後ろ髪を少し取り、結んだ。その結んだ所だけを伸ばし、他は長くなったら切ってもらう。（ヘルガかロウェナに）
右目には眼帯がしてある。（過去関係）しかし実は左目も見えていない、盲目。（過去関係）
両手には指貫き手袋をしている。そして左手の甲には魔法陣が描かれてある。
額には見えないように眼帯の紐で隠しているが暗殺戦闘奴隷の印しがある、元奴隷。そして右手にはマグル界の奴隷の印しがある。
竜季時は黒髪で後ろ髪を全て結び伸ばす。（魔法にて染めた）
右手にはマグル界の奴隷の印しがある。

備考

一流魔法使い？

～質問コーナー～

ゴ「何？俺に質問？答えられるやつなら良いよー」

Q1、好きな食べ物は？

ゴ「うーん何だろう？」

Q2、子供時代に流行った事は？

ゴ「ゴメン。これは分からない」

Q3、子供時代の強い思い出は？

ゴ「そうだなぁ…やっぱりサラ達に会った時かな？」

Q4、好きな色は？

ゴ「赤！」

Q5、友人と仲良くなったキッカケは？

ゴ「ん？…そうだなぁ、少し厄介事に巻き込んでその後……やっぱいいや。無しで」

Q6、趣味は？

ゴ「悪戯！」

Q7、休日の過ごし方は？

ゴ「……秘密で」

Q8、家族は？

ゴ「いない」

Q9、好きな音楽は？

ゴ「音楽自体がちょと縁がないな…」

Q10、ホグワーツに今更来た理由は？

ゴ「今更って……俺達が死んだ後もホグワーツにかけた魔法が継続

しているか、何か異常がなかったのかの確認に」
Q11、年齢は？
ゴ「年齢…いくつかな…？創設時代は分からないけど、ハリー達の時代はセブルスと同期だから同じ年齢」
ゴドリックさんありがとうございます。

一話（前書き）

はじめましてカイラです。はじめての執筆なので下手ですが楽しんでいただけるように頑張ります。

一話

（あー長ぇ…これだから年寄りは…）

とある魔法学校の職員室で校長の話しがあっている中、椅子に腰掛けていかにも暇そうに欠伸を堪えている子供ー否、教師がいた。

見た目は身長が伸びず子供の身長。髪は黒で目は蒼色。右目には眼帯をしていて、両手には指貫き手袋。とても教師には見えなかった。

名前はゴドリック・グリフィンドール。ただ少しこの名前が厄介なので火淵竜季と名乗っている。

（はぁ…早く終わんねぇかな…）

「ーツキ、タツキ！」

「……！」

隣のセブルスに呼ばれ、ぱっと顔を上げる。すると副校長であるマクゴナガル先生が厳しい声で聞いてきた。

「…話しは聞いていましたか？」

「……お年寄りの話しは長いってことですか？」

タツキがそう答えるとマクゴナガル先生の眉間のシワが一つ増えた。

「違います。タツキ先生…今日は真面目に話を聞くようにお伝えしてたはずですが…」

「…そうでしたっけ？」

だって話し長いし、などと思っていたら校長であるダンブルドアが話しだす。

「ふむ。…タツキ、今学期にハリー・ポッターが入学する話しをしておったのじゃが…そこまで話しが長いと言うのならば、タツキお主にもハリーを迎えに行ってもらおうかの？」

俺は思わず聞き返す。

「迎え？ハグリッドが行くんじゃないのか？」

「そうじゃ。そしてタツキにも行ってもらう。…わしの長い話しよりはよかろう？」

「……え?行きたくない…」
「…わしの話しを聞くか迎えに行くか二択じゃ」
「迎えに行きます」
俺はダンブルドアの長い話しを聞くことはしたくなかったので即座に迎えに行くと答える。
「分かった。では任せよう。日付は7月31日…タツキ遅れるでないぞ?」
「分かりした」
俺がそう答え、ダンブルドアは納得したのだろう俺だけに向けていただろう視線を全体へと向けた。
「さて、最後じゃ。今学期いっぱいは四階は立入禁止にする。そして先生方には罠を作って欲しいんじゃ」
職員室が静まり返るが、そんな中で俺は元気よく手を挙げる。
「はい、しつもーん。誰が罠を仕掛けるんですかー?」
「まず、罠はわし、マクゴナガル先生、スプラウト先生、スネイプ先生、フリット・ウィック先生クィレル先生、ハグリッド、それに…タツキ頼めるかの?」
俺以外はすぐに了承の言葉が返ってくる。
「ダンブルドア、目的は?んでどのくらいの罠?」
「目的は賢者の石を隠すためじゃな。どのくらい、とは?」
「んー暗殺するつもりか、瞬殺か、苦しませて殺すのかとか…」
「何故選択が殺すなのじゃ!」
「え?罠って殺すために仕掛けるんでしょ?」
「違うじゃろ!罠は足止め、または先へと行かせないためであって殺すことが目的ではないのじゃ」
「へーい…」
「…とにかくタツキ、人を殺さない罠を頼む。ちゃんと確認するからのぉ」
「……はい」
ぶすくれた様子だったがタツキは返事を出した。

「…そうじゃ、忘れるところじゃった。タツキ！お主は今学期から新入生として入学しハリーの近くにいてくれぬかの？」
「は？……それは今年だけじゃなく？」
「そうじゃ七年間、つまり卒業するまでじゃの」
「…今更また入学しろと！」
「大丈夫じゃ。助教授じゃから生徒は誰も知らぬし、タツキは十分新入生で通じる。日本からの留学生という設定での」
「……」
俺はあまりに酷い事を言わて思わず黙り込む。するとダンブルドアは脅すような声で確認をする。
「頼んだからの？」
「……はい…」
こうして俺の二度目の入学が決まった。
「それではこれにて職員会議を終わろうかのぉ」ダンブルドアが会議の終了を告げた。
（…はぁ、また一年生からか…）
俺は机の上にある紅茶を飲もうと手を伸ばす。しかし手は空を切る。
（あれ？…ここじゃない？）
「…タツキ。2、3？右だ」
セブルスが紅茶の場所を教えてくれる。
教えてくれた所に手を伸ばすとカップの取っ手があった。
「あぁ…本当だ。ありがとう」
「珍しいな。いつもならこんな事はないが…」
「あはは…セブルスももう一度入学しろなんて言われたら分かるよ。この気分」
タツキはそういいながら紅茶を飲んでいる。
「…まぁ全力を尽くすんだな」
「それは勿論。仕事だしね。お手柔らかに頼みますよ？スネイプ教授」
「ふん。無理な話しだな」

「…陰険」
「何の事ですかな？」
「セブルスは陰険だね、って話しだよ」
俺はセブルスにそう言い席を立つ。
「じゃね。何か用があるなら守護霊を飛ばして」
「あぁ。分かった」
タツキはそう言って職員室を出て行った。

二話（前書き）

書き忘れていました。すみません。
この小説は原作沿いですがこの先必要に応じて捏造したりします。
気をつけてください。

二話

7月30日、激しい雷雨が降る中デコボコな二人がいた。
一人は身長がとても高いハグリッドだ。もう一人は子供…否タツキである。
「タツキ。ハリーが何処におるか探ってくれんか？」
「んー…うわぁ、ハグリッド面倒な所にいるよ。孤島だ」
「んな所におるんか。あのマグル達は」
ハグリッドはポケットから時計を出し時間を見る。
「お？タツキ。もうこんな時間だ。急ごう」
「ハグリッド、分かっていると思うけどこれから俺の事はライカって呼んでよ」
「おぉ、そうだったな。気をつける」
俺は誰にも気付かれないようにタツキではなくライカという名前で入学する。他の先生方にもそのことは伝えてある。
「タツ……ライカ。この先であっちょるのか？」
「うん。この先の小屋にいるよ」
「そろそろ31日だ！」
ハグリッドと小屋に向かいながら話していると興奮したようにハグリッドが話す。
「そうだね。ようやく、と言うところかな？…ハグリッド入る前に俺の名前を間違えないようにね？」
「分かってる」
ぶっきらぼうにハグリッドは答える。
小屋に着きドアをハグリッドが大砲を打つようなノックをする。
「誰だ。そこにいるのは。言っとくが、こっちには銃があるぞ！」
中から声が聞こえた。
しかしハグリッドは気にせず一瞬間をあけドアを壊した。
ハグリッドはライカが部屋に入ったのを確認するとドアを床から拾

いまた直した。直した後、ハグリッドは周りを見渡しこう言った。
「お茶でもいれてくれんかね？いやはや、ここまで来るのは骨だったぞ……」
ハグリッドはズカズカとソファに近づき座っていたマグルの子供をのかし座る。
（おいおい…子供怯えてないか？）
タツキはハグリッドの近くに行き、ソファには座らず立つ。
「オー、ハリーだ！」
ハグリッドは泣きそうなしかしそれ以上に嬉しく笑っていた。
（嬉しいのか？…ハグリッドだけが空気が柔らかい）
「最後におまえさんを見た時にゃ、まだほんの赤ん坊だったなぁ。あんたお父さんそっくりだ。でも目はお母さんの目だなぁ」
「今すぐおひきとりを願いたい。家宅侵入罪ですぞ！」
「黙れ、ダーズリー太ったー…」
「ハグリッド！言いすぎだよ」
ライカが止めたがハグリッドは聞かずダーズリーの所に行き、持っていた銃を曲げて部屋の隅になげてしまった。
マグルが悲鳴をあげたがハグリッドは気にしてないようだった。
「なにはともあれ……ハリーや」
ハグリッドはハリーに向けて話しかける。
「お誕生日おめでとう。おまえさんにちょいとあげたいモンがある…どっかで俺が尻に敷いちまったかもしれんが、まぁ味は変わらんだろ」
ハグリッドはポケットの中からケーキを取り出しハリーに渡す。しかしハリーはハグリッドに向けて「あなたは誰？」と問う。
ハグリッドはクスクス笑いながら答えた。
「さよう、まだ自己紹介しとらんかった。俺はルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と領地を守る番人だ。こちらはおまえさんと同じ新入生のライカ・ヒブカだ」
ハグリッドはハリーの腕をブンブン振る。

「さぁてお茶にしようじゃないか。え？紅茶よりちょいと強い液体だってかまわんぞ。まぁ、あればの話しだがな」
（無いだろうな…それにハリーもまだ飲めないのでは？）
ハグリッドは暖炉に行き火をつけ、ポケットからヤカン、ソーセージ、火かき棒、ティーポット、マグカップ、液体を取り出しハグリッドはヤカンに液体を入れ火にかける。そしてソーセージを焼き始める。
ソーセージが焼けハグリッドが串刺しから取りはじめると息子だろうか、子供がソワソワし始めた。
「ダドリー、この男のくれるものに、一切触ってはいかん」
ダーズリー氏は息子に一喝した。だがハグリッドは笑い始める。
「おまえのデブチン息子はこれ以上太らんでいい。ダーズリーとっつあん、余計な心配じゃ」
ハグリッドはそう話すとソーセージをハリーに渡し、ライカにも渡した。
「熱いからライカ、気をつけるんだぞ」
「ん、ハグリッドありがとう」
（にしても、ここの人達のこの反応…昔と同じ、だな…）
ライカはソーセージを食べはじめる。
ハリーもソーセージを食べはじめるがハグリッドが気になるのだろう。ハグリッドから目を離さない。
「あの、僕、まだあなた達が誰だかわからないんですけど…」
ハグリッドはお茶を飲み手の甲で拭ってから話す。
「ハグリッドと読んでくれ。みんなそう呼ぶんだ。さっき言ったように、ホグワーツの番人だ。ライカはホグワーツの新入生だ」
「俺のことはライカって呼んでよ」
ハグリッドはライカが話し終えてから話し始める。
「ホグワーツはもちろん知っとろうな？」
「あの…いいえ」
（だろうな…あのマグル達は魔法を認めていない。態度にそう出て

しまっている）
俺は過去を思い出しつい苦い顔になる。
「ごめんなさい」
「ごめんなさいだと？」
俺は予想がついていたので驚いてはないがハグリッドは違ったみたいだ。大声を出し、睨めつけてるみたいだった。
「ごめんなさいはこいつらのセリフだ。手紙を受け取ってなかったのは知っとたがホグワーツを知らんとは！両親がどこでいろんなことを学んだか不思議に思わんかったのか？」
「いろんなことって？」
「いろんなことって、だと？ちょっとまった！」
ハグリッドは相当怒ったみたいでダーズリー一家に歩み寄る。
「この子ともあろうものが何も知らんのか？何も？」
ハリーはフォローしたつもりなのか、算数とかなら少しなら知ってると言う。
「我々の世界だ。あんたの世界で、俺やライカの世界のことだ」
「なんの世界？」
「ダーズリー！」
ハグリッドはデカイ声でダーズリー氏に問う。
「ハリー…ご両親のことは知っとるだろうな。ご両親は有名なんだ。おまえさんも有名なんだよ」
「僕の両親が有名？本当に？」
「知らんのか。おまえは何者かも知らんのか…」
「やめろ、客人。今すぐやめろ。これ以上何も言ってはいかん！」
ハグリッドはワナワナと震えていた。
「何も話してやらなかったんだな？ダンブルドアが残した手紙の中身を一度も？俺はあの場所にいた。手紙を置くのを見ていた、なのにこの子にずーっと隠していたんだな？」
「いったい何を隠したの？」
「やめろ！言うな」

「二人とも勝手に喚いていろ。ハリー……おまえさんは魔法使いだ。ライカもな」
小屋の中が静かになる。
「僕が何だって？」
「魔法使い、だよ」
「そうだ。しかも訓練すれば凄腕のな。ご両親の子だ魔法使いに決まっている。…手紙を読む時がきたようだ」
ハグリッドはそう話しハリーに手紙を渡した。
ハリーはホグワーツ魔法魔術学校からの手紙を受け取り読む。しばらくして読み終えてたハリーはハグリッドに問う。
「ふくろう便を待ってるってどういう意味ですか？」
「おっと、忘れるところだった」ハグリッドはポケットから羊皮紙をだし手紙を書いてから今度はポケットからふくろうをだし手紙をくわえさせ、外に放った。
（…羽の音…ふくろうか）
「ハリーは行かせんぞ！」
「お前のようなコチコチのマグルに引き止められるなら拝見しようじゃないか」
「マグー何て言ったの？」
「マグルだよ。非魔法族のこと」
「ライカの言う通りだ」
「ハリーを引き取った時にこういうことには関わらないと決めたんだ！」
「知ってたの？魔法使いだってこと？」
今まで話さなかった奥さんだろう人が話し出す。
「知ってたのかって？知ってたわ。姉がそうだったもの。学校から帰って来たらポケットからカエルの卵でいっぱいだし、コップをネズミに変えちまうし。私は姉の本当の姿を知ってたわ。…奇人だってね。両親はやれリリー、それリリーってわが家に魔女がいるのが自慢だったんだ。そのうち学校でポッターに出会って結婚した。そ

しておまえが生まれた。それから姉は自業自得で吹っ飛んでしまった。おかげでわたしたちゃお前を押し付けられたってわけさ」
「吹っ飛んだ?自動車事故だって言ったじゃない!」
ハグリッドは怒りをあらわにしながら叫んだ。
「自動車事故!そんなもんで二人が死ぬわけなかろう!魔法界の子供は一人残らずハリーの事を知ってるのに本人が知らぬとは!」
「いったい何があったの?」
「俺からは…んにゃ誰かがやらにゃ…」
「…ハグリッド俺が話そうか?」
「ライカ…んにゃ俺が話す。ハリー、事の起こりはある人からだ…名前は…」
「話したくないなら書いたら?」
ハリーは話しずらそうなハグリッドを見てそう問う。
「…綴りがわからん…名前はウ〝ォルデモート。二度と言わせんでくれ。『例のあの人』は力をつけ、我々を支配し始めた。そして立ち向かった者は皆殺された。数少ない安全な場所がホグワーツだった。校長のダンブルドアだけはあの人も一目置いていた。あの人が何を思っていたのかは知らんが十年前のハロウィーンの日、お前達が住んでいた家に向かい殺そうとした。そして二人を殺した。しかし何故だかお前さんだけは殺せなかった。額にある傷はその時に出来た傷だ。俺がダンブルドアの言い付けであの家から連れて来たんだ」
「バカバカしい。確かにあいつらは妙ちくりんな変人だ。常々ろくな死に形はせんと思っておったわ…」
その瞬間ハグリッドはダーズリーに傘を向けた。
「ハグリッド!」
「それ以上一言でも言ってみろ!ダーズリー、ただじゃすまんぞ」
ライカが注意するもハグリッドは聞かなかった。
ダーズリー氏は危険を感じたのか壁に張り付いて黙ってしまった。
「それでいい」

「それでヴォ…ごめんなさい…『例のあの人』はどうなったの？」
「それが分からないんのだ。消えたと言われちょるがくそくらえだ。俺は今でも生きていると思っとる」
ハリーは何か困惑したように話す。
「ハグリッド…僕は魔法使いじゃないよ」
「魔法使いじゃないって？じゃ怖かった時、怒った時に何も起こらなかったか？」
ハリーは黙ってしまった。
（心当たりでもあるんだろう…）
「なぁ？…見ておれ。お前さんはホグワーツではすごく有名になるぞ」
「行かせん、と言ったはずだぞ。こいつはストーンウォール校に行く。やがて感謝するだろう…それに」
「この子が行きたいと言うならお前のようなコチコチのマグルに止められるか。ハリーは生まれた時から入学名簿に乗っとる。しかもホグワーツ歴代の校長の中で最も偉大なダンブルドアの下でな」
「まぬけのきちがいじじいが小僧に魔法を教えるのにわしは金なんか払わんぞ！」
ハグリッドは傘を掴み頭の上でグルグル回した。
「絶対に…俺の…前で…アルバス…ダンブルドアを…侮辱するな！」
「ハグリッド！！」
ハグリッドは傘を息子に向けた。紫色の閃光が走り息子に当たる。すると息子の頭とお尻に豚の耳としっぽが生えた。
「癇癪を起こすんじゃなかった。しかしどちらにせよ上手くはいかなかったか…ホグワーツには言わんといてくれ。俺は魔法を使ってはならん事になっちょる…退学になったからな」
「どうして退学になったの？」
「明日も早い。教科書を買いに行かんとな」ハグリッドは来ていたコートを脱いでハリーに投げた。
「モゴモゴするかもしれんが着て寝るといい」

ハリーは床に横になり寝た。
「…ライカ。黙ってくれてると嬉しいんだが…」
「…一度だけだからね」
「ありがとう。…つい癇癪を起こしてしもうたが…」
「…本当だね。まぁまた明日もあるしハグリッドも寝たら?」
「あぁ。遅くならんうちにライカも寝るんだぞ」
「分かってる」
寝るつもりは無かったがそれは言わない。
ハグリッドもソファの軋む音がして横になったのか寝はじめる。
(…それ、人の家のソファだよな)
俺は床に座ってから壁にもたれて朝が明けるのを待つ。
(…やっぱり、ダンブルドアの長い話しを聞けばよかった)
俺は迎えに来たことを後悔した。

三話

朝早くハリーが目を覚ましたみたいだったが動きは無くブツブツ言っている。
（…なんだ？）
すると窓だろう方向からトントンと音が聞こえてきた。
（あぁ、新聞か…）
俺は窓だろう方向に行き、窓を開けた。
ふくろうは新聞を差し出し、足を突き出してきた。
「お疲れ様」
俺はふくろうにそう声をかけ、足についている袋に5クヌート入れる。するとふくろうはホーと鳴き俺の指を甘噛みをしてから去っていった。
「ハグリッド。新聞来たよ。俺が払っておいたから」
俺はハグリッドに新聞を投げつけ、ハグリッドを起こす。
「ん？あぁ悪い。5クヌートだったよな？後で払う。さて、ハリー今日は忙しいぞ。ロンドンまで行ってお前さんらの入学用品を揃えんとな」
（……俺もか）
ハリーがオズオズしながら話し出す。
「あのね…ハグリッド。僕お金が無いんだ。バーノン叔父さんは魔法を学ぶのにお金は出さないって…」
「そんな心配はいらん。お前さんの両親がなんにも残していかなかったと思うか？」
「でも家が…」
「家の中になんぞ置いておくものか。まずは魔法使いの銀行、グリンゴッツへいくぞ。ライカも行くよな？」
「うん。俺も無いからね…引き出さないと…」
「魔法使いの世界には銀行まであるの？」

「一つしかないがね。グリンゴッツだ。小鬼が経営している」
「こ・お・に？」
「行ってみてからの楽しみ、だよ」
「そうゆうこっちゃ。俺もホグワーツの仕事があるしな。…忘れ物はないかな。そんじゃ、出かけるとするか」
俺は先立って小屋から出た。昨日とは打って変わりポカポカと晴れている。
「ねぇ、ライカもハグリッドもどうやって来たの？」
「飛んできた」
「飛んで？」
「うん。でも帰りは船かな？」
「んだな…しかし漕ぐってのは…」
ハグリッドはチラリとライカを見る。
「ハグリッド？ダメだよ」
ハリーは魔法を見たいらしくじっと俺を見ていたみたいだがホグワーツに…魔法界へと来たら嫌でも見れるのだ。俺は魔法を使うのを許さなかった。
「ハグリッド。漕いでいくよね？」
「…あぁ。そうしよう…」
ハグリッドは少し残念そうな声を出したが魔法は使わなかった。漕いで船を出す。その間にハリーはハグリッドに魔法界について聞いていく。
魔法省について、ドラゴンについてなどハグリッドはドラゴンの所で飼いたいなどと言いはじめたがそれは違法だからと注意を促した。岸に着き船から下りてロンドンのへと向かう。
「ねぇ、ライカは魔法界の事、かなり詳しいけれど何でなの？」
「俺の家は魔法使いの家なんだ。だから少しなら知ってるよ」
「…魔法使いの家？」
「魔法使いにも色々あるんだよ…それよりハリー手紙は持ってる？」
「手紙？持ってるよ」

「二枚目を見てごらん」ハリーは手紙を出しているのだろう。ゴソゴソと聞こえる。
「あった…なにこれ？」
「教科書とか入学に必要な物だよ。無くさないでね？」
「ライカも持ってるの？」
「うん。これ」
俺は二枚目の手紙をハリーに見せる。
「…同じだ」
「一年生だからね」
ハリーは二枚目の手紙を読んでいく。
―ホグワーツ魔法魔術学校
制服
一年生は次の物が必要です。
一、普段着のローブ　三着（黒）
二、普段着の三角帽（黒）　一個　昼用
三、安全手袋（ドラゴンの革またはそれに類するもの）　一組
四、冬用マント　一着（黒　銀ボタン）
衣類にはすべて名前をつけておくこと。
教科書
全生徒は次の教科書を各一冊準備すること。「基本呪文集（一学年用）」　ミランダ・ゴズホーク著
「魔法史」　バチルダ・バグショット著
「魔法論」　アドルバード・ワフリング著
「変身術入門」　エメリック・スィッチ著
「薬草とキノコ千種」　フィリダ・スポア著
「魔法薬調合法」　アージニウス・ジガー著
「幻の動物とその生息地」　ニュート・スキャアンダー著
「闇の力――護身術入門」　クエンティン・トリンブル著
その他学用品
杖（一）

大鍋（スズ製、標準2型）（一）
ガラス製またはクリスタル製の薬瓶（一組）
望遠鏡（一）
真鍮製はかり（一組）
ふくろう、または猫、またはヒキガエルを持ってきてもよい。一年生は個人用箒の持参は許されていないことを、保護者はご確認ください。―

「こんなのが全部ロンドンで買えるの？」
「場所を知ってればね」
ハグリッドとドンドン進んで行きあるバブで立ち止まる。
「ここだ。『漏れ鍋』―有名なところだ」
バブに入ると店主のトムからハグリッドが声をかけられる。その後ハリー・ポッターに気づき店の中が騒ぎになる。
「ハグリッド、先に庭に行ってるね」
「分かった。先に待っちょけ。ダイアゴン横町にはまだ行くなよ」
「はーい」
俺はさっさと庭に行き二人がくるのを待っておく。
「ライカ！こんなとこにいたの？」
「騒がしくなったからね。先に待ってたんだ」
「え？」
「ほら見て」
俺はハグリッドを指す。ハグリッドはブツブツ言いながら傘でレンガを叩いている。
「よし。少し下がってろよ」
ハグリッドは傘でレンガを三回叩くとレンガが揺れだして真ん中に小さな穴が空き、それがどんどん大きくなってアーチへとなっていった。
「ダイアゴン横町へようこそ」
ハリーは驚いたみたいで、横町の中をキョロキョロして見ているみたいだった。

鍋屋、ふくろう百貨店、箒屋などいろんな店がある。
「まずはグリンゴッツだ」
ハグリッドがそう話す。
歩きながらハグリッドがハリーにグリンゴッツの事を話している間俺は鍵を探していた。
（お、あった）
「ハリー・ポッターさんの金庫から金を取りに来たんだが」いつの間にかグリンゴッツのカウンターに来ていたみたいでハグリッドが小鬼に引き出し要請をしていた。
「鍵はお持ちでいらっしゃいますか？」
「どっかにあるはずだ」
ハグリッドはカウンターに中身を出しはじめた。小鬼の嫌そうな気配がしたが、何も言わずライカもハリーも他人のふりをしていた。
「あった」
ハグリッドは小さな黄金の鍵をつまみ小鬼に渡す。
「承知いたしました」
「それと、ダンブルドア教授からの手紙とライカ…タツキの金庫を頼む」
ハグリッドは小鬼に手紙を渡す。
「七一三番金庫にある、例の物についてだが…」
（賢者の石か…）
小鬼はライカをみてこう言う。
「鍵はお持ちでいらっしゃいますか？」
「これです」
「了解しました。誰に三つ共に案内させましょう。グリップフック！」
「七一三番金庫の例の物って？…あとタツキって誰？」
「金庫の事は言えん。極秘だ。ホグワーツの仕事でな。タツキとは俺の知り合いでライカの父親だ。案内もタツキが来れないから俺が引き受けたんだ」

（…ハグリッド。初めて君がそんな器用な事出来るなんて初めて知ったよ）

「来れない？」

「そうだ…」

通路に着きハグリッドとハリーとライカとグリップフックでトロッコへと乗る。どうやらハグリッドはトロッコがダメらしい。前から何も話さない。トロッコが止まり、グリップフックが金庫の扉の鍵を開けた。すると金庫は金貨の山で埋もれていた。ハリーは驚きながらお金を袋へ入れていく。ハグリッドは手伝いながら硬貨の説明をする。

「金貨はガリオンだ。銀貨がシックルで、十七シックルが一ガリオン、銅貨がクヌートで、一シックルは二十九クヌートだ。簡単だろう？これでいいだろう…残りはちゃーんとしまっといてやるからな」

「タツキ様の金庫ですが…何処を行かれますか？」

「あいつ…また増えたんか…」

「あはは…七一三番金庫に近いところがあればそこで…」

「分かりました」

トロッコに乗り金庫へと向かう。しかしそんなに時間はかからず着いた。グリップフックはハリーの時と同じようにして金庫の鍵を開けた。

金庫の中はギッシリと一面金貨だった。

「ライカ…一面金貨なんだか、あいつはどうやって稼いでいる？俺と給料変わらなかったよな？」

「…何でだろうね？」

ハリーは開いた口が塞がらない状態でライカは無視をし、袋に金貨を入れる。

「ライカ…今度タツキに聞いちょいてくれんか？」

「教えてくれないと思うよ」

「…そうか、ところでトロッコは遅くはならんのか？」

「速度は一定となっています」

「…そうか」
七一三番金庫に行き、中身を受けとった後グリンゴッツから出たのだがハグリッドは限界なのか少し漏れ鍋へ行くと言い行ってしまった。
俺はハリーと一緒にマダムマルキンの洋装店に入る。
「坊ちゃん。ホグワーツなの？もう一人は新調するのかしら？」
ライカは子供の身長だが新入生よりはやはり大きく在校生と見られた。
（本当は在校生どころじゃないけどな…）
「いえ、新入生です」
「そうなの？大きいわね。今もう一人若い方が丈を合わせているとこよ」
マダム・マルキンはその若い方の両隣にライカとハリーを立たせた。
若い方は新入生だろう男の子だった。
「やぁ、君達もホグワーツかい？」
「「（うん）（そうだよ）」」
「僕の父は教科書を買っているし、母はどこかで杖をみている。これからは競争用の箒を見に行くんだ。学校では一年生は箒を持ってはいけないなんて…理由がわからないね。父でも脅してこっそり持ち込んでやる」
（この子はスリザリンだな…しかし理由がわからない、なんてやはり子供か）
「君達は自分の箒を持ってるの？」
「「ううん」」
ハリーとピッタシ重なる。
「クィディッチはやるの？」
「ううん」
今度はハリーだけ答えた。
「僕はやるよ―父は僕が寮の代表選手に選ばれなかったらそれこそ犯罪だって言うんだ。僕もそう思う。君達はどの寮に入るかもう知

ってるの？」
「ううん」
「さぁね。こればかりはどうも」
「まぁその子の言う通り、行ってみないと分からないけど僕はスリザリンに決まっている。家族はみんなそうだったんだから……ハッフルパフになんか入れられたら僕は退学するな。そうだろう？」
「ウーン」
俺は返事を返さなかった。
「ほら、あの男を見てごらん」
男の子は窓の方を顎でしゃくる。ライカは魔力で誰なのかを知った。
「あれ、ハグリッドだよ。ホグワーツで働いているんだ」
ハリーは嬉しいそうに答える。
「あぁ、聞いたことがある。一種の召し使いだろう？」
「森の番人だよ」
「そう、それだ。野蛮人だと聞いている。ほったて小屋に住んでいて、よく酔っ払い魔法を使おうとしてベッドを燃やしたんだって」
「へぇ？」
ハリーが生返事をする。
「どうして君達と一緒なんだい？ご両親はどうしたの？」
「死んだよ」
「都合がつかなくてね…」
「おや、ごめんなさい」
ハリーに対しての謝罪だろうが謝っている口ぶりではなかった。
「ところで…君、右目眼帯しているけど目どうかしたの？」
ハリーも知りたかったみたいでこちらを見ている気配がする。
「ちょっとね…」
「そう？…君達の両親も同族なんだろう？」
話さないと分かったのか男の子は話しを変えてきた。
「魔法使いと魔女だよ。そういう意味で聞いてるんなら」
（ハリー…意味違うけど…いいか）

「父は魔法使いだね。…母は知らない」
「…そうなんだ。他の連中は入学させるべきじゃないんだ。手紙を貰うまではホグワーツだって聞いたことがなかったんだ。…昔なら考えられないことだよ。入学は昔からの魔法使い名門に限るんだ。君、家族の性はなんていうの？」
男の子はハリーに家族名を聞いていた。
「さぁ、終わりましたよ坊ちゃん達」
ちょうどいいタイミングでマダム・マルキンが終わりを告げる。
「じゃ、ホグワーツで会おう。たぶんね」
男の子がそう最後に言った。
店を出てハグリッドが買っただろうアイスを貰った。しかしハリーは黙っていた。
「どうした？」
「なんでもないよ」
俺はアイスを食べるのに夢中なふりをして無視した。
次は羊皮紙と羽根ペンを買った。そこで元気が出たのかハリーは問い掛けてきた。
「ねぇ、クィディッチってなに？」
「何にも知らんということを忘れとった……クィディッチを知らんとは！」
「これ以上落ち込ませないで」
ハリーはさっき会った男の子の話しをする。
ライカは軽く聞き流していた。
「ーで、クィディッチて？」
「俺達のスポーツだ。マグルの世界じゃサッカーみたいなもんだ。箒に乗って…ちと難しいな」
「じゃ、スリザリンとハッフルパフって」
チラリとハグリッドがこちらを見た気配がした。
「……学校の寮の名だ。四つあってな。ハッフルパフには劣等生が多いとみんなは言うがしかし…」

「僕、きっとハッフルパフだ」
「スリザリンよりかはましだ。闇の魔法使い達はみんなスリザリン出身だ。『例のあの人』もな…」
「ウ〝ォル…ごめんなさい『あの人』もホグワーツだったの？」
「昔々のことさ」
俺は静かに聞いていたが口を開く。
「ハグリッド。そうやってそこの寮生を嫌うなよ。教師失格だ。ハリーもだ。寮生を寮で見るな。一人、一人、個人をちゃんと見ろ」
ハグリッドは言いすぎたと思ったのか肩をすぼめる。しかしハリーは分かっていないみたいだった。
その後、書店、薬草屋などを回り残りは杖だけになった。
ハグリッドがふくろうを買いに行くと言ったので俺とハリーは先に杖を買いにオリバンダーの店へと行く。
店の中は細長い箱がいくつもあり、埃をかぶっていた。
「いらっしゃいませ」
静かな店の中から声がかかる。いつの間にかハリーの目の前に老人、オリバンダーがいた。
「こんにちは、オリバンダー…今日はハリーの杖を買いに来たんだ」
ハリーはビックリしたのか声を出さなかったので代わりに俺が話した。
「おぅ…ター」
俺は急いでオリバンダーの口に手を当てて耳に小声で話した。
「オリバンダー！訳あってもう一度入学することになったけど…名前、タツキじゃなくてライカだからよろしく。あとあの事も話さないでほしい。ハリーがいるから」
オリバンダーが頷く気配がしたので手を離す。
「そうじゃ、すまぬライカ。年をとるとボケやすくてな…杖は良好ですかな？」
「うん。使いやすいよ」
「それは良かった。ではポッターさん拝見いたしましょうか」

その後はハリーの杖探し。中々合わないのかハリーは不安な雰囲気をしている中オリバンダーは嬉しそうに杖を持ってくる。オリバンダーが一本の杖を持って来てハリーに渡す。すると杖と合ったのかパチパチという音が聞こえた。

（花火系の魔法かな？）

その後オリバンダーからハリーの杖がヴォルデモートと双子杖だと言う話しを俺は半分程聞き流した。

ハリーの杖を買い、ライカのは持っていたのでハグリッドと落ち合いハリーの見送りに一緒に駅へと向かう。歩きながらハグリッドがハリーに白ふくろうを渡した。

「十年分の誕生日プレゼントだ」

「ありがとう、ハグリッド！」

「ライカにはほれ、黒猫だ。…個人的には猫はダメなんだが…ライカはもう手紙配達いるからな」

「俺にも？ありがとう、ハグリッド。…でもいいの？」

「なんだ、その入学祝いだ。気にせんでいいぞ。…あとダンブルドアからは許可を貰っているからな」

ハグリッドは最後の言葉をライカにしか聞こえない小声で話した。

「…許可？」

だから俺も小声で話す。

「あぁ…授業中でも猫を連れていていい、と先生方からも許可は貰っとる。…さて二人とも名前は何にするんだ？」

ハグリッドはライカにしか聞こえない小声から最後はハリーに聞こえるように普通に話し始めた。ハリーがこちらを伺っていたがハグリッドの言葉を聞いて悩みだす。

「ウーン…僕は家に帰ってから考えるよ。ライカは？」

「俺もそうする」

「…そうか」

駅に着き、ハリーが乗車するまえにハグリッドはハリーに封筒を渡した。

「ホグワーツ行きの切符だ。九月一日…キングズ・クロス駅発――
―全部切符に書いてある。…ダーズリーの家で何かあったら手紙を書いてふくろうに持たせて寄こしな。ふくろうが俺のいるところを探してくれる。…じゃあな。ハリー。またすぐに会おう」
「俺にも手紙頂戴?…またね、ハリー」
ハリーが電車に乗ったのを確認してから俺とハグリッドは姿くらましをした。

四話

俺達はホグワーツに近いホグズミードにいた。なぜならホグワーツでは直接姿現しが出来ないからだ。俺はホグワーツへ向かう道のりでハグリッドに尋ねる。

「ねぇ…ハグリッド。なんで授業中も連れ出していいの？」

「タツキは目見えんだろうが？また学生時代みたいな事があるかもしれんだろ」

「……成る程…生徒への説明は？」

「…俺はなんにも聞いてない。ただタツキにそう伝言するように言われちょただけだ」

「…俺も知ーらない。何か聞かれたらダンブルドアに回そう」

ハグリッドとドンドン城へ向けて歩く。距離的にはもうそんなにないはずだ。

「……ハリー、どこの寮に入るんだろうね？」

「タツキはどこだと思うとる？」

「うーん。今ならまだ何処でも上手くやっていけるよ。血筋からいってグリフィンドールが強いけどあの組分けは能力も視野に入れるからスリザリンもあるかな？」

「スリザリンだと！」

「…ハグリッド、俺言ったよね？」

「あ…スマンかった」

「まぁ他の寮も可能性は高いから本人の希望…という形だと思う。…着いたね」

城へと入る門に辿り着く。その門をくぐり城へと入って行くと玄関にマクゴナガル先生が立っていた。

「マクゴナガル先生？どうして…」

「お帰りなさい。タツキ、ハグリッド」

「あ……ただいま」

「ただいま帰って来ました。マクゴナガル先生」
「疲れたでしょう?…ですが夕食が先ですね。行きましょうか」
どうやら待っていてくれたみたいだった。
「ハグリッド、タツキ……ハリー・ポッターはどんな子でしたか?」
(それが知りたくて待っていたのか?)
「んー性格は大人しいですね。ジェームズみたいに悪戯はしなさそうでした」
「ハリーはやはりあの家ではろくな扱いをされてたみたいです…なにより魔法界の事を何も知っちょらんでしたー」
ハグリッドがハリーについて話し出す。きっと何時間でも話すだろう。…俺と違って。
ハグリッドの話しをBGMに俺はダイアゴン横丁でこっそり買った商品の内、一冊の本『相手を魔法薬にて拷問しよう。殺してみよう〜応用編〜』を読みながら大広間へと入る。教員席…というか教員しかいないので一つのテーブルに皆で座る。俺も空いている席に座った。
「タツキ、帰ったのー」
恐らく隣のセブルスが声をかけたが途中で途切れる。
「セブルス?何か言った?」
「それ…確か最新刊だろう?…後で貸してくれないか?」
「う?あぁいいよ」
「……皆さん何かご用でもありますかな?」
その声にて俺も周りを伺う。なんかセブルスが周りの先生方からジロジロと見られている気配がした。
「…スネイプ先生。それを誰にも使わないでしょうね?」
「我輩を疑っておられるのですか?」
「セブルス、誰かで実践しそうなんじゃない?魔法薬の教授だし」
俺はクスクスと笑いながら話す。セブルスは不愉快な一オクターブ下がった声で話す。
「それはお前だろう。我輩よりもお前の方が魔法薬は上だ。しょち

ゅう人を殺すなどと話しおって…確実に我輩よりはお前の方が使用しそうだがな。というか絶対しているだろう、お前」
「んー、俺のは暗黙の了解だよ」
「…しているのか」
「俺はしていてもセブルスみたいに生徒に使いそうな確率は0だから」
「…我輩が生徒に使うだと？馬鹿にしているのかお前は」
「んじゃグリフィンドール生に絶対に使わない自信は？」
「…言い切れぬな」
「ほらね。先生方もそこを危惧しているんじゃない？」
セブルスは眉を寄せながら黙り込む。
「でもまぁ、セブルスには簡単に揃えられない材料だけどね」
「そうなんですか？なら安心ですね。新学期早々我が寮生が殺されるなどとは起きませんから」
他の先生方も安心したのか各自喋り始める。しばらくすると夕食も出てきて賑やかになる。
「んー…セブルス。今年も新入生イビリするの？」
「…それがなんだと言うのだ」
「いや、今年俺いるしどうしよっかなーて」
「何をするつもりだ？」
「ん？セブルスのイビリから助けてグリフィンドールに好印象を残しスリザリンに最悪なイメージを残すか、傍観して真ん中くらいの成績を取って目立たないか、前と同じくサボってスレスレで通る、ある意味目立つ方か…」
「「「「サボるのは止めて下さい！」」」」
教員全員から注意された。…サボるのはダメか。
「んー」
「タツキ。セブルスのイビリはともかくきちんと授業はきくのじゃ。サボりはせぬようにな」
「えー……むぅ分かった。セブルスを虐めればいいんだね」

「止めろ！我輩に当たるな！」
「うむ。その辺はタツキの自由じゃ」
「校長！？」
こんな感じの夕食が終わり、自室の部屋へと戻る。
部屋に着き俺はまず荷物をまとめ始める。新学期になれば部屋は残されるだが基本的に寮生活になる。だから寮に必要な物をまとめ部屋を掃除する。…しかし途中でハグリッドに貰った猫を思い出して急いでケージから出した。
「すっかり忘れてた…ゴメンよニャンコ」
しかし猫はケージから出してもあまり俺から離れる気配がしない。
それどころか俺が動けばついてくる。
「うん？…どうしよう、この子。ヘルガなら何とか意思疎通出来るんだろうけど…」
許可は貰っているとはいえ、それは人間の話しだ。実際に猫がついてくるかは分からないし、猫も初対面にというか普通はそんなことはしない。精々最初は無理矢理抱き抱えるのが普通だ。
「うーん……君は何で俺の後をついてくるのかな？」
しかし当然ながらニャーとしか返ってこない。
「…うん。言葉は分かるのかな？」
ニャーと返ってくる。しかし俺にはそれが‘はい’なのか‘いいえ’なのか分からない。
「尻尾を使ったら分かるか。‘はい’なら尻尾を立てて‘いいえ’なら尻尾を床につけて。ＯＫ？」
ニャーと返ってくる。
（うん。分からないな！）
「じゃ、やってみるか。――まず君は言葉が分かるかな？」
猫は尻尾をピンと立てた。
「うん。次――君は何も分からない土地だから俺にずっとついてた？」
すると猫はペタンと床に尻尾をつけた。

「違う？なら――君は自分の意思でついて来てた？」
猫は今度はピンと尻尾を立てた。
「何故？じゃだめだね……それは理由があるからだよね？」
猫はピンと尻尾を立てたままだった。
「うーん、理由？…―それは君自身のことで何かの要求？」
猫は尻尾を床につけた。
「違う？―俺の事か何かで？」
猫は尻尾を立てた。
「？俺の事？何かある？うーん…手助けとか？そんなわけー」
猫がこれでもかというくらい立てた。
「手助け！？……うん？もしかして君は俺が見えていないのを分かってる？」
猫は尻尾を立ててる。
「それは、君を買ったあの大きな人から言われたの？」
猫は尻尾をペタンと床につける。
「違う？じゃ…何故…」
俺は普通の人と変わらない事をしている。読み書きも独自に訓練し書いたり読んだり出来るし気配を読み取ってほんの少しの動作でも分かるようになってる。だから目が見えないと言った時は皆驚く。――言われるまで気づかないくらい完璧に俺は生活してた。―なのに何故？
すると猫がトントンと足音を立てる。
「足音？…足音で分かったのか？」
猫はピンと尻尾を立てた。
「…そうか。他の人と微妙に歩調…足音が違うのか…それで分かったんだね？」
猫はピンと尻尾を立てた後、スルリと足元に駆け寄ってきた。
「だからってついて来なくてもいいのに…俺は魔力が嫌でも分かるし…」
しかし猫が足元から去る気配がしない。

「まー一応許可はあるからねぇ…しかし君は賢いな…あ！名前決めないとなぁ…いつまでも君じゃいけないし……」
俺は猫を抱き抱え名前を考える。
「男の子か……フィンラはどうかな？グリフィンから取ってフィンラ」
猫はニャーと泣きゴロゴロと甘えてきた。
「うん、いいのかな？フィンラ。よろしく」
フィンラは移動する時は片時も俺から離れなかった。

五話

九月一日。俺は朝からキングズ・クロス駅にいた。
ここは新入生…とくにマグル出身者はホグワーツ特急のプラットホーム…九と四分の三番線が分からない。だから俺は早めにここに来てハリーを待っていた。足元にはフィンラもいる。ちなみに荷物は汽車の中に入れている。
前方の方からカートを押してる女の子一人とその両親だろう二人の男女がいた。俺は女の子一人に反応する。
（マグル出身者…か…）
その三人の話し声が微かに聞こえてきる。
〈九と四分の三番線って何処かしら？〉
〈さぁ？でも此処は九番線と十番線しかないわよ？〉
〈駅員に聞いたら分かるんじゃないか？〉
俺はその家族の元へと行く。フィンラもついて歩いてくる。
「すみません。九と四分の三番線を探してますか？」
「えぇ…あなたは？」
女の子が俺に聞いてくる。
「君と同じだよ。連れを待っているけどね…プラットホームは見付かりにくくされてるんだ。こっちだよ」
俺が先に歩きだしフィンラが続く。後ろから女の子の家族がついてくる。
「その猫あなたの？」
女の子はフィンラを指差し聞いてくる。
「そうだよ。名前はフィンラ」
「かわいいわね」
「ありがとう。此処だよ」
俺は九番線と十番線の間にいる。
「え？」

「九と四分の三番線は九番線と十番線の間の柱、四本の内の三番目の壁の中にあるんだ。だから九と四分の三番線。此処を真っ直ぐ周りに見付からないように壁に向かったらプラットホームがある。行ってごらん？」

俺は足を翻し元来た道に進む。

「あ、あなたは？」

「連れがくるまで待ってるよ。じゃね」

俺は元にいた場所につき、ハリーを待った。十時半過ぎにハリーを見つけた。ちょうど駅員に話しかけおえて困っているようだった。

「ハリー！」

「…ライカ！」

フィンラと一緒にハリーの側に駆け寄る。

「ライカ…どうしよう…九と四分の三番線ないんだよ…」

「…待ってて正解だったね」

「え？」

「普通に分からないようにしてあるんだ。こっちだよ」

ハリーと九と四分の三番線を目指し歩く。

「そうだ！ハリーふくろうの名前は何？」

「ヘドウィグだよ。ライカは？」

「（魔法史に確かいた人物だよな…）俺のはフィンラだよ」

「カッコイイ名前だね」

「ありがとう。此処だけど…先客がいるね。少し待とうか」

「え？」

「前の赤髪の家族を見てて」

俺は九番線と十番線の間にいる家族を指す。すると母親の方がこちらに気付いて話しかけてくる。

「貴方達は新入生？」

母親はハリーのカートを見て聞いてきた。

「「はい」」

「プラットホームへの行き方が分からないの？」

「いえ、ただ先に貴方達がいたものですから何も知らない友達に見せていたんです。いきなりでは分からなかったりしますから」
「それもそうね。…今三人目が行くからその後どうかしら？」
「いいんですか？」
「ええ」
「ありがとうございます」
俺はハリーと一緒に間に入れてもらう。
「見てて。ああやって行くんだ」
赤毛の男の子が改札口の壁に向かって歩いて行く。壁に近づくと形もなく消えた。
「え？」
「驚いた？初めてだから走って行こうか」
俺はハリーの腕を掴み壁へと小走りに行く。壁にはぶつからず九と四分の三番線に出る。
「すごい」
「ハリー行こうか？俺が荷物をコンパートメントに置いてるからそこに」
俺はハリーの荷物を手伝い俺の荷物を置いてるコンパートメントに持っていく。コンパートメントにつき荷物を下ろし二人で座る。しばらくすると汽車が動き出した。
「ライカ…ありがとう。僕一人だったら分かんなかったよ」
「あそこはマグルに分かりにくいように作られたんだ。だからプラットホームが分からない子は毎年いるよ」
フィンラが俺の足をつたい肩に乗ってきた。
「ライカは凄いね。僕より多くの事を知ってる。でもー…」
ガラリとコンパートメントが開けられる。開けたのは先程の赤毛家族の一人だった。
「ここ空いてる？他はいっぱいなんだ」
「うん。俺はいいよ。ハリーは？」
ハリーもうなずいたので男の子は入ってきた。

「僕はロン。ロン・ウィーズリー。君達は」
「ハリー。ハリー・ポッター」
「僕はライカ。ライカ・ヒブカ」
「ハリー？本当にいたんだ」
その後はロンの家族の話しをした。兄五人と妹一人など…苦労話をしていた。ネズミのスキャバーズもお下がりだとか授業の不安だとかの話しをした。しかし俺は先程のネズミが気になった。
（あいつは……）
「社内販売よ。何かいりませんか？」
ハリーは少しずつ全てを買った。ロンは持ってきたのか買わなかった。俺は蛙チョコレートを四つだけ買った。俺が戻ってきた時はどうやらハリーはロンと持ってきた昼食を取り替えたみたいでロンもハリーが買ったお菓子を食べていた。
「あ！ライカも食べていいよ」
「うん。俺のを食べ終わったら食べるね」
「これなんだい？」
ハリーは蛙チョコレートの包みを取り出し聞いた。
「まさか、本物のカエルじゃないよね？」
「まさか。でもカードを見てごらん。僕アグリッパがないんだ」
「なんだって？」
「カードだよ。チョコを買うと中にカードが入っているんだ。みんなそのカードを集めてるんだよ」
「そうなんだ。僕はアグリッパとプトレマイオスがまだないんだ。ライカ、君のに入ってる？」
俺はガサガサと蛙チョコレートを開く。
「この人がダンブルドアなんだ！」
「ダンブルドアを知らなかったの？僕にも一つくれる？アグリッパが当たるかも…」
ハリーとロンが写真について話している。俺は蛙チョコレートを先に消化すべく食べはじめる。

ロンはアグリッパが当たらなかったらしくハリーにカードを渡していた。
（うま…）
早々に四つを食べ終わりカードを見る。読み取った瞬間固まりそしてため息が出た。一枚目のカードは俺…ゴドリック・グリフィンドール。二枚目がサラザール・スリザリン。三枚目がロウェナ・レイブンクロー。四枚目がヘルガ・ハッフルパフだった。
（またか！）
俺は何故かよく創設者を引く。…あいつらに怨まれたのか？俺は……
「ライカどうしたの？」
「んー俺はよく創設者を引いちゃんだよね…ハリーあげる」
俺はハリーにカードを全部あげた。
「創設者？ライカ創設者って？」
「…ホグワーツは千年前に四人の魔法使いが設立したんだ。四人の名前は、サラザール・スリザリン、ロウェナ・レイブンクロー、ヘルガ・ハッフルパフ、そしてゴドリック・グリフィンドール。寮は四人それぞれのファミリーネームからとっているんだ。でその四人を創設者ってみんな呼んでるんだよ」
「寮はどうやって決めるの？」
ハリーは百味ビーンズを開けはじめる。
「秘密。お楽しみ」
「ハリー…気をつけたほうがいいよ。百味って何でもあるから」
俺はフィンラを撫でていて二人は百味ビーンズについて盛り上がってると男の子が泣きべそをかいて入ってきた。
「ごめんね。僕のヒキガエル見てない？いなくなっちゃた」
「きっと出てくるよ」
ハリーがそう言う。
「もし見つけたら…」
男の子はそう言ってコンパートメントを出ていった。
ロンはヒキガエルをなんで心配するのかと話しながらスキャバーズ

を膝に乗せていた。
「死んだって見分けつかないよ」
ロンはウンザリし、話題を変えた。
「昨日、少しは面白くしてやろうと、黄色に変えようとしたんだ。でも呪文が効かなかったんだ。やって見せようか…見てて」
ロンが杖を振り上げた瞬間コンパートメントが開いた。カエルに逃げられた子とプラットホームを案内した子だった。そしてそこ子はもうホグワーツのローブに着替えていた。
「誰かヒキガエル見なかった?ネビルのがいなくなちゃたの」
「見なかったって、さっき言ったよ」
ロンが答えたが女の子は聞いてないくロンの杖に気を取られていた。
「魔法をかけるの?見してもらうわ」
女の子は空いている席に座った。
「あ……いいよ」
ロンは咳ばらいをして魔法をかけはじめる。
「お陽さま、雛菊、溶ろけたバター。デブで間抜けなねずみを黄色にかえよ」
杖を降ったが何も変わらない。
(それ…騙されてるよ…ロン)
「その呪文あってるの?私は簡単な呪文を試したけれど全て上手くいったわ。私の家族には魔法使いはいなかったから教科書は全部暗記したの。足りるといいけど…私、ハーマイオニー・グレンジャー。貴方達は?」
(へぇ…レイブンクローかな?)
「僕ロン・ウィーズリー」
「ハリー・ポッター」
「本当に?貴方のこと本に乗ってたわ。貴方はプラットホーム教えてくれた人よね?」
「うん。僕はライカ・ヒブカ。よろしく」
「よろしく。ところで三人ともどの寮に入るか分かってる?いろん

な人に聞いて調べたけど、グリフィンドールに入りたいわ。絶対一番いいみたい。でもレイブンクローも悪くないかもね…そろそろ行くわ。三人とも、着替えた方がいいわ。もうすぐ着くはずだから」

そう言い女の子はコンパートメントを出て行った。

「凄かったね…ライカ、ハリー、グリンゴッツのこと聞いた?誰かが特別金庫を荒らしたんだって」

「それで?どうなった」

「なにも。パパは強力な闇の魔法使いだろうって」

「そっか…俺は着替えに行ってくるよ。二人は?」

「まだいい」

「僕も」

「そう?じゃ出て行くね」

そう言って俺はコンパートメントを後にした。

俺は列車のちょうどいい個室を見つけ着替えた。案外時間がかかり着替え終わってコンパートメントに戻るとアナウンスが流れた。

「あと5分でホグワーツに到着します。荷物は別に学校に届けますので、車内に置いていってください」

汽車がスピードを落とし停止をした。

「フィンラ。肩に乗ってくれる?」

ニャーと鳴きフィンラは俺の肩に乗ってきた。俺達はホームへと下りるとハグリッドが一年生の誘導をしていた。

「イッチ年生!イッチ年生はこっち!ーさぁついてこいよ。イッチ年生はいないな?足元には気をつけろ。イッチ年生ついてこい!」

狭い小道をハグリッドについて下りていく。角を曲がるとホグワーツが見えるはずだ。角を曲がり岸辺に繋がれたボートに四人で乗る。俺は適当に乗った。船が進み蔦のカーテンをくぐり、トンネルをくぐると地下の船着き場に到着した。

ハグリッドに続き石段を上り、ハグリッドは木の扉を叩いた。

六話（前書き）

ゴ「何々えーと……頑張って二話連続投稿しました。楽しんでくれると嬉しいです、だと？それよりももっとハリーとかに絡ませるよね？なんで原作に頼ってそのまま書いてるの？オリジナルを出せ！んで俺の過去は？」

ネタがないし、文才が…君の過去は…アハハ…どうなるかワカンナイ。

ゴ「最悪だね、こいつ。俺より馬鹿だし、作者ならネタぐらい頑張って考えろよ…全く。こんな馬鹿な作者だがこれからもよろしく頼む」

六話

扉を開くとマクゴナガル先生がいた。
（大広間引率はまたマクゴナガル先生か…）
マクゴナガル先生は大広間の隣の小さな空き部屋に一年生を誘導した。
「ホグワーツ入学おめでとう」
（二回目です…先生…）
マクゴナガル先生が挨拶をする。
「新入生の歓迎会がまもなく始まります。席につく前に皆さんが入る寮を決めなければなりません。寮の組分けはとても大事な儀式です。七年間寝るのも寮。教室でも寮生と一緒に勉強し、自由時間は寮の談話室で過ごすことになります。寮は四つ。グリフィンドール、ハッフルパフ、レイブンクロー、スリザリンです。それぞれ輝かしい歴史があります。ホグワーツにいる間は良い行いをすれば自寮の得点になり、学年末には最高得点の寮に寮杯が与えられます。どの寮に入っても一人一人が寮にとって誇りになるように望みます。準備が終わり次第戻ってきますから、静かに待っていてください」
そうマクゴナガル先生は言い出て行った。
「いったいどうやって寮を決めるんだろう…」
「試験のようなものと思う…」
俺はその言葉を聞き微笑ましくなった。
（…試験か。どう捉えるかは人それぞれだしな）
俺は肩に乗せていたフィンラを床に下ろした。
マクゴナガル先生が戻ってきた。
「さぁ行きますよ。一列になってついてきてください」
マクゴナガル先生を先頭に大広間へと入っていく。周りの一年生達がキョロキョロしているのが分かる。中には天井を見て歩く者もいた。

（天井に魔法かけて正解だな…）
この光景を感じるたびにそう思う。
一年生が止まり、マクゴナガル先生が帽子の乗っている椅子を置いた。大広間が静まり返り帽子が歌いだす。
―私はきれいじゃないけれど
人は見かけによらぬもの
私をしのぐ賢い帽子
あるなら私は身を引こう
山高帽子は真っ黒だ
シルクハットはすらりと高い
私はホグワーツ組分け帽子
私は彼らの上をいく
君の頭に隠れたものを
組分け帽子はお見通し
かぶれば君に教えてよう
君が行くべき寮の名を
グリフィンドールに行くならば
勇気ある者が住まう寮
勇猛果敢な騎士道で
他とは違うグリフィンドール
ハッフルパフに行くならば
君は正しく忠実で
忍耐強く真実で
苦労を苦労と思わない
古き賢きレイブンクロー
君に意欲があるならば
機知と学びの友人を
ここで必ず得るだろう
スリザリンではもしかして
君はまことの友を得る

どんな手段を使っても
目的遂げる狡猾さ
かぶってごらん！恐れずに！
興奮せずに、お任せを
君を私の手にゆだね（私は手なんかないけれど）
だって私は考える帽子！―
俺はイラッとしていた。理由はありすぎてひとつには絞れない。何故なら生徒になってから気づくことが沢山あるからだ。
（あいつ、偉そうだね？自分より上がいるなら引いてやる？ボロ帽子のくせに！……今度三人に許可貰って燃やそう）
マクゴナガル先生は長い羊皮紙の巻紙を手にして前に出る。
「ＡＢＣ順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子に座り、組分けを受けてください」
（俺どうなるんだろうな？…でもハリーと同じ寮じゃないと…仕事だし…帽子を脅すか）
「アボット・ハンナ」
女の子が前に出て帽子をかぶりしばらくして「ハッフルパフ！」と帽子が叫んだ。
「ボーンズ・スーザン」
帽子はまた「ハッフルパフ！」と叫ぶ
「ブート・テリー」
「レイブンクロー！」
「ブロックルハースト・マンディ」
「レイブンクロー」
次々と寮が告げられていく。
「グレンジャー・ハーマイオニー」
「グリフィンドール！」
（グリフィンドール？…そうか、望んだんだね。そこに）
「ロングボトム・ネビル」
カエルに逃げられた男の子だった。

決定に時間がかかったが「グリフィンドール！」と帽子は叫んだ。
次々と呼ばれ、ついにハリーの番がくる。
「ポッター・ハリー」
組分けには少しかかったがネビルほどではなかった。
「グリフィンドール！」
（これで脅さなくて良くなった…でもちょと残念だな）
組分けは進んで行き俺を入れて三人になった。
ロンが呼ばれ、すぐにグリフィンドールと声があがる。
「ターピン・リサ」
帽子は少ししてスリザリン！と叫ぶ。
そこで一旦止まった。校長であるダンブルドアが話しだす。
「さて組分けがあと一人残っておるが、少し話そう。組分けが残っている子はライカ・ヒブカという子じゃ。ファミリーネームで気づいた者もおるかもしれんが日本出身の日本人じゃ。文化が違うから戸惑う事もあるかもしれん。同じ寮の者は助けてやって欲しい。そして右目に眼帯をしておるがこれには事情があり、学校も許可をしておる。ーそうじゃその眼帯の都合上猫がそばにおるがこちらも許可をしておる。勿論先生方も了承ずみじゃ。では組分けを始めようかのぉ」
ダンブルドアは着席をし、俺の名前が呼ばれる。フィンラはその場で座っていた。
「ヒブカ・ライカ」
椅子に座り帽子をかぶる。すると帽子が話し出す。
「おや？何故貴方様がこちらへ？」
「……仕事だ。悲しい事にな。一年生からだと」
「…そうですか」
「……寮だが…前回と同じで頼む」
「……」
「おい？」
「……」

（今度は沈黙か！…まだ根に持ってるな）
「……」
「……」
「おい…組分け！」
「……」
「（プッツン）」
「！！！！」
ベシャと音がした。
大広間は静まり返り教員達は諦めに近いため息を漏らす。
俺はいらついたあまりに組分けを床に投げつけた。そして組分け帽子を足で踏み杖を向けた状態で話しかける。
「……お前マジで燃やされたいか？良いだろう燃やしてやる。インセ「グリフィンドール！」…」
組分け帽子は焦ったように寮を告げた。
「ちっ……今度こそ許可を貰って燃やしてやる」
俺はグリフィンドール席に移動する。フィンラも立ち上がりちゃんとついて来た。俺が席につきダンブルドアが立ち上がる。
「おめでとう！ホグワーツの新入生、おめでとう！歓迎会を始める前に、二言、三言、言わせていただきたい。では、いきますぞ。それ！わっしょい！こらしょい！どっこいらしょい！以上」
その言葉でテーブルに料理が出てくる。しかし俺は困っていた。
（果して食えるか？……俺があいつら以外の手料理を）
答えは否だ。とてもじゃないが食べられない。市販物はまだいい。毒物を入れにくいから。だが手料理は違う。いつでも混ぜて入れられてしまう。だが俺の皿の下にこっそりと紙が置いてあった。それに気づき紙を拾う。
―貴方様の近くの料理は貴方様が屋敷しもべ妖精の中で唯一信頼しているラルクが全て一人で作りました。彼なら貴方様も食べられるでしょう。歓迎会をお楽しみください。
屋敷しもべ妖精総長・ヤギル―

（有り難いな…）
俺は気づかれずその紙を燃やし料理を手に取る。周りでは首無しニックから血みどろ男爵の話しをし、今や家族の話しをしている。
「君。食べないの？」
「というか君、組分け帽子を投げて踏んでた子じゃないか！」
「魔法をかけようとしていたよね」
「「面白い！」」
「はぁ？」
赤毛の双子が交互に話し最後は息ピッタシに揃っていた。
「俺はジョージ・ウィーズリー」
「俺はフレッド・ウィーズリー」
「「見ての通り双子さ。君の名前は？」」
「……ライカ・ヒブカ」
「「ライカね。ＯＫ。覚えておく」」
「…うん」
（双子…怖いな）
食事の後、デザートがだされそのデザートもしばらくしてから消えた。
デザートが消えた後にダンブルドアが席を立つ。
「―全員よく食べ、よく飲んだことじゃろうから、また二言、三言。新学期を迎えるにあたり、いくつかお知らせがある。一年生に注意しておくが、構内にある森に入ってはいけません。あと南にある部屋にも入ることは禁止じゃ。これには上級生にも、何人かの生徒たちに得に注意しておきます。管理人のフィルチさんから授業の合間に廊下で魔法を使わないようにと注意がありました。そして今学期は二週目にクィディッチの予選があります。寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡してください。最後ですが、とても痛い死に方をしたくない人は…死より酷いことになりたくなければ、今年いっぱい四階の右側の廊下に入ってはいけません」
教員達が一斉に首を縦にふり頷く。

（…普通の罠を仕掛けただけなのにな…）
「では、寝る前に校歌を歌いましょう。みんな自分の好きなメロディーで。では、さん、し、はい！」
皆が歌いだし俺も歌う。
―ホグワーツ　ホグワーツ
ホグホグ　ワツワツ　ホグワーツ
教えて　どうぞ　僕達に
老いても　ハゲても　青二才でも
頭にゃなんとか詰め込める
おもしろいものを詰め込める
今はからっぽ　空気詰め
死んだハエやら　がらくた詰め
教えて　価値のあるものを
教えて　忘れてしまったものを
ベストをつくせば　あとはお任せ
学べよ脳みそ　腐るまで―
「あぁ、音楽とは何にもまさる魔法じゃ。さぁ、諸君、就寝時間。かけ足」
監督生が一年生を誘導して寮へと向かう。
寮に着き、寮内の説明がなされた後、部屋を確認する。
（俺の部屋は…と…これか？）
部屋の前に名前入りのプレートがある。それを手で触り確認する。
（うん。此処だ。…そして俺一人…やったね！）
部屋は俺一人だけで他には誰も書かれていなかった。俺は早速部屋に入り中を確認する。
（うーん…他の生徒と同じか…よし！改造しよう）
…キッチン、お風呂、魔法薬を作る為のスペース、書斎…必要なのはこれくらいか？俺は杖を振り考えた通りに造っていく。一分もかからず部屋は出来た。
（これでよし！…後は）

改造したことが分からないように部屋全体に複雑な魔法を複数かける。…これで俺以外は普通の部屋に見えるはずだ。
「終了！フィンラ…俺は出ていくけど…君は来ないで欲しい。君が来れるようなところじゃないからね」
フィンラが尻尾を立てるのが気配が分かった。
「ん！じゃ行ってくるね」
俺はフィンラの頭を撫でて部屋を出て行った。

七話

「……っ」

ホグワーツ入学から数日たった夜中、俺はいつものように“見て”しまった。俺は熟睡することはなく、いつも睡眠が浅いのでほんの少しの物音ですら起きてしまう。そして夢で昔を“見る”のが日常で“見て”いる時は気配が疎かになり誰か気づかない。そして今夜も変わらなかった。―フィンラが俺を起こしたこと以外は。フィンラはうなされている俺の顔をムニムニと猫マッサージで起こしてくれた。

「！」

しかし俺は反射的に殺気を放ち、殺す為に動いてしまった。

（！…フィンラか）

とっさに動く体と殺さないように体を止める働きによって俺は盛大にこけた。ゴツンと大きな音を出し地面と仲良しになってしまった。

「いてて…フィンラ…起こさなくてよかったのに…」

時刻を確認すると深夜2時。就寝に入ったのが1時なので睡眠時間が一時間。

（……まぁ寝れた方かな…）

部屋の電気をつけてこれから何するか考える。

（…どうしよう…課題はないし…あれでもするか…）

俺は点検をする為に準備をする。部屋に戻る気は無いので制服にローブを着て鞄に授業用品を入る。

「…フィンラ。来るならおいで。ただし廊下に待つことになるけど…」

フィンラはニャーと鳴き、器用に俺の肩に乗ってきた。

「じゃ、行こうか…」

俺は部屋に鍵をかけてホグワーツの中へと消えていく。

――朝――

朝になり俺はしていた作業を止めて授業へと向かう。俺は頭にというか体がもう覚えていて城の中をスラスラと移動する。しかしハリー達は違うのか俺と一緒にいない日はクラスに向かうだけでかなりの時間がかかっているみたいだった。ちなみに今日の授業はスリザリンとの合同授業の魔法薬学だ。魔法薬学は地下牢で行われる。地下牢なのは材料や薬品によっては保存が地下の方がいいのと、サラザールの趣味…いや好みからきている。俺は地下牢に入り適当な席に座る。驚くことに俺の前はカエルが逃げたと騒いでいたネビル・ロングボトムだった。そして俺の足元にフィンラが大人しく座わった。

（…盲導犬みたいだな…こいつ）

しばらくするとセブルスが入って来て授業が始る。セブルスは出席を取りはじめ、ハリーのところで猫撫で声になったが俺は聞かなかったことにした。セブルスは出席を取り終わりクラス全体を見回した後、授業の説明をはじめる。

「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と厳密な芸術を学ぶ。杖を振り回すようなバカげたことはやらん。そこで、これでも魔法かと思う諸君が多いかもしれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中をはいめぐる液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……諸君がこの見事さを真に理解するとは期待しておらん。我輩が教えるのは、名声を瓶詰にし、栄光を醸造し、死にさえふたをする方法である―ただし、我輩がこれまでに教えてきたウスノロたちより諸君がまだましであればの話しだが」

クラス中が静まり返りる。ただし、ハーマイオニーだけはウズウズと体を動かしていた。

「ポッター！」

セブルスはハリーを名指しにした。

（あー…始まった）

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギをぜんじたものを加えると何になるか？」

ハーマイオニーの手が上がる音がした。
「わかりません」
「チッチッチ―有名なだけではどうにもならんらしい。もう一つ聞こう。ベゾアール石を見つけてこいと言われたら、どこを探すかね？」
「…わかりません」
「クラスに来る前に教科書を開こうとは思わなかったわけだな。ポッター？モンクスフードとウルススペーンとの違いはなんだね？」
「わかりません。ハーマイオニーが分かっているみたいだから彼女に質問してみたらどうでしょうか？」
「自分の勉強不足を他人に押し付けるのかね？―さすがは有名人は我々とは違うとみた。勉強しなくていいと――ヒブカ！今までの質問に全て答えてみろ！」
（うわぁ…俺に回すか…）
「…アスフォデルとニガヨモギを混ぜ合わせると強力な眠り薬となる。別名『生ける屍の水薬』などと呼ばれるな。ベゾアール石は山羊の胃の中にある石だから山羊の腹を捌けばいい。石はたいていの薬に対する解毒剤となる。覚えておくといい――モンクスフードとウルススペーンの違いか。モンクスフードとウルススペーンは同じ植物で別名アコナイトと言うがとりかぶとのことだ。――分からないならば何故、今のをノートに写さない？俺ならそうするがな。分からないなら分からなりに努力はしろ」
「ヒブカの言う通りだな。諸君何故今のをノートに書き取らんのだ？―ヒブカ、申し分ない説明だ。グリフィンドールに一点」
その後セブルスは二人一組にしておできを治す薬を作る。俺は人数が合わず一人での作業だ。
（むぅ…暇だ…）
俺からすればかなり簡単な薬でもう完成していた。周りはまだイクラサを計ったりヘビの牙を砕いたりしている気配がしていたので、俺は静かに瓶に詰めて鍋をかたずけた。

（ん！……まさか…）
俺は慌てて前の席のネビルの元に駆ける。
「ネビル！」
「え？」
その時ネビルは持っていた物を鍋に入れようとしていた。
「入れないで！シェーマス？だっけか？早く離れろ！」
しかし遅くネビルは持っている物を鍋へと入れてしまった。唯一の救いは隣にいたシェーマス？だっけか？そいつが瞬時に離れた事だった。セブルスが俺の声を聞いてこちらに気付いたが遅く、俺はネビルの腕を掴み俺の後ろへと引っ張る。その瞬間鍋が割れ薬が溢れ出した。周りの生徒は一斉に椅子の上に上がる音がした。俺とネビルは少しだけ薬を浴びたがすぐに直せる範囲だった。
「バカ者！」
セブルスが怒鳴り溢れた薬を取り除いた。
「おおかた、大鍋を火から降ろさないうちに、山嵐の針を入れんだな？―ヒブカがいたからこの程度の被害で済んだものの…二人は医務室に行きなさい」
俺はネビルを支えながらセブルスに言う。
「スネイプ先生。薬は出来ているのでそれを提出してくれませんかね？―他はかたずけましたし」
「―いいだろう。早く行け」
俺はフィンラとネビルと一緒に医務室へと向かう。医務室へと向かう途中にネビルから話しだした。
「…ライカ、ゴメンね？…僕がとろくさいから…」
「あのねぇ、人それぞれなの。ネビルがとろくさいとしてもネビルが得意な事はあるからそれで頑張ればいいんだよ」
「……うん」
納得していないようだったが俺は気にしなかった。
（まぁ…まだ分かんないか）
二人で医務室へと行き医務室の扉を開ける。フィンラは扉の前で座

り込んだ。此処で待つつもりなんだろう。
「すみませーん」
「はいはい。どうしたの？」
「ネビルから見て欲しいんですが…」
校医のマダム・ポンフリーが二人を見る。
「…こちらの子からね？」
「はい」
「え？でも…」
「で、どうしてこうなったの？」
「おできを治す薬を失敗したやつを被ったんです」
「そう。分かったわ」
マダム・ポンフリーは薬棚のところに向かう。
「ライカ…いいの？」
「俺は後でいいよ。すぐに治るしね」
マダム・ポンフリーはすぐさま戻ってきてネビルに薬を塗る。するとすぐさま腫れておできが少し出来ていたのが治っていった。
「坊ちゃんは帰っていいですよ」
「え？でも―」
「いても、邪魔ですから」
ニッコリと笑いマダム・ポンフリーはネビルを追い出す。
「全く……貴方も無茶をしますね」
「まぁ生徒には怪我させられないし」
ツカツカと足音が響き扉が開く。
「だから邪―おや？スネイプ先生でしたか」
「治療は終わりましたかな？」
「いいえ。先に坊ちゃんの方から治したので、これからです」
そう言いマダム・ポンフリーは薬を取りに行く。
「全く。相変わらずだな。お前は」
「そりゃどうも。―セブルス。今日の新聞見た？」
「あぁ。かなりあの金庫の事で騒いでいるな…」

「でしょ?狙っているやつは…どうするんだろうね?」
「全く。ダンブルドア校長もよくこんな事をしたわね!今年怪我人が少ないといいけど…」
マダム・ポンフリーが薬を手にして会話に入ってきた。
「…それは無理かな。クィディッチあるし…」
「あぁ…それにグリフィンドールの奴らは他人を巻き込むか自ら首を突っ込む奴らばかりだからな、あそこは怪我人が多い」
マダム・ポンフリーが俺に薬を塗りながら話す。
「どうにかならないんですか?怪我人はグリフィンドールかスリザリンの…おおかたグリフィンドールですけど…そのどちらかなんです!」
「あはは…やるなぁ。勇気と力だからかな?」
「お前達がそうしたんだろう?」
「そうだけどね…まぁこちらにも色々事情があるのだよ。セブルス」
「笑い事ではありません!――治療は終わりました。くれぐれも怪我をしないように」
「ありがとうございます。マダム・ポンフリー先生。スネイプ先生これで失礼します」
俺は治療が終わったので早々と医務室を後にした。

八話

グリフィンドールの掲示に一年生の授業について貼ってあった。
―飛行訓練は木曜日に始まります。グリフィンドールとスリザリンとの合同授業です―
「そらきた。お望みどうりだ。マルフォイの目の前で箒に乗って物笑いの種になるのさ」
ハリーは失望したように話す。
「そうなるとはかぎらないよ。あいついつも自慢しているけど、口先だけたよ」
「ロンの言う通りだね。スリザリンは厳しい教育を受けているけど、箒は初めてが多いからね。だからそんなに緊張しないでいいと思うけど…」
俺はそこでハーマイオニーの声がするほうに顔を向ける。ハーマイオニーは本で得たコツを話していた。ハリー曰くネビルがかなり真剣に聞いているらしい。
しかしふくろう便の時間になったのかバサバサと羽の音が聞こえる。
ハーマイオニーの講義も終わったみたいだ。
「思いだし玉だ！握って赤くなったら―あれ？何かを忘れてるってことなんだけど…」
ネビルが思いだそうとしていると一人の男子生徒がネビルの思いだし玉をひったくった。しかしマクゴナガル先生がタイミングよく現れた。
「どうしたんですか？」
「先生、マルフォイが僕の『思いだし玉』を取ったんです」
すると男子生徒はすぐにテーブルに思いだし玉をおいた。
「見てただけですよ」
（てか、あいつがマルフォイか…）
マルフォイはクラップとゴイルと言う二人の男子生徒を連れてスリ

ザリン席へと帰った。
その日の午後三時半、ハリー達と飛行訓練を受けるために校庭の少し先の芝生まで行く。スリザリン生はすでに来ていた。
「なにをボヤボヤしているんです?みんな箒の側に立って。早く!」
マダム・フーチ先生は来た一言がこれだった。生徒達は一斉に並ぶ。
「右手を出して、『上がれ』と言う」
皆が一斉に「上がれ!」と叫んだ。
「叫ばなくても…上がれ」
俺は叫ばず普通に話す。箒は直ぐに手に収まった。しかし一度で上がったのは少なく周りでは上がれと言う声が聞こえる。全員が手に収めるとマダム・フーチ先生は箒の乗り方を教え、生徒達の中を回り間違っている生徒に教えていく。
自慢していた?マルフォイは先生から指摘をされたらしくハリーとロンが大喜びだった。
「私が笛を吹いたら、地面を蹴ってください。そのままニメートルくらい浮上してそれから前屈みで降りて来て下さい。一、ニの―」
ところがネビルが笛を吹く前に地面を蹴り浮上していく。先生は下降の指示をだすが、ネビルは怖じけづいたのかドンドン箒は浮上する。
(…危ないな…)
ドンドン浮上してネビルがついに箒から落ちた。すぐに俺は箒にまたがり浮上する。そして高度を上げてネビルの元へと向かう。
(地面まで一、ニメートルか…)
なんとか落ちていくネビルの元へと着き、腕を掴む。そのまま箒の後ろを少し傾けネビルを乗せる。
(うん。…なんかとか間に合ったな)
ゆっくり下降し地面まで数センチのところで話しかける。
「ネビル…降りてくれる?そんなに高くないし流石に二人はね…」
「あ、ありがとう。ライカ」
ネビルは素直に降りて俺も降りる。するとマダム・フーチ先生が駆

け寄ってきた。
「大丈夫ですか？」
「はい。ネビルは一応医務室に―」
「ライカ。貴方もです。二人を医務室へと連れて行きます。その間に誰も飛ぶんじゃないですよ！クィディッチの前に退学ですからね」
先生は生徒達に釘を刺してから俺達を医務室へと連れて行った。
俺はなんともなかったが診察をしそれが終わったのが遅かったので夕食を食べずに寮へと戻った。談話室にハリーとロンがいて俺が居なかった時の様子を聞いた。ハリーはあの後ゴタゴタで箒に乗り、結果シーカーに選ばれたらしい。そして夕食時にマルフォイと言い争いになって今夜決闘をするんだと聞いた。
（シーカーね…ん？決闘？）
「決闘？介添人とかは？」
「ハリーは僕。マルフォイはクラップだよ」
「随分本格的だね」
「まぁね。でも火花くらいだと思うよ」
「だろうね。まだ本格的なのは習ってないし…」
「ライカは来る？」
「うーん…行きたいけど用事あるから止めておく」
「じゃ後で結果知らせるよ」
会話に入ってこなかったハリーから聞かれる。
「用事？」
「うん。話せないけど入ってるんだ。じゃ部屋に戻るね。お休み」
俺はそう言い談話室を後にした。

九話

あれからロン達に話しを聞くと、まずマルフォイ達は決闘には来ないで逆に管理人・フィルチがその場所に来た。ハリー達は見事に嵌められてその場所から逃げ出した。が逃げ出した場所が四階の禁止された部屋でその中に頭が三つある犬が足元にある扉を守っていて寮まで一生懸命に逃げ出して来たと聞いた。

（ハグリッドの罠だな）

その翌日はハリーにマクゴナガル先生から新しい箒、ニンバス２００が送られて来た。ハリーはとても喜びその日からクィディッチの練習を頑張っている。

そんな今日はハロウィーンの日だ。朝から甘い臭いが漂う。

（暇だなー）

今は「妖精の魔法」の授業中で羽を飛ばす魔法の最終確認をしている。しかし俺の足元にはフィンラはいない。今日は具合が悪く部屋で休ませた。

「―では、始めてください」

周りが羽を飛ばそうと呪文を言い杖を振る。しかし結果は惨めなものだった。羽は机についたままで中には燃やした人もいた。

「ライカ！君も始めなさい」

今だに杖を持たず周りを気配で伺っていると先生から注意を受ける。

「ウィンガーディアム　レウ〝ィオーサ」

羽に向けて呪文を放つと羽は机を離れてドンドン浮上する。ある程度浮上させてから俺は机に羽を下ろした。

授業が終わるまでに出来たのは俺とハーマイオニーだけだった。授業が終わり教室を出るとハーマイオニーが俺に話しかけてきた。

「ライカ！貴方どこかで魔法を習っていたの？飛行訓練もスイスイと乗りこなしてたし…」

「いいや。飛行は気持ちだよ。恐怖で怯えると箒も乗せない。君だ

って乗り手が怯えていたら乗せたくないだろう？」
「そうね。その通りだわ！」
「―だから、誰だってあいつには我慢出来ないってんだ。まったく悪夢みたいなヤツさ」
前にいたロンがハーマイオニーに対して愚痴っていた内容がこちらまで聞こえてきた。
「ハーマイオニー！待って」
ハーマイオニーは泣きながら校舎を走っていく。俺は急いでハーマイオニーの後を追った。
「ハーマイオニー！」
ハーマイオニーは聞こえていないのか女子トイレへと入っていった。
（此処は…女子トイレか。…入れないじゃん）
「ハーマイオニー…君は凄く頑張ってる。教科書を暗記したり、本で読んで予習したり。ロン達は何でも知ってる君に嫉妬したんだよ」
俺は女子トイレで泣いているハーマイオニーに話しかける。するとハーマイオニーが話してくれた。
「…友達がいないのは事実だわ」
「ハーマイオニーは自分には友達がいないって思ってるの？」
「そうでしょ？私なんてただ煩く知識を喋ってるだけじゃない」
「じゃ、ハーマイオニーは俺の事、どう思ってる？」
「え？」
「ハーマイオニーは他人の俺と話してたの？」
「いいえ。いつも…どの授業でもスイスイとやりこなしていて…その上ネビルを助けていて、凄いなって思ってたわ。だから…だから友達になりたくて…」
「じゃ友達になろうよ。今すぐじゃなくてもいいし」
「でも―…ライカはいいの？」
「ハーマイオニー…そこまで自分に自信ない？」
「え？」
「そうでしょ？俺は相手の心なんて読めないけれど俺は友達だって

言えるよ。ハーマイオニーはどう？相手の心が分からなくても自分の友達だって言える？そんな自信が―勇気ある？」

「……」

ハーマイオニーは答えず泣いていた。俺は追求せずにトイレの前に座っていた。

（フィンラ大丈夫かな？…ん？何か…）

俺は耳を澄ませる。するとブァーブァーと低い音と足を引きずる音が聞こえた。

（トロールか！……ちっ、ロンとハリーもいる）

俺は息をすい近くにいるだろうロンとハリーに話しかける。

「二人共！女子トイレにハーマイオニーがいる。女子トイレに入って」

すると二人が来て問い掛けてくる。

「ライカ！トロールが―」

「知ってる！早く中に！」

ハリーとロンが女子トイレへと入った瞬間トロールがこちらに向かってきた。俺はトロールを誘導しようと魔法で攻撃しながら移動する。しかしトロールは見向きもせずにトイレに入る。

（くそっ……）

トイレから悲鳴が上がり急いでトイレへと駆け付ける。

「ハリー、ロン、ハーマイオニー！」

トイレへと入るとロンが浮遊呪文でトロールのこん棒を頭に落としたところだった。トロールは気絶して床に倒れた。

「怪我、ない？」

「「うん」」

「えぇ」

「よかっ―！」

ブァーという音を出して倒れていたトロールが起きあがった。

『　　』

俺はとっさに呪文を放った。放った魔法はトロールに当たりトロー

ルは倒れた。
「ライカ?今何を―」
バタバタとマクゴナガル先生が入ってきて次にスネイプ先生、クィレル先生（闇の魔法に対する防衛術担当）が最後だった。
「いったい全体あなた方はどういうつもりですか！殺されなかったのは運がよかった。寮にいるべきあなた達が何故此処にいるのですか？」
ハリー達は一斉に俯く。
（…仕方ねぇな）
「せ―」
「先生。聞いて下さい。――三人共私を探しに来たんです」
俺が言い訳を言おうとしたらハーマイオニーが話し出した。
「私がトロールを探しに来たんです。私…私一人でやっつけられると思いました。本でトロールについて沢山読んだので…もし三人が来てくれなければ私死んでました。ハリーはトロールの鼻に杖を差し込んで、ロンはトロールのこん棒でノックアウトしてくれました」
（ハリー…そんなことしたんだ）
「ライカは立ち上がったトロールを魔法で倒してくれました…人を呼ぶ時間がなかったんです」
「…そういう事でしたら。ミスグレンジャー貴方には失望しました。グリフィンドールから5点減点。怪我が無いなら寮に帰った方がいいでしょう。生徒がパーティーの続きをしています」
マクゴナガル先生はハーマイオニーに向けていた視線をハリーとロンへ向けた。
「貴方達は運がよかった。大人のトロールを一年生で対決出来るなんてそうざらにいません。一人5点ずつあげましょう。ダンブルドア先生にご報告しておきます。帰ってよろしい――あぁライカは残りなさい」
ハリー達は申し訳なさそうにスゴスゴと帰っていった。
「クィレル先生。トロールを地下に戻してくれませんか?」

「分かりました」
そう言いクィレル先生はトロールを引きずっていった。ちなみにクィレル先生は俺が教員で盲目なのは知っているがゴドリックだとは知らない。何故なら先生の担当科目は一年ごとに先生が変わるので一々教えると俺の事が世間にバレてしまう。なのでこの科目の先生だけは教えないように通達された。
「―タツキ。グレンジャーの言うとおりか？」
「ライカだよ。ハーマイオニーの言うとおり。事実俺はトロールをぶっ飛ばしたし」
「―そうですか」
「あーでもしくったなー」
「…何をした」
「もう使われてない魔法使っちゃた」
「……自分で何とかするんだな」
「ちぇ。―で何で残したの？」
「ミス、グレンジャーの言った事が事実か気になったのですが…事実だったようなので帰っていいですよ」
「帰る。またね」
そう言って俺は女子トイレを後にした。

十話

前回のクィディッチ試合ではハリーが活躍してグリフィンドールが試合に勝った。その後にハグリッドが頭が三つある犬（三頭犬）の守っている扉にニコラス・フラメルが関わっていると漏らし―…教えてくれたらしく俺達は連日図書館へと通っていた。

「ライカ！貴方もクリスマス休暇は学校に残るの？」

「うん。日本なんて早々帰れないしね。ハーマイオニーは帰るの？」

「えぇ。ハリーとロンも残るみたいよ。だからフラメルの事よろしくね」

「分かった」

そう話してハーマイオニーとは別れた。

それから数日後のクリスマスには色んな人からプレゼントが届いた。ハーマイオニー、ハリー、ロンからは勿論双子のウィーズリー、リーマス、教員からも届いていた。お菓子類は勿体ないが全ては食べられないのでカエルチョコレートやいくつかのお菓子を取り、他は他人にあげることにした。物品等は全てとっている。…2、3年したら捨てるのだが。

そんなクリスマスから数日たった夜。ハリーが俺の部屋に入って来た。

「ライカ！起きて！ついて来てほしい所があるんだ」

「ハリー…それ空のベッドだけど…」

ハリーは俺からすれば机に話しかけていた。だが他の人には普通の部屋（ベッドがいくつかある部屋）に見えるのでそこは空きのベッドとなるはずだ。

「え？うわ！いつの間に後ろにいたの？」

「最初から。それにそこは俺のベッドじゃないからね……で、ついて来てほしい所って？」

「ある部屋なんだ。鏡があって僕の両親が映るんだ。…ロンには見

えなかったけどライカなら見えると思うからそこに来てほしい」
（……鏡？）
「うん。いいよ。でもどうやって？」
「透明マントがあるから平気だよ」
（ジェームズのか）
「じゃ行こうか」
俺とハリーはマントに隠れて鏡のある部屋へと向かう。
「此処の部屋だよ」
ある教室の前でハリーが小声で教えてくれた。扉を開け部屋へと入ると鏡が置いてありハリーは一目散に鏡へと向かっていく。
（…ダンブルドア、この部屋にいるな…しかし何故？）
「ほら、ライカ見える？」
「ハリー…速いよ」
俺はダンブルドアの事を気づかなかった事にして鏡の前へと行きハリーと並ぶ。
「僕の両親、見える？」
俺は鏡を触りながら考えていた。
（ハリーには両親が見えてロンには見えなかった…そしてこの形は…みぞの鏡か）
「ライカ？」
「ハリー…此処に何回来た？」
「え？今日で三回だけど―」
「ハリーまた来たのかい？」
ふと、ダンブルドアが姿を表し話しかけてきた。
「ぼ、僕気がつきませんでした」
「俺も……」
俺とハリー、ダンブルドアは一緒に床に座った。
「君だけじゃない。何百人も君と同じように『みぞの鏡』の虜になった」
「僕、そういう名の鏡だとは知りませんでした」

「この鏡が何をしてくれるかはもう気がついたじゃろう」
ダンブルドアはライカとハリーを見ながら優しく問うた。
「鏡は…僕の家族を見せてくれました」
「そして君の友達のロンには首席になった姿をね」
「どうしてそれを…」
「わしにはマントがなくても透明になれるでな」
ダンブルドアは穏やかに言う。
「それでこの『みぞの鏡』はわしたちに何を見せてくれると思うかね？」
ハリーは首を横に振る。
「じゃぁ、ヒントをあげよう。この世で一番幸せな人にはこの鏡は普通の鏡になる。その人が鏡を見ると、そのまんまの姿が映るんじゃ。わかったかの？」ハリーはゆっくりと答えた。
「なにか欲しいものを見せてくれる……なんでも自分の欲しいものを…」
「ライカはどうかの？」
「…鏡は本人の心の奥底にある強い『のぞみ』を映す、かな」
「ライカ。当たりじゃ。鏡は奥底の強い『のぞみ』を映す。ハリー…君は家族を知らない。だから家族に囲まれた自分を見る。ロナルド・ウィーズリーは兄弟の陰でかすんでいるから、兄弟の誰よりも素晴らしい自分が堂々としている姿が映る。…しかしこの鏡は知識や真実を示すものではない。ハリーこの鏡は明日よそに移す。もうこの鏡を探してはいけないよ。夢に耽ったり、生きることを忘れる事はよくない。よく覚えておきなさい。それを着てベッドに戻ってはいかがかな？…あぁライカに少し話しがあるから残ってくれるかの？」
「分かりました」
「ライカ…最近先生にあったらやけに残らされるね…」
「あはは…俺は日本出身でしょ？だから色々先生方と話さなきゃいけない事があってね」

「そういう事じゃ」
ハリーは立ち上がった。
「あの…ダンブルドア先生、質問してよろしいですか?―ライカにも」
「いいよ」
「いいとも、一つだけ質問を許そう」
「ライカ、先生はこの鏡で何が見えるんですか?」
「わしかね?厚手のウールの靴下を一足、手に持っておるのが見える。靴下はいくつあってもいいものじゃ。なのに今年のクリスマスにも靴下は一足も貰えなかった。プレゼントしてくれる人は本ばっかり贈りたがるんじゃ」
「……ライカは?」
「俺?日本のお菓子を持ってるよ。此処のお菓子は甘すぎてね…」
ハリーはマントを被りお休みなさいと言い出て行った。俺はダンブルドアに話す。
「ダンブルドア。今の嘘だろう?」
「タツキだってそうじゃろう?」
「当たり前だ。俺には“見る”事は出来ないからな」
「にしても…見事な猫かぶりじゃな…性格違うじゃろ?」
「ダンブルドアだってそうだろう?」
「子供には優しく接するものじゃろ?」
「俺だって子供でこの話し方はないだろう?」
しばらく沈黙が続く。そんな中俺は気になることがあり口を開いた。口調をほんの少しキツメに。
「何が見えた?アルバス・ダンブルドア」
「っ……妹じゃよ。自分が殺したかもしれん、…妹じゃ」
「…そうか」
「…こういう時に、やはり貴方は一流だと感じるの。…グリフィンドール様」
「様付けしなくていい。偉いもんでもないしな…」

「いいえ。貴方は紛れも無く、一流の魔法使いです。…私なんか足元にも及ばない…」
俺は普通と変わらない声で話しかける。
「この鏡……ダンブルドアの罠はこれを使うのか？」
「……そうじゃ。我ながら妙案が浮かんだからのぉ」
ダンブルドアも先程と違いタツキとして対応してくれた。
「ふーん？」
「聞いておいてその反応はないじゃろう…」
「…ダンブルドアの事だから甘いんじゃないのー？」
「…タツキの基準じゃと、どの罠も“甘い”じゃろう…」
「まぁね」
「自信満々に言わなくても良かろうに…」
「で、残した理由は？」
「特にないのぉ」
「…死ねや…否、殺してやる。糞じじぃ」
「……冗談じゃ。話しをしたくての…じゃが……止めておいた方がよさそうじゃな」
「俺は帰るぞ。年寄りは寝ろ」
「それならわしよりもお主の方が年寄りじゃが…お休み」
「……お休み」
俺は部屋を後にして寮へと戻る。

十一話

あれから俺達はニコラス・フラメルを突き止め、賢者の石を作った人物だと分かり、同時に扉に隠された物が賢者の石だと分かった。グリンゴッツの七一三番金庫の中が賢者の石だったということも。だが石が盗まれる様子はなく俺達は試験の勉強のため図書館に来ていた。しかしハリーとロンは嫌そうにしている。

「何のために復習するんだよ。君はもう全部知ってるじゃないか」

「何のためですって？気は確か？二年生に進級するには試験をパスしなきゃいけないのよ」

「ハーマイオニーの言う通りだよ。進級したいなら最低限復習はしておくべきだと思うね」しかしロンは限界なのかキョロキョロし始める。

「ハグリッド！図書館で何してるんだい？」

ロンはハグリッドを見つけ、ハグリッドに話しかけたがハグリッドは挨拶よりも先に背中に本を隠した。

（何の本を？）

俺はハグリッドが何を隠したのか気になりハリー達が話しているなかハグリッドが出て来た書棚へと向かう。

ハグリッドがいた書棚に着き俺は書棚に手を当てて此処に何の本が置いてあるかを読み取る。

（ドラゴン関係ばっかだな）

ロンはハグリッドと話し終えて、ハグリッドが隠した本が気になるのか俺に聞いてきた。

「ライカ！ハグリッドは何を見てたの？」

「ドラゴン関係だよ」

「うぇードラゴンの飼育は違法なんだよ。―そうだ！ライカもハグリッドの所へ行くかい？」

「…行く」

「それじゃあ早めに終わらせましょ？」
それから一時間後、俺達はハグリッドの小屋と向かった。ハグリッドは俺達を確認してから中へといれてくれた。しかし中は窒息しそうなくらい暑かった。
「そんで、何が聞きたいんだったな？」
「うん。フラッフィー（三頭犬）以外に『賢者の石』を守っているのは誰かハグリッドに教えてもらったらと思って」
「もちろん。そんなことはできん。第一俺自身が知らん。第二にお前達は知りすぎる。知っとっても言わん。だいたいフラッフィーのこともお前さん達はどうやって知ったのか…」
ちなみに紹介が遅れたがあの頭が三つある犬――三頭犬の名前はフラッフィーと言うんだ。ハグリッド命名だな。確か。
「ねぇハグリッド。私達に話したくないだけでしょ？私達は石が盗まれないように誰が、どうやって守りを固めたかなぁて考えているだけなのよ。ダンブルドアが信頼して助けを借りるのは誰かしらね…ハグリッド以外に」
ハーマイオニーは上手くハグリッドを丸め込んだ。
「それくらいなら…言っても構わんじゃろう。さてと、俺からフラッフィーを借りて何人かの先生が魔法の罠をかけて……スプラウト先生…フリット・ウィック先生…マクゴナガル先生…クィレル先生…もちろんダンブルドア先生もちょと細工して…そうそうスネイプ先生とタツキだ」
「スネイプだって？」
「まだこだわっとるんか？先生は手助けをしたんだ。盗もうとするはずがない」
どうやらハリー達はスネイプが石を盗もうとしている、と思っているみたいだ。
「ハグリッド…タツキって誰かしら？」
「知らんのか？ライカの父親だ。優秀な魔法使いでな。ダンブルドアもかなり信頼しちょる」

ハリーは心配そうにハグリッドに尋ねる。
「ハグリッド。ハグリッドだけがフラッフィーを大人しくさせられるんだよね？誰にも教えてないよね？たとえ先生だって」
「俺とダンブルドア先生以外は誰一人知らん……いや、多分タツキは知ってるな」
「え？ハグリッドとダンブルドア以外に？」
「タツキは多分知っとる。あいつはかなりの…というか俺はあいつ以上の物知りにあった事がない。ダンブルドア先生よりも物知りだ。……一体あいつの頭はどうなってるのか今だに不思議だな。しかしあいつはむやみやたらに秘密を話したりはせん」
「なら、よかった」
ハリーはホッとしたのか暖炉へ顔を向けた。
「ハグリッド…あれは何？」
暖炉には炎の真ん中に何かの卵がある。
（……でかいな）
「ハグリッド、あれドラゴンのタマゴだよね？どこで手に入れたの？すごく高かったろう？」
「あー……賭けに勝ったんだ。昨日の晩、ちょいと村で酒を飲んで、そんで知らない奴とトランプをしたんだが勝ってな。ほんで此処にある」
「ハグリッド…でかくなったらどうするんだ？」
しかしハグリッドは俺の話しを聞かずどこ吹く風だった。
「俺は知らないからね」
俺は関わらない事を始めに言った。
ハグリッドの小屋を訪れてから数日たつとドラゴンがかえりノーバートと名付けられた。ノーバートは凶暴な種類のドラゴンらしくハリー達は懸命にハグリッドを説得し、ドラゴン使いにドラゴンを引き渡す事を承諾させた。
その後、ドラゴンは無事ドラゴン使いに引き渡したがグリフィンドール寮へと帰る途中でハリーとハーマイオニーは見つかってしまっ

た。

ちなみにロンはドラゴンの毒牙に噛まれて医務室に入院中していた。

ハリーとハーマイオニーが見つかったのが深夜だったので一人五十点の減点と罰則を受けることになった。メンバーはハリー、ハーマイオニー、マルフォイ、ネビルだ。

（……何故、ネビルやマルフォイが？）

俺は気になったがどうせくだらない事でベッドから抜けたのだろう、ということにして顔が青いハリー達には聞かなかった。

十二話

夕食後の寮の談話室で俺はハリー達が今夜あの仕掛け扉に入り賢者の石をスネイプから守ると聞いた。
「俺も行く」
「え？でも―」
「反論は聞かない。幸い透明になる魔法は知ってるし、君達だけでは行かせないよ？」
「―……分かったよ」
渋々だがハリーが許可をくれた。それからは談話室から人が居なくなるのを待つ。
「ねぇ、ライカ。貴方かなり魔法に詳しいのね？トロールの時だって知らない魔法使っていたし…」
「んー？俺父親があれでしょ？教わった訳ではないけど書物なら沢山あったからね。それを読んだんだよ」
「あ！ライカ。最近フィンラを見ないけどなんで？」
「そういえばそうだね。ピッタリと側にいたのに。スキャバーズを追わずにさ」
「え？あーなんかよく体調壊してね…入院してる。だからいないよ」
「それって大丈夫なの？」
「うん。長引いてはいるけど…食あたりとかストレスとかそのあたりみたいだし…来学期前には退院出来るよ」
「よかったわね」
（…ゴメン、フィンラ…君の事忘れてた…ケージに閉じ込めてそのままだ）
実はフィンラは魔法薬学前後にあまりにもうっとおしくピッタリとついてくるのでケージに入れてからそのまま放置されていた。
（部屋に帰ったらケージから出してあげよう）
談話室から人気がなくなりハリー達はマントに三人隠れるか確認を

していた。すると声がかかる。「君達何してるの？また外に出るんだろう？」
それは脱走しそうなトレバーを抱えたネビルだった。
「ううん。違う。違うわ。出て行かない。ネビルもう寝たら？」
「外に出てはいけないよ。また見つかったらグリフィンドールはもっと大変なことになっちゃう」
そこからハリー、ロン、ネビルの言い争いが始まる。
「ネビル。本当にごめんなさい。ペトリフィカス　トタルス、石になれ！」
ハーマイオニーが全身金縛りをかけ、ネビルは体が固くなりその場に倒れた。
「ネビルに何をしたんだい？」
ハリーが小声で聞いてくる。
「『全身金縛り』だよ。固まるだけの魔法だからネビルは大丈夫」
俺がハリーの疑問に答え、俺は素早く透明魔法をかけてから俺達は早々に談話室を後にした。
四階の廊下にたどり着き、少し開いていた扉を開ける。三頭犬はハーブの音楽でスヤスヤと寝ていた。犬の足の下に扉があるため犬の足を退けて扉を開ける。
「ハーマイオニー…先に行くかい？」
「いやよ！」
ここで誰が先に行くか争いが始まった。
「はぁ、俺が行く。でもハーブの魔法はそう持たないから早くこないと犬起きちゃうからね…気をつけて」
俺は三人を置いて扉の中へと入った。
グシャッという音を立てて俺は植物だろう上に綺麗に着地をした。
その後にハリー達が落ちてきた。
「この植物のおかげでほんとラッキーだった」
ロンがそう言うとハーマイオニーが悲鳴を上げる。俺は気にせずに植物を調べていた。

「ラッキーですって！」
（…この植物は…『悪魔の罠』か…なら）
植物が俺達に絡み始めて引きずり込もうとする。俺は何も抵抗せずに引きずりこまれようとし、ハリー達は引きずりこまれまいと振り払っていた。
「三人共！俺の考えがあっているなら動かないで！死なないから」
「これ、『悪魔の罠』じゃないかしら？そうよね！ライカ！」
「ハーマイオニーの言う通り。これは動けばよけいに絡まり窒息してしまう。けど俺の考えが正しければ動かなければ次へ進める」
俺はすでにほぼツルに巻き込まれていた。そしてハリー達から見えなくなる。しかし実はその植物の下に床があり、死ぬことはないのだ。しかしいなくなったせいか三人はパニクっていた。
（仕方ないな…）
俺は上に杖を向けて光の呪文を放つ。すると植物は縮み三人が落ちてきた。
「大丈夫？」
「ライカ…君がいて本当によかったよ」
「そりゃどうも」
皆で一本道の廊下を歩いて行く。すると部屋に近づいているのかバタバタと羽音が聞こえてきた。部屋の中にはなにかが羽ばたいておりその先には扉があった。しかしその扉は魔法を使っても開くことは無かった。
「鍵だよ。羽のついた鍵なんだ。ということは…」
ハリーが上を見ながら言う。
（鍵なんだ…）
ハリー曰く真ん中には箒があり飛んで捕まえる…とのことだ。
（どの鍵？てか違い分かんない…）
とりあえずハリーの指示の通りに飛ぶ。するとハリーが鍵を取ったみたいですぐさま扉へと向かい鍵を使い開けた。
次の部屋は大きなチェス盤だった。

「さぁ、どうしたらいいんだろう？」
ハリーがささやく。
「向こうに行くにはチェスをしないと…多分僕達が駒になるんだと思う」
ロンがチェスの駒に尋ねる。
「むこうに行くにはチェスに参加しなくちゃいけない？」
黒のナイトが頷いた。
「ちょと考えさせて」
しばらくしてからロンは言った。
「ハリーはビジョプ、ハーマイオニーはルーク、ライカはキングと変わって」
（キング！？）
「ロンは？」
ハリーが問う。
「僕はナイトになるよ」
白駒から先手になりチェスが始まる。
盤上がロンの指示通りに動いていく。
（しかし…このままじゃロンが…）
「…やっぱり…僕が取られるしかない」
「「ダメ！」」
ハリーとハーマイオニーが同時に叫ぶ。
「二人とも、これがチェスだ」
「ライカの言う通り。スネイプに取られたくはないだろう？…勝ったらグズクズしてたらダメだ」
ロンは進んで相手に取られた。…というか殴られて落とされた。
（音はすごいが…平気だろうな。血も流れていないみたいだし）
ハリーが進み、相手のキングを取った。すると駒達が道を開き進めるようになった。俺達は次の部屋へと向かう。しかし二人は扉の前で止まった。
「もし、ロンが」

「平気だよ。血も流れていないみたいだし、多分数日で医務室を退院出来る。それよりも次の部屋だよ」
二人はまだ戸惑っているみたいだったが次の扉を開いた。
部屋の中はトロールが倒れていた。
俺達は起こさないようにそーっと出て行った。
次の部屋は何もなかった。
「何この部屋？」
「二人共、止まって」
ハリーとハーマイオニーは素直に止まってくれた。
俺はこの部屋に罠を仕掛けている。ダンブルドア曰く殺人の間じゃな、と言わせたほどだ。
俺は入口近い所にある壁のスイッチを押した。
「ライカ？」
「これが一時期の避難線になってるはずだ。二人は先に行って」
「でもー」
「スネイプに取られるよ？」
「分かった」
二人は先へと向かった。
（うーん……石を取ろうとしているのはセブルスじゃないけれど…別にいいか）
しばらくするとハーマイオニーがやって来た。
「あれ？」
「ハリーに貴方とロンを拾って、ダンブルドアに知らせるよう言われたの。スネイプの罠は一人しか進めなかったし…」
「ハーマイオニー、君はロンを拾ってダンブルドアに知らせて。俺がこれを外せばここは凄いことになるから」「…分かったわ」
そう言いハーマイオニーは来た道を戻って行った。
しばらくするとダンブルドアがやって来た。
「ハーマイオニーが知らせたにしては早いな…すれ違いか」
「そのようじゃの。タツキ、ハリーは？」

「先にいる。早く終わらせてくれ。案外これ暇」
「分かった。終わらせてこようかの」
そう言いダンブルドアは老人とは思えない速さで駆けていった。
（…あいつ、本当にジジィ？）
１０分くらいでダンブルドアはハリーを抱えて戻ってきた。
「ハリー気絶？」
「そうみたいじゃ。さてタツキ。壊しても構わぬ」
「んじゃ俺より後ろにね」
俺はダンブルドアが後ろについたのを見てスイッチを放した。
スイッチを放した瞬間あちこちから武器が俺めがけて発射した。俺は杖を剣に変え、武器を全て打ち落とす。
仕掛けた武器を全て打ち落とし終わるまでに１０分はかかった。俺は剣を杖に変え、ダンブルドアに話しかける。
「終わったよ」
「相変わらずじゃな。敵はクィレル先生に寄生したウ〝ォルデモートじゃたが…生きてるのが不思議なくらいズタズタじゃたな…」
「…生きてたの？結構やるね。最近の子にしては」
「…お主が規格外なんじゃ…」
俺とダンブルドアはそんな話しをしながら医務室へと向かった。
そして数日後には何事もなかったように学年末パーティーが行われ、今学期はグリフィンドールの優勝で幕を閉じた。あとはテストの結果。これは俺が学年一位。ハーマイオニーが二位だった。ハリーとロンは真ん中くらいでパスしていた。これから学校は長い夏期休暇へと入っていく。

外伝・雪合戦（前書き）

タイトル通りに番外編です。次は多分秘密の部屋に入ると思います。

外伝・雪合戦

雪が降り冷え込む今日。俺達は談話室の暖炉近くに陣取っていた。
「うわ、ライカ見てみなよ。外かなり積もってるよ」
俺はロンのその言葉で顔を外に向ける。
「……積もってるねー」
「そんなに積もってるの？」
課題をしていたハリーが顔をあげる。
「ハリー…外が凄く積もって―「「俺達と遊ばないかい？」」…」
ロンが話している途中でウィーズリーの双子が話してきた。
「遊ぶ？」
ハリーが双子に聞く。
「そう。まずは俺達。フレッド、ジョージにロン」
「パーシーにハリーそしてライカの六人で雪合戦をしよう！」
「…それは魔法を使った？」
「「勿論！君達は普通の雪合戦だけどね」」
「（…つまんないな）やらな―「「やる！ライカもね（だよ）」」
…マジで？」
「分かった。なら１０分後に校庭な」
「遅れるなよ！」
そういい双子は男子寮へと消えていった。
「するの？」
「うん。でライカ…魔法を使った雪合戦てどうするの？」
「魔法を使ってやるんだ…雪を飛ばしながら呪文を放ったりとかね
…でも俺達は出来ないよ？」
「そうなの？」
「僕達は実践的な魔法をまだ習ってないだろう？…でも見てるだけ
でも楽しいよ」
俺達は席を立って談話室から校庭へと移動する。

校庭へと着き少しすると双子とパーシーがやって来た。
「お?来てるな。じゃ組分けだ」
フレッドがロープのポケットから六本の紐を出してきた。
「さ、まずはお前達からだ」
俺達はハリー、ロン、俺の順番で引いていく。
「後は俺達か」
次にパーシー、ジョージ、フレッドで引いた。
「青を引いたやつは手を挙げろ!」
(色!?……俺何色だ?)
俺は自分の色が分からないので手を挙げなかった。だがフレッドは構わず話し出した。
「俺とジョージ、ハリーか」
(どうやら、青じゃなかったみたいだな…)
「残りのパーシー、ロン、ライカは赤のチームだ。開始は今から5分後。それではチーム会議といこうか」
その言葉からチームに別れる。
俺達のチームは取りあえず双子相手なので作戦よりも球を作る事に集中した。俺だけは壁を作っている。
「ライカ、球はこのくらいでいいのかな?」
「作れるだけ作ったほうがいいよ。俺達は作るのも素手だし」
しばらくすると双子の声が聞こえた。
「5分たった。だから―」
「「雪合戦開始だ!」」
それを開始に向こうから凄い数の雪球が投げられた。半分くらいは壁にぶつかった。ぶつからなかったやつを俺は全て避けていく。ロンやパーシーは避けられなかったのか度々当たっていた。
「ライカ!ロン!こちらもやるぞ!」
パーシーの言葉からこちらも反撃に出た。ハリー達も壁を作っており、半分はやはり壁に当たった。残り半分でハリー達を当てていく。
しかし悪戯仕掛け人の二人は素早く中々当てられなかった。

（素早いな…なら）
俺は投げるのを止める。パーシーとロンが投げるなか俺は相手を伺っていた。
「パーシー！」
俺は小声でパーシーを呼んだ。
「なんだ？」
「あの二人に一発当てたいんだ。だから―」
「……分かった。ロンにも伝える」
パーシーがロンの近くに向かうのが分かった。それを確認してから俺は相手に気づかれないようにその場所から離れた。
俺は相手から投げても届かない距離におり、相手は俺には気づかず向こうに投げていた。俺は息をすい大声を出した。
「後ろががら空きだな」
その声で三人が振り向いた。
俺が無防備だったからか双子が面白そうに話す。
「ライカ甘いな」
「その距離だと投げれないと？」
「「ならば飛ばせばいい」」
その声の後多くの雪球が俺に向かって飛んでくる。俺はそれを避けていきながらこっそりと杖を振った。
「「いつまで避けれるかな？」」
「さぁ？今だ！！」
「「え？」」
その瞬間二人の後ろと前に雪球が当たった。
「「ぶぅっ…」」
「油断大敵だよ」
「ライカ！やったね！」
ロンが俺にそう言った。ハリーが分からないのか俺に聞いてきた。
「ライカ…一体どうやって当てたの？」
「まず、俺が君達の後ろに気づかれない様に行く。そして君達に声

をかける。すると俺に集中するだろうから、ロンは気づかれないように君達の壁まで近付いておく。パーシーには魔法を使って俺達が居なくても気づかれないように頼んで、俺が合図したらロンは後ろから、俺は前から当てるって作戦」

「…でも、投げてもこの距離は当たらないよ?魔法じゃないと…」

「俺、出来ないとは言ってないよ?」

「ライカ出来るの?!」

「出来ないなら当ててないよ」

俺は双子を指しながら話した。

「ライカ…」

「俺達に当てるなんて…」

「「覚悟は出来てる?」」

そこからは魔法も使った壮絶な雪合戦が始まった。

暗くなり終わった時には皆グッショリに濡れていた。…俺以外。

疑問に思ったのかハリーが聞いてきた。

「ライカ…何で当たんないの?」

「避けたから」

「…絶対にそれだけじゃないよね」

(…いや、本当に避けただけだから…)

ハリーは不思議がって城に着くまでしつこく聞いてきた。

城へと戻るとハリーの質問攻撃も終わり、談話室にて暖をとる。

(…久々に遊んだな)

俺はウトウトし始めていて、皆は先程の雪合戦について話しをしていた。

(たまには、いいな。こういうのも)

俺はボンヤリしながらもハリー達の話を聞いていた。

十三話（前書き）

秘密の部屋に入りました。
原作ではないですが楽しんでもらえたら嬉しいです。

十三話

トン。
何か軽いものが地面に当たる音がした。
今俺達がいる場所は森の中だ。敵が隠れやすいため俺とロウェは警戒をする。
しかし一向に敵が来る気配がしない。
俺は音がしたところへと足を向ける。
「ゴドフィル！」
「行ってみる。ロウェはそこにいて」
「あたしも行くわよ！一人は危ないもの」
そう言いロウェは俺の方へと向かって来た。
「…いいの？危ないよ？」
「なら、尚更あんた一人行かせない。人間ならば必ず複数だからね」
「……分かった。行こう」
俺とロウェは音がした草むらへと向かう。
「……此処ね」
「うん。……でも人の気配はしないよ」
「なら、動物かしら？」
「うーん……気配が小さいんだよね…」
ガサガサと二人で草むらを分けていく。
「なんだろー……あ」
「ゴドフィル？」
「ロウェ見つけた。こっち見て」
隣にいるロウェが俺と並び俺が指したところを見る。
「子供の蛇だよ。…倒れてるけど」
「ゴドフィル…これ、あっていれば…バジリスクよ」
「バジリスク！？…目があったら死ぬっていうなんか反則気味なやつ？」

「そうよ。反則気味な蛇。…どうする？」
「うーん…取りあえず持って帰ろうか？」
「は？…あんた今までの話し忘れた？目があったら死ぬのよ？」
ロウェが馬鹿にしたような…いや、馬鹿にしている視線を俺に向ける。
「覚えてるよ。バジリスクと目をあわせなきゃいい話しでしょ？…それに治療くらいはしないとね」
「…全く。それもそうね。目さえ見なければ今は普通の蛇だし…ゴドフィルが持つのよね？」
「は？…分かった」
俺はバジリスクを捕まえてロウェと一緒に来た道を戻る。
「じゃ戻りましょ。この事二人に知れたら…知られるけど怒られるわね。確実に」
「あーサラとヘルフィ……二人共怖いんだよね」
「確かに。でも今回は仕方ないわ」
そう言いながらもロウェは優しく微笑んでいた。

―――――――――

「―キ、―ツキ、タツキ！」
ユラユラと揺すられた。俺は咄嗟に揺すった相手の背後に立ち首元に小刀を突き付ける。少し切れたのか僅かに血の匂いがする。
「…起きたか」
「セブルス？どうして―」
「どうして、だと？お前今何時だと思っている」
「今…？えっと…」
「…昼過ぎだ。いつまでたっても起きて来ないから起こしに来たのだ」
俺はその言葉を聞き首元につけていた小刀を外し部屋の救急箱を取りに行く。
「あー悪い。災難だったな」
「お前がしたんだがな……どうかしたのか？」

「へ？」
「遅くとも昼前には顔を出していただろう？」
俺はセブルスに近寄り救急箱から包帯を出す。
「あー…セブルス、座れ。包帯が巻けん。…今日はちょと夢見が…と、届かない…濃厚でな…くっ怪我はここか？」
「…我輩で巻く。包帯を貸せ。…どんな言い訳なんだそれは？子供でもしないぞ」
セブルスに包帯を渡す。すると器用に巻いていく気配がする。
「ほー器用だな。…いやいや、本当だって。まるで当時に戻ったというか…また繰り返し体験しているみたいだったよ」
「ほぅ？さぞや印象に残る事だったのだな？」
セブルスは包帯を巻き終えたのか俺に返してきた。俺はそれを救急箱になおす。
「んー？ただロウェナと蛇を拾っただけだよ」
「……蛇？」
「うん。蛇」
「…お前、ゴドリックなのにその言い訳はないだろう」
セブルスに冗談…というか言い訳にとられてしまった。
（ま、いっか）
「セブルス、今日の予定は？」
「我輩は学生のお前と違って予定はびっしりだ」
「えー？荷造り手伝ってもらおうと思ったのに…」
「自分でしろ。…確か明日だったな？」
「うん。明日からロンの家に泊まる。学校へは学生として新学期に来るかな」
「そうか…ならこの部屋、片付けておくんだな」
「…分かった」
セブルスが立ち上がる。
「雑談は此処までだ。我輩は忙しいので失礼する」
「おー、ありがとよー」

部屋から出ようとする前に急にセブルスが立ち止まる。
「セブルス？」
「お前、今学期の闇の魔術の教授、誰か知っているのか？」
「え？確か……キルテェ・ハートだっけ？」
「誰だそれは！ギルデロイ・ロックハートだ！」
「あーそうそう」
「はぁ。…あいつにもお前の事は知らせるのだぞ？少しは覚えておけ。―ダンブルドアから伝言だ。休暇中魔法を使っても未成年ではないから魔法省から勧告は来ないが使用禁止だそうだ」
「えー？分かった。忠告どうも」
はぁとため息をつきながらセブルスは部屋を出て行った。
（さて、教員用だから掃除しないとね）
ニャーと鳴きながらフィンラも側にくる。
「そういえばお前も汚れていたね…洗わないと」
フィンラは俺がケージに入れて忘れていたためにかなり汚れていた。
「お前からするか。触るとゴワゴワするし」
俺は鳴き喚くフィンラを抱えて浴場へと向かった。

十四話

（此処らへんか？）
俺はロンに貰った住所を頼りに荷物を持ちながら道を歩いていた。
ちなみにフィンラは肩に乗っている。
（案内板は…とこれか？）
案内板らしき看板を感じ手で探る。
看板の端を手で掴み読み取ろうとすると声がかけられた。
「君、どちらまでかな？」
振り返ると大人…だろうか、声からして男性から話し掛けられる。
「え？…いや、平気です」
「だが目が見えていないだろう？」
「…何故分かったんですか？」
「見えていれば案内板に近づかなくても分かるし、住所だろう紙を持ちながらこの辺をウロウロしないよ。この辺は家はあるが少ないからすぐにどの家か分かるんだ」
だから目が見えないんだろうって思ってね、と付け加えながらその男性は話す。
「…その通りです」
「警戒しなくてもいいよ。君の名前は？」
「ライカです。ライカ・ヒブカ」
「…ライカ？もしかして今日泊まりに来る子かい？」
「は？」
「あぁ…そういえば私の名前を言ってなかったね。私はアーサー。アーサー・ウィーズリー」
「ウィーズリー？…もしかしなくてもロンのお父さんですか？」
俺は驚きながら聞いた。
「そうだよ。君がライカか……しかしロンから盲目なんて聞いてなかったな…悪かったね。案内もさせないで」

「いいえ、いいんです。俺が盲目だなんて知っているのは先生方だけですから。……あの、申し訳ないんですけど…俺が盲目だって事―」
「話さなければいいんだね？」
「はい」
俺は激しく首を縦に振る。
「でも、なんでか理由を聞いてもいいかな？」
「う……俺の目が見えないのは先天的ではなくて後天的なので―……」
「話したくない？」
俺はコクコクと頷く。
「右目の眼帯も関係しているのかな？」
「……はい」
「そうか。じゃ家へと行こうか？」
「お願いします」
俺がアーサーと歩きだそうとするとフィンラがスルリと下りてきて俺の側へと寄る。俺が歩き出したらちゃんとついてきた。
「手は繋ぐのかな？」
「いいえ。繋がなくても平気です。気配で分かるので…」
アーサーが驚く気配がする。しかしすぐに歩きだした。そして歩きながらアーサーは俺に質問をしてきた。
「普段学校はどうしてるのかな？」
「皆と変わりません。俺は気配で人やら物は分かりますから。読み書きも出来ますし…」
「読み書きを？」
「はい。…凄く練習して、読み取る力と書く力をつけました」
「……それは凄く大変だったろう？」
「そうですね。いまだに文字はどうしてもズレてしまいますし、読み取りも少し時間がかかります。―でも先生方は変わらずに接してくれるので感謝しています」

「じゃ君が滞在中に何かして欲しい事はあるかな？」
「ないですね。日常生活には問題ないですし、困る事がないように訓練しましたから」
手伝いも出来ますよ、と俺は付け加える。
「そうか。じゃ私も変わらずに接するよ。そろそろ着くね。騒がしいけど楽しんでね」
キィと木製のドア？を開く音が聞こえた。だがアーサーはまだ歩いているので扉ではなく柵の入り口かなにかなんだろう。
ふ、とアーサーが立ち止まる。
「此処が玄関だよ。…狭いから気をつけて」
そうアーサーは言い扉を開けた。
「ただいま。途中でライカを広ってきたよ」
「お帰りなさい。ライカ…確か今日から泊まりにくる子よね？あなたがそうなの？」
扉を開きアーサーを迎えた女性に聞かれる。
「あ、はい。ライカ・ヒブカです。お世話になります。俺、少しなら手伝えるので遠慮なく言ってください。あと…これ…」
俺は持ってきたトランクからお菓子を取り出した。
「お世話になるのでお礼に持ってきました」
「まぁ！別に気にしなくていいのよ？私はモリー。家みたいにリラックスしてね」
「ライカ！久しぶり」
モリーの話しが終わったとたんにロンから声がかかる。
「ライカ早かったね。…ハリーはまだ来てないんだ」
「そうなの？」
「まぁ元々ライカより遅く来る予定だけどね…あの…ライカ課題終わった？」
「終わってるけど？」
「あ、後で―「ロン！」…いや、いいよ」
ロンが俺に課題を見せてもらおうとしていたのは分かったがすぐさ

まモリーが釘を打った。
「こんなところで話さないで座って話さないかい？」
アーサーがそう言ってから気づいた。今だ玄関に立ちっぱなしだったのだ。
「そうね。ライカ、こっちよ」
それからリビングに移動してウィーズリー一家に質問攻めにされた。
主にアーサーとモリーから。
俺が来てから数日後にハリーが隠れ穴へとやって来た。

十五話

ハリーが来てから一週間の朝。朝食時にホグワーツのふくろうが手紙を持ってきた。
俺はアーサーから手紙を受け取りありがとうございますと言ってから読み取りを始めた。
―二年生は次の本を準備すること。
基本呪文集（二学年用）　ミランダ・ゴズホーク著
泣き妖怪バンジーとナウな休日　ギルデロイ・ロックハート著
グールお化けとクールな散策　ギルデロイ・ロックハート著
鬼婆とオツな休暇　ギルデロイ・ロックハート著
トロールとのとろい旅　ギルデロイ・ロックハート著
バンパイアとバッチリ船旅　ギルデロイ・ロックハート著
狼男との大いなる山歩き　ギルデロイ・ロックハート著
雪男とゆっくり一年　ギルデロイ・ロックハート著―
（…今年の防衛術の教師は馬鹿？それかロックハートのかなりの崇拝者か…どちらにせよ買いたくないな…）
俺はウンザリ顔でリストに顔を向けていた。するとジョージはハリーのリストを覗きながら言った。
「うわ、君達のもロックハートのオンパレードだ。確かこの本は高いんだ…」
「まぁなんとかなるわ。水曜日にダイアゴン横丁に行きましょう」
モリーのその言葉で朝食が再開された。
その日の午後はハリー達は外でクィディッチもどきをするため外に出て言った。俺は昼食の片付けを手伝って終わり次第リビングの端で最新刊の本『魔法植物の育てかた―誰も育てられない激難編』を読んで過ごした。
ダイアゴン横丁へ行く水曜日。俺は朝早くリビングへと下りた。リビングにはすでにウィーズリー夫妻がくつろいでいた。

「おはようございます」
「「おはよう」」
「早いのね。他の子は？」
「まだグッスリ寝てますよ」
「なら、起こしてこないといけないわね」
そう言いモリーは2階へと上がっていった。
次々と下りてきてそれからは皆で急いで朝食を食べる。
朝食を急いで食べ終えると暖炉の近くへと移動する。
「そろそろなくなりそうだわ……さて、お客様からどうぞ。ハリー！お先にどうぞ！」
「な、何をすればいいの？」
ハリーがうろたえながら聞いた。
「ああ、ハリーは煙突飛行を知らないっけ？方法は俺が先にやるから見ててよ」
俺は鉢から粉を一つまみ取り暖炉へと近づき炎に粉を振りかけた。
ゴーという音がなり炎の勢いがます。俺はその炎の中に入り叫んだ。
「ダイアゴン横丁」
飛行ネットワークを通じ目的の暖炉へと出る。
暖炉から離れしばらく待つと次々とウィーズリー一家がやって来たがハリーだけは出て来なかった。
「きっと逸れたんだわ！そう遠くへ行ってないといいけど…」
モリーが焦ったように言うと落ち着いてアーサーが話す。
「ダイアゴン横丁に来ると思うからダイアゴン横丁へと行ってみようか」
ダイアゴン横丁で固まって動きハリーを探すとハリーはハグリッドとハーマイオニーと一緒にやって来た。
「あれ？ハーマイオニー久しぶり」
「久しぶりねライカ。ロンも」
「僕はオマケかい？」
ハリーはモリーに抱きしめられていた。

アーサーはハーマイオニーと合流しただろう両親と話しこんでいた。
「これからどうするの？」
「多分グリンゴッツじゃないかな？」
「そうだろうね。もっともパパの話しが終わればだけどね…」
結局アーサーの話しは尽きずハーマイオニーの両親と話しながらグリンゴッツへと向かった。
グリンゴッツではお金を引きだなさければならないが俺は悩んでいた。去年はハリーがいたからわざわざ取りに行ったが俺は特別に金庫からの引き落としが使える。要するに取りに行かなくても店に頼べば店が勝手に俺の金庫から代金を引き出してくれる、ということだ。しかしデメリットがある。手続きがかなり複雑で頼んだら定員から泣きつかれるのだ。これがかなりうっとおしい。
（いつもは気にしないが…皆で買うとなるとな……目立つし何より追求される）
追求されるのが嫌なため俺は今年も…下手すれば卒業まで取りに行かなくてはならない。
（仕方ない…諦めるか）
グリンゴッツにて俺は小鬼に鍵を渡す。どうやら何台かのトロッコに乗りわけて行くみたいで、一緒に取りに行く事になった。
お金を金庫から取る時にハリーが気まずそうに取っていたが俺は気にしないで取り、１時間後にブロッツ書店に集合となり解散した。
ハリー達はクィディッチ専門店や悪戯専門店に行きたいみたいで俺はフィンラの餌や魔法薬の材料とか他にも欲しい物（買ってない最新刊とか古本等）があったのでハリー達とは別れて行動した。
餌や材料、その他（本以外）に欲しい物を買うのにさほど時間はかからず俺は早めに書店へ行き買いたい本を買うことにした。
…モリー達とだと教科書くらいしか買わせて貰えなそうだし。
書店へと着くと何やら人が多かった。
（何かあったけ？）
何かイベントがあった気もするが俺はとくに気にせず書店へ入り欲

しい本をすぐさま買った。勿論教科書も。その後は書店の端の暗い所でずっと立ち読みをしていた。

「ライカ。こんなところにいたんだね。もう夕方だよ？」

アーサーはライカを見つけ話し掛けた。しかしライカは本に没頭していて聞こえていない。アーサーは苦笑いしながらライカの肩を叩いた。するとビクッと驚いた後、本を投げる気でいるのか持っていた本をアーサーに向けた。

「……てあれ？アーサー…さん？」

「すごい集中力だね。話し掛けても全く聞いてなかったよ」

俺は全く気づかずにアーサーを本で気絶させようとした手を下ろす。

「すみません。俺、集中したら周りの音聞こえないんです。買い物は終わったんですか？」

「終わったよ。漏れ鍋にて君がいない事に気づいて慌てて探してたんだ。帰ろうか？」

「はい」

俺は持っていた本を棚に直しアーサーと漏れ鍋へと向かう。

漏れ鍋へと着くとモリーに軽く説教を受けてから隠れ穴へと帰った。

十六話

ホグワーツへと行く日。皆、朝早く起きたのだがドタバタと準備をしていた。俺だけは準備などは終わっていたからゆっくりとしていたけど…

その忙しい準備が終わり、車にてキングズ・クロス駅へと向かったのだが途中で忘れ物に気づき何度も隠れ穴へと戻った。それによって予定より遅れてしまい駅へと着いたのは出発15分前だった。大慌てでホームまで行き先にウィーズリー一家は九と四分の三番線へ向かった。ウィーズリー一家が通った後ハリーが時計を確認した。

「あと1分しかない。ロン、ライカ急ごう」

ハリーとロンが壁に向かって走り出す。

「（ん?…!）ハリー、ロン!」

俺はあることに気がつきハリー達に注意するが遅く、二人は壁にぶつかった。

周りから白い目で見られながら二人は荷物を持ちながら駆けてきた。

「どうしよう?通れなくなってる」

「ハリー…おち―」

「出発時間だ!」

ロンがそう放った。

その言葉でハリーとロンはパニックに陥る。

「二人共、落ち着いて!俺が学校に知らせてくるから動かないでよ!」

二人が聞いていなかったみたいだが…落ち着くのを待っているわけにはいかない。それに二年生…しかもまだ知識は一年生の分しかないので勝手に動くことはないだろうと思い俺は荷物を持ち駅の外へと出る。

俺は駅の外で人に見つかりにくいところへ隠れ小さく指笛を吹き左腕を伸ばす。すると伸ばした左腕に一羽の鷲が止まった。

（ロウェナにこうすれば出て来てくれるとは聞いたけど…本当に来たよ）

この鷲はロウェナが以前使っていた鷲の子孫だろうか？しかし考える事より先に俺は荷物から出した羊皮紙に急いで起きた事を記し鷲に渡す。

「これをホグワーツに。頼んだよ」

鷲は了解の意なのか甘噛みをして去って行った。

俺は隠れていた所から出ると瞬時に固まってしまった。ハリーとロンが荷物を車に入れて車を動かしたのだ。それだけならいいがその気配は空からする。そして二人は飛んでいった。

（俺、置いて行ったな……それより）

どうやら何もせずに飛んだらしく周りのマグルが騒いでいた。

（鷲じゃ間に合わないな）

俺は再び同じ所に隠れた。そして手を向かい合わせ魔力を使い呼ぶ。

「来てくれ！緊急事態だ」

すると向かい合わせた手の間に使役の不死鳥があらわれる。

俺は魔法を使い作った手紙をその不死鳥に渡す。

「これをホグワーツに。至急だ」

不死鳥は小さく鳴き、炎に包まれて消えた。早さなら多分不死鳥の方が早いので先程の鷲よりは早くホグワーツに着くはずだ。

俺はわかりやすいように荷物を持ってキングズ・クロス駅の入り口へと移動する。大分時間がかかったがマクゴナガル先生が俺の所へとやって来た。

「タツキ！どういう事ですか！」

「マクゴナガル先生！ライカです！…とそんな場合じゃないですね…手紙に書いた通りです。ただ書いていない事は魔法が切れたのではなく故意に一時的に通せなくした、という事だけです。皆動いていますか？」

「えぇ…タ…ライカの連絡が早かったので対策をしています。通せなくした者は誰か分かりますか？」

「…残念ながら分かりません」
「……そうですか。では「あ！少しいいですか？」…何ですか？」
「確認したいんです。俺は通れなくなってからすぐ知らせるために移動しましたから。…それに姿くらましでホグワーツに向かうんですよね？ならまだ時間はあるはずです」
「分かりました。向かいましょう」俺はマクゴナガル先生とキングズ・クロス駅の通れなかった壁へ向けて歩く。
目的地に着いた俺達はマグルに気づかれないよう壁に寄り掛かる。するとスルリと通りぬけ九と四分の三番線のプラットホームに出た。
「……行けましたね」
「…そうですね。これでライカが言っていたことが正しかった、ということが分かりました。…帰りましょうか？着替えないと怪しまれますし」
「あ…俺今マグルの服装でしたね…」
「…まさか忘れていたわけではないですよね？」
「あはは…そんなことないですよー」
マクゴナガル先生はため息をついた。
「まぁいいです。では準備はいいですか？」
「何時でもいいですよ？」
「では…一、ニの三！」
俺達は同時に姿くらましをした。
姿あらわしをした場所はホグズミード。それからマクゴナガル先生と歩く。散々歩いた後ホグワーツへとついた。
ついてまずマクゴナガル先生とは玄関で別れた。俺は一先ず近くの部屋に入り制服へと着替え荷物を荷物置場に置いてからばれないようにホグワーツ特急で来た生徒達に紛れ込みなんとか合流した。しかし大広間に入る前にマクゴナガル先生とセブルスに呼び止められた。
「ライカ。こちらへ」
「はい」

俺はマクゴナガル先生とセブルスについて行く。数分後先生達はある扉の前で立ち止まる。
「こちらです」
セブルスを先頭に扉を開けて部屋に入る。部屋の中にはハリーとロンがいた。
「ライカ…ごめん。僕達君を忘れていたよ」
ロンが気まずそうに言う。
「見事に置いていってくれたね…ハリー達はどうやって来たの?」
「ご説明なさい」
俺がハリー達に言った後にマクゴナガル先生が怒った声で言った。それから5分過ぎくらいまでハリー達の説明を聞く。
説明が終わりマクゴナガル先生が冷たく話す。
「何故、ふくろう便を送ろうと思わなかったんですか?あなたはふくろうをお持ちでしょう?―ライカはそうしましたよ」
「え?」
「ライカいつふくろう便を送ったの?」
ハリーとロンが不思議そうに聞いた。
「君達がパニックになっている時に。ちゃんと動かないように言ったはずだよ。ちなみに俺はマクゴナガル先生に此処まで連れてきてもらった」
二人が黙り込む。
静まり返った部屋で扉が開く音がした。
部屋に入ってきたのはダンブルドアだった。「どうしてこんなことをしたのか、説明してくれるかの?」
ハリーはマクゴナガル先生と同じ内容をポツリポツリと話しはじめた。ハリーが話し終えるとロンがポツリと言う。
「僕達、荷物を纏めます」
「ウィーズリー。どういうつもりですか?」
「僕達退校処分ですよね?」
「ミスター・ウィーズリー。今日というわけではない。二人の両親

にわしから手紙を書こう。しかし二人には警告をしないとのぉ。今後またこのようなことがあればわしでも退校にせざるをえんのでな」その言葉をいい、ダンブルドアはセブルスを連れて宴へと戻っていった。

「マクゴナガル先生…俺はどうなるんですかね？」

「そういえばダンブルドア先生、ライカに触れてなかったよね？」

「ダンブルドア校長はライカについてはすでに知っています。ホグワーツ宛てにふくろう便が来たのですから。―さて二人には減点はしませんが罰則を受けることになります」

マクゴナガル先生は杖を振って机にサンドイッチ、ゴブレットを三つ、かぼちゃジュースを出した。

「ここでお食べなさい。食べ終わったらまっすぐに寮にお帰りなさい。私も歓迎会に戻らなければなりません」

マクゴナガル先生が扉を閉めて行ってしまうとロンが話し出した。

「あのさ、ダンブルドアってライカの事知っていたならわざわざ聞かなくてもよかったんじゃないか？」

「同じ内容でもいろんな人に聞くのがいいんだよ。一人では偏るし、間違っているかもしれないからね」

俺はサンドイッチに手を出す。するとハリーやロンも手を出してきた。

その後三人で沢山サンドイッチを食べた後、俺達はグリフィンドール寮へと帰った。寮生は二人の話しを聞きたくて待っていたらしく二人が入ったとたん騒ぎ出した。俺は付き合えきれず二人を見捨てて自室へと戻った。

十七話

ハリーとロンが車で飛んで来た日の翌日。俺は薬草学の授業を終えて闇の魔術の防衛術を受けるため教室の後ろに座っていた。しばらくするとハリーやロン、ハーマイオニー達が来て隣に座る。クラスの全員が着席するといつの間にか教室にいたロックハートは咳ばらいをして話しはじめた。

「私だ」

ロックハートは自身の書いた本を持ちながら言った。

(あ！…今学期の教授こいつだったな)

俺は今まできれいにロックハートが今学期の闇の魔術に対する防衛術の教授だと忘れていた。

(……崇拝者ではなくて本人か…ならまともな授業にはならないな)

俺はロックハートが書いた本を一度読んだ。そして驚愕とした。理由はあちこちに正しくない事柄があったからだ。しかも実際に旅をしたならば分かるだろうところばかり。

「ギルデロイ・ロックハート。勲三等マーリン勲章、闇の魔術に対する防衛術連盟名誉会員、そして『週刊魔女』五回連続『チャーミング・スマイル賞』受賞―もっとも、私はそんな話しをするつもりではありませんよ。バンドンの泣き妖怪バンシーをスマイルで追い払ったわけじゃありませんしね！」

ロックハートは少し合間をとって話し出す。

「全員が私の本を全巻揃えたようだね。たいへんよろしい。今日は最初にちょとテストをやろうと思います。心配ご無用―君達がどのくらい本を読んでいるか、どのくらい覚えているかをチェックするだけですからね」

ロックハートはそう言いペーパーテストを配った。

「三十分です。よーいはじめ！」

俺はペーパーテストを読み取り始める。

1　ギルデロイ・ロックハートの好きな色は何?
2　ギルデロイ・ロックハートのひそかな大望は何?
3　現時点までのギルデロイ・ロックハートの業績の中で、あなたが何が一番偉大だと思うか…ｅｔｃ
（…すべて自分の事だな）
俺はペーパーテストに答えではないが別のことを書き、回収されるのを待った。
三十分後ロックハートはテストを回収しパラパラと見ていく。そして最後の答案で怒りの気配が漂った。しかしそれには何も言わずロックハートは机に大きな籠を置いて授業を進める。
「―さあ、気をつけて!魔法界の中で最も穢れた生物と戦う術を授けるのが、私の役目なのです!この教室で君たちには、これまでにない恐ろしい目に遭うことになるでしょう…ただし私がここにいるかぎり君たちに危害を加えることはないですよ―どうか叫ばないように。連中を挑発してしまうかもしれませんからね。捕らえたばかりのコーンウォール地方のピクシー小妖精です」
ロックハートが籠に何かをしながら話した。
「先生あの…こいつらそんなに―危険ですか?」
シェーマスが笑いながらロックハートに質問をする。
「連中は厄介で危険な小悪魔になりえますぞ――さぁ君たちのおてなみ拝見っ」
そう言ってロックハートは籠の戸を開けた。それからは教室は大騒ぎ。教科書はビリビリ、インクはあちこちで倒されて机が汚れた。
数分後には生徒は俺以外全員机の下に隠れて、ネビルは天井のシャンデリアからぶら下がっていた。
「ネビル大丈夫?」
「ライカ…何で無事なの?」
「秘密」
「さぁさぁ、たかがピクシーでしょう?…ペスキピクシペステルノミ―ピクシー虫よ去れ!」

ロックハートがそう言って杖を振った。が何も起きず杖を取られたのかロックハートも机の下に隠れた。
「…最低だな。ピクシーすら止められないなんて」
「なら、君は止められるのかな？」
ロックハートが鼻で馬鹿にしながら俺に聞いた。
俺は何も言わず杖を振る。するとピクシーの動きが一斉に止まり教室が静まり返る。
「ネビル。今助けるね」
俺は杖を二度振った。するとピクシーは籠に強制的に戻っていき、ネビルがユックリとシャンデリアから下りてきた。
ネビルの足が床に着いたと同時にチャイムが鳴り響く。
「チャイムがなったね…どうするんですか？せ・ん・せ・い？」
「…グリフィンドールに十てー「少ないですよ。先生」…五十点。今日の授業は此処まで」
（これは今学期、期待出来そうにないな…）
俺はため息をつき教科書をわざと置いて寮へと戻った。

十八話

あの授業から数日。ハリーは忙しいそうにギルデロイ・ロックハートを避けていた。しかしロックハートより恐ろしい奴がいた。コリン・クリービーだ。コリン・クリービーはハリーを崇拝している一年生でハリー曰く時間割を暗記しているみたいで一日に何度も声をかけられるそうだ。…お気の毒様。

今日はハリー、ロン、ハーマイオニーと一緒にハグリッドの所へ行こうと約束していた日だがハリーが朝早くウッドというクィディッチのキャプテンに練習だと言われ連れて行かれてしまった。俺はハリーだけ朝食無しなのも気が引けたのでトーストを二人分持ってクィディッチ競技場にいた。数時間後にはトーストを持ちながらハーマイオニーとロンがやって来た。

「ライカ！練習はどうなってる？」

「今始まったところ」

「今？随分襲いのね？」

「今まで作戦会議をしていたからね」

「そのトーストはハリーの分かしら？」

俺は競技場に顔を向けながら話す。

「俺のも入ってるよ。ただ…ハリーは食べる暇なさそうだね」

「なら僕が食べようか？」

「ロン！あなたは今食べてるじゃない」

「これくらいならまだ食べれるよ」

「じゃ頼むよ。俺一人じゃ無理だし」

俺はロンにハリーの分のトーストをあげ自分の分を食べる。

「スリザリンのやつらだ！」

俺達がトーストを食べ終えた頃ロンが叫んだ。

「スリザリン？今はグリフィンドールの練習時間だろ？」

「分からない…行ってみよう」

俺とロン、ハーマイオニーは競技場の座席から選手達が練習している場所へと向かった。
「どうしたんだい？どうして練習しないんだよ。それにあいつこんなところで何してるんだい？」
ロンが揉めあっている場所に着いたとたんに口を開き聞いた。
「ウィーズリー、僕はスリザリンの新しいシーカーだ」
声からしてマルフォイだろう。
「父上がチーム全員に買ってあげた箒をみんなで賞賛していたんだ。いいだろう？…だけどグリフィンドール・チームも資金集めして新しい箒を買えばいい。クイーンスイープ５号を慈善事業の競売にかければ、博物館が買いを入れるだろうよ」
その言葉でスリザリン・チームが大爆笑する。
「少なくとも、グリフィンドールの選手は、誰一人としてお金で選ばれたりしてないわ。こっちは純粋に才能で選手になったのよ」
ハーマイオニーがきっぱりと言った。
「…誰もお前の意見なんて求めていない。生まれそこないの『穢れた血』め」
グリフィンドールの生徒が怒りに駆られる。ロンはマルフォイに呪文をかけようと杖を出し呪文を放ったが折れた杖（車で飛んで来た時に折ったらしい）は逆噴射してロンに当たってしまった。
「ロン！ロン！大丈夫？」
ハーマイオニーが悲鳴をあげた。
ロンが口を開くとともにナメクジが出てきた。
スリザリン生は大爆笑し、グリフィンドール生は近寄り心配するものの誰もロンに触れようとはしなかった。
俺は杖をロンに向けて呪文を放つ。すると吐き出していたナメクジが止まった。
「ライカ？」
「一時的だよ。それは無理に止めるよりも呪文が切れるのを待ったほうがいいからね」

「なら、ハグリッドのところへ行こう」
ハリーはそう言ってロンを支えた。
ハグリッドのところへ着く前に呪文が切れたのかロンの口からナメクジが出はじめた。俺達は急いでハグリッドのところに行き、ハグリッドに手短に事情を説明した。
「出てこんより出した方がええ」
ハグリッドはそういってバケツをロンに渡した。
「止まるのを待つほか手がないと思うわ」
ハーマイオニーが心配しながら言う。
「で、やっこさんは誰に呪いをかけるつもりだったんかい？」
「マルフォイだよ。マルフォイがハーマイオニーのことをものすごく酷い悪口を言ったんだ」
「ほんとに酷い悪口さ」
ロンが我慢しながら言った。がすぐに下を向いて吐きはじめる。
「マルフォイはハーマイオニーに『穢れた血』って言ったんだよ」
「そんなこと、ほんとに言うたのか！」
「ええ。本当よ。でも私は何の意味か分からないわ。すごく失礼な言葉だとは思うけど…」
「『穢れた血』はね、マグル生まれに…非魔法族から出てきた魔法使いを指す言葉なんだ」
ロンが顔を上げて話し出した。
「最低の呼び方だよ。今はほとんど混血なんだ。マルフォイみたいに代々魔法使いみたいな『純血』は少ない。それに純血だからといってもネビルみたいのもいる。あいつは鍋をひっくり返しそうだろ？」
「それに俺達のハーマイオニーが使えねぇ呪文は今までにひとっつもなかったぞ」
ハグリッドが素直にそう言った。
「卑しい血だなんて…狂ってるよ。マグルと結婚してなかったら僕達とっくに絶滅していたよ」ロンはナメクジが出ないようにしてい

るのか声が少し小さかった。
ロンのナメクジが止まってからもハグリッドと少し会話をし、ハロウィーン用のカボチャを見てから俺達は城へと帰った。
玄関でマクゴナガル先生にばったり会った。しかし先生はハリーとロンに話し終えるとどこかへと去って行った。
「何だったの？」
「罰則だよ」
ロンが嫌そうな声で言った。
「僕がロックハートのファンレターの返事書きの手伝い。ロンがマグル形式でトロフィー・ルームで銀磨き。フィルチと一緒だってさ」
「…頑張って」
「「あぁーあ」」
俺はそこでハリー、ロンと別れた。
「ハーマイオニーはどうするの？」
「私は図書館へ行くわ」
「そっか。俺は城の中をウロウロしているよ」
「そう…また夕食時にね！」
そう言ってハーマイオニーは図書館へと向かって行った。
（……どこ行こう）
俺は行くあてもなくフラフラと校内を歩く。すると猫の鳴き声が聞こえてきた。
（生徒のペットかミセス・ノリスかな？…しかし臭い…）
段々とその鳴き声が近づいてくる。そして俺とぶつかった。
「うわ、大丈夫か？」
猫はニャーと鳴く。
（ん？…聞いたことあるような）
猫はヒョイと俺の肩に乗って頬に擦り寄って来た。
「フィンラ？」
ニャーと声が聞こえた。
（君だったのね…この臭いのも…）

きっと今俺は嫌な顔をしている。
「フィンラ…君また汚れてきたの？」
なぜならとてつもなく臭いのだ。…鼻が曲がるとはこのことか？
フィンラはニャーと申し訳なさそうに弱く鳴いた。
「……寮へと戻って洗わないとね…」
俺は踵を返してグリフィンドール寮へと向かった。

十九話

ハロウィーンパーティーの今日。俺達はハロウィーンパーティーではなく絶命日パーティーのほうにいた。絶命日パーティーとはグリフィンドール寮つきのゴースト、首無しニックが死んだ日のパーティーだ。しかし食べ物はすべて腐っていて周りは全てゴースト。気分が良いものではなく、しかも食べれる食事がないので俺達はタイミング良くパーティーを抜け出した。

デザートが残っているかもしれないというロンの言葉で大広間へと向かっていたがハリーが突然止まる。

「また、あの声だ。…ちょと黙ってて」

しかし俺には何も聞こえなかった。

「こっちだ」

そう言いハリーは駆け出した。ハリーは3階に上がり、3階をくまなく走った。ハリーはいきなり立ち止まり床はは水浸しだった。

(ん?あ!ミセス・ノリスがぶら下がっている…趣味?)

「見て…『秘密の部屋は開かれたり。継承者の敵よ、気をつけよ』ってなんだろう?」

「ハリー…此処から去ろう。此処にいるのを見られない方がいい」

ロンがそう言う。

しかし回りははもう生徒で溢れていた。

「なんだ、何事だ?」

生徒を掻き分けてフィルチがやって来た。

「…わたしの猫だ!ミセス・ノリスに何があった」

フィルチが金切り声で叫んだ。

「アーガス!」

ダンブルドアと数人の先生方がやって来た。ダンブルドアは俺達を通り過ぎ、また戻ってきた。その時に降ろしたのかミセス・ノリスを持っている。

「アーガス、一緒に来なさい。ポッター君、ウィーズリー君、ヒブカ君、グレンジャーさん。君たちもおいで」
「校長先生、私の部屋が1番近いです」
「ありがとう、ギルデロイ」
俺達とロックハート、セブルスとマクゴナガル先生、それにフィルチでロックハートの部屋に向かう。
部屋に着いてからダンブルドアは机にミセス・ノリスを置き、調べ始める。
皆静かにしていたのだがロックハートだけは違った。
「猫を殺したのは、呪いに違いありません――たぶん『異形変身拷問』の呪いでしょう。何度も―」
「猫は死んでない」
(死んでいるならば魔力はないしな…何かあったのか)
俺は皆がミセス・ノリスが死んだと言うので何かあったということを悟りつつロックハートの話しを遮った。
「その通りじゃ。アーガス猫は死んでおらんよ」
「死んでない?なら、どうしてこんなに―こんなに固まって、冷たくなって?」
「石になっただけじゃ。ただし、どうしてそうなったのかはわしには答えられん」
「あいつに聞いてくれ」
フィルチはハリーの方へと顔を向けた。
「二年生がこんな高度な闇の魔術を使えるはずがない」
「あいつがやったんだ。壁の文字を読んだでしょう。あいつは―私が…私が『スクイプ』だって知っているんだ」
「僕、ミセス・ノリスに指一本触れていません。それに…スクイプがなんなのかも知りません」
「バカな!」
フィルチが悔しそうに言う。
「校長、一言よろしいですかな?」

セブルスがダンブルドアに言い出す。
「ポッターもその仲間も偶然居合わせたねかもしれませんな…しかし我輩はハロウィーンパーティーに四人を見かけませんでした。四人は何故あの場所へ？」
それについてハリーが説明した。絶命日パーティーにいた、ということを。
「それでは何故その後あの廊下へ？」
ハリーが言い淀む。
「疑わしいきは罰せずじゃよ、セブルス」
ダンブルドアが助け船を出した。
「私の猫が石にされたんだ！けいー「治せるよ。フィルチさん」…なんだと？」
「ヒブカの言い通りじゃ。スプラウト先生が最近マンドレイクを手に入られてな。十分に育てば蘇生できる薬を作らせましょうぞ。…よく知っておったのぉ？」
「薬草学の最初の授業でマンドレイクを植え替えたんです」
「そうじゃたか。よく学んでいるようじゃな」
「私が作りましょう」
ロックハートがいきなり言い出した。
「私は『マンドレイク回復薬』なんて眠ったって作れますよ」
「おうかがいしますがね。この学校では我輩が魔法薬の先生のはずだ」
気まずい雰囲気が流れる。
「帰ってよろしい」
ダンブルドアのこの言葉で俺達は部屋から退出した。
俺達は出て行った部屋から離れるまでしばらく話さなかった。
「僕、あの声について話した方がよかったかな？」
「いや、魔法界でも狂気の始まりって言われる。話さなくていいよ」
ロンがハリーにそう言った。
「ねぇスクイプって何？」

ハリーがポツリと聞いた。
ロンがそれを聞いて吹き出す。
「スクイプは魔法使いの家に生まれても魔法が使えない人の事だよ」
「おかしいことじゃないんだけど―これでフィルチが生徒を嫌っている理由が分かったね」
俺が答えた後、ロンが笑いをこらえながら言った。
「もうすぐ零時よ。早く戻りましょう」
俺達は寮へと急いで帰った。
ミセス・ノリスの事件から数日は噂が飛び交いホグワーツの歴史関係の本はすぐに予約で埋まった。
そんな日が続く中、今日の魔法史の授業中ハーマイオニーが手を挙げた。
ビンズ先生は一二八九年の国際魔法戦士条約についての話しをしていたが驚いた気配がする。
「ミス、――あー？」
「グレンジャーです。先生、『秘密の部屋』について何か教えていただきませんか？」
「私が教えしとるは魔法史です。事実を教えとるのであり、ミス・グレンジャー、神話や伝説ではないんですよ」
（魔法史も随分歪んでいるのだが…とくに俺達の時代は…）
「先生！お願いです。伝説というのは必ず事実にもとずいているのではありませんか？」
「ふむ…そんな風にも言えるでしょう。しかしあなたがおっしゃるところの伝説はこれはまことに人騒がせなものであり、荒唐無稽な話しとさえ―」
先生が突然話しを止めた。何故ならクラス全員が先生の話しを寝ずに聞いていたからだ。いつもなら俺以外皆寝ているのだが…
「分かりました。『秘密の部屋』とは…えー、皆さんも知っての通りホグワーツは一千年以上も前――正確な年号は不明であるからにして――その当時の、最も偉大なる四人の魔女と魔法使いたちによ

って、創設されたのであります。創設者の名前にちなみその四つの学寮を、次のように名付けたのであります。すなわち、ゴドリック・グリフィンドール、ヘルガ・ハッフルパフ、ロウェナ・レイブンクロー、そしてサラザール・スリザリン。彼らはマグルの詮索好きな目から遠く離れたこの地に、ともに城を築いたのであります。なぜならば、その時代には一般の人々の恐れるところであり、魔女や魔法使いは多大なる迫害を受けたからであります。数年の間、創設者達は和気あいあいで、魔法力を示した若者たちを探出しては、この城に誘って教育したのであります。しかしながら、四人の間に意見の相違が出てきた。スリザリンと他の三人との亀裂は広がって行った。スリザリンは、ホグワーツには選別された生徒のみが入学を許されるべきだと考えた。魔法教育は、純粋に魔法族の家系のみに与えられるべきだという信念を持ち、マグルの親を持つ生徒は学ぶ資格がないと考えて、入学させることを嫌ったのであります。しばらくして、この問題をめぐり、スリザリンとグリフィンドールが激しく言い争い、スリザリンが学校を去ったのであります。…信頼できる歴史的資料はここまでしか語ってくれんのであります。しかしこうした事実が『秘密の部屋』という空想の伝説により、曖昧なものになっておる。スリザリンがこの城に、他の創設者にはまったく知られていない、隠された部屋を作ったという話しがある。…その伝説によればスリザリンは『秘密の部屋』を密封し、この学校に彼の真の継承者が現れるときまで、何人もその部屋を開けることができないようにしたという。その継承者のみが『秘密の部屋』の封印を解き、その中の恐怖を解き放ち、それを用いてこの学校から魔法を学ぶにふさわしからざる者を追放するという。しかし歴代のホグワーツ校長、女校長方が何も発見できなかったのだからして―」

ガタンと俺は席を立った。

「あーミスター、ヒブカ?」

俺はニッコリと笑顔で言った。

「先生。サボります」

「ちょとミスタ―…」
俺は聞かず教室を出て行く。考えているのは先程の話しだった。
(秘密の部屋!?サラザールも厄介なものを…)
ちっと舌打ちをすると注意された。
「ライカ。舌打ちはしないほうがよいのぉ。後、いま授業中ではないのかな?」
横の階段からダンブルドアがやって来た。
「こっちは舌打ちしたくなる。くそっ…サラザールめ。厄介なものを置いて行きやがって」
「その様子じゃと聞いたようじゃな。…校長室へおいで」
俺はイライラした気分でダンブルドアについていく。
ダンブルドアが校長室の入口のガーゴイルに合言葉を言う。するとガーゴイルから階段が現れて校長室へと続いた。
ダンブルドアは校長室へ入るなり言い放つ。
「で、タツキは秘密の部屋がある、と?」
「さぁな。だがある確率は高い。サラザールはマグル生まれを嫌っていたからな…あるならば、多分…」
「分かるのかのぉ?」
「…いや、残念ながら」
俺はとっさに嘘をつく。といっても分かっていることなど少ないが。
「そうかの?」
「…あぁ。悪かったな」
「何がじゃ?」
「意外と俺達の事がおまえらにまで迷惑がかかっている、ということで」
「仕方ないじゃろう?お主らはそんな事分かりもしなかったんじゃから」
「ダンブルドア…もし出来たならサラザールは俺達でシバいていたんだが…なにせあいつらは今はもう死人だからな、残念―……いや、何でもない」

「それは止めてほしいの。仮にも友人じゃろう？」
「ふっ…やるなら友人だからって遠慮はしない」
「逆じゃろうに…」
はぁーと俺はため息をつく。
「…出来るかぎり俺も捜索する…というか多分ハリー達が突っ込むだろう」
「なんじゃと！？何故じゃ？」
俺はスッパリと言ってやる。
「グリフィンドール生だから」
「……そうじゃたな。もうそろそろ授業も終わる。帰ってよい」
「じゃ失礼する」
俺は校長室を出て校長室のドアを閉める前に言った。
「本当に悪い」
俺は返事を聞かずドアを閉めて授業も無いので寮へと戻った。

二十話（前書き）

…短いです。かなり。
最低限２ページ…というか基本、原作の一章を一話にまとめているのですが、今回は何故かこんかにも短くなりました。
謝ります。
すみませんでした。

二十話

俺は今「嘆きのマートル」と言われるゴーストと一緒に女子トイレにいる。何故か、と言われればハーマイオニーに連れて来られた、と言うしかない。

「ライカ！遅くなっわ。ごめんなさい」

ハーマイオニーがハリーとロンと一緒にトイレに入ってくるなり言った。

「別にいいけど…どうしたの？」

「私達、『秘密の部屋』についてマルフォイ達に聞こうと思って。で、ライカに手伝って欲しいの」

「手伝うのはいいけどもしかしてポリジュース薬？」

俺はハーマイオニー聞いた。

「えぇ、そうよ」

ハーマイオニーはそう言って本を開く。

「こんな複雑な魔法薬は初めて！えーとクサカゲロウ、ヒル、満月草にナワヤナギ…この程度なら生徒用の棚にあるわ。二角獣の角の粉末、毒ツルヘビの皮の千切り…これはどこで手に入れるのかしら？後、変身したい相手の一部」

「なんだって？」

ロンが鋭く言う。

「どういう意味？変身したい相手の一部って、僕クラップの足の爪なんか入ってたら絶対飲まないからね」

「足の爪でもいいけど、一般的には髪の毛だね。相手に気づかれないで取れるし。まぁ入れるのは薬が出来た後、１番最後だから。ハーマイオニー魔法薬は俺が作るよ。君達じゃまだ危ないし…後二角獣の角の粉末と毒ツルヘビの皮の千切りはセ……スネイプの個人用の保管庫にあると思う」

「ライカ…あなた私より物知りよね？」

「そうかな？」
「魔法薬はライカに任せるわ。私より上手だし、正確で早く作れるしね」
「でもこれは変えようないよ。一ヶ月はかかる」
「一ヶ月も？マルフォイはその間にマグル生まれの半分を襲ってしまうよ！」
「マルフォイが犯人とは限らないし、一ヶ月は必要。嫌ならしないよ？」
「うぅ…分かったよ」
しかし土曜日のクィディッチでハリーは腕を骨折し、その骨折した腕をロックハートによって骨を抜かれたため一日入院することになった。

二十一話（前書き）

明日から修学旅行へ行きますので金曜日まで更新出来るかどうか分かりません。
楽しみにしている方には誠に申し訳ございません。
遅くても金曜か土曜には更新します。

二十一話

コリンが石になったと聞いて俺とハーマイオニー、ロンは数日前のトイレにてポリジュース薬に取り掛かっていた。するとハリーがトイレにやって来た。そして昨日医務室にて聞いた事を話してくれた。その内容は『秘密の部屋』は以前にも開かれた、ということだった。

（俺が今分かるのは怪物は多分バジリスク…そして犯人はサラザールと同じ蛇語使いということだけ…）

サラザールは蛇語使い―パーセルマウス―だった。俺達に気づかれないようにするにはそれしかない。俺達は蛇語使いではないから。そして蛇でここまで出来るのはバジリスクしかいない。

（場所が分からないだよな…）

薬はすぐには出来ずその日は帰った。二週目にはマクゴナガル先生がクリスマス休暇に学校に残る生徒を調べに来た。

（…もうそんな時期か）

俺は勿論、ハリー、ロン、ハーマイオニーもリストに名前を書いた。

魔法薬の授業がある前日の夜、ハーマイオニー達と談話室で話し合った。

「必要なのは、気をそらすこと。私達の誰か一人がスネイプの研究室に忍び込んで必要なものをいただくの」

「ハーマイオニー…悪いけど俺は出来ない」

「え？どうして」

「俺は案外スネイプに見られてるんだ。…ほら作るのとか早いだろ？暇な時は別のを作ったりしているからスネイプも結構見ているんだ。だから俺は出来ない」

「なら、私しかいないわね。ハリー、ロン。あなた達は騒ぎを起こし五分くらい足止めして」

ハリーは大分落ち込んだ雰囲気をだしていた。
次の日、魔法薬の授業はいつもと変わらず進んだ。セブルスは俺以外のグリフィンドール生に意地の悪い批評をし、スリザリン生はそれを聞いて嘲笑う。しかしスリザリン生は俺にはそんな事はしない。俺は普段ハリー達と一緒にいるが友好の幅が広くスリザリンやレイブンクロー、ハッフルパフにも仲は良い。あとは俺の魔法薬の手際や他の授業での知識などは敵わないと思ったのか逆にグリフィンドールの俺に聞きに来たりする。
俺は課題の『ふくれ薬』を作り終えて提出をしていた。ハリー達のためにセブルスを少しでも留めて置かなければいけないのでセブルスに聞く。
「スネイプ先生！少しいいですか？」
俺が手を挙げて言うとセブルスは俺のところへと来た。
「スネイプ先生…早く終わったんですが何かすることはないですか？」
「そうだな…新しい薬を作る時間はないから―」
セブルスが話しをしているときにゴイルの大鍋が爆発しクラス中に雨のように『ふくれ薬』が降り注いだ。生徒達が悲鳴を上げる。
「静まれ！静まらんか！…薬を浴びた者は『ぺしゃんこ薬』をやるからここへ来い。誰の仕業か判明した暁には…」
しかし生徒がセブルスのところへと押しかけセブルスは最後まで言えなかった。
生徒達の『ふくれ』が収まった後、セブルスはゴイルの大鍋へ近づき何かを取り出した。
「これを投げ入れた者がわかった暁には我輩が、まちがいなくそやつを退学にしてやる」
それから十分後に終業ベルがなり俺はトイレへと向かった。
トイレにてハーマイオニーが持って来た材料を入れる。
「あと、二週間だね」
俺がそう言った後、ハリーが落ち込みながら言った。

「絶対スネイプは僕がやったって気づいてる」
「スネイプは君がやったって証明できやしない。あいつにいったい何が出来る？」
ロンが慰めるように言った。

それから一週間後、掲示にて『決闘クラブ』の張り出しがあった。
そして今夜は第一回目だ。俺はハリー達に連れて来られた。
会場にはかなりの生徒が集まっていた。
しばらくして舞台に上がったのはギルデロイ・ロックハートだった。
（あ！…あいつ相手にやられるな）
「静粛に！…皆さん私がよく見えますか？声が聞こえますか？…結構！結構」
「ダンブルドア校長先生から私が小さな決闘クラブを始めるお許しをいただきました。私自身が数え切れないほど経験してきたように、自らを護る必要が応じた場合に備えて皆さんをしっかり鍛え上げるためです。では助手のスネイプ先生をご紹介しましょう」
（やられるどころじゃないな…飛ぶかもしれない）
「スネイプ先生がおしゃるには、決闘についてごくわずかご存知らしい。訓練を始めるにあたり、短い模範演技をするのに手伝ってくださるとご了承いただきました。ご安心を。魔法薬の先生が亡くなったりはしませんから」
二人は礼をして杖を剣のように前に突き出して構えた。
「ご覧のように、私達は作法に従って杖を構えています」
ロックハートは説明をする。
「三つ数えて最初の術をかけます。もちろん、どちらも相手を殺すつもりはありません」
「一――二――三」
セブルスが叫んだ。
「エクスペリアームズ！武器よ去れ」

案の定ロックハートはぶっ飛び壁にぶつかった。
ロックハートはよろめきながら言った。
「さぁ、みんな分かったでしょうね！あれが『武装解除の術』です。ご覧の通り私は杖を失ったわけです。―あぁミス・ブラウンありがとう。スネイプ先生、確かに生徒にあの術を見せようとしたのは素晴らしいお考えですしかし、遠慮なく一言申し上げれば、あまりにも見え透いていましたね。止めようと思えばいとも簡単に―」
セブルスが殺気だっているのが分かったのかロックハートはこう言った。
「模範演技はこれで十分！二人組になって…」
だがすぐに中止が言い渡される。理由は生徒達が三カウントを待たずに始めた事と杖を取り上げるどころではなかったからだ。
「非友好的な術の防ぎ方を教えするほうがいいようですね。―スネイプ先生とライカ・ヒブカにお願いしましょう」
「「は？」」
「…ロックハート先生。ヒブカは生徒ですぞ？医務室送りなるのが当たり前ですが、それでも？」
セブルスは動揺…というかしたくないのがまるわかりに伝わる。
「スネイプ先生そうはなりません。ヒブカは各教科でも優れていると聞いています。私の授業でもそうですしね。ヒブカいいですか？」
「え？いや、でも―」
「では、スネイプ先生とヒブカにやってもらいましょう。ヒブカ、こちらに」
（この野郎ぉぉぉ）
俺はセブルスのいるところへといく…というか引きずられた。ロックハートに。
「ヒブカ。いいですか？杖をこうして―」
ロックハートは何やらクネクネしながら俺に話す。
（…やるならコイツが良かった。遠慮なく逝かせるのに）
「先生だから遠慮などしなくていいですよ！」

ロックハートがこう言って少し離れた。
「ロックハート先生、ああ言ってるんですが良いんですかね？スネイプ先生？」
「……あぁ」
すごく嫌そうにセブルスは答えた。それに俺は笑顔で言い放つ。
「じゃよろしくお願いします。スネイプ先生。生徒の俺は遠慮などしませんから」
「……」
俺はセブルスと礼をして杖を構える。
「一――二――三」
「エクスペリアームズ！武器よ去れ！」
「プロテゴ、インセンディオ！」
セブルスが叫び武装解除の呪文を放ったので俺は盾の呪文と同時に火の魔法を出す。
セブルスの放った呪文は見事に跳ね返りセブルスへ向かって行く。
そして俺の放った魔法も。
「くっ…プロテゴ」
「アクシオ！エクスペリアームズ！」
俺は弾かれるのを想定していたのでセブルスが盾の呪文を放った後に次の呪文を放つ。盾の呪文によって弾かれた呪文はその辺に当たり、火の呪文のだったので燃えはじめた。セブルスの武装解除はさすがに消滅した。
「くっ…アグアメンディ！水よ！」
セブルスがそう叫んだ。しかし杖は水を出す前に俺の呼び寄せ呪文で俺の方へ来た。
「な！？」
そしてセブルスは武装解除呪文に当たりロックハート同様にぶっ飛び壁にぶつかった。
「終わり、だね。スネイプ先生？」
俺は杖を振って燃えていた火を消した。

（大分手加減したがセブルスでぶっ飛んだ…生徒を相手に出来るか？これ…）

「……素晴らしい。だがレベルが高すぎますね…ハリーとマルフォイにしてもらいましょうか」

ロックハートが今度はハリーとマルフォイを引きずりだしてきた。

「ライカ…」

不安そうにハリーが言った。

「大丈夫だよ。…スネイプみたいにはならないと思うし、ハリーならマルフォイをやっつけられるよ」

実力的にはまだあまり差はないはずだからまぁなんとかなるだろうと俺はハリーを励ます。

「…分かった。マルフォイを倒してくるよ」

「その調子で頑張れ」

俺はハリーとマルフォイから少し離れる。

「一――二――三」

「サーペンソーティア！ヘビ出よ！」

マルフォイが呪文を使い蛇を出した。シューと攻撃態勢な声が聞こえる。

「我輩が追い払ってやろう」

「私にお任せあれ」

セブルスが蛇を追い払おいとするとロックハートが名乗りあげた後にバーンと蛇に呪文が当たる音がしたがその後ビシャという床に当たる音が聞こえた。

（…宙に飛ばしただけか！……なら俺が始末をするか？）

俺が始末するかを考えている間にハリーがシューシューと話した。

会場が静まり返る。

（…蛇語使い…か）

俺はハリーに近づき蛇を燃やしてからハリーを連れて会場を後にする。

ロンとハーマイオニーも急いでついて来た。

急いでグリフィンドール寮の談話室まで戻り、椅子に座る。
「君はパーセルマウスなんだ。どうして僕たちに話してくれなかったの？」
ロンが口を開き尋ねる。
「僕がなんだって？」
「パーセルマウス…蛇と話せる人の事だよ。蛇語使いは蛇語―パーセルタング―を使い蛇と話すだ。魔法界にもそうそういない能力だよ」
「蛇語？」
「あぁ。普通の人からはただ単にシューシューとしか聞こえないんだ」
「でもどう止めたかで問題になるの？」
ハリーは会場の雰囲気を思い出したのか不思議そうに聞いてくる。
それにハーマイオニーが答えた。
「問題になるの…どうしてかというと、サラザール・スリザリンは蛇と話しが出来ることで有名だったからなの。だからスリザリン寮のシンボルは蛇でしょう？」
「そうなんだ…今度は学校中が君の事をスリザリンの曾々々孫だとかなんとか言い出すだろうな」
「だけど僕は違う」
「それは証明しにくいことね…スリザリンは千年ほど前に生きていたんだから、あなただという可能性もありうるのよ」
「ハリーはサ…スリザリンの子孫じゃないよ」
俺はハーマイオニー達の話しをスッパリ切る。
「証明はないでしょう？ありえない事でもないし…」
ハーマイオニーが不思議そうに聞いてきた。
「スリザリン家は有名だし、ちゃんと家系図も残ってる。そこにハリーの両親は乗ってはいないし大体スリザリン筋ではなくても蛇語使いはいるよ。それだけで決めるのは浅はかだね。…最も此処まで知っている生徒は少ないから、ハリー…君、明日から覚悟してたほ

うがいい」
その日はそれで解散して皆、自室へと戻って言った。

二十二話

決闘クラブの次の日にジャスティンと『ほとんど首無しニック』が襲われた。そのおかげで生徒達がパニックになりクリスマス休暇はほとんどホグワーツに残らなかった。
おかげでいつもよりも静かなクリスマスの朝を迎えられた。…女子トイレで。
何故トイレかというともう少しでポリジュース薬が出来るから最後の仕上げのためにトイレに篭っていたのだ。おかげで『嘆きのマートル』とも仲良くなった。
「マートル、ハーマイオニーにもうすぐで出来るから最後の相手の一部を調達して、って伝えてくれる？」
「分かったわ。ハーマイオニーね？」
「うん。ありがとう」俺は結局一日中トイレにいるはめになった。なぜならハーマイオニー達が来たのは夜だったから。
「ライカ！取って来たわよ！」
「じゃ三人分に別けようか」
「三人？ライカは」
ハリーが不思議そうに聞いてきた。俺はコップによそいながら言う。
「材料が三人分しかないからね。それに出来る限り飲みたくないし…後で君達から聞くよ」
ハリー達にポリジュース薬を渡す。それにハリー達は取って来た相手の一部を入れた。
「うぇー…きっと嫌な味がするよ」
「ちょと待って…個別に飲まない？皆小柄ではないし…」
ロンの後にハリーが続けて言った。
「そうね。ライカ悪いけど見張りを頼めるかしら？」
「分かった」
そう言った後三人は個別トイレの中でポリジュース薬を飲んだ。

しばらくしてハリーがトイレから出て来た。
「二人とも大丈夫？」
声はハリーの声ではなくてゴイルの声だった。
「あぁ」
そしてクラップの声も聞こえる。
「上手くいったようだね。…ハーマイオニーは？」
「二人とも先に行って。私は行けない」
「「ハーマイオニー？」」
「行って！時間を無駄にしないで。１時間しかないのよ」
「ハーマイオニーの言う通りだよ。ポリジュース薬は１時間しか持たない。早く行ったほうがいい」
二人はうろたえながらも去って行った。
「ハーマイオニー…もしかして動物の毛を入れた？」
「…えぇ。ロープについていた毛を取ったんだけど猫の毛だったみたいなの」
「これに動物の毛はダメだからね…とりあえずハリー達が戻って来るまで待とうか？」
「……そうね。」
それからは何も話さずに、ただ二人が帰ってくるのを待った。
「ライカ！ハーマイオニーは？」
１時間、二人がトイレに戻ってきて最初にロンが話す。
「まだ中にいるよ」
そう言うとハリーがハーマイオニーのトイレの前で言った。
「ハーマイオニー！話したい事があるんだ！出てきてよ」
「帰って！」
「ハーマイオニー？」
ハリーに答えたのはマートルだった。
「オォォォー見てのお楽しみ。ひどいから！」
マートルが俺の近くで楽しそうに言った後、ハーマイオニーがゆっくりと開けて出て来た。

「あ、あれ猫の毛なの。ポリジュース薬には動物の毛は入れてはいけなかったのに…」

ハーマイオニーは今動物に近くてけれど人間みたいな姿になっているはずだ。

例えばしっぽやヒゲが生えてたりする。

二人がハーマイを見て息を呑むのが聞こえた。

「医務室に連れて行ってあげるよ。マダム・ポンフリーはうるさく追及しない人だし…」

ハリーがこう言うもののハーマイオニーは頷かず、医務室へと向かうのにかなりの時間がかかってしまった。

ハーマイオニーは数週間医務室に入院するだけですんだ。

（まだかかるかと思っていたが…）

ハーマイオニーが医務室から退院したころにハリーは一冊の本を見せてくれた。

俺は手にとり確認する。ハリー達はハーマイオニーを交えて話し合っていた。

（……日記？しかし何も書かれていないが…）

俺は日記を裏返して触れてみる。すると下の方に何か書いてあった。

（…T・M・リドル名前か？）

俺は頭の中にある名前と照らし合わせる。

（リドル…リドル…ん？リドル？もしかして…）

俺は一人の人に行き着いた。俺の記憶が正しければT・M・リドルとはウ〝ォルデモートだ。

「ハリー！その日記をすぐに捨てて」

「え？」

ハリーがキョトンとした声を出した。

「その日記は…あー俺の知り合いの日記なんだ。でももう要らないから代わりに捨てといてくれない？」
「え？…分かった」
ハリーは納得していないみたいだったが返事をしたので俺はそれ以上何も言わなかった。

月日が過ぎていってあっという間にバレンタインの日。俺は朝食のため大広間へと入ると何やら紙吹雪が舞っていた。
（ロックハートか…）
俺はため息をつきながらグリフィンドールのテーブルに座った。その直後にロックハートが叫んだ。
「バレンタインおめでとう！皆さんをちょと驚かせようと、私がこのようにしました。それだけではありません」
ロックハートがそう言うなり手を叩くと小人が十ニ人大広間に入って来た。
「私の愛すべき配達キューピッドです！今日は学校中を巡回して、皆さんのバレンタイン・カードを配達します。そして先生方にもお祝いムードにはまりたいと思っているはずです！スネイプ先生に『愛の妙薬』の作り方を見せてもらってはいかがです？フリットウィック先生ですが『魅惑の呪文』について、よくご存知ですよ」
俺はそれを聞いて小人対策を練る。
（とりあえず、教室まで乱入してきたら姿を消す呪文をかけるか…）
俺は教室までは隠し通路で行くことにして大広間を出た。
その日の授業は荒れた。毎時間ごとに小人は現れて生徒にカードを配り始める。おかげで先生方はイライラしていて時間雰囲気も悪いし、俺も何回も自身に魔法をかけたから授業が終わった頃にはクタクタで疲れ果てていた。

（あいつはろくな事をしないな…）
こう思ったのは俺だけではないはずだ。

二十三話

次の日、ハリーが昨日体験したことを話してくれた。
昨日ハリーは日記に自分の名前を書いたらしい。そしたら日記に書いた名前は消えて代わりに挨拶とトム・リドルという名前が浮かび上った。
ハリーはリドルに『秘密の部屋』について尋ねたところ五十年前に『秘密の部屋』は開き、トム・リドルはハグリッドを犯人だと言った。当時リドルは人望があったため疑われずグリッドは退学処分になり、リドルは犯人を捕まえたことから表彰された。
とのことだった。
（俺としては開けたのはトム・リドルだと思うがな…あいつはサラザールの子孫だ。蛇語使いであってもおかしくはない…というか、捨てて無かったのか…）
ハリー、ハーマイハリー、ロンもこの事で話し合っていた。
「ハグリッドのところに行って、全部聞いてみたらどうかしら？」
「いいと思うよ。その方が早いし」
だがやはりまだ直接問いただすのは恐いのか誰かが襲われないかぎり、ハグリッドには何も聞かないことでこの話しは終わった。
何事もなく復活祭の休暇中では来学期の授業選択を決めることになった。『数占い』『古代ルーン文字』『占い術』『マグル学』『魔法生物飼育学』とかいろいろな選択がありハリー達は悩んでいた。
俺は全教科出来るのでハリー達に合わせるだけで何も悩まなかった。

復活祭の休暇が終わりクィディッチの試合の日、ハリーの部屋から日記が消えていたということを聞いた。
俺はその事を考えながらクィディッチ競技場に入った。
「この試合は中止です」
マクゴナガル先生がアナウンスをながした。

「全生徒はそれぞれの寮の談話室に戻りなさい。そこで寮監から詳しい話しがあります。できるだけ急いで」
俺はマクゴナガル先生の元へ行くとハリーとロンがいてマクゴナガル先生はこう言った。
「あなたも一緒に来た方がいいでしょう」
マクゴナガル先生について行って城へ戻り、医務室で先生は止まった。
「また襲われました。二人一緒です」
医務室のベッドにはハーマイオニーがいた。
「「ハーマイオニー！」」
「二人は図書館の近くで発見されました。二人のそばに落ちていたものです」
マクゴナガル先生はそう言って鏡を差し出した。
（鏡？多分バジリスク対策だろうが…あいつは城全体に動けたか？）
「グリフィンドール塔まで送りましょう…私も生徒達に説明しないといけません」
俺はグリフィンドール塔にマクゴナガル先生達と行きながら考えた。
城全体に動くことが出来る訳を…
（城全体にあるもの？…あの蛇が通れ、かつ移動できる方法…！パイプか！パイプは確か…）
なにかが繋がりそうなところでグリフィンドールの寮に着いてしまったので思考を止める。
「全校生徒は夕方六時までに、各談話室へ戻ること。それ以降は決して寮から出てはいけません！授業時には先生が必ず一人引率します。トイレもです。クィディッチの練習、試合も延期です。夕方は一切、クラブ活動は禁止です」
先生が談話室から出て行った後に、皆はいろいろと憶測混じりで話し出す。
「ライカ！今夜ハグリッドのところへと行こう」
「分かった。ロンも？」

「もちろんさ」
夜まで俺達は気づかれないように行動し、真夜中に寮を抜け出した。
俺達はハグリッドのところへと無事に着き、戸を叩く。
「おぉ…三人ともこんなところで何しとる？」
ハグリッドはそう言いながらも中へと入れてくれた。
「ハーマイオニーのこと、聞いた？」
ハリーが上の空のハグリッドに聞く。
「あぁ…聞いた。たしか―」
いきなりハグリッドは無理矢理俺達を端にやり『透明マント』をかけた。
「喋ったり、動いたりするんじゃねえぞ！」
ハグリッドは俺達にそう言ってから戸を開けた。
「こんばんは、ハグリッド」
声の主はダンブルドアだった。ダンブルドア以外にもう一人、小屋に入ってきた人物がいた。
「コーネリウス・ファッジ、魔法大臣だよ！」
ロンが小声で話した。それをハリーがたしめる。
「状況はよくない。すこぶるよくない。来ざるをえなかった。四人もやられて始末に負えん。本省が何かしなくては」
「ダンブルドア先生様、知ってなさるでしょう。俺は…」
「コーネリウス、これだけはわかって欲しい。わしはハグリッドに全幅の信頼を置いておる」
「しかし…アルバス、ハグリッドには不利な前科がある。こちらも何とかしなければ学校の理事達がうるさい」
「もう一度言う。ハグリッドを連れていったところでなんの役にも立たんじゃろう」
「…わたしにも立場がある。ハグリッドは連行する」
「俺を連行？アズカバン【魔法使いの牢獄】じゃ―」
しかしハグリッドが言い終わる前に一人の男性―ドラコの父、ルシウス・マルフォイが部屋に入ってきた。

「校長がここだと聞いたものでね」
「わしになんの用があるというかね？ルシウス？」
ルシウスは長い羊皮紙をダンブルドアに見せながら言い放った。
「私達理事から『停職命令』がだされた。ここに理事全員の署名がある」
ファッジが驚愕しながら言う。
「おぉ…ルシウス、待ってくれ。ダンブルドアが『停職』…今の時期にそれは」
「校長の任命、停職も理事会の決定事項ですぞ。ファッジ」
「ダンブルドアは今回の連続攻撃を止められなかったのであるから…」
「ルシウス、待ってくれ！ダンブルドアでさえ食い止められないなら―誰ができる？」
「それはやってみなければわからん」
「それで！何人脅した！何人に脅迫させて―「ハグリッド」…先生」
「わしは理事達が退陣を求めるなら、退こう。しかし、本当に学校を離れるのはわしに忠実なる者が一人もいなくなったときだけじゃ。覚えておくがよい。ホグワーツでは助けを求める者には必ずそれが与えられる」
「アルバス、我々は非常に個性的なやり方を懐かしく思うでしょうな。そして後任者が『殺し』を未然に防ぐのを望むばかりだ」
そう言ってルシウスはダンブルドアと共に小屋から出て行った。
「あー何かを見つけたかったらクモを追っかけて行けばええ。したらちゃんと糸口がわかる。―後、ファング（犬）に餌をやってくれ」
ハグリッド達も去り戸がパタンと閉まった。

二十四話

ダンブルドアが去ってから学校にはますます恐怖が感染し、いつもの笑い声はなく閑散としていた。そんな中、授業中にハリーが禁じられた森の中へクモが行くのを見ていた。俺達はその授業中の内に夜中にファングを連れてクモの後を追うことを決めた。
真夜中、ハグリッドの小屋からファングを連れだし禁じられた森へと入る。しばらく森の中を歩いているとロンが何かを見つけたようだ。
「クモだ！」
「追ってみよう」
ハリーはそう言い、クモの後を追っていく。
クモを追っていくと洞窟みたいなところについた。
「ここは？…アラゴク…アラゴクいませんか？」
ハリーは何度かアラゴクと呼ぶと大きなクモが降ってきた。
「なんの用だ？人間よ」
「僕たちはハグリッドの友達です。ハグリッドが大変なんです！ハグリッドが『秘密の部屋』の何物かを学生に襲わせたってことで逮捕されてアズカバンに送られたんです」
ハリーが話している間にアラゴクよりは小さいが…子供と同じくらいのクモ達が俺達を囲む。
「昔の話しだ。ハグリッドは退学された。皆がわしのことを『秘密の部屋』に住む怪物だと信じ、ハグリッドが『部屋』をあけ自由にしたのだと…」
「あなたではない？」
ハリーはゆっくり聞いた。
「違う。わしは遠いところから来た。ハグリッドは城でタマゴをかえしわしの面倒をみたのだ。ハグリッドは親友だ。わしが見つかり女の子を殺した罪を着せられたとき、護ってくれた」

「それじゃ一度も誰も襲ったことはない？」
「一度もない。襲うのは本能だが決して人間を傷つけてはいない。殺された女の子はトイレで見つかった。わしは育った物置の中以外見たことはない」
「いったい何が女の子を殺したのですか？」
「我々は！我々はその生き物の話しはしない！」
ハリーは追及はせずに怖ず怖ずと言い出した。
「それじゃ帰ります」
「帰る？そうはならない。久々の新鮮な肉をお預けにはできない。さらば、ハグリッドの友人よ」
その言葉で周りにいたクモ達が襲ってきた。俺はクモを対処していたが俺の周りしか追いつかずロンやハリーが危なかった。
「ハリー、ロン！」
ププゥーと音を上げて何故か車がクモの群れに突っ込んできた。そしてハリーやロンは素早くその車に乗った。
「ライカ！乗って！」
俺は急いでその車に乗り込む。
車は運転しないでもエンジンをかけて猛スピードでクモを引きながら走る。車はクモを引き離すようにドンドンスピードを上げていたがいきなり急停止をし、ハリーとロンはフロントガラスにぶつかりかけていた。
…どうやら森の入り口に着いたみたいだ。
俺達は急いで車から降りて城へと歩く。
「何がクモの後を追え、だよ。ヒドイめにあったじゃないか！」
「でも分かったことがある。ハグリッドは無実だったんだ！」
「あとは死んだ女の子だよ。『嘆きのマートル』だ」
「「え？」」
俺がそう言うと二人は分からなかったのか聞き返す。
「何で？名前なんて言ってなかったよ？」
「もし、今でもトイレを離れていなかったら？」

「「あ！」」
「でも、今は話し合うより急いで帰った方がいいね。―先生達に見つからないように」
その言葉に二人は頷き、俺達はグリフィンドール寮へと向かった。

二十五話

マクゴナガル先生からこんな状態だが今学期テストを行うと聞かされた。だから復習しなさい、とも。俺は復習しなくても平気だがロンとハリーは一生懸命に勉強していた。

俺はハリー達が勉強している間にどうやって抜け出すのかを考えていた。『秘密の部屋』についてはもう分かっていた。唯一殺された…運悪くバジリスクの目を見て死んだ『嘆きのマートル』のトイレだ。

バジリスクは目を見ると死んでしまう。今まで生徒が死ななかったのは鏡やら水やらを通して接バジリスクの目を見たから、石になっただけで済んだのだ。

そんなある日、俺は抜け出すチャンスを見つけ抜け出した。…というか、授業が終わり教室の移動中、引率のロックハートをハリー達があとほんの少しの距離だからと言いロックハートを帰したのだ。―おかげで抜け出せた。

俺は先生に見つからないように慎重に移動していた。

「ライカ！『秘密の部屋』の怪物が分かったんだ」

俺の前方からハリーとロンが俺のほうに走ってきた。俺は二人に近寄り小声で話す。

「しー！知ってる。二人はどう―」

しかし言い終わる前にアナウンスが入る。

「生徒は全員、それぞれの寮にすぐに戻りなさい。教師は全員職員室に大至急お集まりください」

「ハリー、ロン。ここに隠れよう」

俺達は近くにあった洋服掛けに隠れた。

パタパタと足音が駆けた。やがて先生が集まったのかマクゴナガル先生が話し出した。

「とうとう起こりました。生徒が一人『秘密の部屋』に連れ去られ

ました」
「なぜそんなにはっきりと言えるのかな?」
セブルスがマクゴナガル先生に聞いた。
「『スリザリンの継承者』が伝言を残しました。「彼女の白骨は永遠に『秘密の部屋』に横たわるであろう』」
「誰ですか?」
マダム・フーチ先生がマクゴナガルに聞いた。
「ジニー・ウィーズリーです」
ハリーの隣にいたロンが音もなく崩れ落ちた。ジニーとはロンの妹だから仕方がないだろう。
「全校生徒を明日、帰宅させねばなりません」
バタン、と音が響き職員室のドアが開いた。
「大変失礼しました。ついウトウトと―何か聞き逃してしまいましたか?」
職員室へ入ってきたのはロックハートだった。
「なんと、適任者が。ロックハート、女子学生が怪物に拉致された。『秘密の部屋』そのものに。いよいよあなたの出番が来ましたぞ」
セブルスが言い放った後、スプラウト先生、フリットウィック先生と続く。
「昨夜でしたね、たしか、『秘密の部屋』の入り口を知っているとおっしゃったのは?」
「私も聞きましたよ?自信たっぷりに話していましたから」
「い、言いましたか?」
「我輩はたしかに覚えておりますぞ?ハグリッドが捕まる前に怪物と戦うチャンスがなかったのは残念だとかおっしゃいましたかな?最初から自分の好きなようにやらせてもらうべきだったとも」
「わ、私は…何も…」
「それではあなたにお任せしましょう。絶好のチャンスで誰にも邪魔はさせません。一人で取り組むことができます。お望みのようにお好きにどうぞ」

マクゴナガル先生が最後の仕上げといわんばかりに言い放った。
「よ、よろしい。へ、部屋に戻って支度します」
ロックハートが出て行った後にマクゴナガル先生が話す。
「厄介払いができました。寮監の先生方は寮に戻り、生徒に伝えてください。明日一番のホグワーツ特急で帰宅する、と。他の先生方は生徒がいないか見回りをしてください」
俺達は先生方が去って行ってから洋服掛けから出た。
「ロックハートのところに行こう。あいつは『秘密の部屋』へと行こうとしている。僕達が知った事を教えた方がいいだろう」
ハリーがこう言い出した。しかし異論はなかったので三人でロックハートの部屋へと向かった。
ロックハートの部屋に着き、入れてもらうとハリーが一通り室内を見て口を開いた。
「逃げるんですか？闇の魔術に対する防衛術の先生でしょ？」
「この仕事内容にこんな事は書いてなかった」
「学校では何が起こるか分からない。だから時には仕事内容にあわなくてもこなさないといけなかったりするんだよ？先生？それでも本を書いたんですか？」
「本は誤解を招く。醜い魔法戦士が書いて出すよりも私が書いたら売れるんですよ？」
「やっぱり、あんたが体験したことではないか。大方忘却術を使ったんだろ？」
「その通り。私は忘却術には自信があります。気の毒でしょうが三人には忘れてもらいましょう」
「エクスペリアームス！」
俺は素早く武装解除を放つ。見事にロックハートに当たった。
「一緒に『秘密の部屋』まで来てもらおう」
ハリーとロンがロックハートに杖を向けた状態でハリーか言い放った。
俺達はロックハートを連れて女子トイレへと向かった。

女子トイレに入り、俺はマートルに聞いた。
「マートル。君が死んだ時の事を聞いていい？」
「…分からないわ。手洗い近くを見たら死んでたもの」
「ありがとう、マートル。十分だよ」
ハリーが手洗いに寄り、一つだけ蛇がかかれたところに向かって蛇語を放った。
すると手洗い台が動きだし、沈み始めた。手洗い台が消え去った後、太いパイプがむき出しになった。
「俺が先に行くよ。後からロックハートと来て」
「「分かった」」
「私はまだ―」
俺は無視をして先に飛び込む。ハリー達にあまり無理はさせられないため俺はハリー達よりも早く下りる。ふと下りていた長いパイプが終わりほうりだされた。
（よっと…）
上手く着地してトンネルを進む。トンネルのカーブを曲がると広い空間に出た。
（広いな…ん？）
ガツンと何かにぶつかった。
（なんだこれ？）
俺は叩いてみる。するとブスッと音を立てて腕が通過した。
（…バジリスクの抜け殻か）
俺が腕を抜いたと同時にハリー達がやってきた。
「ライカ！早いよ」
「こーいうのはゆっくり行っても変わらないよ」
「だからって早く行かなくてもいいよね！？」
ハリーに続きロンが言った。
「ところでこれはなんだい？」
「バジリスクの抜け殻だよ」
俺はロックハートの質問に答えた。

「そうなのかい？なら私はこの皮を少し持ち帰り三人は気が狂った、とでも報告するよ。―記憶に別れを告げるんだね」
いつの間にかロックハートはロンが持っていた杖を奪い俺達に向けていた。
「オブリビエイト！忘れよ！」
杖は何故か爆発した。その影響で天井が崩れ落ちてきた。そのせいで俺とハリー、ロンとロックハートと別れてしまった。
「「ロン！」」
「僕は大丈夫！でも馬鹿はダメだ。―杖で吹っ飛ばされた。こっちからはいけないよ…何年もかかってしまう」
ハリーはしばらく考えて言い出した。
「ロン！ロックハートて一緒にいて！ライカと先に行く。一時間で戻らなかったら…」
「僕は少しでも岩石を取り崩すよ。そうすれば帰りにここを通れる。だから―」
「それじゃまたね」
ハリーは最後まで聞かずに、俺と先を目指した。
ずいぶんと歩いた後に固い壁があった。…俺は気づかずにぶつかったが…
「いてぇ……ハリー、頼むよ」
ハリーは近づき蛇語を使う。すると壁が消えて先へ進めるようになった。
俺達は先へと一歩踏み出した。

二十六話

俺達はいま広い部屋にいた。俺はユックリと歩き、ハリーはやたら警戒しながら先へ進む。
部屋の奥へと行くとそこに、ジニーが横たわっていた。
「ジニー！」
俺達はジニーの元へと駆け寄った。そのときにハリーは自分の杖を手放した。
「ジニー！死んじゃだめだ！」
ハリーが叫んでいる中、俺はジニーに触り生命確認をする。
（…ん？生きてるな）
「その子は目を覚まさないよ」
ハリーの杖を持って柱にもたれながら青年がこちらを見ていた。
「トム・リドル？―ジニーが目を覚まさないってまさか死ん―」
「ハリー…死んではないよ。危ないけれど」
「その子の言う通り、生きてるよ。かろうじてね」
ハリーはジーとリドルを見ている。
「君はゴーストなの？」
「記憶だよ」
リドルはハリーの質問に丁寧に答えていく。
「…トム、助けてくれないかな？ジニーを運ばないと…バジリスクもいるし」
「ハリー…分かってないの？あいつが誰なのか…」
俺はジニーを診ながらハリーに聞いた。
「え？」
「その子はかなり賢いね。そして状況判断も悪くない―君は何故ジニーがこうなっているのか分からないのか？」
「え？ジニーがこうなった訳？」
「ジニーは誰か分からない人物に心を許し、秘密を打ち明けた。日

記にね。あれは僕の日記なんだ。ジニーは色々心配事や悩みを書いた。大変だったよ…同情したり慰めたり…でもおかげでジニーの魂をもらえた。僕は秘密を知ることで力を蓄えた。そしてジニーに少しその力を与えた」

「…どういうこと？」

「ハリー…簡単に言うとあいつはジニーを操り、今まで事件を起こしたんだ。五十年前のハグリッドの退学もそうだよ」

「君が！？」

「そうだよ…当時ダンブルドア以外は皆僕を信じた」

リドルは一つ息を吸い、また話し出す。

「しかし今や『穢れた血』には興味がないんだ。今興味があるのは君…ハリーだった。…赤ん坊の君は不世出の偉大な魔法使いを破ったのか？何故君はたった一つの傷ですんだのか？」

「どうして君が気にするの？」

「こいつがウ〝ォルデモートだから、だろ？リドル」

俺はリドルに聞いた。

「よく知ってるね君は。僕が知っている魔法使いの中では一番賢いよ。僕はウ〝ォルデモートだ。僕はホグワーツ在学中にはこの名前を既に使っていた。汚らわしいマグルの父の性なんていつまでも使わないよ。母方の血筋にサラザール・スリザリン、その人の血が流れている僕が！だから自分で名付けた。世界一偉大な魔法使いになるようにね」

しばらくしてからハリーが口を開く。

「違う。偉大な魔法使いはアルバス・ダンブルドアだ。君はホグワーツに手出しは出来なかった…」

「ダンブルドアは僕の記憶によって追い出された」

ハリーがそう言った後、美しい旋律が流れる。そしてその旋律の主がハリーに止まった。

「不死鳥…ダンブルドアのフォークスか」

リドルがそう言った後、フォークスは何かをハリーに置いて俺の方

へとやって来た。
「それは…組分け帽子だね」
リドルはそう言い笑い始める。
「さて、ハリー…何故君は二回も僕から逃れられたのか？」
「僕を殺すのを母が食い止めたんだ！」
「…成る程。それはたしかに呪いに対する協力な反対魔法だ。―君自身になにかあったわけではない」
リドルはそう言い、蛇語を使い始めた。
すると石像が動き始めて、バジリスクがシューシュー言いながら出てきた。
（やっぱり、バジリスクか…）
ハリーは組分け帽子を持って逃げはじめる。しかし俺は逃げずにバジリスクに杖を向けた。
「ライカ！バジリスクは目を合わせると死ぬんだよ！」
俺は無視し、バジリスクが襲ってくるのを想定に何を放つのかを考えていた。しかしバジリスクは俺の近くで止まった。
（……？）
バジリスクはシューシューと何度か言ってベロンと俺を舐めた後にハリーに向かって行った。
フォークスもまた一鳴きしてバジリスクを追った。
「君は何者だい？」
「ホグワーツの二年生だけど？」
「なら、その二年生がバジリスクにこう言われる覚えはあるのかな？【貴方達に感謝をこめてありがとう】とね」
（サラザールだけではなくて俺達を知っている？まさか…）
「本当にそう言ったの？」
「此処ではまだ嘘はついてないけど？」
リドルはクスクス笑いながら話す。
「で？君は誰？」
（こいつは日記の中の記憶…ならば本体には知られない）

俺は時間をかけて言った。
「俺が誰か知りたいか？お前が崇拝しているやつの友人かな…」
「ふざけているのかい？」
リドルの声が怒った声に変わり、鋭く睨まれる。
「ふざけてなんかいないよ。俺の名前はゴドリック・グリフィンドール…あのバジリスクが礼を言ったのは拾ったのが俺達だからだ」
「俺達？もしかして…」
俺はリドルに低い声で鋭く言い放つ。
「それは貴様の知るべき事ではない。トム・リドル」
リドルが竦み、一歩後ろに下がるのが気配で分かった。
「…お前の相手は俺ではないだろう？…ハリーがバジリスクを倒しそうだぞ？」
リドルがハリーの方へと向いた瞬間、ハリーは俺達の近くでバジリスクを倒した。しかしバジリスクの牙が刺さって傷付いたのだろう、倒れていた。
「ハリー・ポッター君は死んだ。鳥にもわかるらしい。泣いているよ？僕は君の臨終を見物させてもらおう」
リドルは嬉しそうに話す。
「リドル…もう少し勉強したら？」
「何？……どけ！」
リドルは思い出したようでフォークスをハリーから退かせようとする。不死鳥の涙には癒しの力があるのだ。ハリーの傷はフォークスのおかげで無くなった。
「忘れていたよ。…けれどこれで一対一だ」
ハリーは元々そうするみたいに動き、日記を手にした。
そしてハリーはバジリスクの牙を日記に振り下ろした。リドルの悲鳴が部屋中に響き渡り、やがてリドルは消えた。
ハリーが組分け帽子を拾いに行っている時に俺はジニーの様子を伺っていた。
（……容態の悪化はしていないな。ならすぐに目を覚ますか）

ハリーが組分け帽子を拾い、ジニーの元へ着いた時にジニーが目を覚ました。
「ハリー…あぁハリー…あたし朝食の時に打ち明けようとしたの。でもパーシーの前では言えなかった。う…嘘じゃないわリドルがやらせたのー」
「ジニー…落ち着いて。もう終わったよ。此処から出よう」
「あーハリー…俺は少し残るから、先に帰っていて」
「え?でも…」
「大丈夫。バジリスクもいないし…ね?」
「……分かった」
ハリーとジニーが俺から離れて、来た道を戻って行く。
俺は反対にバジリスクへと近づいて行った。

二十七話

俺はバジリスクに近寄った。
（確かこの辺に…）
俺はバジリスクの尾っぽを目指してバジリスクの体を頼りに歩いていたのだがパシャという音が聞こえて歩みを止める。
（水か…なら残りの体は水の中か…引きずりだすしかないな）
俺はバジリスクを掴みズルズルと引きずりだした。
どのくらいそうしたのかは分からない。ただ気がついたらもうバジリスクの尾っぽの所を持っていた。
（…さてと、調べるか）
俺はバジリスクの右側の尾っぽから手を当てて、頭へと歩いていく。
バジリスクの尾っぽから数メートル離れた所にザリザリする傷痕みたいな感触があった。
（…やっぱり）
「君だったか…」
「タツキはそのバジリスクを知っているのかのぉ？」
俺が呟いた後にダンブルドアが話した。
「ダンブルドア？どうやって…」
「ハリーにちょと協力して貰ってのぉ」
「……」
「で、タツキはこのバジリスクを知っているのかの？」
ダンブルドアは再度聞いた。
「…知っているも何もこのバジリスクは俺とロウェナが拾ったんだからね」
「……拾った？」
「うん。拾った」
沈黙が広がる。どれくらい時がたったのかは分からないが俺は一瞬に感じた。

それから俺はバジリスクに背を向けてダンブルドアと一緒に何故かマクゴナガル先生の部屋へと向かった。
マクゴナガル先生の部屋に着くとマクゴナガル先生に抱きしめられた。
「心配したんです！いくら貴方がゴドリックでもこちらのことを少しは考えて下さい！」
「あーすみません」
マクゴナガル先生が俺を離した時を見てダンブルドアが口を開く。
「悪いがの…ハリー、ロン、アーサーにモリー、ジニーには君が盲目じゃと教えた。バジリスクの事があったからの…」
「あー…まぁアーサーさんにはバレていましたから構いませんよ」
「うむ…で頼みたいことがあるんじゃ」
「頼みたいこと？」
「これじゃ」
ダンブルドアは俺の手の上に丁寧にある物を置いた。懐かしくて、馴染みがあるこの物品は…
「これって…俺の剣じゃ…」
それは俺が昔使っていた剣だった。
「そうじゃ、君の剣じゃよ。ハリーがそれでバジリスクを貫いたんじゃが…血がついてしまっての。わしじゃと洗い流すだけじゃから君に手入れを頼もうと思っての…後、組分け帽子もじゃ。わしらは保管することしか出来ぬからの…」
「分かった。剣の手入れをして組分け帽子を燃やせばいいんだな」
「違う。燃やすのではなくて何か綻びがないか確認をして欲しいんじゃ」
「ちっ…確認すればいいんだろ？夏期休暇にでも剣と組分け帽子の確認に行くよ」
「頼んじゃぞ」
俺は部屋を出ようと扉へ近づく。
「あぁ寮ではなくて大広間にて宴をしておる。行ってみてはいかが

かな？」

ダンブルドアのその言葉を最後に俺は部屋を出た。

大広間へ行くと学年末テストが中止になったとハリー達から聞いた。

そして大広間ではなくグリフィンドール寮にて何故目が見えなかったのを黙っていたのか、と問い詰められた。特にハーマイオニーに。

それから数日を平和に過ごしてホグワーツは夏期休暇へと入っていった。

外伝・隠し事（前書き）

こんにちは、カイラです。
まずこの小説…というかこれから投稿予定されているオリジナルの小説は最近頑張って作ったのですが、なにせテストが近く、頭がバーンと破裂しかけている時に書いたものですので何がしたいのかよく分かりません。
因みに今でも混乱しています。
ので、誤字脱字や何か言いたい事があるなら感想にて書いて下さい。
しかし、上記にもあったようにテストが近いです。
ので更新は二日に一話、４日…今日ですね。６日、８日、１０日、１２日、１４日、１６日、１８日を予定しています。
また、訂正等は余裕があればしますがテストが終了してからになるかもしれません。
こんな状況（二週間くらいですかね？）になりますが英雄後談をこれからもよろしくお願いします。

外伝・隠し事

「何で黙っていたの？」
夜遅く大広間のパーティー会場からグリフィンドール寮の談話室へ戻ってきた時、暖炉近くのソファーに座っていたハーマイオニーに問われた。
「は？……何が？」
俺は何を黙っていたのかが分からなかった。…だって君達に話していない事なんて沢山あるし。
「盲目だって事よ！」
ハーマイオニーは信じられない、と付け加えて言った。
「……ああ、そういえば…」
「そういえば、じゃないでしょ！そんな大事な事を話さなかったなんて！もし何かあっても盲目だって事を知らずに何も対応出来なくて、手遅れになってからでは遅いのよ！」
ハーマイオニーは息をつく間もなく話した。
「先生方は皆知っているんだけど…」
「先生が常に側にいるわけないでしょう！？」
「ハーマイオニーの言う通りだよ。もし何か事件でも巻き込まれたらどうするんだい？」
ハーマイオニーの次にロンが話した。
「事件なんてそんなに巻き込まれないよ？」
俺は笑顔で言う。…俺がもし巻き込まれたら、その犯人を殺すなり、痛みつけるなりする。
「「「そんなの分からない（でしょ）（（だろ））！？」」」
「そうかな？……でも俺は盲目だからって態度が変わるの嫌いなんだよね。日常生活には支障は出ないように訓練したし。…だから、態度は変えないよね？」
俺は不安になりながら聞いた。

「…分かったわ。今までと何一つ変わらない。私も、ハリーも、ロンも」

俺はその言葉に安心した。だからかポツリと漏らした。

「もう、癖みないになったな……」

俺達が生きた時代は容赦が無かった。どんなに幼い子供でも当て嵌まれば殺される。…だから俺達は“全て”を隠したんだ。…そうやって生きたんだ。

「何が“癖”なの？貴方に癖なんてあったかしら？」

聞こえていたのかハーマイオニーが聞いてきた。

「何でもないよ」

俺は笑いながらごまかした。

「とりあえず、もう隠し事はないよね？」

ハリーが俺に聞いてくる。

「うん。ないよ」

俺は笑顔で嘘をついた。

「なら、もういいわ。ライカも話しにくい事だっただろうし…この話しはもうおしまい」

ハーマイオニーのその言葉でハリー達はそれぞれの時間を過ごし始めた。

―嘘をつく事に罪悪感など、とうの昔に捨ててしまった。

―人を殺す事なんて初めから罪悪感どころかそれが“当たり前”だった。

（でも、そんな“俺”を君達は知らなくていい）

「ライカ？」

考えていたせいかボーとしてしまい、心配したのかハーマイオニーが声をかけてくれた。

「…何でもない。少し疲れたからもう寝るね。お休み」

「「「お休み」」」俺は談話室から男子寮へと階段をのぼっていく。

（そう、知らなくていいんだ）

―“全て”を知るのは俺達だけでいい。

外伝・愚痴をＢＧＭに（前書き）

またまた、番外です。
元々、番外はこちら一つだけでしたが、どうしても前の番外の内容を書きたくてそちらを無理矢理入れました。
次からはアズカバンに入ります。

外伝・愚痴をＢＧＭに

夏期休暇に入り、俺はダンブルドアに頼まれた作業を校長室で行っていた。
最初は俺一人でする予定だったのだがダンブルドアが先生方をお茶会に誘い、先生方は皆それを受けてしまった。
よって今校長室には沢山の先生方が集まっているのだ。
（皆、暇そうだな…）
俺はまず最初に剣から手入れをしていく。
たださえ久々なのに…様々な、というか先生方の愚痴をＢＧＭに、時には会話をしながらの作業になった。
「ありえませんよ！ロックハートは私が水魔の退治の仕方を知らないとでも言いたいんですか！」
「私は『秘密の部屋』について散々話しを聞かされました…」
俺は話しを聞きながら血糊を落としていく。
「そういえば…タツキ。お前本当に『秘密の部屋』を知らなかったのか？」
ふいにセブルスが俺に聞いてきた。
なので俺はつい、ガシャンと剣を落としてしまった。
「あはは…知らなかったよ？サラザールがあんなものを置き土産していてくれたなんて…これっぽっちもね」
剣を拾い、手入れを再開しながら話す。
「あいつにはちゃんと説明して貰ってからシバいてやる！…バジリスクを置くぐらい別に誰も反対しないっつうの！あの寡黙引きこもり野郎！」
「た、タツキ？」
「ロウェナとヘルガにも手伝ってもらって…罰則はやっぱハゲだよね…」
「タツキ…落ち着け。スリザリンにも何か考えがあったのではない

か？」
セブルスが気まずそうに言う。
「……」
「……」
「……」
誰も話さなかった。…きっと考えた結果誰もろくな答えにしかならなかったんだろう。
気まずい雰囲気になったので俺は話題を変える。
「…ダンブルドア。来学期の防衛術の先生はどうなった？」
「そうじゃ！来学期はリーマスに頼もうと思っておる。じゃからセブルス、脱浪薬を頼んじゃぞ？」
その言葉にセブルスが噛み付く。
（やべ……）
俺は道具を床に置いてソロソロとその場を後にする。他の先生方も同じように去っていた。
「ダンブルドア先生！正気ですか？あやつを先生に？」
「うむ。リーマスなら―「反対です。あやつは人浪ですぞ！何をしでかすか―」…セブルス？」
後ろから何やら凄い悲鳴が聞こえるが気にしないで逃げていく。…俺は関わりたくはない。
その日の夕食は少し機嫌のいいダンブルドアと不機嫌なセブルスとで俺達は気まずい雰囲気の夕食となった。
（絶対あれ、ストレス解消入ってるよな？）
こう思ったのは俺だけだろうか？

二十八話

俺は今ワクワクした気分で静かな廊下を歩いている。
（…新刊ゲット！）
図書館の司書、マダム・ピンス先生から今学期入荷した新刊本を借りたのだ。
（教師は生徒より早く新刊を読めるから得だよね！）
まぁ先生方の中でも俺が先に新刊を借りるのだが…
「…今回は当たりかな？」
「そうだといいね」
（は？…この声は）
「…リーマス？」
今俺がいるところより少し先の廊下は左右に別れており、リーマスは右側からヒョコリと現れた。
「久しぶり。タツキ」
「久しぶり。確かまだ来る予定じゃなかったよね？」
俺の記憶が正しければリーマスがホグワーツに来るのはまだ先だったはず。
「早く来たんだよ。することもないし、まぁ下見に来るだけだしね。タツキは今生徒だって聞いたけど本当？」
「本当。ダンブルドアに言われてね…ハリーとは友達だよ。あ！名前違うから気をつけてね？」
「ライカ…だったけ？」
「うん。…生徒役はやっぱ大変だよ」
リーマスはクスクス笑いながら言った。
「タツキ、僕たちと同じ事を言ってる」
「事実だからね。少し気を抜くとボロが出る…というか気を抜かなくても出てる。決闘クラブではセブルスをぶっ飛ばしたし…」
「セブルスを？それは凄い」

「手加減はしたんだけどね…」
「……タツキ。それは我輩が弱い、と言いたいのか？」
ふとセブルスの声が聞こえた。
「リーマス…今セブルスの声がしたけど……気のせい？」
「さぁ？僕には聞こえなかったけど？」
「おい！タツキ！」
「…リーマス、幻聴まで聞こえてきたよ。どうしよう、俺聴力ダメになると困るんだけど…」
「…いい加減にしろ！我輩でからかうな！」
俺は諦めて後ろにいるセブルスに顔を向ける。
「ちぇ…セブルス、そこは乗らないと」
「そうだよ。ここは乗らないと」
俺とリーマスは同じ事を言う。
「誰が乗るか！リーマス！貴様守護霊でホグワーツの門を開けてほしいと送りながらなんでそこにいないんだ！」
「いや…ほら開いてないだろうと君に早めに送ったんだけどダンブルドア先生が門のところで待っていてくれてね。だから遠慮なく」
「何が遠慮なく、だ貴様！それならそうと守護霊を送れ！」
「あー……」
リーマスは笑いながらゴメン、ゴメンと謝っていたがあれはきっとワザとだ。セブルスをからかうために送らなかったに違いない。
「はぁ…タツキ、いつからダイアゴン横丁に行くんだ？」
セブルスはリーマスのことを諦めて俺にダイアゴン横丁宿泊について聞いてきた。
「んー…早めに行くかな？」
「どれくらいだ？」
「まぁ2、3週間前ぐらい？」
「……一体何をするつもりだお前は？」
俺は笑顔で答える。
「散策」

「……」
「なんで黙るの？」
「どうせ、あちこち隈なくうろつくのだろう？」
「うん」
「…ノクターン横丁には行かないよね？」
俺達の会話を聞いていたリーマスが俺に聞いてくる。
「（この姿では）行かないよ」
「なら、気をつけて散策するんだよ？」
リーマスはため息をつきながら言った。
俺達は大広間へと移動しながら話す。
「あ！リーマスは初の授業何するの？」
「秘密ー。タツキは授業を受けるからね。君だけ早く教えてもつまらないし…」
セブルスがふと言う。
「…そういうお前は初めての授業は何したんだ？」
シーンと静まり返る。
「あー…済まない」
セブルスが済まなそうに言った。
「うーん…セブルスが教えてくれたら話してもいいよ」
「話すよね？セブルス？」
リーマスはきっとあの黒い笑顔で言い放ったのだろう。
なぜならセブルスの声が震えながらこう言ったから。
「……分かった」
セブルスは一息ついて言い放った。
「お前が初めて受けた授業と何一つ変わらん」
「マジで？」
「今の会話の何処に我輩が嘘をつく利益があったと言うのだ？」
「……さすがスリザリン生」
「……我輩は答えたぞ？」
セブルスは嫌みみたいに言ってきた。

「うーん…初めてした授業は『変身術』だったな。…多分。授業が始まった時に何個か変身させて、それからアニメーガスを見せて…木の棒を配って銀の細い棒に変えさせたかなぁ？」
「マクゴナガル先生とあまり変わらないんだね」
リーマスが驚いたように言った。
「そうだな。まぁマクゴナガル先生はアニメーガスまでしてないけど…」
俺はギィと大広間の扉を開ける。
「生徒はどのくらいいたの？」
「生徒？少なかったよ。数十人くらいだったな……てあれ？」
大広間は誰もいなかった。
「…ねぇセブルス…俺リーマスを大広間に連れて行くように聞いたんだけど…」
「？我輩は何も聞いてはいないぞ？」
俺は大広間を出て一旦止まってから息を吐き、大きく吸ってから大声で叫んだ。
「アルバス・ダンブルドア、何処にいやがるぅぅぅ！」
俺はダンブルドアの魔力を探しながら走り出した。
「糞じじぃぃぃ、覚悟しろよぉぉぉ！」
夕食時に俺はマクゴナガル先生に説教をされた。

二十九話

俺は今『漏れ鍋』に泊まっていた。いくら教員でも今は生徒なのだからいちいちホグワーツ特急でホグワーツに行かなくてはいけない。…めんどくさいけどな。

ハリーは数日前の夜、最近アズカバンを脱獄したシリウス・ブラックと会わず、無事『漏れ鍋』へとついていたらしい。

（…シリウスが本当に犯人なのかは疑問だが、会わずに済んだならよかった）

「ライカ！次は本屋だよ」

今はハリーと授業の材料や教科書を買いに来ていた。最もハリーと再開してから毎日ダイアゴン横丁に来ており、クィディッチ店や悪戯専門店など色々な店に飽きることなく俺を引きずり回してくれていたが。

ハリーは書店の前の鉄の檻の前で止まっていた。

「『怪物的な怪物の本』…」

「ハリー？」

「あ…ライカはこの教科書を持って無かったよね？」

ようやく追いついた俺にハリーはこう聞いた。

「持ってないけど？」

「ホグワーツ生かい？」

ハリーと店の前で話しているとお店の店長が聞いてきた。

「「はい」」

どいて、と店長は手に手袋を嵌めて檻へ近づいていく。

「あの、僕は持ってます」

ハリーがそう言うと店長はホッとため息をつく。

「俺は自分で取るのでいいですよ」

しかし俺がこう言った瞬間すごい反応を示した。

「ダメだ！今日は五回も噛まれて―」

俺は話しを聞かずに檻の中へと入る。
（『怪物的な怪物の本』は確か背表紙を撫でたら大人しくなるが、普段は暴れまくる本だったな）
俺が檻に入ると一冊の本が俺に向かって飛んできた。
（こいつでいいや）
俺は飛んできた本をヒラリとかわし捕まえる。そして背表紙を撫でた。すると本は途端に大人しくなる。
「い、一体何を…」
檻を出た俺は疑問に思っている店長を無視して店内へと入る。ハリーが慌ててついて来たのが気配で分かった。
「ねぇライカいまどうやったの？」
「秘密」
「えー…教えてくれてもいいだろう？」
「あの本を“開けば”何をしたか分かるよ」
「あの本は開いたら噛み付くよね！？」
俺はハリーの事を無視して次の教科書『未来の霧を晴らす』がある占いコーナーに移動する。ハリーも何も教える気はないと分かったのか追求はして来なかった。
それから十分後、俺達は書店を出て『漏れ鍋』へと向かう。今日の買い物は全て終えたのでハリーと夕食を食べて部屋へと帰った。

ホグワーツへと向かう日の前日にハーマイオニーとロンに合流出来た。
「「ハリー、ライカ！」」
「ん？ハーマイオニーとロン！久々だね」
「私たちずっとあなた達を探していたのよ？」
「そうなの？」
ハリーがビックリしたように答えた。
「えぇ……そうだ！私、動物が欲しいの。ハリーにはヘドウィグがいるし、ロンにはエロール、ライカにはフィンラがいるし…」

ハーマイオニーは俺の肩にいるフィンラを見ながら言った。
「エロールは僕のじゃない！家族全員のふくろうだ……でも僕もこいつを見てもらわないと…」
ロンはスキャバーズを持ちながら言った。
（……どうするかなぁ）
俺はフィンラを撫でながら悩んでいた。あいつをどうやってロン達から引き離すのか…
いい考えが浮かばないまま俺達は魔法動物ペットショップへと向かった。
ショップに着きロンが『ネズミ栄養ドリンク』を買っている時にロンの頭の上に何が着地し、そのせいでスキャバーズが逃げてしまった。
「スキャバーズ！」
ロンとハリーはスキャバーズを追って店を出て行った。
「な…何なのかしら？」
俺はしゃがみ込みロンの頭に着地した動物を抱き抱える。
「猫だよ。でもね―」
「かわいい！どうしたんですか？この猫？」
俺が話し終える前にハーマイオニーは定員と話し始めた。
（猫…じゃなくてニーズルっていう種類の魔法生物なんだけどな…）
ちなみにこの生物はもう数が少ない。
ハーマイオニーは定員とこのニーズルの話しをしている。
「どうやら買い手が付いたみたいだね…君も彼女を認めているんだろ？」
ニャーと鳴いた。
「ライカ！私クルックシャンクス買ったわ！」
「クルックシャンクス？いい名前だね？」
俺は抱えていたクルックシャンクスをハーマイオニーに渡した。ハーマイオニーは大事にクルックシャンクスを抱える。
「この子売れ残っていたの…」

「そっか…」
俺とハーマイオニーがショップから出るとちょうどロンとハリーに会い、四人で『漏れ鍋』へと帰る。
『漏れ鍋』ではウィーズリー夫妻も来ていて、夕食はテーブルを繋げ八人で食べた。モリーが俺に対してやたら気を使っていたが楽しく過ごせた。
夕食後、俺は借りている室に戻った。明日は魔法省が車を手配してくれたようでその車に乗ってキングス・クロス駅に行くことが決まった。
「…フィンラ」
フィンラはニャーと鳴きながら俺の近くに来てくれた。
「君はもう分かっているよね？シリウスはあいつを求めて今学期ホグワーツにやって来る。だからあいつを捕まえて欲しいのとシリウスに接触して欲しい。…いいね？」
〈分かりました〉
ふいと聞こえた声。
「……え？」
しかし此処には俺とフィンラしかいない。魔力の反応も俺とフィンラだけだ。
（…気のせいか）
「……じゃ、寝るか。お休み、フィンラ」
フィンラはニャーと鳴いて寝所へと戻って行った。
それを確認してから俺もベッドへと入った。

三十話

キングズ・クロス駅に行くのに本当に魔法省から車が出された。ご丁寧に運転手付きで。

『漏れ鍋』から車に移動するだけなのだがアーサーがやけにあちこちを見回して警戒をしていた。

（…誰かが狙われているのか？）

魔法省から派遣されただろう運転手はやけに早くキングズ・クロス駅へと送ってくれ、駅には二十分前にはついていた。

俺達はマグルに気づかれないようにプラットホームへと数人ずつで向かった。

時間には余裕があったがプラットホームでモリーが昼食のサンドイッチを配ったり、アーサーがハリーを連れて行ったりしてホグワーツ特急へと乗ったのは出発ギリギリだった。

「君たちだけに話したいことがあるんだ」

ハリーは汽車に乗るなりこう口を開いた。

「なら、人がいないコンパートメントを探さないとね」

俺のこの言葉でコンパートメント探しを始めた。しかしコンパートメントは何処も開いてなく、最後尾に一人乗っている所しか無かった。

俺達が入るとギュウギュウになるので俺はコンパートメントに寝て座っているリーマスの膝の上に座った。

「「「ライカ！？そこ男の人が座っているから（わよ）！」」」

三人が小声で教えてくれる。

「あぁ…寝ているから構わないでしょ？此処に五人は狭いし」

「良くないわよ！迷惑でしょ！座るなら私の上に座って！」

しかしさすがに女の子の上には座れないのでこのまま三人を無視して俺はリーマスの上に座った。

「ライカが座っているこの人、誰だと思う？」

ロンがリーマスの方を見ながら聞いた。
「ルーピン先生」
ハーマイオニーが即座に名前を答える。
「どうして分かるんだい？」
「カバンに書いてあるわ。Ｒ・Ｊ・ルーピン、ってね」
「何を教えるんだろう？」
「「闇の魔術に対する防衛術」」
俺とハーマイオニーの声が重なった。
「ハリー…俺達に話したいことって何？」
俺はハリーが始めに言った話したいことについて聞いた。
「実は、シリウス・ブラックが脱獄した理由が僕らしいんだ。あいつは僕を殺すために脱獄した。脱獄前にあいつがホグワーツにいるってに呟いていたらしい」
（シリウスがハリーを殺す？違うと思うな…シリウスは多分あいつを狙ってるんだろう…）
ハーマイオニーとロンは驚愕し、そしてハリーよりもブラックを恐れているようだった。
しばらくシリウス・ブラックの話しをしていたが次第に話題が唯一魔法使いの村、ホグズミードへと変わっていった。
三年生になると選択教科と別にもう一つ、出来る事がある。それがホグズミードへ行ける事だ。行くには保護者の許可が必要だがホグズミードには子供達が興味をそそるお店がいっぱいあるのだ。ロンも『ハニーデュークス（お菓子屋）』の話しをずっとしていた。
するとハリーが沈んだ声で話す。
「見てきたら、僕に教えてくれる？」
「どういうこと？」
「ハリー…もしかして許可貰えなかった？」
「…そうなんだ。叔父さんはしてくれなかったし、魔法大臣もしてくれなかった」
「まぁ、必要なのは魔法大臣じゃなくて保護者の許可だからね…ま

ぁ俺も行けないし」
「ライカも！？」
「うん。まぁ俺はあまり興味ないし…」
「マクゴナガルか誰かが許可をしてくれるよ。無理ならフレッドかジョージに聞けばいい。あの二人は秘密の抜け道なんて沢山知っているんだから…」
「ロン！」
ハーマイオニーが厳しく注意する。
「ブラックは雑踏のど真ん中であんなに大勢を殺したのよ！私達がいればブラックが尻込みするなんて思ってはダメ！」
ハーマイオニーはクルックシャンクスの籠の紐を開けようとする。
「そいつを出したらダメ！」
しかしクルックシャンクスはヒラリと籠から出た。クルックシャンクスは俺の荷物に近づいてフィンラを入れていたケージを器用に開けた。
（ロンに考慮して入れてたんだけど…）
フィンラはリーマスを踏みながらスルスルと俺の肩にのぼってきた。なので俺はフィンラを撫でる。
「…クルックシャンクス、おいで」
クルックシャンクスは悩んでいたみたいだが俺の膝の上に乗ってきた。
「…いいこだね」
俺がクルックシャンクスを撫でているとフィンラが膝の上へと下りて来て「僕も撫でてよ！」と言わんばかりに擦り寄ってきた。
「…ライカ、あなた動物の扱い上手いのね？」
「そう？」
二匹はゴロゴロ幸せそうに俺の膝の上に乗っていた。…最も俺もリーマスの上に乗っているけどな。
汽車は順調に走っていたが急に速度を落とし、止まった。
「一体なにが起こったんだ？」

ハリーがそう言った。
「……誰か乗り込んでいるみたいだ」
ロンが呟いた。
いきなりコンパートメントのドアが開いた。
「ごめんね！どうなったか―」
「きゃ…」
「誰なの！」
「此処にロンいない？」
「ジニーにネビルなの？」
……どうやら明かりかなにかが消えてお互いが確認できないらしい。
「…タツキ、なにがいるか分かるかい？」
俺の耳元でリーマスが小さく、本当に小さな声で聞いた。
「吸魂鬼が乗り込んでる」
俺は小声でリーマスに返した。
その時、コンパートメントのドアが滑るように開いた。
（吸魂鬼か）
するとハリーが倒れた。
「ハリー！…っ」
吸魂鬼は俺の方へと向かってくる。
（…俺をやる気か？甘いな）
「「エクスペクト・パトローナム！守護霊を来たれ」」
俺とリーマスの声が重なった。
ちなみにリーマスは俺が落ちないように支えてくれた。
先程の呪文が聞いて吸魂鬼は去って行ったのか、リーマスが口を開いた。
「皆大丈夫かい？…君も」
「「「「はい」」」」
ハーマイオニー達は一斉に答えた。
「…大丈夫、です」
その声量に驚きながら俺も答えた。

「…君はかなり才能があるんだね。守護霊呪文を扱えるなんて…そうだ、皆これを食べて…」
リーマスは皆にチョコレートを配った。俺には褒美だとかで市販のカエルチョコレートをくれた。
（吸魂鬼の後にチョコレートは効くしな…でも相変わらずいつも持ってるのか？）
「話しはその子が起きてからね」
俺はリーマスからもらったカエルチョコレートを開けて食べた。カードをとり、読み取る。
（……俺？）
俺はカードをジニーに向けて投げる。
「ジニー…あげる」
「ライカまた引いたの？」
「…ゴドリック・グリフィンドール」
「本当によく創設者を引くね…」
「……あ、ありがとう」
ジニーは戸惑いながらも受けとってくれた。
「ウ、うーん？」
「大丈夫かい？」
ハリーが目を覚ましロンがハリーに体調を聞く。
「あぁ…何が起こったの？叫び声は？」
リーマスはバキッとチョコレートを割った。
「食べるといい。気分がよくなる」
「あれは、なんだったんですか？」
ハリーはチョコレートを受取ながらリーマスに聞いた。
「アズカバンの吸魂鬼の一人だ」
「食べなさい。元気になる。私は運転手と話してこなければ…失礼」
「ハリー…本当に大丈夫なの？」
ハーマイオニーが心配そうに言った。
「大丈夫。何があったの？」

「吸魂鬼がぐるりと見回して、したらハリーが倒れた。まぁ吸い取られたからだけど…で俺の方へと来たから……ルーピン先生と倒した」

「吸い取られた？」

「吸魂鬼は幸せの思い出を吸い取るんだよ。…ハリーを狙ったのはまだ分からないけどね」

「誰か…誰か座席から落ちた？」

ハリーはまだ混乱していた。

「いいえ…誰も落ちてないわ」

リーマスがタイミングよく帰ってきた。

「おやおや、チョコレートに毒なんか入ってないよ…あと十分でホグワーツに着く。ハリー大丈夫かい？」

「はい」

それからは誰も話さず汽車はホグズミード駅に着いた。

俺達は一年生に紛れ込まないようにして馬車道へと出てきた。

「また、頼むね」

俺は馬車を引いているセストラルという魔法生物に話しかける。この生物は特殊で死を見た事がある者のみ見ることが出来る。…なので他の人には馬車が一人でに走っているようにしか見えない。

まぁ俺は魔力によって分かっているのだが。

「ライカ？何話してるの？」

「ごめん、今行く」

俺は馬車に乗り込んでホグワーツへと向かった。

ホグワーツへ着き、馬車を下りて大広間へと向かっている時にマクゴナガル先生に止められる。

「ポッター、グレンジャー、ヒブカ！私のところにおいでなさい！」

俺達は…というかハリーがオドオドしながらマクゴナガル先生について行った。

マクゴナガル先生が連れてきたのは先生の事務室だった。

「ルーピン先生が前もってふくろう便をくださいました。―ポッタ

ー、ヒブカ倒れたそうですね？」
ノックがされ校医のマダム・ポンフリーが入ってきた。
「僕、大丈夫です」
「先生、俺倒れてませんが…」
「またあなた達なの？何か危険な事をしたのね？」
ポンフリーは俺達を見るなりこう言った。
「そうなのですか？…ポッピー、吸魂鬼です。ポッターを襲ったそうで…」
「今に襲われるのはこの子だけじゃないでしょうね…チョコレートを食べた方がいいわね」
「それならルーピン先生が皆に配ってくれした」
ハリーは早く大広間へ行きたいのか話しに割り込んだ。
「そうなの？まともな『闇の魔術に対する防衛術』の先生が見つかったということね」
それから俺達は事務室から出てハーマイオニーが出るのを待ち、一緒に大広間へと向かった。しかし組分けは終わっていた。
ダンブルドアが立ち上がり話し出す。
「おめでとう！…皆にいくつかお知らせがある。ホグワーツ特急での捜査があったから皆も知っての通り、わが校はただいまアズカバンの吸魂鬼を受け入れておる。吸魂鬼は学校への入り口を固めておる。あの者たちがここにいるかぎり誰も許可無しに離れてはならぬぞ。吸魂鬼は悪戯や変装に引っ掛かるシロモノではない。『透明マント』でさえムダじゃ。言い訳やお願いも聞かぬ。奴らに危害を加える口実を与えるではないぞ！」
ダンブルドアは一息つき話し出した。
「楽しい話しに移ろうかの…空席の『闇の魔術に対する防衛術』の先生。ルーピン先生じゃ。もう一人の先生は『魔法生物飼育学』のケトルバーン先生が退職なされたので後任にルビウス・ハグリッドが教鞭をとってくださることになった。―では宴に入ろうかの」
それからはいつものホグワーツで騒がしく一日を終えた。

三十一話

翌日、俺達は最初の授業の『占い学』の教室にいた。
（…何でこの学科？）
ハリー達に選択教科は合わせたが二人がこの教科を取ったのが疑問だった。
「ようこそ。この現世で、とうとうみなさまにお目にかかれてうれしゅうございますわ。おかけなさい。あたくしの子供達よ。さぁ」
丸椅子に座る生徒もいればひじ掛け椅子に座った生徒もいるみたいだが俺達近くにあったテーブルについた。
「『占い学』にようこそ。あたくしがトレローニー教授です。たぶん、あたくしの姿を見たことがないでしょうね。学校の俗世の騒がしさの中にしばしば降りて参りますと、『心眼』が雲ってしまうからですわ」
（心眼…ねぇ。俺は占いは基本信じないからなぁ。ヘルガやロウェナは別だけど…）
あの二人は最早人ではないと思っている。占いが外れた事がないってどんだけだよ！本人曰く、何でもかんでも全て見れる訳では無いみたいだけど有り得ないだろう？普通。外れないとか…
「みなさまがお選びになったのは『占い学』。魔法の学問の中でも1番難しいものですわ。始めにお断りしておきましょう。『眼力』の備わってない方には、あたくしが教えできることはほとんどありませんのよ。この学問では書物はあるところしか教えてくれませんの……」
（まぁ『占い学』だから…多分ハーマイオニーには不向きかな？）
ハーマイオニーは教科書を覚えて、応用している。…けれどこの学科はトレローニーが言った通り教科書は少ししか教えない。特殊で曖昧な学科だ。
「いかに優れた魔法使いや魔女たりとも、派手な音や匂いに優れ、

雲隠れ術に長けていても、未来の神秘の帳を見透かすことはできません。限られたものだけに与えられる、『天分』とも言えましょう。今学期はお茶の葉を読むことに専念いたします。来学期は手相学…夏の学期には水晶玉に進みましょう」

トレローニーはグルリと生徒達を見回す。

「それでは、みなさま。二人一組ずつになってくださいな。棚からカップを持って、あたくしのところへいらっしゃい。紅茶を注いでさしあげましょう。それからお座りになって、お飲みなさい。最後におりが残るところまでお飲みなさい。左手でカップを持ち、おりをカップの内側に沿って三度回しましょう。それからカップを受け皿の上に伏せてください。最後の一滴が切れるのを待ってご自分のカップを相手に渡し、読んでもらいます。『未来の霧を晴らす』の五ページ、六ページを見て、葉の模様を読みましょう。あたくしはみなさまの中に移動して、お助けしたり、教えたりしますわ」

ハリーはロンと組んだので俺はハーマイオニーと一緒にやった。

「ライカ！はい、これよ」

「ありがとう、少し時間がかかるけどいいかな？」

「えぇ」

俺はハーマイオニーの葉を受け取り、ハーマイオニーは俺のを受け取った。

「……これは何かしら？？」

ハーマイオニーはペラペラと教科書をめくって調べていた。

「…ハーマイオニー、今平気かな？」

「えぇ、いいわよ」

ハーマイオニーは調べるのを中断してくれた。

「えーと…今年は忙しい年だね。特に授業。…でも来年には落ち着くから。あとは…相手の秘密を知る…だって。ハーマイオニー分かった？」

「あなたグリムがついていますよ」

トレローニーの声で教室が静まり返った。

（死神犬だって!?）
「グリム、あなた、死神犬ですよ!」
トレローニーは分からない生徒の為に説明をし始める。
「墓場にとりつく亡霊犬です!かわいそうな子。これは不吉の予兆…死の予告です!」
ハーマイオニーが席を立ちトレローニーのところへ行きこうスッパリと言った。
「死神犬には見えないと思うわ」
「こんなことを言ってごめんあそばせ。あなたにはほとんどオーラが感じられませんのよ。未来の響きへの感受性というべきものがほとんどございませんわ。……今日の授業はここまでにいたしましょう」
気まずい雰囲気の中、授業が終わり『変身術』へと移った。
変身術の授業でマクゴナガル先生がアニメーガスの話をし、先生がトラ猫になっても皆ここにあらずの状態だった。
「みんなどうしたんですか?…別に構いませんが私の変身がクラスの拍手を浴びなかったのはこれが初めてです」
「この前の授業が『占い学』だったんです。先生ならこれで分かりますよね?」
「あぁ、そういうことですか…今年はいったい誰が死ぬ事になったんですか?」
しばらくしてハリーが言った。
「僕です」
「分かりました。ポッター、教えておきましょう。シビル・トレローニーは本校に着任してからというもの、一年に一人の生徒の死を予言してきました。いまだに誰一人として死んではいません。死の前兆を予言するのは新しいクラスを迎えるときのあのお方のお気に入りの流儀です。…『占い学』というのは魔法の中でも1番不正確な分野の一つです。私があの分野に関しては忍耐強くないということを、隠すつもりはありません。そして真の予言者はめったにいな

いものです」
ハリーやハーマイオニーはマクゴナガル先生の話しで吹っ切れたみたいだが何人かは今だに不安がっていた。
（そんなに恐れなくてもいいと思うけどな…）
マクゴナガル先生はそれから淡々と授業を進めて、『変身術』の授業が終わった。
大広間で昼食を取り午後の『魔法生物飼育学』へと向かう。
ハグリッドは授業を楽しみにしていたみたいで小屋の前で待っていた。
「さぁ、急げ！今日はみんなにいいもんがあるぞ！」
ハグリッドは皆が集まった後に森に沿って俺達を放牧場へと案内してくれた。
「みんな、ここの柵の周りに集まれ！」
「そーだ…ちゃんと見えるようにしろよ。さーて、イッチ番先にやるこたぁ、教科書を開くこった――」
「どうやって教科書を開けばいいんです？」
マルフォイが冷たく言い放った。
「だ、だーれも……いや、ライカ以外は誰も開けとらんのか…」
「ライカあれを開けたの？噛み付かなかった？」
ハリーが急いで聞いてきた。
「背表紙を撫でればいいんだよ。そしたら噛み付かないよ」
「ライカの言う通りだ。なでりゃーよかったんだ」
ハグリッドはハーマイオニーの教科書で実演してくれた。
教科書の説明が終わったところでハグリッドは魔法生物を持ってきてくれた。
「ヒッポグリフだ。美しいかろう、え？」
しかし俺以外は皆後ろへ下がった。
「もうちっと、こっちゃこいや…イッチ番先にヒッポグリフについて知らなければなんねぇことは、こいつらは誇り高い。すぐ怒るぞ。ヒッポグリフは絶対、侮辱してはなんねぇ。そんなことをしたらお

前さんたちの最後のしわざになるかもしれん。かならず、ヒッポグリフが先に動くのを待つ。それが礼儀だ。それからそばに歩いていってお辞儀をする。それで待ってからお辞儀を返したら触ってもいいってことだ。―もしお辞儀を返さなかったら素早く離れろ。こいつのかぎづめは痛いからな」

「よーし、誰が1番乗りだ?」

ハグリッドは元気よく言った。しかし俺以外の生徒はますます後ずさりをした。

「ハグリッド…俺がやるよ」

誰がしなければいけないので俺が名乗り上げる。

「ライカか…そんじゃバックビークとやってみよう」

俺は柵の中に入りハグリッドはバックビークを放した。

放されるとバックビークは俺の方へとやって来た。俺はその場から動かず向こうがやって来るのを待った。

やがてバックビークはある程度距離が縮まるとユックリと歩いてきた。なので俺もバックビークへとユックリ歩いた。

俺はある程度距離をとるために止まった。バックビークも一、ニ歩くらい歩いて止まった。

俺はバックビークがいる場所へと顔を向ける。するとバックビークは前脚を折りお辞儀をした。

(俺が先だよな?…ま、いいか)

お辞儀をしたので俺はバックビークへと近づく。

「ライカ!止めとけ、ただされ―」

しかし俺はハグリッドの言葉を無視してバックビークへと近づいた。

あと数歩のところでバックビークが近づいてきて撫でてと言わんばかりに擦り寄った。

「こ…こりゃ初めて見たぞ」

ハグリッドも生徒も呆然と見ていた。

(昔から何かと懐かれたな…確か)

しかし皆がこうでは無いので俺はハグリッドに話しかけた。

「ハグリッド！皆こうじゃないだろうからハリーにさせたら？バックビークは大人しそうだし…」
「うん。それがいいだろうな…ハリー」
「…俺は行くけど…ハリーを頼んだよ？」
俺は小さくバックビークに言った後、別のヒッポグリフに近づいた。
結局別のヒッポグリフでもバックビークと同じ事がおきた。
「何でかなー？」
俺はヒッポグリフを撫でながら呟いていた。
しばらくすると生徒達から拍手が、ハグリッドがハリーを褒めるのが聞こえた。
「ハリーも成功したようだね」
俺は撫でているヒッポグリフに話しかけた。
生徒達も少しずつヒッポグリフへと挑戦していった。
「簡単じゃないか」
しばらくするとヒッポグリフを撫でながらマルフォイがこう言うのが聞こえてきた。
「ポッターに出来るんだ、簡単に違いないと思ったよ…お前、全然危険なんかじゃないなぁ？」
マルフォイが言った次の言葉が自身を危険にあわせた。
「そうだろう？醜いデカブツの野獣君」
次の瞬間生徒達から悲鳴が上がった。どうやらマルフォイがヒッポグリフに蹴られたらしい。
（まぁ侮辱したからしかたないが…ハグリッドは糾弾されるな）
マルフォイの家は純血で魔法界で少なからずとも権力を持っている。
そのマルフォイが怪我をした。ハグリッドが糾弾されるのは分かりきっていた。
ハグリッドはマルフォイを抱えて城へと消えて行った。授業を受けていた生徒達も城へと戻っていく。
（……仕方ないな）
「君達は何処から来たの？」

俺はハグリッドの代わりにヒッポグリフをもといた場所まで連れていった。

三十二話

翌日、いつも通り午前の授業を受け、昼食を食べ終わった午後一番の『魔法史』の授業。俺はハリー達に引きずられ1番後ろの日がよくあたる、ポカポカと暖かい席に座った。
その席で先生の長く眠たい話しを聞いていたのだがいつの間にか眠っていた。
「……ん…ぁ？」
俺がおきたのは魔法史の授業が終わり、次の授業が始まって十分後だった。
……それまで誰も俺を起こしてくれなかったみたいだ。運よく次の授業は空いていたがもし入っていたらどうしてくれたんだ。
「くわぁ……寮に戻るか」
俺は欠伸をしながら席を立ち、教室を後にした。
（…誰か起こしてくれれば良かったものを……ん？）
グリフィンドール寮へ向かっている俺の前にリーマスの魔力を感じた。
「ルーピン先生？」
俺は疑問形でいいながら近づいた。
「ライカ？授業はどうしたの？」
「この時間は入っていないんです」
「そうなの？それじゃ一緒に紅茶でも飲むかい？」
「いいんですか？」
「構わないよ」
俺はリーマスの後について行った。
5、6分くらい歩いてやっと『闇の魔術に対する防衛術』の教員部屋についた。
「タツキ、紅茶は―」
「ティーパックの奴から入れて。てかそれ以外は飲まない」

俺は椅子に座りながらリーマスに言った。
リーマスが茶葉から入れた紅茶は飲めるものではない。何をしたら紅茶があんなに甘くなるんだ…
「酷いなぁ……」
「何処が？俺はあの甘い紅茶を飲めたことはないよ？」
「じぁティーパックだね。少し待ってて」
リーマスはそう言い部屋の奥へと消えた。
リーマスが奥へ消えてから数分後、部屋にノックの音が響いた。
「ルーピン、入るぞ」
そう言い部屋に入ってきたのはゴブレットを持ったセブルスだった。
「セブルス、返事くらい聞いてから入りなよ」
「……タツキ？何故ここにいる？今は授業中のはずだが？」
「今の時間は空いているんだ。だからこれからリーマスとお茶会。セブルスも入る？」
「断る。こう見えても忙しいのでな。ルーピンは何処だ？」
「リーマスなら紅茶を用意しに言ったよ」
「……待たせてもらおう」
セブルスは机にゴブレットを置き、椅子に座った。
「それ、脱狼薬だよね？」
「ああ。飲むのを確認するまでが我輩の仕事だ」
「…大変だね。今日は俺がいるから平気だよ？」
だから別にいなくても大丈夫だとセブルスに言う。
「仕事だからな」
「優しいね。セブルスは」
セブルスは不機嫌そうな声で話した。
「優しい？我輩が？」
「うん、優しい。分かりにくいけどね」
「何の話しをしているのかな？」
リーマスが紅茶とお菓子を持ちながらやって来た。
「セブルスがー」

「何でもない。それよりもルーピン、これを今すぐ飲め」
セブルスは俺の話しを遮り、リーマスにゴブレットを突き付けた。
リーマスは少し嫌そうな声を出した。
「それ、何ともいえない味なんだよね」
「それでも飲め」
リーマスは嫌そうにしながらセブルスからゴブレットを受けとった。
リーマスはぐいっと脱狼薬を口に入れる。
「……やっぱり、この味どうにかならないの？」
「無理だな」
スッパリとセブルスはリーマスの言葉を斬った。
「薬を飲んだのだから我輩は帰らせてもらう」
こう言ってセブルスは席を立つ。
「あれ？もう帰るのかい？」
「そうだよ。もう少しいれば？たまには駄犬の話しでもどう？それともジェームズの話しがいい？」
「誰があんな奴らの―」
セブルスが言い終わる前にリーマスが話す。
「いいねぇ。たまには二人の話しでもする？」
「あ！でもセブルスにはリリーの話しがいいかもね！」
「ああ、そうだね。リリーは当時から人気が高かったからセブルスでも話しに入れるね。幼なじみだし」
「だよな。じゃ今日はリリーの話しで―」
セブルスは怒ったように言った。
「我輩はこれで失礼する！」
セブルスがバタンとドアを閉めた。
俺は口を開く。
「…虐めすぎたかな？」
「さぁ？でも大分イライラしていたね」
「うわ、セブルスはリリー大好きだったからなぁ」
「そうだよね。ジェームズといいセブルスといい一途だよね」

「リーマスはいないの？そんな人」
「それじゃタツキは？」
リーマスはやんわりと俺に返す。
「いない。リーマスは？」
再度俺はリーマスに問う。
「僕もいないよ」
「そう？」
俺はリーマスが持ってきたお菓子に手を伸ばす。
「そういえばさ、リーマスはセブルスに謝ったの？」
「…何をだい？」
「え？……謝ってないの？」
「何を？」
リーマスはキョトンと言う。
「いや、リーマスは学生時代セブルスをイジメていた一員だろ？」
「僕は直接していないよ」
（…セブルス、よくリーマスと話せるな…俺なら口きかないぞ）
「いや、明らかにリーマスも入っているよ」
「そう？」
突然部屋にコツコツと音が響いた。
「ふくろう便？」
「そうみたいだね。……ダンブルドア先生？」
リーマスはふくろうから受けとった手紙を読みはじめる。
「……ライカ、僕は校長室へ行くけど、すぐに帰れるから部屋にいる？」
「んー…いや、いいよ。グリフィンドール寮へ帰る」
俺は席を立つ。
「そう？じゃまた今度」
「うん。じゃあな」
俺は今度こそグリフィンドール寮へと帰った。

三十三話

授業が終わった夕方。俺はグリフィンドール寮へと帰るために、レイブンクロー塔の近くを歩いていた。
「見つけました！！」
ドンッと俺にぶつかりながらその子は言った。
「ぶっ……えーと、とりあえず離れてくれる？」
コクン、と頷いてその子は俺から離れた。しかし、しっかりと手は俺の腕を掴んでいた。
「助けてください！！」
「……んーと、とりあえず、説明頼んでもいいかな？」
再びその子は頷いて話し始めた。
「私、レイブンクロー寮、一年生のレイチュル・クロービアと言います。寮へ入りたいのですが……どうやら答えが違うみたいで中へ入れないんです」
（ああ…あれか…）
レイブンクロー寮は他の寮とは違い、決まった合言葉ではなく図画からの問題を答えることで寮の中へと入れる。……しかし、間違えれば中へは入れない。だから寮生は正しい答えを知っている人が来るまで待たなくてはならない。もしくはその子みたいに捕まえるかのどっちかだ。
（いくら知識を徳としているからって、これは止めたほうがいいって言ったんだがな……）
まぁ、もっともロウェナの寮なので俺も軽くしか言わなかったが……
「けれど、なんで俺？まだ出歩いていい時間だし、自寮の先輩とか同級生とかいるだろう？」
「実は……友達二人といたのですが、皆答えを間違えてしまったんです。図画の近くではあまりにも人がこないんでとりあえず一人、見つけてくるということで別れたんですが……廊下に出ても誰もい

なくて…」
「それで俺を見つけた、と」
「はい。ぶつかったのは、謝ります。だから…だから助けてください！」
その子は頭を下げる。
「…俺が解けるかは分からないからね？」
「ありがとうございます！寮はこっちです」
明るい声で言い、俺をグイグイ引っ張っていく。
「ちょ……もう少しゆっくり…」
しかし聞こえていないのかもうスピードでレイブンクロー寮まで引っ張っていった。
（う……受けるんじゃなかった）
「ここです！！」
引き受けたことを少し後悔しながら俺はレイブンクロー寮まできていた。
（ん？…四人？）
「レイブンクロー生は二人だよね？」
「はい。あの二人…スリザリン生とハッフルパフ生は多分友達が連れて来たんだと思います」
…スリザリン生？よくスリザリン生がここまでついてきたな…
「ところで問題は何？」
肝心な問題を聞いていなかったので連れて来た子に聞いた。
「…それが、『不老不死について』です」
「不老不死について？……それ、本当に？」
「はい。それで教科書に書いてあることを答えたんですが…開かなくて…」
…開かない？ここの問題は教科書通りのやつしか出さないようにしていたはずだけど…価値観とかは人それぞれになってしまうからって―
（ん？価値観？）

教科書通りに答えても開かない、だったよな？ならば価値観か？
（確か―……）
昔、不老不死について話し合った事がある。そして皆の意見が合ったんだ。…サラザールがお前らと同じ考えとはな、と嫌そうに言ったから覚えている。
あの時の意見は―
「不老不死に興味はない」
「「「「「は？」」」」」
「何言っているんだい？き―」
ギィィとレイブンクロー寮の扉が開いた。
「え？……嘘！？」
「開いたね。それじゃ」
「あ、あの！」
（ダンブルドアに言ってあの問題外さなくちゃいけないな…）
俺はそこにいた五人を無視してグリフィンドール寮へと向かった。

三十四話（前書き）

えーと…テスト前に作った作品なので一応ざっと確認しましたが何かおかしいところや誤字脱字等ありましたら感想にてご報告お願いします。

三十四話

「どうしようか…」

皆が夜ご飯を食べ終え、個々好きな時間を過ごしているだろうとき、俺は隠し階段に嵌まってしまい抜け出せないでいた。

こうなったのは今日の夕方。最後の授業が終わり、俺は片付けがあるのでハリー達を先に行かせ一人で授業片付けをしていた。

片付け自体はそんなにかからず十分くらいには終わってしまい教室を出た。

そして大広間より先にグリフィンドール寮へ戻ろうと階段を下りようとしていた。しかし俺は階段を下りようとして止まった。

その理由は羊皮紙、だ。今、グリフィンドール寮も教員用の部屋にも羊皮紙を切らしている。そして先程の授業で最後の羊皮紙が使い終わってしまった。

なのでグリフィンドール寮よりも先に私部屋（グリフィンドール寮、教員用の部屋ではなくホグワーツにある俺の部屋だ。完全に私用の。俺だけではなくてサラザールやロウェナ、ヘルガもちゃんとある）に行こうと思ったので階段を下りなかったのだ。

……最も羊皮紙は酸化してしまっているだろうが、無いよりマシだろう。

そう思い俺は階段を上ったのだ。…ただどうやら予測していた隠し階段の位置を間違えてしまったらしくズッポリと腰くらいまで嵌まってしまった。

これが、今の現状だった。

足掻いても抜けないし階段は常に動く。ちなみに階段には生徒に分からないようにしているが規則性はちゃんとある。しかし規則性が分かっていても今の状態とは関係ないが…

「誰か先生が通るまで待つか、助けを呼ぶか、無理矢理抜け出すか―」

「―何をしているんだ、君は」
それとも魔法を使って抜け出すかと言おうとして声が遮られる。
（どこかで聞いた事のある声だな…この魔力も…）
「…誰？」
そう聞いたらため息をつきながら答えてくれた。
「もう忘れたのか…レイブンクロー寮の時にいたスリザリン生だ。
ああ、そういえば名乗ってはいなかったな」
一息ついてから話しだす。
「俺はスリザリン寮四年生、ライル・クロービアだ。グリフィンドールのお前は？」
「クロービア？レイチュル・クロービアとか言うやつの親戚か？」
俺は昨日ぶつかりながらしっかりと頼み事をしたあの子を思い出した。…やっぱり引き受けなければ良かったかな？何か目、つけられたみたいだし。
「ああ…あいつは妹だ」
「へー…俺はグリフィンドール寮のライカ。ライカ・ヒブカ。ちなみに三年生」
「…三年だと？」
ライルは怪訝そうに言った。
「あの答えが分かったのがグリフィンドールってだけで少し気にくわないのに君は三年生だと？」
「…まぁ、ね」
「……そうか」
ライルはぶっきらぼうに言った。
（……助けてはくれなさそうだな…）
というか多分俺が隠し階段に嵌まっていることも忘れているかもしれない。…それかワザと助けないかのどちらかだな。
（…どうしようか…）
そのまま言葉を放さず沈黙が続く。しかし俺は静かすぎるのも落ち着かないので声をかける。

「助ける気はある？」
「……うん？ああ、そういえば君は―」
「どうしたのかな？」
ライルが話し終える前に誰かが乱入してきた。
「…お前か、ソーラス。お前には関係ない」
…どうやらライルはこの乱入者を知っているみたいだな。
「あれ？君はレイブンクローの問題をアッサリと解いた子だよね？
私はソーラス・ティルムよ。ハッフルパフ寮の四年生」
ああ、あの場にいたもう一人の子、か。てか女の子だったんだな。
気づかなかった。
「ライカ・ヒブカ。グリフィンドール寮の三年生。よろしく」
「三年生？よくあの問題が分かったね？私はサッパリ分からなかっ
たのに…隠し階段に嵌まったの？手伝ってあげる」
そう言ってソーラスは俺を引っ張りあげてくれた。
「…ありがとう、助かったよ」
「どういたしまして。でもライル、助けてあげても良かったでしょ
う？」
「ふん、別に良いだろう？」
「良くないわよ！困っているなら助けてあげないと…」
「残念ながら俺はスリザリン生だ。俺はどんな事をしても、俺の望
むようにする。今回は助ける、ということが望む事に無かっただけ
だ」
「そんな事を言って！！」
「別に俺は構わないよ」
「は？」
「え？」
二人はピタリと言い合いを止めた。
俺の勘だが多分ライルはソーラスだから突っ掛かっているのかもし
れないな。
「俺は気にしていないし。助けてもらってこう言うのは申し訳ない

けど痴話喧嘩なら余所でね」
「お前は、ソーラスの味方をしないのか？」
ライルが怪訝そうに聞いてきた。
「何故？君達が痴話喧嘩しているだけだろう？それに俺の介入が必要な程の喧嘩じゃないしね」
俺は一歩、階段を上る。…二人には付き合いきれない。きっと何時までも話し合いそうだ。
「悪いけど俺は急ぐから。ソーラス、今日のお礼に後で何か送るよ。それじゃ、失礼します、先輩方」
俺は二人を置いて私部屋へと向かう。
…あ…そういえば二人共先輩だったな。タメ口だったが…まぁ良いか。何も言ってこなかったし。
俺は隠し階段等に引っ掛からずなんとか私部屋の前までたどり着いていた。
「さて、あの部屋は今どうなっているやら…」
魔法等はかけてなかった気がする。…なら中は相当汚いな。
俺は部屋があまり汚くなっていない事を願ながら部屋の扉を開けた。

三十五話

ヒッポグリフにやられたマルフォイは木曜の『魔法薬学』でやっと姿を現した。マルフォイは半分終わった頃授業に入っていきたがセブルスは減点などしなかった。

今日の魔術薬学は新しく『縮み薬』を作っていた。

俺は既に作り終わっていたので部位変色する薬を作っていた。

「オレンジ色か、ロングボトム」

授業中にセブルスの声がクラスに響く。

「オレンジ色。君、教えいただきたいものだが、君の分厚い頭蓋骨を突き抜けて入ってくるものがあるのかね？我輩はハッキリ言ったはずだ。ネズミの脾臓は一つでいいと聞こえなかったか？ヒルの汁はほんの少しでいいと、明確に申し上げたつもりだか？いったい我輩はどうすれば君に理解していただけるのかな？」

「先生、お願いです私に手伝わせて下さい。ネビルちゃんと直させます」

ハーマイオニーが申し出たがセブルスは許さなかった。

「君にでしゃばるように頼んだ覚えはないがね、ミス・グレンジャー。ロングボトム、このクラスの最後にこの薬を君のヒキガエルに数滴飲ませて、どうなるか見てみることにする。そうすればたぶん君もまともにやろうという気になるだろう」

授業の終わりにセブルスは皆をネビルの近くに集めた。

「ヒキガエルをよく見ておきたまえ。『縮み薬』が出来上がっていればおたまじゃくしになる。造り方を間違えていれば…我輩は間違いなくこっちの方だと思うが…ヒキガエルは毒にやられるはずだ」

セブルスはネビルの鍋から薬を取り出し、ヒキガエルに数滴飲ませた。

ポンと音がなったのでヒキガエルはおたまじゃくしに変わったはずだ。

セブルスはロープのポケットから薬を取り出し、おたまじゃくしに数滴飲ませた。するとまた同じ音がなり、おたまじゃくしはヒキガエルに戻ったはず…

「グリフィンドール五点減点。手伝うなと言ったはずだ。ミス・グレンジャー…授業終了」

授業が終わり、俺はハリー達の後ろの方から『闇の魔術に対する防衛術』へと向かっていた。すると前にいたハーマイオニーが俺の隣にいた。

（逆転時計か……）

ハーマイオニーは全科目を取っている。全て受けるにはそれしかない。しかし頻繁に使用すればするほど混乱してしまう。

…けれどこれはハーマイオニーが自分で決めた事なので俺は何も言わなかった。

「教科書はかばんに戻してもらおうかな。実地訓練をするから杖さえあればいい」

リーマスは教室に来るなりこう言い、生徒が教科書をしまった後に職員室へと案内した。

「さぁお入り」

リーマスは生徒を職員室へと入れた。職員室にはセブルスだけが残っていた。

「ルーピン、開けておいてくれ。我輩、できれば見たくないのでな」

リーマスがドアを閉めようとするとセブルスはこう言いドアへと向かった。

セブルスはドアの近くへと来るとこう言った。

「ルーピン。たぶん誰も君に忠告していないと思うが、このクラス

にはネビル・ロングボトムがいる。この子には難しい課題を与えないようにご忠告申し上げておこう。ミス・グレンジャーが耳元でヒソヒソと指図を与えるなら別だがね」

「術の最初の段階でネビルに僕のアシスタントを務めてもらいたいと思ってましてね。それにネビルはきっと、とてもうまくやってくれると思いますよ」

セブルスは何も言わず職員室を後にした。

リーマスは生徒を奥に案内した。そこには洋箪笥がある。

「さて、洋箪笥の中にはまね妖怪が入っている。まね妖怪は暗くて狭いところを好む。洋箪笥、ベッドの下の隙間、流しの下の食器棚…ここにいるのは昨日の午後に入り込んだやつで実習に使いたいから先生方には放っておいていただきたいとお願いしたものだよ。―ではまね妖怪とは何でしょう？」

「形態模写妖怪です。私たちが1番怖いと思うのはこれだ、と判断するとそれに姿を変えることが出来ます」

ハーマイオニーは素早くリーマスの質問に答えた。

「わたしでもそんなに上手く説明できなかったよ。…ここにいるまね妖怪は何の姿にも変わっていない。何が怖いものか分からないからね。だから今私たちが有利な立場になっているけどなぜだか分かるかなハリー？」

「えっと……僕たち人数がたくさんいるのでどんな姿に変身すればいいか分からない？」

リーマスは順序よく当てていく。

「その通り。まね妖怪を退治するときは、誰かと一緒にいるのが1番いい。向こうが混乱してしまうからね。呪文はリディクラス、バカバカしい！呪文は簡単だが精神力がいる。まね妖怪を退散させるのは笑いだ。君たちはまね妖怪に君たちが滑稽だと思う姿をとらせる必要がある。――ネビル君の出番だ」

リーマスは生徒を少し後ろに下げさせる。

「一つずついこうか。君が1番怖いものはなんだい？」

「……スネイプ先生」
「スネイプ先生か…ネビル、君はおばあさんと暮らしているね？」
「え――はい。でも僕まね妖怪がおばあちゃんに変身するのも嫌です」
「いや、いや、おばあさんはいつもどんな服を着ていらっしゃるのかな？」
「え―と…いっつも同じハゲタカの剥製がついている防止に長ーい緑のドレスに時々狐の毛皮の襟巻き、後はおっきい赤のハンドバッグ」
「よし、ネビル。その服装をハッキリ思い浮かべることができるかな？」
「はい」
ネビルは自信がないように言った。
「ネビル。まね妖怪が出てきたらスネイプ先生の姿に変わる。そしたら君は『リディクラス！バカバカしい』―そして君のおばあさんの服装に精神を集中させる。上手くいけばまね妖怪はスネイプ先生の姿におばあさんの服装になってしまう」
皆が大爆笑で笑っている。
「ネビルが終わったらまね妖怪は首尾よく皆に向かっていく。だから考えてくれないかい？何が1番怖くて、それをどんな姿に変えるか」
部屋は静かになる。
（怖いもの…ね）
俺は自分が何が怖いか――いや、怖いものは分かる。しかし俺には目が見えない。……今回も煩いかな？それとも、別のに変わるか…
「みんな、いいかい？」
リーマスは皆に話し掛けた。
「じゃ三つ数えてからだ。いーち、にー、さん」
リーマスが洋箪笥の取っ手を開けた。
「リ、リディクラス！」

ネビルが上ずりながらまね妖怪に唱える。
どっと笑いが起こる。
（成功したみたいだね…よかった）
その後もリディクラスと聞こえてはクラスが笑う声が聞こえた。
「―ライカ！」
リーマスの焦った声の後、まね妖怪が俺の前にいた。
まね妖怪はすぐには変わらなかった。
―俺が怖い事は二つある。
一つは目の前で友人が死ぬこと。
もう一つは俺達の過去がばれること。
前リーマス達とまね妖怪の授業を受けた時は前者…リーマスが三つの死体だと言っていたから多分サラザール達だと思う。
ポンと音がした。…まね妖怪が変身した音だった。
「キャーーーー」
（煩いっ！）
まね妖怪が変身した瞬間クラス全員が悲鳴をあげた。
リーマスも動くことが出来ない。
（何なんだ？いったい…）
『―が、“赤―の悪―”か！』
微かにまね妖怪から聞こえた声で俺は頭が真っ白になった。
「リディクラス！」
俺はまね妖怪をぶっ飛ばした。…手加減はしたがきっと職員室は壊滅に近い状態だろう。
ちなみにまね妖怪は消滅してしまった。俺の魔力によって。
「…ライカは居残り。宿題、まね妖怪に関する章を読んでまとめて月曜に提出。今日はここで終わり」
ハリー達を含めクラスの皆はすぐに去って行った。
「リーマス…悪い。まね妖怪殺した」
「…それよりも、ライカには何があったのか分かってる？」
（俺の考えがあたっていれば…）

「…多分、人が殺されたシーンだろう？」
「…正解。あれはなんだい？」
リーマスは厳しい声で聞いてきた。
「前と同じで教えられないな」
「…皆に聞かれると思うけど？」
「言い訳は得意だから大丈夫」
ニッコリと笑いながら答える。
「……分かった。帰っていいよ」
リーマスはため息をつきながら言った。
「リーマス、悪い」
俺はリーマスにこう言った後、職員室を出て行った。

三十六話

「あ、れ？」
消灯前、俺はゴソゴソとカバンの中を探る。
「ない、な…フィンラ、部屋に魔法薬が入ってる瓶ない？」
ニャーといいフィンラが部屋の中をウロウロする。しかし瓶は無かった。
「ん～？」
俺はもう一度カバンの中を探す。…が目当ての物が無かった。
「…本気で無くした…」
俺が探しているのは魔法薬だ。俺が作ったやつで飲んだら頭に獣耳やお尻辺りからしっぽが生えたりする…はずだ。人にそのくらいの害しかないはずだがまだ試した事がないので予測に過ぎない。
「……カバンを落としたりは…してないしなぁ。どこ行ったんだ？」
俺は今日の行動を思い返す。
いつも通りに短い時間だが寝て、朝早くに起きた。んで、貯めてる課題も無かったから数年前くらいか？それ以来久々だったが体力トレーニングをしようと外へ出た。
ホグワーツの回りを走って、禁じられた森にて隠し持っていた短刀だがそれで剣の練習もして…のめり込んでいたら朝食の時間だったから慌てて大広間へ入った。
それから此処へ戻ってきて教科書と魔法薬学があるから魔法薬を入れたカバンを持って行ったんだ。しかし俺が曜日を間違えていて魔法薬学は無かった。まぁ別に教科書無くても知っている事ばかりで復習みたいなものだからいいか、ってそのままの中身で授業は受けたはずだ。
昼食を食べてからも午後の授業があるからこちらへは来てないし、中身も変えてない。最後の授業が終わった時にもちゃんと確認した…と思う。

それからは…夕食を食べて談話室へ戻った。んで、確かハーマイオニーにソーラス先輩にお礼の品を渡すんだけど、今何が女子の間で人気ある？って聞いてハーマイオニーに理由を聞かれたから先日の話しをして…そしたら今度ハーマイオニーがホグズミードで見繕ってくれると言ってくれた…よな？確か。

それから課題をするためにカバンの中身を机に―…あーそっか。あの時中々羽根ペンが見つからなくてカバンの中身を一度“全て”机の上に出したんだ。

（なら魔法薬は談話室の机の上か）

俺はそこまで思い出すと部屋を出て談話室へ戻った。

階段を一段ずつ下りて、談話室へ近づくたびに何やら声が聞こえてきた。それもかなりの人数だ。

（おかしいな？消灯前だからあまり人はいないはず…）

人によっては深夜までいるが消灯前で監督生が煩いので残る人が減る。…はずなんだが…

このカーブを曲がれば談話室まですぐ、というところで甲高い声が聞こえた。

「ロン！その鼠の耳としっぽはどうしたの？」

ハーマイオニーの声だ。俺はその内容に足を止める。

「それならこの二人に聞けよ。こうしたのはフレッドとジョージなんだから」

ロンが怒ったような声を出した。

「いや、俺達も知らないな」

「俺達はただ机の上にあった魔法薬をロンに飲ませただけだ」

「机に置きっぱなしにしていた人も有り得ないけど、貴方達二人もそんな中身が分からない薬を飲ませるなんて！」

「それについてはちゃんと毒物かどうかは調べたさ！」

「調べた上でロニー坊やに飲ませたんだ」

二人は自信満々に言い放つ。

「貴方達じゃ安全とは言えないわ！先生にきちんと薬を渡すべきだ

わ！」
「残念ながら」
「ロンに飲ませた分で終わり。残りなんてないよ。一人分くらいしかなかったし」
「なんですって！？」
（…此処で俺が作ったよーなんて言って出て行ったら…）
うん。間違いなくハーマイオニーに叩かれる。
（ゴメン、ロン。君の犠牲は多分忘れない）
俺は回れ右をして部屋へと戻った。

翌日、マダム・ポンフリーからこれはスネイプ先生の方が詳しいでしょう、と言われ、セブルスからは少なくとも一週間はかかると宣告されたロンは顔を俯かせながら授業を受けていた。
…一週間はきっとセブルスの怨念こもった私情のせいだろう。セブルスにはあらかじめあの薬の資料を渡していたので1日で元に戻せる。
（…かといって俺は名乗り上げないけど）
置き忘れたのは確かに俺のせいだが飲ませたのはあの双子だ。置き忘れただけで叩かれたくはない。精々説教、もしくは一晩の書き取りの罰則が妥当だろう。…あれ？こちらの方が酷くないか？でもまぁ、それにプラスして叩かれるよりかは幾分かマシだろう。
よって俺は一週間素知らぬ顔で過ごした。

三十七話

ハグリッドはバックビークの事件からしょんぼりとし、レタス食い虫にレタスを食べさせるだけになってしまった。
（バックビークがどうなるか、だな。…だが多分魔法省は死刑判決だろうな）
今までヒッポグリフの事件は数々あったがみな好ましくない結果で終わっている。
（事例を捏造するか…しかし昔と違い今は難しいだろうな）
俺がヒッポグリフについて考えていると『変身術』の終業ベルがなった。
「皆さん、お待ちなさい」
マクゴナガル先生は教室を出ようとした生徒達を呼び止めた。
「皆さんは全員私の寮の生徒ですから、ホクズミード行きの許可書をハロウィーンまでに私に提出してください。許可書がなければホクズミードもなしです。忘れずに出すこと」
ネビルが自信がなさそうに言う。
「あのー、先生、僕なくしちゃったみたい―」
「ロングボトム、あなたのおばあさまが私に直送なさいました。その方が安全だと思われたのでしょう。さぁ、それだけです。帰ってよろしい」
（ホクズミードか…）
ハリーは残ってマクゴナガル先生にホクズミードについて聞いてみる、と言っていたので俺はさっさと次の授業へと向かった。
あれからハロウィーン当日。結局ハリーは許可が下りず、ホグワー

ツへと残ることになった。まぁ俺も残るけど。
「ライカ！ライカは今日何するの？」
暇なんだろうかハリーは俺に今日の予定を聞いてきた。
「俺は図書館に行くよ。調べ物があるからね。ハリーも来る？」
「い…いやいいよ。僕はウロウロしている」
「そう？じゃまた宴会でね」
「うん。また」
俺はハリーと別れて図書館に向かう。
図書館ではヒッポグリフの前例をもう一度洗うつもりだ。
（でも、死刑が多いんだよねー）
魔法動物は魔法界では立場が悪い。動物が悪くなくても人間を襲えば危険視され、殺されてしまう。
俺は図書館へと着き早速ヒッポグリフの前例を調べに取りかかった。
（やっぱり…なかなかないね）
俺は宴会が始まるギリギリまで調べていたがやはりヒッポグリフは不利な位置にいた。
「ーーーぉぉぉ」
大広間へと移動している時に微かに取り乱した声が聞こえた。
（…なんだ？）
俺は大広間ではなく微かな声を頼りに歩き始める。
5分もしない内に声の主が分かった。グリフィンドール寮入り口の肖像画にいるはずの動く図画―太った婦人だった。
「太った婦人！？どうしたんですか？」
婦人は泣き叫びながら教えてくれた。
「ブラックが――シリウス・ブラックが寮へと入れなかったから襲われたの！」
（シリウス！？）
きっと誰もいないハロウィーンを狙ってあいつを捕まえようとしたのだろうが逆効果になってしまった。
「ありがとう、太った婦人」

今はまだ宴会の途中なはずだ。俺は不死鳥よりゴーストの方がいいと判断して、とあるゴーストの名を叫ぶ。
「ピーブズ！！」
俺は元々、図画の住人やゴーストとは仲が良いが生徒や先生すら手こずるピーブズは俺が在学中に少し脅し―否、虐めたらすぐに言うことを聞くようになった。
今はハリー達と一緒にいるからピーブズに合わないようにしていたが仕方がない。
「お呼びでしょうか！」
とんでもない速さでピーブズは現れた。
「早かったね…君に頼みたいことがある」
「私に出来ることなら何なりと！」
「今、大広間にて宴会があっているのは知っているよね？そこで婦人がシリウス・ブラックに襲われたと言い触らしてくれ。
それと俺からという事は言わないで欲しい。婦人から聞いたと言うことにしといてくれ。―後は君の好きなように。ただし校内は破損しないこと」
「分かりました！」
ピーブズは嬉しそうに大広間へと消えていった。
俺は校内にシリウスの魔力があるか探ってみる。
（1、2階はなし…他もいないな…去ったのか？）
城に長くいるなどシリウスもそこまで馬鹿ではない。
俺はとりあえず大広間へと向かうことにした。シリウスはいないが生徒は多分大広間にて就寝になるだろうと思ったからだ。
「「タツキ！」」
大広間へと向かっているとリーマスとセブルスがこちらへ来ていた。
「二人とも…誰かいたらどうすんだ？」
「そんな事よりシリウス・ブラックが校内にいる。我輩が大広間まで送ろう」
「知ってるよ。ピーブズにああするように言ったのは俺だから」

「知ってるなら早く大広間へ。ハリー達もライカを心配しているし…」
「もうシリウスは城にいないよ」
「「は？」」
セブルスとリーマスが俺を心配してくれたのは嬉しいがシリウスはもういないので別に急がなくてもいい。
「いない、だと？」
「いない。シリウスも馬鹿じゃないしね。校内にはいないよ。でも教師は今日は見回りとかで徹夜だろうけど…」
「それでも我輩が大広間まで送ろう」
「僕は見回りをするよ」
リーマスは校内へと見回りに行きセブルスは俺の手を掴み大広間へと引きずって行った。

三十八話

あれから数日はシリウス・ブラックについてが話題になりシリウスがどうやって城へ侵入したか、という疑問に色々な憶測が飛び交った。

（シリウスはアニメーガスだからな…）

ジェームズやリーマスいわくシリウスは黒色のヘタレワンコへと変身するらしい。

俺が物思いにふけっていると足元でニャーとフィンラが鳴いた。

「ん？どーした？」

今は『闇の魔術に対する防衛術』の授業中だ。満月が近いせいか先生はリーマスではなくセブルスだが。

ピョンとフィンラが俺の膝へと飛び乗ってくる。

…普段は俺の足元で静かに座っているのだが…

「なんだ？これ」

フィンラを撫でるとフィンラは口に羊皮紙を加えていた。

俺が羊皮紙をフィンラから取るとフィンラは元いた場所へと下りた。

（……なんだ？開かずに読み取ってみるか）

俺は怪しかったので羊皮紙を開かずに中を読み取り始める。

――――――――

タツキへ。

この賢い猫が君のだと知った時は驚いた。賢すぎるだろう！本当に猫かそいつ！

…賢い猫といえばもう一匹いるが…

因みに俺は無実だ。マグルを殺したのは俺ではなくあいつだ。

…残念ながら詳しくは話せねぇがな。

けれどそれだけは知ってもらいたかった。

S・Bより

――――――――

（シリウスと接触したのか）
フィンラは知らない内に頼んでいたシリウスへの接触をしていてくれた。
俺はセブルスに気づかれないように羊皮紙を燃やす。
「宿題。各自レポートを書き、我輩に提出するよう。人狼の見分け方と殺し方についてだ。羊皮紙二巻、月曜の朝に提出したまえ」
セブルスのその声にて終業のベルがなり俺は教室を出て大広間へと向かった。

次の日、俺は朝から図書館にいた。
ヒッポグリフの件もあるが俺はセブルスから出された課題をしていた。
（羊皮紙二巻は多くないか？）
俺は書くのに疲れたので羽根ペンを置き、ペラペラと人狼について書いてある本をめくっていた。
（それにしても、少ないな）
セブルスから課題が出されているのに関わらず人がいない。…おかげで分かりやすい本が残っていたのだが。
「…君は見に行かないのかい？」
本めくりも飽きて羽根ペンをクルクル回していたら声がかけられた。
「…ライル？」
「そうだ。君は…いや、ライカだったな。ライカは人覚えが悪いのか？」
まだ魔力に馴染みがなく、分かりにくいだけなんだが…
「まぁ、ちょっとね。…ところで見に行くって何を？」
ライルはため息をついた。
「馬鹿か。…今日は貴様のところのグリフィンドールとハッフルパ

フの試合だろう」
…死合い?やり合いの事か?んー死合い?…いや、試合か!今日はクィディッチの対抗試合だ!
「…忘れてた」
「お前、本当にグリフィンドール生か?」
「あ、はは……」
どうりで人がいないわけだ。皆、クィディッチを見に行っているのか。でも、ライルは…
「あれ?ライルは見に行かなくていいの?」
俺は図書館に来たライルに聞く。
「…課題が多くてな。それに今日はスリザリンではないし、見に行かなくても問題はない。どうせハッフルパフならグリフィンドールが勝つだろう。…グリフィンドールが負ければいいが、実力ならハッフルパフが下だしな」
ライルは俺の前の席に座った。
「あー…そうなるね」
グリフィンドールは結構強いみたいだ。クィディッチは確かに面白いが観戦だとなぁ…此処の中継は生徒がしているから偏ってしまうんだよな。どうしても。だから此処のクィディッチの中継は余り好きではない。よってあまり試合には行かなくなるんだよな。
「お前は今何をしているんだ?」
ライルは自分の取ってきた本…多分参考書だろう…それらを広げていた。
「レポート書くのが飽きたから羽根ペンを回している」
「ちゃんとやれよ!どうせ課題だろう!」
「…どうせ?どういう意味?」
「…此処は図書館だ。此処には普段レイブンクロー生が多いんだよ。フクロウとイモリ生を入れなければ、な」
ライルは呆れたように教えてくれた。
「よくするよ」

「俺からしたらグリフィンドール生は勉強しなさすぎだがな」
「まぁ…ね」
俺は苦笑する。
「…話し過ぎたな。お前も早くやれ」
そう言ってライルは自分の課題を開始した。
（…俺も再開するか）
俺も羊皮紙と参考書を広げ課題をやっつけ始める。
カリカリ、と書いていき、やっと羊皮紙の端っこへ辿りついた時はもう夕食前ギリギリだった。
「…終わった」
「俺も終わった。…もう夕食か、大広間へ行くか」
俺はライルと一緒に図書館を出たが大広間へはバラバラに入った。
…ライルが目立ちたくないとか言って。
俺は一人で夕食を名前は竜季になるらしい。
食べ、大広間から寮の談話室へ戻るとロンからハリーが試合中に乱入した吸魂鬼によって数メートル上空から落ちてしまい、箒は暴れ柳に突っ込んで折れてしまった、と。

三十九話（前書き）

最近アクセス数が二百を越えるようになりました！ビックリです。
まさかこんな多くの人が読んでくださるなんて…
読んでくださる読者様に感謝です。

今回は後書きにアンケートもどきを書きました。
チラッとでも見てくれると嬉しいです。

三十九話

ハリーは医務室に入院し、月曜に退院した。
ハリーは箒の事でそうとう落ち込んでいた。しかし俺にはどうしようもないので放っておいた。ハリーもそうしてほしかったのかしばらくは俺と行動していた。
そして俺達は冬の休暇中も学校に残ることにした。
学期最後の週末にホグズミード行きが許されたが俺とハリーはお留守番の予定だった。
ホグズミード行きの朝、俺はハリーに引っ張られていた。
「ハリー？」
「ライカ！僕たちホグズミードへ行けるんだ！」
「は？」
「フレッドとジョージが『忍びの地図』をくれた。ホグワーツの地図が書いてあって誰がどこにいるか分かるし、抜け道も書いてあるんだ！」
（それ、没収されてなかったっけ？）
ハリーはズンズンと歩いていき、四階にある魔女の像からホグズミードのハニーデュークスの地下へと出た。ハリーは俺を一緒に透明マントに入れてハニーデュークスの売り場へと出た。
ハニーデュークスの奥地にハーマイオニーとロンがおり俺達は二人と合流した。
二人とも驚いた後に『忍びの地図』について話すとハーマイオニーはマクゴナガル先生に渡すべきだと言い張った。
（まぁ、ハーマイオニーが正しいけどね…）
しかしハリーは先生に渡すつもりはない。しかしハーマイオニーはハリーを先生に言いつけたりはしなかった。
それから俺達はあちこちお店に入り買い物を楽しんだ。
「ねぇ、『三本の箒』まで行って『バタービール』を飲まないか？」

ロンがガチガチいわせながら言った。俺達はその意見に賛成し三本の箒へと向かった。

三本の箒はパブで沢山の魔法使いに溢れていた。

俺達は『バタービール』を頼み、飲んでいると三本の箒になんとマクゴナガル先生とフリットウィック先生、ハグリッドに魔法大臣のコーネリウスが入ってきたのだ。

俺達は咄嗟に隠れて先生達の話を聞いた。

「大臣、どうしてかんな片田舎にお出でましになりましたの？」

店主のマダム・ロスメルタがそう大臣に聞いた。

「シリウス・ブラックの件でね。ハロウィーンの日に、学校で何が起こったのかは、うすうす聞いているんだろうね？」

「うわさはたしかに耳にしていますわ」

「ハグリッド、あなたはパブ中にふれ回ったのですか？」

マクゴナガル先生が腹立たしげに言う。

「大臣、ブラックがまだこのあたりにいるとお考えですの？」

「間違いない」

マダム・ロスメルタの質問に大臣はキッパリと言った。

「吸魂鬼がわたしのパブを二回も探し回ったことをご存知かしら？お客様が怖がってみんな出ていってしまいましたわ…　大臣商売あがったりですのよ」

「ロスメルタのママさん。わたしだって君と同じで、連中が好きなわけじゃない。しかし用心に越したことはないんでね…残念だが仕方がない。…つい先程連中に会った。ダンブルドアに対して猛烈に怒っていてね…ダンブルドアが城の校内に連中を入れないんだ」

「そうすべきですわ。あんな恐ろしいものに周りをうろうろされては、私達が教育ができませんでしょう？」

「まったくもってその通り」

マクゴナガル先生の後にフリットウィック先生が続いた。

「にもかかわらずだ。連中よりもっとタチの悪いものから我々を護るために連中がここにいるんだ…知っての通り、ブラックの力を持

ってすればな…」
大臣はこう言った。
「でもねぇ、私はまだ信じられないですわ。どんな人が闇の側に荷担しようと、シリウス・ブラックだけはそうならないと、私は思ってました…あの人がまだホグワーツの学生だったときの頃を覚えてますわ。もしあのころに誰ががブラックがこんなふうになるなんて言ったら、わたしきっと『あなた蜂蜜酒の飲み過ぎよ』って言ったと思いますわ」
「君は話の半分しか知らないんだよ、ロスメルタ。ブラックの最悪の仕業はあまり知られていない」
大臣がぶっきらぼうに言う。
「あんなに沢山殺したよりもっと、悪いことだとおっしゃるんですか？」
「その通り」
「信じられませんわ。あれより悪いことってなんでしょう？」
「ブラックのホグワーツ時代を覚えていると言いましたね。あの人の1番の親友が誰だったか、覚えてますか？」
マクゴナガル先生はロスメルタに聞いた。
「えーえー、いつでも一緒。影と形のようだったでしょう？ここにはしょちゅう来てましたわ―あの二人にはよく笑わされました。シリウス・ブラックとジェームズ・ポッター」
「その通りです。ブラックとポッターはいたずらっ子たちの首謀者。もちろん二人とも非常に賢い子でした―まったくすば抜けて賢かった。しかしあんなに手を焼かされた二人組はなかったですね―」
「そりゃ、わかんねぇですぞ。フレッドとジョージ・ウィーズリーにかかっちゃ互角の勝負かもしれねぇ」
マクゴナガル先生の言葉の後にハグリッドが続けた。
「みんな、ブラックとポッターは兄弟じゃないかと思っただろうね！」
フリットウィック先生が言う。

「一心同体！」

「まったくそうだった。ポッターはほかの誰よりブラックを信頼した。卒業しても変わらなかった。ブラックはジェームズがリリーと結婚したとき新郎の付添役を務めた。二人はブラックをハリーの名付け親にした。ハリーはもちろん全く知らないがね。こんなことを知ったらハリーがどんな辛い思いをするか」

「ブラックの招待が『例のあの人』の一味だったからですの？」

大臣は声を落とした。

「もっと悪いね…ポッター夫妻は、自分達が『例のあの人』につけ狙われていると知っていた。ダンブルドアは『例のあの人』と緩みなく戦っていたから、数多くのスパイを放っていた。その一人から情報を聞き出しダンブルドアはジェームズとリリーに危機を知らせ二人に身を隠すように勧めた。もちろん『例のあの人』から身を隠すのは容易なことではない。ダンブルドアは『忠誠の術』が1番助かる可能性があると二人にそう言った」

「どんな術ですの？」

「恐ろしく複雑な術ですよ。一人の、生きた人の中に秘密を魔法で封じ込める。選ばれた者は『秘密の守人』として情報を自分の中に隠す。かくして情報を見つけることは不可能となる―『秘密の守人』が暴露しないかぎりはね。『秘密の守人』が口を割らないかぎり、『例のあの人』がリリーとジェームズの隠れている村を何年探そうが、二人を見つけることはできない。たとえ二人の家の居間の窓に鼻先を押し付けるほど近づいても、見つけることはできない！」

フリットウィック先生はそう言った。

「それじゃ、ブラックがポッター夫妻の『秘密の守人』に？」

「当然です。ジェームズ・ポッターは、ブラックだったら二人の居場所を教えるくらいなら死を選ぶだろう、それにブラックも身を隠すつもりだとダンブルドアにお伝えしたのです…それでもダンブルドアはまだ心配していらっしゃった。自分がポッター夫妻の『秘密の守人』になろうと申し出されたのを覚えていますよ」

マクゴナガル先生が言う。
「ダンブルドアはブラックを疑っていらした？」
「ダンブルドアには、誰かポッター夫妻に近い者が二人の動きを『例のあの人』に通報しているという確信がおありでした。少し前から味方の誰かが裏切って『例のあの人』に相当の情報を流していると疑っていらっしゃいました」
マクゴナガル先生が暗い声で言った。
「それでもジェームズ・ポッターはブラックを使うと主張したのですの？」
大臣が重苦しい声で言う。
「そうだ。そして『忠誠の術』をかけて一週間もたたないうちに―」
「ブラックが二人を裏切った？」
「まさにそうだ。ブラックは二重スパイの役目に疲れて、『例のあの人』への支持をおおっぴらに宣言しようとしていた。ポッター夫妻の死に合わせて宣言する計画だったらしい。ところが知っての通り『例のあの人』は逃げ去った。残されたブラックにしてみればまったく嫌な立場に立たされてしまったわけだ。自分が裏切り者だお旗幟鮮明にしたとたん、自分の旗頭が倒れてしまったんだ。逃げるほかなかった」
「くそったれのあほんだらの裏切り者め！」
ハグリッドの罵声が店に響く。
「ヤツに最後に出会ったのは俺にちげぇねぇ。そのあとでヤツはみんなを殺した！ジェームズとリリーが殺されちまったとき、あの家からハリーを助け出したのは俺だ！崩れた家からすぐにハリーを連れ出した。かわいそうなちっちゃなハリー。額におっきな傷を受けて、両親は死んじまって…そんでシリウス・ブラックが現れた。いつもの空飛ぶオートバイに乗って。あそこになんの用で来たんだか俺には思いもつかんかった。ヤツがリリーとジェームズの『秘密の守人』だとは知らんかった。『例のあの人』の襲撃の知らせを聞き付けて、なにかできることはねぇかと駆けつけてきたんだと思った。

ヤツめ真っ先に奮えとったわ。そんで俺は殺人者の裏切り者を慰めたんだ！ヤツがジェームズとリリーが死んで取り乱したんではなぇかだと、俺にわかるはずがあったか？ヤツが気にしてたんは『例のあの人』だったんだ！ほんでもってヤツが言うには『ハグリッド、ハリーを僕に渡してくれ。僕が名付け親だ。僕が育てる―』俺はダンブルドアから言い付けがあったから断った。するとヤツはハリーを届けるのに自分のオートバイを使えって言った。『僕にはもう必要がないだろう』そう言ってな―ヤツはもう逃げるつもりだったんだ！」

しばらく沈黙が続く。やがてロスメルタが話した。

「でも、逃げおおせなかったわね？魔法省が次の日に追い詰めたわ！」

「魔法省だとよかったのだが…ヤツを見つけたのは我々ではなく、チビのピーター・ペティグリューだった。ポッター夫妻の友人の一人だったが頭がおかしくなったのだろう…ブラックがポッターの『必要の守人』だと知っていたペティグリューは自らブラックを追った」

「ペティグリュー…ホグワーツにいたころはいつも二人のあとにくっついていたあの太った小さな男の子？」

ロスメルタが聞いた。

「ブラックとポッター…タツキのことを英雄のように崇めていた子だった…能力から言って仲間にはなりえなかった子です。私、あの子とタツキには時に厳しくあたりましたわ。私がいまどんなにそれを―どんなに悔いているか…」

マクゴナガル先生が言う。

（どうりで俺とピーターに厳しかったわけだ）

「さぁさぁ、ミネルバ。ペティグリューは英雄として死んだ。目撃者の証言ではペティグリューはブラックを追い詰めた。泣きながら『リリーとジェームズが。シリウス！よくもそんなことを！』と言っていたそうだ。それから杖を取り出そうとした。まぁもちろんブ

ラックの方が速かった。ペティグリューは木っ端みじんに吹っ飛ばされてしまった…残ったのは指一本だ」
「馬鹿な子…間抜けな子…どうしようもなく決闘がへたな子でしたわ…魔法省に任せるべきでした」
マクゴナガル先生がかすれた声で言う。
「大臣、ブラックは狂ってるというのは本当ですの？」
「『ご主人様』が敗北したことでたしかにしばらくは正気を失っていたと思うがね…私がアズカバンの見回りに行った時は私に対して筋の通った話し方をするのでね…私は意表を突かれた気がした。わたしに、読み終わった新聞をくれないかと言った。洒落てるじゃないか、クロスワードパズルが懐かしいと言ったのだ。大いに驚きましたとも。吸魂鬼がブラックに影響を与えていないことにね」
「だけど、なんのために脱獄したとお考えですの？まさか、大臣、ブラックは『例のあの人』とまた組むつもりでは？」
「それが、ブラックの最終的な企てだと言えるだろう」
「さぁコーネリウス。校長と食事なさるつもりなら、城に戻ったほうがいいでしょう」
マクゴナガル先生がそう言って先生方は『三本の箒』を後にした。
俺達は会話もせずに気づかれないようホグワーツへと戻った。

三十九話（後書き）

作者のカイラです。今回は少しページが多かったですね。それなのに後書きまで見てくれてありがとうございます。

アンケートですが、ハリー・ポッターは炎のゴブレットからバンバン？人が死んでいきます。
その死亡フラグが立っているキャラクターを生存させるかどうか、が今回のアンケートです。
全員生存！でもいいですし、このキャラを生存させて！の指定でもいいです。ですが何も無かったキャラクターにはタツキ次第で死んでもらいます。
うろ覚えではシリウス、リーマス、フレッドかジョージ、ムーディー、セブルス、セドリック…くらいですかね？
うろ覚えですから上記以外のキャラクターでもいいですよ。
ですがダンブルドアと最終巻で確か生徒や他の名前すら出ないキャラが何名か死んでいましたよね？これは変えません。
ダンブルドアは死なないと話しが進みませんし、最終巻ではあれだけの事をしていて誰も死なないというのは無理がありますから。タツキはそこまで超人でもありませんし。
アンケートは大体2週間くらいですかね？そのぐらいの期間で募集します。
ですが別に2週間過ぎても、最終巻メンバーなら別に構いません。
まだ当分は先ですからね（笑）

ご協力、お願いします！

四十話

「うーん……分かんないなぁ」
こう言っているのはロン。俺は今、ハリーとロン、ハーマイオニーと一緒に図書館で『魔法薬学』の課題に取り組んでいた。課題内容は前回の授業の時に個人で作った薬がどんな効能を持つかを予測し、その薬を実際に人に飲ませどうなったのか、というものだ。
「これ、どうなるんだろう?」
ハリーもこう呟いた。…しかし実は二人はずっと同じ事を言いそこで作業が止まっていた。そしてハーマイオニーも難しいのだろう。先程から作った薬がどうなるかでブツブツ呟いている。
(誰で実験しよう…)
俺が止まっているのは此処だった。何の薬かは予測出来ているが、実験者がいない。
「僕、魔法薬学嫌だなぁ」
ポツリとハリーは呟いた。恐らく魔法薬学というかセブルスが嫌なんだろうが、俺はそれを見逃さなかった。
「ハリー、授業出たくない?というかスネイプ先生に会いたくないでしょ?」
「ウン、科目というよりスネイプには会いたくないな」
「じゃ、飲もうか?」
「え?」
俺はハリーに無理矢理薬を飲ませようとする。
「ちょ…ライカ!?」
ハリーは必死に抵抗をする。
「大丈夫。効能は知っているから」
「飲ませるならスリザリンだよね!?」
ハリーとロンはスリザリンのドラコとクラップかゴイルのどちらかに飲ませる予定だ。

「今此処にスリザリン生はいないし、ちょうど目の前に授業をサボりたい人がいるんだよ？協力しないとね」
ハリーは今何とか俺の腕を掴み、防いでいるのがギリギリだった。
「スネイプ先生に会いたくないんでしょ？」
「う……そう、だけど」
セブルスはハリーをかなりイジメている。…それが役に立つなんて思いもしなかったな。
俺はニッコリと笑いながら言う。
「じゃ、大人しく飲んで？」
「…そんな笑顔で言われても嫌だ！」
「…仕方ないね」
俺はスッとハリーから離れた。ハリーはその行動に安心して警戒をとく。
（ふふん。甘いな、ハリー…）
俺は油断しているハリーに作った魔法薬を飲ませた。
「うぐっ…ラ、ライカ！？」
「よし、飲んだね」
俺がこう言った後、ハリーはガクンと崩れ落ちた。俺はそれを受け止める。
「「ハリー！？」」
ハリーの体は今ゴムみたいになっている。まあ、骨が無いから当たり前か。
「うん、成功だね。……ん？」
何やらハリーの体が熱い。
俺はハリーの額に手をあてる。…かなり熱いな。
（あちゃー、副作用か…）
どうやらこの全身の骨を抜く薬には副作用があったみたいだ。
（副作用までは考えて無かったな…）
「医務室へ行くか」
俺はハリーを抱え、図書館を出る。

医務室でハリーをマダム・ポンフリーに渡した。…普通なら俺が説教されるのだろうが既に何人かの生徒が課題でやられたのだろう、マダム・ポンフリーは小言を言っただけで説教はしなかった。…ハリーは何週間か入院だそうだ。

俺はレポートにその結果（副作用等）を書き、提出した。

数日後、返ってきたレポートを部屋にて見ていると下に短く“よくやった！”と書かれていた。

（……セブルスは教師だよな？）

普通ならば全身骨抜きになったのだから注意が書かれるはずなんだが…

（まぁ、こんな事を書くのはハリーだけだろうけどね。さて、課題でもしますか）

俺はもらったレポートを引き出しにいれて変身術の課題に取り掛かった。

四十一話

クリスマス前にハグリッド宛てにヒッポグリフについての手紙が届いた。結果としてハグリッドに責任は問われなかった。しかしヒッポグリフに対しては『危険生物処理委員会』に付託される事になった。

（『危険生物処理委員会』ね…ならバックビークは死刑がさらに強くなったな）

その日から俺だけではなくハリー、ロン、ハーマイオニーもヒッポグリフについての事件を図書館で探し回った。

俺達は有効な事例は見つからないままクリスマスを迎えた。

クリスマス当日、俺は朝起きてからクリスマスプレゼントを開封した後に談話室へとおりた。

「あら？ライカ早いのね」

そこにはハーマイオニーが座っていた。

「そう？…あ！マグルの本を送ったのはハーマイオニーだよね？」

「ええ。ライカはよく魔法界の本を読んでいるから本を送ろうとしたんだけど…何を読んでないか分からなかったからマグル界の本を送ったの」

「ありがとう。余りマグルの本読んだ事ないから嬉しいよ」

「よかった。髪飾りはライカ？」

「うん。…デザインとかは分からないから店の人気Ｎｏ．１を送ったんだけど…」

「ええ、とても綺麗で気に入ったわ。ありがとう」

「よかった。…物品とかは自信がなかったけど気に入ったならいいや」

「二人とも遅いわね…ライカ！起こしに行きましょう！」

ハーマイオニーは俺を引っ張りながらハリーとロンの部屋へと向かう。

ハーマイオニーは男子部屋へと着くと返事を聞かずに中に入った。
「二人して、何笑ってるの？」
ハーマイオニーはクルックシャンクスを抱えながらロンとハリーに聞いた。
「そいつをここに連れて来るなよ！」
ロンはハーマイオニーに噛み付きスキャバーズをポケットに入れた。
…らしい。
「まぁ、ハリー！いったい誰がこれを？」
「さっぱりわからない」
ハリーはこう言った。俺は静かに手を挙げる。
「悪い。俺も分からない。説明してくれる？」
「ハリーに箒が送られたの…私はあまり箒に詳しくないけど、これかなり高いわよね？」
「ハーマイオニー、これは現存する箒の最高峰だ」
ロンはため息をつきながら言った。
「……誰が送ったか分からない、か」
「誰だっていいじゃないか！ハリー…後で乗っていい？」
ロンはイライラしながら言った。
「ダメよ。絶対誰も箒に乗っちゃいけないわ！」
「俺もハーマイオニーに賛成。…何があるか分からないよ。先生方に引き渡すべきだ」
しかし俺がこう言った後、クルックシャンクスがスキャバーズを襲ったので俺とハーマイオニーはクルックシャンクスを連れて部屋を出て行った。

昼食時、俺は昼食を取るために大広間へと下りた。
大広間は普段と違い各寮テーブルではなく、中央に一つのテーブル

が置かれていた。
「メリー・クリスマス。これしかいないのだから、寮のテーブルを使うのはいかにも愚かに見えたのでのう……何処へ行くのじゃ？」
俺はダンブルドアの話しの途中で踵を引き返した。しかしマクゴナガル先生に捕まる。
「ライカ…どちらへ行くのです？席はこちらですよ？」
俺はマクゴナガル先生に引きずられて席へ座った。
「クラッカーを！」
全員が席に着いてからダンブルドアは声を上げた。
俺はクラッカーは引かず（だって出てきた物は持ち帰りだし…）食事をしていた。
昼食の半ばくらいに大広間の扉が開いた。
「シビル、これはお珍しい！」
「校長先生、あたくし水晶玉を見ておりまして。あたくしも驚きましたわ。いつもの一人で食べる昼食ではなくて皆様とご一緒にする姿が見えましたの。運命があたくしを促しているのを拒む事ができまして？あたくし、急ぎ塔を離れましたが、遅れましてごめんあそばせ」
「それは、それは」
ダンブルドアはこう言って椅子を一つ出した。
トレローニー先生は椅子に座り食事を取りはじめた。
「あら、ルーピン先生はどうなさいましたの？」
トレローニー先生はダンブルドアに聞いた。
「気の毒に、先生はまたご病気での。クリスマスにこんなことが起こるとは、まったく不幸なことじゃ」
「でも、シビル、あなたはそれをとうにご存知だったはずね？」
マクゴナガル先生が冷ややかに言い放つ。
「もちろん、存じてましたわ。ミネルバ。でも『すべてを悟れる者』であることを、ひけらかしたりはしないものですわ。でもミネルバ、どうしてもと言うならルーピン先生はお気の毒にそう長くはないわ。

」
「そうでしょうとも」
マクゴナガル先生は辛辣に言う。
「いや、まさか。ルーピン先生はそんな危険な状態ではあるまい。セブルス、ルーピン先生にまた薬を造って差し上げたのじゃろう？」
「はい、校長」
ダンブルドアの問いにセブルスは淀みなく答えた。
「結構。それならば、ルーピン先生はすぐによくなって出ていらっしゃるじゃろう…デレク、チポラータ・ソーセージを食べてみたかね？おいしいよ」
ダンブルドアは話題を変え、生徒に話しかけ始めた。
（すべてを悟れるならさぞ、つまらない人生になるだろうな…）
俺は早めに食事を切り上げ談話室にて寛いでいた。
しばらくするとハリーとロンが寮へと帰って来て、二人は貰った箒―ファイヤ・ボルトと言うらしい…―を持って来て二人で眺めていた。
二人が箒を眺めている時にハーマイオニーはマクゴナガル先生を連れて談話室へと入ってきた。
「これが、そうなのですね？ミス・グレンジャーが知らせてくれました。…ちょとよろしいですか？」
マクゴナガル先生はそう言い、二人から箒を取った。
「ポッター…メモやカードはついていなかったのですか？何か伝言とかそういうものは？」
「いいえ」
「そうですか…ポッター、これを預かります」
「なんですって？」
マクゴナガル先生の言葉にハリーは驚き、マクゴナガル先生に聞いた。
「ど、どうして？」
「呪いがかかっているか調べる必要があります。もちろん、私は詳

しくありませんが、マダム・フーチやフリットウィック先生がこれを分解して……」
しかしマクゴナガル先生が話し終える前にハリーは立ち上がった。
「な…なんですって?」
「今回は、ハーマイオニーやマクゴナガル先生が正しいと思うよ。魔法がかっているかどうか調べた方がいい。ハリー…引き渡しすんだ」
俺はハリーにこう言った。
「この箒はどこも変じゃありません!」
しかしハリーは食い下がらなかった。
「それは分かりません。飛んでみないと分からないでしょう?箒が安全だと分かるまでは飛ぶなど論外です。今後の成り行きについてはちゃんと知らせます」
そう言ってマクゴナガル先生は談話室から出て行った。
ロンとハリーはこれでもかとマクゴナガル先生に伝えたハーマイオニーを睨んでいた。

四十二話（前書き）

頑張りましたが如何せん相談なんてされた事が無いのでしっくりきませんし少しズレてるかもしれません。…多分、読者様もそう感じると思います。
なので先に謝ります。
すみませんでした。

四十二話

学期が始まってもなおハリーとロンはハーマイオニーと仲直りをしてなく、俺は板挟みも嫌だから別行動をしていた。だからといって極端三人を避けていたわけではない。ただ移動等が別行動なだけで寮に帰れば談話室で会うし、宿題についてもよく質問された。

…ハーマイオニーの宿題の量は異常だったが…

ハーマイオニーはストレスが溜まりに溜ったのか、談話室で宿題をしている時は皆、声をかけないようになった。何故なら凄い勢いで怒鳴られるからだ。きっと顔も凄い事になっているのだろう。

…何せ俺以外は近づかないから。

（皆が遠回しに見てるだけだからなー）

「ライカ！ちょといいかい？」

俺は図書館へと向かっていた足を止める。

「ルーピン先生？どうしたんですか？」

リーマスが俺の方へと歩いてきた。

「ちょとレポートについて聞きたい事があってね…」

きっとレポートは口実だろう。…多分。

「分かりました」

俺はリーマスについていって『闇の魔術に対する防衛術』の教室へと入った。

「さて…と、此処なら聞かれたりはしないかな？…話しを聞いてほしいんだ」

そう言いつつリーマスは防音魔法をかけた。

「レポートは口実か…話しとは？」

「シリウスについてだよ。今朝の新聞を読んだかい？」

「確か…吸魂鬼の『キス』の執行が認められた、という記事だったよね？」

吸魂鬼のキスとは死よりも酷いものだ。

吸魂鬼にキスをされると魂を抜き取られてしまう。よって肉体は生きているがそれはただの抜け殻になってしまう。
「タツキは…どう思う？」
「何が？吸魂鬼のキス執行について？シリウスについて？それとも別の事？」
「シリウスについてだよ。キスの執行については正しいと思っている。ただ…今だに信じきれてない。シリウスが裏切った事も、マグルを殺したことも。まだこれは夢だと思ってしまうんだ」
状況も証拠もある。納得もしている。それでもどこかで信じきれていないんだ、とリーマスは付け加えた。
「…俺はあまり相談なんて受けないから上手くは言えないけどさ、俺はシリウスは犯人じゃないと思っている。けれどこれはあくまで俺の考えだから、リーマスはリーマスで自分の考えを見つけないとね。別に時間はあるんだから急がなくてもいいんだし」
「…そうだね、ありがとう。話しを聞いてくれて」
「どういたしまして、だっけ？」
クスクスとリーマスは笑った。
「さて、ハリーが守護霊を練習しに来る時間が近い。残念だけど此処までだ」
リーマスがこう言ってから俺は教室を出てグリフィンドール寮の談話室へと帰った。
談話室に着いてからはハーマイオニーの隣で俺も宿題をしていた。するとハリーが戻って来てから談話室が騒がしくなった。
「…どうしたの？騒がしいけど…」
俺は宿題から顔をあげてハーマイオニーに聞いた。
「ハリーの箒が戻ってきたの。何もなかったみたいね…」
「あぁ…確か高い箒だっけ？」
「えぇ。あ、今ロンがハリーの箒を部屋へ持って行ってるわ」
「ロンが？そんなに触りたいのかな？」
「…そういえばライカ、貴方は余り箒で騒いだ事はないわね…」

「『弘法筆を沢ばず』だよ」
「…それはどんな意味かしら？」
しかし俺が答える前にロンが飛び込んできた。
「見ろ！」
ロンはハーマイオニーに近づき何かを突き出した。
「見ろよ！！」
「ロン、どうしたの？」
ロンはハーマイオニーの言葉を聞かずに繰り返す。
「スキャバーズが！見ろ！スキャバーズが！」
ハーマイオニーはわけがわからずロンから少し離れた。
「血だ！スキャバーズがいなくなったんだ！それで、床に何があったか分かるか？」
「い、いいえ」
ハーマイオニーは震えながら言った。ロンはハーマイオニーの教科書等の本の上に何かを落とした。
「クルックシャンクスの毛だよな？」
ハーマイオニーは何も答えなかった。

四十三話

ハリーの箒が返ってきて三人が仲直りをするのかと思っていたがスキャバーズがいなくなった事で更に悪化した。
ハリーはロンの方へついたらしく、ハーマイオニーはただでさえ授業数が多いのにスキャバーズの事でヒステリーが酷くなった。…当たられるのは俺なんだが…
確か今日はクィディッチの対抗試合でグリフィンドール対レイブンクローだ。生徒や先生が殆ど見に行った試合だから俺も試合を見に行きたかったが生徒達が居ないのを利用して『必要の部屋』の点検を済ませるためにホグワーツへと残っていた。
（『必要の部屋』は何だかんだで生徒達は結構知られている隠し部屋だからな…）
俺は『必要の部屋』がある廊下へと来ていた。
（此処は…確か…）
俺は壁に手をつける。
（…確か場所は此処だっけ？）
俺は適当に魔力を放出した。
するとガチャンと音を立てて扉が現れる。
（お！あってたな）
俺は扉を押して中へと入る。中は部屋に様々な魔法をかけた場所へと繋がった。
俺は部屋の中央に立ち、呪文が一つでも欠けていないか、正常に働いているかを確認していった。
『必要の部屋』にはかなりの魔法をかけていたので時間がかかり全ての確認作業が終わった時にはすでに夕方だった。
（やっと終わった。…頭パンクしそう）
俺は確認作業を全て頭の中でする。当時かけた魔法を今かかっている魔法と照らし合わせ間違いがないか、とか欠けてないか、とか色

々な作業を全て。
（今日は此処までか…）
これ以上したら俺の頭が破裂してしまう。なので俺は『必要の部屋』からグリフィンドール寮の談話室へと移動した。
談話室はパーティー状態だった。…というかパーティーだった。
俺は一人パーティーに参加していないだろうハーマイオニーに聞いた。
「ハーマイオニー…これは？」
「あら？ライカ貴方クィディッチ試合を見てないの？」
「見たかったんだけどね…外せない用事があってね」
「グリフィンドールが勝ったのよ。これで2位に上がったはずよ」
「成る程…それでこの騒ぎか」
「えぇ…」
俺はパーティーに参加はしなかったが早々に部屋に戻る事もなかったのでハーマイオニーと一緒に談話室の暖炉近くで座っていた。…
最もハーマイオニーは宿題である本を読んでいたが…
ふとロンの声が聞こえた。…多分聞こえるように言ったのだろうが…
「スキャバーズが食われちゃていなければなぁ。ハエ型ヌガーが貰えたのに。あいつ、これが大好物だった―」
ハーマイオニーは泣き出し、女子寮へと姿を消した。
（酷くなる一方だね…これは）
俺は苦笑しながらハリーとロンの方にしばらく顔を向けていたのだがパーティーが一向に終わる気配がしなかったので部屋へと戻った。
深夜を回り、皆が寝ている所に悲鳴が聞こえた。
（……っ何だ？）
俺は即座に起きて談話室へと下りた。
談話室では何人がすでにいてロンがこう話していた。
「シリウス・ブラックだ。僕たちの部屋にナイフを持って！」
「おやめなさい！全く、いい加減になさい！」
ロンの後にマクゴナガル先生が怒りながら入ってきた。

…きっとパーティーを終わらせたのもマクゴナガル先生なのだろう。
「先生、僕、目が覚めたらシリウス・ブラックが、ナイフを持って、僕の上に立ってたんです」
ロンは皆が冗談だと言われたのか直接先生に話していた。
「ウィーズリー、冗談はおよしなさい。肖像画の穴をどうやって通過できたというんです？」
「あの人に聞いてください」
ロンはマクゴナガル先生にそう言った。
マクゴナガル先生はロンを疑わしい目で見ていたが、やがて肖像画に聞くために出て行った。
肖像画とマクゴナガル先生の会話は談話室からでも充分に聞こえた。
「カドガン卿、いましたがグリフィンドール塔に男を一人通しましたか？」
「通しましたぞ。ご婦人」
「と――通した？…あ、合言葉は？」
「持っておりましたぞ！一週間分全部持っておりました。小さな紙切れを読み上げておりました」
マクゴナガル先生は急いで談話室へと戻ってきた。
「誰ですか？」
マクゴナガル先生は震えながら言った。
「今週の合言葉を書き出して、その辺に放っておいた、底抜けの愚か者は誰です？」
小さな悲鳴の後、そろそろとネビルが手を挙げた。

四十四話

ロンが襲われた次の日から警備が格段と厳しくなった。
そんなある日、俺とハーマイオニーの元にハグリッドから一通の手紙が届いた。
内容はバックビークは裁判に負けた、という知らせだった。幸い処刑日はまだ決まってないが時間の問題だろう。
しかし悪い事ばかりでは無かった。ハグリッドの手紙をきっかけにハーマイオニーとロンが仲直りをしたのだ。
ハグリッドには『魔法生物飼育学』の授業くらいしか会えなくなったがハグリッドはバックビークの処刑判決によって放心状態だった。
(処刑…か)
ロン達は控訴があると言ったが勝利は望めないだろう。あそこはルシウス・マルフォイの言いなりになってしまったから。ハグリッドも分かっているのか控訴はせずに残された時間を幸せに使いたいと言った。
だが、次の授業『呪文学』にはハーマイオニーはいなかった。
(限界なんだろうな…)
授業が終わり昼食を取ってから午後の『占い学』へと向かった。
占い学の教室は水晶玉が置かれていた。
(水晶玉は来学期じゃなかったっけ?)
「皆様、こんにちは!」
トレローニー先生がいつもの様に登場した。
「あたくし、計画しておりましたより少し早めに水晶玉を教えることにしましたの。6月の試験は玉に関するものだと、運命があたくしに知らせましたの。それで、あたくし、皆様に十分に練習さしあげたくて」
ハーマイオニーは声を潜めずに言った。
「あーら、まあ…『運命が知らせましたの』…どなたさまが試験を

お出しになるの？あの人自身じゃない！なんて驚くべき予言でしょ！」

トレローニー先生は聞こえなかったように話しを続けた。

「水晶占いは、とても高度な技術ですのよ。玉の無限の深奥を初めて覗き込んだとき、皆様が始めから何かを『見る』ことは期待しておりませんわ。まず意識と、外なる眼とをリラックスさせることから練習を始めましょう」

（水晶玉かぁ…）

俺は元々『占い学』はマクゴナガル先生と同意見だ。それに俺自身あまり『占い学』とは相性が良くない。特に水晶玉とは…

「そうすれば『内なる眼』と超意識とが現れるましょう。幸運に恵まれれば、皆様の中の何人かは、この授業が終わるまでには『見える』かもしれませんわ」

皆で作業にかかる。

（うーん？…ダメだ…サッパリ分からん）

俺は努力するが何もない。

（…大体人の約二倍は生きているけど水晶玉で占いが出来たことないしな…）

俺は早々に諦めてでっちあげる嘘でも考えていた。

「ここに、なにかありますわ！」

ハリーの所でトレローニー先生が声を上げる。

「なにかが動いている……でもなにかしら？…あなた…これまでよりハッキリとほら、こっそりと貴方の方に忍び寄り、だんだんと大きく…死神犬のグ―」

「いい加減にしてよ！また、あのバカバカしい死神犬じゃないでしょうね！」

ハーマイオニーが大声を上げる。

「まあ、あなた。こんなことを申し上げるのは、なんですけど、あなたがこの教室に最初に現れたときから、はっきりと分かっていたことでございますわ。あなたには『占い学』という高貴な技術に必

要なものが備わっておりませんの。全く、こんなに救いようのない『俗』な心を持った生徒にいまだかつてお目にかかったことがありませんわ」

一瞬の沈黙。そして…

「…結構よ！結構ですとも。やめた！私、出ていくわ！」

ハーマイオニーはバタバタと教室を出て行った。

（…凄いやめかた）

ハーマイオニーが出て行き、クラスは静まり返った。そして『占い学』の終業のベルがなった。

四十五話

クィディッチはグリフィンドールの優勝で幕を閉じた。
バックビークの処刑は六日―試験の最終日に決まった。
（最終日か…）
いざ試験が始まると皆、血の気が失せたような雰囲気で試験結果を話していた。
初日の試験は『変身術』で昼食後には『呪文学』、次の日は『魔法生物飼育学』、『魔法薬学』、『天文学』など次々に試験が行われていった。
最後の試験は『占い学』だった。
（でっちあげか…）
俺は教室に入り、上手くでっちあげて何とか試験に合格しそうだった。
「それじゃ、ここでおしまいにいたしましょう…あなたは―」
不意にトレローニー先生は話しが止まった。俺はかばんを持ち、席を離れるところだった。
「―先生？」
トレローニー先生は低い声で話し始めた。
『―千年前から御来訪の者よ、身内と『闇の帝王』に気をつけよ。すぐではない、しかし隠している物はその者達によって暴かれるだろうぅ』
先生はすぐに元の声に戻った。
「―あら？ボーとお立ちになってどうかしましたの？」
トレローニー先生は何事もなかったように話す。…何も覚えていないのだろう。
「いえ、失礼します」
教室から出て俺はグリフィンドール寮へと向かう。
（…預言者、か）

隠し物は沢山ありすぎてどれを指すのか分からないが気をつけよ、と言われたので警戒しておいて損はないだろう。…多分。

（……ん？ふくろう？）

学校のふくろうが俺の元へとやって来た。

「お疲れ様」

俺はふくろうから手紙を受け取る。ふくろうはすぐさま飛び立った。

俺は手紙を読み取る。

―バックビークは日没に処刑だ。色々手伝ってくれたのにすまなねぇ―

（…ハグリッドか）

俺はその手紙を持ちながら談話室へと入った。

「ライカ！バックビークの処刑が決まった」

ハリーが談話室へと入るなり声をかけてくれた。

「俺にも手紙が届いたよ」

「そうだったんだ？…それでロンとハーマイオニーと一緒にハグリッドのところに行こうって話したんだけど…ライカはどうするの？」

「ハグリッドのところ？行くよ。ハグリッドが気になるし」

「分かった。行動は夕食後で」

「分かった」

そこで俺は部屋に戻るためにハリー達と一旦別れた。

夕食後、俺達は約束通りにハグリッドの小屋へ訪れていた。ハグリッドは来ちゃなんねぇ、と注意しながらも中へ入れてくれた。

「茶、飲むか？」

ハグリッドは震えた手でヤカンへと手を伸ばした。

「ハグリッド、バックビークはどこなの？」

ハーマイオニーは躊躇いながらも聞いた。

「俺――俺、あいつを外に出してやった。カボチャ畑さ、繋いでや

った。木やなんか見た方がいいだろうし、新鮮な空気も吸わせて――そのあとで――」
ハグリッドは持っていたカップを落とした。
「私がやるわ、ハグリッド」
ハーマイオニーはハグリッドに駆け寄り、床を綺麗にする。
「ハグリッド、誰でもいい、出来ることはないの？――ダンブルドアは――」
「ダンブルドアは努力なさった。だけど委員会の決定を覆す力はお持ちじゃねぇ。ダンブルドアは連中にバックビークは大丈夫だと言いなさった。だけど連中はルシウス・マルフォイに怖じけづいて…」
「しかしダンブルドアがおいでなさる。事が行われるときに。今朝手紙をくださった。俺のそばにいたいとおしゃる。偉大なお方だ、ダンブルドアは…」
ハーマイオニーが堪えきれずに啜り泣きをもらす。
「ハグリッド、私達もあなたと一緒にいるわ」
ハグリッドは横に首を振った。
「お前さんたちは城へ戻るんだ。お前さんたちに見せたくねぇ。それに初めっからここへ来てはなんねえんだ……ファッジやダンブルドアがお前さんたちが許可を貰わずに外にいるのを見つけたら厄介なことになる」
お茶の支度をしていたハーマイオニーが突然叫んだ。
「ロン！――信じられないわ。スキャバーズよ！」
「何を言っているんだい？」
ハーマイオニーはカップを机の上にひっくり返した。
「スキャバーズ！こんなところで、一体何をしているんだ？」
ロンはスキャバーズを掴んだ。しかしネズミはジタバタと逃げようとする。
「大丈夫だってば、スキャバーズ！猫はいないよ！ここにはお前を傷つけるものは何もいないんだから！」
ハグリッドが急に立ち上がる。

「連中が来おった…お前さんら、行かねばなんねぇ、連中に見つからんようにな」
ハグリッドは透明マントをかぶらせ、俺達を裏口から逃がした。
俺達はハグリッドに押され、城へと向かっていた。
ロンはピタリと止まった。
「…ロン、お願いよ」
ハーマイオニーはロンを急かす。
「スキャバーズが、じっとしないんだ」
ロンはネズミを落ち着かせようと必死だった。
「スキャバーズ、黙れ、みんなに聞こえっちまうよ―」
ネズミはキーキー騒ぐがまだハグリッドの小屋から余り離れておらず微かに音が聞こえてきた。
シュッ、ドサッという音が響いた。
(やったのか?…違うな。バックビークは生きてる)
バックビークの魔力が感じられる。近くにはハーマイオニーとハリーがいた。
(言わない方がいいかな…)
「やってしまった!し、信じられないわ――あの人たち、やってしまったんだわ」
ハーマイオニーは小さな声でそう言った。

四十六話

「あの人―こんなことができるの？本当にどうして――こんなことが――できるっていうの？」

俺はその言葉になにも返せなかった。…俺も沢山のものたちを殺してきたから。

ハーマイオニーが何かを見たようで呻きながら言い放った。

「クルックシャンクス！ダメ、あっちに行きなさい、行きなさいってば」

クルックシャンクスがスキャバーズを狙ってやって来たのだ。

「スキャバーズ、ダメだ！」

スキャバーズはロンからスルリとすり抜け、逃げ出した。クルックシャンクスはスキャバーズの後を追う。

「ロン！」

俺達はスキャバーズとクルックシャンクスを追った。走るため透明マントはかぶることは出来ずハリーが抱えて走った。

「―捕まえた！」

何とかロンはスキャバーズを捕まえて、クルックシャンクスから遠ざけていた。

俺達はマントをかぶろうとした瞬間に犬がハリーを襲った。

犬はハリーを地面に倒したが勢い余ってハリーから転がり落ちた。

ハリーが立ち上がると犬はまた襲ってきた。ロンはとっさにハリーを横に押しやり、犬に噛まれた。

犬はそのままロンを引きずっていった。

（…シリウス？あいつを殺す気か？なら、あいつだけ捕らえればいいものを…）

俺達はロンを助けるために犬を追い掛けた。

犬は暴れ柳の下へ潜っていった。

「ハリー…助けを呼ばなくちゃ」

「ダメだ。あいつはロンを食ってしまうほど大きいんだ。そんな時間はない」
俺はハリー達が話している間にクルックシャンクスが側にいることに気づいた。
俺はクルックシャンクスを抱えた。
「暴れ柳を止めてくれるかな？場所は分かる…かな？場所は―」
クルックシャンクスは俺の言葉を聞き終わる前に腕から飛び降りて暴れ柳へと向かい、ある木の節を触った。
暴れ柳はぴたりと止まった。
「クルックシャンクス！―どうして分かったのかしら？」
「あの犬の友達なんだ。僕、二匹が連れ立っているところを見たことがある。―行こう」
ハリーはそう行って暴れ柳に近づいた。
俺とハーマイオニーも続く。
先にクルックシャンクスがスルリと暴れ柳の中に入り俺達が続いて中へ入った。
俺達はクルックシャンクスについてトンネルを進んで行く。
やがてトンネルが終わり部屋へとついた。しかしロンはいなかった。
その部屋には上の階があり、そこにいるのだろうと俺達は上へ上がる。
ロンは床に座っていた。しかし血の匂いがかなりするので出血もかなりしているはずだ。
「ロン―大丈夫？犬はどこ？」
ハリーはロンに話しかけた。
「犬じゃない。ハリー、罠だ。あいつが犬なんだ…あいつは『動物もどき』なんだ…」
「エクスペリアームス、武器よ去れ！」
この声によって杖を持っていたハリーとハーマイオニーは杖を取られてしまった。
（シリウス…）

杖を取ったのは逃亡中のシリウス・ブラックだった。
「君なら友を助けにくると思った。君の父親もわたしのためにそうしたに違いない。君は勇敢だ。先生の助けを求めなかった。ありがたい……その方がずっと事は楽だ」
ハリーは身を乗り出した。それをハーマイオニーとロンが腕を掴み、俺は首根っこを掴んで止めた。
「ハリー、ダメ」
ハーマイオニーはハリーに向かって言った。しかしロンはシリウスに向かってこう言った。
「ハリーを殺したいのなら、僕たちも殺すことになるぞ！」
ロンはフラフラしながら立ち上がった。
「座っていろ。脚の怪我がよけい酷くなるぞ」
シリウスはロンにそう言った。
「聞こえたのか？僕たちを殺さなきゃならないんだぞ」
「今夜はただ一人を殺す」
（…やはりあいつを殺すのか）
「なぜなんだ？この前は気にしなかったはずだろ？ペティグリューを殺るために、沢山のマグルを無残に殺したんだろう？……どうしたんだ？アズカバンで骨抜きになったのか？」
「ハリー、黙って」
ハーマイオニーは哀願するようにハリーに言った。
「こいつが僕の父さんと母さんを殺したんだ」
ハリーは俺達を振り切ってシリウスに突っ込んでいきシリウスを殴り続けた。ハーマイオニーとロンも加勢して二人はシリウスが持っていた杖を奪い返した。
ハーマイオニーとロンは杖を持った後、すぐさま邪魔にならないようにと横にズレた。…ロンなんてもう立てないだろう。
シリウスはなんとかハリーから離れ、ハリーはシリウスに杖を向けた。
「ハリー、わたしを殺すのか？」

「お前は僕の両親を殺した」
「ハリー…だからといって復讐はしない方がいいと思うよ。ブラックを殺すなとは言わないけれど、殺すなら復讐以外の理由がいい。復讐はろくなものじゃない」
俺はハリーにこう言ったがハリーはもう何も聞こえていないようだった。
「否定はしない。しかし君がすべてを知ったら―」
「すべて?お前は僕の両親をウ〝ォルデモートに売った。それだけ知ればたくさんだ!」
「聞いてくれ、聞かないと君は後悔する…君は分かっていないんだ」
シリウスは必死に話す。
「お前が思っているより、たくさん知っているんだ。お前は聞いたことがないだろう、え?僕の母さんが……ウ〝ォルデモートが僕を殺すのを止めようとして……」
ハリーはそれ以上なにも言わなかった。
するとクルックシャンクスがシリウスの服にしがみついた。調度ハリーが向けているだろう位置に。
「どけ」
シリウスはクルックシャンクスにそう言って払い除けようとするがクルックシャンクスはしっかりとしがみついた。
誰も話さずに静まり返っていたところに新たな足音が聞こえた。
「ここよ!私達、上にいるわ―シリウス・ブラックよ―早く!」
ハーマイオニーは叫び声を上げた。
ドアが開いた。ここへやって来たのはリーマスだった。
「エクスペリアームス!武器よ去れ」
リーマスは一通り回りを見るとハリー、ハーマイオニー、ロンに向かって武装解除を放った。
三人は杖を失った。
「シリウス、あいつはどこだ?」
リーマスはシリウスに向かって言い、シリウスはロンを指差した。

「しかし、それなら……なぜいままで正体を顕さなかったんだ？もしかしたら――もしかしたら、あいつがそうだったのか？あいつと入れ代わったのか…私に何も言わずに？」
「ルーピン先生、いったい何が――？」
ハリーは困惑しながら聞いこうとした。
しかしリーマスは杖を下ろし、シリウスと抱き合った。
（あーあ…ますます混乱するじゃないか…）
「なんてことなの！」
ハーマイオニーが叫んだ。
リーマスはシリウスを離し、ハーマイオニーを見た。
「先生、先生は――その人とグルなんだわ！」
「ハーマイオニー、落ち着きなさい」
「私、誰にも言わなかったのに！先生のために、私、隠していたのに―」
「ハーマイオニー、話しを聞いてくれ。頼むから。説明するから―」
「僕は先生を信じてた。それなのに、先生はずっとブラックの友達だったんだ！」
ハリーは声を震わせながら言った。
「それは違う。この十二年間、わたしはシリウスの友ではなかった。しかしいまはそうだ…説明させてくれ」
「ダメよ！ハリー、騙されないで。この人はブラックが城に入る手引をしていたのよ。この人もあなたの死を願ってるんだわ――この人、狼人間なのよ！」
痛いような沈黙が続く。
「いつもの君らしくないね、ハーマイオニー。残念ながら、三問中一問しか合っていない。わたしはシリウスが城に入る手引きはしていないし、もちろんハリーの死を願ってなんかいない……しかしわたしが狼人間であることは否定しない」
リーマスはこう言い、ロンが立ちかけたのを心配したのかロンに近

寄ろうとした。
「僕に近寄るな、狼人間め！」
ロンはこう言い放ちリーマスは歩みを止めた。
俺はロンに近づき、ロンに平手打ちをした。
「ロン…今は混乱しているのかもしれないけれど、君はルーピン先生に向かって酷いこと、言ったって分かってる？」
「いいよ、ライカ。ありがとう。…ハーマイオニー、君はいつから気づいていたのかね？」
ハーマイオニーは囁くように言う。
「ずーっと前から。スネイプ先生のレポートを書いたときから…」
「スネイプ先生がお喜びだろう。スネイプ先生はわたしの症状が何を意味するのか、誰か気づいてほしいと思って、あの宿題を出したんだ。月の満ち欠け図を見て、わたしの病気が満月と一致することに気づいたんだね？」
「その通りよ」
「ハーマイオニー、君は、わたしがいままでに出会った君と同年齢の魔女の、誰よりも賢いね」
「違うわ。私がもう少し賢かったなら、みんなにあなたのことを話してたわ！」
「しかし、もう、みんな知ってることだ。少なくとも先生方は知ってる」
「ダンブルドアは、狼人間と知っていて雇ったっていうのか？正気かよ？」
ロンは息を呑んだ。
「先生の中にもそういう意見があった。ダンブルドアはわたしが信用できると、何人かの先生を説得するのに随分ご苦労なさった」
「そして、ダンブルドアは間違っていたんだ！先生はずっとこいつの手引きをしていたんだ！」
ハリーは叫びながらシリウスを指差した。
「わたしはシリウスの手引きはしていない。わけを話させてすれれ

ば説明するよ。ほら―」
リーマスは三本の杖をハリー達に返し、自分の杖をしまった。
「君達には武器がある。わたしたちは丸腰だ。聞いてくれるかい？」
「ブラックの手助けをしていなかったていいなら、こいつがここにいるってどうして分かったんだ？」
ハリーはシリウスを指しながらリーマスに聞いた。
「地図だよ。この間没収した『忍びの地図』だ」
「使い方を知っているの？」
ハリーは疑わしげに聞いた。
「勿論、使い方は知っているよ。わたしもこれを書いた一人だ。わたしはムーニーだよ。学生時代、友人はわたしをそういう名で呼んだ」
「先生が書いた？」
「そんなことより、わたしは今日の夕方、地図をしっかり見張っていたんだ。君達が城を抜け出してヒッポグリフの処刑の前にハグリッドを訪ねるのではないかと思ったからだ。そして思った通りだった。そうだね？」
「君はお父さんの『透明マント』を着ていたかもしれないね、ハリー」
「どうして『マント』のことを？」
「ジェームズがマントに隠れるのを何度見たことか……要するに、『透明マント』を着ていても『忍びの地図』に顕れるということだよ。載らないのはライカだけだ。わたしは君達が校庭を横切り、ハグリッドの小屋に入るのを見ていた。二十分後、君はハグリッドのところを離れ、城に戻りはじめた。しかし今度は君達のほかに誰かが一緒だった…」
「え？いや、僕たちだけだった」
ハリーは驚きながら言った。
リーマスはハリーの言葉を無視した。
「するともう一つの点が見えた。急速に君達に近づいている。シリ

ウス・ブラックと書いてあった……ブラックが君達にぶつかるのが見えた。君達の中から二人を『暴れ柳』に引きずり込むのを見た―」
「一人だろ！」
ロンが怒ったように言った。
「ロン、違うね。二人だ。…ネズミを見せてくれないか？」
「なんだよ？スキャバーズになんの関係があるんだい？」
「大有りだ。頼む。見せてくれないか？」
ロンは躊躇ったがスキャバーズをこの場に出した。
「僕のネズミがいったいなんの関係があるって言うんだ？」
「それはネズミじゃない」
シリウスが言い切る。
「どういうこと――こいつはもちろんネズミだよ―」
「いや、ネズミじゃない。こいつは魔法使いだ」
リーマスが静かに言った。シリウスがリーマスに続く。
「『動物もどき』だ。名前はピーター・ペティグリュー」

四十七話

三人とも話しを飲み込めないのかしばらく静かだった。そしてロンが口を開く。

「二人ともどうかしてる」

「馬鹿馬鹿しい！」

ハーマイオニーもひそかに言った。

「ピーター・ペティグリューは死んだんだ！こいつが十二年前に殺した！」

ハリーはシリウスを指差した。

「殺そうと思った。だがこざかしいピーターめに出し抜かれた…今度はそうさせない！」

シリウスはロンに飛び掛かった。

「シリウス、よせ！」

リーマスはロンからシリウスを剥がした。

「待ってくれ！そういうやり方をしてはダメだ――みんなに分かってもらわねば――説明しなければならない」

「後で説明すればいい！」

「みんな―すべてを―知る―権利が―あるんだ！」

リーマスは暴れるシリウスを押さえる。

「ロンはあいつをペットにしていたんだ。わたしにもまだ分かっていない部分がある！それにハリーだ…シリウス、君はハリーに真実を話す義務がある！」

その言葉でシリウスは暴れるのを止めた。

「いいだろう。それなら君がみんなに話してくれ。ただし急げよ、リーマス。わたしを監獄に送り込んだ原因の殺人を、いまこそ実行したい…」

「正気じゃないよ。二人とも。もうたくさんだ。僕は行くよ。」

ロンは声を震わせ、立ち上がろうとした。リーマスは素早くスキャ

バーズに杖を向けた。
「ロン、最後までわたしの話しを聞きなさい。ただ、聞いている間、ピーターをしっかり捕まえておいてくれ」
「ピーターなんかじゃない。こいつはスキャバーズだ！」
ロンは叫んだ。ハリーはロンを支えながらリーマスに聞く。
「ペティグリューが死んだのを見届けた証人がいるんだ。通りにいた人たちが大勢…」
「見てはいない。見たと思っただけだ」
シリウスは荒々しく答えた。
「シリウスがピーターを殺したと、誰もがそう思った。私自身もそう信じていた――今夜地図を見るまではね。『忍びの地図』はけっして嘘はつかないから。…ピーターは生きている。ロンがあいつを握っているんだよ、ハリー」
ハーマイオニーが震えながら聞いた。
「でもルーピン先生…スキャバーズがペティグリューのはずありません…そんなこと、あるはずないんです。先生はそのことをご存知のはずです」
「どうしてかね？」
リーマスは静かに言った。
「だって…だってもしピーター・ペティグリューが『動物もどき』なら、みんなそのことを知っているはずです。マクゴナガル先生の授業で『動物もどき』の勉強をしました。その宿題で、私、『動物もどき』をすべて調べたんです――魔法省が動物に変身できる魔法使いや魔女を記録していて、何に変身するかとか、その特徴などを書いた登録簿があります―私、登録簿で、マクゴナガル先生が載っているのを見つけました。それに、今世紀にはたった七人しか『動物もどき』がいないんです。ペティグリューの名前はリストに載っていませんでした―」
リーマスは笑い出す。
「ハーマイオニー…皆が皆、登録している訳ではないよ。未登録の

奴らもいるんだ」
「ライカの言う通りだよ。魔法省は未登録の『動物もどき』が四匹もホグワーツを徘徊していたことをしらなかったのだ」
「その話しをするならさっさとすませてくれ。わたしは十二年も待った。もうそんなに長くは持たない」
キィとドアが開いた。
（……セブルスか）
リーマスがドアに近づき階段の踊り場を確認する。
「誰もいない…」
「ここは呪われているんだ！」
ロンが言い放つ。
「そうではない」
リーマスは不審そうにドアを見ながら答えた。
「『叫びの屋敷』は決して呪われてはいなかった……村人がかつて聞いたという叫びや吠え声は、わたしの出した声だ」
リーマスは一息つき、話し出す。
「話しはすべてそこから始まる――わたしが人狼になったことから。わたしが噛まれたりしなければこんなことはいっさい起こらなかっただろう……そして、わたしがあんなにも向こう見ずでなかったなら……噛まれたのはわたしがまだ小さいころだった。両親は手を尽くしたが、あの頃は治療法がなかった。スネイプ先生がわたしに調合してくれた魔法薬は、ごく最近発明されたばかりだ。あの薬でわたしは無害になる。わかるね。満月の夜の前の一週間、あれを飲みさえすれば、変身しても自分の心を保つことができる……自分の事務所で丸まっているだけの、無害な狼でいられる。そして再び月が欠けはじめるのを待つ」
「トリカブト系の脱狼薬が開発されるまでは、わたしは月に一度、完全に成熟した怪物に成り果てた。ホグワーツに入学するのは不可能だと思われた。他の親にしてみれば、自分の子供を、わたしのような危険なものに晒したくないはずだ。しかし、ダンブルドアが校

長になり、わたしに同情してくださった。きちんと予防措置を取りさえすれば、わたしが学校に来てはいけない理由などないと、ダンブルドアはおっしゃった…『暴れ柳』はわたしがホグワーツに入学した年に植えられた。本当を言うと、わたしがホグワーツに入学したから植えられたのだ。この屋敷は――ここに続くトンネルは、わたしが使うために作られた。一ヶ月に一度、わたしは城からこっそり連れ出され、変身するためにここに連れてこられた。わたしが危険な状態にある間は、誰もわたしに出会わないようにと、あの木がトンネルの入口に植えられた。…そのころのわたしの変身ぶりといったら――それは恐ろしいものだった。狼人間になるのはとても苦痛に満ちたことだ。噛むべき対象の人間から引き離され、なわりにわたしは自分を噛み、引っ掻いた。村人はその騒ぎや叫びを聞いて、とてつもなく荒々しい霊の声だと思った。ダンブルドアはむしろ噂を煽った……いまでも、もうこの屋敷が静かになって何年もたつのに、村人は近づこうともしない。―しかし変身することだけを除けば人生であんなに幸せだった時期はない。生まれて初めて友人ができた。四人の素晴らしい友が。シリウス・ブラック…ピーター・ペティグリュー…タツキ・ヒブカ…ジェームズ・ポッター」

「さて、タツキは初めから知っていたが三人の友人が、わたしが月に一度姿を消すことに気づかないはずがない。わたしはいろいろ言い訳を考えた。…時にはタツキも一緒に。母親が病気で、見舞いに家に帰らなければならなかったとか…わたしの正体を知ったら、とたんにわたしを見捨てるのではないかと、それが怖かったんだ。しかし、三人は、ハーマイオニー、君と同じように、本当のことを悟ってしまった……」

「それでも三人はわたしを見捨てはしなかった。それでも三人はわたしを見捨てはしなかった。それどころか、わたしのためにあることをしてくれた。おかげで変身は辛くないものになったばかりではなく、生涯で最高の時になった。三人とも『動物もどき』になってくれたんだ」

「僕の父さんも？」
ハリーは驚いてリーマスに聞いた。
「ああ、そうだとも。三人はタツキを先生に三年の時間を費やしてやっと成功した。『動物もどき』は変身はまかりまちがうと、とんでもないことになる。しかし三人は意のままに特定の動物に変身できるようになった」
「でも、それがどうしてあなたを救うことになったの？」
ハーマイオニーは不思議そうに聞いた。
「人間だとわたしと一緒にいられない。だから動物としてわたしに付き合ってくれた。狼人間は人間にとって危険なだけだからね。三人はジェームズの『透明マント』に隠れて、タツキと毎月一度こっそり城を抜け出した。そして、変身した……ピーターは1番小さかったので、『暴れ柳』の枝攻撃をかいくぐり、下に滑り込んで、木を硬直させる節に触った。それから四人でそっとトンネルを降り、わたしと一緒になった。友達の影響で、わたしは以前ほど危険ではなくなった。体はまだ狼のようだったが、四人と一緒にいる間、わたしの心は以前ほど狼ではなくなった」
「リーマス、早くしてくれ」
シリウスは苛立ちながら言う。
「もうすぐだよ、シリウス。……そう全員が変身できるようになったのでワクワクするような可能性が開けた。ほどなくすると、タツキはわたしたちを止めたがわたしたちは夜に『叫びの屋敷』から抜け出し、校庭や村を歩き回るようになった。シリウスとジェームズは大型の動物に変身していたので、狼人間を抑制出来たし、タツキは完璧に制御できた。ホグワーツで、わたしたちほど校庭やホグズミードを隅々まで詳しく知っていた学生はいないだろうね……こうして、タツキ以外のわたしたちで『忍びの地図』を作り上げ、それぞれのニックネームでサインした。シリウスはパッドフット、ピーターはワームテール、ジェームズはブロングズ」
ハーマイオニーは素早く言い放った。

「それでもまだとっても危険だわ！暗い中を狼人間と走り回るなんて！もし狼人間がみんなをうまく撒いて、誰かに噛み付いたらどうなったの？」

「それを思うとぞっとする。あわや、ということが何回もあった。…タツキがいたからこそ何もなく終わったけどね…」

「もちろん、ダンブルドアの信頼を裏切っているという罪悪感を、時折感じていた。…他の校長なら決して許さなかっただろうに、ダンブルドアはわたしがホグワーツに入学することを許可した。わたしと周りの者の両方の安全のために、ダンブルドアが決めたルールを、わたしが破っているとは、夢にも思わなかっただろう。わたしのために、三人の学友を非合法の『動物もどき』にしてしまったことを、ダンブルドアは知らなかった。しかしみんなで翌月の冒険を計画するたびに、わたしは都合よく罪の意識を忘れた。そして、わたしはいまでもそのときと変わっていない。この一年というもの、わたしは、シリウスが『動物もどき』だとダンブルドアに告げるべきかどうか迷い、心の中でためらう自分と戦ってきた。しかし、告げはしなかった。なぜかって？それは、わたしが臆病者だからだ。告げれば、学生時代に、ダンブルドアの信頼を裏切っていたと認めることになり、わたしがほかの者を引き込んだと認めることになる……ダンブルドアの信頼がわたしにとっては全てだったのに。ダンブルドアは少年のわたしをホグワーツに入れてくださったし、大人になっても、全ての社会から締め出され、正体が正体なのでまともな仕事に就けないわたしに、職場を与えてくださった。だから、わたしはシリウスが学校に入り込むのに、ウ〝ォルデモートから学んだ闇の魔術を使っているに違いないと思いたかったし、『動物もどき』であることは、それとはなんの関わりもないと自分に言い聞かせた……だから、ある意味ではスネイプの言うことが正しかったわけだ」

「スネイプだって？」

シリウスが鋭く聞いた。

「スネイプが、なんの関係がある？」
「シリウス、スネイプがここにいるんだ。あいつもここで教えているんだ」
「スネイプ先生はわたしたちと同期なんだ。わたしが『闇の魔術の防衛術』の教職に就くことに、先生は強硬に反対した。ダンブルドアに、わたしは信頼できないと、この一年間言い続けていた。スネイプにはスネイプなりの理由があった……それはね、このシリウスが仕掛けた悪戯で、スネイプが危うく死にかけたんだ。その悪戯にはわたしも関わっていた――」
シリウスは嘲るように言った。
「当然の見せしめだったよ。こそこそ嗅ぎ回って、我々のやろうとしていることを詮索して……我々を退学に追い込みたかったんだ」
「セブルスはわたしが月に一度どこに行くのか非常に興味を持った。わたしたちは同学年だったんだ。それに――つまり――ウム――お互いに好きになれなくてね。セブルスはとくにジェームズを嫌っていた。妬み、それだけだったと思う。クィディッチ競技のジェームズの才能をね……とにかく、セブルスはある晩、わたしが校医のポンフリー先生と一緒に校庭を歩いているのを見つけた。ポンフリー先生はわたしの変身のために『暴れ柳』の方に引率していくところだった。シリウスが―その―からかってやろうと思って、木の幹のコブを長い棒で突けば、あとをついけて入ることができるよ、と教えてやった。そう、もちろんスネイプは試してみた――もしスネイプがこの屋敷までつけてきていたら、完全に人狼になりきったわたしに出会っただろう――しかし、君のお父さんが、シリウスのやったことを聞くなり、自分の身の危険を顧みず、スネイプのあとを追いかけて、引き戻したんだ……しかし、スネイプは、トンネルのむこう端にいるわたしの姿をチラリと見てしまった。ダンブルドアが、決して人に言ってはいけないと口止めした。だが、そのときから、スネイプはわたしが何者かを知ってしまった…」
「だからスネイプはあなたが嫌いなんだ。スネイプはあなたもその

悪ふざけに関わっていたと思ったわけですね？」
「その通り」
今まで姿を隠していただろうセブルスがリーマスの背後からリーマスに杖を向けたまま現れた。

四十八話

ハーマイオニーは悲鳴を上げ、シリウスはサッと立ち上がった。
「『暴れ柳』の根本でこれを見つけましてね…」
セブルスはマントを横に投げ捨てた。
「ポッター、なかなか役に立ったよ。感謝する……我輩がどうしてここを知ったのか、諸君は不思議に思っているだろうな？」
「君の部屋に行ったよ、ルーピン。今夜、例の薬を飲むのを忘れたようだから、我輩がゴブレットに入れて持っていった。持っていったのは、まことに幸運だった……我輩にとってだかね。君の机に何やら地図があってね。一目見ただけで、我輩に必要なことはすべてわかった。君がこの通路を走っていき、姿を消すのを見たのだ」
「セブルス――」
リーマスはセブルスに話しかけたがセブルスは構わず続けた。
「我輩は校長に繰り返し進言した。君が旧友のブラックを手引きして城に入れているとね。ルーピン、これがいい証拠だ。いけ図々しくもこの古巣を隠れ家に使うとは、さすがの我輩も夢にも思いつきませんでしたよ…」
「セブルス、君は誤解している。君は、話しを全部聞いていないんだ――説明させてくれ――シリウスはハリーを殺しにきたのではない」
「今夜、また二人、アズカバン行きが出る。―ダンブルドアがどう思うか、見物ですな…ダンブルドアは君が無害だと信じきっていた。わかるだろうね、ルーピン……飼い馴らされた人狼さん…」
「愚かな」
リーマスは静かに言った。
「学生時代の恨みで、無実の者をまたアズカバンに送り返すというのかね？」
セブルスはリーマスを呪文にて縛り上げた。シリウスはセブルスを

襲おうとしたがセブルスのほうが早く、シリウスに杖を向けた。
「やれるものならやるがいい。我輩にきっかけさえくれれば、確実に仕留めてやる」
セブルスは低い声で言い放った。
ハーマイオニーは恐々とセブルスに言う。
「スネイプ先生――あの――この人たちの言い分を聞いてあげても、害はないのでは、あ、ありませんか？」
「ミス・グレンジャー、君は停学処分を持つ身ですぞ。ポッターもウィーズリーも、ヒブカも許容されている境界線を越えた。しかもお尋ね者の殺人鬼や人狼と一緒とは。君も一生に一度くらい、黙っていたまえ！」
「でも、もし――もし誤解だったら―」
「だまれ、このバカ娘！わかりもしないことに口を出すな！！」
ハーマイオニーは黙りこくった。
「復習は蜜より甘い。おまえを捕まえるのが我輩であったらと、どんなに願ったことか……」
「お生憎だな。…しかしだこの子がそのネズミを城まで連れていくなら――それならわたしは大人しくついて行くがね…」
「城までかね？そんなに遠くに行く必要はないだろう。柳の木を出たらすぐに、我輩が吸魂鬼を呼べばすむ。連中はブラック、君を見てお喜びになることだろう…喜びのあまりキスをする。そんなとこだろう」
「聞け――最後まで、わたしの言うことを聞け。―ネズミだ―ネズミを見るんだ」
しかしセブルスは何も聞かなかった。
「来い、全員だ。我輩が人狼を引きずっていこう。吸魂鬼がこいつにもキスしてくれるかもしれん」
ハリーはドアの前へと立ち塞がった。
「どけ、ポッター。おまえはもう十分規則を破っているんだぞ。我輩がここに来てお前の命を救っていなかったら―」

「ルーピン先生が僕を殺す機会はこの一年に何百回もあったはずだ。僕は先生と二人きりで、何度も吸魂鬼防衛術の訓練を受けた。もし先生がブラックの手先だったら、その時に僕を殺してしまわなかったのはなぜなんだ?」

「人狼がどんな考え方をするか、我輩に推し量れとでもいうのか?」

「どけ、ポッター!」

「エクスペリアームズ、武器よ去れ!」

ハリー、ハーマイオニー、ロンがセブルスに向かって武装解除を放った。セブルスは壁に激突し気絶した。

「こんなこと、君がしてはいけなかった。わたしに任せておくべきだった」

シリウスはハリーにこう言った。

リーマスはセブルスに縛られいたのをシリウスが手伝い、解いた。

「ハリー、ありがとう」

「僕、まだあなたを信じるとは言ってません」

「それでは、君に証拠を見せるときが来たようだ。君、ピーターを渡してくれ」

シリウスはロンに向かって言った。

「冗談はやめてくれ。そもそもペティグリューが変身できたとしても—ネズミなんて何百万といるじゃないか。—アズカバンにいて、どのネズミかなんてどうやってわかるって言うんだい?」

「そうだとも、シリウス。まともな疑問だよ」

シリウスは皆に何かを突き出した。

「いったいどうしてこれを?」

リーマスがシリウスに聞く。

「ファッジだ。去年、アズカバンの視察に来たとき、ファッジがくれた新聞にピーターがいた。わたしにはすぐに分かった。あいつが何回変身するのを見たと思う?それに…こいつの前足だ」

「それがどうしたって言うんだい?」

ロンが食ってかかる。

「指が一本ない」
シリウスが言う。
「まさに。なんと単純明快なことだ……なんと小賢しい…あいつは自分で切ったのか？」
「変身する直前にな。あいつを追い詰めたとき、あいつは道行く人全員に聞こえるように叫んだ。わたしが二人を裏切ったと。それからわたしより先に隠し持っていた杖で自分の周り五、六？以内にいた人間を皆殺しにした――そして素早く、自分の指を切り下水道に逃げ込んだ」
リーマスがロンに問う。
「ロン、聞いたことはないかい？ピーターの残骸で1番大きいのが指だって」
「だって、多分、スキャバーズは他のネズミと喧嘩したんだよ！こいつは何年も家族の“お下がり”だった。たしか―」
「十二年だね、確か。どうしてそんなに長生きなのか、変だと思ったことはないのかい？」
「僕たち、僕たちがちゃんと世話をしていたんだ！」
「いまはあんまり元気じゃないようだね。どうだね？シリウスが脱獄してからやせ衰えてきたのでは…？」
「こいつは、その狂った猫が怖いんだ！」
ロンはクルックシャンクスを指す。
「この猫は狂っていない。ピーターを連れてこようとしたし、グリフィンドール塔への合言葉も盗んだ」
俺は傍観していたがあまりにもロンが融通が効かずこう言った。
「とりあえず！シリウスがピーターを追っていたのか、ピーターがシリウスを追って殺したのかは証明すれば早い。もしネズミがピーターでなかったなら、俺が二人を吸魂鬼へ引き渡す。それでいいね？」
俺は聞いていたら堂々巡りになりそうだったのでハリー達に提案してみた。

「そうだね。話しはもう十分だ。何が起こったのか証明する道は一つ、ロンそのネズミを渡しなさい」
リーマスが俺の話しに乗る。
「こいつを渡したら何をしようというんだ?」
「無理にでも正体を顕させる。普通のネズミなら傷つくことはない」
ロンはリーマスにスキャバーズを渡した。
「シリウス、準備は?」
シリウスはセブルスから杖を拾い、構えた。
「一緒にするか?」
「そうしよう」
「三つ数えたらだ。いち――に――さん!」
バーンと音を立てた後にネズミから小柄な男へと変わった。
「やあ、ピーター」
リーマスはピーターに話しかける。
「しばらくだったね」
「し、シリウス、り、リーマス……懐かしの友よ」
「よくも、そんな事を言えるな?俺はジェームズとリリーを説得してお前に『秘密の守人』を任せた。そしてお前はウ〝ォルデモートに二人の場所を吐いた。そうだろう?」
「シリウス…君なら…君ならどうした?私は―」
「友を裏切るくらいなら死を選んだ!」
「リーマス!」
ピーターはリーマスへと向いた。
「君は信じないだろうね……計画を変更したなら、シリウスは君に話したはずだろう?」
「ピーター、わたしがスパイだと思ったら話さなかっただろうな。シリウス、多分それでわたしに話してくれなかったのだろう?」
「すまない、リーマス」
「気にするな。わが友、パッドフット。そのかわりに、わたしが君をスパイだと思い違いしたことを許してくれるか?」

「勿論だとも」
「一緒にこいつを殺るか？」
「ああ、そうしよう」
ピーターは二人はもう味方ではないと分かったのかロンに縋りついた。
「ロン…わたしはいいペットだったろう？わたしを殺さないでくれ…」
しかしロンは不快そうな声を出した。
「自分のベッドにおまえを寝かせていたなんて！」
「やさしい子だ…情け深いご主人様……私は君のネズミだった…いいペットだった」
しかしペティグリューはロンが助けてくれないと分かるとハーマイオニーに、ハーマイオニーが無理だと分かるとハリーへと縋った。
「ハリー……君はお父さんに生き写しだ…そっくりだ」
「ハリーに話しかけるとは、どういう神経だ？ハリーに顔向けができるか？この子の前で、ジェームズのことを話すなんて、どの面下げてできるんだ？」
シリウスは大声で言い放つ。
「おまえは気づくべきだったな。ウ〝ォルデモートがおまえを殺さなければ、我々が殺すと。ピーター、さらばだ」
リーマスはそう言ってピーターに杖を向けた。
「やめて！殺してはダメだ！…こいつを城まで連れていこう。僕たちの手で吸魂鬼に引き渡すんだ。こいつはアズカバンに行けばいい…殺すことだけはやめて」
「ハリー！…君は―ありがとう―こんなわたしに…」
ピーターはハリーに抱き着いた。
「放せ。お前のために止めたんじゃない。僕の父さんは、親友が―お前みたいなもののために―殺人者になるのを望まないと思っただけだ」
シリウスとリーマスは杖を下ろす。

「ハリー、君に決める権利がある。しかし考えてくれ―」
シリウスはハリーに聞く。
「こいつはアズカバンに行けばいいんだ。あそこが相応しい者がいるとしたら、こいつしかいない」
ハリーの意見は変わらなかった。
それから少し話しあい、ピーターはリーマスとロンが連れて歩くことになった。
「シリウス、よくあの場で俺の事を聞かなかったね？」
俺はシリウスに小声で聞いた。
「ああ、…あの黒猫に頼まれたからな。理由までは聞いていないから訳は後でお前から聞かせてもらう」
「後でね」
「ああ…」
俺達は『叫びの屋敷』を後にした。

四十九話（前書き）

この話しと次の話しは短いです。
そして次回でアズカバンが終わります。

四十九話

トンネル内ではシリウスはハリーと話し、俺は1番後ろにいた。
そんなに長くはないトンネルはすぐに抜けて俺達は校庭を歩いていた。
しかし不意にリーマスが歩みを止めた。
「どうしましょう―あの薬を今夜飲んでいないわ！危険よ！」
ハーマイオニーはそう叫んだ。それで俺も気がついた。
（今日は満月か！）
「逃げろ！早く！」
シリウスが言うもののもうすでに遅く、リーマスは雄叫びをあげ狼人間へと変わった。シリウスはすぐさま変身したのだろう。リーマスと激しく戦っていた。そしてピーターはこの隙をつき、ネズミへ変身して逃げ出した。
「シリウス、あいつが逃げた。ペティグリューが変身した！」
ハリーが叫んだ声をシリウスは聞き、すぐさまピーターを追った。
リーマスはどうやら森へ逃げたらしい。
ハリー達とどうするかを話し合って、城へ行くことを決めた時だった。
森の方向から犬のキャンキャンという苦痛な鳴き声が聞こえた。
ハリーとハーマイオニーは一目散に森へと駆けていき、俺もロンとセブルスが襲われないように防衛術を施した後に二人を追った。
先に行った二人を追っているうちに寒気がしてくる。
（今は冬ではない…この寒気は、もしかして…）
吸魂鬼がいる確率が高い。俺はそう考え、走るスピードを上げた。
ハリーとハーマイオニーはシリウスと一緒におり、三人とも百は越えるだろう吸魂鬼に囲まれていた。
（…間に合うか？）
俺は杖を出し叫ぶ。

「エクスペクト・パトロー…」
俺は守護霊をだそうとしたが俺より早くハリーが守護霊をだし吸魂鬼を追い払った。
「ハリー、ハーマイオニー、シリウス！」
俺は三人に近づく。俺も焦っていたのだろう。吸魂鬼が一匹俺に近づいていたのに気づかなかった。
【――け――の】
（ちっ…まだいたのか！）
【――用済みだ。０１】
グワンと吐き気が襲ってたところで俺の意識は途切れた。

五十話

ふと目が覚めた。
（ここは……？）
「目が覚めたかの？」
ダンブルドアの声が聞こえた。
「目覚めがダンブルドアの言葉か…最悪」
「それだけ言えれば大丈夫じゃの。ここは医務室じゃ」
「…何日だ」
「あれから三日じゃ。タツキ、今だに浅くしか眠れておらんじゃろ？グッスリと眠っておった…というか気絶しておったの」
「……ハリーやシリウスは？」
「もう全てが終わっておる。シリウスはヒッポグリフと共に逃げた。リーマスはセブルスがうっかり狼人間だと漏らし、辞職した」
「…それ、うっかりじゃないだろう。…しかしヒッポグリフ？逆転時計を使ったのか？」
逆転時計はハーマイオニーが持っている品物だ。ハーマイオニーはこれによって時間を遡り、数多くの授業を受けていた。
「そうじゃ。バックビークを助け、シリウスを助けたのじゃ。ハリー自身ものぉ」
「ハリー自身？あの吸魂鬼を払ったのはやはりハリーか？」
「なんじゃ分かっておったのか…」
「まぁ魔力でね…俺は何日入院？」
「学年末パーティーには出れるの」
俺は黒いオーラを出しながら聞く。
「……ダンブルドア？」
「冗談じゃ。数日には退院できる」
「数日か……」
「なんじゃ不満かのぉ」

「ああ」
「そこはやけに素直じゃの。…さてわしはそろそろ失礼しようかの」
ダンブルドアはそう言って席を立って医務室から出て行った。
俺が退院してすぐに学年末パーティーが始まった。
今学期もグリフィンドールの優勝にて幕が閉じた。…いつもよく減点されていて優勝できるものなのか？と思ったのは秘密だ。

ホグワーツ特急でハーマイオニーは『マグル学』をやめた事を告げた。逆転時計は思っていたよりもハーマイオニーに負担をかけていたみたいだった。しかし『マグル学』をやめた事でハーマイオニーは正常な時間割に戻る。去年みたいに苛立ったりはないだろう。
それから今年にあるクィディッチワールドカップの話しに移り、俺もハリーと同じくウィーズリー一家にお世話になる事が決まった。
（…このままじゃ毎年泊まることになるな）
俺は申し訳ないと言ったがロンが構わない、と言うのでその好意に甘えることにした。
午後も遅い時間にシリウスからハリー宛てに手紙が来た。
シリウスはファイアボルトを送ったのが自分だということと、ハリーのホクズミード行きの許可書を同封していて、最後に手紙を運んできた豆ふくろうをロンのペットにと書かれて終わっていた。
ハリーはキングス・クロス駅につくまで何度も手紙を読み返していた。
キングス・クロス駅で俺はロン達が去るまで見送り、ホグズミードへ姿くらましをした。

外伝・千年という月日

「タツキ」
生徒がいないホグワーツ。校庭の芝生の上で横になっていると声をかけられる。
「……何？」
俺は声をかけてきた人物―ダンブルドアに素っ気なく返す。
「いつもにまして不機嫌じゃのぉ」
「……」
俺はぷいっとダンブルドアに向けていた顔を空へと向けた。
「何があったのじゃ？」
「別に……」
俺はそう答える。
「セブルス、じゃろう？」
「……」
俺はダンブルドアの言葉に答えなかった。
「図星のようじゃな」
ダンブルドアは俺の隣に座る。
「話したほうが楽じゃぞ？じゃないとあちらも分からないじゃろうからな」
ダンブルドアはチラリと廊下へ顔を向けた。…そこにはセブルスがいるのだ。本人は隠れているようだが生憎俺には魔力で分かってしまう。
…あまり話したくはないが、それではセブルスが分からないままになるので俺は話し出した。
「今日、セブルスと喧嘩した」
「ほう？珍しいのぉ…セブルスと喧嘩とは」
まぁ確かにセブルスとはあまりぶつからない。何だかんだで喧嘩前にセブルスが折れるから。

「朝俺が忘れ物を取りに行くために大広間に置いていた花と俺が作ったプディング。それをセブルスが勝手に処分した」
「ふむ……花なら覚えておるが側にあったのはプディングではなく何やら…色んな果物が入った蒸しパンみたいな食べ物じゃったはずじゃが？」
「…それ、プディング」
ダンブルドアは少しテンションが上がったのか声が弾んだ。
「ほう…ならあのプディングは日本流かの？」
「いや、違う。あれは俺がガキの頃のプディング。まぁ最も食った事はないけどな」
ダンブルドアは口を閉ざす。
「数日前から今日は墓参りに行こうと決めていたんだ。定期的に行ってないし、もう誰も知らないだろうから久々に、と思って」
もう、あの人達を知っている人は誰もいない。俺しか、いないのだ。
「あれはお供え物として持って行くつもりだった。…だから聞いただけだったけど頑張ってお菓子を作ったし、花は昔からある花を用意した」
「じゃが別にこだわらなくても他にあるじゃろう？お菓子なら百味ビーンズや蛙チョコレートとかのぉ」
「それらも持って行く予定だった。…部屋に忘れてしまっていたけどな。けれどどうしても自分の知らない物ばかりに囲まれているとな、置いてけぼりになった気分なんだよ。…俺がそうだった。俺が生きていた時代よりも此処は発展していて魔法は増えていたしお菓子なんかは種類が沢山あった。マグルの世界も変わっていて、平和で皆が幸せそうで…このホグワーツで沢山の生徒が学んでいて……知らない物を触り、体験するのは楽しかった。生徒達が楽しそうで嬉しかった。―けれども、置いていかれた気持ちだった。俺達は確かに生きていた。今とは違う時代だけれども、生きていた。でももう誰も俺達の事を知らない。…それはすごく、当たり前の事だ。会ったこともないのだから。けれど、存在自体が無かったように感じ

て…置いていかれたようで、俺達はちゃんと生きていたのに、ってな」

風がそよそよと吹き、心地が良かった。まるで落ち込んだ心を見通されたみたいに。

「―だから、だから作った。探した。そんな気持ちにさせたくなかったから。…ちゃんと俺が覚えているから。覚えている人がいるからってな」

ダンブルドアは何も言わなかった。…いや、言えないが正しいのかもしれない。ダンブルドアはそんな事になった事がないから。偉大な魔法使いとして年老いた今でも周りから求められてる。もちろんデメリットもあるがこんな気持ちにはならない。

「…悪かった。済まない」

不意に話している間に近付いて来たセブルスが謝った。

「…そんな物とは知らずに、ゴミだと思って捨ててしまった。…済まない」

まあ、理由も知らないセブルスに怒鳴った俺も大人気ないが…

「今度、何か奢れよな。今日墓参り出来無かったし」

「ああ…」

ダンブルドアが口を開く。

「仲直り出来たようじゃな。全く、いい年をしながら年よりの手をわずわらせるとはの…」

「……」

「……」

「…どうしたのじゃ?二人とも?」

今回何もしていないような気がするのは俺だけか?俺の話しを聞いただけだよな?

「…セブルス、俺しばらく部屋で勉強してる」

「我輩も行こう。我輩も授業の準備がある」

俺はダンブルドアを放置することを決め、またセブルスもそう決めたのだろう。

「タツキ！？セブルス！？いきなりどうしたんじゃ？」
俺達は後ろで人の名前を叫んでいるダンブルドアを置いて校舎へと戻った。

外伝・有効的に

『グリフィンドール先生！』
ホグズミード行きを許された今日。ハーマイオニーやロンは天気を気にしていたが、雨にはならず二人はホグズミードへ出かけて行った。二人だけではなく残っているのはハリーと俺、一、二年生ぐらいだろう。
ハリーは今談話室にて宿題をやっているが、俺は図書館でやろうと向かっている時に懐かしい呼び方で呼ばれたのだ。
「ヘレナ、どうした？」
彼女は『灰色のレディ』…レイブンクロー寮つきゴーストだ。
『先生、ピーブズが暴れて手がつけられないんですけど…』
「ピーブズ？」
『はい…厨房を荒らしていて…』
「…それはまた」
『屋敷しもべ妖精達も困っているんです。『血みどろ男爵』もいらっしゃらないし…』
「…分かった。厨房だね」
俺は図書館へと向けていた足を変えて厨房へと向かう。
「ヘレナ、教えてくれてありがとう」
『はい』
ヘレナはそう言ってどこかへ去って行った。
（…どうせ宴会に出たいって駄々こねているんだろうな）
俺はため息をつきながら歩く。
（大体ピーブズの世話は『血みどろ男爵』の仕事だろうに…）
…居ないのだから仕方がないか。
俺はハッフルパフ寮近くの図画のとある一部をくすぐり下へとおりた。
（これはまた…）

厨房の中は酷い惨状だった。床にはあちこちに何かが散らばっており、俺は何度も躓くはめになった。
その散らかした本人、ピーブズは大音量で叫びながらおそらく調理道具だろう、それらを投げまくっていた。
（危なっ！）
俺は投げられてきた調理道具をひょいひょい避けながら壁へ避難している屋敷しもべ妖精へ聞く。
「ピーブズ、どうしたの？」
屋敷しもべ妖精はいつもの高い声で答えてくれた。
「いつものことです。宴会に出たいとおっしゃられていたのですが、無理だと分かった途端に…」
「大暴れ…ね。食事は大丈夫？」
「それは間に合わせます！」
屋敷しもべ妖精は間に合わせる事が当然のように答えた。
（宴会に出たいのならば大人しくすればいいだけなのにな）
しかし他のゴーストならまだしも、ピーブズだ。天変地異が起きても無理だろう。
「ピーブズ！」
俺はピーブズに向けて大声を出した。ピーブズは物を投げるのを止めた。
「宴会に出るには礼儀がなけりゃ出られない。けれど俺なら出れないなら出れないなりに有効に時間を使うぞ？」
俺はニヤリと笑う。
「有効に、ですか？」
「ああ」
俺は一息ついて話す。
（先生方、悪い）
「俺ならば、宴会に出られないその時間帯に悪戯を仕掛けるね。宴会中ってことはフィルチも居ないし、先生方もいない。やりたいほうだいだろう？」

ピーブズはその言葉で考え直したのだろう、何も言わずに去って行った。

（一応先生方に注意をしておくか）

俺は屋敷しもべ妖精達に一言交わし厨房を出て行った。

あれからピーブズは俺の言葉どおりに食事時間や宴会中に悪戯を仕掛けるようになり、食べ終わった生徒達がそれをくらうはめになってしまった。

おかげで次々と生徒達から文句が上がり、来学期から先生方が交代で食事時間や宴会中にも校内を見回る事になった。

（…あれ俺が教師に戻る前に無くなって欲しいな）

そうなった原因は俺なのだが、大広間で先生方がため息をついているのを聞くとそう思わずにはいられなかった。

五十一話

夏期休暇中、俺はホグワーツにいた。課題も終わり、特にすることがなくので大広間で紅茶を飲みながら新聞をゆっくり読むか、ホグワーツにかけた魔法に異常がないかを調べるかのどちらかでユッタリと毎日を過ごしていた。

そんなある日、ふくろう便が俺に届いた。

（？…ふくろう便なんて来ないのに、珍しいな）

俺はふくろうを労ってから手紙を受け取り、差出人を確認した。

（差出人はモリー・ウィーズリー？）

とりあえず、勧誘や知らない人からではないので、手紙の中身を読み取る。

――親愛なるヒブカ様。

私どもはまだ面識がございませんが、ライカから息子のロンのことはいろいろお聞き及びでございましょう。

ライカがお話ししたかと思いますが、クィディッチ・ワールドカップの決勝戦が、次の月曜の夜に行われます。夫のアーサーが、魔法省のゲーム・スポーツ部にツテがございまして、とてもよい席を手に入れることができました。

つきましては、ライカを試合に連れて行くことをお許しいただけませんでしょうか。

これは一生に一度のチャンスでございます。イギリスが開催地になるのは三十年ぶりのことで、切符はとても手に入れにくいのです。

ご希望ならば、それ以後夏休みの間ずっと、喜んでライカを家にお預かりいたしますし、学校に戻る汽車に無事乗せるようにいたします。

お返事は、なるべく早くお送り頂くとこちらとしても大変助かります。

ライカにまもなく会えることを楽しみにしています。

敬具

モリー・ウィーズリーより

追伸　住所が分からなかったのでふくろう便にて送りしましたが日本まで無事にたどり着いたでしょうか？――

（…これはタツキにきたのかな？）

多分ロンが俺の父親…まぁ俺のことだが…をアーサーとモリーに話したのだろう。…タツキとばれないように偽名にしたがややこしいな、これは。

（返信しないと、……羽根ペンどこやったっけ？）

ゴソゴソと羽根ペンを探す。

（んー…？）

羽ペンを探しているとニャーと声が聞こえた。多分、フィンラが構って欲しくて鳴いたのだろう。

「フィンラ、悪いけど後でね。羽根ペンを探さないと…」

ニャーと少しいらついたような声でベシベシとなにかで俺の頬を叩いた。

「…っ、フィンラ？君いったい――ん？」

俺はフィンラが叩いた物を触った。…正体は羽根ペンだった。

「羽根ペン？…見つけてくれたのか？ありがとう」

俺はフィンラから羽根ペンを受けとった。

（さて、返信だよな……堅苦しいのは嫌いだが、仕方ない…）

俺はウィーズリー夫妻に向けて返事を書いた。

――親愛なるウィーズリー様、御奥様。

面識していない方に多大なご迷惑をおかけしますが、ライカをどうぞお願いします。

ライカに聞いたところ試合後も泊まりたいと言いましたのでお言葉に甘え、試合後も滞在させていただきます。

なお、そちらには日曜に連れ添い姿現しにてお近くまでお伺いします。残念ながら私は御自宅までお伺いできませんが後はライカ一人で御自宅に伺わせて頂きます。

重ね重ねご迷惑をおかけしますが、どうぞよろしくお願いします。
追伸　ふくろう便は何とかたどり着きました――
（…こんなもんだろう）
「返事を届けて貰っても、いいかな?」
俺はふくろうに手紙を預けながら言った。
俺がふくろうに手紙を預け終えると、ふくろうはホーと鳴き、俺の指を甘噛みしてから去って行った。
俺はワールドカップについてワクワクしながら残りの休暇をロンのところで過ごすための荷造りを始めた。

五十二話

今日は日曜。早めにロンの家に行く予定だった。しかし今俺はロンの家でもホグワーツでもなく、ダイアゴン横丁に来ていた。

「あの、糞じじぃ！」

グシャッと俺は反射的に持っていた長い羊皮紙を握り潰した。

「授業の道具の買い足しならともかく…！」

ダンブルドアは俺に授業道具ならまだしも自分が食べるお菓子を買ってこい、と言い放った。長いリストを手に持ちながら。

当然俺は断った。そしたら給料を止めると返してきたのだ。…最悪だ。

ちなみに今は学生だがキッチリと給料は貰っている。元々はダンブルドアに言われて学生に潜り込んでいるのだから立派な仕事なのだ。給料が出るのが当たり前……そう考えていたのだがどうやら俺だけで、他の先生方に話すと驚かれる。

セブルスには学生なのだから教科書やちょとした材料、少しの小遣い分で足りるだろう？と言われたが足りるわけがない。授業とは別に趣味…いや研究？まぁ授業とは別に作る魔法薬の材料も馬鹿にならないのだ。給料を貰わないとやっていけない。

（…そうだ。それで糞狸はそれを知った上で止めると言うんだ！）

俺は握り潰した羊皮紙を広げ始める。

ダンブルドアのお菓子を買うためだけというのがイライラさせるが、仕方ない。早めに買って届けなければロンの家に行くのも遅くなってしまう。

俺は長いリストを読み取り始める。

――ゴソゴソゴキブリ豆板、百味ビーンズ？、砂糖羽根ペン、レモンキャンディー、トワイフル、蛙チョコレート、激辛ペッパー、バタービール？ｅｔｃ――

（おいおい、トワイフルならしもべ妖精に頼べば作ってくれるし、

バタービールはホグズミードへ行けよ！しかも百味ビーンズて嫌いだったよな？）

俺は内心ツッコミながら驚愕とした。

なぜならこのリストの中身を全て揃えるならばダイアゴン横丁だけでは無理だ。

ホグズミードにも行かなくてはいけないし、中にはマグルの店にしかないお菓子もあるのでマグル界にも行かなくてはならない。

お金はダンブルドアの物だがこれは少々大変なお使いだ。

俺は重いあしどりでまずダイアゴン横丁のお菓子屋へと向かう。

段々お菓子屋へと近づくと甘い匂いが漂い始める。

（…相変わらず、甘い匂いだな）

俺としてはお菓子屋は苦手だ。

なぜなら鼻が甘い匂いで使えなくなるからだ。目が見えない俺にとって匂いも貴重な情報になるのだが……此処では使えない。

（早めに、終わらせるか）

甘ったるい匂いの中、店内に入り頼まれたお菓子と別のお菓子を適当に入口で掴んだカゴにぶち込んだ。

（後は……なんだ？）

リストに書かれた量がハンパなく何度も確認したが次第に何を入れていないか分からなくなってしまった。

三十分くらいで諦め、カゴをレジに持って行った。……適当にいれたせいか金額がとてつもなく凄かったが気にしなかった。俺のお金じゃないし。

俺はダンブルドアから預かったお金で支払い、店を出た。

（次は……マグル界の方が近いな）

俺は漏れ鍋を通じて表通りへと出た。

俺はあまりマグル界の地理に詳しくないので適当にうろつき甘ったるい匂いがする店に入った。…多分お菓子屋だろう。

店内に入るとそこは本当にお菓子屋だったらしく俺はカゴを持ち、回り始める。始めはきちんとリストに書かれているお菓子をカゴに

入れるが途中でやはり分からなくなり適当にぶち込む。
ある程度お菓子がカゴに入ったところであらかじめグリンゴッツでマグルのお金に変えていた物で払った。…店員が明らかに不審な目で見ていたが気にしない。
マグルの店から出ると俺は姿現しでホグズミードへと出る。
ホグズミードのハニーデュークスにて同じ事を繰り返し、俺はホグワーツへ戻った。時刻はもう夕方だ。
ドカドカと廊下を走りダンブルドアの元へ向かった。
「ダンブルドア！」
ドアをこれでもかと煩い音であけ、広間にいるダンブルドアにあちこちで買ったお菓子を渡した。
「ライカ、どうやら買って来たようじゃな…」
「二度と、お菓子のためだけにこき使うな！しかも切らしたのはダンブルドアなんだから自分で行け！」
「なぁに、給料泥棒に少し働いて貰っただけじゃよ」
「…給料泥棒とは俺の事か？」
「そうじゃ」
俺は息をすい、大声で言い放つ。
「二度も、入学させたのはお前だろう！！アルバス・ダンブルドア！」
「タツキ、静かになさい！」
あまりにも煩かったのかマクゴナガル先生が俺に注意をする。
「マクゴナガル先生！ダンブルドアが―」
「ダンブルドア“先生”、です。確かにお菓子を切らしたのは本人の管理不足ですがそこまで大声で言う必要はないでしょう。いくら老人だからといっても先程のは大きすぎです。それほど元気ならば手伝ってくれますよね？」
「え？あ―俺、用事が…」
「手伝ってくれますよね？あれほど騒げるのですから」
「……はい」

マクゴナガル先生のあの淡々としたような物言いに何も言えなくなった。

…ゴメン、ロン。今日中に行けるか分からなくなったよ。

マクゴナガル先生の授業準備を手伝った後に何故かセブルスにこき使われ、調子に乗り出した先生方にもこき使われた。

（俺、先生方にどう見られているんだろうな？）

沸き上がる殺意をなんとか押し殺しながら早くロンの家に行けるように黙々と手伝いをこなしていった。

五十三話

「ふぁ……リストは…」
俺はリストを手に取り、階段を下りる。
俺は昨日何とかロンの家についた。
…日付が変わるギリギリに。
ウィーズリー夫妻は俺を待っていてくれたらしく、家についた途端に中へ入れてくれた。…申し訳ないな。
(先生方には今度悪戯を仕掛けるか…)
「おはよう、ライカ。リストは持ってきてくれたかしら?」
「おはようございます。昨日は夜遅くすみません。リストはこれです」
俺は話しかけてきたモリーにリストを渡した。なぜかというとクィディッチワールドカップがいつまで続くか分からないので、モリーが明日皆の教科書を買ってきてくれるそうだ。
「あら、別に構わないわ。遠い日本から来たんだから、遅れることもあるだろうし…」
…日本ではなくてイギリスに居たのだが…仮に日本からだとしても遅れすぎだろう。
「ビルとチャーリーと、ぱ、パァーシーは?」
ハリー達がリビングに下りてきてジョージが階段を下りながら聞いた。
「ああ、あの子たちは『姿現し』で行くんですよ。だから、もう少しお寝坊できるの」
フレッドが不機嫌そうに言う。
「それじゃ、連中はまだベッドかよ?俺達はなんで『姿現し』術を使っちゃいけないんだい?」
「あなたたちはまだその年齢じゃないのよ。テストも受けてないでしょ?それより女の子たちは何をしているのかしら?」

モリーはキッチンを出ていき、階段を上っていった。
「『姿現し』はテストに受からないといけないの？」
ハリーの質問にアーサーが答える。
「そうだとも。この間も、無免許で『姿現し』術を使った魔法使い二人に、『魔法運輸部』が罰金を科した。そう簡単じゃないんだよ、『姿現し』は。きちんとやらないと、厄介なことになりかねない。この二人は術を使ったのはいいが、バラけてしまった」
俺はアーサーに質問をする。
「どのくらいバラけたんですか？」
「体の半分が置いてけぼりだ」
「当然、にっちもさっちもいかない。どっちにも動けない。『魔法事故リセット部隊』が来て、何とかしてくれるのを待つばかりだ。事務的な事故処理が大変だったよ。置き去りになった体のパーツを目撃したマグルのことやらなんやら…」
「助かったんですか？」
ハリーが驚いて聞いた。
「そりゃ大丈夫。しかし相当な罰金だ。それに、あの連中はまたすぐに術を使うということもないだろう。『姿現し』は悪戯半分にやってはいけないんだよ。大の大人でも、使わない魔法使いが大勢いる。箒のほうがいいってね――遅いが、安全だ」
廊下から足音が聞こえてきて、キッチンにハーマイオニーとジニーが入ってきた。
「どうしてこんなに早起きしなきゃいけないの？」
ジニーが眠そうにアーサーに聞いてきた。
「結構歩かなくちゃならないんだ」
「歩く？え？僕たち、ワールドカップのところまで、歩いていくんですか？」
「いや、いや、それは何キロも向こうだ―」
しかしアーサーが言い終わるまでにモリーがジョージとフレッドから悪戯用具を見つけ、出発まで二人から悪戯用具を取り上げていた。

「それじゃ、楽しんでらっしゃい。お行儀よくするのよ！ビルとチャーリー、パーシーはお昼ごろそっちへやりますから」
外はまだ肌寒かったが俺達はアーサーについて行く。
「マグルたちに気づかれないように、みんないったいどうやってそこに行くの？」
ハリーは気になるのかリビングの話しを持ち出した。
「『移動キー』ですよね？」
「ライカ、大正解だよ。『姿現し』する魔法使いもいるが、未成年や『姿現し』をしたくない者は『移動キー』にて移動する。これは一度で大集団を運ぶ事が出来るからね。我が家に近いのがストーツヘッド・ヒルのてっぺんにある。いま、そこに向かっているんだよ」
俺達はそれからただひたすら歩いた。
太陽が出始めるくらいにストーツヘッド・ヒルの丘の上へとついた。
皆かなり息が上がっていたがこれから移動キーを探さなくてはいけない。
「やれやれ、ちょうどいい時間だ。――あと十分もある。さて、皆！『移動キー』を探して！そんなに大きい物じゃないはずだ…」
皆はフラフラと探しに散らばった。しかし二、三分もたたないうちに声が上がる。
「ここだ、アーサー！息子や、こっちだ。見つけたぞ」
丘の反対側から聞こえてきた。
「エイモス！」
アーサーがその声の持ち主へと向かうので俺達もついていった。
「みんな、エイモス・ディゴリーさんだよ」
皆がアーサーの元へ集まるとアーサーは自己紹介を始めた。
「『魔法生物規制管理部』にお勤めだ。皆、息子さんのセドリックは知ってるね？」
セドリックとはハッフルパフ寮の寮生で生徒の間ではかなり人気がある生徒だ。
「やぁ……君は初めてだね？」

「へ？ああ…そうだったね。グリフィンドール寮、四年生。ライカ・ヒブカ。よろしく」
「ハッフルパフ寮の七年生、セドリック・ディゴリー。よろしく」
俺はセドリックと握手を交わした。その間にアーサーとエイモスは話しているようだったが時間が迫っていた。
「さあ、さあ、あと一分だ。準備しないと…『移動キー』に触っていればいい。それだけだよ」
アーサーは最後のところはハリーとハーマイオニーに向けて言った。
俺達は輪になり移動キーに触れる。
「三秒…二…一」
ぐいっと引っ張られ移動キーが発動した。
足が地面に当たった。…どうやらついたみたいだ。
俺は立っていたが俺の他にアーサー、エイモス、セドリック以外は皆地べたに転がっていた。
そしてすぐにアナウンスが流れる。
「五時七ふーん。ストーツヘッド・ヒルからとうちゃーく」

五十四話

ハリー達が起き上がった時に魔法省なんだろうか、二人の魔法使いが側にやって来た。
「おはよう、バージル」
「やあ、アーサー。非番なのかい？まったく運がいいなぁ…わたしらは夜通しここだよ…さ、早くそこをどいて。五時十五分に黒い森から団体団が到着する。ちょっと待ってくれ。君のキャンプ場は…ここから四百メートルほどあっち。歩いていって最初にでくわすキャンプ場だ。管理人はロバーツさんという名だ。ディゴリー…二番目のキャンプ場ペインさんを探してくれ」
「ありがとう、バージル」
アーサーはお礼を言い、俺達はディゴリー一家と別れてキャンプ場へと向かった。
キャンプ場入り口に多分ロバーツさんだろう、その人が戸口にいた。
「おはよう！」
「おはよう」
「ロバーツさんですか？」
「あいよ。そうだが？おめぇさんは？」
「ウィーズリーです。テントを二張り、二、三日前に予約しましたよね？」
「あいよ。おめぇさんの場所はあそこの森の傍だ。一泊だけかね？」
「そうです」
「そんじゃ、いますぐ払ってくれるだろうな？」
「え？ああ――いいですとも――」
アーサーはマグルのお金が分からないのかハリーを連れて少し場所を離れた。
しばらくしてアーサーとハリーは戻ってきて何とか代金を払った。
「…おめぇさん、外国人かね？」

「外国人？」
アーサーはおうむ返しに言う。
「金勘定ができねぇのは、おめぇさんがはじめてじゃねぇ。十分前にも、二人ばっかり車のホイールキャップぐれぇのでっけぇ金貨で払おうとした」
「ほう、そんなのがいたかね？」
アーサーはマグルのような態度で答えているが、声が震えている。
「いままでこんなに混んだこたぁねぇ。何百ってぇ予約だ。客はだいたいフラッと現れるもんだが…」
「そうかね？」
アーサーはロバーツに釣りを受け取るために手を差し出す。
「そうよ。あっちこっちからだ。外国人だらけだ。それもただの外国人じゃねぇ。変わりもんよ。なぁ？キルトにポンチョ着て歩き回ってるやつもいる」
「いけないのかね？」
アーサーは心配そうに聞く。
…マグルは流行が激しいからな…今そんな服装をしていたら確実にマグルに怪しまれるだろう。
「なんていうか…その…集会かなんかみてぇな…お互いに知り合いみてぇだし、大がかりなパーティーかなんか―」
「オブリビエイト！忘れよ！」
ロバーツさんが言い終わる前に戸口近くにいた魔法使いが素早く忘却術をかけた。
「キャンプ場の地図だ。それと、釣だ」
「どうも、どうも」
俺達が動き出すとその魔法使いはキャンプ場入り口まで付き添ってくれた。アーサーと仲が良いのか二人で話している。
「あの男はなかなか厄介でね。『忘却術』を日に十回もかけないと機嫌が保てないんだ。しかもルード・バクマンがまた困り者で、あちこち飛び回ってはブラッジャーがどうの、クアッフルがどうのと

大声で喋っている。マグル安全対策なんてどこ吹く風だ。まったく、これが終わったらどんなにホッとするか。それじゃアーサー、またな」

その魔法使いはそう言ってから『姿くらまし』をした。

（バクマン、ね…）

ルード・バクマンとは魔法省に勤めていて『魔法ゲーム・スポーツ部』の部長だ。ただ…かなり甘い。現にマグル安全対策を軽視している。

「ここの場所がわたしたちのだ」

アーサーが言い、俺は立ち止まる。場所は森の際だった。

アーサーはリュックを降ろしながら言った。

「魔法は、厳密に言うと許されていない。これだけの数の魔法使いがマグルの土地に集まっているのだからな。テントは手作りでいくぞ！そんなに難しくはないだろう……マグルがいつもやっていることだし……さぁハリー、どこから始めればいいと思うかね？」

ハリーとハーマイオニーが頑張って杭の打つ場所を話し合って作っていたが…何やら会話を聞くと出来そうにない。

「アーサーさん、俺がやります。ハリー、ロン、ハーマイオニーは水を集めてきて。他の人達は薪をよろしく。ああ、アーサーさんは残ってください。どうせテントに魔法をかけるんでしょう？」

俺はアーサー以外を追い出し、杭を打ってさっさとテントを立てた。

「ほお、ライカはキャンプをしたことがあるのかね？」

アーサーが感心したように聞く。

「サバイバルならかなり」

「サバイバル？」

「はい。寝床から食料まで全て揃えるんです」

「…それはなんというか…」

アーサーは引いていた。まぁ確かに十四でサバイバルなどと言われたら引くだろう。…俺は幼い頃からそうしていたが今とは時代が違うからなぁ…

少し話してからアーサーはテントに入り、魔法をかけおえたちょうどその時に薪を集めた終わった子供達が帰ってきた。
「帰ってきたのか。薪はそこに置きなさい。火をつけるから」
皆は薪を置いてテントへと入っていく。アーサーはマッチを取り出し火をつけるが驚いて地面に落とす、を繰り返していた。
見兼ねた俺はアーサーからマッチを取り火をつける。
それから料理に取り掛かったが普段料理などしないのだろう。覚束なく、要領が良くない。時間がかかるだけだった。
結局料理も俺が無理矢理主導権を奪い作った。
俺が料理を作っている間にアーサーはハリーとハーマイオニーに魔法省の事について話しをしていた。ちょうどこのテントの位置は大通り辺りなので沢山の魔法使いが通る。ハリーとハーマイオニーにはちょうどいい勉強になるだろう。
調理の終盤にはビル、チャーリー、パーシーが『姿現し』にてテントへやって来た。
俺は三人分の食器を追加してテーブルへと持って行くと何故かルード・バクマンが座っていた。
（……アーサーか）
どうせここの席まで薦めたのはアーサーだろう。テントまで来たのはルード・バクマンだろうが。
俺はもう一度たき火のところへ行き、お茶の準備をする。
俺がルード・バクマンの元へお茶を持って行った時は話しが盛り上がっていた。
「バーサ・ジョーキンズの事は何か消息があったかね、ルード？」
バーサ・ジョーキンズは現在行方不明になっている魔女だ。
「なしのつぶてだ。だが、そのうち現れるさ。あのしょうがないバーサのことだ…漏れ鍋みたいな記憶力。方向音痴。迷子になったのさ。絶対間違いない。十月ごろになったら、ひょっこり役所に戻ってきて、まだ七月だと思っているだろうよ」
（それはないだろう…いくらなんでも酷すぎる）

俺がルード・バクマンにお茶を差し出したところでアーサーが遠慮がちに提案した。
「そろそろ捜索人を出して探したほうがいいんじゃないか？」
「パーティ・クラウチはそればっかり言ってるなぁ。しかし、いまはただの一人も無駄にはできん。おっ――噂をすればだ！パーティ！」
たき火近くに一人の魔法使いが『姿現し』をしてきた。
（……またか…）
俺は席を立ち、お茶を取りに行く。…何だか今の俺、モリーの位置にいるよな？
俺はお茶を入れ、パーティ・クラウチに差し出す。
「ああ、ありがとう」
パーティ・クラウチは一言お礼を言ってお茶を飲む。
「ところで、パーティ、忙しくしてるかね？」
バクマンはのどかに聞いた。
「かなり。五大陸にわたって『移動キー』を組織するのは並大抵のことではありませんぞ。ルード」
「二人とも、これが終わったらホッとするだろうね」
アーサーの言葉にルード・バクマンは驚いたように言った。
「ホッとだって！こんなに楽しんだことはないのに……それに、その先も楽しいことが待ち構えているじゃないか。え？パーティ？そうだろうが？まだまだやることがたくさんある。だろう？」
パーティ・クラウチが少し声を低く言う。
「まだそのことは公にしないと約束だろう。詳細がまだ―」
「ああ、詳細なんか！みんな署名したんだ。そうだろう？みんな合意したんだ。そうだろう？ここにいる子供達には、どのみちまもなくわかることだ。賭けてもいい。だって、事はホグワーツで怒るんだし―」
（ホグワーツ！？）
俺は咄嗟にホグワーツという言葉に反応した。

（…え？何か襲撃でもあるのか？）
「ルード、ブルガリア側に会わないと」
パーティ・クラウチはルード・バクマンを連れて『姿くらまし』で消えた。
夕方になるとあちらこちらで行商人が出てきて最早お祭り騒ぎだ。
俺はハリー、ロン、ハーマイオニーと店を回っていた。
「わあ、これを見てよ！万眼鏡だよ」
ハリーが興奮したように言った。
「アクション再生が出来る…スローモーションで…必要ならプレーを一コマずつ静止させることもできる。大安売り―一個十ガリオンだ」
「こんなの買わなきゃよかった」
ロンが自分で買った商品を見ていた。
「四個ください」
「いや、三個でいいです」
俺はハリーが販売員に言った言葉を撤回する。
「ライカ？」
「俺のは要らないよ。俺は見えないからね」
「あ！そうか…てっきり僕―」
「…何個？」
「あ、三個ください」
ハリーは販売員にお金を渡し、ハーマイオニーとロンに万眼鏡を渡した。
「いいよ――気を使うなよ」
こう言ったロンにハリーはこう言う。
「クリスマス・プレゼントはなしだよ。しかもこれから十年ぐらいはね」
「いいとも」
ロンは嬉しそうに言った。
「うわぁぁ、ハリー、ありがとう。私が四人分のプログラムを買う

わ」

そう言ってハーマイオニーは俺の分のプログラムも買ってくれた。

俺以外の財布が軽くなったところでテントへ戻る。

テントへ戻って数分後にゴーンと響く音が聞こえた。

興奮しながらアーサーが言った。

「いよいよだ！さぁ、行こう！」

五十五話

アーサーを先頭にスタジアムまで歩いていった。
「十万人入れるよ。魔法省の特務隊五百人が、まる一年がかりで準備したのだ。『マグル避け呪文』で一分の隙もない。この一年というもの、この近くまできたマグルは、突然急用を思いついて慌てて引き返すことになった……気の毒に」
アーサーの話しを聞きながら最上階の貴賓席へ移動する。
貴賓席へ座るとハリーやロンはキョロキョロと周りを見回していた。
（人、多くないか？）
俺は人の気配が多過ぎて気持ちが悪かった。魔力探知なんてもう使い物にならないし。
「ライカ、大丈夫かい？」
アーサーが心配したのか声をかけてくる。
「人、多過ぎやしません？」
「決勝戦だから今日の試合は見に来る人が特に多いんだよ」
（ああ、決勝戦。なるほど…）
「ドビー？」
ハリーが声を上げた。
（ドビー？確か屋敷しもべ妖精……だよな）
二年生の時に九と四分の三番線に行けなくした屋敷しもべ妖精だ。
「旦那さまはあたしのこと、ドビーってお呼びになりましたか？」
しもべ妖精はキーキーと甲高い声で言った。
「ごめんね、僕の知っている人じゃないかと思って」
…どうやらドビー、と言う屋敷しもべ妖精ではないようだ。
「でも旦那さま、あたしもドビーをご存知です！あたくしはウィンキーです。旦那さまは―」
そこからは二人で話しを続けていた。
「主人はどうしたのかしら？」

ハーマイオニーが憤怒したように言う。
「ハーマイオニー？」
「ライカ、聞いて！あの屋敷しもべ妖精は高い所がダメなのよ。現に震えているわ。なのに一人で椅子を取らせておくなんて！」
俺はハーマイオニーの話しに苦笑しながら聞いていたが、聞き逃せない事があった。
「ハーマイオニー、さっきの本当？」
「さっき？」
「一人って…」
「ああ…本当よ。椅子には誰もいないわ。ウィンキーが側で座っているだけよ。それで―」
そこから俺はハーマイオニーの話しを聞いていなかった。席が空いている？席は“全て埋まっている”んだがな…
「レディーズ・アンド・ジェントルメン……ようこそ！第四百二十二回、クィディッチ・ワールドカップ決勝戦にようこそ！」
会場にルード・バクマンの声が響いた。
「さて、前置きはこれくらいにして、早速ご紹介しましょう……ブルガリア・ナショナルチームマスコット！」
ワッと歓声が上がった。
「あーっ！ウ〝ィーラだ！」
アーサーが歓声の中こう叫ぶ。
（あー…大事になるぞ）
ウ〝ィーラには何と言うか……見たら何も思考出来なくなるほど美しいらしい。多くの…というかほとんどの男性が使えなくなる…とも聞いた。
ウ〝ィーラが退場するとともに怒号が上がった。
（やっぱりな…）
「さて、次は……どうぞ、杖を高く掲げてください……アイルランド・ナショナルチームのマスコットに向かって！」
何やら大きな音がした後、シャムロック達がパラパラと金貨を撒い

ていく。
「レプラコーンだ！」
アーサーはこう言いながら、ウロウロしていた。
（レプラコーンなら無くなる…よな？）
曖昧だったが確かその金貨は消えたはず…ならば拾っても無駄になるな。
「ほーら、万眼鏡の分だよ！これで君、僕にクリスマス・プレゼントを買わないといけないぞ、やーい」
ロンがハリーにこう言っているのが聞こえた。…クリスマス・プレゼントをこれでくれたらロンはかなり得だな。
「さて、レディーズ・アンド・ジェントルメン。どうぞ拍手を――ブルガリア・ナショナルチームです！ご紹介しましょう――ディミトロフ」
熱狂的な拍手が上がる。
「イワノバ、ゾグラフ、レブスキー、ボルチャノフ、ボルコフ、そしてぇぇぇ―クラム！」
ロンが興奮しながらクラムだ！と叫んだ。
「では皆さん、どうぞ拍手を――アイルランド・ナショナルチーム！」
ルード・バクマンは声を張り上げる。
「ご紹介しましょう――コノリー、ライアン、トロイ、マレット、モラン、クィグリー、そしてぇぇぇ―リンチ！」
風を切るような音が聞こえる。
「そして皆さん、はるばるエジプトからおいでの我らが審判、国際クィディッチ連盟の名チェア魔ン、ハッサン・モスタファー！」
一人の魔法使い…恐らく審判だろう、その人が箒にボールを放った後にルード・バクマンが叫ぶ。
「試ぁぁぁぁい、開始！」
「そしてあれはマレット！トロイ！モラン！ディミトロフ！またマレット！トロイ！レブスキー！モラン！」

…わけが分からないな。恐らく選手が速すぎて追いついていないのだろうが…目が見えない俺には中継しかないのに…
「ライカ、状況が分かるかい？」
アーサーが気を使って聞いてきた。
「ダメですね。人が多過ぎて気配や魔力が分かりにくいです」
「うむ……テントに戻っていても構わないよ。勿論、此処に居てもいい。どうする？」
…こんな中継ならば後でロン達に聞いた方がいいだろう。
「先に戻ります」
「分かった。またテントで」
俺は会場全体が興奮している中、席を立ちテントへ向かった。

五十六話

どうやら今回はすぐに終わったみたいだ。ハリー達は夜がふける前にはテントに帰ってきた。結果はブルガリア１６０対アイルランド１７０。クラム…ブルガリアがスニッチを取ったがアイルランドの勝利で終わるという珍しい結果だった。暫くはクィディッチについて話し合っていたがやがてアーサーが就寝を告げた。

俺はいつもまだ起きている時間なので眠い事がなく、アーサーと話しをしていた。

「クィディッチは楽しめたかい？目が見えないから心配していたんだが…」

「楽しいですよ。ワールドカップなんて初めてですし、こんなどんちゃん騒ぎなんてめったに―……何か騒がしくないですか？」

俺達は暫く無言だった。だがテントの外から大勢の悲鳴が聞こえる。

「此処にいるんだよ！」

アーサーはテントから出て行った。しかしすぐにテントへ戻ってきてハリー達を起こす。

「早く外へ出なさい―早く！」

…どうやら緊急事態みたいだ。俺もハリー達と一緒に外へ出る。

「わたしらは魔法省を助太刀する。お前達―森へ入りなさい。バラバラになるんじゃないぞ。片がついたら迎えに行くから！」

そう言ってビル、チャーリー、パーシー、アーサーは逃げ惑う人並みを逆らって去って行った。

「さぁ」

フレッドがジニーの手をつかみ、森の方へ引っ張る。俺達も森へと向かった。

（くそっ…人が多い！）

人並みが凄く、俺は揉まれながら走った。しかし気がついたらハリー達はおらず、また森ではない見知らぬ場所にいた。

「…逸れたか」
しかし一体何が起こっているのかが分からない。ついでに場所も何処だか分からない。
（……何かあったらどうしよう…）
まぁ未成年ではないので襲われてもやり返す事は出来るが…
「麻痺せよ！」
俺に向かって麻痺呪文が放たれる。
（……誰だ？）
俺は数歩右にずれた後に縛り呪文を相手に放った。しかし相手は盾の呪文を使い防ぐ。
「……誰？」
しかし相手は話さない。俺は捕まえて尋問でもしようかと杖を向けようと腕を動かした瞬間相手はいきなり怯えはじめ、すぐさま『姿くらまし』をしてしまった。
「いったい何なんだ？」
俺は杖を下ろす。
（とりあえず、何か奇襲的なものがあったと考えていいだろう…襲わたし。ただ…）
ただ、テントが分からない。どうやって帰ればいいのやら…
（動かない方がいいな）
俺はアーサーが来るのを待った。…というか待つしか無かったが…どれくらい時間が経ったのかは分からない。しかし待ちぼうけている俺の近くにポンッと音がし、アーサーが『姿現し』をしてきた。
「ライカ！此処にいたのか！」
「あ！アーサーさん」
「無事みたいでよかった。だが一応。襲われたりは無かったか？」
「普通に襲われましたよ」
「そうか、なか―…襲われた？」
「はい」
「け、怪我は！？」

「ありません」
「良かった。犯人は分かるかい？」
「…分かりません…撃退はしましたが何せいきなり襲われましたし、俺には目が見えないので特長とかも…」
「そうか……テントへ戻ろう。ロン達も心配している」
俺はアーサーについていきテントへ戻った。
テントでは先程の襲撃について話していた。襲撃したのは例の―…面倒くさいな。リドルでいいや。リドルの部下、『死喰い人』だった。…俺を襲ったのもそいつだろう。そんな『死喰い人』が引いた理由は闇の印が上がったから、だそうだ。闇の印とは奴らが活躍していた時に誰かを殺した時に打ち上げていた印だ。
（道理で引いたわけだ）
今いる『死喰い人』はリドルが力を失った時にアズカバンに行きたくないから関係ないとリドルを裏切った奴らしかいない。
皆で闇の印や『死喰い人』について話していたがアーサーから二度目の就寝を告げられて皆勿論俺もベッドへと戻った。

五十七話

翌日、結局俺は眠りにつく前にアーサーに起こされた。…どうやらいち早く此処を去るらしい。
マグルのロバーツさんは記憶修正を受け、ぼんやりとメリー・クリスマスと言っていた。
（あれの後はボケるからなぁ…）
ガヤガヤと魔法省に言い寄っている奴らを通り過ぎ皆で『移動キー』を使いストーツヘッド・ヒルへ戻った。
そこからは誰も話さず隠れ穴へと向かう。
「ああ！よかった。本当によかった！」
家に近づいた時にモリーの声が響いた。新聞かなにかでワールド・カップの事を知り、心配で外へ出ていたのだろう。
「アーサー――心配したわ――本当に心配したわ」
モリーはアーサーに抱き着きながら言った。
暫くして、モリーはアーサーから離れ俺達を見ながら言った。
「無事だったのね」
声が震えていた。―相当心配したのだろう。
俺達はとりあえず庭からキッチンへと入った。今はアーサーが新聞を読んでいる。しかし良いことは書いてないだろう。バッシングが多く、アーサーはブツブツ言った後パーシーと一緒に役所へ向かった。どうやらアーサーが魔法省の状況を悪くしたらしい。
「ウィーズリーおばさん、ヘドウィグが僕宛ての手紙を持ってきませんでしたか？」
ハリーがモリーに唐突に聞く。
「へ、ヘドウィグ？いいえ…来てませんよ。郵便は全然来てませんよ」
ハリーは意味深に言った。
「そうですか。それじゃ、ロン、君の部屋に荷物を置きにいっても

いいかな?」
「ウン……僕も行くよ。ハーマイオニー、ライカ、君達は?」
「ええ」
「行く」
俺達は2階へと上がりロンの部屋へと入る。
「ハリー、どうしたんだ?」
ロンがハリーに聞いた。
「君達にまだ話していない事があるんだ。土曜日の朝のことだけど、僕、また傷が痛んで目が覚めたんだ」
その一言は凄かった。ハーマイオニーはペラペラと参考書やダンブルドアに話すべきだと言った。ロンはポカンとし、やがて言った。
「だって―そこにはいなかったんだろ?『例のあの人』は?ほら―前に傷が痛んだとき『あの人』はホグワーツにいたんだ。そうだろう?」
「たしかに、プリベット通りにはいなかった。だけど、僕はあいつの夢を見たんだ…あいつとピーターの――ほら、あのワームテールだよ。もう全部思い出せないけど、あいつら、企んでたんだ。殺すって……誰かを」
ハリーの最後はいつもよりかはやけに間が空いた。
…きっとハリーは全てを聞いたはずだ。それを話さないのは殺す話しをしていた殺す相手はハリー…か。それに―
「たかが夢だろう」
ロンの声で俺の思考が途切れた。
「…トレローニー先生の言ったこと、覚えてるだろう?」
去年の試験…俺だけではなくてハリーも予言を受けた。内容は確か…闇の帝王が立ち上がるだったけ?そんな内容の予言だ。
「ハリー…あんなインチキさんの言うことを真に受けてるんじゃないでしょうね?…それよりどうしてヘドウィグが来たかって聞いたの?」
ハーマイオニーにとっては予言よりもそちらが気になったみたいだ。

「傷痕のこと、シリウスに知らせたのさ」
その言葉でハーマイオニーもロンも安心したのか別の話題に変わった。
（シリウスに、か。ならダンブルドアに知らせなくてもあいつが知らせるか…）
「―カ、ライカ？」
「へ？ハーマイオニー？」
「どうかしたの？二人はクィディッチもどきをしに行ったわよ？」
「あー…俺はいいや」
「そう？」
ハーマイオニーはそう言って一階へ下りて行った。
（ま、ユックリ過ごすかな…）

一週間はあっという間に過ぎ、俺達は今ホグワーツ特急に乗るために荷物を整理していた。
「これって、いったいなんのつもりだい？」
ロンが怪訝そうに何かをつまみながら言った。
コンコンとドアをノックしてモリーが入ってくる。
「さあ、皺ならないように、丁寧に詰めるんですよ」
モリーは一人一人にホグワーツの制服を渡す。ロンはつまんでいる洋服の事を言う。
「ママ、間違えてジニーの新しい洋服を僕によこしたよ」
「間違えてなんかいませんよ。それ、貴方のパーティー用ドレスローブですよ」
「エーッ！」
ロンは嫌そうな声を上げモリーはもう一度繰り返した。
「ドレスローブです！学校からのリストに、今年はドレスローブを

準備することって書いてあったわ――正装用のロープをね」
「悪い冗談だよ。こんなもの、ぜぇったい着ないから」
「ロン、みんな着るんですよ！」
モリーは不機嫌そうな声で言う。
「パーティー用のロープなんて、みんなそんなものです！お父様もちょっと正式なパーティー用に何枚か持ってらっしゃいます！」
「こんなものを着るぐらいなら、僕、裸で行くよ」
ロンは意地を張る。
「聞き分けのないことを言うんじゃありません！ドレスローブを持っていかなくちゃならないんです。リストにあるんですから！ハリー、ライカ、貴方達にも買ってあげたわ…ロンに見せてやって」
俺はローブだろう包みを探す。が、何せ回りが散らかり過ぎていて分からない。
（ど、どれ？）
ハリーは先に開けたのだろう、モリーの声が聞こえた。
「貴方の目の色によく映えると思ったのよ……ライカ、ローブの包みはこれよ」
モリーが俺に床にあった包みを直接渡してくれた。
俺はそれを受け取り開ける。触って確かめたが作りは制服と余り変わらなかった。俺は軽く羽織った。
「深紅の色よ。何故かその色が頭に浮かんだの。でも、よく似合ってるわね」
モリーが驚いたような声で言った。
まぁ、昔から何故か正装用ローブは深紅系が多かったけど…また深紅か。
「どうして僕にも同じようなのを買ってくれないの？」
「それは……その、貴方のは古着屋で買わなきゃならなかったの。あんまり色々選べなかったんです！」
（ま、仕方ないな）
親に甘えているのだ。それくらいは仕方がない。

「僕、ぜぇったいに着ないからね！」
ロンは頑固に言い張る。
「勝手におし。裸で行きなさい。ハリー、ライカ、忘れずにロンの写真を撮って送ってちょうだいね。母さんだってたまには笑うようなことがなきゃ、やりきれないわ」
モリーはパタンとドアを閉めて出て行った。
「僕の持っているものって、どうしてどれもこれもボロいんだろう？」
…俺からしたら羨ましい限りだが、それはやはり育った環境の違いだろう。
（それに、まだ子供だしな）
俺は荷物の詰め込みを再開した。

五十八話

朝、マグルのタクシーに乗りキングス・クロス駅へと向かった。そして駅からホグワーツ特急に乗り、セストラルの馬車にてホグワーツへ向かった。
ホグワーツへ着いた時はすごい雨で馬車からほんの少ししか離れていなかったのに皆びしょ濡れで大広間へ入る嵌めになった。…もちろん俺も。
マクゴナガル先生が一年生を引率して、組分け帽子の歌が始まる。
―いまを去ること一千年、そのまた昔その昔
私は縫われたばっかりで、糸も新し、真新し
そのころ生きた四天王
いまなおその名をとどらかす

荒野から来たグリフィンドール
勇猛果敢なグリフィンドール

谷川から来たレイブンクロー
賢明公正レイブンクロー

谷間から来たハッフルパフ
温厚柔和なハッフルパフ

湿原から来たスリザリン
俊敏狡猾スリザリン

ともに語らう夢、希望
ともに計らう大事業
魔法使いの卵をば、教えて育てん学び舎で

かくしてできたホグワーツ

四天王のそれぞれが
四つの寮を創設し
各自異なる徳目を
各自の寮で教え込む

グリフィンドールは勇気をば
何よりもよき徳とせり

レイブンクローは賢きを
だれよりも高く評価せり

ハッフルパフは勤勉を
資格のあるものとして選びとる

力に飢えしスリザリン
野望を何より好みけり

四天王の生きしとき
自ら選びし寮生を
四天王亡きその後は
いかに選ばんその資質?

グリフィンドールその人が
素早く脱いだその帽子
四天王たちそれぞれが
帽子に知識を吹き込んだ
代わりに帽子が選ぶよう!

被ってごらん。すっぽりと
私がまちがえたことはない
私が見よう。みなの頭
そして教えん。寮の名を！―
組分け帽子が歌い終わると大広間は割れるような拍手が起こった。
（…相変わらず暇そうだな）
この歌は毎年違う。昔は統一していたが日頃振り回していた俺がいなくなってから暇になったのだろう、毎年変えている。…どうして俺が生きて…今も生きているが、その時に毎年変えなかったんだ！毎年同じで飽きていたのに！
「アッカリー・スチュワード！」
マクゴナガル先生が一年生の名前を言い出した。…組分けの始まりだ。
それからは次々と寮が決まっていき、「ホイットビー・ケビン！」「ハッフルパフ！」で組分けが終わった。
ダンブルドアが立ち上がり言い放つ。
「皆に言う言葉は二つだけじゃ。思いっきり、掻っ込め」
その言葉を合図に料理が並ぶ。ロンやハリーは詰め込めるだけ詰め込めんだ。
（…早いな）
二人はもうスピードで食べていく。…いやはや、成長期は恐ろしいな。
「今晩はご馳走が出ただけでも運がよかったのですよ」
ニックはこう切り出した。
「先程厨房で問題が起きましてね」
「何があっラの？」
ハリーはモゴモゴと言った。
「ピーブズですよ、またいつもの議論です。ピーブズが祝宴に参加したいと駄々をこねまして―全く無理な話しです。行儀作法も知らず、食べ物の皿を見ればなげつけずにはいられないやつです。『ゴ

ースト評議会』を開きましたが、ダメだということで終わりました」
ロンがニックに聞く。
「厨房で何やったの？」
「いつものとおりです。何もかもひっくり返しての大暴れ。鍋は投げるし、釜は投げるし。厨房はスープの海。屋敷しもべ妖精がものを言えないほど怖がって―」
ガチャンとハーマイオニーのところから音が出た。
「屋敷しもべ妖精が此処にもいるの？このホグワーツに？」
「さよう。イギリス中のどの屋敷よりも大勢いるでしょうな。百人以上」
「私、一人も見たことがないわ！」
「そう、日中は厨房を離れることはないのですよ。夜になると出て来て掃除したり…火の始末をしたり…姿を見られないようにするのですよ…いい屋敷しもべ妖精の証拠でしょうが？存在を気づかれないのは」
「でも、お給料はもらっているわよね？お休みももらってるわよね？それに―病欠とか、年金とかいろいろも？」
ニックは笑いはじめた。
「び、病欠に年金？屋敷しもべ妖精は病欠や年金を望んではいません！」
ハーマイオニーは何かを遠ざけた。恐らく料理だろう。
ロンはハーマイオニーに声をかける。
「君が絶食したって、しもべ妖精が病欠を取れるわけじゃないよ！」
「奴隷労働よ！このご馳走を作ったのが、それなんだわ。奴隷労働！」
俺は奴隷労働の言葉に反応する。…かつては、俺がしていた事だった。
夕食が終わりデザートが出されたが俺は食べなかった。ハーマイオニーも。
しばらくするとデザートも下がったみたいでダンブルドアが立ち上

がる。
「さて、みなよく食べ、飲んじゃことじゃろう。いくつか知らせがある。管理人のフィルチさんから、持ち込み禁止品がいくつか増えた。『叫びヨーヨー』とかじゃな。リストはフィルチさんの事務所で閲覧可能じゃ。確認したい生徒がいればじゃが」
ダンブルドアは一息いれ、話す。
「校庭内にある森は生徒立入禁止。ホグズミード村も三年生になるまでは禁止じゃ。それと今年は寮対抗クィディッチ試合は取りやめじゃ。これには十月に始まり、今学期終わりまで続くイベントのためじゃ先生方もほとんどの時間とエネルギーを費やすことになる。しかしじゃ、今年ホグワーツで―」
しかしダンブルドアが言い終わる前に大広間の扉を開けて一人の魔法使いが入ってきた。
「『闇の魔術に対する防衛術』の新しい先生をご紹介しよう。ムーディー先生です」
拍手したのは俺とダンブルドア、ハグリッドだけだった。
（ムーディー、ねぇ）
ムーディーとはマッド・アイ・ムーディーと言い凄腕の闇払いだった。…引退したが。
（……なんだ？おかしいな？）
明らかにムーディーの部屋…か？ムーディーの部屋かは分からないが魔力が一つ多い。…ゴーストとかは勝手には増えないし…
「先程言いかけていたことを話そうかの。これから数ヶ月にわたり、我が校はまことに心躍るイベントを主催する。この催しは百年以上行われていない。今年、ホグワーツで三大魔法学校対抗試合を行う」
…三大魔法学校か。ならボーバトン、ダームストラングかな？距離的に。
「さて、三大魔法学校対抗試合はおよそ七百年前、ヨーロッパの三大魔法学校の親善試合として始まったものじゃ――ホグワーツ、ボーバトン、ダームストラングの三校での、それぞれ代表選手が一人

ずつ選ばれ、魔法競技を争った。五年ごとに三校が持ち回りで主催をしておった。―おびただしい死者が出るにいたって中止されるまではの。何世紀にも渡って試合を再開しようと試みられたのじゃが、どれも成功しなかったのじゃ。しかし我が国の『国際魔法協力部』と『魔法ゲーム・スポーツ部』とが協力し、企画した。ボーバトン、ダームストラングの校長が最終代表選手の候補生を連れて十月に来校し、ハロウィーンの日に選考が行われる。公明正大なる審査員にて優勝者を決め、優勝者には一千ガリオンが送られる。しかし今年の選手に年齢制限を設けることにした。十七歳以上―六、七年生だけじゃ。ボーバトン、ダームストラングの両校は十月に到着後、我が校に留まる。客人が滞在する間、皆、礼儀と厚情を尽くすことと信ずる。さてと、夜も更けた。明日から授業に備えて、ゆっくりお休み、ハッキリした頭で臨むことが大切じゃと、皆そう思っておるじゃろうの。就職！ほれほれ！」

俺達はバタバタと寮へ向かう。その道中で話題になったのは三大魔法学校対抗試合だった。フレッドとジョージは年齢制限に文句を言い、審査を通り抜ける、と張り切っていた。

（…そうそう簡単に抜け出せないようにしているだろうな、ダンブルドアの事だし）

俺達は『太った婦人』に合言葉をいい寮へ入る。

談話室でもフレッドやジョージは変わらず三大魔法学校対抗試合について話し、ロンは一千ガリオンでほうけていてハーマイオニーは屋敷しもべ妖精についてぶつぶつ言っていてハリーも何だか夢心地な感じだった。

俺は皆を置いて部屋へと戻った。

五十九話

翌朝、朝1番の授業である『薬草学』を受ける為に俺達は温室へと入った。
スプラウト先生はキビキビと言った。
「ブボチューバー、腫れ草です。搾ってやらないといけません。みんな、膿を集めて―」
（うわぁ、面倒な…）
俺はドラゴン革の手袋をして腫れ草に触る。強烈な石油みたいな匂いがしたらつかさず瓶に詰めた。
あちらこちらで同じような匂いを散々嗅いだおかげで、授業が終わり次第俺はすぐさま温室を飛び出し次の授業である『魔法生物飼育学』へ向かった。
「おう、ライカ！早かったなぁ、だがスリザリン生を待ったほうがええ。あの子たちもこいつを見逃したくはねぇだろう――『尻尾爆発スクリュート』だ！」
…尻尾爆発スクリュート？俺が何処かで名前を聞いたくらいだぞ、それは。しかもここら辺にはいないはずだから…また何処からか貰ってきたな。
「いまかえったばっかしだ」
ハグリッドは得意げに言う。
（やっぱり貰ったな。しかも卵）
俺はため息をつく。
「だから、おまえたちが自分で育てられるっちゅうわけだ！そいつをちょいとプロジェクトにしようと思っちょる！」
「それで、なぜわれわれがそんなのを育てなきゃならないのでしょうねぇ？」
スリザリン生が到着しており、こう言ったのはマルフォイだった。
（何でこいつこの教科を取ってんの？）

魔法生物が好きならばこんな意見は出ない。…どうせ楽そうな教科だから取ったのだろうけど。

「マルフォイ、そいつは次の授業だ。今日はみんな餌をやるだけだ。さあ、いろんな餌をやってみろよ―俺はこいつらを飼ったことがねぇんで、何を食うのかよくわからん―アリの卵、蛙のキモ、それと、毒のねぇヤマカガシをちぃと用意してある―全部ちーっとずつ試してみろや」

俺はスクリュートが入れてある木箱に色々入れてみた。…食べてる気配はしない。

「アイタッ！尻尾が爆発した！」

生徒の一人が尻尾爆発スクリュートの爆発に巻き込まれた。

「ギャー！ハ、ハグリッド、あの尖ったものは何？」

「ああ、針を持ったやつもいる。たぶん、雄だな。雌は腹ンところに吸盤のようなものがある…血を吸うためじゃねえかと思う」

あちらこちらで悲鳴が起こる。…確か、卵がかえったばっかりだと言っていたな。これが大きくなったら…うん。考えるのを止めよう。

結局スクリュートの好物どころか食べる物すら分からないまま授業が終わった。

昼食を食べた後は『占い学』だった。

今学期から惑星の動き、天体について入った。ただ…授業中にロンが下品な言葉遊びをし、それが先生の耳に入ったのだろう。一ヶ月の惑星の動きを見て予言をしろ、と課題を出された。

（あーあ、『占い学』の課題か…）

これからの課題に嫌気をさしながら教室を出て行った。

六十話

（『闇の魔術に対する防衛術』か）

今から『闇の魔術に対する防衛術』の授業が始まる。この教科は二年次の時以外なら何かしら問題はあったが何とか授業になっていた。

（今年はどうなるやら…）

教室は異様にシンと静まり返り、コツコツと足音が聞こえ、ムーディーが入ってきた。

「そんな物、しまってしまえ」

ムーディーは席に座りながら言った。

「教科書だ。そんな物は必要ない」

ガタガタと教科書をかばんにしまう。

ムーディーは出席を取り、最後の生徒が返事を終えると話し始めた。

「このクラスについては、ルーピン先生から手紙をもらっている。おまえたちは、闇の怪物と対決するための基本をかなり万遍なく学んだようだ―まね妖怪、赤帽鬼、おいでおいで妖怪、水魔、河童、人狼など。そうだな？」

ガヤガヤと皆が同意する。

「しかし、おまえたちは、遅れている―非常に遅れている―呪いの扱い方についてだ。そこで、わしの役目は、魔法使い同士が互いにどこまで呪い合えるものなのか、おまえたちを最低線まで引き上げることにある。わしの持ち時間は一年だ。その間におまえたちにどうすれば闇の―」

「え？ずっといるんじゃないの？」

思わずだろうがロンがムーディーの話しを遮った。

「おまえはアーサー・ウィーズリーの息子だな、え？おまえの父親のお陰で、数日前、窮地を脱した……ああ、一年だけだ。ダンブルドアのために特別にな……一年。その後は静かな隠遁生活に戻る」

ムーディーはしわがれた声で笑った。

「では―すぐ取り掛かる。呪いだ。呪う力も形もさまざまだ。さて、魔法省によれば、わしが教えるべきは反対呪文であり、そこまでで終わりだ。違法とされる闇の呪文がどんなものか、六年生になるまでは生徒に見せてはいかんことになっている。おまえたちは幼すぎ、呪文を見ることさえ堪えられぬ、というわけだ。しかし、ダンブルドア校長はおまえたちの根性をもっと高く評価しておられる。校長はおまえたちが堪えられるとお考えだし、わしに言わせれば、戦うべき相手は早く知れば知るほどよい。見たこともないものから、どうやって身を守るというのだ？いましも違法な呪いをかけようという魔法使いが、これからこういう呪文をかけますなどと、教えてはくれまい。面と向かって、やさしく礼儀正しく闇の呪文をかけてくれたりはせん。おまえたちのほうに備えがなければならん。緊張し、警戒していなければならんのだ。ミス・ブラウン、わしが話しているときは、そんな物はしまっておかねばならんのだ」

ムーディーが生徒の一人を注意した。

「さて……魔法法律により、最も厳しく罰せられる呪文が何か知っている者はいるか？」

何人かが手を挙げる。そしてムーディーはロンを指した。

（以外と知っているんだな…）

「えーと、パパが一つ話してくれたんですけど……たしか『服従の呪文』とかなんとか？」

「ああ、そのとおりだ。おまえの父親なら確かにそいつを知っているはずだ。一時期魔法省をてこずらせた事がある。『服従の呪文』はな」

ムーディーは机の引き出しから蜘蛛を三匹取りだし、一匹を捕まえ、机に置いた。

「インペリオ！服従せよ！」

蜘蛛はムーディーになされるままだった。クルクルととんぼ返り…だろうか？そのような事をしたり、後ろ足二本で歩いたり……

俺とムーディー以外皆が笑った。

「面白いと思うのか？わしがおまえたちに同じことをしたら、喜ぶか？」
笑い声は一瞬で消える。
「完全な支配だ。わしはこいつを、思いのままにできる。窓から飛び降りさせることも、水に溺れさすことも、誰かの喉に飛び込ませる事も……」
「何年も前になるが、多くの魔法使いたちがこの『服従の呪文』に支配された。だれが無理に動かされているのか、だれが自らの意思で動いているのか、それを見分けるのが魔法省にとって一仕事だった。だが『服従の呪文』と戦うことはできる。これからそのやり方を教えていこう。しかし、これには個人の持つ真の力が必要で、だれにでもできるわけではない。できれば呪文をかけられぬようにするほうがよい。油断大敵！」
ムーディーは蜘蛛を掴み、戻した。
「他の呪文を知っている者はいるか？何か禁じられた呪文を？」
先程ではないが何人かが手を挙げた。ムーディーはその中からネビルを指した。
「一つだけ―『磔の呪文』」
（…ネビルは知っているのか…まあ、知らないほうがおかしいか…）
「おまえはロングボトムという名だな？」
ムーディーも気付いたみたいだ。しかし何も言わなかった。
「『磔の呪文』…それがどんなものか分かるように、少し大きくする必要がある。エンゴージオ！肥大せよ！」
ムーディーから肥大呪文が放たれた。
「クルーシオ！苦しめ！」
ムーディーは即座に磔の呪文を放った。
「やめて！」
しばらくしてからハーマイオニーがネビルを見ながら言った。
「レデュシオ！縮め！」
ムーディーは縮む呪文を放ち、磔の呪文を終わらせた。

ムーディーはその蜘蛛を戻し、残りの蜘蛛を出した。
「苦痛」
ムーディーは静かに言った。
「『磔の呪文』が使えれば、拷問に『親指締め』もナイフも必要ない……これも、かつて盛んに使われた」
「よろしい……ほかの呪文を何か知っている者はいるか？」
「アバダ　ケダブラ」
ハーマイオニーが囁くように言った。
「ああ……そうだ。最後にして最悪の呪文。『アバダ　ケダブラ』……死の呪いだ」
ムーディーは蜘蛛に杖を向ける。
「アバダ　ケダブラ！」
ムーディーが蜘蛛に呪文を当てる。ただそれだけで蜘蛛は死んだ。
「よくない」
「気持ちのよいものではない。しかも、反対呪文は存在しない。防ぎようがない。これを受けて生き残った者はただ一人。その者は、わしの目の前に座っている」
ムーディーはハリーを見つめた。
（確かに、反対呪文は存在しない。けれど防ぎようがないわけではない。相手より自分の魔力が格段に高ければ相殺できる…）
最も、そんなに飛び抜けた魔力の持ち主なんて今の時代にはもういないだろう。…俺がいた時代ですら数人だけだった。
「『アバダ　ケダブラ』の呪いの裏には強力な魔力が必要だ―おまえたちがこぞって杖を取りだし、わしに向けてこの呪文を唱えたところで、わしに鼻血さえださせることができるものか。しかし、そんなことはどうでもよい。わしは、おまえたちにそのやり方を教えにきているわけじゃない」
「さて、反対呪文がないなら、なぜおまえたちに見せたりするのか？それは、おまえたちが知っておかねばならないからだ。最悪の事態がとういうものか、おまえたちは味わっておかなければならない。

せいぜいそんなものと向き合うような目に遭わぬようにするんだな。油断大敵！」

ムーディーが声を上げた。

「さて…この三つの呪文だが―『アバダ　ケダブラ』、『服従の呪文』、『磔の呪文』―これらは『許されざる呪文』と呼ばれる。同類である人に対して、このうちどれか一つの呪いをかけるだけで、アズカバンで終身刑を受けるに値する。おまえたちが立ち向かうのは、そういうものなのだ。そういうものに対しての戦い方を、わしはおまえたちに教えなければならない。備えが必要だ。武装が必要だ。しかし、何よりもまず、常に、絶えず、警戒することの訓練が必要だ。羽根ペンを出せ…これを書き取れ…」

授業が終わるまで書き取りだった。…俺は書いてないが。

授業が終わって俺は部屋へ戻り、食事をした。…今大広間へ行ったらハリーとかちあうだろう。俺は気のきいた事は言えない性格なので部屋で食べた。

夕食の後、俺は『占い学』の課題をするために談話室へとおりた。…別に部屋でも課題は出来るが、何かと人が多い談話室だと蹲いたときにいいアイデア（でっちあげ）が拾えると思い談話室へ向かったのだ。

談話室の椅子に腰掛け、課題をしているとハリーとロンも課題をするために下りてきた。二人は俺の隣に座り、課題をやりはじめた。俺が終わった時には二人も終わりかけだった。…でっちあげた運勢予言だったが。

（…俺もいくつかはでっちあげたが全てはしていないぞ…）

二人は案外…というか確実に俺より向いていないと思う。そもそも、この学科は向いている人が少ないが…

「こんばんは、ついにできたわ！」

ハーマイオニーが俺達に声をかけた。

「中身は何？」

ハリーはハーマイオニーに向けて言った。…何かを持っているのだ

ろう。
「これよ」
ハーマイオニーはS・P・E・Wとかかれたバッジを取り出した。
「スピュー？何に使うの？」
ハリーはバッジを持ちながら聞いた。
「スピュー（反吐）じゃないわ。エス―ピー―イー―ダブリュー…つまりエスは協会、ピーは振興、イーはしもべ妖精、ダブリューは福祉の頭文字。しもべ妖精福祉振興協会よ」
「聞いたことないなあ」
ロンが言った。
「当然よ。私が始めたばかりです」
「へぇ？メンバーは何人いるんだい？」
「そうね―あなたたちが入会すれば四人」
「それじゃ僕達が『スピュー（反吐）』なんて書いたバッジを着けて歩き回ると思っているわけ？」
「エス―ピー―イー―ダブリュー！」
ハーマイオニーは熱く言った。
「ほんとは『魔法生物仲間の目に余る虐待を阻止し、その法的立場を変えるためのキャンペーン』とするつもりだったの。でも入りきらなくてそっちの宣言分を作ったの」
「私、図書館で徹底的に調べたわ。小人妖精の奴隷制度は何世紀も前から続いているの。これまでだれもなんにもしなかったなんて、信じられないわ」
「ハーマイオニー、耳を覚ませ！あいつらは、奴隷が、好き。奴隷でいるのが好きなんだ！」
ハーマイオニーは聞かなかった。
「私たちの短期的目標は、屋敷しもべ妖精の正当な報酬と労働条件を確保することである。私たちの長期的目標は以下の事項を含む。杖の使用禁止に関する法律改正。しもべ妖精代表を一人、『魔法生物規制管理部』に参加させること。なぜなら、彼らの代表権は愕然

とするほど無視されているからである」
ガタンと俺は席を立つ。
「ライカ？」
「ハーマイオニー…それに俺は参加出来ない。ハリーとロンでして」
俺はそう言って談話室を後にした。
（しもべ妖精の権利どうのこうの言っているだけならいいんだけどな…）
それを行動にして、万が一通ったらまた元通りになってしまうかもしれない。それだけは避けないと、彼の選択した行動が無駄になってしまう。
（まあ、有り得ないだろうがな）
今やしもべ妖精にああ言うのはハーマイオニーだけだし、しもべ妖精もそんなことは望んでいない。
俺は部屋に戻り、机に課題を置いてからベッドの中へもぐった。

六十一話

授業が難しくなっていく中で数週間後の『闇の魔術に対する防衛術』がそうだった。
ムーディーは生徒一人ひとりに「服従の呪文」をかけて呪文の力を示し、果して生徒がその力に抵抗できるかどうかを試す、と。
（…いかにもいまからでも襲われるみたいなやり方だな）
まぁ、先生によって授業は変わるしな。
ムーディーは一人ひとり呼び出して『服従の呪文』をかけていく。
誰ひとり解くことは出来ず、リスの真似や片足ケンケン跳び？それらをやっていく。
「ヒブカ、次だ」
（あーあ…来たよ。魔力下げないと…）
ムーディーが呼び、俺は魔力の量を生徒と同じくらいにしてから教室の中央へ立った。
「インペリオ！服従せよ！」
思考が消えた。まさに何も考えず、ただ突っ立っているだけだ。
―ウサギ跳びをしろ
頭の中でムーディーの声が響く。
…冗談だろ？こんな平で何もないところでウサギ跳びをしても何も鍛える事ができない。するだけ無駄だ。
―今すぐに、やるんだ。
けれど俺は動かない。
…貴様ごときに俺を支配できると？
―跳ぶんだ！すぐに！
プツリ、と何かが切れた音がした。
「エクスペリアームス！武器を去れ！」
俺はムーディーに向かって武装解除を使った。ムーディーは『服従の呪文』どころじゃなく、急いで盾の呪文を使ったが間に合わずぶ

っ飛んで行った。
「しつこいんだよ。従わないならば早々に手を変えないと今みたいにやられますよ？ムーディー先生」
ムーディーは激しく壁にぶつかったせいか気を失っていた。
（…やり過ぎた…）
けれど『服従の呪文』を破る為の行為だと解釈されて罰則も説教もなかった。…ありがたい。
四年生になってからますます宿題の量が増えた。まぁ仕方がないが。
次の授業の『変身術』にてあまりにも多くて呻き声があがった。
「皆さんはいま、魔法教育の中で最も大切な段階の一つに来ています！」
「『O・W・L』、一般に『ふくろう』と呼ばれる『普通魔法レベル試験』が近づいています―」ディーン・トーマスが憤慨しながら言った。
「『O・W・L』を受けるのは五年生になってからです！」
「そうかもしれません、トーマス。しかし、いいですか。皆さんは十二分に準備をしないといけません！このクラスでハリネズミをまともな針山に変えることができたのは、ミス・グレンジャー、ミスター・ヒブカの二人だけです。お忘れではないでしょうね、トーマス、あなたの針山は、何度やってもだれかが針を持って近づくと怖がって丸まってばかりいたでしょう！」
…一応、教職にいるからこれくらいは出来ないとまず採用されないからな。…というか他のところでも就職はないんじゃないか？
他にも占い学、魔法史、魔法生物飼育学、魔法薬学、呪文学など次々に宿題が出されていく。
そん中気がついたら、ボーバトンとダームストラングが来る日になっていた。
最後の授業は『魔法薬学』でそれが終わり次第生徒は全員玄関ホールへ向かった。
各寮の先生方が神経質に生徒を注意していく。

「どうやって来ると思う？汽車かな？」
「違うと思う」
ロン、ハリー、ハーマイオニーは二校がどうやって来るのかを予測していた。…ハリー達以外にも皆同じことを話しているのだが。
（…来たか。空と…湖からか？空が早いな）
「ほっほー！わしの目に狂いがなければ、ボーバトンの代表団が近づいてくるぞ！」
生徒達は一斉にキョロキョロし始めた。
（この魔力は天馬か、これまたこちらにはいないものを）
きっと馬の世話は『魔法生物飼育学』の教授であるハグリッドになるだろうな。
馬がホグワーツに着き、馬車から一人の女性が出て来た。
「これはこれは、マダム・マクシーム。ようこそ、ホグワーツへ」
「ダンブリー・ドール」
ブッと俺は吹き出してしまった。しかしマダム・マクシームの声で誰にも聞こえなかったみたいだ。
「ニャー」
ペチペチと俺の足を叩く。…フィンラだけは聞こえていたみたいだな。
「カルカロフはまだきーませんか？」
「もうすぐ来るじゃろう。外でお待ちになってお出迎えなさるかな？それとも城中に入られて、ちと、暖を取られますかな？」
「あたたまりたーいです。でもウーマは―」
「こちらの『魔法生物飼育学』の先生が喜んでお世話をするじゃろう」
「どうぞ、そのアグリッドに、ウーマはシングルモルト・ウィスキーしかのまなーいとおつたえくーださいますか？」
「畏まりました」
（へー…ダンブルドア、以外と接客出来るんだな。ん？ああ、来たな）

ダームストラング校はどうやら船できたみいだ。下船してこちらへやって来た。
「ダンブルドア！」
「やあやあ。しばらく。元気かね」
「元気いっぱいじゃよ。カルカロフ校長」
（カルカロフ…確か死喰い人だったよな？）
「懐かしいのホグワーツ城。ここに来れたのは嬉しい。実に嬉しい……ビクトール、こっちへ。暖かいところへ来るがいい…ダンブルドア、構わないかね？ビクトールは風邪気味なので」
「クラムだ！」
ロンは興奮したように言った。

六十二話

「まさか！クラムだぜ、ハリー、ライカ！ビクトール・クラム」
ロンは興奮状態だった。いや、ロンだけではない。あちらこちらでサインを貰おうと自分のポケットを探っていた。
（…凄い人気だな）
俺達はダームストラングと一緒に大広間へ入った。
次々に先生方も着席していき、ダンブルドアが話し出す。
「こんばんは。紳士、淑女、そしてゴーストの皆さん。そしてまた―今夜はとくに―客人の皆さん。ホグワーツへのおいでを、心から歓迎いたしますぞ。本校での滞在が、快適で楽しいものになることを、わしは希望し、また確信しておる。三校対抗試合は、この宴が終わると正式に開始される」
「さあ、それでは大いに飲み、食い、かつ寛いでください」
その言葉を皮切りにあちこち料理が現れる。
料理はイギリスのだけではなくてフランスのブイヤベースなど、あちこちの料理も出されていた。
（これまた張り切ったな…）
内心屋敷しもべ妖精達に苦笑しなが料理を取り、食べていく。しばらくするとデザートが出され、ロンやハリー達が目一杯食べた後、消えた。
ダンブルドアが立ち上がり話し始める。
「時は来た。三大魔法学校対抗試合はまさに始まろうとしておる。『箱』を持ってこさせる前に、二言三言説明しておこうかの。まずこちらの二人の紹介から、国際魔法協力部部長、パーテミウス・クラウチ氏、魔法ゲーム・スポーツ部部長、ルード・バクマン氏じゃ」
パチパチと拍手が起こる。
「バクマン氏とクラウチ氏はこの数ヶ月というもの、三校対抗試合の準備に骨身を惜しまず尽力されてきた。そして、おふた方にはカ

ルカロフ校長、マダム・マクシーム、それにこのわしとともに、代表選手の健闘ぶりを評価する審査委員会に加わってくださる」

生徒達はみな代表選手の言葉で静まり返る。

「それでは、フィルチさん、箱をこれへ」

フィルチがダンブルドアへ箱を持って来た。

「代表選手たちが今年取り組むべき課題の内容は、すでにクラウチ氏とバクマン氏が検討し終えている。さらに、おふた方は、それぞれの課題に必要な手配もしてくださった。課題は三つあり、今学期一年間にわたって、間を置いて行われ、代表選手はあらゆる角度から試される―魔力の卓越性―果敢な勇気―論理・推理力―そして、言うまでもなく、危険に対処する能力などじゃ」

この言葉で大広間は完璧に沈黙した。

「皆も知ってのとおり、試合を競うのは三人の代表選手じゃ。参加校から各一人ずつ。選手は課題の一つひとつをどのように巧みにこなすかで採点され、三つの課題の総合点が最も高い者が優勝杯を獲得する。代表選手を選ぶのは、公正なる選者……『炎のゴブレット』じゃ」

ダンブルドアは杖を取りだし、振るった。

「代表選手に名乗りを上げたい者は、羊皮紙に名前と所属校名をはっきりと書き、このゴブレットの中に入れなければならぬ。立候補の志ある者は、これから二十四時間の内に、その名を提出するよう。明日、ハロウィーンの夜に、ゴブレットは各校を代表するに最もふさわしいと判断した三人の名前を、返してよこすであろう。このゴブレットは今夜玄関ホールに置かれる。我と思わん者は、自由に近づくがよい。じゃが、年齢に満たない生徒が誘惑に駆られることのないよう『炎のゴブレット』の周囲に『年齢線』を引くことにする。十七歳に満たない者は、何人もその線は越えられぬ」

「最後に、この試合で競おうとする者にははっきり言うておこう。軽々しく名乗りを上げぬことじゃ。『炎のゴブレット』がいったん代表選手と選んだ者は、最後まで試合を戦い抜く義務がある。ゴブ

レットに名前を入れるということは魔法契約によって拘束されることじゃ。代表選手になったからには、途中で気が変わるということは許されぬ。よく考えてから入れることじゃ。―さて、もう寝る時間じゃ。皆、お休み」

生徒達がガヤガヤと大広間を出て行く。俺もその生徒達に紛れながらグリフィンドール寮へと戻った。

翌日は土曜日で授業は無かった。

（何をしようか…）

俺は大広間へとは下りず、部屋で朝食を食べていた。…俺が大広間へ行かなかったのは、今下りたら玄関ホールを見張る生徒が必ずいるだろうから、かなり混み合うだろうと思ったからだ。

（…隠し部屋の点検は疲れるし…あぁ、私部屋の掃除がいいかもな）

この前訪れた時には余りにも埃や物の劣化等が酷くて部屋が汚かった。まぁ千年以上経っていれば当たり前だろうが…

「フィンラ、君はお留守番ね」

あの部屋は俺の趣味の物で埋まっている。中には危険な物があるのでフィンラは連れて行けない。今に始まった事ではないのでフィンラもニャーと言ってどこかへ去って行った。

「さて、行きますか」

俺はグリフィンドール寮から階段へと向かい、普段生徒が行かない上へと昇る。

そこらまた複雑に歩いて行く。

（行くのが大変なんだよね、あそこ…）

私部屋はかなり複雑になっている。生徒達が来ないようにするのと防犯用と色々仕掛けたのだ。…おかげて行くのが大変になったが。

数分後には何とか私部屋へとたどり着いた。

「…開けるか」
俺は覚悟して扉を開ける。
むわぁと埃が舞った。…扉を開けただけなのだがな。
俺は嘆息をつきながら杖を一振りする。…これで埃はどうにかなったはずだ。
俺は中へ入る。中は綺麗にしていたつもりだが、羊皮紙を取りに来た時に色々と動かしたので少し汚い。
そんな部屋に入り、俺はまず書籍から手を付けた。
「懐かしいなぁ、これ」
ペラペラとめくり、その本の内容を把握してから順番に本棚へ収納していく。
（…そういえば、あいつらから借りた本は何処へ行ったんだ？）
俺は前、ロウェナやサラザール、ヘルガから本を借りた事がある。
…が確か返した覚えはない。
（……探していれば見つかるか）
まぁ今更見つかってももう遅いが。
本の次は薬品関係、その次は俺が悪戯用品を作る為の少し危険な道具…と片付けていった。
（…結局終わんなかったな）
夕食前まで片付けていたが噛み付く野生動物捕獲機等にてまどい、一日かけても終わらなかった。
今は私部屋ではなくて大広間にいる。
これから選考の発表が始まる。
「さて、わしの見込みでは、あと一分ほどじゃの。代表選手の名前が呼ばれたら、その者たちは、大広間の一番前に来るがよい。そして教職員テーブルに沿って進み、隣の部屋に入るよう―そこで最初の指示が与えられるであろう」
ダンブルドアは何故か杖を振った。
それから数秒後くらいにゴブレットの炎の勢いが増した。ダンブルドアが何かを掴む。

「ダームストラングの代表選手はビクトール・クラム！」
割れんばかりの拍手が送られた。
数秒後にまたゴブレットは燃える。
「ボーバトンの代表選手はフラー・デラクール！」
また拍手が送られる。ゴブレットが燃える。次はホグワーツだ。
「ホグワーツの代表選手はセドリック・ディゴリー！」
名前が呼ばれたとたん、ハッフルパフ生が凄かった。叫び、足を踏み鳴らしたのだ。
（まあ、あまり目立たないから仕方ないか…）
ハッフルパフとレイブンクローはグリフィンドールとスリザリンみたいに目立たない。だから選ばれたハッフルパフ生は嬉しいのだろう。すごく。
「結構、結構！これで三人の代表選手が決まった。選ばれなかったボーバトン生も、ダームストラング生も含め、あらんかぎりの力を振り絞り―」
しかしダンブルドアは続きを言わなかった。大広間も静まり返る。
長い沈黙の後、ダンブルドアは咳ばらいをし、告げた。
「ハリー・ポッター、ライカ・ヒブカ」
……はい？俺ですか？

六十三話

大広間の全ての目がこちらを見ているような感じがしたが俺は席を立ち、困惑するハリーの腕を掴みダンブルドアの元へと歩いた。ダンブルドアのところにはマクゴナガル先生もいた。…多分軽く打ち合わせているのだろう。

「ダンブルドア校長先生、俺達はどうするんですか？」

「……まずはあの扉へ。ライカ、ハリー」

俺はハリーを引きずり部屋へ入る。

代表選手が全員こちらを見た後、フラー・デラクールが言った。

「どうしまーしたか？わたーしたちに、広間にもどりなさーいということですか？」

俺達を伝言係だと思ったらしい。しかしハリーはまだ混乱しているままだ。だから俺が対応する。

「いや、違いますよ」

「ちがーうとは―」

「すごい！」

フラーの言葉を部屋に入ってきたバクマン氏が遮り、言った。

（すごい？…この人よく魔法省に入れたな…）

すごいでは済まされないだろう。今の状況は。年齢も満たない者が―しかも二人―これに参加しなければならなくなったのだから。

（だが、敵もよくやるよな）

誰が俺達の名前を入れたのかは知らないがいれたやつは相当な腕前で、かつ何かを企んでいる奴だろう。で、なければ『炎のゴブレット』を騙すという面倒くさく、かつ手間がかかる事はしない。

「紳士、淑女諸君…ご紹介しよう―信じがたいことかもしれんが―三校対抗試合代表選手だ。五人目の」

代表選手はフラーは明るい声で言った。

「おう、とてーも、おもしろーいジョークです。ミースター・バー

グマン」
「ジョーク？いやいや、とんでもない！ハリーと…えー…誰だったかな？まあ、この二人の名前が『炎のゴブレット』から出てきたんだ！」
「でも、なにかーのまちがいにちがいたりませーん。このいとたちは、競技できませーん。このいとたち、若すぎまーす」
「さよう…驚くべきことだ。しかし、知っての通り、年齢制限は今年にかぎり、特別安全措置として設けられたものだ。そしてゴブレットから二人の名前が出た…つまり、この段階で逃げ隠れは出来ないだろう…これは規則であり、従う義務がある……二人はとにかくベストを尽くすほかあるまいと―」
この部屋の扉が開き、ダンブルドア、クラウチ氏、カルカロフ校長、マダム・マクシーム校長、マクゴナガル先生、セブルスが入ってきた。
「マダム・マクシーム！この小さーい男の子達も競技に出るとみんな言ってまーす」
フラーが自分の校長に言う。
「ダンブリー・ドール、これはどういうこーとですか？」
「わしもぜひ、知りたいものですな、ダンブルドア。ホグワーツの代表選手が三人とは？開催校は三人の代表選手をだしてもよいとは、だれからも伺ってはいないようですが―それとも、わたしの規則の読み方が浅かったのですかな？」
俺は嘆息し、言った。
「そんなネチネチとダンブルドア…校長先生を攻めるよりもやることがあると思うのは俺だけですか？」
「その通りじゃ。…ハリー、ライカ、君達は『炎のゴブレット』に名前を入れたのかね？」
「「いいえ」」
「上級生に頼んで『炎のゴブレット』に君達の名前を入れたのかね？」

「「いいえ」」
ハリーは初めよりもかなり強く否定した。
「ああ、でもこのいとたちは嘘ついてまーす」
マダム・マクシーム校長が言った。俺はその言葉を返す。
「それほど、ホグワーツ生が信じられないなら『真実薬』でも飲ませればいいじゃないですか？マダム・マクシーム校長。俺達にも、上級生の先輩方にも。あなたのところの生徒ではないですし、この学校には幸運に『魔法薬学』の凄腕な先生がいらっしゃる。それくらいは出来ますよ。……試しますか？」
何やら視線が俺に集まる。
ため息をついてから、俺は話し出した。
「そうやって責任追及をするよりも、俺は早く代表選手に課題の説明をして返すべきだと思いますね。『炎のゴブレット』から俺達の名前が出た。だから皆さんはダンブルドア校長先生や俺達を疑うみたいですが、そもそもあなたたちはダンブルドア校長先生を信頼しているから『年齢線』を任せたのではないんですか？信頼していないならあなたたち三校の校長先生で厳重にすれば良かった話しですからね。信頼して任せたならばそのまま信頼すべきでしょう？それに俺達が上級生に頼んで入れたにしろ、それではゴブレットからは出ませんし、元々出来るはずがないんです。ゴブレットには各一校一人、となにからしらで設定していたんですよね？じゃないと多くの希望者の中から一人だなんてなりませんから。だから羊皮紙に学校名を書かせた。…ですが上級生に頼んだとするならばその上級生がホグワーツ校と書いてあるかどうか確認出来ますよ。書いてなければ怪しいですし、書いてあれば俺達は選ばれません。それにもしその先輩と組んだとしても、その先輩が数々の凄腕な魔法使い達がかけたであろう魔法を…ゴブレットを騙す事が出来るんでしょうかね？…俺が言いたい事、分かりますか？」
「…見事だ。小僧。お前は闇払いになれるぞ、確実にな」
俺が話している間にムーディー先生が部屋に入ってきていた。

「そりゃ、どうも。ですが、俺にはなる気はありません」
「…そうか。こちらとしては欲しい逸材だがな…入れた奴はこの試合を辞退出来ないだろう事を知っていて入れたのだろう。そしてかなりの凄腕だ。『炎のゴブレット』を欺いたのだからな」
部屋が静まり返る。そんな中、ダンブルドアが話し出した。
「どのようないきさつでこんな事態になったのか、我々には知らぬ。しかしじゃ、結果を受け入れるほかにあるまい。セドリックもハリーもライカも試合で競うように選ばれた。したがって、試合にはこの三名の者が…」
「おお、でもダンブリー・ドール―」
「まあ、まあ、マダム・マクシーム。何かほかにお考えがおありなら、喜んで伺いますがの」
しかしマダム・マクシームは何も言わなかった。
バクマン氏が切り出した。
「それでは、開始といきますかな?パーティ、主催者としてのこの役目を務めてくれるか?」
「指示ですな。よろしい…最初の課題は君達の勇気を試すものだ。ここでは、どういう内容なのかは教えないことにする。未知のものに遭遇したときの勇気は、魔法使いにとって非常に重要な資質である……非常に重要だ。最初の競技は十一月二十四日、全生徒、ならびに審査員の前で行われる。選手は競技の課題を完遂するにあたり、どのような形であれ、先生方からの援助を頼むことも、受けることも許されない。選手は杖だけを武器として、最初の課題に立ち向かう。第一の課題が終了の後、第二の課題についての情報が与えられる。試合は過酷で、また時間のかかるものであるため期末テストを免除される」
クラウチ氏はダンブルドアに確認を取る。
「アルバス。これで全部だと思うが?」
「わしもそう思う」
それからは各自勝手に解散して行った。

（…やけに自由だな）
俺達は部屋を出て各寮へと向かう。行く途中でセドリックがハリーに問い詰めていたがそれも階段までだった。ハッフルパフはそこから道が違うので、セドリックとは別れたのだ。
俺はハリーに言う。
「ハリー…しばらくは別行動になると思う」
「え？何でだい？」
ハリーは予測していなかったのだろう、うろたえていた。
「俺達は同じ寮だろう？一緒にいるのは良くない」
「…どういうこと？」
「同じ寮で仲が良い。そして代表選手だ。そうなれば二人で仕組んだと周りは考えるだろう。それがまだ出場のこれならいいが、課題までに及ぶともっと酷くなるよ。クリアしても他の三人は一人でしているのに、あいつらは協力してクリアしているってな。せっかく努力してクリアしても一緒にいるだけでこう言われるのは嫌だろ？だからしばらくは一緒に行動しない」
「……分かった」
ハリーにとってはキツイだろう。とても。だがそれでも一緒にいるわけにはいかない。…ハリーが疑われるしな。
それからグリフィンドール寮に着くまでは何も話さなかった。グリフィンドール寮では質問攻めになるのが分かっていたのでハリーを犠牲にして俺は部屋へと先に戻った。

六十四話

月曜になって授業が再開されたが、やはりあまり良いものではなかった。『薬草学』はハッフルパフとの合同授業だが完璧にグリフィンドール生を無視していたし、ハッフルパフ生だけではなくレイブンクロー生もあまり良い感じではなかった。スリザリン生は…まぁハリーを存分にからかっている。…俺にはあまり言ってこないがな。

（次は…『魔法薬学』か）

魔法薬学の授業では解毒剤を作る事だった。どうやら誰かに薬を飲ませ、解毒剤が効くかを試す…らしい。

（…セブルスはこういうの好きだな）

前にも似たような課題を出された気がする。気のせいか？

俺はなんだかんだ思いながらも薬に集中して作っているとセブルスに頭を叩かれた。

「代表選手は写真撮影だそうだ。荷物を持ってだ。場所は上だそうだ」

不機嫌そうにセブルスは言った。…なぜなんだろうな？

「…分かりました」

俺は荷物を持って『魔法薬学』の教室を出る。上などとアバウトだったが部屋には辿り着けた。…同じ授業を受けていたハリーは何故か先に部屋にいた。

「ああ、来たな。何も心配はいらないよ。ほんの『杖調べ』だからね」

「…そうですか」

俺は用意されている椅子へ座る。

それからすぐにハリーは日刊予言者新聞の記者に引っ張られていった。…大丈夫か？あそこは…うん。イライラすることしかしないところだが…

しかしハリーが引っ張られていった後直ぐにダンブルドアとオリバ

ンダー、審査員達がやって来てダンブルドアがハリーを回収に向かったのでどうやら杞憂に終わりそうだった。
ハリーが戻ってきて、席に腰かけてからダンブルドアが言った。
「オリバンダーさんを紹介しましょうかの？試合に先立ち、皆の杖がよい状態かどうかを調べ、確認してくださるのじゃ」
オリバンダーは部屋の中央まで進み出てから口を開いた。
「マドモアゼル・デラクール。まずあなたから、こちらに来てくださらんか？」
フラーはオリバンダーに近づき杖を渡した。
「ふーむ…そうじゃな、二十四センチ…しなりにくい…紫檀…芯には…おお」
「ウ〝ィーラの髪の毛でーす。わたーしのおばーさまのものでーす」
「そうじゃな。むろん、わし自身は、ウ〝ィーラの髪を使用したことはないが―わしの見るところ、少々気まぐれな杖になるようじゃ…しかし、人それぞれじゃし、あなたに合っておるなら…」
オリバンダーは「オーキデウス！花よ！」といい、花を出した。
「よーし、よし。上々の状態じゃ」
オリバンダーは杖をフラーに返す。
「ディゴリーさん。次はあなたじゃ」
セドリックはオリバンダーに杖を渡す。
「さてと。この杖はわしの作ったものじゃな？よく覚えておる。際立って美しいオスの一角獣の尻尾の毛が一方入っておる…身の丈１６０センチはあった。尻尾の毛を引き抜いたとき、危うく角で突き刺されるところじゃった。…三十センチ…トネリコ材…心地好くしなる。上々の状態じゃ…しょっちゅう手入れしているのかね？」
「昨夜磨きました」
（ほー…若いのに良い心掛けだな）
…あれ？なんだか俺年寄りみたいだな。
オリバンダーは杖から煙り…みたいなものを出し、セドリックに杖を返した。

「クラムさん、よろしいかな」
ビクトール・クラムはオリバンダーに杖を渡す。
「ふーむ…グレゴロビッチの作と見たが。わしの目に狂いがなければじゃが？優れた杖職人じゃ。ただ制作様式は、わしとしては必ずしも…それはそれとして…クマシデにドラゴンの心臓の琴線かな？」
クラムは頷く。
「あまり例のない太さじゃ…かなり頑丈…二十六センチ…エイビス！鳥よ！」
かなりの爆音とともに、鳥が現れた。
「よろしい。次は…ポッターさん」
ハリーが立ち上がりオリバンダーに杖を渡した。
「おぉ、そうじゃ。そうそう、よーく覚えておる。二十八センチ…不死鳥の尾羽根じゃな」
オリバンダーは杖を確認し、完璧な状態だと告げてから杖を返した。
「最後に…ヒブカさん。よろしいですかな？」
俺は立ち上がり、オリバンダーに杖を渡した。
「おお…この杖じゃたな。しかし、この杖はわしには扱えぬ…」
オリバンダーは困ったように言う。
「ヒブカさん、済まないが杖を振ってくださらんか？」
俺はオリバンダーから杖を受け取り、振った。…何が出たかは分からないが。
「ふむ。相変わらず完璧のようじゃな。よろしい」
俺は席に戻った。そしてダンブルドアが立ち上がり言った。
「みんな、ご苦労じゃった。授業に戻ってよろしい―いや、まっすぐ夕食の席に下りてゆくほうが手っ取り早いかもしれん。そろそろ授業が終わるしの―」
しかし代表選手皆と審査員で写真を撮ってからの解散だった。
（…やっと終わった）
俺は大広間ではなくてグリフィンドール寮へと戻った。
なぜなら人が多い大広間で食べる気力がないからだ。

（…何の材料があったっけ？）

今日の夕食を考えている俺の足元でお腹がすいたのだろうかフィンラがニャーと鳴き、カリカリと足を引っかいていた。

六十五話

「……ライカ」
何やらたどたどしい英語で俺の名前を呼んだ。
「…ビクトール・クラム」
俺の名前を呼んだのはダームストラング校の代表であり、クィディッチ選手であるクラムだった。
「どうしたの？」
「あの…図書館どこかわかぁらなくなった」
「ああ…図書館ね。こっちだよ」
俺はクラムを連れて図書館へ向かう。
「此処わぁ、こっちとは違ってとても広い」
「そうなんだ」
「うん。だからよく迷子にぃなる」
「此処には隠し部屋や隠し通路とかがあるからね。在学生でも迷子になるよ」
「隠し通路や隠し部屋？」
「そう。創設者が作った物なんだ。見つかったのは何部屋かで誰もホグワーツを全て知らないんだよ」
「誰も？ダンブルドア校長もぉ分からぁないの？」
「うん。だからよくウロウロしているよ。何か見つかるかもしれないからってね」
「こっちとはぁ全然違う。こっちはぁあまり過ごしやぁすくない」
クラムはこう言ったがダームストラング校の事は何も話さなかった。
（…叩きこまれているのだろうな。不用意に教えるな、と）
あまり学校の情報を流したくないのは分かるが、これは徹底しすぎてはないか？
（…まぁ各校で違うしな）
「もうそろそろ図書館につくよ」

「ほぉんと？ありがとぉう」
俺達は図書館へと着いた。
（俺も何か借りるか）
俺は図書館に着いた時点でクラムからは離れて本棚へと向かった。
俺は三、四冊本棚から抜き出し席を探していると声をかけられた。
「ライカ。こっち空いているわ」
「ハーマイオニー。じゃそこいい？」
「ええ。いいわ」
俺はハーマイオニーが座っている前に座った。
「それ何の本？」
「んー『ホグワーツの真実』『魔法薬での殺人』『魔法生物生息地から飼育まで』『変身術でネズミからライオンに変身した男』…うわぁ」
何やら変なのを抜き取ったみたいだ。
「ライカ、それは―あら、また来てる」
ハーマイオニーは言おうとしていた事を止めて、急に嫌そうに言った。
「何が？」
「ビクトール・クラムよ。あの人最近図書館へよく来るの。おかげでファンの人がキャアキャア言いながら入って来て騒がしいのよ」
「へー…でもハーマイオニーはあまりそういうのはないよね」
「え？……ああ、まぁね」
「好きな人でもいる？」
俺は軽く冗談のつもりで聞いた。
「え！？う、ううん。いないわ」
「ハーマイオニー？」
「ラ、ライカ。騒がしくなる前に帰りましょう？それ借りたんでしょ？」
「うん。じゃ行こうか？」
「え、ええ。行きましょう」

ハーマイオニーはガタガタと椅子を直し立ち上がる。
（好きな人、いたのかもな）
もしいたのならハーマイオニーには悪い事をしている。
（ま、いっか）
今はハーマイオニーに合わせよう。
「ライカ、早く」
「分かった」
俺は席を立ち、ハーマイオニーと一緒にバタバタと図書館を後にする。
図書館から大分離れたところでハーマイオニーはユックリと歩き始めた。
「ここまで来れば何もないと思うわ。後はユックリ帰りましょう？」
「…何かあるの？」
「ライカ…貴方は分かると思っていたけど―…そういえばあなたは何かとこういうのはあまり関わりなかったわね。ファンクラブの方に目をつけられるのよ。クラムがよく私を見ているから」
「あーそこからは女の戦いみたいな感じ？」
「そうね。ファンはある意味ではほんとに恐ろしい時があるから…でもこのくらいで負けたりはしないわ。私はそれほど弱くないもの」
「うわー…女の子って恐ろしいんだね」
「そうね。こうなった女は恐ろしいわ。ライカ、あなたはこれからどうするの？」
「談話室で借りた本を読もうと思っているけど…」
「じゃ一緒に寮へ行きましょう。私も今日はもう寮にいたほうがいいだろうし」
ハーマイオニーはそう言った。
「そういえばライカは余裕なのね」
「何が？」
「課題よ。第一の課題」
「あぁ…まぁ何とかなるんじゃない？」

「何とかって…」
呆れたようにハーマイオニーは言った。
「基礎が出来れば後は工夫次第で何とかなるもんだよ」
（それに俺、本当の四年生ではないし）
「でもライカは私より知識があるから大丈夫ね。問題はハリーかしら？」
「そうそう。ハーマイオニーはハリーを助けてあげなよ。ハリーは多分ハーマイオニーの助け必要だろうし」
「ライカも何か分からなかったら尋ねていいのよ？」
「分かった」
俺達はグリフィンドール寮へと着いた。
「じゃライカ。私は先に部屋に行くわ。またね」
こう言ってハーマイオニーは女子寮へと消えて行った。
（さて、俺も読むか。…変な本だが）
俺は談話室の暖炉近くにあるソファーに座り、本を開いた。

六十六話

（…う…ん？）
俺はベッドから起き上がり近くにある時間を確認した。
（…5時…か）
二度寝…したら次が何時か分からなくなるので俺はベッドから離れ、椅子に座った。
「…なんか、妙にスッキリとしてるな？」
ついポツリと呟いたが今日はあまり睡眠時間が無かった。…一時間も寝てないはずだ。
ニャーと心配そうにフィンラが鳴き、膝に乗ってきた。
「…ん？どーした？」
しかしまあ、猫だから問うたところで答えなど無いが。
「…早いが今日の準備でもするか」
フィンラを下ろし、かばんに今日の教科を詰めようと席を立つ。するとトコトコとフィンラがついて来た。…珍しいな。
教科をかばんに詰めた後は何もすることが無く、ボケーと朝食前まで過ごす。前では到底作れなかった時間だ。
時間が早かったが朝食を大広間で取り、始めの授業である『変身術』へ向かおうと廊下を歩いていた。フィンラは俺の後をついて来ている。
（…ここまでベッタリとついて来るのは一年の初めくらいしか無かったんだが…珍しい事もあるんだな）
最も俺がベッタリとついて来ないように指導したのだが…
「おい！」
不意に声をかけられる。
「おい、じゃないでしょ。お兄ちゃん」
二人の声に聞き覚えがあった。確か…
「ライルと…レイチェル？」

「…お前は本当に物覚えが悪い―」
しかしライルは最後まで言わなかった。
「先輩…それ、どうしたんですか？」
レイチェルが心配そうに言った。
「それ？」
「その白いのだ。左頬から蔦みたいな白い模様がある。お前、そんなもの無かったよな？」
そのライルの言葉でやっと分かった。
「ああ…平気だよ。病気ではないけど不定期に浮かび上がるんだ。まあ、いつか消えるよ」
これは俺がサラザール達に聞いた事だ。病気ではないが、不定期に白い蔦みたいな模様が浮かび上がる、と。サラザール達はこれが何か詳しく知っているみたいだったが問い詰めても俺は上手くはぐらかされて結局分からないままだ。
「そう…か」
納得はしていないだろうが病気ではないと聞いたからかあまり詳しくは聞いてこなかった。…ありがたい。
「それより、先輩！代表選手になったんですよね？」
レイチェルが明るく話題を変えてくれた。でもその話題は…振ってほしくなかったな。
「まあ、ね。二人は何も言わないんだね？」
「お前が上級生に頼むか？あんな問題が解けるんだ。どうせ自分で入れたか、嵌められたんだろう」
「そうですよー。でもハッフルパフ以外はあまり先輩悪い事は言われていないですよ？…多分」
「…レイチェル、お前本当にレイブンクロー生か？ハッフルパフ以外にもいるだろう？俺も聞いたしな」
「うそっ！？先輩の事を？」
レイチェルは信じられない、と言っていた。
「…俺、噂かなにか流れてる？」

話しを聞いていると噂がなにか流れてそうだな。
「……先輩、知らないんですか？」
「……お前かなり人気あるんだぞ？女子から。スリザリンでもあまり悪口は聞かないし、他の所では何か脚色された噂が流れてるしな」
（……は？）
「脚色された噂って何！？」
「悪い噂じゃねぇよ。多分。今はどうだか分からないが…」
「んー私の周りではハリー・ポッター先輩の方が何故かボロクソに言われていますから大丈夫ですよー」
「……それ、ハリーが大丈夫じゃないよね？」
「私ハリー・ポッター先輩には興味がないんで大丈夫です！」
「それじゃこいつに気があるみたいだな？」
「言い直します。私はハリー・ポッター先輩でキャアキャア言わないだけです」
「尚更気があるように聞こえるぞ」
「…本当に？」
「ああ」
（…こんな子だったけ？）
二人はギャンギャン騒いだ？後に授業がありますので、と言って去って行った。
「嵐みたいな二人だね？フィンラ」
同意すかのようにニャーと鳴いた。
（俺も教室に向かわないとな）
その日一日中模様について色んな人に聞かれたが上手くかわすだけで疲れはてた一日になった。

六十七話

顔に浮かび上がった白い蔦みたいな模様はほおっておいたら消えていた。消えるまではフィンラがベッタリとくっついていたが消えた途端にそれも無くなった。…何だろうな、一体？

そんなある日、いつものように昼食を大広間で取っているとマクゴナガル先生に声をかけられた。

「ヒブカ、代表選手はすぐに競技場に行かないとなりません…第一の課題の準備をするのです」

「分かりました」

俺は今日が第一試合の日だとは忘れていたのだがマクゴナガル先生について行く。

「ライカ、貴方なら大丈夫でしょう。ですが何かあったら後ろに事態を納める魔法使い達がいます」

「あー…はい」

「…もしかして試合事態を忘れていたわけではないですよね？」

「あはは…」

マクゴナガル先生はため息をつく。

「二度と忘れてはいけませんよ」

「はーい…」

「此処です」

マクゴナガル先生は選手控室だろうテントの前で止まり、言った。

「頑張ってください」

「分かりました」

俺はそう答えた後にテントへ入る。…どうやら俺が最後みたいだ。

「さて、全員が集合したな――話して聞かせる時が来た！観衆が集まったらわたしから諸君に一人ひとりにこの袋をわたし、その中から、諸君はこれから直面するものの小さな模型を選び取る！さまざまな―えー違いがある。それから、何かもっと諸君に言うことがあ

ったな…そうだ…諸君の課題は、金の卵を取ることだ！」
…金の卵？卵…そんな小さいものを？しかも金色？
俺が金の卵と言う言葉で四苦八苦しているとバグマン氏はフラーから袋を回した。
フラーからクラム、セドリック、ハリーが引いていく。
「さあ、君だ」
俺は袋から何かを引いた。それは5とかかれているミニチュアだった。
「さあ、これでよし！諸君はそれぞれが出会うドラゴンを引き出した。番号はドラゴンと対決する順番だ。いいかな？さて、わたしはまもなく行かなければならん。解説者なんでね。ディゴリー君、君が一番だ。ホイッスルが聞こえたら、真っすぐ囲いの地に行きたまえ。いいね？」
こう言ってバグマン氏はテントから去って行った。
（ドラゴンか…）
恐らく金の卵とはドラゴンの卵に見立てているのだろう。ならばいるドラゴンはメスで一番危ない時期の奴だろう。さて、どうするか…ドラゴンならば『結膜炎の呪い』が一番効果的だ。だが卵の位置が分からないためこれは止めたほうがいいだろう。『結膜炎の呪い』は効果的だがドラゴンが暴れる可能性がある。卵が潰れたら終わりだ。…剣でもあればすぐに殺れるんだが、今は法律によってドラゴンも簡単には殺せないようになっているからこれもダメだな。
…前から気になっていた事でも試してみるか。
「ライカ！呼ばれてるよ！」
どうやら思考している間に俺まで回って来たみたいだ。
「分かった。ハリー、ありがとう」
俺はテントを後にして会場に入った。
『グルルル…』
入った瞬間ドラゴンの威嚇する声が聞こえた。
（卵は…あれか？ドラゴンが抱えている奴か？）

ドラゴンとは別に魔力を感じる。きっとあれが卵なんだろう。
（あれにも仕掛けをしてあるな…）
『グォォォ…』
ドラゴンは最早待てないらしく、雄叫びを上げて炎を吐き出そうと口を開いた。
俺はニヤリと笑い杖を構える。
「　　」
ドラゴンの声が大きくてせっかく呪文を言ったのだが俺にも聞こえなかった。
（声大きいな。でも…それが致命的になる）
ドラゴンは炎を吐きかず、いきなり倒れた。
観衆は静かだった。俺はゆっくりと歩き、卵を取った。
（さて、戻りますか）
俺は会場入口に戻るとマクゴナガル先生に問い詰められた。
「ライカ！い、今何をやったんですか？」
「何って『失神呪文』を放っただけですよ」
「『失神呪文』？ですがドラゴンは―」
「確かにドラゴンは皮膚は有り得ないほど固いですし、牙も尻尾もあり火を吹き危険です。皮膚なんて固すぎて数人の魔法使いがいないと失神させられません。だから俺は皮膚ではなくて口に放ちました」
マクゴナガル先生は明らかに混乱していた。
「く、口？」
「はい。ドラゴンが火を吐き出す時にガバッと口を開きますよね？その口を狙って少し強めに打ちました。どうなるかは分かりませんでしたが口からでも効くんですね。ドラゴンは」
マクゴナガル先生は沈黙した。
「殺しても良かったですけどそうしたら俺が捕まっちゃいますからね。頑張りましたよ。今回は」
俺はこれだけ言ってテントの控室へと戻った。…点数？俺は優勝に

興味は無いからね。一千ガリオンくらいなら直ぐに繕うこと出来るし。今の給料分で足りているし。

「ライカ！あなた一体何をしたの？」

テントへ戻ると一目散にハーマイオニーに聞かれた。

「ライカ…ゴメン。君にドラゴンの事伝えるの忘れてた」

ハーマイオニーの次にハリーがこう言った。

「…は？」

実は俺以外の代表選手は第一課題がドラゴンだと知っていたと、だから皆ドラゴン対策をしていた、とも。

「へー…」

まあ、俺はどうにかなったし別に気にはしない。

「ライカ！ドラゴンに一体どうやったの？」

ハーマイオニーがウズウズと催促をしてきた。

「あれはね―」

諦めて俺はハーマイオニーにドラゴンをどうしたのかを話しはじめた。

六十八話

第一の課題が終わり、グリフィンドール寮へと帰ると中は宴会状態だった。
（うわぁ……）
気持ちが分からないわけではないし、こうされて嬉しくないわけでもない。ただ…こう興奮状態だと騒ぎすぎて耳が雑音を拾ってしまい会話が成り立たなくなるし、周りが把握できなくなるのだ。
（まあ、いっか）
俺はお菓子を取り、ハリー達と座る。
「開けてみろよ、ハリー、ライカ。さあ！中に何があるか見ようぜ」
誰かがハリーの金の卵を持って言った。…最も俺はあまり聞こえずにハリーだけだと思い、開けなかった。
ハリーが卵を開けた瞬間、キーキー声の咽び泣くような音が大音量で流れた。
（こ、これって…）
俺は声の主に心当たりがあったが、俺はこの語学を学んでいないのでただの煩い雑音しか聞こえない。
（これをよく学ぶよな…）
ハリーが金の卵を閉じた事でようやく音は止まった。
それからは何事も無かったかの様に宴会は進んだ。
しかしその宴会はあまりにも煩くて耐え切れなくなったマクゴナガル先生がグリフィンドール寮に駆け込んで注意したところで終了になった。
（…風呂でも行くか）
正直、風呂に行く時間ではないのだが、第二の課題を早めに知っていて損はないだろう。
俺は卵を持ちながら隠し通路を使い、風呂場へとこっそり入った。
（水中人ならば、水の中で声が聞こえるはずだ）

俺はロープを脱ぎ、お湯に浸かる。そして卵をお湯の中に入れてから息を止めて潜った。

―探しにおいで　声を頼りに
地上じゃ歌は　歌えない
探しながらも　考えよう
われらが捕らえし　大切なもの
探す時間は　一時間
取り返すべし　大切なもの

一時間のその後は――もはや望みは有り得ない
遅すぎたなら　そのものは　もはや二度とは戻らない―

俺は歌を全て聞いてから浮上した。

（やっぱり水中人か。大切なものは分からないが…一時間過ぎても望みはない？）

望みはないがよく分からない。一時間過ぎて望みがないならば、大切なものは生き物か？物ならばそんな言い方はしない…よな？

（まあ、いいか。要するに一時間以内に見つけだせばいい話しだから）

俺は十分に温まった後に、乾燥させてロープを纏いグリフィンドール寮へ帰った。

六十九話

『変身術』の授業がもうすぐで終わる、という時間でマクゴナガル先生は声を上げた。

「クリスマス・ダンスパーティが近づきました。――三大魔法学校対抗試合の伝統でもあり、外国からのお客様と知り合う機会でもあります。さて、ダンスパーティは四年生以上が参加を許されます―下級生を招待することは可能ですが―パーティ用のドレスローブを着用しなさい。ダンスパーティは大広間でクリスマスの夜八時から始まり、夜中の十二時に終わります。ところで―クリスマス・ダンスパーティは私達全員にとって、もちろん―髪を解き放ち、羽目を外すチャンスです。しかし、だからと言って、決してホグワーツの生徒に期待される行動水準を緩めるわけではありません。グリフィンドール生が、どんな形にせよ、学校に屈辱を与えるようなことがあれば、私としては大変遺憾に思います」

ベルがちょうど鳴り響き、生徒がガタガタと準備をして教室を出始める。

「ポッター、ヒブカ――ちょっと話しがあります」

俺達はマクゴナガル先生の机の前まで進んだ。マクゴナガル先生は生徒がいなくなってから話し始めた。

「ポッター、ヒブカ、代表選手とそのパートナーは――」

「なんのパートナーですか？」

ハリーがマクゴナガル先生の話しを遮り聞いた。

「クリスマス・ダンスパーティの相手の事だよ、ハリー」

「ヒブカの言う通りです。あなたたちのダンスのお相手です」

「ダンスのパートナー？僕、ダンスしません」

「俺もしたくないです」

あんなものは疲れるだけだ。次から次へと寄ってくるし。

「いいえ、するのです。はっきり言っておきます。伝統に従い、代

表選手とそのパートナーがダンスパーティの最初に踊るのです」
（…最初に？嘘だろ？）
俺が驚愕としているとハリーはマクゴナガル先生にやらない、とはっきり言った。しかし…
「伝統です。あなたたちはホグワーツ代表選手なのですから、学校代表として、しなければならないことをするのです。ポッター、ヒブカ必ずパートナーを連れて来なさい」
マクゴナガル先生はピシャリと言った。
（行きたくねぇな）
俺とハリーは『変身術』の教室を出て行った。

翌日からあちらこちらクリスマス・ダンスパーティで生徒達は浮かれはじめ、クリスマスに近づくについて先生方は徐々に授業をするのを諦めていった。だが、マクゴナガル先生、セブルス、ムーディー先生、ビンズ先生などはキッチリと授業をしたが。
（ダンス…か）
正直言って誘いたい子なんていない。…というか人の二倍くらいは生きているわけで、“女性”というよりやはり子供や生徒、としか見れないのだ。
「ライカ…だったよね？」
ふと、後ろから声をかけられる。
「ソーラス…だったけ？」
「私、一応先輩なんだけどな…まぁ、いいや」
俺はふと、思い出す。
「そういえば…お礼の品忘れてた…」
「んー…別にいいんだけどな…そうだ！なら品の変わりに私とダン

ス・パーティに行かない？」
「俺？ライルは？」
てっきりこの人はライルと一緒に行くと思っていたのだが…
「どうやら別の人と行くみたいなの」
「へー…いいよ」
「本当に？じゃあクリスマス楽しみにしているわ」
またね、と言ってソーラス…先輩か。ソーラス先輩は去って行った。
（意外となんとかなるもんだな）
ダンスについては昔仕込まれたのでまぁ、なんとかなるだろう。
（さて、授業に向かわないと…）
クリスマスパーティはあともう少しだ。

七十話

クリスマス当日、外はかなりの雪が積もっていた。
（かなり冷えてるな）
俺は朝の冷え込みに少し寒さを感じながらベッドから下りる。その瞬間ズルッと何かに滑り転げた。
「…なんだ？いったい…」
しかし直ぐに分かった。俺が滑り転げたのはクリスマス・プレゼント、だった。
（…ベッドのところに置かないでほしかったな）
俺はクリスマス・プレゼントの開封をし、直ぐさま捨てる物とまだ取っておく物とで分けた後に休暇中の課題に手をつけた。
課題をしながらも時間を確認し、夕方になってから俺はロープに着替えた。
（…別に何もしなくて良いよな？）
特に着替えに時間はかけずに適当に…正装ではあるが、着替えた後に大広間に向かう。
「夜はまだ冷え込むのかな？」
大広間にてソーラスを待っている間にポツリと漏らしたのだが、答えが返ってきた。
「多分、冷え込むと思うよ」
ハッフルパフの寮がある方向からソーラスがやって来た。
「早かったね？」
「早めに出て来たんだけどね…遅かった？」
俺は時間を確認した。
「いや、早いよ。それに俺が早く来ただけだしね」
「そう？良かった」
俺はニコリと笑顔でソーラスに手を差し出す。
「それでは行きましょうか？ソーラス先輩」

「…こういう時だけ先輩付けるのね…」
俺達は大広間に入り代表選手が座るだろう席に座った。
「そのロープ、あなたが選んだの？」
ソーラスが聞いてくる。
「いや、ワールドカップを見に行ってたから友達のお母さんが教科書と一緒に買って来てくれた」
「本当に？その人センス良いわね」
「…そう？」
ロンは買って来てもらったロープをかなり嫌がっていたが…
「ええ。グリフィンドールのあなたに似合っているわ」
…後で忘れなければ、この事をモリーに伝えてあげよう。
「…全員揃ったみたいね」
代表選手達はいつの間にか全員揃っていた。
しばらくたつとテーブルにメニューが置かれた。
「…これはどうするのかしら？」
俺はメニューを読み取りながら答える。
「ただ単に言えばいいんだよ。ああいう風にね」
俺はダンブルドアを指差す。丁度ダンブルドアが「ポークチョップ」と言った所だった。
ダンブルドアがそう言った後に皿にポークチョップが現れる。
「ほらね」
「本当ね。私は―」
次々と注文がされる。俺は注文した食べ物を食べているとクラムの声が聞こえた。
「ヴぉくたちの城はこんなに大きくはないし、居心地もよくないです、と思います。ヴぉくたちのところは四階建です。そして魔法を使う目的だけに火をおこします。しかし校庭はここよりも広いです――でも冬にはヴぉとんど日光がないので楽しんでいないです。しかし夏には毎日湖や山の上を飛んで―」
「これ、これ、ビクトール！」

クラムをカルカロフ校長が止める。
「これ以上は、もう明かしてはいけないよ。さもないと、君のチャーミングなお友達に私達の居場所がはっきりわかってしまう」
その言葉にダンブルドアは言った。
「イゴール、そんなに秘密主義じゃと…誰も客に来てほしくないかと思ってしまうじゃろうが」
「はて、ダンブルドア。我々は、それぞれ、自らの領地を守ろうとするのではないですかな?我々に託された学びの殿堂を、意固地なまでにガードしているのでは?我々のみが自らの学校の秘密を知っているという誇りを持ち、それを守ろうとするのは、正しいことではないですかな?」
「おお、わしはホグワーツの秘密のすべてを知っておるなどと、夢にも思わんぞイゴール」
ダンブルドアは和気あいあいと話す。
「たとえば、つい今朝のことじゃがの、トイレに行く途中、曲がるところを間違えての、これまでに見たこともない、見事に均整の取れた部屋に迷い込んでしもうた。そこには本当に素晴らしいおまるのコレクションがあっての。もっと詳しく調べようと、もう一度行ってみると、その部屋は跡形もなかったのじゃ。しかし、わしは、これからも見逃さぬように気をつけようと思うておる。もしかすると、朝の五時半にのみ近づけるのかもしれんて。さもなければ、上弦、下弦の月のときのみ現れるのか――いや、求めるものの膀胱がことさらに満ちているときかもしれんのう」
俺は思いっ切り吹き出し、笑い出す。
あちらこちらで冷たい目線で見られたがそれどころではなかった。
(おまるのコレクション…『必要の部屋』をおまるコレクションでうめたのはこいつだけだろうな)
ダンブルドアは俺が笑っているのを特に咎めなかった。
「ほっほっ。イゴール、ホグワーツの秘密を知っているのは此処の創設者だけじゃよ。歴代の優秀な魔法使いでも全ては暴く事はでき

なかったのでのぉ。―わしもそうじゃ。先程のように今だに未知の場所に行くこともある。じゃが…わしは別に知らなくても良いと思っておる。楽しみがないじゃろう？」

俺はしばらく笑っていたためダンブルドアの話しなど聞こえていなかった。

「あー面白かった」

「本当に凄く笑っていたね」

クスクスと笑いながらソーラスは言った。

食事が終わると、ダンスへと入っていった。

俺は久々ながらも踊れなかったわけではなかった。しかし…

（やっぱり、慣れてないからなぁ）

精神的に凄く疲れた。

「ソーラス、ちょっと来い」

ダンスが終わると不機嫌丸わかりのライルがソーラスを引っ張って行った。

（分かりやすいな）

俺は二人を見送った後に、次のダンスが申し込まれる前にグリフィンドール寮へと帰った。

七十一話

クリスマス休暇が終わり、授業が始まった。だが俺は授業に集中せずにとある記事を気にしていた。その記事はハグリッドについてかかれてある記事だ。

（よく調べたものだな…）

―ダンブルドアの「巨大な」過ち―

新聞の大きな見出しだ。しかし内容はダンブルドアを攻める…というよりもハグリッドを攻撃していた。そしてその記事はハグリッドが半巨人だということさえも突き止めていた。

（…これで勘違いする奴らがいるんだよな）

巨人も狼人間も危険なのは危険だが、常に危険というわけではない。だが、この記事を読んで巨人は危険、と思いどんなに危害のない巨人ですら危険だと思ってしまう人はどこにでもいるのだ。そしてそうした人達はそう考えるだけではなく、行動に移してしまうから厄介なのだ。

（ハグリッドは引きこもったしな…）

ハグリッドは記事が出てから授業に出ていない。『魔法生物飼育学』は現在代理の先生がしているが何時までも、とはいかないだろう。

（厄介だよなぁ）

きっとハグリッドのところには今とんでもない手紙が来ているだろう。中傷ならばまだましだ。中には呪いがかかっている物もあったりするからな。

（ハグリッドのところに行った方がいいな）

授業終了の鐘がなった後に俺はハグリッドのところを訪れた。

「ハグリッド？」

「…ライカ、か」

ハグリッドは意外にすんなりと中へ通してくれた。

「ハグリッド、授業はどうするの？」

お酒の匂いが凄い…きっと引きこもってからずっと飲んでいるのだろう。
「授業は今別の先生がやっちょるはずだ」
「そうだね。で、ハグリッドはこのまま逃げるの？せっかく教員になれたのに？」
「……俺なんかより良い先生はうんとおる」
「そうだね。けれどダンブルドアは君を指名した。ならばそれに答えるべきだろう？」
ハグリッドは震えながら言った。
「だが…俺は半巨人だ」
「……」
俺は一息ついて話す。
「ハグリッド、それを言うならば俺はもっと凄いぞ？元奴隷だし…他にも色々やってきた」
「奴隷…？それはマグルの世界でだろう？魔法界じゃないだけマシだ。そうだろう？」
…それにおまえさんはそんなに悪い事はしちょらん、とハグリッドは言った。
（…言わなくて、いいか）
実は昔の事を言ったのだが…タツキとして取られてしまったな。
「…魔法界じゃないだけマシ？ハグリッド、引きこもっている原因は記事だけじゃないのか？」
俺はハグリッドに聞いた。…答えなどは分かっているがな。
「…こんなのが毎日送られてきよる」
ハグリッドはそう言って一通の手紙を渡した。内容は『恥を知って湖に飛び込め』だった。
（恥を知るのはこいつだろう？）
「ハグリッド、全て開封している？」
俺は手紙をハグリッドに返しながら聞いた。
「吠えメールなんかは仕方がないから開けよるが、他は全て暖炉へ

ほうり投げよる」
「良かった…」
俺はそう言った。
「良かった?どこがだ?」
ハグリッドが噛み付きながら言った。
「手紙には呪いをかけてあるやつもあるからね。…ハグリッド、言っとくけどこんな手紙気にするな。俺達がホグワーツを設立した時も毎日来ていたが、誰も気にしなかったぞ」
「ホグワーツを設立した時も?」
ハグリッドが驚いたように叫んだ。
「ああ。ホグワーツを設立してから毎日な。けれど誰も気にしなかった。引きこもったりしても意味が無いと知っているからな」
それにこんなものは一時だけだしな、と俺は付け加える。
ハグリッドは自分の事を忘れて怒ったように言った。
「ホグワーツを設立したときにそんなもんがきとったんか!?信じられん…何処の馬鹿だそいつは?」
ハグリッドはそれからも自分の事ではなくて、俺達の事でずっと怒っていた。
(…引きずりだそうと思って来たけど…なんか変な方向に行ったな…)
俺はハグリッドが出してくれた紅茶を飲みながら、人を慰める事には向いていない事を痛感した。

七十二話

ハグリッドは結局、ダンブルドア、ハリー、ロン、ハーマイオニーによって引きこもりから出て来た。今では元気に『尻尾爆発スクリュート』の授業ではなく代理の先生がやっていた一角獣の授業を継ぎやっている。

（…まあ元気にやってるし、良いか）

俺は歩きながら何かを忘れている気がするのだが…何だったけ？

「ライカ」

（ん？この声は…）

「ライル…久しぶり」

俺はライルに向かって手を振る。

「お前、随分余裕があるんだな？」

ライルは近づいて来て早々に不思議そうに聞いてきた。

「…何が？」

「…忘れたのか？明日は第二の課題の日だろう？」

「……あ」

つい課題の事を忘れていた。…どうしよう。

「まさか何も準備していないのか？」

「あはは…まぁ何とかなるよ」

水の中に長く滞在するには変身するか『泡頭呪文』をすればいい。他には『鰓昆布』を食べる方法とか…まぁこのように色々あるし、『鰓昆布』以外なら俺はどちらとも出来るしな。

「…お前、受けない気か？」

「優勝はしないけど課題に出ないとかはしない」

ライルからため息が聞こえた。

「…するならば優勝を目指すだろう？」

「優勝に興味はないし…それに他の選手が可哀相でしょ？」

「そんな甘い事言える立場じゃないだろう。お前は」

（俺なんかは反則っぽいからな…）
好きで出場したわけではないが、それでも俺は生徒とは違って知識もあるし、こういう状況を経験しているからこそ俺自身なんか反則的に思える。
ライルはため息をつきながら言った。
「まあ、全力を尽くすんだな」
ライルはポンポンと頭を叩いてから去って行った。…全力を尽くしたら試合どころではなくなるのだが。
「どうしたんだ？あいつ。人の頭を叩いて…」
まぁ、あいつは置いといて明日は第二の課題で溺れないように薄着で行こう。
俺はハグリッドやライルの事から第二の課題へと意識を変えた。

七十三話

第二の課題が行われる今日。天気は雨は降っていないので試合に支障がない程度な微妙な天気だ。
（早めに行くか…）
俺は部屋で寛いでいたのだが一時間前になったので部屋から会場へと向かう。
校庭を横切り、大イカがいる…あれ？いたっけ？…いるかどうか忘れたのだが校庭にある小さな湖を通った時だった。
「優勝はセドリック・ディゴリー様のよ！」
セドリックの取り巻き…だろう生徒から押され、湖の中へ落ちた。
（…最悪だ…）
ただでさえ第二の課題で湖に飛び込むというのに、試合の前にまさか湖に落とされるとは。
（…なんて言っている場合ではないな）
俺は水面に向かって泳ぐ。…しかし足が動かない。
（…何だ？）
俺は足に触れてみる。…どうやら海藻みたいな草が纏わり付いていた。
（ちっ……『ディフィンド！裂けよ！』）
俺は纏わり付いている草に杖を向けて放つ。
草はバッサリと切れて足が自由になる。俺は急いで浮上した。
「…ったく、試合前に濡れるなんてな」
校庭にはもうあの生徒はいなかった。
（…あんなことをするやつがいるなんてな…）
俺は校庭まで泳ぎ、陸に上がってから時計を確認した。
（…試合前一時間切ったな）
俺は乾かさずに会場へと向かった。
試合前三十分切ったくらいに会場へ着いてもハリーはいなかった。

（…俺みたいに忘れてはいないよな？）
ハリー以外の代表選手はもう集まっており、皆ハリーを待つだけだった。
ハリーが会場へ着いたのは試合開始ギリギリだった。
「遅かったね？ハリー、どうしたの？」
「実は―「さん！」えぇ！」
ハリーがついてからバクマン氏はカウントをしていたらしく、話しをしていた俺とハリーは見事に出遅れた。
「うわ、じゃね、ハリー」
俺は本日二回目の水に飛び込む。
（よし…動物は…イルカでいいや）
俺はイルカに変身して湖の中を泳ぐ。
不意に歌が聞こえた。
―探す時間は　一時間
取り返すべし　大切なもの……
（水中人か！）
俺は歌の方向へ向かった。
水中人がいるところは少し開けている場所だった。
（…この魔力は…）
動物のままでは少し感じ取りにくかったので変身を解き、変わりに『泡頭呪文』を使った。
（やっぱり、か。あのダンスパーティはこれの為にもなっていたんだな）
その開けているスペースに五人の魔力を感じた。ハーマイオニー、ロン、ソーラス。後は知らない二人だがきっと他の代表選手のだろう。
近づくと五人は石像に縛られているのが分かった。
（俺のは…多分）
俺はソーラスの縄目掛けて呪文を放つ。縄はすぐに切れた。次に俺はソーラスに向けて呪文を放った。当たったのだろう、ソーラスは

グングンと水面へと行った。
水中人が警戒しながら聞いてきた。
「何故、此処にいる。助けられる人質は一人だけだ」
「全員が来るとは思わないからね。ダンブルドアがちゃんと保障はしているだろうけど、何があるか分からないし」
俺はそう言って少し離れてから他の人を待つ。
しばらくしてからハリーがやって来てロンの縄を切った。しかしハリーは水面へ戻ろうとしなかった。
「ハリー？」
俺はハリーに話しかけたがブクブクと泡の音しか聞こえなかった。
（もしかしてハリーは『鰓昆布』を食べた？）
泡頭呪文と違って鰓昆布は水面で話しが出来ない。俺は諦めてハリーのしたいようにさせた。
ハリーの次にセドリックがやって来て一人の縄を切った。
「フラーもクラムもいま来る！」
セドリックはこう言って水面へと向かって言った。
（セドリックは同じ『泡頭呪文』か）
セドリックの次にはクラムがやって来た。クラムはハーマイオニーのところで縄を噛み切ろうとしていたのできっと変身したのだろう。
クラムも縄を切り終わると水面へ消えて行った。
しかしフラーは来なかった。ハリーは待ちきれないのか杖を出し、縄を切ろうとした。俺はそれを止める。
ブクブクと泡が聞こえたからきっとハリーが文句を言っているのだろう。
「少し待って」
俺はハリーにこう言った。そして時間を確認する。
（三…二…一…一時間過ぎた！）
俺は呪文を放ち、縄を切ってからハリーに渡した。
「人質の魔法も長くない。先に二人を連れて行って」
ハリーはうろたえていたが二人を抱え、水面へ向かった。

「人質は一人だけだ！」
水中人は激怒して俺に槍を向ける。
「一時間経った。君達も頼まれた時間が過ぎたはずだ。それでも向かってくるならば容赦はしないよ？」
俺は笑顔で杖を水中人に向けながら言った。すると水中人は蜘蛛の子を散らすように去って行った。
（…さて、俺も戻るか）
俺は水面に向かって泳ぎ、水面に出た瞬間新鮮な空気が入って来たのと一緒に『泡頭呪文』は消えた。
俺が水面から岸へと向かう時に水中人達がマーミッシュ語で何かを言いながら付き添って来た。…正直ただひたすらに煩いので離れてほしかったが。
岸へ着くとマダム・ポンフリーがやって来た。
陸へ上がりポンフリーは毛布をかけてくれた。ハリーはハーマイオニーとロン、フラーとで少し言い合っているみたいだったが険悪ではないので大丈夫だろう。
「レディース　アンド　ジェントルメン。審査結果が出ました。水中人の女長、マーカスが湖底で何があったのかを仔細に話してくれました。そこで、五十点満点で、各代表選手は次のような得点となりました」
バクマン氏の拡大された声が響いた。
「ミス・デラクール。素晴らしい『泡頭呪文』を使いましたが、水魔に襲われ、ゴールに辿り着けず、人質を取り返すことができませんでした。得点は二十五点」
スタンドから拍手が沸く。
「セドリック・ディゴリー君。やはり『泡頭呪文』を使い、最初に人質を連れて帰って来ました。ただし制限時間の一時間を一分オーバー。そこで、四十七点を与えます」
（わお、俺もしかして人質を連れて帰ってないことになってる？）
まぁ確かに呪文を使って人質をあろうことか飛ばしたしな。

「ビクトール・クラム君は変身術が中途半端でしたが、効果的なことには変わりません。人質を連れ戻したのは二番目でした。得点は四十点」
特に大きい拍手があがる。
「ハリー・ポッター君の『鰓昆布』はとくに効果が大きい。戻って来たのは4番目でしたし、一時間を大きくオーバーしていましたが彼は二番目に人質のところに到着しておりながら、安全に戻らせる為に残りました。―これこそ道徳的な力を示すものであり、五十満点に値する、との意見でしたが…得点は四十五点！」
ロンがはしゃぎながらハリーに話しをしていた。
「最後にヒブカ君。彼は最後でしたが人質のところへ着いたのは一番でしたし、人質を解放し、連れて来たのも一番でしたが…人質をぶっ飛ばすなどという方法でしたので、人質の到着順位を最後にしました」
何やら後ろからすごく睨まれている。…しかも二人。
「ですが最後まで残り、安全を確認したとの事で得点は四十三点」
拍手が上がった。若干笑いも入っている気もするが、気にしない。
「第三の課題、最終課題は、六月二十四日の夕暮れ時に行われます。代表選手はそのきっかり一ヶ月前に、課題の内容を知らされることになります。諸君、代表選手の応援をありがとう」
大騒ぎの中、俺は城へと歩き出した。

七十四話

（うわぁ…）

朝ベットから起き上がったまではいいが何故か頭がボケーとして働かない。

（熱か？）

俺は手を額に当ててみた。

「熱っ…熱か風邪だな。こりゃ」

俺はため息をついて無理矢理足を床につけて立ち上がった。

「解熱剤あったっけ？確か…」

フラフラと歩きながら薬置場に向かう。

薬置場に着き、パカリと蓋を開ける。

薬を取ろうと手を入れたが見事に手は空を切った。

中身は綺麗に空っぽだったのだ。

「…やべ、補充するの忘れてた」

しかし薬が無いからといって熱があるのに魔法薬を作るのは危険だ。

理由は風邪に効く魔法薬を熱があるにも関わらず作り、失敗して死んだ魔法使いが沢山いるからだ。俺はまだそいつらの仲間入りはしたくない。

（…授業が全て終わったらマダム・ポンフリーかセブルスのどちらかからもらおう）

俺は薬置場からベットに向かい寝巻から制服、ローブへと着替えていく。

しかし俺は不意に思い出した事で着替えるのが一時止まった。

（今日魔法薬あったー！）

「フィンラどうしよう…俺死ぬかも…」

フィンラはニャー？と不思議そうに鳴いた。

「……魔法薬って最後だったよな？」

今日は確か最後になったはずだ。…理由は忘れたが。

「なら少しはマシになるか」
俺は魔法薬までは熱が下がる事を祈り着替えを再開した。
制服に着替え終えると俺は朝食を食べるために大広間へと向かった。
そう、大広間へと向かっていたんだ。
「…嵌まった」
俺はまた予測を間違えて階段にある隠し階段に嵌まっていた。
フィンラはニャーと鳴きながら俺の足…膝くらいか？をカリカリと掻いている。
（何か落ち込むよな。これに嵌まると）
嵌まったのは初めてではない。初めてではないがこれを作ったのが俺だから余計に変な気分になる。……生徒を落とすために作ったのだから。
「…フィンラ、マクゴナガル先生を呼んできてくれるかな？」
フィンラはニャーと鳴いた。その後にフィンラが此処から離れていく気配がした。
（行ったか…）
今俺に必要なのは敗北感に満たされる事ではなく引っ張り上げてくれる人だ。
ハリー達はまだグリフィンドール寮にいるし、セブルスはスリザリンの寮監だ。生徒がいる前では鼻で笑い、通り過ぎるだろう。きっと。
こうなると今一番安全なのはマクゴナガル先生だ。
マクゴナガル先生は自寮の寮監だから確実に引っ張り上げてくれるはず。
ただ小言は言われるかもしれないが。
（問題はフィンラが来るまでに…）
スリザリン生に会わないか、だ。特にマルフォイ。
あいつは普段俺には何もしないがこうも空きだらけな状態だと何をするか分からない。
（早く来てくれ、フィンラ！）

フィンラが俺から離れてしばらくたった頃にフィンラとマクゴナガル先生がやって来た。
「ライカ！どうしたのですか？」
「見ての通りに嵌まりました。助けて下さい」
「…あなたはもうホグワーツに来て何年ですか！」
「年数なんて数えてないですから分かりません」
ホグワーツにいるのが当たり前だったし。
「それでもです。あなたは一年生ではないですよね？」
「一年生どころか生徒ですらないですね」
「そうです。本来ならばあなたは生徒ではなく教える立場の教師です。それなのに…」
「嵌まる時は嵌まるんですよ。そもそも一番俺が落ち込んでいます」
「…落ち込んだ様子には見えませんがホグワーツを作った本人が嵌まればそう思うでしょうね」
マクゴナガル先生は俺の手を掴み、引き抜く。
「ありがとうございます」
「…ライカ。熱いですが熱でも？」
「あー…今日魔法薬学あるんでそこで薬をもらいます」
マクゴナガル先生にごまかしても無駄だと思い、こう言った。
マクゴナガル先生は俺の言葉を聞いて手を額に当てる。
(先生の手、意外と冷たいな)
「…相当高いですね。今日は授業は休みなさい。あなたは一日休んでも平気でしょう」
「一日……一日ですめばいいですけど」
「…どういうことですか？」
「俺、滅多に病気とかはならないんですがかかったら結構引きずるんですよね」
「引きずる、ですか？」
「はい。まぁ今回はそんなに酷くないんでそんなには長引きませんが…一日で治るのは無理と思います」

「別に何日でも構いません」
マクゴナガル先生はキッパリと言った。
「貴方は別に授業に出なくても支障はないでしょう。全て習ってますし、そもそも前回もあまり必要なかったようですから。むしろ他の生徒のために出ないで下さい。治るまで何日でも休んで構いませんので今から医務室へ行きなさい」
マクゴナガル先生は淡々と言った。
（確かに支障はないが…）
教師が授業に出るなって言うか？
「…分かりました」
俺は何とかマクゴナガル先生にこう言った。
「今日ある授業の先生方には私から伝えておきます」
…だから安心して今から医務室へ行って来い、って事か。
「…行ってきます」
俺は何とも言えない敗北感を感じながら医務室へと向かった。
医務室へついたらマダム・ポンフリーに説教みたいな小言を言われ、セブルスが作った睡眠薬を無理矢理飲まされた。
（……マズイ）
初めは薬のマズサにベットの上をのたうちまわっていたのだが次第に効いてきて押し寄せてくる睡眠に俺は身を任せた。

七十五話（前書き）

あまりにも短かったので三話一緒に投稿しました。

七十五話

「ライカ君？」
俺は今、ソーラスに問い詰められていた。ソーラスの隣にはライルがいる。
「説明してもらってもいいかな？…私をぶっ飛ばしたってどういうこと？」
「それは…俺はあそこに残ると決めていたんだけど、ソーラスまで一緒に残らせるわけにはいかなかったから飛ばした」
「…私を水面まで助けようとは思わなかったのね？」
（水面まで行ったら戻れないから、とは言えない…よ…な）
水面まで行くと流石に観客から見える。そこから引き戻すよりは、と思ってしたのだが…本人は嫌だったみたいだな。…いや、ライルもか。
「まあ……すみませんでした」
困惑しながらも俺は謝る。
「…よし！まぁ、仕方なかったよね」
「それで済むか！お前は呪文や当たりところが悪ければ危なかったんだぞ！」
そんなヘマはしねぇ！と内心思いながら聞いている。俺、生徒達の前では四年生だし。
「いいの。私が許したんだし」
「良くない！大体お前は軽いんだ！被害に会ったのはお前なんだからもっと文句を言ってもいいんだぞ！」
被害！？そこまで行かないだろう？ぶっ飛ばしただけなのだから。
「良いでしょ！私はそこまで気にしてないし。大体貴方は何で私の事に口を挟むの！私は貴方の事で口は挟まないでしょ！？」
「そんなのは俺の勝手だろうが！お前には関係ない！」
「そんな事言う？貴方は勝手にしているだけかもしれないけれど、

口を挟んでいるのは私の問題よ！」
二人の口喧嘩が始まる。…俺を放置して。
（…もう、気になるならライルも素直に言えばいいのに…）
このままだと果てしなく嫌われる方向に行くしかない。
（まあ、今の隙に）
俺はそろそろと二人から距離を置き、グリフィンドール寮へと帰る。
…あそこなら二人は来れない。
二人の口喧嘩は階段があるホールまで聞こえた。

七十六話

第二の課題が終わってからハグリッドが攻められた記事と同じようにハーマイオニーが書かれた。しばらくはやはりハグリッドと同じ目に合っていたが、それも月日が過ぎれば無くなった。
あっという間に過ぎて行き、今日第三の課題が発表される。
（…今度は何をさせられるのやら…）
始めはドラゴン、次は水魔や水中人。次は何が来るのやら。まぁ…火とかげみたいな厄介なものでなければいいが…あいつは熱いし、皮膚が頑丈だからなぁ…
俺は指定された時間にクィディッチ競技場へと入った。そこにはもう代表選手は揃っていた。
「さて、今クィディッチ競技場に生垣を作っている。これは第三の課題のためだ。課題が何か分かるかな？」
クラムが答えた。
「迷路」
「その通り！迷路だ。第三の課題は極めて明快だ。迷路の中心に三校対抗優勝杯が置かれる。最初にこの優勝杯に触れた者が満点だ」
「迷路をあやく抜けるだーけですか？」
「障害物がある。ハグリッドがいろんな生き物を置く…それに、いろいろ呪いを破らないと進めない……まあ、そんなとこだ。さて、これまでの成績でリードしている者からスタートだ。ミスター・ヒブカからミスター・ポッターにミスター・ディゴリーが同時。次にミスター・クラムにミス・デラクールの順だ。質問はあるかね？」
誰も質問は無かった。
「では、城に戻るとしようか」
ハリーとクラムは城へ向かう列から離れたが特に気には止めずに俺は城へ戻った。

七十七話

（……眠い）

現在とてつもなく臭くて、かつ眠くなる『占い学』の真っ最中だ。

ハリーなんかはもう寝てるし。

（ムーディー、か）

俺はムーディーが来てから何かと注意はしていたが何もない。ただ…部屋に別の魔力を感じるのを除けば。

（…なーんでだろうなぁ…）

先生の話しをこれっぽっちも聞いてはいない。…人の事はあまり言えないが、どうせ大した予言ではない。あれはでっちあげているだけだ。だから脳内がサボっていても平気。

俺は考えに没頭する。

…魔力があるのは魔法使いと限られた魔法生物くらいだ。時折ムーディーがその魔力のところへ行くが生物ならばずっと動かないという事はないし、ムーディーが来た時に何かしら動くはずだ。それがないということは…

（まさか人間か？）

だが人間ならば何かしら対策は出来るはずだ。…杖があれば。

（人間だとしても…）

もし、いるのが人間だとしても、おかしくはないか？何故ムーディーは人を拉致している？いくら頭がおかしい闇払いだとしてもそこまでは頭がいかれてないはず…

（なら、何故？）

俺の考えは不意に聞こえたハリーの叫び声で途切れた。

（…ハリー？）

ハリーはそのまま医務室へ行きます、と言って教室を出て行った。

（……分かんないから別にいいか。授業は聞かなくていいし、仮眠でもしよう）

俺はムーディーについての思考を止めて机に俯せ寝る体制をとった。

七十八話

ハリーは医務室ではなくて校長室へと行ったが、その事については話さなかった。それからは学校は期末試験に入り、俺はハリーと共に後ろの席に座っていた。…最も、ハリーは呪文をペラペラと探していたが。

テストの最終日、朝食の席にてマクゴナガル先生に呼び出された。

「ヒブカ。代表選手は朝食後、大広間脇の小屋に集合です」

「小部屋？」

俺は思わず、繰り返した。

「ええ。代表選手の家族が招待されて最終課題の観戦に来ています。皆さんにご挨拶する機会だというだけです」

（…家族？）

俺が固まるなかマクゴナガル先生は去って行った。

（…家族なんていないんだが…）

俺は朝食を食べ、言われた通りに小部屋へ入る。

「久しぶり、ライカ」

部屋へ入るなりこう言われた。

「ルーピン先生？なんで…」

「ライカの父親が来れないってね。だから親しい僕が応援に来たんだよ」

リーマスはサラリと嘘を言う。

「いきなりで悪いけれど…案内してくれる？」

それが二人きりになりたいのだと、分かった。

「じゃ、グリフィンドール寮から案内します」

「ありがとう」

俺はリーマスと一緒に部屋を出る。…出た時にハリーがいて驚いていたのでリーマスが説明した。

俺はハリーに早く中へ入ったら？と言ってリーマスと一緒に大広間

を去る。
学校をフラフラと行っているとリーマスから聞かれた。
「…びっくりしたよ。新聞みたら君が代表選手で乗っていたからね。何故立候補したんだい？」
「俺はしてないよ。ゴブレットから出てきたんだ」
「…していない？じゃ仕組まれたって事かな？」
「さあ？」
「さあ？って…」
「まぁ、ほっといたらいずれ尻尾を表すだろう」
「もう第三の課題だけどね」
リーマスはこう言った。
「…タツキなら平気だと思うけど、気をつけてね？」
俺は苦笑する。
「それは俺よりもハリーに言うべきだな」
「それもそうだね」
リーマスとフラフラと校内を歩き、夕飯に近い頃に大広間へ戻った。
夕飯はいつもよりも品数が多くて、何品かは日本料理も並んでいた。
そんな豪華な夕飯の後、代表選手は皆で第三の課題会場へと移った。
五分後には生徒達も入り、いよいよ始まりだった。
「私たちが迷路の外側を巡回しています。何か危険に巻き込まれて、助けを求めたいときは、空中に赤い花火を打ち上げなさい。私たちのうちだれかが救出します。おわかりですか？」
代表選手は皆、頷く。
「では、持ち場についてください！」
バクマン氏が明るく巡回者に号令した。
「紳士、淑女のみなさん。第三の課題、そして三大魔法学校対抗試合最後の課題が間もなく始まります！現在の得点状況をもう一度お知らせしましょう。同点一位、八十五点―ヒブカ・ライカ君とセドリック・ディゴリー君とハリー・ポッター君。三名ともホグワーツ校！」

「四位、八十点―ビクトール・クラム君。ダームストラング専門学校！」
「五位、フラー・デラクール嬢。ボーバトン・アカデミー！」
拍手が沸き上がる。
「ではホイッスルが鳴ったら、ライカとハリーとセドリック」
「いち――に――さん――」
ピッと笛がなり俺は迷路に入った。俺は勘でズンズンと進んでいく。
ピッと二度目のホイッスルが鳴った。
俺は道を右に曲がった。…今だに障害に会わないな…
ピッと三度目のホイッスルが鳴り代表選手全員が迷路に入った。
俺は適当に曲がりに曲がりまくった。
（…おかしい）
最初に入った俺が何故何も会わない？いくら道をジグザグに行っているとはいえ、会わないのは不自然だ。
（…誰か、手を貸しているのか？）
俺はジグザグに曲がりながら、魔力を集中して探る。
フラーもクラムもセドリック、ハリーも何かと戦っていた、しかし俺の近くには何もいない。
（…どういうことだ？いや、ハリーのもだな）
俺のところは何もいないがハリーのところも少ない。
（…誰、だ？）
しかし俺がそれを探る前にフラーの叫び声が響いた。
花火が上がった音はしなかったからリタイアはしていない。けれどそれによって俺の集中も切れてしまった。
（…仕方がない）
俺はまた歩き始める。
しかし確認した通り何も出会わない。
（…つまらないんだけど…）
しかし次の瞬間、花火の音が響いた。
（誰かが、落ちたか……そうだ！）

俺はあることを決断した。俺の周りには何もいない。それが誰かの仕組んだ事ならばその通りに進む必要はない。道は自分で切り開くものだ！

俺は壁に杖を向け魔力を上げて、放つ。

「インセンディオ！燃えよ！」

ドォォンと音が鳴り響いた。

パチパチと燃える音が鳴る中、俺は一直線にあいた壁を進んだ。

途中で歩くのを止めて、向きを変え同じ事を繰り返す。

あちらこちらで大きな道ができ、俺の放った呪文によってまね妖怪など障害だっただろう生物も燃えてしまったが気にしない。

「インセンディオ！燃えよ！」

俺は何回放ったか分からない呪文を放つ。

ドォォンという音と共に今回はギャァァァという何やら断末魔も聞こえた。俺は声がした方向へ向かう。

「ん？何の声だ？」

「「ライカ！？」」

そこにいたのはハリーとセドリック、後はパチパチ音はするが何かよく分からないものだった。魔力が無いから死んでいるのだろう。

「い、今のライカ？」

ハリーが恐る恐る聞いた。

「うん。…何かタイミング悪かったみたいだね」

「そうでもないよ。僕もハリーもこの巨大蜘蛛に手こずっていたから。そこでタイミングよく君が燃やしてくれたしね」

もう跡形もないけど、とセドリックは言った。

（蜘蛛だったのか）

「二人共平気そうだし、俺行くね」

「行くって何処にだい？」

「何処って試合が終わるまで適当にふらつくよ」

ハリーとセドリックは何やら顔を合わせて頷いた。

ハリーは俺に近づいて腕を掴んだ。

「ハリー？」
「優勝杯がそこにあるんだ。三人で取ってもホグワーツの優勝には響かないからね？道連れにライカもだよ」
「は？…いや、二人で取れよ」
「「もう決定事項」」
二人は息ピッタシに言う。
「君達、双子？」
「違うよ。蜘蛛の前でハリーと話し合って二人で取ろう、って決めてたけど君が助けてくれたから君も道連れ」
「…おかしいだろう？それは」
しかし俺の言う事は採用されなかった。
「行くよ、セドリック。いち―に―さん」
俺を掴んだままのハリーとセドリックは同時に優勝杯に触れた。

七十九話

ドンッと地面に着いた。ホグワーツではないところで。
「ここは何処だろう？」
（…これも仕組まれていた、のか？）
ハリーとセドリックが話し合う。
「優勝杯が移動キーになるって、君は誰からか聞いたか？」
「全然」
「これも課題の続きなのかな？」
「わからない」
「杖を出しておいたほうがいいだろうな？」
「ああ」
二人は杖を構える。
二人が構えた後、誰かが俺達の方へ近づいて来る。
（…この魔力は！）
二人は近づいてくる奴に向けていた杖を少し下ろした。
「下ろすな！」
俺はそんな二人に怒鳴る。二人は急いで構えた。…嫌な予感がする。
「よけいなやつは殺せ！」
「セドリック、避けろ！」
「アバダ　ケダブラ！」
俺は隣にいたセドリックに言い、ハリーの方へ押した。
しかしあと少し足りずにセドリックの腕を掠めた。
「お前だったのか！」
ハリーが近づいてきた人物が誰か分かったみたいだ。近づいたのはピーターだと。しかしピーターは聞かずに、放った。
「アバダ　ケダブラ！」
今回は間に合わず、セドリックに当たりセドリックは数メートルぶっ飛んだ。

（…魔力が、消えた！）
チッと俺は舌打ちをする。
「急げ！」
「準備ができました。ご主人様」
ピーターは鍋に先程声を出した物を入れる。
「父親の骨、知らぬ間に与えられん。父親は息子を蘇らせん！」
ピーターは何かを入れた。
「しもべの―肉、―よ、喜んで差し出されん。―しもべは―ご主人様を―蘇らせん」
ピーターは右手を短剣にて自ら切り、鍋に入れた。血の臭いが漂う。
「敵の血、…力ずくで奪われん。…汝は…敵を蘇らせん」
いつの間にかハリーの前にいたピーターはハリーの腕を傷つけ血を取り鍋に入れた。
（ま…さか）
ゴポゴポという音から一人の魔法使いなが立ち上がり、言った。
「ロープを着せろ」
七十一話・死喰い人
「ご主人様…あなた様は約束なさいました…」
「腕を出せ」
ピーターは腕を出す。
「そちらではない」
ウ〝ォルデモートはピーターの腕を掴み、手を当てた。
ピーターは泣き崩れる。
「ふむ…全員が、これに気づいたはずだ…そして、いまこそ分かるのだ。それを感じたとき、戻る勇気のあるものが何人いるか、離れようとする愚か者が何人いるか」
ウ〝ォルデモートはハリーに向き合う。
「丘の上の館が見えるか、ポッター？俺様の父親はあそこに住んでいた。母親はこの村に住む魔女で父親と恋に落ちた。しかし正体を打ち明けたとき、父は母を捨てた…父は俺様の父親は魔法を嫌って

いた……」
「やつは母を捨て、マグルの両親の元に戻った。俺様が生まれる前のことだ、ポッター。そして母は俺様を産むと死んだ。残された俺様はマグルの孤児院で育った…俺様はやつを見つけると誓った。復讐してやった。俺様に自分の名前をつけた、あの愚か者に…トム・リドル…」
ウ〝ォルデモートは低い声で言った。
「なんと感傷的になったものよ…しかし、俺様の真の家族が戻ってきた」
次々と魔法使いが『姿現し』してきた。
一人ひとりと近づいてくる。
「よう来た。『死喰い人』たちよ。十三年…最後に我々が会ってから十三年だ。しかしお前達は昨日のように呼びかけに応えた…しかし、罪の臭いがする」
恐怖の空気が流れる。
「この魔法使いの一団はご主人様に永遠の忠誠を誓ったのになぜ、そのご主人様を助けに来なかった?……俺様は失望した」
ウ〝ォルデモートは許しをこうた死喰い人の一人を許されざる呪文の一つ、クルーシオを使った。
「許しをこうだと?俺様は許さぬ。忘れぬ。十三年も長い間だ…許す前にツケを払ってもらう。ワームテールはすでに借りの一部を返した。そうだな?」
ピーターは泣いている。…よほど痛かったのか?
「貴様は忠誠心ではなくかつての仲間が恐ろしいから戻って来た。この苦痛は当然の報いだ。しかし…ウ〝ォルデモート卿は助ける者には褒美を与える」
ウ〝ォルデモートは杖を振るった。
「ご主人様…素晴らしい…ありがとうございます」
…無くなった腕でもつけたのだろう、ピーターは泣き止んだ。
ウ〝ォルデモートは死喰い人達を粛正する。そして話し出した。

「此処には、六人の死喰い人が欠けている。三人は俺様の任務で死んだ。一人は臆病風に吹かれて戻らぬ…一人は永遠に去った…一人は既に任務に就いている」

（…セブルスとカルカロフか…もう一人？）

「その忠実なる下僕はホグワーツにあり、その者の尽力により今夜は若き友人と大切な客人をお迎えした」

ウ〝ォルデモートは俺達を指差す。

一人の死喰い人が言い出した。

「ご主人様…我々はどのようにして復活を成し遂げたのでしょうか？」

「あぁ…長い話しになる。俺達は十三年前にこいつの母親によって霊魂と成り果てた。…しかし俺達はまだ生きていた。俺様はただようだけだったが一つだけ…人に取りつくことが出来た。…長くは生きなかったがな。四年前に俺様は一人の魔法使いに取りついた。そいつはホグワーツの教師で俺様の思い通りに行動してくれた。あと少しでハリー・ポッターに邪魔されたがな」

「俺様は元の生活に戻った。しかしここにいるワームテールが戻ってきた。しかしこやつは俺様の元に戻る前にバーサ・ジョーキンズに会った。だがこやつは機転を働かせてバーサを俺様の元へ連れてきた。そこから俺様は色々知れたのだ。三校対抗試合が今年ホグワーツであることも、連絡を取りさえすれば助けてくれるであろう死喰い人の事もな…それからあの女を処分した」

「俺様はこいつと可愛いナギニの助けを借りた。しかし復活せるには三つの協力な材料が必要だった。一つはすでにあった。下僕の与える肉だ…」

（可愛いナギニ……サラザールの子孫だな、やっぱり）

「我が父の骨。これはここに来る事を意味した。そして敵の血…ワームテールは適当な魔法使いを使わせようとした…しかし失脚の時より強力になるにはハリー・ポッターの血が必要だったのだ」

「しかし、どうやって手に入れるか？ハリー・ポッターは気づかな

いほどしっかり守られている。親戚の庇護の下にあるかぎり俺様は手は出せない。ワールドカップにて誘拐をするほど力は戻ってはいないし、その時期を逃せばこやつはホグワーツへ帰る。そこでバーサ・ジョーキンズの情報を使った。ホグワーツに送りこんだ忠実な死喰い人に『炎のゴブレット』に名前を入れさせ、優勝杯を移動キーに変え、最初に優勝杯を触れるようにさせた」

ウ〝ォルデモートはハリーに向き合った。

八十話

ウ〝ォルデモートはハリーに向き合い、杖を向けた。ハリーもウ〝ォルデモートに向ける。
「アバダ　ケダブラ」
「エクスペリアームス！」
二つの呪文が衝動した。死喰い人達もそちらに意識がいっている。
（…今だな…）
俺はちょうど近場にいたピーターに杖を向けて、拘束魔法をかける。
「…な！？」
「久しぶり、ピーター？」
「タ、タツキ」
「今はライカの方が嬉しいね。ハリーもいるし」
最もハリーはウ〝ォルデモートとの決闘でこちらの話しは聞いていないが…
「ご、ご主人様がいるこの場所で君は私を捕まえられるのかい？」
「ああ」
俺はスッパリ言った。
しかしピーターはそうは思わないのだろう。焦っている様子はない。
「ハリー、がんばれ」
不意にセドリックの声が聞こえた。次に知らない奴の声が聞こえ、バーサ・ジョーキンズの声も聞こえた。
（…これは？）
一体何が起こっているのか分からなかった。今死んだ奴がいる、ってことしか分からない。
次にリリーの声が聞こえ、その次にジェームズの声が聞こえた。
「我々は繋がりが切れるとほんの少しの間しか留まれない。それでもお前のために時間を稼いであげよう…移動キーのところに行きなさい。それがホグワーツに連れていってくれる」

ジェームズの言葉にハリーは「はい」と応えた。
（こちらも準備をするか…）
俺はピーターの首根っこを掴む。
「行くぞ！」
ハリーはウ〝ォルデモートからセドリックの元へ走り、移動キーに触れた。
俺はハリーをそこまで確認してからピーターを連れ、急いで『姿くらまし』でその場所を離れた。

八十一話（前書き）

次の話しも短いので合わせて更新します。

八十一話

俺が出てきたのは、懐かしい場所…ゴドリックの谷だった。
（ホグワーツに直接したらダメだしな）
ホグワーツには直接『姿現し』『姿くらまし』が出来ないようになってるし、俺はまだ『姿現し』を使う事は出来ない学年なので俺はここに出た。
ちなみにホグワーツでは『姿くらまし』、『姿現し』が出来ないわけではないが、ホグワーツに直接出来る奴は俺達が作った隙を知っていなければいけないので、多分俺達くらいしかいないだろう。校長は抜いてな。
（さて…ダンブルドアに連絡を取らないとな）
俺はピーターを見張りながら守護霊を出し、ホグワーツへ向かわせる。
「タ、タツキ…」
ピーターは声が震えながら呼んだ。
「悪いね、ピーター。君はシリウスの為に犠牲になってもらうよ」
「そ…そんな…」
「君が最初はシリウスを犠牲にしたんだ。今度は君の番だろう？」
「…ぼ、僕は…」
「それ以上は聞かない」
俺はピシャリと言った。
沈黙が続く。
…一体どのくらい時間がたっただろうか？かなり時間が経った後にダンブルドアが『姿現し』にて現れた。
「タツキ、ようやった」
「それよりも、早く行こう。今ならシリウスやリーマスがいる」
「魔法大臣ものぉ。行こうか」
ダンブルドアは片方にピーターを、もう片方を俺に差し出した。

俺はその手に掴む。
ダンブルドアはホグワーツへと『姿くらまし』をした。
俺達が出たのは何故か医務室だった。
(…ああ、成る程)
今此処にはシリウスにリーマス、セブルスに魔法大臣が揃っている。
「ダ、ダンブルドアこいつは―」
「そうじゃ。ピーターじゃよ。ピーター・ペティグリューじゃ」
「こいつは死んだんじゃ…」
「どうやらわしらは間違えていたようじゃの。ピーターは生きておる」
「ダンブルドア…」
「そうじゃの。コーネリウス。こいつは君が連れて行くがよい。わしは裁判までにはシリウスを探しておこうかのぉ」
「先程の話しは信じない。例のあの人が蘇ったなどとは…しかしこいつについては今から調べよう」
そう言って魔法大臣はピーターを連れていった。
「さて、モリー、先程の事をアーサーに伝えてほしい」
「分かりました」
モリーの声は震えていたが、はっきりと応えた。
「僕が行きます」
こういってビルが立ち上がり去って行った。
「シリウス、昔の仲間にこの事を知らせてほしい」
シリウスは…きっと犬にでもなっていたのだろう。はい、人の声で答えたらモリーとセブルスが過激に反応した。しかしシリウスは早々に出て行った。
「セブルス」
ダンブルドアはセブルスに言う。
「君に何を頼まねばならぬのか、もうわかっておろう。もし、準備が出来ているなら…もし、やってくれるなら…」
「大丈夫です」

セブルスはそれを受け入れた。
「幸運を祈る」
セブルスは医務室を出て行った。
「さて、ライカ。君にも聞きたい事がある。校長室へ行こうかの？」
「はい」
「それでは、ハリー…薬を全て飲むのじゃよ」
俺はダンブルドアと共に医務室を後にした。

八十二話

ホグワーツに潜む忠実な死喰い人とはムーディーの事だった。ムーディーというよりムーディーにポリジュースによって化けたパーティ・クラウチＪｒ．だが。

俺が感じていた魔力は閉じ込められていたムーディー本人だった。

…髪の毛を取る為に閉じ込めていたのだとか。

（…成る程）

ハリーの最後の不思議な現象は『直前呪文』だったらしく、ハリーはウ〝ォルデモートと双子杖であるためウ〝ォルデモートが使った呪いを遡りそれが木霊に反映されたらしい。

試合から数日後にはセドリックの葬式が行われた。しかしウ〝ォルデモートについて詳しい説明が行われないまま夏期休暇に入ってしまい生徒は皆帰ってしまった。

（…これは、キツクなるぞ）

生徒は入ってくる情報が新聞くらいしかない。そして魔法省は復活を否定しているから新聞もそうなるだろう。

勝負は、これからだった。

外伝・屋敷しもべ妖精（前書き）

屋敷しもべ妖精との絡みを書きたくて作ったのですが……何やら違うものが出来ました。
屋敷しもべ妖精とあまり絡んでないし……始めの会話なんて意味分からないと思います。
とりあえず、全力で。
すみませんでしたぁぁぁ

外伝・屋敷しもべ妖精

俺は久しぶりにある場所へ向かった。向かった場所は厨房だ。
「…久しぶりに―」
「お久しぶりです、タツキ様」
「…ヤギル」
彼?は屋敷しもべ妖精総長のヤギル。
「今日はどういったご用件でしょうか?」
「夏期休暇に入ったから暇でね。だから久しぶりに手伝いに来たんだ」
「そうでございましたか…ならばラルクと共に洗い物をお願いしてもよろしいですか?」
「分かった。悪いね」
俺はヤギルと離れ、厨房の食器洗い場へと入る。
…屋敷しもべ妖精は普通こんな頼み事は受け入れない。それは屋敷しもべ妖精の仕事でもあるし、彼らには彼らの誇りがある。手伝いとは彼らの誇りを…大袈裟に言うと誇りを引き裂く事と同じだ。なのに何故俺が手伝いをさせてくれるか、というと……うん。俺の我が儘を聞いてくれたから。
「…久しぶりですね。タツキ様」
「…久しぶり。手伝ってもいいかな?」
「…今日は一段と冷たいですよ?」
「…分かった」
俺は洗剤を取り出し、スポンジにつけて泡だててから食器を水洗い場から取り出した。そのままゴシゴシと洗っていく。
「…今日はどうなされたのですか?」
「…え?ああ…ふと、ね」
「…あのお嬢様のおっしゃっている事でしょうか?」
「……」

「…私達は自由などは望みません」
「…そっか」
「はい。ですから元に戻る事もありません。…それに私達は嫌でしているのでもありません」
「…俺だけならば、別に良いのだがな…」
俺はポツリと呟いた。
「…よくありません」
しかし聞こえていたのだろう。ラルクはこう言った。
「…私はそれを見たわけではありません。しかし、古くから聞き及ぶ限り人が受けるべきではないと思います」
「…そっか」
それからは黙々と食器を洗っていく。
食器は一時間くらいもすれば洗い終わってしまう。
（……終わったら何か作ろうかな？）
ガシャガシャと食器を洗う。
（！……良ーこと思い付いた）
「ラルク、食器洗い終わったら厨房借りていい？」
「別に構いませんが……」
俺はニヤリと笑う。
「後、下剤ある？」
「下剤ですか？ありますよ」
「食器洗い終わったら貰っていい？」
「分かりました」
（よし！早く終わらせよう！）
俺は食器を洗うスピードを速めた。…おかげで水が飛び散るが気にはしない。
（よし、終わり）
食器を全て洗い終わり、俺はラルクに聞く。
「下剤どこにある？」
「持ってきます」

ラルクはタッタッと離れていく。
（さて、料理は…）
久々に日本料理でも作るか。
料理はご飯に卵焼き。それにみそ汁と焼き魚で。
俺は厨房へと向かう。
「ゴメン、厨房借りるね」
厨房にいる屋敷しもべ妖精にも一つ断りを入れてから材料を漁る。
（お！あったあった）
さすが前日本料理を出した事がある。材料は揃っていた。
ガサガサと材料を台の上に乗せた頃、ラルクが下剤を持ってきてくれた。
「タツキ様、下剤を持ってきました」
「お？ありがとう。これで作れるよ」
俺は笑顔でお礼を述べた。
俺はラルクから下剤を受け取り、台に置いてから調理を始めた。

（出来た！）
久々だったので時間がかかってしまったが何とか料理を作った。
それを持ち運べるように小分けする。
「無理言って悪かった。またな」
俺はこう言って厨房を後にした。
（あの爺は……と、校長室か）
俺は校長室に目的の人物がいたので校長室へ向かった。
校長室前のガーゴイルまでたどり着き、合言葉を言う。
「確か……百味ビーンズ」
ゴゴゴゴと音を立てて校長室までの階段が現れる。
俺はその階段を上り、校長室の扉をノックした。

「お入り」
ダンブルドアからの許可が下りたので扉を開き、中へ入る。
「もうそろそろ昼だろ？暇だったか飯作った」
「ほう、タツキが？」
「ああ。俺は久々にマクゴナガル先生と食べるから、ダンブルドアの分を―」
「なら、わしも一緒に取ろうかの」
「……分かった」
俺はダンブルドアと一緒にマクゴナガル先生の部屋へ向かう。
「ミネルバも喜ぶじゃろう。何せ学生以来じゃろう？」
「そうだね。同じ職場だから毎日会うし」
マクゴナガル先生は前、俺がホグワーツへ入る為に必要な保護者になってくれていたのだ。
当然夏期休暇はホグワーツで過ごす事になり、マクゴナガル先生とはよく一緒に食事を取ったのだ。
マクゴナガル先生の部屋へつき、コンコンとノックをする。
「どうしたん―…タツキにアルバス。どうしたんですか？」
マクゴナガル先生は扉を開けてこう言った。
「暇だったので料理作ったんですよ。一緒に食べませんか？」
「わしも一緒にのう」
「えぇ、分かりました。ちょうど昼時ですし、頂きましょう」
マクゴナガル先生は部屋へと通してくれた。
俺とダンブルドアはマクゴナガル先生が出してくれた椅子に座り、ダンブルドアは紅茶、俺は作った日本料理を三人分並べる。「日本料理……ですね。とても美味しいです」
料理を机の上に並べ終え、紅茶が揃ってから料理を食べ始める。
マクゴナガル先生はこう言う。
「良かった。久々だったんで少し時間がかかったんですけど…」
たまには良いもんですね、と俺は言った。
「タツキ、ならば今度は日本の寿司を作ってくれるかの？」

「……散らし寿司なら作る」
「頼むぞ」
「なら私は肉じゃがをお願いします」
「……分かりました」
（また作れ、か……）
まぁ食べてくれて嫌な気持ちにはならないからいいか。
（散らし寿司と肉じゃがか……）
確かその材料は無かったのでラルク辺りに今度材料を仕入れてくれるように頼まないと。
食事会は雑談を挟みながら進み、それぞれ仕事があるから、と午後一時過ぎに解散をした。
俺は二人が言っていた食べ物の材料仕入れを屋敷しもべ妖精のラルクやヤギルと話し合っている内に、ダンブルドアにコッソリと入れていた下剤の事も忘れていた。
俺が忘れていた下剤の事を思い出したのは、夕食を食べる為に大広間へ来た時だった。
（……ダンブルドアの昼食に確か下剤入れなかったか？）
ダンブルドアが居ないのを疑問に思い、考えた結果だった。
（綺麗に忘れてたよ。下剤入れてたの……）
その時、バンッと大広間の扉が開いた。
「……タツキ？わしの料理に何か入れていたじゃろう？」
「……下剤入れた」
「……ほぅ？下剤を？」
「……」
俺はガタンと席を立つ。
「じゃあな、ダンブルドア！」
そして一斉に走り出し大広間を飛び出した。ダンブルドアが素早く追いかけてくる。
「タツキッ！待つのじゃ！ゆっくりと話し合おうぞ！！」
「誰が待つかぁぁ」

夜のホグワーツに俺とダンブルドアの声が響いた。

外伝・勧誘

「タツキ」
夏期休暇に入り、静かなホグワーツ。新聞はやはり予想通りにウォルデモートの復活を拒否してハリーとダンブルドアを頭が可笑しいと書き立てた。
他にはシリウスが無罪だという事も書いていたが。
「…ダンブルドア」
「時間はあるかの？」
「暇な学生だからね」
ダンブルドアは俺に近づいてくる。
「タツキ、率直に言う。『不死鳥の騎士団』に入るのじゃ」
俺は目を閉じる。…予想出来なかったわけではないがダンブルドアは学生という位置にいる今、こんなことは言わないと思っていた。
「…学生である俺に？」
「確かに学生ではある。…しかしお主も狙われているのじゃ」
それにかなりの戦力だしの、と付け加えた。
「…戦力、か」
「…そうじゃ」
俺は目を開き、ダンブルドアがいるだろう場所へ向ける。
「入らない」
「…お主も危ないんじゃぞ？」
「まぁな。それでもいい」
「…何を考えているのじゃ？」
「…何も」
俺は両手を上げてふざけた動作をする。
「…そうかのぉ」
（…おや？やけに素直に引き下がったな）
しつこく入会を迫ると思っていたのだが…

「わしはこれから仕事があるからのぉ。今日は引き下がろうかの」
働け！働け！…ん？今日は？
「ちょっとまて！今日はってことは明日も来るつもりか！」
「長いしてもうて悪かったな」
ダンブルドアは俺の話しは聞かず、去って行った。
（明日も来るのか？まさかな…）
しかしダンブルドアは翌日からうじ虫みたいに湧いてきた。
（…あの糞爺）
俺が行くところ先々に現れやがって！
ダンブルドアは校内だろうが、外出先であろうが勧誘をしてきた。
俺はそれから逃れる為に外出をしなくなり部屋に篭るようになった。
しかし何故かあいつは部屋に篭ろうが、アロホモラの対策をしていようが中に入ってくる。
（もう嫌だ…あいつはストーカーの才能ある…というか最早ストーカーだ！）
そんなに俺を『不死鳥の騎士団』に入れたいのか？
そんなストーカーを巻くために俺は部屋から今度は隠し部屋に移動し、引きこもった。…ここなら大丈夫だろう。
しかしダンブルドアは諦めてはくれなかった。ダンブルドアは俺が隠し部屋にて引きこもると一分単位じゃないかと思うくらい手紙を寄越した。…吠えメールで。吠えメールは開けなければ爆発するので何枚か開けたが…大音量でダンブルドアの声が複数になってしまい、俺は耳栓をするはめになった。しかし耳栓はしていたが吠えメールを全ては開けきれず爆発につぐ爆発で大爆発になってしまい隠し部屋が炎上した。
（…こんな目に合うくらいなら）
俺は部屋を直してから諦めてダンブルドアに『不死鳥の騎士団』に入る事を手紙にて伝えた。
その結果、俺の入会は決まりダンブルドアのストーカーも終わった。
（…俺、断っただけなのにな…）

断っただけであんな目に合うのは…と内心愚痴りながらダンブルドアが付き纏わない日々を堪能した。

八十三話

「あれ？タツキ？」
『不死鳥の騎士団』の本部になったシリウスの実家、グリモールド・プレイス十二番地。俺は今ダンブルドアとセブルス、そしてマクゴナガル先生と一緒に此処へ来ていた。何やらメンバーに紹介する、とかで。
メンバーには色々いるみたいだが…知っている名前がまずダンブルドア、次にセブルス、マクゴナガル先生、リーマス、シリウス、ムーディー、アーサー、モリー、マンダンガス…くらいだ。最もマンダンガスだなんて会話で名前を聞いただけだがな。
「リーマス…どうしたらこの爺は死ぬ？」
「タツキ！？」
俺は玄関にいたリーマスに糞爺を指しながらどうしたら糞爺を殺れるのかを聞いた。
「どうしたの？そんなことをはっきり言うなんて…」
「ルーピン、こいつはいつもこんな事を言う」
「…セブルス、お前も同じ目に会いたいか？俺ならたやすく真似出来るぞ？」
「…遠慮しよう」
「…何か嫌な事あった？」
不機嫌気味な俺の態度でリーマスはそう聞いてきた。
「糞爺が―「タツキ！」…死ねや、犬」
シリウスが俺が話している時に玄関へやって来て抱き着いてきた。
俺はシリウスを剥がす。
「い、犬！？」
「ヘタレ犬はお家へ帰るんだな。此処は犬の立ち会う場面じゃない」
シリウスはリーマスに寄る。そして小声で話し出した。
「何？あいつ機嫌悪いけど何かあったのか？」

「それを聞こうとしたら君が突っ込んで来たから分からないなぁ」
「わ…悪い。けどリーマス、どうにかしろ。俺機嫌悪いあいつ苦手なんだよね」
「そういわれてもね…タツキは君みたいに嫌な気分がスカッと発散する事なんてないからなぁ」
「なんだそれ?じゃああいつはどうやってイライラ納めてんの?」
「さぁ?僕にも分からない。触らぬ神に何とかって奴じゃない?」
「ああ…昔タツキが―「仲良しな悪戯仕掛人諸君。楽しい最後の時は過ごせたかい?」…タ、タツキ」
会話が丸々聞こえていた俺はシリウスの後ろに立つ。
「あ、あのな?別にタツキの悪口なんて―「二人共、会議終わったら覚悟しろよ?俺の『呪文学』の練習に付き合ってもらうからな?」…はい」
「…分かった」
セブルスはざまあみろ、と言わんばかりに鼻で笑った。
「…セブルスも仲間に入り―「悪かった」…ちっ」
俺はセブルスも仲間に入れる口実が出来たとつかさず狙ったのだがセブルスがいち早く謝った。
「さて、いつまでも此処にいるわけではないじゃろう?」
タイミング良くダンブルドアが聞いてきた。
「…覚えてろよ、糞爺」
俺はこう言って先に厨房へと入った。

八十四話

厨房に入るとそこには任務が入ってない騎士団のメンバーが揃っていた。
「あれ？ライカ？」
アーサーが声をかけた。
「どうして此処にいるんだい？」
「あー…」
「その話しを今からするんじゃよ、アーサー」
ダンブルドアが俺の後ろから言った。
「さて皆が席についてから話そうかの」
俺は今なおギャンギャン騒ぐシリウス達ではなくセブルスの隣に座った。
「さて、新たな仲間を紹介しようかの。タツキじゃ」
（そっちで紹介するのか…）
「タツキ？」
モリーが俺を見ながら聞き直す。
「そうじゃ。タツキはわしが任務につけていての、今はホグワーツにてライカと言う名前で学生をしておるがちゃんと成人しておる。シリウス、リーマス、セブルスと同い年じゃから三人にも聞いてみるといい。ああ、マクゴナガル先生でも良かろう。悪戯仕掛人同様手をやいていらっしゃったから覚えておるじゃろう」
「本当なの？」
モリーが鋭い声で聞いた。それにシリウスが答える。
「本当だ。タツキは俺と同い年だ」
「タツキはセブルスにベッタリとだったね」
リーマスがクスクスと笑いながら言う。
「違う。ベッタリとじゃない」
「そうだ。我輩もそこまで一緒にいた覚えはないのだが？」

「…ベッタリだったじゃない」
リーマスは呆れながら言った。
「…そこまで一緒にいた？」
「そうでもないと思うが…」
「どうみてもベッタリだっただろう！」
シリウスが突っ込んできた。
「それはシリウスの勘違い」
「それは貴様の勘違いだ」
「リーマスには言わないのかよ、お前ら」
「シリウスはセブルスに対して妙に偏見あるし」
「貴様が正しい事を言った事はない」
「じゃあリーマスのはなんだ！」
ギャイギャイと言い合いが始まる。
「そこまでじゃ、四人共」
「糞爺」
「タツキ、今はそう言うでない」
俺は間髪入れずに爺だと言うとダンブルドアは珍しく注意をした。
（…ふざけている場合ではない、か）
騒いでいる俺達が黙り込むと部屋は静まり返る。
「ふむ。今日は―」
ダンブルドアが今日のウ〝ォルデモート対策についての話しを始めた。

「―では、これにて会議を終わりましょう。時間も遅いですし」
「そうじゃの」
会議の最後はマクゴナガル先生の言葉で締めくくり終わった。
（あーやっと終わった終わった）

「タツキ」
「…リーマス、何？」
「なんであんなに機嫌が悪かったの？」
「糞爺にストーカーされてたんだよ」
俺はニコリと言った。
「「ストーカー？」」
そんな俺に対してシリウスとリーマスが同時に言った。
「俺が騎士団の誘いを断ったら…」
「断ったら？」
「何処を行こうがうじ虫みたいに現れるし、部屋に篭っても入ってくるし、挙げ句に隠し部屋に引きこもったら分単位と思うほどの吠えメールが来た」
「うわぁ…」
「…それはすごいね」
二人はすごく引いている。
「…どうやったら、爺死ぬかな？」
「そんなものタツキならば簡単だろう？」
「まぁね。老いぼれを殺れないほど落ちてはないし」
「…お前の方が上ではなかったか？」
「…そうだったね。訂正するよ。後輩だけれど老いぼれ爺を殺れないほど落ちてはない」
俺はニコリと笑顔でセブルスとダンブルドア暗殺について話し合う。
本人の目の前で。
「二人共普段こんな話しをしているのかよ…」
「うーん…そうなんだろうね。ダンブルドア先生ニコニコしているし…」
「…だよなぁ」
「シリウス、リーマス、良いのじゃよ。流石にしつこく誘ったのでのぉ、このくらいは覚悟しておる。…後は本気で実行しない事を祈るしかないの」

「…ダンブルドア先生が死なない事を祈ろうか、シリウス」
「…そうだな」
リーマスとシリウスは今だに話し合っている俺とセブルスを見ながらこう言っていた。

八十五話

「ライカ？」
「ロン、静かになさい！」
紹介から数日後である今日の会議は終わりが遅く、夕食を此処で食べる事になった。俺はモリーを手伝った後に席へ着くとロンが驚いたように言った。声が大きかったのでそれをモリーが注意する。
「君、いつ来たんだい？」
「うん？今朝来たよ」
「今朝？でも全然合わなかったじゃないか！」
「だろうね」
「ロン、座りなさい！」
「ねぇママ、ライカいつ来たの？」
「ライカ？ああー…今朝には来ましたよ」
「僕全然合わなかった！」
「それはそうよ。さて、早く夕食を食べなさい」
モリーはあまり話さず夕食を取るように言う。
ロンは今朝来たのに全く合わなかったのが気になるのかシリウスやリーマスに聞いていたが二人共口を濁し、それを見ていたモリーがロンを再度怒る。
ロンはぶつぶつ文句を言いながら夕食を食べはじめた。…後で問い詰められるかもしれないな。
（泊まるのはやはり断ろう）
これで泊まったらあることないこと質問攻めだ。それはこいつらに任せればいい。
俺は隣に座っているシリウスの肩を叩き、言った。
「後はよろしく」
「……は？」
「モリーさん、夕食ありがとうございます。俺、帰ります」

「そう？気をつけてね」
「はい。じゃ頼んだ」
俺は席を立つ。すると声がかかる。
「我輩も失礼する。タ…ライカ、タツキに用があるのだが寄っても構わないか？」
「はい、分かりました。父も歓迎するでしょう」
俺はセブルスと共にグリモールド・プレイス十二番地を後にする。
「セブルス、ホグワーツに帰るの？」
俺はセブルスに任務が無いかを聞く。
「ああ…授業の準備が終わっていないのでな」
「…セブルスにしては遅いね」
「ああ…あちらが立て込んでいてな」
あちらとは闇の陣営だろう。…スパイとは大変だな。
人気がないところまで歩き、そこからホグズミードに向けて『姿くらまし』をする。
「無事ついたね」
「当たり前だ。これくらいは出来ないと教師はやれん」
「それもそうだね」
なるべくホグワーツに近いようにホグズミードの端に『姿現し』をしたのだがそれでも歩かなければいけない。
「……なんか」
（なんかいないか？）
「タツキ？」
呟いた俺にセブルスが心配そうに名前を呼んだ。
「何でもない」
俺は妙な気分になりながらもホグワーツへと向かった。

八十六話

俺は今、緊急召集だとかで本部にいる。
「さて、諸君そろったようじゃの。今回集まってもらったのはハリーの事じゃ」
全員が揃った時にダンブルドアが話し始める。
「ハリーが数日前プリベット通りで吸魂鬼に向けて『守護呪文』を使った」
（守護呪文…ハリーは確か…）
俺の聞き間違えでなければハリーには前科があるはずだ。
「ハリーには前科があるのでの。よって魔法省での尋問が決まった」
（尋問…か）
今や魔法省はダンブルドアやハリーを目の敵にしている。
「わしとあと一人で弁護はする。尋問についてはあまり心配は無いじゃろう。しかし、じゃ。あやつはそれで諦めたりはせぬ。さらに干渉してくるじゃろう」
それからはハリーの事から警備、騎士団への誘い、と変わっていきあまり時間はかからず会議は終わった。
「タツキ、ハリーに情報を与えるではないぞ」
ダンブルドアは最後にそう言ってグリモールド・プレイス十二番地を出て行った。
「…なんか早かったね。今日は」
「ハリーが来ているからな」
俺の言葉にシリウスが答えた。
「タツキ、我輩も帰る。此処は好きではないのでな」
セブルスは俺に一言かけて言って出て行った。
「…皆大変だね」
「まあ、お前みたいに学生ではないからな」
「お二人共、ハリーを呼びに行きますから気をつけてね。特にシリ

ウス、貴方は」
「ああ、分かってる」
モリーがハリーを呼びに行く前に話していた俺達に注意をしてくれた。
「モリーさん、早く行かないとハリー達お腹空いているんじゃない？」
「お前がだろう？」
「俺は犬と違ってちゃんと手伝っているからね。食べるだけじゃないんだよ」
「あーはいはい。二人共そこまでにしないとハリー来るよ」
言い合いになりかける前にリーマスが止める。
「穢わらしい！クズども！塵芥の輩！」
ホールに入る廊下から叫び声が聞こえた。
リーマスが飛び出して行き、後にシリウスと俺が続いた。
「黙れ。この鬼婆。黙るんだ！」
シリウスは叫んでいる肖像画に向かって叫んだ。
俺は叫んでいるシリウスの後ろから肖像画に向かって『失神呪文』を放つ。
『失神呪文』は見事に当たり肖像画は静かになった。
「相変わらず煩い奴だな」
「すまない、ライカ。やあ、ハリー…どうやら私の母親に会ったみたいだね」
シリウスは俺に謝った後にハリーに声をかけた。

八十七話

「誰に…？」
ハリーはシリウスに聞いた。
「わが親愛なる母上にだよ。かれこれ一ヶ月もこれを取り除こうとしたんだが―」
「『永久粘着呪文』がかかっていて外れない。シリウス、早く入らないと夕食始まらないんだけど？」
「悪い、悪い。ライカ。ハリー早く入ろう」
シリウスはハリー達を連れて中に入る。俺はシリウスを置いて先に席についた。
「ライカ、いつの間にシリウスと仲良くなったの？」
「あ？だって俺は―「ライカは『不死鳥の騎士団』のメンバーなんだ」…ロンの言う通りだよ」
俺の言葉を遮って不満げにロンがハリーに答えた。
「何だって！？」
ハリーは驚愕したように言った。
「そういうこと」
「じゃライカは何もかも知っているんだ？」
ハリーが刺のある言い方で言う。
「何もかもって訳じゃない」
俺はそれにサラリと答えた。
モリーがタイミング良く料理を持って来てあちらこちらで料理をよそい始めた。
それからは各自各々と食事を取った。俺はリーマスと一緒に取ったがシリウスはハリーと取っていたし、ロン達はマンダンガスの話しに夢中でハーマイオニー達は騎士団のメンバーの一人、トンクスに変化を頼んでいた。トンクスは珍しい『七変化』を使える。ハーマイオニー達はそれを使って豚の鼻やら何やら頼んでいるみたいだ。

皆が寛ぎ始めた頃にモリーが言った。
「もうお休みの時間ね」
「いや、モリー、まだだ」
しかしシリウスはそれを止めた。
「いいか、ハリー。君には驚いたよ。真っ先にウ〝ォルデモートについて聞くだろうと思っていたが」
シリウスのこの言葉で部屋は静まり返る。
「聞いたよ。ロンとハーマイオニーに。けれど騎士団に入れてもらえないから―」
「二人の言う通りよ」
ハリーの言葉を遮りモリーが言った。
「あなたたちはまだ若すぎるの」
「騎士団に入ってなければ質問してはいけないと、いつからそう決まったんだ?」
モリーの後にシリウスが聞く。
「ハリーはあの家に一ヶ月閉じ込められてた。知る権利がある―」
「ちょっと待った!」
ジョージがシリウスの言葉を遮った。フレッドが続く。
「僕たちだって、この一ヶ月、みんなから聞き出そうとしてきた。なのに誰も何一つ教えてくれなかった。『あなたはまだ若すぎます。あなたは騎士団に入ってません』―ハリーはまだ未成年だぜ!」
「騎士団が何をしているのか、君たちが教えてもらえなかったのは、私の責任じゃない」
シリウスは二人に言った。
「それは、君たちのご両親が決めたことだ。ところがハリーのほうは―」
「ハリーにとって何がいいのかを決めるのはあなたではないわ!」
「そしてモリーさんでもないよね?」
俺は二人の言い合いに入った。…じゃないとずっと続きそうだし。
「ハリーの事を決めるのはモリーさんでもシリウスでもない。ハリ

ーだけだ。それにシリウスも全ては話さないだろう」
「それでも教えるべきではないわ！まだ未成年よ」
「ほんの少しの情報でも知っているのと知らないのとでは大きな違いだよ。外に何が起きているのを知らないまま無防備で外に出るのか知っていて警戒し外に出るのとでは違う。まあ、ハリーがどうなっても良いならば教えないほうが良いけど？どうするハリー？」
俺は話しをハリーに振る。
「僕―僕、知りたいです」
「…分かったわ」
モリーはユックリそう言った。
「ジニー、ロン、ハーマイオニー、フレッド、ジョージ、厨房から出なさい。すぐに」
その言葉にロン達が反対する。
「「俺たち成人だ！」」
「ハリーがよくて、どうして僕はダメなんだ」
「ママ、あたしも聞きたい！」
「ダメ！」
モリーは叫んだ。
「絶対に許しません―」
「モリー、フレッドとジョージを止めることは出来ないよ。二人共確かに成人だ」
アーサーが疲れたように言った。
「まだ学生だわ」
「しかし、法律ではもう大人だ」
「…ああ―仕方がないでしょう。二人は残ってよろしい。でもロン―」
「どうせハリーが僕とハーマイオニーに後で全部教えてくれるよ。ね、ハリー？」
ロンはモリーにこう言った。そしてハリーはこう言った。
「もちろんさ」

「そう！ジニー、寝なさい！」
モリーはヒステリー気味にジニーを追い払った。
それからハリーは質問攻めだった。
なぜあいつが活動をしていないのか、とか騎士団の活動についてとか。
シリウスを始めリーマス、アーサー、トンクスがかわるがわる説明した。ウ〝ォルデモートは現在注意を向けさせない為に活動していないこと、しかし組織を構築しているのでこちらも仲間を集めつつウ〝ォルデモートについて広めている、など。
シリウスはそれからウ〝ォルデモートが配下以外にある物を探している、と話し始める。
（もう十分だと思うが…）
「シリウス、もう十分だと思うよ。それ以上はダンブルドアも望んでいないだろうし」
「ライカの言う通りです！いますぐにベッドへ行きなさい」
「僕たちに命令はできない―」
モリーの言葉につかさずフレッドが言い返したがモリーが最後まで聞く前に言った。
「できるかできないか、見ててごらん」
モリーはシリウスに向き合う。
「あなたはハリーに十分な情報を与えたわ。これ以上何か言うならいっそハリーを騎士団に引き入れたらいいでしょう」
「そうして！僕、入る。入りたい。戦いたい」
ハリーはこの話しに飛びついた。
「ダメだ」
それをリーマスが断る。
「騎士団は成人の魔法使いで組織されている」
フレッドとジョージが口を開く前にリーマスは言った。
「学校を卒業した魔法使いだけだ」
「それじゃライカは何で入れたの？」

ハリーは俺の事を持ち出す。
「ダンブルドアが必要だと判断したからだよ。……シリウス、モリーの言う通りだ。私たちは十分に話した」
シリウスは肩をすくめたが、反論はしなかった。
モリーが一人、また一人とハリー達を帰して行った。

八十八話

寝る時間は数時間あるかないかだったが俺はベッドに入り、仮眠を取ってから会議でよく使う部屋へとおりた。
「…おはようございます…」
「おはよう。早いのね、ライカ」
「…モリーさんこそ早いですね」
そこにはモリーがもう起きていた。
「母親は皆の朝ごはんを作る、という仕事がありますからね」
「手伝います」
俺は厨房へ入ったモリーに続いた。
「あら?別に気にしなくて良いのよ。昨日は遅かったから眠いでしょう?」
「大丈夫です。慣れてますから」
俺は手を洗いモリーの横に立つ。
「そう?じゃあこれをみじん切りにしてくれないかしら」
「分かりました」
俺は包丁とまな板を取り出し渡され材料をみじん切りにしていく。
「ライカは手際が良くて早いのね。うちのところとは大違いよ」
モリーが料理をしながら話す。
「ジニーやハーマイオニーに時々手伝ってもらうけれど慣れていないからか危なっかしいのよね。だからこそ手伝わせるのだけれどこっちはハラハラしちゃう。この間も指を切りそうになっていたしね」
「でもそうやって料理は覚えていくものでしょう?俺も始めは指切ってましたよ」
すぐに慣れちゃいましたけどね、と俺は付け加えて言う。
「そうよね。いずれ二人もお嫁に行くんだもの。料理くらいは出来ないといけないわ」
お昼は手伝ってもらいましょうか?と俺がみじん切り終えた材料を

受け取りながらモリーが言った。
「その時は呼んでください」
「あら？でもライカは十分手伝ってくれているから今日の昼くらいユックリしていていいわよ？」
「…あまり人の手作りは好きじゃないんです」
「…そうなの？」
「はい」
困ったように俺が言うとモリーはそれ以上追求しなかった。
「それじゃお昼近くになったら声をかけるわ。ハーマイオニーとジニーも一緒にね」
「分かりました」
俺は渡された材料を全て切り終わり、次の料理を任された。
モリーと二人で作ったからか早く料理が出来上がり、モリーはハリー達を起こしに行った。俺はその間に料理を部屋へ運ぶ。
ハリー達がおりて来てバタバタと朝食を取る。
「…朝食くらい落ち着いて取ったら？」
「このあと掃除があるんだ。君と違ってね」
ハリーは今だに刺がある言い方だった。…そんなに入れなかったのが悔しいのだろうか？
「掃除？モリーさん、俺聞いてないですけど…」
「ああ…ライカは良いのよ。今日もあまり寝ていないでしょう？掃除はハリー達にやらせるわ」
（…暇になったな）
俺はシリウス達みたいに主立って動いてはいないから騎士団の任務何かはない。まあ最初から言われていたハリーを見守れ…だったけ？…数年前だから詳しくは忘れてしまったがそんな感じな奴だけだ。
（…此処では必要無いしな）
騎士団の人達が俺以上にピリピリと警戒しているし。
「「「「「「ごちそうさま」」」」」」
ハリー達はバタバタと取り終え掃除場所へと去って行く。

「…嵐みたいだな」
俺もハリー達みたいに急いでは無いが食事を終えてすることもないのでフラフラとうろついていた。
「…ん？」
ふと入った部屋には何も置いては無かった。
「…？結構権力がある家にこんなスペースがあるか？」
俺は壁に手をついた。するとレギュラス・ブラックという文字が頭に入った。
（レギュラス？…ああこれは）
レギュラスとはシリウスの弟でこの部屋は家系図が描かれている部屋なんだ。
（…だから物品がない）
あまり家系図がかかれている部屋には物品は置かれない。かかれているどの家でも。
（…此処にはあまりいない方がいいな）
シリウスもあまり触れたくないだろう。家族との事は。
俺はそっとこの部屋を出て行った。

八十九話

（…うっとおしいな）

今日はハリーが魔法省にて尋問を受けている日。ハリーは朝早くアーサーと一緒に魔法省へ向かったのだがシリウスがそれから落ち着きがない。いや、シリウスだけではなくロン達もだが。

（分からないわけではない。俺だって心配だしな。…だからといってあっちをウロウロこっちをウロウロされるのは、な）

ただでさえ此処は狭いのにこんなにもウロウロされては正直俺のイライラが溜まるだけなので止めてほしい。

「シリウス、ウロウロするのを止めてくれないかな？」

「あ…悪い」

しかしシリウスはそう言ったものの数十分後にはウロウロし始める。

「…シリウス罰則だね」

俺はホールにあるあの肖像画のカーテンを開けた。

「穢た血！裏切り者―」

途端にあの人は叫び始め、シリウスやモリーが飛んで来て肖像画と格闘をしていた。

（うん。スッキリ）

俺は二人には協力せずにホールへと戻る。

二人はしばらくしてからホールへ入ってきてモリーはそのまま厨房へ戻ったがシリウスは俺の隣に座った。

「タツキ、よくもやったな？」

「君達がむやみやたらにウロウロするからだろ？ただでさえ此処は狭いんだ」

「……」

シリウスは何も言わずに俯せた。

…少しは反省してくれればいいのだが。

ハリーは昼過ぎには此処へ戻ってこれた。…どうやら尋問の時間が

早まったらしく予定よりも早く終わったらしい。
ハリーは無罪放免になりジニーやフレッド、ジョージは「ホーメン、ホーメン、ホッホッホー」と歌い騒ぎ始めた。
モリーが三人に注意をするが、あまり怒っている声ではなかった。

夏休み最後の日にホグワーツからの手紙は届いた。
(遅かったな…最後の日だなんて)
普通はまだ早くくるのだが。
俺は手紙を開ける。一枚目はいつものように新学期が始まる日付が書いてあり、もう一枚には教科書が書いてある。
(五学年は…二冊)
ミランダ・ゴズホーク著『基本呪文集・五学年用』とウィルバート・スリンクハード著『防衛術の理論』だった。
俺が手紙を開いているとモリーがやって来て覗いた。
「あら、やっと来たの?ライカ、それを渡してくれるかしら?午後にダイアゴン横丁に行って買ってくるわ」
俺はモリーにリストを渡す。
モリーは受けとった後に2階へと上がって行った。…ハリー達のを取りに行ったのだろう。
数分後、モリーが興奮状態でホールへと入って来た。
「ロン―ロンが監督生になったの!ハーマイオニーもよ」
モリーはこう言ってバタバタと用意をしてダイアゴン横丁へ飛んで行った。
「監督生?あーもうそんな年か」
「それ年寄りが言う台詞だろう?」
シリウスが鼻で笑いながら言う。
「…シリウス、俺が今何歳か知りたい?」
俺はニッコリと笑う。
「君の倍は生きてるよ?あの糞爺よりも…ね」

「…悪い。お前は年寄りだったんだな」
「…シリウス、死んで？」
「すみませんでした」
シリウスは即座に謝る。
「監督生ねー…選ばれてあんなに嬉しいもんなのか？」
「そりゃそうだろう。認められたんだからな。監督生には普通の生徒を罰する事も出来るし有事の時は頼られるしな」
他にも色々あっただろう？とシリウスは付け加える。
「まぁなー…けれどやはり俺は喜ばないな」
「なんでだ？」
「だってなぁー…元々監督生ってのはー…いや、やっぱ止めとく」
「言えよ！気になるだろう！」
「…知らなくても良いんだよ、シリウス」
言えよ！と切れるシリウスを無視し俺は話す。
「でもロンなー…意外だった」
「無視かよ。まぁ…俺もロンとは思わなかったな。ハリーかお前かと思っていた」
「俺はないね。ダンブルドアは甘い…というか甘やかす？まあそんな感じだからな」
ハリーもそんな感じで弾かれたのかもな、と付け加える。
「甘いだと？どこが？」
シリウスは鼻で笑う。
「甘いよ。俺が何かをしているのを気づいていながら何も罰しないし、それの邪魔にならないように監督生にはしなかったんだからな」
「…ダンブルドアはお前が何をしているのか知っているのか？」
「いや、知らない。俺は誰にも教えて無いしな。ただ何かをしている、という事だけだ」
「俺にも教えてないしな」
シリウスは拗ねたように言う。
それからはモリーが帰ってくるまでシリウスと話していたのだが、

夕食がパーティーにするらしく大慌てで料理を手伝うことになりシリウスと会話どころではなかった。
夕食はロンとハーマイオニーの監督生祝いパーティーで豪華になった。
パーティーにはシリウス、リーマス、トンクス、キングリー、シャックルボルトなど騎士団メンバーを入れたものだった。
パーティーが始まってすぐにムーディー、アーサー、ビルがやって来た。ムーディーはモリーとロンに少し会話した後、俺の元にやって来た。
「お前さんとはユックリ話した事がなかったな」
「ムーディー…先生」
「ムーディーで構わん。それに、お前さんの事はアルバスから聞いた」
「…何を？」
俺はムーディーに聞く。
「教員が知らされる事と、本当の名前も聞いた」
俺は眉をひそめながら声を低くし聞く。
「あいつが話しのか？」
「いや、アルバスが切り出したのではない。わしがアルバスに聞いた。あの馬鹿は気づかなかったみたいだが…」
ムーディーは声を潜める。
「お前さんはアルバスよりも魔力がでかいな？押さえているんだろうがわしには分かる」
「…本当に？」
「ああ…まぁ気づくのはわしくらいだろうがな。アルバスより魔力が大きいならば名が知られているだろうにわしは聞いた事がない。だからアルバスに聞いたんだ…」
「…成るほど。流石凄腕の闇祓いだな」
「…そんなもんは誰でも取れるだろう。最も警戒を常にしていればな」

ムーディーは声を潜めるのを止める。
「それだけで本当に違う。今の若い奴らはそんな事はしないがお前さんはやっておるだろう？」
「…よく見てるな」
「今どきの子供は進んで手伝いなんぞはせん。ましてや毎回食事時ならば分かるもんだろう。分からないのは若い連中だけだ」
…職業柄もあるかもしれんが、とムーディーは付け加える。
俺が毎回食事を手伝っているのは料理に毒物が入っているかを確かめるため。手料理は入れやすいからな。
それからはムーディーと闇の魔術について話したり、去年の三校対抗試合について話し合った。
ムーディーは話したい事は話したのかハリーに見せたいものがある、とハリーの方へと去って行った。
俺はしばらく会場にいたがハリーが抜け出したので、俺も抜け出す。
（…戻るかな）
俺は部屋から出て階段を上る。
（……ん？）
何やら啜り泣く声が聞こえた。
俺は声がする方向へと進んだ。
「リ―…リディクラス！」
そこにはモリーが泣きながら杖を振るっていてハリーが呆然と立っていた。
「リーリー…リディクラス！」
（まね妖怪か……）
…しかし呪文が上手くいかないのだろう。モリーはリディクラスを繰り返した。
俺は呪文を繰り返しているモリーの側にいく。
「リディクラス！」
ポンっと音を立ててまね妖怪は消えた。
「どうした？」

リーマスがヒョコリと現れる。
「ハリー、説明頼んだ。俺には何があったか詳しく説明できないしね」
俺は説明をハリーに頼んで部屋を出て行った。

九十話

ホグワーツへ向かう日はバタバタとしていた。ハリー達も急いで用意しているが騎士団の方でもハリーの護衛の人数が合わなくなりバタバタと調整をしている。

「アーサー、俺はもう行くよ」

「あ…ああ。気をつけて行くんだよ」

今年は車が借りれずキングス・クロス駅まで歩く事になった。全員がいっきに此処から出るわけにはいかないので俺が一番始めに出ることになっている。

俺はバタバタと準備をしている音を聞きながらホールから玄関に行き、外へ出る。

キングス・クロス駅には二十分くらいで着きいつものようにマグルに気づかれないように九と四分の三番線へと向かった。

(荷物置きに行きたいけど…ダメだろうな)

俺はプラットホームに着いた時点で待機になっている。しかしハリー達が此処に来るのは遅いだろう。準備が手間取っているみたいだったし。

「置きにいっちゃダメかなぁ…」

「何の話しですか?」

俺が呟いた言葉に返事が返ってきた。

「んー……レイチェル!?」

「はい」

俺は近くにいるレイチェルに全く気づかなかった。

…やばい、年か?年なのか?

「ビックリした。いつから?」

「何時からって…壁を通り抜けたら先輩がいましたけど?」

「お前は何か考えているみたいだったがな」

人混みの中からライルがレイチェルの元へやって来た。

「だから先へ行くと言ったんだがこいつが声をかけると聞かなくてな…行くぞ」
「もう？じぁ先輩また」
レイチェルはライルと共に去って行く。
（…全然気づかなかったなぁ）
俺もとうとうダンブルドアの仲間になっていってる…な。
少々…というかかなり嫌だがこういう事があるとやはり年をとったと感じる。
「ライカ、待たせた」
シリウス、モリー、ハリーが壁からやって来てこっちへ向かって来た。
ハリーの次にハーマイオニー、ロン、ジニーやフレッド、ジョージと次々に集まり、それぞれ別れの挨拶をした後にホグワーツ特急に乗り込む。
ホグワーツ特急が動き出てからフレッド、ジョージの二人は友達のところへ、ハーマイオニーとロンは監督生の車両へと向かった。
俺とハリー、ジニーでコンパートメントを探すが何処も埋まっている。
コンパートメントを探す途中で興奮状態のネビルに会った。
そしてネビルと会った場所の近くにあるコンパートメントに先客がいたのだが許可をもらいそこで落ち着く。
「こちらルーナよ。ルーナ・ラブグッド。わたしと同学年だけどレイブンクローなの」
ジニーが先客の子について紹介した。
「計り知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なり」
ルーナが歌うように言った。
俺はそれを聞いて思わず吹き出しそうになった。…久々に聞いたぞ、それ。
ルーナはそれ以外は話さず雑誌か本を読み始めた。
ネビルが少したってから嬉しそうに話しだした。

「誕生日に何をもらったと思う？『ミンピュラス・ミンブルトニア』だよ！」
「ミンピュラス・ミンブルトニア？珍しい物だね」
「大伯父さんがアッシリアから持ってきてくれたんだ」
ミンピュラス・ミンブルトニアとは薬草だ。この薬草は医療や魔法薬などに使われているが防衛機能が多かったりする。
「これ―あの―役に立つの？」
ハリーがネビルの持っている奴を見ながら聞いた。
「いっぱい！これ、ビックリするような防衛機能を持っているんだ。ちょっと待ってて…」
ネビルは何やら突き始める。するとミンピュラス・ミンブルトニアは液体を吹き出した。
（もしかして…）
俺はハリーの後ろに隠れる。…おかげで臭液を被らずにすんだ。
散らばった臭液はジニーが清め、ネビルは小さく謝った。
昼過ぎにハーマイオニーとロンがコンパートメントに顔を出した。けれど一時間ごとに通路を見回るらしい。…ご愁傷様。
ロンとハーマイオニーはちゃんと定期的に見回りに行き、それが何回かなる頃にはホグワーツ特急は徐々にスピードを落としていき、ホグズミード駅へと着いた。
俺は汽車からおりてすぐにハグリッドの声が聞こえない事に気づいた。
（…任務か？）
よくは分からないが一年生の誘導をしていたのは昨年『魔法生物飼育学』を代行した魔法使いだった。
（まあ、代行はいるからいいか）
俺は駅からセストラルが引く馬車へと向かった。

九十一話

馬車がホグワーツへとついて俺は大広間へと向かった。
大広間に着き、中へ入ったがそこにハグリッドはいなかった。
（……任務かな？）
やがてハグリッドの代行の先生が戻ってきて、マクゴナガル先生の後に一年生が入って来た。
大広間は静まり返り組分け帽子が歌い始めた。
―昔々のその昔、私がまだまだ新しく
ホグワーツ校も新しく
気高い学び舎の創始者は

別れることなど思わずに
同じ絆で結ばれた

同じ望みは類なき
魔法の学び舎興すこと
四人の知識を残すこと
「ともに興さん、教えん！」と
四人の友は意を決し
四人が別れる日が来ると
夢にも思わず過ごしたり

これほどの友あり得るや？
スリザリンとグリフィンドール
匹敵するはあと二人？
ハッフルパフとレイブンクロー
なれば何故間違うた？

何故崩れる友情や？
なんとその場に居合わせた
私が悲劇を語ろうぞ

スリザリンの言い分は、
「学ぶものを選ぼうぞ。祖先が純血ならばよし」
レイブンクローの言い分は、
「学ぶものを選ぼうぞ。知性に勝るものはなし」
グリフィンドールの言い分は、
「学ぶものを選ぼうぞ。勇気によって名を残す」
ハッフルパフの言い分は、
「学ぶものをば選ぶまい。すべてのものを隔てなく」

こうした違いは格別に
亀裂の種になりもせず
四人がそれぞれ寮を持ち
創始者好みの生徒をば
この学び舎に入れしかば

スリザリンの好みしは
純血のみの生徒にて
己に似たる狡猾さ
もっとも鋭き頭脳をば
レイブンクローは教えたり
勇気溢るる若者は
グリフィンドールで学びたり
ハッフルパフは善良で
すべてのものをば教えたり

かくして寮と創始者の
絆は固く真実で
ホグワーツ校は和やかに
数年間を過ごしたり

それから徐々に忍び寄る
恐れと疑惑の不和のとき
四本柱の各寮が
それまで支えし学び舎を
お互いに反目させし上
分断支配を試みた

もはやこれにて学び舎も
終りと思いし日々なりき
決闘に次ぐ決闘と
友と友との衝動が
ある朝ついに決着し
学び舎を去るスリザリン

争いこそ無くなれど
後に残りし虚脱感
四人がいまや三人で
その三人になりしより
創始者四人が目指したる
寮の結束成らざりき

組分け帽子の出番なり
諸君も先刻ご存知の
諸君を寮に振り分ける
それが私の役目なり

しかし今年はそれ以上
私の歌を聴くがよい
私の役目は分けること
されど憂えるその結果

私が役目を果たすため
毎年行う四分割
されど憂うはその後に
恐れし結果が来はせぬか

ああ、願わくば聞きたまえ
歴史の示す警告を
ホグワーツ校は危機なるぞ
外は敵は恐ろしや
我らが内にて固めねば
崩れ落ちん、内部より
すでに告げたり警告を
私は告げたり警告を…

いざいざ始めん、組分けを―
組分けが歌い終わり拍手が上がるがその中で話し合う生徒達もいた。
しかしマクゴナガル先生が一年生の名前を呼び始めると静まり返り、
一年生の組分けが進んでいった。
一年生の組分けが終わるとダンブルドアのふざけた挨拶があり、料理が出された。
食事時にハーマイオニーとロンが喧嘩をしていたが仲直りをしに割り込まないといけない程ではなくいつもの些細な喧嘩だった。
賑やかな食事が終わり、ダンブルドアが立ち上がった。
「さて、またしても素晴らしいご馳走を、みなが消化しているとこ

ろで、学年度始めのいつものお知らせに少し時間を頂こう」
「校庭内の『禁じられた森』は生徒立ち入り禁止じゃ。管理人のフィルチさんから授業と授業の間に廊下で魔法を使ってはならん。他の禁止事項じゃがすべて長い一覧表になってフィルチさんの事務所のドアに張り出してあるので、確かめる事じゃ」
「今年は先生が二人替わった。グラブリー・プランク先生がお戻りになったのを心から歓迎申し上げる。『魔法生物飼育学』の担当じゃ。さらにご紹介するのが、アンブリッジ先生、『闇の魔術に対する防衛術』の新任教授じゃ」
（アンブリッジ？魔法省の奴だった…よな？）
あちらこちらでパチパチと礼儀がある分の拍手が上がる。
「クィディッチの寮代表選手の選抜の日は―」
ダンブルドアが突然話しを止めた。しかしその理由が分かった。
アンブリッジがエヘン、エヘンと咳をしてダンブルドアの話しを止めたのだ。
そしてダンブルドアは席に座った。
（あーあ…あいつ先生方を見事に敵に回したな）
同時にあいつは孤立するだろうな、と俺は思った。
「さて、ホグワーツに戻ってこられて、本当に嬉しいですわ！」
「そして、みなさんの幸せそうなかわいい顔がわたくしを見上げているのは素敵ですわ！」
ゾワリと悪寒が走る。
（き、気持ち悪ぅー！）
気持ち悪い話し方だな。なんだ、あの猫撫で声！いったい何に媚びを売っているんだ？
「みなさんとお知り合いになれるのを、とても楽しみにしております。きっとよいお友達になれますわよ！」
（あーあ…）
あんな事を言ってしまったらもう生徒達の悪戯の的だな。
アンブリッジはェヘン、ェヘンと咳払いをした。

「魔法省は若い魔法使いや魔女の教育は非常に重要であると、常にそう考えてきました。みなさんが持って生まれた稀なる才能は、慎重に教え導き、養って磨かなければ、ものにはなりません。魔法界独自の古来からの技を、後代に伝えていかなければ、永久に失われてしまいます。われらが祖先が集大成した魔法の知識の宝庫は、教育という気高い天職を持つものにより、守り、補い、磨かれていかねばなりません」

アンブリッジは此処で一度先生方に会釈をしたが誰も返さなかった。

「ホグワーツの歴代校長は、この歴史ある学校を治める重職を務めるにあたり、何らかの新規なものを導入してきました。そうあるべきです。進歩がなければ停滞と衰退あるのみ。しかしながら、進歩のための進歩は奨励されるべきではありません。なぜなら、試練を受け、証明された伝統は、手を加える必要がないからです。そうなると、バランスが大切です。古きものと新しきもね、恒久的なものと変化、伝統と革新……」

…長い。俺はあまり話しを聞くタイプではないので最早集中力は切れてしまった。

しかし小声だが生徒達は喋っている人が多い。やはり話しが長すぎるのだ。

「…なぜなら、変化には改善の変化もある一方、時満ちれば、判断の誤りと認められるような変化もあるからです。古き慣習のいくつかは維持され、当然そうあるべきですが、陳腐化し、時代遅れとなったものは、放棄されるべきです。保持すべきは保持し、正すべきは正し、禁ずべきやり方とわかったものは何であれ切り捨て、いざ、前進しようではありませんか。開放的で、効果的で、かつ責任ある新しい時代へ」

アンブリッジはこう言って満足したのか席に座った。

（…長くてよく覚えていないが…）

あいつはホグワーツを、ホグワーツに干渉して変えるつもりだ。魔法省好みに。

（…そんなことは、）
そんなことは、なってはならない。此処、ホグワーツは魔法省に干渉されるべきではない。特に今の魔法省には。
「ありがとうございました。アンブリッジ先生。まさに啓発的じゃった」
「さて、先ほど言いかけておった―」
（まさにそうだな。啓発的）
珍しく爺と意見が合った。啓発的、ピッタリだ。
ハーマイオニー達も先ほどの演説について話し合っていた。
「―就寝じゃ、駆け足！」
ダンブルドアが就寝を告げた。
ハーマイオニーとロンは監督生として一年生の元へと去って行った。
俺は大広間からグリフィンドールの寮へと向かう。
（『闇の魔術に対する防衛術』…か）
何やらその教科は運がないな。一年交代で変わるし、今年は宣戦布告したも同然な教師だし。
俺は今グリフィンドール寮前まで来たが、寮の入口の図画の前で立ち止まっていた。
（そう言えば合言葉知らないや…）
ロンかハーマイオニーに聞いていれば良かったと後悔する。
（…仕方ない）
「『　　』」
「…合言葉を聞いていなかったのね。今度はちゃんと聞かないとそのうちバレちゃうわよ？」
『太った婦人』はこう言って開けてくれた。
ホグワーツにはあちらこちらに合言葉があるが実はこれらは共通の合言葉がある。
サラザールがどうせお前は全て覚えきれないだろうからな、って付けた。先ほどのはこれを使ったのだ。
ちなみに共通の合言葉はルーン文字学であり、『眠れる龍を起こす

べからず』だ。
（これを付けて本当に正解だった）
提案したサラザールには感謝しなければな…俺が何度これで助かったことか。
俺はグリフィンドール寮へと入り、部屋へと上がって行った。

九十二話

朝、朝食を大広間で取っているとマクゴナガル先生から時間割が配られた。
（今日は―…うわぁ）
これは中々大変な日になるな。月曜なのに。
授業は『魔法史』、『魔法薬学』、『占い学』、『闇の魔術に対する防衛術』だ。
（確か監督生の時期は…フクロウがあったな。またやるのか）
俺は思わずため息をついた。フクロウは『O・W・L』、『普通魔法使いレベル試験』というテストがある。これは最終学年にある『N・E・W・T』、イモリと呼ばれる『めちゃめちゃ疲れる魔法テスト』と同様に就職に影響する。
だから先生方は生徒の為にかなりの課題を出す。これに生徒達は毎年狂うのだ。
（まぁ、テスト事態は大した事はないんだが…）
一年間あのピリピリとした中で狂った奴らの叫び声を聞かざるえないとなると…
（今からでも憂鬱だな）
俺は大広間から『魔法史』の教室へと移動する。
教室ではあまり日が当たらないところを選んだ。でないと寝てしまう。
『魔法史』の授業は巨人の戦争についてだった。…知っていて損はない内容のはずだがクラスの全員が聞いていたかどうかは怪しいところだった。…こいつらはフクロウ落ちるな。
長い『魔法史』の後は『魔法薬学』なので地下牢へと向かう。
教室に入ると後ろ側はすでに無く、俺は一番前の席に座った。
「静まれ」
セブルスは教室に入った瞬間言ったが、言わなくてもクラスは急に

静まった気がする。
「本日の授業を始める前に、忘れぬようはっきり言っておこう。来たる六月、諸君は重要な試験に臨む。そこで魔法薬の成分、使用法につき諸君がどれほど学んだかが試される。このクラスの何人かはたしかに愚鈍であるが、我輩は諸君にせいぜいフクロウ合格すれすれの「可」を期待する。さもなくば我輩の…不興を被る」
「言うまでもなく、来年から何人かは我輩の授業を去ることになろう。我輩は、もっとも優秀なる者にしかイモリレベルの『魔法薬』の受講を許さぬ。つまり、何人かは必ずや別れを告げるということだ。しかしながら幸福な別れの時までにまだ一年ある。であるからイモリテストに挑戦するつもりか否かは別として、我輩が教える学生には、高いフクロウ合格率を期待する。そのために全員努力を傾注せよ」
「今日は、普通魔法使いレベル試験にしばしば出てくる魔法薬の調合をする。『安らぎの水薬』。不安を鎮め、動揺を和らげる。注意事項。成分が強すぎると飲んだ者は深い眠りに落ち、ときにはそのままとなる。故に、調合には細心の注意を払いたまえ」
（…イモリ、か）
俺は材料を刻み的確に煮込み、掻き回す。
（そろそろセブルスに申し込まないとな…）
フクロウレベルなら何とかなるがイモリとなると俺は時間以内に作るのが難しくなってくる。だから魔法薬学の担当教授にあらかじめ話しをしておき、場合によっては授業の終わりに課題を提出することに許可を貰わないといけない。
「そろそろ薬から軽い銀色の湯気が出るはずだ」
数十分後、セブルスはこう言った。薬はそろそろ最終に入る。
（…何とか間に合ったな）
俺は時間内に仕上げる事ができ、瓶に入れて机に提出した。
「課題をなんとか読むことができた者は、自分の作った薬のサンプルを細口瓶に入れ、名前を書いたラベルを貼り、我輩がテストでき

るよう教壇の机に提出したまえ」
セブルスはいつものハリーイジメをやった後に言う。
「宿題。羊皮紙三十センチに月長石の特性と、魔法薬調合に関するその用途を述べよ。木曜に提出」
地下牢から出て、大広間で昼食を取った後に『占い学』だ。
（今年は何だろうな？）
俺は『占い学』の教室へと入る。
『占い学』は夢の占いへと入っていった。はっきり言って夢なんて見ないが此処はまぁ適当にでっちあげ過ごした。
しかし一ヶ月夢日記をつけるという宿題が出されたが。
（俺、来年はこの学科取らないでおこう）
マクゴナガル先生に万が一合格ラインにいっても真っ先に外してもらうように話そう、と俺はこの授業で決めた。
『占い学』の次は『闇の魔術に対する防衛術』だった。
（…あいつか）
…あんな猫撫で声を聞かなければいけないのか。
俺は憂鬱な気分なまま教室へ入る。
教室にはすでにアンブリッジは教壇に座っており、生徒が来るのを待っていた。
アンブリッジは生徒が揃うと立ち上がり挨拶をした。
「さあ、こんにちは！」
何人かが「こんにちは」と挨拶をした。
「チッチッ。それではいけませんねぇ。みなさん、どうぞ、こんなふうに。『こんにちは、アンブリッジ先生』。もう一度いきますよ、はい、こんにちは、みなさん！」
「こんにちは、アンブリッジ先生」
みんな一斉に挨拶をする。…俺以外。
「そう、そう。難しくないでしょう？杖をしまって、羽根ペンを出してください」
（…杖をしまって、ね）

「さて、みなさん、この学科のこれまでの授業は、かなり乱れてバラバラでしたね。そうでしょ？」
「先生がしょっちゅう変わって、しかも、その先生方の多くが魔法省指導要領に従っていなかったようです。その不幸な結果として、みなさんは、魔法省がフクロウ学年に期待するレベルを遥かに下回っています。しかし、ご安心なさい。こうした問題がこれからは是正されます。今年は、慎重に構築された理論中心の魔法省指導要領どおりの防衛術を学んでまいります。これを書き写してください」
（…魔法を使わせないつもりか）
俺はアンブリッジの言うことは聞かなかった。
アンブリッジは生徒が写し終えると話し出す。
「みなさん、ウィルバート・スリンクハードの『防衛術の理論』を持っていますか？」
ボソボソと持ってますと聞こえる。
「もう一度やりましょうね。わたくしが質問したらお答えはこうですよ。『はい、アンブリッジ先生』または『いいえ、アンブリッジ先生』では、みなさんウィルバート・スリンクバードの『防衛術の理論』を持ってますか？」
「はい、アンブリッジ先生」
生徒達は答える。
「よろしい。では五ページを開いてください。『第一章、初心者の基礎』お喋りはしないこと」
（…本気で使わせないか）
生徒達がボーッとしていてもアンブリッジは注意はしなかった。そんな中ハーマイオニーが挙手をした。
アンブリッジはしぶしぶハーマイオニーに聞いた。
「今は読む時間よ？何か分からないことがあったの？」
「授業の目的に質問があります」
「…あなたのお名前は？」
「ハーマイオニー・グレンジャーです」

「さあ、ミス・グレンジャー。ちゃんと全部読めば授業の目的ははっきりしていると思いますよ」
「でも、分かりません。防衛呪文を使うことに関しては何も書かれてありません」
沈黙が流れた。
「防衛呪文を使う？まぁミス・グレンジャー。このクラスであなたが防衛呪文を使う必要があるような状況が起ころうとは、考えられませんけど？まさか、授業中に襲われるなんて思ってはいないでしょう？」
（そりゃ授業中は襲われないな。けれど実際に襲われても対策が出来るように訓練するんだが？）
生徒達の反撃が続く。
アンブリッジはそれに対して答えていく。ろくでもない答えだが。
だが段々とイラついているのか猫撫で声から押し付けになってきた。
次第には安全に学ぶ為だとか言いはじめる。
（安全に学ぶ？安全に学んでは身につかないだろう？）
安全に学んでは記憶に残らず、何かあった時にはパニックになって足手まといになるだけだ。
「試験に合格するためには、理論的な知識で十分足りるというのが魔法省の見解です。結局学校というものには、試験に合格するためにあるのですから」
俺はその言葉に堪えられなかった。
（そんなものの為に建てたのではない！）
「ならば先生は理論が分かっていれば出来る、と言うのですね？ならば今すぐに『守護呪文』を生徒達にさせてはどうですか？あれは幸せな思い出を浮かべるだけですから理論の時間は取りませんし、皆すぐに出来るですよね？」
「挙手をしなさい！貴方は教授ですか？貴方が決めることではないんですよ。それに魔法省がこれで十分だと判断しました」
「俺は先生の言う事が正しいならばすぐに出来るのでさせてみては

？と言っただけですよ。理論だけで呪文を扱える、と言うのですから先生は『変身術』もさぞや素晴らしいでしょうね？…後、魔法省、魔法省と繰り返し言わない方が言いですよ。魔法省が決めた事ですから、って繰り返し言うだけならば子供でも出来ますから」

生徒達はその言葉に笑い始める。…やけにアンブリッジは魔法省、魔法省と言っていたからな。面白かったのだろう。

「お黙りなさい。盲目である貴方に―」

しかしアンブリッジは何を言ったのかに気づき、最後まで言わなかった。だが非常に言ってはいけない事を言っているので今更黙っても遅かった。

静まり返ったクラスの中でアンブリッジはェヘンと咳ばらいをしてから話しだした。

「えー…先程も言いましたが、学校は試験に合格するためにあります。よって試験には理論的知識があれば問題は―」

（俺は二度も許しはしないぞ、アンブリッジ？）

俺はアンブリッジに向けて失神呪文を放った。それは見事にアンブリッジに当たりアンブリッジは気絶する。

「ラ―ライカ、貴方―」

ハーマイオニーが俺に声をかけるが俺は無視をして教室を去った。

九十三話

俺は授業を出て行ったその日の夕方にマクゴナガル先生に捕まった。
「ライカ、話しがあります」
「うげ…マクゴナガル先生」
「うげ、とは何ですか。今日の防衛術の授業にて先生に呪文を放ったみたいですね？」
「あー…はい」
「…一体どうしたんです？あなたはポッターと違ってそんな事はそう容易にしないと思っていたのですが？」
「…別に、俺が堪えられずに怒りをぶつけただけですよ」
「堪えられなかった、ですか？」
「はい。あの先生は学校は試験に合格するためにある、と言っただけです」
「…そうですか」
マクゴナガル先生はそう言っただけだった。
（…？てっきり説教かと思っていたのだが）
「…貴方が怒った理由は分かりました。あの女は…いえ、何でもありません。どんな理由であろうとも貴方には罰則があります。アンブリッジ先生のところに明日、七時に行きなさい」
「七時、ですね。分かりました」
それでは失礼します、と言って去ろうとすると呼び止められる。
「ライカ、待ちなさい！貴方があの先生のうっかりで盲目だと言う事が広まっていますが…これはどういう事ですか？」
「あー…もう噂になってます？」
「…事実なんですね？」
「はい。先生がうっかり話しました。しっかりと」
マクゴナガル先生はため息をついた。
「…そちらについてはこちらで話しておきます」

「分かりました」
俺はマクゴナガル先生に失礼します、と言ってから去って行く。
(罰則、か)
「先輩！」
バタバタと前方から廊下を走ってくる音が聞こえた。
「レイチェル、廊下は走らない」
「先輩、目が見えてないって本当ですか？」
(聞いてないな…)
俺は前にいるだろうレイチェルに再度言う。
「廊下は走らない。走っていいのは悪戯から逃げる時くらいだよ。…で、俺の目が見えていないかだったよね？」
「悪戯の時ははいいんですね……そうです。今先輩が盲目だって噂が回っているんですけど…」
レイチェルはどんどん小さく話していく。
「まぁそうだよ。俺は目が見えない。分かった？」
「目が見えないって…そんな簡単に言うことではないですよ！」
「俺にとっては問題じゃないよ。見えない事は。それにもう長いから慣れたしね」
「長い？慣れた？」
「うん。で話しはこれだけ？」
レイチェルは長いと慣れたに違和感を感じたのか不思議そうに言ったが俺は受け流した。
「はっ！そうです。先輩が盲目だったらホグワーツから退学の話しが出ているんです！」
レイチェルは見事に流された。しかし、退学？
「…どういう事？」
「先輩が先生方を騙して盲目なのに入学したからって―「いや、先生方知っているし」―…はい？」
「だから先生方はみんな知っているんだよ。今のところ一年で交代した先生達も知っているし、アンブリッジも知っていだだろう？」

噂にはアンブリッジも出ていたはずだ。うっかり話した、と。
「あ…そうですね。ならダンブルドア先生も…」
「当然知っている。知っていながら入学を許可したんだ」
「でも、どうして？」
レイチェルは不思議そうに聞いた。
「入学の事か？俺は目は見えないが日常生活は支障がないからな。現にこうやって知らなければ皆気づいていなかったしな」
「あ！…確かに。先輩テストとか受けてますもんね。しかも学年一位」
よく発表の時に先輩の学年見るんですよ、とレイチェルは言う。
「俺の学年を？」
「はい。私は学年最後に近いですから必然的に」
「…勉強してる？」
「はい！してますよ！楽しいですよね、勉強」
（ああ…成る程）
人によってはどれだけ勉強しても報われない人はいる。レイチェルはこのタイプだ。絶対に。
「…そっか。それならいいや」
「…何が、ですか？」
「何でもないよ」
テストで最後に近くても、勉強が楽しいという。
俺はレイチェルに聞いてみた。
「テストが悪いのに勉強が好きな理由は？」
「理由ですか？友達と話し合うのが楽しいからです。友達とあれだよ、違うこうだよ、って話し合ってふざけるのが、楽しいんです。だから勉強するのも好きなんですよ！」
元々勉強は好きでしたが、やっぱり勉強好きな友達と話し合うようになってからさらに好きになりました！とレイチェルは付け加えて言った。
（学校はこうでないとな）

学校は試験に合格するだけの為ではない。友達と友情を育んだり、切磋琢磨したり喧嘩したり…そういうのを経験して、思いっ切り楽しむのも学校でしか出来ないと思う。特に此処はほぼ一年間ホグワーツにて過ごすからなおさら。

（こういうのを聞くと、嬉しくなるよな）

「…先輩？どうしたんですか？」

「ん？ああ…何でもないよ」

「先輩それればっかりですね」

「…そう？」

「そうですよ！何でもない、ってばっかり」

「悪い、悪い。さて大広間に行くかな」

「大広間？」

レイチェルは疑問に思ったのか繰り返した。

「うん。俺は夕食を食べてないからね」

「そうなんですか？」

「うん。じゃ俺は行くね」

「分かりました。私は寮へ帰ります。夕食は食べたし」

「そっか。じゃあね」

俺はレイチェルと別れた。

俺が大広間に入ると静まり返ったが、俺は気にせずに席に着き食事を取りはじめる。

周りも次第に話し始め、いつもの騒がしい夕食に戻った。

（直接何か聞いてくるかと思ったが…）

聞いてこないなら聞いてこないで構わない。勝手に噂を脚色すればいいさ。

俺は夕食を取り終えてからは明日の授業に備えるためにグリフィンドール寮へと向かった。

九十四話

アンブリッジをぶっ飛ばした日の翌日。俺はいつも通りに授業を受けた。周りからは少し避けられているがこのくらいなら痛くもない。

（あー…そういえば今日は罰則が入っていたな）

宿題が多く出された上に罰則か…徹夜になるが出来ない量ではない。

罰則が早くすめば、だがな。

俺は最後の『薬草学』のために温室へと入った。

『薬草学』ではスプラウト先生が授業の始めにフクロウについての演説をした。これはスプラウト先生だけではなくてマクゴナガル先生や他の先生方もしていて聞き飽きていた。

（まぁ大切な事だしな…）

これで生徒の将来が決まると言ってもおかしくはない。イモリの授業を受けるためにはフクロウでその科目を受からなければならない。そしてその科目によって生徒の将来が決まる。

（…そういえば）

俺は今年何を取ろう?就職はしているわけだから別にこれと言って絞らなくてもいいし、俺は『占い学』以外なら合格出来る自信がある。

（…授業を少なめにしようかな?）

ま、寮監との面談もあることだしそこでマクゴナガル先生と話せばいいか。

スプラウト先生はフクロウについてを話し終えると授業を進め、最後には宿題を出して授業が終わった。

（罰則までは時間があるし…ユックリと行くか）

俺は先に大広間で夕食を取った。

夕食の後はグリフィンドール寮の部屋で罰則の時間まで出された宿題をやっつけていた。

（…そろそろ行くか）

俺は罰則の時間に近づいてきたので部屋から出てアンブリッジの部屋へ向かう。
アンブリッジの部屋の前でしぶしぶノックをして入室する。
「こんばんは、ミスター・ヒブカ」
「…こんばんは、アンブリッジせ・ん・せ」
「さぁお座んなさい」
アンブリッジは俺が先生とふざけて言っても注意はせずに椅子に座るように言った。
俺は椅子に座る。
「机には羊皮紙が置いてあります。羽根ペンは机に置いてあるものを使ってね。罰則の内容は書き取りです。『僕は先生に逆らいません』と書いて下さい」
俺はある事に気づく。書き取りに必要な物が一つない。
「せ・ん・せー！インクは無いんですか？」
「インクは無くても平気です。書き取りを始めなさい」
（インクがいらない？）
俺は試しに羊皮紙に『僕は先生に逆らいません』と書く。
すると右手に痛みが走った。
（…成る程。だからインクはいらないね）
俺はすぐにこの羽根ペンが何なのか分かった。この羽根ペンは書いた本人の血を使って書いていくのだ。今羊皮紙には赤い文字で書かれているはずだ。
（…俺、血の気はあるが量はあったかな？）
まあ、倒れてもいいか、と思い至った俺は羊皮紙に続けて書きはじめる。
アンブリッジからは回数が出なかったので書くだけ書くしかない。
俺は書くスピードが速いのだ。羊皮紙が埋まるくらい書く事は一時間くらいで終わる。

…何時間たったのかは分からない。羊皮紙はもうとうに書き終え、書き終えた上からさらに書いている状態だった。

「こちらへいらっしゃい」

ふとアンブリッジが言った。

俺は席を立ち、アンブリッジの元へ行く。

「手袋をしているみたいだけど…それも血まみれね。これならしっかりと刻まれているでしょう。帰ってよろしい」

（血まみれ、か…）

手袋が血まみれだとアンブリッジが言っているのでそうなのだろう。

早く帰ってスペアと変えなければ…

俺は何も言わずにアンブリッジの部屋を出て行った。

九十五話

アンブリッジの罰則の怪我は思ったより酷かったみたいだ。包帯は巻いたがフラフラする。
（うわ…貧血か？）
…倒れない事を祈ろう。
俺はフラフラしながら授業へと向かった。
授業は『呪文学』『変身術』があり、俺は何とか四時間を過ごした。
…宿題が出されたが。
（…昼食に行くか）
変身術の教室から重い腰を上げる。
「よっ…と」
「ライカ？どうかしたのですか？」
いつもより教室を出るのが遅かったからかマクゴナガル先生に声をかけられる。
「何がですか？」
「…いえ、何でもないです」
「そうですか？」
「はい。私は先に大広間へ行きますね」
マクゴナガル先生はそう言って教室を出て行った。
（？…俺も行くか）
教室から大広間へ行くために階段を下りていく。
「おやぁ？何故か此処を盲学校と勘違いしている人だよねぇ？」
俺は今階段の下の方にいるが声をかけてきた奴は俺のいるところよりも何段か高いところにいる。
「…何が言いたい？」
「此処は盲学校じゃないって事だ。盲目ならば行くところはマグルの盲学校だろ？」
「此処が盲学校じゃない事くらい知ってる」

「ならばなおさらお前が行くところは此処ではない」
（…声からして男か）
俺はため息をついて言った。
「それはお前が決める事じゃないだろう？」
「ふん。大体目が見えないくせに何で此処にいるんだよ？」
「お前には関係ない」
俺はこれ以上聞く意思が無かったので階段を下りはじめる。
「話しは最後まで聞くって習わなかったのか？『アグアメンティ！』」
そいつは呪文をぶっ飛ばした。…俺のところへ。
あいつが放った呪文は水を呼ぶ呪文なので俺はもろに水を被ってしまった。
「…廊下での杖の使用は禁止だろ？」
「使ったって気づかれなきゃいいんだよ」
「何をしているの！」
声からしてソーラスだと思う。
「ソーラス…先輩？」
「…相変わらず君は変わらないんだね。―ところで君は何をしているのかな？」
ソーラスは俺の元へと駆けてきた。
「何って？此処が何処だか分かっていないようだったから頭を冷やしてあげたんだよ」
「無抵抗な後輩に？それにライカは此処が何処だか分からないほど馬鹿じゃないわよ？」
「馬鹿だろ？此処は魔法を学ぶべき場所であって盲学校ではない」
「確かに盲学校ではないわ。けれどいつから盲目の人は必ず盲目学校へ行くと決められたのかしら？」
「目が見えないんだ。そこへ行くのは当たり前だろう？」
二人に沈黙が流れる。そして―
「「エクスペリアームス！」」

二人は武装解除の呪文を放った。
ソーラスが放った呪文は僅かにそれてしまい、男が放った呪文もソーラスからそれて俺の方へと来た。
（……ん？あれ？）
ボンヤリといきさつを聞いていた俺は反応出来ずにもろに当たってしまう。
俺はそのまま数段下の床に頭をぶつけて気を失ってしまった。

【―ク、―ラク！起きてよ！早く遊ぼう！】

【ラク！大丈夫？】

【んー…それなら僕がラクにお土産を取ってくる！】
ガバッと俺は起き上がった。
（…今のは、何だ？）
不意に聞こえた子供の声。
（ラク、と呼んでいたな…）
「起きたんですね」
シャッとカーテンを開く音が聞こえマダム・ポンフリーが尋ねてきた。
「マダム・ポンフリー？今何か聞こえなかった？」
「いいえ、何も聞こえていませんよ」
（じゃ、何だあれは…）
「それよりも体調はどうですか？貴方は貧血で倒れたんですよ」
（…そうなったのか）
まぁ倒れたのは貧血が原因だろうが確か頭を打ったよな？
「…何ともないですね。今は」

「…そうですね。確かに今は何ともないでしょうね！今日は医務室に泊まりなさい」
「えー…」
「…スネイプ先生が特別に作った薬を飲みますか？」
「お休みなさい、先生」
俺は即座に布団に潜る。あれは絶対に苦い薬だ。今晩泊まったほうが良い。
「お休みなさい」
マダム・ポンフリーは呆れながら言い、カーテンを閉めた。
俺はウトウトと来る浅い眠りに身を任せた。

九十六話

翌日には退院し、意気揚々と日常に戻った。
しかしそれも新聞を読むまでだった。
「なんだこれ？」
―魔法省、教育改革にのりだす
ドローレス・アンブリッジ、初代高等尋問官に任命
新聞の見出しはこうだった。
「高等尋問官？改革？…本気か？」
―魔法省は昨夜突然新しい省令を制定し、教育令第二十三号を作りホグワーツ高等尋問官という新たな職位を設けた。
高等尋問官は同僚の教育者を査察する権利を持つ―…
（…査察だと？よくも）
よくもやるものだ。魔法省は落ちたな。ホグワーツを敵にしたのだから。
俺は朝食を食べてから『魔法史』の授業を受けた。しかしこの時間の『魔法史』には査察は来なかった。
『魔法史』の次には『魔法薬学』がありレポートが帰って来た。レポートにはＯ（優）が書いてあった。
俺はそれを教科書に挟み、今日の課題、『強化薬』を作り始めた。
出来た薬を瓶に詰め、セブルスに提出し『魔法薬学』が終わったとたんにハーマイオニーがまちきれない、と言わんばかりに話し出した。
「まぁ先週よりはましね。それに宿題も悪い点じゃなかったし。ね？」
しかし誰もハーマイオニーには話さなかった。
「つまりまあまあの点よ。最高点は期待していなかったわ。フクロウ基準で採点したのだったならそれは無理よ。でもいまの時点で合格点ならかなり見込みがあると思わない？勿論これから試験までの

間にいろんなことがあるでしょうし、成績をよくする時間もあるわ。でも今の時点での成績は一種の基準線でしょ？そこから積み上げていけるし…」

俺達は大広間のグリフィンドールのテーブルに着いた。

「そりゃ、もし『O』を取ってたら私ゾクゾクしたでしょうけど…」

「ハーマイオニー、僕達の点が知りたいんだったら、そう言えよ」

ロンがハーマイオニーに向かって言った。

「そんな―つもりじゃ―でも、教えたいなら―」

「僕は『P』さ。満足かい？」

「そりゃ何にも恥じることないぜ」

フレッドがジョージともう一人をつれてハリーの隣に座った。

「でも、『P』ってたしか…」

「『良くない』、うん。けれど『D』よりはいいだろ？『どん底』よりは」

ハーマイオニーはフレッド達に聞いていく。

「じゃ、最高点は『O』で『大いによろしい』次が『A』で―」

「いや、『E』さ。『E』は『期待以上』俺達はこれを貰うべきだったと思ってる。テストを受けただけで『期待以上』だしな」

周りは笑ったがハーマイオニーは話しを続けた。

「じゃ『E』の次が『A』で『まあまあ』。それが最低合格点の『可』なのね？」

「そっ。その下が『良くない』の『P』が来て、そして『最低』の『D』が来る」

「どっこい『T』を忘れるな」

ジョージが言う。

「『D』よりも下があるの？」

ハーマイオニーはぞっとしたように言った。

「『トロール』」

ジョージが答えた。

（珍しいな）

双子が冗談ではなく真実を話すなんて。明日は雨か？
アンブリッジは次の授業の『占い学』にも査察をした。しかし……
アンブリッジはあまり占いを信じている印象は無かったがトレローニ先生に何回か話し、予言を頼んだのんでいた。…いつものくだらない予言で終わったが。
次の『闇の魔術に対する防衛術』ではまたハーマイオニーを皮切りに反抗が起こり、俺がキレる前に今度はハリーが盾突いた。なのでハリーは俺と同様にアンブリッジから罰則が出された。
アンブリッジは次々と授業を査察していく。マクゴナガル先生の『変身術』、代理先生であるグラブリー・プランク先生の『魔法生物飼育学』。
『魔法生物飼育学』に関しては先生が代理であるからハグリッドが帰ってきたらまた査察を行うらしい。
その視察が行われた『魔法生物飼育学』が終わった時にハーマイオニーが声をかけてきた。
「ライカ、わたし『闇の魔術に対する防衛術』を学ぶべきだと思うの」
「あいつからではなくて？俺はいいと思うよ」
（あいつから学ぶくらいならな……）
「それで先生をハリーとあなたに頼もうと思っているんだけど……いいかしら？」
「……俺？」
「ええ。知識はあるし、実力もあるし。……いいかしら？」
「いいよ。学びたい生徒がいれば、俺は構わない」
学びたいという生徒がいるならば教えるだけだ。
「ほんとに？ありがとう、ライカ！ハリーにもこの事は話すわ」
そう言ってハーマイオニーはハリー達の元へと駆けて行った。
（こちらでも教師か）
教える事は嫌いではない。むしろ好きなほうだ。
俺はワクワクしたような気分で城へと歩き出した。

九十七話

ハーマイオニーが『闇の魔術に対する防衛術』を学びたいと言って二週間が過ぎた。どうやらハリーがＯＫしないらしく今日ホグズミードに行くから説得してみる、と言っていた。

（上手くいくといいけど…）

最近ハリーは思春期なのかカリカリしている。正直言うと面倒で迷惑だ。

（もう少し冷静になればな…）

ロンもハリーのイライラには参っていたな、確か。

（さて、再開するか）

俺は寝転がっている体制から起き上がる。

（早くこの部屋を片付けないとな）

今は隠し部屋の一つである『夢幻の部屋』を確認していた。

（この部屋の半分はしたから…）

俺は残りの半分を確認していく。

（……うん。異変はないね。後は…）

俺は部屋にある魔法を施す。

（これで俺が死んでも魔法は切れないな…）

俺は一息つく。

（大体終わってきたかな？）

俺の予想では来年には全てが終わる。

（やっとか。案外一人だと時間がかかるんだな）

んー、と固まった体を解していく。

「今日は此処までだな」

俺は『夢幻の部屋』から出る。

部屋から出た廊下でハーマイオニーに声をかけられた。

「ライカ！」

「ハーマイオニー？もう帰ってきたの？」

「ええ。ハリーが例の事を許可してくれたの！」
「そっか。それじゃあやるんだね？」
「ええ。以外とメンバーは多かったわ。あ！ライカもこれに名前を書いて？」
ハーマイオニーはメンバーリストであろう羊皮紙を渡してきた。俺はそれを受け取る。
（魔力？…ああ、成る程）
「ん？ああ…魔法をかけてるんだね」
「流石ね。気づいたのは貴方だけよ」
「裏切り者には許さない、か」
「ええ。痘痕が出来るくらいだけど女の子には効果的よ」
「そうだね。ところでこれって集まって書いたの？」
「ええ。ホッグズ・ヘッドで皆に集まってもらったの」
俺は固まった。
「ホッグズ・ヘッド？」
「えぇ。あそこなら三本の箒より安全でしょ？」
「……」
「ライカ？」
ハーマイオニーは不安そうに聞いた。
「…何でもない」
ハーマイオニーは人が少ないからホッグズ・ヘッドを選んだだろうが、あそこは少ない分会話が丸聞こえだ。時と場合によっては三本の箒が良い。人が多いが、その分聞かれない。
（…不死鳥の騎士団に聞かれているだろうな）
ハリーがホグズミードへ行く時には不死鳥の騎士団の護衛がコッソリとついている。
モリーは注意をするだろう。きっと。
（これ以上あの女が何かしなければいいが…）
あの女が何かをしたらハリー達がイライラするし、そのイライラしたハリー達の行動次第でモリーがキレる。

（あーあ、何も無いことを祈ろう）
しかし俺のこの祈りは叶う事が無かった。

九十八話

グリフィンドール寮の掲示板に新しく公式文書みたいなものが張られていた。
（何だ？）
俺はそれを読み取っていく。
―ホグワーツ高等尋問官令
学生による組織、団体、チーム、グループ、クラブなどは、ここにすべて解散される。
組織、団体、チーム、グループ、クラブとは、定例的に三人以上の生徒が集まるものと、ここに定義する。
再結成の許可は、高等尋問官（アンブリッジ教授）に願い出る事ができる。
学生による組織、団体、チーム、グループ、クラブは高等尋問官への届け出と承認なしに存在してはならない。
組織、団体、チーム、グループ、クラブで高等尋問官の承認なきものを結成し、またはそれに属することが判明した生徒は退学処分となる。

以上は、教育令第二十四号に則ったものである。
高等尋問官　ドローレス・ジェーン・アンブリッジ―
（てことはクィディッチ・チームも解散になるな）
全く、ろくな事をしない女だな。
俺がこう思っていると泣き叫ぶようなクラクションの音が聞こえた。
（…あーあ。規則を読んでない奴がいたな）
男子生徒は女子寮へ入る事は出来ない。もし入ろうとするならば先程のような音がなったのちに階段が無くなり滑り台みたいに落ちていく。
（これはロウェナだったかな？）

男子はのぞき見する奴がいるだろうからってつけたな。確か。
しかし規則には穴があり、男子は女子寮へ行けないが、女子は男子寮へと行く分には問題がない。
（ま、男を襲う女子なんていないだろうしな）
というかいたら困る。どれだけ餓えているんだ？
…餓えた女子が男子を襲う…
俺は自分の考えに身震いした。
（…これは止めよう。俺には受け入れられない事だ）
俺はフルフルと顔を振った。
（今日の授業は確か…）
『魔法史』、『魔法薬学』、『占い学』、『闇の魔術に対する防衛術』だったな。
（…サボリたい内容だな）
「ライカ！」
俺の思考を遮り、ハリーが声をかけてきた。
「ハリー」
「掲示板見た？」
「あの変な奴だろう？」
「うん。そう。それで企画している『闇の―「ハリー！」ああ…アンジェリーナだ。ちょっと行ってくる」
ハリーは途中でアンジェリーナの方へと向かって行った。
それからハリーは驚愕としたような大声を出した後にバタバタとどこかへ去ってしまった。
（おいおい話はどうしたよ…）
仕方がない。どこかへ行ってしまったものは諦めよう。
俺はグリフィンドール寮を静かに出て行った。

九十九話

翌日、面倒くさい授業を終え、夕食を食べている時にハリーから声がかかった。

「ライカ、最初の『防衛術』の会合は今夜八時、八階の『バカのバーナバス』がトロールにこん棒で打たれている壁掛けの向かい側」

「……分かった」

ハリーは俺の返事を聞くとバタバタと去って行った。…他のメンバーに伝えに行ったのだろう。

（ハリーがあの部屋を見つけるなんてな…）

ハリーが『必要の部屋』を見つけたのは意外だったがあそこは割と生徒に知られている。邪魔が入らなければいいが…

（ま、そん時はそん時だな）

俺は夕食を食べ終えグリフィンドール寮へと戻った。

夜の八時、だと言っていたので少し前にグリフィンドール寮を抜け出し『必要の部屋』へ向かった。

（先に点検を済ませていて良かったな）

まさか『必要の部屋』を使う事になるとは。

八階へ着くと『必要の部屋』はすでに現れており中へ入ると俺が最後だった。

「ライカ、遅かったわね」

「いや、皆が早いんだろ？」

「そうでもないわよ。さて、ライカが来たからまず話し合いましょう。先生はライカとハリー。その二人からリーダーを選ぶべきだと思うわ」

俺はハーマイオニーにハリーを押した。

「ハーマイオニー、俺はハリーが良いと思うよ。ハリーなら皆異議ないと思うし」

「ライカがこう言っているし…ハリーがリーダーになるべきだと思

う人？」
メンバーは皆挙手をした。
「えー―うん、ありがとう」
ハリーは礼を言う。
「後は名前ね。名前をつければチームの団結力も揚がるし一体感が高まると思わない？」
「反アンブリッジ連盟ってつけられない？」
アンジェリーナが発言した。
「じゃなきゃ、『魔法省はみんな間抜け』ＭＭＭはどうだ？」
フレッドが言った。
「どっちかっていいと、私たちの目的が誰にも分からないような名前よ。この集会の外でも完全に名前を呼べるように」
「防衛協会は？英語の頭文字を取ってＤＡ」
チョウが言った。
「うん、いいわね。ダンブルドア・アーミーの頭文字、ＤＡにもなるわね。だって魔法省が一番恐いのはダンブルドア軍団でしょ？」
この言葉によりＤＡに賛成が上がり、組織名はＤＡに決まった。
（ＤＡね…こりゃダンブルドアの首を絞めるだけだな）
もし見つかった時にこれを見たらアンブリッジは本当にダンブルドア軍団だと思いダンブルドアをここぞと攻めるだろう。まぁ見つからなければいい話しだし、困るのはダンブルドアだからいいや。
ハリーが話し出す。
「それじゃ、練習をしようか？僕が考えたのは、まず最初にやるべきなのは『エクスペリアームス、武器を去れ』、そう、『武装解除術』だ。かなり基本的な呪文だっていうことは知っている。だけど、本当に役立つ」
ハリーはまず基本からと考え、二人一組み組ませて『武装解除』をさせた。結果は……うん。酷かった。呪文が弱く、杖を取れたのは少なかった。
（…ハリーの考えが当たったな）

俺とハリーは生徒達の間を回りながら一つ一つ注意していく。
「ネビル、もう少しハッキリと呪文を言うんだ」
「う、うん――エ、エクスペリアームス！武器よ去れ！」
ネビルの放った呪文は棚が崩れる音が聞こえなかったので相手には当たらなかったみたいだ。
「ネビル、ハッキリと言え。そして相手を狙うんだ」
俺は少し付け加え、再度言い放つ。
「エクスペリアームス！武器よ去れ！」
壁や棚に当たったような音が聞こえない。……相手に当たったか？
「ライカ、取れたよ！僕杖を取ったなんて始めてだ……」
「良かった……今の感覚を忘れないように相手に頼んでもう一度やらせてもらって。俺は他のメンバーを回るから」
あちらこちらに注意をしていき、大分メンバーの『武装解除』がマシになったころにハリーは解散を告げた。…どうやら九時を過ぎていたらしい。
見つからないようにバラバラに別れて『必要の部屋』を出て行く。
俺はハーマイオニーとロン、ハリーと一緒に出たのだがハーマイオニーとロンは言い争い、ハリーは上の空で歩いていた。
俺はそんな三人に思わずため息をついた。

百話（前書き）

『英雄後談』が百話いきました。
何だか主人公が空気になったり、よく分からなくなっていたりしてますがこれからもお付き合いしてくださると嬉しいです。

百話

ハーマイオニーはＤＡの会合を知らせるためにガリオン金貨を使った。ガリオン金貨には製造した小鬼を示す番号があるのだが、それに『変幻自在』をかけ、ハリーの金貨に会合の日付を表すと他のもそうなるようにした。しかし会合はクィディッチによって中々合わなかった。

今日はそのクィディッチ試合の日だ。グリフィンドール対スリザリン。ハリーやロンは試合に出て、ハーマイオニーはそんな二人の応援をしに行った。

俺はと言うとクィディッチを見に行く気にはなれず図書館にいた。

…隣にはライルが何故かいるが。

「…ライカ、クィディッチは見に行かないのか？」

ライルは小さい声で俺に聞いてきた。

「見に行く気になれなくてね」

「…そうか」

ライルは詳しく聞いてこなかったのでこれで話しが終わりかと思ったのだが俺の思いとは裏腹にライルは口を開いた。

「アンブリッジ先生がまた新しい教育令を出すのを知っているか？」

「新しい教育令？あの馬鹿馬鹿しいやつか？」

「…馬鹿馬鹿しい？ああ、そういえばお前のところはクィディッチ・チームの再結成に苦労していたな」

俺はため息をついた。

「おかげで寮内がピリピリしていたよ。…で新しい教育令とは？」

「ああ…確かな筋から聞いたから嘘ではない。『高等尋問官は、ホグワーツの生徒に関するすべての処罰、制裁、特権の剥奪に最高の権限を持ち、他の教職員が命じた処罰、制裁、特権の剥奪を変更する権限を持つ』だと」

俺は眉をひそめる。

「本当か？それ？」
「ああ。…これでますますアンブリッジ先生に逆らえないな？まあ、困るのはグリフィンドールだけだから俺には構わないが」
グリフィンドールの奴らは大人しく従う奴らじゃないからなとライルは付け加えた。
「…あの女。此処を制圧するつもりか」
「さぁな」
ライルはもう用がないらしく話しを止めた。
（…制圧、か）
まずあいつは先生方の怒りを買ったな。間違いなく。そしてグリフィンドールの生徒も黙らないだろう。あの女はグリフィンドールをやけに厳しくしている。
グリフィンドールはスリザリンほどではないが寮の結束はあるのだ。何か起きたら彼ら―否、俺らの悪戯をあいつに見せつける事になるだろう。
「早くそうなればいいな」
俺はニヤリと笑いがらポツリと言った。
「ライカ！ここにいたのね！」
ハーマイオニーが息を切らしながら俺のところにやって来た。
「ハーマイオニー？どうした？」
「ハリーとフレッド、ジョージがクィディッチ試合に出ることを禁止になったの！アンブリッジの新たな教育令のお陰で！」
「ハリーとフレッド、ジョージが試合出場禁止！？本当に？」
「ええ。本当よ。試合には何とか勝てたんだけど…クィディッチキャプテンのアンジェリーナはそのことで酷く落ち込んでいるわ」
当たり前だ。ロンは今だにガチガチ緊張しキーパーとして機能していない。そこに優秀なシーカーとビーターが丸々抜ければ最早試合にはならないだろう。
「代理……かな」
「そうなるわね。でも優勝はもう厳しいわ」

今から緊急にチームに入っても連係がとれるか分からない。取れたとしても前のチームとはかなり違うだろう。前いたメンバーにはキツイだろう。

「気をつけなければこちらもそうなるかもしれないな。今はアンブリッジ先生のお気に入りの寮で贔屓してもらっているがいつまでもそれが続くとは限らないしな。だが……今は好都合。やっとクィディッチでグリフィンドールを叩きのめせる」

ライルのこの言葉がやけに響いた。

百一話

ハリー達がクィディッチ試合の禁止を言い渡された夜、グリフィンドール寮はかなり落ち込んでいた。そしてその落ち込んだまま皆就寝のために階段へと上がっていった。

（さて、城を抜け出すか）

つい先程ハグリッドの魔力がホグワーツにて感じられた。ハグリッドが帰って来たのだ。

（だかな…どうしたことやら）

ハグリッドは誰かを連れ込んだみたいだ。

（聞いておかないとな）

ホグワーツに仕掛けてある侵入者感知魔法が反応したのだ。いくらハグリッドが連れて来たといってもそれが反応した時点で警戒しなければならない。

俺は誰もいなくなった談話室からグリフィンドール寮を出て行った。夜の独特な寒さの中城からハグリッドの小屋へと移動してハグリッドの小屋のドアを叩いた。

「タ―…ライカ。早かったな」

「ハリー達はいないよ」

ハグリッドはそうかと言いながら小屋の中へ入れてくれた。

「ハグリッド、単刀直入に言う。何を連れて帰ってきた？」

「何のことだ？」

ハグリッドは惚けて言う。

「俺が騙されるとでも？侵入者感知魔法も反応している。惚けても無駄だ」

しかしハグリッドは違う事で驚いていた。

「し―侵入者感知魔法？そんなもんがあったんか？」

「分かるのは俺達だけだがな。だがそれが反応した。だからごまかせないぞ？」

「そ―…それは俺に反応しただけじゃ」
「それはない。教員や生徒に反応しないようにしてある」
俺はハグリッドを追い詰める。
「任務内容は知らない。教えなくていい。けれど誰を連れて来たかだけは教えてもらう」
ハグリッドは観念したのか渋々言った。
「…俺の弟だ」
「弟……なら巨人か?そして隠している場所は森だな?」
ここら辺には巨人が隠れる場所は禁じられた森しかない。
「……そうだ」
ハグリッドは震えながら言った。
「…ハグリッド、先に言っておく。巨人…いや弟の事は黙っているがもしその弟が生徒に莫大な危害を与えたなら俺は容赦はしない」
「…分かった。そうならなければいいっちゅうことだな?」
「…ああ。生徒に害がなければいい」
「俺もそんな事にはしたくねぇ」
ハグリッドは俺の言葉に賛成する。
「弟、か。良かったな、ハグリッド」
ハグリッドはずっと家族が欲しかったのだ。血の繋がった家族が。
「ああ…親父が失くなってからずっと一人だった。血って良いもんだなぁ…そうだろうが?」
「さぁな。俺には分からない事だからな」
ハグリッドは驚いたような声で言った。
「お前さんにも家族がおっただろうが?タツキではなく」
ハグリッドはゴドリックの事を言っているのだろう。
「俺にはいない」
「いない?」
「まぁな。さて…ハグリッド、邪魔したな。流石にそろそろお邪魔するよ」
「あ、ああ…」

驚いて固まっているハグリッドを置いて俺は小屋を出ていく。
（…夜は冷えるな）
冷えている夜道をホグワーツへ向けて歩いていく。
（…あ、アンブリッジの事伝えるの忘れてた）
ハグリッドにあの女の事を教えるのを忘れていた。
（今更戻るのもな…）
まだアンブリッジは先生を退職させる権限はなかったな。
（なら別にいいか）
俺はハグリッドの事からどうやってグリフィンドール寮へ戻るかへと思考を変えた。

百二話

ハグリッドが授業をする『魔法生物飼育学』の時間がやって来た。
ハグリッドは小屋の前に集まった生徒達を死んだ動物を担ぎながら森へ連れて行った。
「ええか？よし、さーて森の探索は五年生まで楽しみに取っておいた。連中を自然な生息地で見せてやろうと思ってな。さぁ今日勉強するやつは珍しいぞ。こいつらを飼い馴らすのに成功したのは、イギリスでは多分俺だけだ」
「それで本当に飼い馴らされてるって自信があるのかい？野蛮な動物をクラスに持ち込んだのはこれが最初じゃないだろう？」
マルフォイが恐怖を表した声で言った。マルフォイだけではなくスリザリン生に数名のグリフィンドール生が同意した。
「もちろん、飼い馴らされちょる。俺について来い！」
ハグリッドはマルフォイの言葉を気にかけず、ズンズンと歩いていく。
十分くらい歩いたところでハグリッドは立ち止まった。
「さぁ、あいつらは肉の臭いに引かれてやってくるぞ。だが俺のほうでも呼んでみる。あいつら、俺だってことを知りたいだろうからな」
ハグリッドはこう言って叫び声を上げた。
しばらくするとハグリッドのところに一頭の動物がやって来てハグリッドの持っている肉を食べ始めた。
（成る程。今日はセストラルか）
「さーて…手を挙げてみろや。こいつらが見える者は？」
ハリーにネビルとあと一人――…誰か出て来ないな。誰だっけ？
まぁ三人が手を挙げた。
（三人…か）
「何がいるの？」

不安そうに生徒が言った。
「セストラルだ。ホグワーツのセストラルの群れは全員この森にいる。そんじゃ、誰か知っとる者は――？」
ハグリッドは授業を進めていく。
（……ん？）
ハグリッドに集まってきたセストラルが俺の近くに来ていた。
セストラルはペタリと顔を近づけ、何やらフンフンと臭いを嗅いでいる。
（…もしかして俺臭い？）
あまりにもフンフンと嗅いでいるので臭いのか、と言いたくなるのだが俺はハグリッドの言葉に耳を傾ける。
「こいつらはどえらく賢いし、役に立つ！もっともこいつらはそんなに働いてるわけではねぇがな。重要なんは学校の馬車ひきだけだ。あとはダンブルドアが遠出するのに『姿現し』をなさらねぇときだけだな。よし、誰かセストラルが何故見える者と見えない者がいるか知っとる者はいるか？」
ハーマイオニーがハグリッドの質問に答える。
「セストラルを見ることができるのは死を見たことがある者だけです」
「そのとおりだ。グリフィンドールに十点。さーてセストラルは―」
「エヘン、エヘン」
アンブリッジは大きな咳ばらいをしてハグリッドの話しを遮る。
（…こいつ来たのか）
いっその事、魔法生物にやられてしまえばいいんだが…
（腐っても魔法使いだからな）
魔法生物が傷つくだけだろう。
『クル…ル…』
俺の臭いをフンフン嗅いでいたセストラルが何やら嫌そうに鳴いた。
「…お前も嫌か」
俺はセストラルにそう言い、頭を撫でる。

アンブリッジはガリガリと何かを書いた後に生徒の間を回って行った。
ハグリッドは時々何を言おうか忘れながら授業を進めた。
「…ハグリッドのところにそろそろ戻った方がいいかな?」
俺はセストラルを撫でていた手を離した。セストラルも手を離したらスイッとハグリッドのところへ戻っていった。
(あいつは…と)
アンブリッジはハグリッドに一言二言言った後に意気揚々と帰って行った。
(…変な教員令をだしたりはしないよな?)
俺はハグリッドの授業へと意識を変えた。

十二月に入りハーマイオニー、ロンの二人は監督生のしての仕事が忙しくなっていった。
(クリスマスが近いからなー)
ホグワーツは段々とクリスマスに向かって飾りつけをしていた。
(あーそういえば今年は俺だけか)
今年はハーマイオニー、ロン、ハリーはホグワーツには残らない。
グリフィンドールの中で残るのは俺だけだ。
(他の寮も少ないんだろうな)
まぁ毎年各寮一人~三人くらいだしな。
俺は静まり返った談話室からトントンと階段を上がって部屋へと向かう。
(…ふぁ…寝るか)
部屋に入りボフンとベットへ身を投げた。

百三話

「アーサーが捕まった!?」
「違う。わしの話しを聞いていたのかね?」
翌日朝早い時間にまだ頭が働いていない俺をダンブルドアが引きずって校長室まで連れていかれ聞かされた内容がアーサーが捕まっただった。
「だから、アーサーが捕まったってさっきそう言ったんだろ?」
「違うと言うておるじゃろう!?アーサーが入院したんじゃ!」
捕まったんじゃないんだな。しかし入院…
「よく襲われたって分かったな?アーサーは確かあそこの当番だっただろう?」
「ハリーじゃよ。ハリーが襲った蛇になって見ていたんじゃ」
「…蛇?」
「うむ。詳しくはハリーが話すじゃろう。ハリーとウィーズリー兄弟はすぐさまグリモールド・プレイスに送った。タツキもハリー達に合流して欲しい」
「分かった」
俺はダンブルドアの言葉に頷いた。
「ふむ。では頼むぞアンブリッジ先生にはこちらから話しをしておく」
俺はその場から『姿くらまし』を使って校長室を離れた。
バチンと言う音を立ててグリモールド・プレイスに『姿現し』をした。
俺は衝撃に堪える準備をするフリをし、シリウスの上に落ちる。
「タツキ!お前危ないだろう!」
「悪ぃ、悪ぃ。ワザとだ」
俺はシリウスの上から下りる。
「ハリー達は?」

「今聖マンゴに行っている」
「あーじゃ誰もいない時間に来たんだな。いやー運がよかった」
「ああ。運がよかったな。俺の上に落ちてこなければ」
「ああ。それはワザとだからいいんだ」
「ワザとっておまえな…」
シリウスはため息をつく。
「お前は俺の事嫌いだろ?実は」
「うん」
「…躊躇いも何も無かったな」
「シリウスといるとイライラするし?」
「…流石にへこむぞ?俺」
シリウスはため息をつき話題を変えた。
「アーサーの心配はしないのか?」
「アーサー?…あぁだって死んでないし、聖マンゴに運ばれたなら癒者に任せとけば大丈夫だろ?」
「…タツキ、アーサーが誰だか分からなかっただろう?」
シリウスがからかう口調で聞いてきた。
「いや、俺始めに糞爺から捕まったって聞いたからな。何かと思って」
「ダンブルドアが?」
シリウスが驚いたように言った。
「うん」
実際は俺が聞き間違えたのだがそれを言ったらシリウスは絶対にからかうのでダンブルドアになすりつける。
「まぁ爺って呼んでいるくらいの年だしね。そろそろボケたんだろ」
「…そうか?全くボケた様子はないが」
「まぁいずれ尻尾をだすよ」
俺は適当に言う。
「そういえば…タツキ、今年フクロウだろ?確か」
シリウスが不意に言い出した。

「フクロウ？そうだけど、何故に？」
「いや、お前は大丈夫だろうがハリーはどうしてる？」
「ハリー？さぁ宿題には手を焼いているけど」
シリウスは驚いた声で聞いた。
「もしかして課題しかしていないのか？」
「君達もそうだっただろう？」
「それはそうだが…ハリーは頭までジェームズに似ているのか？」
「それはない。ハリーは平均的。ずば抜けているのは『闇の魔術に対する防衛術』だな」
「…ならそろそろ課題以外もしないとヤバくないか？」
「どうだろうな？勉強し始めるのは人それぞれタイミング違うし。でも俺はハリーの面倒は見ないからね？」
俺はシリウスに言う。
「…お前が一番余裕あるだろう！？」
「俺が誰だか忘れた？シリウス？」
シリウスは黙り込む。
そもそも教員である俺が生徒に力を貸す事はあまりない。それがフクロウともなるとほおっておくしかないのだ。
「…そうだったな」
やがてシリウスはこう言った。
「あーあ、無駄にシリウスと話したな」
「無駄！？俺との会話は無駄か！」
「お二人共、声がホールまで聞こえてましたよ」
帰って来たモリーが俺とシリウスを注意する。
「モリー、アーサーは？」
「大丈夫ですよ、シリウス。ハリー達は先に寝かせました」
モリーはシリウスが聞くよりも先にハリー達の事も伝えた。
「ところでライカは何故此処にいるのかしら？」
モリーが俺に聞いてくる。
「ダンブルドアから合流しろ、って言われましたからね。ま、大方

ハリーの護衛だと思いますよ」
「そう。なら私の方から上手くハリー達に伝えておくわ」
モリーはそれじゃお休みなさいと言ってフラフラと自分の寝室へ向かった。
俺はシリウスに聞く。
「モリーさん寝てなかったの？」
「ああ。夜中はアーサーのところにいたしな」
「じゃ俺が飯を作るか」
俺は席を立つ。
「料理出来たのか？」
シリウスは意外そうに聞いてくる。
「人並み以上にはね」
俺は驚くシリウスを置いて厨房へと向かった。

百四話（前書き）

最近スランプに入りかけ、現在ストックに頼っているカイラです。
と、そんな事よりも『英雄後談』をＲ１５から外し、残酷な描写に変えました。
何だか書いていてＲ１５には当て嵌まらないかなー…と思いまして。
主人公の過去も出せるか分かりませんし……
Ｒ１５ではないですが中身は変わらないので引き続き、『英雄後談』をよろしくお願いします。

百四話

「ハリーが引きこもってる？」
ハリー達がアーサーの見舞いから帰ってきた翌日に俺はロンからハリーが部屋に引きこもってる事を聞いた。
「そうなんだ。声をかけても寝たふりをして全く話さないんだ」
ロン達にはモリーが上手く伝えたのか俺がいても何も聞いてこなかった。
「引きこもり…ねぇ。まぁ、ハリーは思春期だし一人になりたい時なんじゃない？」
「違うんだ。実は―」
ハリー達は昨日アーサーの見舞いに行った時にほんの少し話しただけで騎士団の話しがあるからと病室から追い出されたらしい。しかしハリー達は双子の作った商品『伸び耳』を使い騎士団の話しを盗み聞きをした。
（まだまだだな。ロン達に気づかないなんて…）
どうやらその話しの全体は聞いてないらしい。ハリー達が聞いたのはムーディー達がハリーにウ〝ォルデモートが乗り移ったのではないかと話していた事だけだ。
「ハリーがウ〝ォルデモートにね…」
…そんな事が出来る魔法はあったか？それとも…別の何かか。
（…まぁこれは後だな。まずは―）
「それでハリーが引きこもり、か」
（ハリーが先だな）
「うん。いくら声をかけても返ってはこないし…」
…何を悩み、思っているのかは分からないがとりあえずは―
「今日くらいは放っておけ」
「えっ？君今なんて言ったんだい？」
ロンは信じられないのかもう一度催促してきた。

「放っておけ、と言ったんだよ。ロンだって一人になりたい時ぐらいあるだろ?今日くらいは放っておいて明日、引っ張りだせばいい」
「…そうだね。分かった」
ロンは何も言わずに素直に従った。…珍しいな。
「ライカ、ちょっといいか?」
シリウスが俺を呼んだ。
「シリウス?ロン、また」
「あ、うん」
俺はロンから離れてシリウスのところへ行く。
「シリウス、何?」
「いや…実は今日ハリーを見てないんだが…」
「ハリー?ハリーなら今引きこもり中だよ」
「引きこもり!?」
な、何があったんだ?とうろたえるシリウス。
「一人きりになりたいんじゃない?今日くらいは放っておいたら」
「…そうだな」
シリウスはやっと落ち着いた。
「シリウスって親バカだったんだね」
「はぁ!?」
「だってそうだろう?シリウスはハリーの事になるとみさかえないし。馬鹿だし」
「ぐっ……」
「シリウス、子供がいたら嫌がられるタイプから気をつけてね」
シリウスは大声で言う。
「俺に子供はいねぇ!」
「いたら、って言っただろう?」
俺はシリウスの頭を叩く。
「てぇ…っにすんだ!」
「煩い。声が大きいんだよ」
「…悪りぃ」

シリウスは周りの人達を含めて謝った。
…俺は欠伸をしながらシリウスの謝罪を聞いたが。
「緊張感のかけらもないな。お前は」
「モリーさん、アーサーさんの見舞いいつ行くんですか？」
「聞けよ！」
「クリスマスの日かしら。ライカも来るの？」
「なぁ無視？俺の事は無視？」
「行きます。この前は行けなかったので…」
「……」
「分かったわ。出かける前に声をかけるわね」
「お願いします」
俺がモリーとの会話を終えた頃にはシリウスはふて腐れていた。
（…このままでいいか）
煩い奴が黙ったのだ。このままにしておこう。
俺はシリウスには触れず、飲むことを忘れられたオレンジジュースに手を伸ばした。

百五話

「ふぁ～あ……課題はこれで終わり」
トントンと羊皮紙を纏める。
「今日は…クリスマスか」
学校もクリスマス休暇に入り、課題とフィンラをハーマイオニーが数日前に渡してくれた。…課題はもう終わらせたけど。
『ニャー』
「ん？フィンラ？」
フィンラの声が聞こえたと思えばバリバリと何かが破ける音が聞こえた。
「……何してんだか」
俺はフィンラのところへ行き、フィンラを持ち上げる。
「さて…何を破いたんだか」
俺はフィンラの近くにあるボロボロの荷物を取った。
「ん…？ああ、破いたのは包装紙か」
フィンラは俺が放置していたクリスマス・プレゼントの包装紙をビリビリにしていた。
「まぁ…放っておいたのは俺だし仕方ないな」
糞爺、これは故意ではないからな。
モリーがガチャリと部屋のドアを開けて話し掛けてきた。
「ライカ、そろそろ見舞いに…あら、まだ開けてなかったの？」
「あぁ…すぐ行きます。プレゼントはいつでも開けれますから」
「それもそうね」
俺はフィンラを抱え下へ向かう。
（誰に…お、こいつでいいや）
俺はいつもの部屋にいるシリウスを呼ぶ。
「シリウス！ちょっといいか？」
シリウスは俺の元へと来る。

「ライカ。どうしたんだ？」
声をかけたシリウスに対し俺はニッコリと言う。
「フィンラをよろしく」
そしてフィンラをシリウスへと渡した。
「え？はぁ？」
「病院に猫は連れて行けないからシリウス、世話よろしく」
帰って来たら引き取りに来るよ、と言って俺はシリウスの側を離れ玄関へと向かった。
「俺かよぉぉぉ」
シリウスの叫び声をＢＧＭに俺達はグリモールド・プレイスを出て行った。
見舞いにはハリーもいるので護衛にリーマスとムーディーも一緒だった。
アーサーは病院の五階に入院していた。
部屋に入り、二言三言くらい話したが声の調子からしてアーサーは元気そうだった。
ただ話していけばいくほどアーサーとモリーの夫婦喧嘩に発展していったのでハリー達と俺は病室を抜け出した。
初めはハリー達と話しながらお茶を飲むということで六階を目指し階段を上っていたのだがいつの間にか迷子だ。
（確かロックハートがいたから見よう的な流れにはなったんだが…）
この病院の五階になんとロックハートが入院していた。それでハリー達がロックハートに絡まれたところまでは一緒だった。
（…ハリーの側から離れてはいないから置いていかれた？）
迷子になった真実は分からないが此処が何処だか確認したほうが良さそうだな。
「あの、すみません。此処は―」
俺は廊下にいた一人の魔法使いに声をかけた。
「おや？貴方は…」
その人は何かを思い出すかのように言い、こう放った。

「タツキ・ヒブカさんですか？」
「…何で知っているんですか？」
俺は見知らぬ魔法使いに警戒する。
「警戒しなくても怪しい者ではないですよ。私はネビル・ロングボトムの祖母です。今はライカさんでしたかの？」
老婆とは思えないハッキリとした言葉で言った。しかしそれだけでは警戒は解かない。
「何故俺がタツキでライカと偽っている事まで知っているんですか？いくら知り合いが多いミセス・ロングボトムでもそこまで知っている理由を聞きましょうか？」
ネビルの祖母、ミセス・ロングボトムは魔法界である程度知られている。知り合いが多く、情報もかなりのものだ。
「おや？私を知っておるのかぇ？」
「貴方はある程度有名ですからね」
ミセス・ロングボトムはサラリと言った。
「貴方が何故偽っているかは知りませんがネビルの話しの中で矛盾を感じたのでダンブルドアにお聞きしたんですよ」
（糞爺！？）
俺はため息をついた。それと同時に警戒を解く。
「元々息子や嫁からジェームズ達を通して貴方の話しは聞いていましたから。ですがお会いになるのは初めてですね」
「…そうですね。初めまして。タツキ・ヒブカです。今はライカと名乗ってますからそちらで呼んで下さい」
「分かりました。よろしくお願いします」
ミセス・ロングボトムは頭を下げる。
「…今日は見舞いですか？」
ネビルの両親、ミセス・ロングボトムの息子や嫁さんだが…その二人は『死喰い人』によって拷問され正常の状態ではなくなり今ではネビルの事も分からない。
「そうです。ネビルも来ていますので会いますか？」

ミセス・ロングボトムはこう言った。だが…
「今日は止めておきます」
ネビルはまだこの事を誰にも話してはいない。会うべきではないだろう。
「…そうですか。ところで何かを聞いていましたね。どうしたんですか？」
「実は―」
俺は今此処が何処だかを聞いた。
ミセス・ロングボトムはその質問にあまり詳しく聞き出さずに答えてくれた。
（…こんなところまで来てたなんてな）
「分かりました。ありがとうございます」
「それは良かった。それでは失礼します」
ミセス・ロングボトムはこう言って去って行った。
（…此処がどこか分かったし先に病室へ帰るか）
俺はミセス・ロングボトムとは逆の方向へと向かった。

百六話

「閉心術？ハリーがそれを習うのか？」
ホグワーツへ帰る前日。アーサーの退院祝いのパーティーでハリーは俺に週一でセブルスの特別授業、『閉心術』を習うと言った。
「そうなんだ。ウ〝ォルデモートの変な夢を見ないためだって」
「『閉心術』ねぇ。確かに夢は見なくなるけど……」
「ライカ『閉心術』知ってるの？」
ハリーは驚いたように言った。
「ん？あぁ…俺は『閉心術』使えるからな」
「えぇ！？」
と言うか『閉心術』を常日頃使わないといけない状況だった…否、今も使わないければならない状況だからな。
「ハリー、『閉心術』は誰でも使えるわけではない。センス…というかな？それを問われる分野だ。気を引き締めて受けるといい」
「誰でもじゃない？」
ハリーが聞いてきたので俺は再度言った。
「ああ。誰でも使えるわけではない」
ハリーはそれを聞いた後に別の質問をする。
「ライカはどうやって『閉心術』を学んだの？」
「秘密だ。『閉心術』頑張れよ」
『閉心術』の訓練をするならばきっと『開心術』を受ける事になるだろう。
俺はハリーに応援を送り自分の部屋へと戻った。
翌日、俺達は『夜の騎士バス』に乗ってホグワーツに帰る事になっていた。
玄関で皆が集まっている時にロンは『夜の騎士バス』に乗るのは初めてなのか興奮していた。逆にハリーはあまり乗りたくなさそうに嫌そうな声をしていた。

（対象的だな）
俺は近くにいるリーマスに問う。
「今日の護衛って誰だっけ？」
「僕とトンクスだよ」
「二人か……」
「まぁ、『夜の騎士バス』を使うからね。こちらもあまり人員は割けないし」
それに君がいるだろう？とリーマスは言う。
「あまりあてにはしてほしくないがな」
俺は苦笑しながら答えた。
不死鳥の騎士団のメンバーと別れを告げた後にグリモールド・プレイスを出て『夜の騎士バス』へと乗り込んだ。
『夜の騎士バス』は双子が話す事が出来ないくらいにもうスピードでホグワーツへと向かってくれた。
バーン。と大きな音を立ててバスは急停車をした。急に止まったおかげでロンやハリー達はゴロゴロと席から落ちていた。
ハリー達が起き上がってから『夜の騎士バス』を下りた。トランクなどはリーマスとトンクスが下ろしてくれた。
リーマスとトンクスは一通り別れの挨拶をするとまたバスに乗り、バスは次の停車場所へと発車した。
（あの二人も忙しいからな…）
俺達はトランクを引きずりながらホグワーツへと歩いて向かった。

翌日、クリスマス休暇が明け授業が始まった。
先生達はフクロウに向けて容赦なく課題を出していく。
（…すごい量だよな）

まぁこれを採点する教師もかなりキツイが…
「ライカ、図書館へ行かない？」
やっと全ての授業が終わり、夕食後にハーマイオニーから声がかけられた。
「ロンと一緒に課題をやるの。ライカも一緒にやりましょう？」
「行く」
「分かったわ。ロン！図書館へ行くわよ！」
ハーマイオニーはロンを呼び三人で図書館へと向かった。
図書館へ着き三人の場所を確保するなりハーマイオニーは本を取りに行った。
（『闇の魔術に対する防衛術』から始めるか）
俺は初めにアンブリッジから出された山のような課題に取り組んだ。
どれくらい時間が過ぎたのかは分からない。ただハリーが特別授業から図書館へ来た時には俺は『魔法薬学』の課題の最終確認をしていてハーマイオニーとロンは『闇の魔術に対する防衛術』の課題をしていた。
「どうだった？」
ハーマイオニーが心配そうにハリーに聞く。
「大丈夫……なのかな」
ハリーはこう言った後にこう切り出した。
「僕、気がついたことがあるんだ」
ハリーは今学期から自分の目の前に扉があり何処か場所が分からない夢を見ていたらしいがついさっきその場所が魔法省の『神秘部』だということに気がついた、と。
「『神秘部』の中に武器があるに違いない。君のパパが守っていたのもあそこの扉だ」
（…対したもんだな。此処まで分かるとは）
情報を得た方法は少し危ないがよく分かったものだ。
（しかし確証があるかどうかが怪しいところがまだまだ、か）
ハリー達はペラペラと自分達の予想を話していく。

「そこまでだ。三人共。予想だがこれ以上は此処で話さない方がいい」

此処は図書館だ。静かだから声が通りやすい。これ以上は危険とみなし三人に注意をする。

「そうね。この話しはここで止めましょう。ロン、課題は終わった？」

「ハーマイオニーはどうなんだい？」

課題を聞いたハーマイオニーにロンは聞き返した。

「私は終わったわ。さっきね」

「君が見せてくれると楽なんだけど…」

「ダメよ。自分でしなきゃ」

課題を見せろと言うロンにハーマイオニーはピシャリと言い放った。

ロンは唸りながら課題へと手をつけた。

（俺も早く確認しないとな…）

俺は自分の課題を再度読み取り始めた。

百七話

翌日の朝、教員達は朝食を食べる事より新聞にくぎ付けだった。
（…とうとう動き始めたか）
俺はすでに今日の新聞を手にして読み取っていた。
―アズカバンから集団脱獄
魔法省の危惧――かつての死喰い人、ブラックを旗頭に結集か？―
新聞の見出しには大きくこう書かれていた。
（特別監視下にある十名が脱獄ね…）
これまた豪快にやったな。
（そして向こうも十分な戦力を得た、と）
不死鳥には十分とは言えないが戦力はある。だが向こうは今それを上回った。前回奴らは今いる死喰い人に巨人、そして亡者を使った。
（今回も使うかだな）
亡者とは死者の事だ。ゴーストとの違いは多々あるが一番は肉体があること。肉体があることによって“生きている”我々に攻撃が出来る。
（それでいて向こうはもう死んでいるからな…）
燃やせばすむ事だが広範囲に一斉に燃やす事が出来る魔法使いは少ない。
（あーあ…使わないで欲しいな）
俺には亡者など全然問題にならないがあいつらは臭いんだよな。死者だから。
（あの臭いは…）
勘弁して欲しい。誰も腐った臭いなんて嗅ぎたくないし。
「ヒブカ、朝食が終わったら私の部屋に来てくださる？」
不意にアンブリッジが俺に声をかけてきた。
「分かりました」
（何の用なんだ？）

俺が嫌っているのは態度で分かるだろうに。
向こうも俺にはあまり良い態度ではないし。
（…嫌いだが、呼ばれたしな）
俺は近くにあったクロワッサンを一つ取り大広間を出た。
クロワッサンを食べながらアンブリッジの部屋へ向かう。
アンブリッジの部屋についた頃にはクロワッサンを食べ終わり俺はドアをノックした。
「入りなさい」
入室の許可が下りたので俺は部屋に入る。
俺が部屋に入ったのをアンブリッジは確認してから話し出す。
「あなたを呼んだのは明日張り出す教育令にあなたも入っているからなの」
「教育令…か」
「ええ」
アンブリッジはゴソゴソと探し出し、読みはじめた。
―ホグワーツ高等尋問官令
教師は、自分が給与の支払いを受けて教えている科目に厳密に関係すること以外は、生徒に対し、いっさいの情報を与えることを、ここに禁ず。
以上は教育令第二十六号に則ったものである。
高等尋問官　ドローレス・ジェーン・アンブリッジ―
俺はアンブリッジの朗読を終えてから話し出す。
「今度はそれか…」
「ええ。あなたは今は生徒になっていますが本来は教師ですからあなたにも当て嵌まるの」
「だが俺には担当科目なんてないですが？」
俺はアンブリッジに問う。
「ええ。だからあなたには生徒に何一つ情報を与える事を禁ずるわ」
「…俺が何か情報を与えているとでも？」
「ええ。私はそう思うの」

アンブリッジは猫撫で声で答えた。
「分かってくださるでしょう？」
（…拒否権は無しか）
俺はため息をつく。
「話さなければいいんでしょう？」
「ええ。生徒に何一つね…」
「……分かりました」
俺は長くためてから言った。
「そう。良かったわ。用はこれだけよ」
「失礼しました」
俺はアンブリッジの部屋から出て行った。
（あの女！どれだけ…）
どれだけ此処を支配下に置くつもりだ！
俺はイライラしながら授業へと向かった。

翌日、アンブリッジは本当にあの教育令を出した。教師は生徒の前で話す事は出来なくなったし、職員室にはあの女がいる。話す場所が無くなってしまったのだ。
そして俺に何度もマクゴナガル先生は話したそうにしていた近づいたりしていたが何らか呼ばれたりして失敗しているのを何回も感じた。
…きっと俺にもあれが使われているかなどを知りたいのだろうが…
（手段がないな）
ふくろうもあの女に全て確認される。授業内で手紙等を渡す事も出来ないし…
考えている内に俺は不意に思いついた。
（課題だ！）
幸いまだ教師同士は話す事が出来る。だから一人にだけ告げればいい。
（確か今日は…）

確か今日は『変身術』の課題を授業前に提供になっている。
俺は急いで課題の端にアンブリッジが俺にも施行していることを小さく、小さく書いた。
（後は先生が気づくかどうかだな）
俺はその課題を提供した。
課題は思いの他その日に返ってきた。
（先生が気づいたかどうか…）
俺は課題を読み取り始める。
（…どうやら伝わったみたいだな）
課題には一言。『分かりやすかったです』一見課題のコメントに見えるがマクゴナガル先生は訂正ならするがそんなコメントをしない。
（それにご丁寧に…）
俺が書いた文字を消してある。もはや誰が見ても課題、だ。
（…これで俺の情報も伝わった）
後はマクゴナガル先生が広めてくれるだろう。
俺は課題をしまいベットへと潜りこんだ。

百八話

「話した？あの墓場の事を？」
「うん。リータが書いたんだけどいつ『ザ・クィブラー』に乗るかは分からないんだ」
談話室にてハリーが前回のホグズミード行きの日にリータのインタビューを受けた事を話してくれた。ハリーはウ〝ォルデモートの復活について詳しく話したらしい。
「ライカも居れば良かったんだけど…」
「まぁ俺は許可ないからなー」
「だよね。まぁあの記事が乗るのが楽しみだよ」
ハリーとこの話しをしたのが先週だった。
（…こんなに早く乗るなんてな）
月曜の朝、大広間のグリフィンドール寮のテーブルには沢山のふくろうがいた。理由はハリーのインタビューの感想を届けに来た、だが…多過ぎやしないか？
「ライカ、これは何の騒ぎなんだ？」
何か分からないライルが皆がいるにも関わらず俺に聞いてきた。
「ハリーのインタビューの感想。ライルも広めてくれると嬉しいんだけど？」
俺はライルに『ザ・クィブラー』を渡した。
「…成る程。いいだろう」
ライルはこう言ってスリザリンの席へと移動した。
「私も広めましょうか？」
「私も広めるくらいなら出来るよ？後輩君」
「黙って盗み聞きは止めて欲しいんだけど？」
人混みやふくろうに紛れて俺達の会話を後ろで聞いていたソーラスとレイチェルに注意をする。
「でも、広めてくれるのは歓迎するよ」

二人共悪戯っぽく返事した後にそれぞれの寮テーブルへ戻った。
（これで各寮へ広まるな…）
だが俺が三人に頼まなくても『ザ・クィブラー』は全生徒に読まれた。理由はあの馬鹿女がすぐにまた新しい教育令を出したからだ。
―ホグワーツ高等尋問官令
『ザ・クィブラー』を所持しているのが発覚した生徒は退学処分に処す。
以上は教育令第二十七号に則ったものである。
高等尋問官　ドローレス・ジェーン・アンブリッジ―
おかげで生徒はハリーのインタビューが気になり全生徒が読む事になった。
（まあ、知られたくないから出したんだろうが自分の首を絞めたな）
俺は意気揚々と授業へ向かった。

次の日の夕方、俺は大広間にてハリーから夢の一部を聞いた。ウ、ォルデモートが何かを取り損なった部下を処罰した、と。
「何かを？それが何か分かる？」
「『神秘部』にある武器だと思う」
（…あいつはもう気づいているな）
俺は必要な情報は聞けたので話題を変える為に『閉心術』を聞いてみた。
「ハリー…『閉心術』の訓練はしてる？」
「え？……してるよ」
「なら、いいけど」
（間があったが…しているのか？）
「それより、ライカはフクロウの勉強している？」
ハリーは話題をさらに変えてきた。

（…してないな、こいつ）
しかしそこには触れずにフクロウの話しをする。
「してない」
「え！？てっきり始めてると思った…」
「今は課題で手一杯かな」
俺は時計を確認する。
「ハリー、そろそろ特別授業じゃない？」
「あ！……じゃあ行ってくる」
ハリーは先程とは違い落ち込んだような声で言い席を立った。
「…行ってらっしゃい」
フラフラと去っていくハリーに言った後に俺は早めの夕食を取る。
（……ん？叫び声？）
夕食を食べていると此処から近い場所から叫び声が聞こえる。
（近い場所なら玄関ホール……か？）
俺は席を立ち、玄関ホールに向かう。
叫び声は見事に玄関ホールであっていた。
その玄関ホールにはトレローニーとアンブリッジが言い合っていた。
「いやよ！」
トレローニーは甲高く叫ぶ。
「いやです！こんなことが起こるはずがない…こんなことが…あたくし、受け入れませんわ！」
「あなた、こういう事態になるという認識がなかったの？わたくしが査察していた間の嘆かわしい授業では解雇が避けられないことぐらいは確実におわかりになったのではないこと？」
「あなたに、そんなこと、で――できないわ！」
このトレローニーの言葉にアンブリッジはハッキリと答えた。
「出来るのよ。一時間前に魔法大臣が『解雇辞令』に署名なされたからにはね。さぁどうぞこのホールから出て行ってちょうだい。恥さらしですよ」
（『解雇辞令』か…とうとう出たな）

これによってハグリッドも危なくなった。あの女はハグリッドを嫌っているからな。

トレローニーはその場で泣いていた。

しかしアンブリッジが何かを言い出す前にマクゴナガル先生がつかつかとトレローニーの前までやってきた。

「さあ、さあ、シビル……落ち着いて……これで鼻をかみなさい……あなたが考えているほど酷いことではありません。ホグワーツを出ることにはなりませんよ」

アンブリッジは数歩進み出る。

「あら、マクゴナガル先生、そうですの？そう宣言なさる権限がおありですの……？」

「それはわしの権限じゃ」

アンブリッジの後にダンブルドアが言い放った。

「あなたの？ダンブルドア先生？」

アンブリッジは不愉快そうに言った。

「『解雇辞令。教育令第二十三号により、ホグワーツ高等尋問官は魔法省の要求する基準を満たないと思われるすべての教師を査察し、停職に処し、解雇する権利を有する』トレローニー先生は基準を満たさないと判断し、わたくしが解雇しました」

ダンブルドアはそれに反論はしなかった。

「アンブリッジ先生、もちろんあなたは高等尋問官としてわしの教師たちを解雇する権利をお持ちじゃ。しかしこの城から追い出す権限は持っておられない。遺憾ながら」

ダンブルドアは頭を下げる。

「その権限はまだ校長がもっておる。そしてそのわしが、トレローニー先生には引き続きホグワーツに住んでいただきだいのじゃ」

トレローニーは狂ったように小さく笑った。

「いいえ――あたくし、で――出てまいります。ダンブルドア！ホグワーツをは――離れ、ど――どこかほかで――」

「いいや、わしのお願いじゃ。シビル、あなたにはここに留まるの

じゃ」
ダンブルドアはマクゴナガル先生に言う。
「マクゴナガル先生、シビルに連れ添って上まで連れていってくれるかの？」
「承知しました」
マクゴナガル先生はトレローニーを立ち上がらせて、生徒の中から出てきたスプラウトと一緒に中へ歩いていく。
トレローニーの荷物はフリットウィックが呪文にて浮かし、フリットウィックがしんがりをつとめた。「それで、わたくしが新しい『占い学』の教師を任命し、あの場所を使う必要ができたらどうなさるおつもりですの？」
「おお、それはご心配には及ばん。わしはもう新しい『占い学』の教師を見つけておる。その方は一階に棲むほうが好ましいそうじゃ」
アンブリッジは驚愕の声を上げた。
「あなたが見つけた？お忘れかしら、ダンブル、教育令第二十二号によれば―」
「魔法省は、適切な候補者を任命する権利がある。ただし――校長が候補者を見つけられなかった場合のみ。今回は喜ばしいことに、わしが見つけたのじゃ。ご紹介させていただこうかの？」
（…この魔力は…ケンタウルスのフィレンツェか）
フィレンツェはカツカツとやって来た。
「フィレンツェじゃ。あなたも適任だと思われることじゃろう」
…いや、多分追い出そうと躍起になるだろう。
（フィレンツェが入った事によって無茶な教育令がでなければいいが…）
俺は徐々にこの場を去っていく生徒の中で一人ため息をついた。

百九話（前書き）

いつの間にかお気に入りが２００件越えました！
正直驚いています。まさかこんなにもお気に入り登録してくださるとは……

まだまだどうなるか分からない『英雄後談』ですが、これからもよろしくお願いします。

百九話

（『占い学』は……確か一階か）

フィレンツェが教師になっての初めての授業。場所はどうやら北塔ではなく一階で行うと掲示板に張り出されていた。

俺はトントンと階段を下りる。

（十一番教室か…）

あそこは使われていない教室の一つだったが…手入れはしたのか？

俺は玄関ホールとは逆にある教室へ向かう。

教室へ着き、中へ入るとツルツルな床では無く芝生の感触があった。

（芝生……？）

教室を改造したのか？

俺は疑問に思いながらもフィレンツェから説明があるか、と思い適当に腰を下ろす。

生徒が全員座り込むとフィレンツェは話し出した。

「ダンブルドア先生のご厚意でこの教室が準備なされました。この教室は私の生息地に似せてあります。できれば禁じられた森で授業をしたかったのですが―…もやはそれは出来ません」

「えーと、先生？」

パーパティ…だったな、確か。パーパティは挙式をしてフィレンツェに尋ねた。

「どうしてですか？私たち、ハグリッドと一緒に森へ入った事があります。怖く―「フィレンツェが群れから追放された。……そうですよね？先生」……」

ケンタウルスは人間と関わりを持ちたがらない。それに人間を良くとも思ってないしな。それを生徒達にケンタウルスの占いを教えるとなると群れから追い出されても仕方がない。ケンタウルスは誇り高いからな。

「ライカ・ヒブカの言う通りです。私は群れから追放されました」

「なんです――あっ！先生の仲間がもっといるのですね？」
生徒達が少しずつケンタウルスについて話し出す。日頃見ないから群れと言われても分からないのだろう。
「ハグリッドが繁殖させたのですか？セストラルみたいに？」
（あーあ…言っちゃいけないことを）
ケンタウルスが他にも沢山いる、と分かって一人の男子生徒がフィレンツェにこう聞いてしまった。
「ケンタウルスはヒト族の召し使いでも、慰み者でもない」
フィレンツェは静かに言い放った。
「始めよう」
フィレンツェはあらかじめ頼んでいたのだろう魔法を使って天井に天体を表した。
（この魔法は天体系…ヤバいな、天体をやるとは）
しかもトレローニーみたいにでっちあげは通用しない。
（…どうせ他の奴らも分からないだろう）
「床に仰向けに寝転んで」
俺は内心この授業を諦めて寝転んだ。
「みなさんは、『天文学』で惑星やその衛星の名前を勉強しましたね。そして天空を巡る星の運行図を作りましたね。ケンタウルスは、何世紀もかけて、こうした天体の動きの神秘を説き明かしてきました。その結果、天空に未来が顔を覗かせる可能性があることを知ったのです―」
（あー…眠くなるような授業だな、これ）
森みたいにされてはいるが風がなく暖かいままでフィレンツェの静かで落ち着いている声ときた。これは眠くなる『魔法史』と一緒だ。このままボーっとしていたかったが生憎授業。フィレンツェの話しが終わると実際にケンタウルスが行っている占いをした。
当然俺に“見える”はずもなくパチパチとなる火の側にいるだけだった。
再びボーとしていた俺の耳に終了のベルが聞こえた。

（終わり、か）
俺は重い腰を上げ、教室を出て行った。

フィレンツェの初授業から月日は流れ、ますますフクロウが近づいていた。
そんな中、俺はもう何回目かのＤＡに来ていた。
（大分出来るようになったよな…）
ＤＡは今『守護呪文』の練習をしていた。ネビルとかはまだまだがもう守護霊を出せる生徒は徐々に増えていた。皆が『守護呪文』を必死にやっている時にバチン、と屋敷しもべ妖精がハリーの元へ現れた。
ハリーに何かを伝えたと思いきやハリーは大声で叫んだ。
「何をぐずぐずしてるんだ！あの女がくるぞ！逃げろ！」
バタバタと出口へ皆急いだ。
（さて…どうしようか？）
別にこの部屋を出なくても追加で誰にも見つからないようにすれば此処が見つかる事はない。だが…
（あいつは中まで見るだろうな。それに逃げきれてもいずれメンバー表で分かってしまう…）
バタバタと言う足音とあいつの声が聞こえてきた。
（……繋ぐか）
俺は一時的に無理矢理何処かと『隠し通路』を作った。
（何処かは運、だな）
俺はその通路を走り始める。走りながら通った隠し通路を消していく。
数分走ると通路ではなく何故か芝生を踏んでいた。

（繋がったのは此処か…）
「ライカ・ヒブカ？」
フィレンツェが驚いたように言った。
俺はフィレンツェに話しかける前に此処の隠し通路の痕跡を消した。
「ちょっと匿ってくれない？」
フィレンツェは考えていたのだろう、しばらくたってから口を開いた。
「分かりました。こちらも聞きたい事がありますので」
「聞きたい事？」
「ええ。ゴドリック・グリフィンドール殿？」
俺もフィレンツェも話さずに沈黙が続く。やがて俺が口を開いた。
「やはり分かっていたのか」
「ええ。…本来あるはずの無いものがありましたから。お聞きしましょう。何故貴方が此処にいるのですか？」
俺は深いため息をつく。
「話さない…と言っても聞かないよな？」
「ええ。本来貴方はいてはいけない存在です。何故いるのかくらいは教えてくれますよね？」
俺はクツクツと笑う。
「ケンタウルスの占いでも分からなかったか」
「占いは完全ではありません。ましてやヒトの個人の事など分かるはずもない。宇宙は広いんです」
俺はしばらく話さなかった。だが何時までも、とはいかないので口を開く。
「……ちょっとな、ホグワーツに仕事を残して逝ったもんだからあいつらから追い出されたんだ」
「仕事……ですか？」
「ああ、仕事だ。馬鹿な俺は忘れた仕事を約千年たった後にしている。創設者としての最後の仕事をな」
「……それで戻ってきた、と」

俺はニヤリと笑う。
「悪かったか？」
「そうですね。本来いてはいけませんから。……ですが意外でした」
「意外？」
何が意外なのだろうか？
俺はフィレンツェに聞く。
「何が意外なんだ？」
「聞いた中では貴方達……特に貴方は大切な人がいない世界に興味がないと思っていたのですが…」
「……まぁ追い出されたし、それに来たもんは来たんだ。そこで新しく作ればいい話しだろう？」
沈黙が流れる。
その中でフィレンツェはゆっくりと言った。
「私は、まだ貴方がいることに納得はしていない」
（……まぁ普通ならもう死んでいて此処にはいないしな）
「けれど、貴方はもう此処で生きてしまっている。……気をつけてください。これから魔法界は大変な事になりますよ」
（しまっているってなぁ…）
俺はポリポリと頭をかきながらフィレンツェに問う。
「俺がガキん時よりは悪くならないだろ？」
「貴方の時代はもはや別世界です。あんな特別な事、早々なることはありませんよ」
「ならばいい。ハリーが何とかするだろう」
俺はハリーに托す。
「さて、あの糞ガマガエルはどうなったかな」
「…ガマガエル、ですか？」
「ああ。あの女にはガマガエルだろ？ロンやハリー達から聞くと太ってカエルみたいらしいし」
俺はニヤリと笑った。
「アンブリッジ先生が何をしているか、くらいは分かっていますが、

気をつけなさい」
逆らえば貴方が退学になりますよ、とフィレンツェは言った。
「まぁ、仕事が終わるまでは退学にはならないようにするよ。匿ってくれてありがとさん」
俺はヒラヒラとフィレンツェに手を振って『占い学』の教室を出ていく。
（さて…此処からグリフィンドール寮へと戻るか）
俺は静かな廊下を歩く。
（アンブリッジは…校長室？しかもハリー捕まったな）
後はマリエッタ…だったっけ？そいつがいた。
（…他には…あぁ、何かいっぱいいるな）
何やら校長室は校長室で起こっているみたいだ。
（ま、おかげでこっちは楽になったな）
俺は階段を上っていく。
（よっと…最後だっ）
最後の階段を上りグリフィンドール寮がある階へと着いた。
（此処まで来れば後は……ん？）
何やらバタバタ聞こえる。気のせいか？
「あ！此処にも発見！」
そいつはこう言うと俺の方へと走ってきた。
（……何、こいつ？）
そいつは俺の元へ着くとこう聞いてきた。
「お前、違法のグループ活動していた奴か？」
「…今階段から上って来たのにいつ活動してたって？」
（アンブリッジの手下のやつか…だが）
俺は早々捕まったりはしない。今捕まったら多分校長室行だ。ハリーもいるし。
（そしたら確実に面倒事になる！）
「なら、何で下にいたんだ？下に用なんてないだろう？」
「フィレンツェ先生と話してたんだよ。疑うなら聞けばいいだろう

？」
フィレンツェが口合わせしてくれるかは分からないがとりあえず言った。
「……」
そいつは何も言わずに去って行った。
（そんなにケンタウルスが嫌いか）
まぁあの女も半人間をあまり良く思ってないからな。ハグリッドとか。そいつについているのだからそうなってしまったのだろう。
（…あいつが言うほど危険ではないのだがな）
俺はグリフィンドール寮へと向かい始める。
（ま、あいつは大人だから何を言っても聞かないだろう）
あいつはそんなのを聞くタイプでもないし。
（……ん？）
グリフィンドール寮へあと少し、というところで校長室の魔力が荒れている事に気づいた。
（……戦闘か？）
そう思った後に校長室からダンブルドアの魔力がフォークスと共に消えた。
（……出て行ったのか？）
俺は歩き出し、グリフィンドール寮へと入る。
（校長がいないとなると……次の校長は誰になるやら）
副校長であるマクゴナガル先生が校長になるのが普通だろうがホグワーツでは誰が校長になるのか分からない。
（ま、あの女でさえなければいいや）
「ライカ！無事だったのね」
俺の思考を遮り話しかけてきたのはハーマイオニーだった。隣にロンもいる。
「ハーマイオニー、ロン、捕まらなかったみたいだね」
「ええ。貴方も捕まらなかったみたいね。ハリーを知らない？」
「ハリーなら捕まった」

ハーマイオニーは小さく悲鳴を上げた。
「ハリーが捕まったって!?」
ロンが俺に聞く。
「うん。魔力が校長室にある。詳しくはハリーに聞いて」
俺はハリーと行動してないし、と付け加える。
「後、俺達も覚悟はしておいた方がいいよ」
「覚悟？なんでさ」
「メンバー表を置いていっているからね」
ハーマイオニーがあ、と声を上げた。
「見られたらそれでメンバーが分かってしまうわね…」
「多分アンブリッジはそれを取ってる。あの部屋を確認しただろうしね」
俺は二人の側から離れ男子寮へと歩く。
「「ライカ？」」
「もう寝る。ハリーは多分遅くなるだろうし……お休み」
俺は二人にそう告げて男子寮へと向かう階段を上った。

百十話

翌朝、アンブリッジは早々に魔法省令を出した。
―魔法省令
ドローレス・ジェーン・アンブリッジ（高等尋問官）はアルバス・ダンブルドアに代わりホグワーツ魔法魔術学校の校長に就任した。
以上は教育令第二十八号にしたがうものである。
魔法大臣　コーネリウス・オズワルド・ファッジ―
（あの女が校長、ね…）
ただ図画達の話しだとアンブリッジは校長室に入れなかったみたいだ。それでカンカンに怒っていた、とも。
（ザマァみろ……おや？）
前方にフレッドとジョージがいる。いるのは別に不自然じゃない…廊下だし。だがコソコソ話しながら歩いていると…
（内容を聞きたくなるよな）
俺が二人の側を通った時に花火がどうとか言う会話が聞こえた。
俺は通り過ぎた二人を振り返りニヤリと笑った。
「今度は花火？それ…あいつを困らせられる？」
二人はしばらく何も言わなかったが、やがて口を開いた。
「「もちろん」」
俺はさらにニヤリとする。
「ねぇ、それなら―」
双子と話し終わった俺は授業をサボリ、ウキウキとした気分で仕掛けに行く。
（使われてない教室は…と）
俺は使われてない教室へと赴き花火を仕掛ける。
（隠し部屋にはあれを仕掛けるか）
次の空き教室へ向かう途中で声をかけられた。
「ヒブカ、何をしているんですか？」

「う〝……マクゴナガル先生」
俺はソロリと後ろを振り返る。
俺の後ろにはマクゴナガル先生がいた。
「授業中に―……もしかして悪戯ですか？」
（やっぱ、すぐに分かったな…）
俺は今は悪戯をしていないがジェームズ達の時は少なからずしていた。…あいつらほどではないが。
俺はマクゴナガル先生に言った。
「ちょぉっとあの女を困らせたくて…」
だがマクゴナガル先生は何も話さない。
（あーあ……失敗か）
俺がそう思っているとマクゴナガル先生がこう言った。
「分かりました」
「……へ？」
「我々教師も協力しましょう。悪戯は何時ぐらいになりますか？」
（さすがグリフィンドール寮出身）
ノリがいい。だがこうでなくちゃつまらなくなるとこだった。
俺はニヤリと笑う。
「昼食時に始まります」
「分かりました」
俺はマクゴナガル先生に助言をした。
「マクゴナガル先生…花火は花火ですがあの女には片付けられるとは思いません。いや…無理です」
「そうですか……我々のする事が決まりました。助言、ありがとうございます」
マクゴナガル先生は回れ右をして俺を見なかった事にしてくれた。
（俺も早く仕掛けないとな）
俺はクルリと向きを変えて走り出した。

全ての仕掛けが終わり、昼食時。
フレッド達が生徒がある程度大広間へ入ったのを確認した後に杖を振り花火に火をつけた。
あちらこちらに隠した花火がバンバンとなり響く。
だがフレッド達が作った自信作はドラゴン花火。
（そろそろか？）
大広間にバンバンと一際大きい花火の音が聞こえた。
バチチと言う音も。
（おや？俺のも来たな）
俺が持っていたのは魔法生物の形をした花火だ。二人みたいに火は吹かないが。
アンブリッジがすぐさま大広間へやって来てフィルチと一緒にドラゴン花火を消そうと躍起になっていた。
（さ、授業授業）
俺は午後の授業に出るために席を立ちバンバン音がなっている大広間をあとにした。
午後一番の授業は『変身術』でマクゴナガル先生の言っていた協力の意味が分かった。
クラスに花火が入ってきてもマクゴナガル先生は追い出さずにアンブリッジを呼んだ。追い出していい権限があるか分からなかったから、と。
そうしたのはマクゴナガル先生だけではなく、他の先生方も同様に花火が来たらアンブリッジを呼んだ。同じ理由で。そしてアンブリッジに花火の撤去をさせたのだ。
そして教師陣は最後に嫌味付きでクラスから追い出した。
アンブリッジは教師に呼ばれながらバタバタと校内を走って花火を片付けていたが何せ俺が午前中授業を全て潰して空き教室や隠し部屋に仕掛けたのだ。…まぁ隠し部屋のは爆竹音だけだから片付けな

くても平気だが、それらを除いてもかなりの数になっている。
恐らく校長就任のめでたい今日一日は確実に花火で潰れるだろう。
（ザマァみろ）
ゼィゼィと息を切らせながら今だに走っているアンブリッジと何食わぬ顔ですれ違いながらそう思った。
（だがしばらくは何も出来なくなるな）
双子も今回でドラゴン花火の在庫を切らした、と言っていたし。
（まぁアンブリッジにとって忘れられない日になればいいか）
俺達、グリフィンドール寮生と教師陣からのささやかな校長就任プレゼント。
（気に入ってくれれば嬉しいがな）
クツクツと笑いながら俺はグリフィンドール寮へと向かった。

百十一話

イースター休暇が終わる頃にグリフィンドール寮の掲示板に新しいお知らせが貼られた。
俺はそれを今日、人が少なくなってきたので確認をした。
―進路指導
夏学期の最初の週に、五年生は全員、寮監と短時間面接し、将来の職業について相談すること。
個人面接の時間は左記の通り―
（俺は…月曜の最後か）
リストを確認すると俺は月曜のラストだった。
（月曜か……ん？）
俺は頭の中で曜日整理をする。
（……今日じゃないか？）
もう一度頭の中で整理をする。……ダメだやっぱり今日だ。
（面接か……）
とりあえず一番に『占い学』はしたくない、と言おう。
俺は朝食を食べるためにかばんを持ち大広間へと向かった。

（つ…疲れた）
今日は厄日だ。ハリーはセブルスの嫌がらせによって終始イライラとしていたし、ハーマイオニーは何やらハリー達の事でずっと小声だが話していて正直、耳障りだった。
今はやっと『占い学』が終わり、俺の面接時間が近いのでマクゴナガル先生の部屋へと重いあしどりで向かっていた。
（ハリーが確か俺の前だったよな…）

もう終わっているんだろうな、と思いながらドアをノックした。
「お入りなさい」ときびきびとした声で許可が下りたので「失礼します」と言って中へ入った。
「お掛けなさい、タツキ」
マクゴナガル先生はこう言った。
「そんなこと言っても良いんですかね？嫌なせんせーがいるでしょ？」
あいつの事だ。どうせ俺の面接にいそうなんだが……
「アンブリッジ先生ならば貴方のクラスの授業ですよ」
お掛けなさい、とマクゴナガル先生は再度言う。
（そういえばそうだったな…）
俺は椅子に座った。
「さて、本来ならば生徒の進路について話し合い、六年目、七年目でどの教科を継続するかを決める指導ですが……貴方はもう就職していますから必要ないですよね。フクロウも前回同様Ｏ（優）を取れますよね？」
「あー…マクゴナガル先生、俺『占い学』を辞めるんで来学期『占い学』を組み込まないで下さい」
俺はマクゴナガル先生に切り出した。
「おや？シビルからＯではないですがＡ判定が来ていますよ。辞めますか？」
「答えなんて分かっているでしょう？俺は『占い学』なんて向かないんです」
「向かないと言うわりには可を取ってますけどね」
マクゴナガル先生は羊皮紙にカリカリと何かを書き始めた。…多分俺が来学期『占い学』を取らないというメモだろう。
「最低限『可』は取るように勉強してますから」
マクゴナガル先生のカリカリという音が止まった。
「勉強をしている？本当にしているんですか？貴方が勉強をしている姿なんて授業以外見たことありませんよ。特に前回では授業です

ら見たことありません」
マクゴナガル先生はキッパリと言った。
確かに、ノートは取っては無かった。取って無かったが…
「……そこまで言いますか？」
「貴方をご存知の先生方ならば皆同じ事を言うと思います。何せ貴方のフクロウの結果を見て倒れた先生とかいましたから」
「……それは言いすぎですよ」
「そうとられたならばそれで構いません」
マクゴナガル先生はまたカリカリと書き始める。
（……実話？んな分けないか）
そんな生徒の成績くらいで倒れるならば教師なんか出来ない。
俺は此処まで“教師”でプライベート？を話すマクゴナガル先生は初めてだったので違和感を感じた。
（何時も生徒の俺には誰とも変わらない教師だったんだが…）
「マクゴナガル先生、何かあったんですか？先生が教師でこんな事を話すなんて初めてですよ」
マクゴナガル先生は書き終えたのかパタン、と羽根ペンを置いた。
「……申し訳ありません。先程までいたものですから」
「ああ……」
マクゴナガル先生は誰、とは言わなかったが俺には分かった。分かってしまった。マクゴナガル先生を此処までしたのはあいつだ。
（恐ろしいな…）
マクゴナガル先生を此処まで追い詰められるなんて。
「それに懐かしくてつい話し込んでしまいました。面接は此処までにします」
帰っていいですよ、とマクゴナガル先生は言った。
「……失礼しました」
俺はマクゴナガル先生の部屋を出る。
（……あの女、悪影響しか出さないな）
今に始まった事ではないが、マクゴナガル先生まであなるとは…

（……あいつ、どうやって殺ろうか？）
俺はあいつをどう処理しようか頭の中で考えながら階段を上る。
『先生！』
「……ヘレナ？」
ヘレナが明らかに階段のところじゃない位置から声をかけてきた。
（確かに幽霊だけど…）
元生徒から階段でないところの位置で声をかけられるなんて考えもしなかった。
「また何かあったのか？」
『悪戯仕掛け人の双子が東塔の六階に大きな沼地を作ったあげくにホグワーツを出て行きました』
「双子が？そりゃ凄い」
沼地を作るなんて。今度俺もやろうかな……
『感心してる場合ではないですよ！』
「んー…でもなぁ、俺は今生徒だから動けないし」
『そう言ってこの現状を楽しんでますよね？』
ヘレナは疑うように聞く。
「俺を誰だと思ってる？あいつがこれからどうなるか想像するだけでも楽しいのに実現するならば楽しまなければいけないだろう？」
祭と同じだよ、と俺は付け加える。
『確かにあの女はやり過ぎですけど…』
「お？ならヘレナも一緒に遊ぶか？」
ヘレナがいるならば高い位置から糞爆弾でも落とせるよな。
俺はこう思い、ヘレナを誘った。
『……先生は変わりませんね。…いや、猫は被るようになりましたけど、それ以外は何も変わらない』
「ああ？俺は何一つ変わってないよ。昔から猫被ってたし」
俺は階段から廊下へ出る。ヘレナもついて来ているがな。
「さぁて…祭の開始だ。ヘレナ」
俺はヘレナがいるだろう方に向けてニヤリと笑った。

『手伝えって言うんですか？』
「勿論。ヘレナがいたら高い位置から糞爆弾でも落とせるだろ？」
『……それだけとは言いませんよね？』
「あとは……まぁ何かあるだろう」
『それだけじゃあの女はくたばりませんよ』
「んー…まぁ臨機応変に頼む」
『……分かりました』
ため息をつきながらヘレナは言った。
『他のゴーストにも頼みます』
「お？じゃ頼む」
『先生だけじゃ頼りになりませんから』
ヘレナは最後にこう言って俺の側から去っていった。
（頼りにならないってなぁー…一応教師ですよ？）
ヘレナに魔法を教えたのも俺達だし。
（でも、まあ人数を集めてくれるみたいだから…）
あの女にどんな悪戯をするか、だな。
俺はウキウキとしながらグリフィンドール寮へ急いだ。

百十二話

双子がホグワーツを去ってからしばらくはアンブリッジイジメが続いた。
例えば双子が開発した『ずる休みスナックボックス』を使いアンブリッジの授業では俺くらいしか残らなくなり授業にならなくなっている。
他に廊下にしょっちゅう糞爆弾や臭い玉が落ちるようになった。
ターゲットになったのはアンブリッジだけではなく、アンブリッジを崇拝していた「親衛隊」だっけ?そのグループもやられている。
一番凄いのはピーブズだった。テーブルをひっくり返し、銅像や花瓶を倒して回ったりした。
しかしこれ程の悪戯(イジメ)が起きているにも関わらず、先生方は関わらなかった。それどころか時々ピーブズにアドバイスをしていた。
(先生方もアンブリッジには散々やられたからな)
まぁ俺もヘレナ達を協力者にイジメ倒したけどね。
そんなアンブリッジがズタズタにやられている毎日だったが今日はあまり生徒がいない。クィディッチの試合なのだ。
(まぁ好都合だけどな)
俺は廊下に誰もいないのを確認してから滑り台みたいな隠し通路に入る。
俺は滑り台みたいになっている通路から滑りきらずに立ち上がり、右の壁に向かってジャンプする。右の壁にぶつかる前に素早く蹴り左の壁へ向かう。
それを交互に繰り返しと勢いがついてくる。
(もうそろそろだよな…)
俺は右から左、そして右ではなく上へと飛んだ。
上は天井ではないのでぶつかる事もなく、どんどん上へと続いていた。

（やっぱりここで合ってたな）
右の壁から壁を蹴り左へ移る。左も同じように右へ移る。この行動を続けて上へと上っていった。
トンッと左の壁を蹴ると右側にはもう壁はなく、床の上に着地した。
（久々だったけど…行けたな）
この行きにくい部屋は俺達が会議や書類仕事等で使っていた隠し部屋だ。
「なんで俺のはこうも肉体労働なんかな？」
この部屋には各寮から行けるように作られた道がある。そしてグリフィンドール寮から行く道が俺が通ってきたところ、だ。
「確かに俺かあいつらくらいしかできないけれど…」
侵入者（生徒）避けにしては別にこれでなくても良かった気がする。
（まあ、作ったんだから仕方ないか）
俺は体をほぐす為に背を伸ばす。
「……さてやりますか」
体をほぐしたところで俺は部屋の中央へっ向かう。
（此処は…あー侵入者対策に力を入れたな、確か）
頭の中でこの部屋にかけた呪文を描きながら床に座った。

（……い…異常なし）
部屋にかけた呪文を調べるだけで疲れてしまった。
パタンと床に倒れる。
（あー……あとはあの魔法をかけるだけだな）
魔法をかけるだけだが少し休憩を入れないと脳みそが持たない。
（あー……本当に懐かしいな）
意識がボンヤリとし始めた。
（……ヤベ、寝ないようにしないとな）

目をこれでもか、というくらい開く。だが脳みそはドンドンと思考を停止していった。

（…あー大分頭がハッキリしてきた）

どれだけ時間が経ったのかは分からない。けれど大分頭がハッキリとしてきたので俺は起き上がった。

（今、何時だ？）

時計を読み取ったところ、夕食時間をとうに過ぎていた。

（…これは時間がかかり過ぎか）

早くかけて帰らないと就寝時間に間に合わなくなる。

「確か……これか」

俺は杖を一振りした。

「多分これで平気だと思うけど…」

俺は念のために確認をとる。

（ん……よし。平気だな）

俺は確認し終えたので立ち上がる。

（覚悟して寮へ戻らないとな）

俺は入ってきたところから隠し通路へと落ちる。

「うぎゃぁぁぁぁ」

真下に落ち、ドスンという音を立てて滑り落ちる。

体がジンジンして痺れているまま滑り台が終わり、グリフィンドール寮より下の階へと放られた。

「はぁー…ここから寮へ帰らないとな」

パンパンと叩きながら立ち上がる。

「……ライカ？」

低い声が俺の名前を呼んだ。

「こんなところで何をしている？」
（セ、セブルス！？）
俺は一瞬固まったがすぐさま駆け出した。
「あ、おい！」
（何も聞こえねぇ！）
俺はグリフィンドール寮目指して後ろからかかる声を無視して走る。
階段をダダダダッと駆け上がりグリフィンドール寮がある塔へと入った。
（此処まで来れば平気だろ…）
俺は走るのを止めてゆっくりと歩きだした。
（…ん？別に逃げなくても良かったよな？）
不意に気がついた。まだ就寝時間ではないし、罰せられる事はない。
逃げる必要はなかったのだ。
（咄嗟に逃げてしまった…）
…仕方ない。やったもんはやった。セブルスもそんなに気にしないだろう。
俺は合言葉を言いグリフィンドール寮へと入っていった。

百十三話

とうとうフクロウが来てしまった。
（あーあ…始まった）
始めは『呪文学』だった。
筆記テストは大広間で行われた。
テスト中皆静かにカリカリと羽根ペンを動かす音が聞こえる。
（…簡単だな）
俺は問題を全て読み取り終えると羊皮紙に答えを書いていった。
筆記が終わると次に実技が行われた。
実技は『浮遊呪文』や『変色呪文』などが出された。
次の日には『変身術』水曜に『薬草学』木曜に『闇の魔術に対する防衛術』と続いていった。
金曜には何もテストが入っていなかったので土曜、日曜と三日間ハリー達と談話室で大人しく勉強をしていた。…俺は勉強の合間に本を読んだりしていたが、二人は必死にしていた。
月曜は『魔法薬学』をやった。この教科ではハリーとネビルがやけに神経質になっていたが二人共セブルスがいないせいか実技は落ち着いていた。
（だからと言って受かる訳ではないがな）
俺は何とか時間内に終わる事が出来た。
火曜には『魔法生物飼育学』だった。
水曜は午前中に『天文学』の筆記、午後には『占い学』そしてその日の夜には『天文学』の実技が行われた。
『天文学』の実技は望遠鏡を覗きながら羊皮紙に惑星を書き込むというものだったので俺は昔サラザールが教えてくれたのを基本に今の時期にあるだろう惑星を書いていった。
（あー…これは早く終わるんだよな）
俺は予想したものをそのまま書き写すだけなのですでに終わってい

た。
（ん？）
アンブリッジが四人を従えて校庭に出てハグリッドの小屋へ向かっていた。
（……こんな時間に訪問か？）
するとバーンという音が校庭から聞こえてくる。
（まさか襲っているんじゃないよな？）
すると近くにいたハーマイオニーがやめて！と叫ぶのが聞こえた。
俺は舌打ちをする。
「おとなしくするんだ、ハグリッド！」
襲っている一人が叫び此処まで聞こえてきた。
「おとなしくが糞喰らえだ。ドーリッシュ、こんなことで俺は捕まらんぞ！」
ハグリッドは襲っていた奴らをつまみ、投げ飛ばしていく。
「何ということを！」
（マクゴナガル先生？）
マクゴナガル先生が学校から出て校庭へ走っていた。
「おやめなさい！やめるんです！」
マクゴナガル先生の声が響く。
「何の理由があって攻撃するのです？何もしていないのに。こんな仕打ちを―」
しかしマクゴナガル先生は最後まで言わずに四本の呪文に当たり倒れた。
（まさか……まさか『失神呪文』か？）
サーッと血が引いていく感じがする。
マクゴナガル先生はダンブルドア程ではないが年は取っているのだ。
（…確か四本……だったよな？）
俺はもはや考える前に体が動いていた。塔から飛び降り、落下しながら両手を向かい合わせ不死鳥を呼ぶ。
「グラッド！」

『キュュュウ』という鳴き声と共に不死鳥―グラッドは俺の腕を掴んだ。
「校庭に頼む。俺を下ろした後はマダム・ポンフリーと数人の先生を呼んできてくれ」
『キュウ！』とグラッドは鳴いたのちに校庭へ向かってくれた。
マクゴナガル先生の近くへ着くとグラッドはすぐさま俺の腕を離した。そして学校へと消えていった。
地面までの距離もそんなになかったみたいで俺は大した衝撃もなく着地でき、マクゴナガル先生の元へ急ぐ。
マクゴナガル先生の元へたどり着いた俺はすぐさま容態を確認する。
（生きてはいるが……）
呼吸はしているので生きてはいた。だが年のせいか思っていたより容態が悪かった。
（『エネルベート』じゃ無理だな）
俺は杖をロープから抜き出し一振りした。どこかの馬鹿がこちらへ向かってきた呪文を放ってきたのだ。それを相殺させるために先程杖を振った。
呪文がこちらに来ることはなかった。見事に相殺出来たのだろう。
（『エネルベート』以外か…なら）
俺は小さく呪文を呟き、杖を振るった。
（これで応急処置にはなるはずだ）
後はマダム・ポンフリーやら癒者がどうにかしてくれる。
（ハグリッドは？）
ハグリッドはどうやら逃げているらしく、今はもう校門の近くにいた。
（後は……あの女か）
今ならもう、誰が見てようと構わない。あの四人共々瞬時に殺して―…
『キュウ！』
バサバサとグラッドは戻ってきて俺の頭に落ち着いた。

「ライカ、状況を説明しろ！」
グラッドは頼んだとおりにマダム・ポンフリーに数人の教師を連れてきた。
「セブルス、それより先にマクゴナガル先生だ」
マダム・ポンフリーはすぐさまマクゴナガル先生の容態を確認する。
「これは……」
「多分『失神呪文』です。四本くらっているので……」
「分かりました」
マダム・ポンフリーはセブルス以外の先生を使い、マクゴナガル先生を城へ運んだ。
「状況を説明しろ」
セブルスは先程より落ち着いて言った。
「俺達が『天文学』の実技試験を受けていたんだ。それは知っているだろ？だが試験中にあの女が四人の魔法使いを引き連れて校庭へ現れたんだ」
「四人？」
セブルスは疑わしいように聞いた。
「ああ。それでハグリッドを襲った」
「…成る程。その四人を連れていたのはそのためか」
セブルスは納得したように言った。
「ああ。ハグリッドは『半巨人』だ。だがら四人を連れたんだろうがその人数でもあいつらには無理だったな」
『巨人』は中々呪文が効きにくい。ハグリッドもその血が入っているのだから当然、効きにくい。
「んで、その騒ぎに駆け付けたマクゴナガル先生が……」
「四本の『失神呪文』に当たった、か。状況は分かった。でもお前テスト中だろ」
「あんなもんすぐに終わった」
先生が俺の羊皮紙も集めてくれてるだろ、と付け加えた。
「あー…フクロウで思い出した。セブルス、俺イモリ取るから前と

同じ事になるかもしれん。そうなったら頼むな」
「…分かった。まぁ滅多にないと思うが、許可しよう」
「…買い被り過ぎだな。俺だって時間に間に合わない時だってある」
「あいつらに邪魔されてな」
セブルスは嫌そうに言った。
俺はパタン、と地面に倒れる。
「ライカ？」
「はぁー…セブルス、それにしてもナイスタイミングで来たよ。本当に」
「……は？」
セブルスは間に合わなかっただろう？と言った。
「……いや、間に合った。もう少し遅かったら俺確実にあいつら殺してたし」
「……それは惜しかった」
セブルスは俺の腕を掴み起き上げさせた。
「さて、校内へ戻るぞ」
「そうだな」
俺はパンパンと叩き、歩き出す。
「あー…まだフクロウあるな」
「お前なら余裕だろう」
「いや、テストって疲れるだろ？」
「そこか。結果とか気にするだろう、普通」
「結果は分かってる。『占い学』以外は『優』だ」
「お前『占い学』ダメだったのか……」
「あれはどうしようもない。まぁ知識ぐらいならあるがな」
ロウェナやヘルガに叩き込まれたからな…だから『可』ぐらいならいくだろう。
「知識でどうにかなる学科ではないだろう？」
「『可』までならいくよ」
勘も使ってな、と付け加える。

「……よくそこまでいけるものだ」
セブルスはポツリとこう呟いていた。
きっとセブルスも出来ないんだろう。
（マクゴナガル先生…どうなるかな）
冷たい夜風がビュウビュウと吹き俺の髪を揺らしていた。

百十四話

マクゴナガル先生はマダム・ポンフリーに負えなかったのかどうか分からないが今朝聖マンゴ病院へと移った。
（…時間があれば見舞いに行くか）
俺は今最後のフクロウ、『魔法史』を受けていた。
（暇だな……）
最ももう書き終えたが。
俺がウトウトとしていたらハリーが何やら叫んだ。
俺はビックリして思わずガツンと額を机にぶつけた。
（いっ…た……）
額を摩りながらハリーの魔力を確認すると大広間から出て行っていた。
（何なんだ？）
「五分切りましたよ！」
監督の先生が時刻を知らせる。
試験が終わるのに時間はかからずにベルが鳴った後にすぐに先生は解答を回収して回った。
俺はハーマイオニーとロンと三人で大広間を飛び出し、ハリーを探した。
ハリーは廊下をトボトボと歩いていたが俺達に気づくと急いで駆け寄り、こう言った。
「シリウスがウ〝ォルデモートに捕まった！」
「えーっ？どうしてそれが？」
ロンが驚きながらハリーに尋ねる。
「ついさっき見たんだ。場所は神秘部に小さなガラスの球で埋まった棚がたくさんある部屋があるんだ。二人は九十七列目の棚の奥にいる……あいつがシリウスを使って何だか知らないけどそこにある自分の手に入れたいものを取らせようとしてるんだ……あいつがシ

リウスを拷問してる……最後には殺すって言っているんだ！」
ハリーはいつの間にか震えながら話していた。
（確証がなさすぎる…）
「僕たち、どうやったらそこへ行けるかな？」
ハリーはすでにシリウスを助けようと考えていた。
「ハリー、待て！」
「待て？シリウスは今にも拷問されているんだ！」
ハリーは大声で叫んだ。
「…少し待て。俺の言う事を聞くならば魔法省への行き方を教えてやる」
（危険だがハリーは何を言っても聞かないだろう。シリウスが捕まった、という夢を信じきっているからな…）
ハリーは俺の言葉を聞いて言った。
「本当に？」
俺はため息をついて言った。
「危険だがな」
「行く。危険でも」
ハリーは即答した。
「ハリー、まず何があっても責任を取れるか？」
「……責任？」
「あぁ。俺とハリー以外にハーマイオニーとロンも行くだろう？二人の責任を持てるか？」
「行くのは僕一人だ！」
ハリーは俺の言葉を聞いてこう叫ぶ。
「ダメだ。俺も行く。だが俺としてはハーマイオニーとロンには来てほしくない」
「僕も行くぞ！」
「私も行くわよ」
俺の言葉でハーマイオニーとロンはこう言い切る。
「だ、そうだ。どうする？」

「二人の責任を取ればいいんだね？」
ハリーの真剣な声を聞いてそんなもの取らなくていいわよ、とハーマイオニーは言った。
俺はニヤリと笑う。
「そんぐらいの覚悟があるならいい。さて、ハリーまず確認をしよう」
「確認？」
「ああ。始めにシリウスの確認だ。シリウスが捕まったって言うには夢じゃ証拠にならない。次にセ…スネイプ先生にもこの事を告げること。魔法省に行く事も告げれたら言う事。それと俺も同行することもな。その二つをしてから禁じられた森に行く」
「……分かった」
ハリーは渋々と認めた。
「何してるの？」
集まっている俺達にネビル、ジニー、あと…ル、ルーナ？が声をかけてきた。
「ちょうどいい。ネビル、協力頼んでもいいかな？」
「…僕？」
「ああ。ジニー達もいい？」
「ええ」
「うん。いいよー」
俺は三人を交えて言う。
「今からハリーはアンブリッジの部屋に用がある。部屋にハリーとハーマイオニーが入るからジニーとルーナ…は見張りを頼む」
「部屋に入ってどうするの？」
ネビルが不思議そうに聞いた。
「あそこは魔法省に見張られてない暖炉がある」
あいつは魔法省の役人だ。見張られる事はない。
「オッケー…ロンとネビル、ライカは何をするんだい？」
ハリーは俺の意図が分かったのか、返事をした。

「俺達はあいつを引き離す」
「オッケー…今からやるぞ！」
「い、今から？」
ハーマイオニーは驚いた声を出した。
「……分かったわ、ハリー『透明マント』を取りに行くわよ」
「その前にスネイプ先生にパッドフットが捕まったって伝えて―…って居ないし」
ハリーはハーマイオニーが了解したとたんにグリフィンドール寮へと走っていた。
「……ジニー、ルーナ頼んだ。ロン、ネビル行くよ」
俺達もアンブリッジを探しにその場を離れた。
アンブリッジを探して廊下を歩いているとロンから聞かれた。
「ライカ、君『不死鳥の騎士団』に入っているなら独自に連絡取れないの？」
「……あ」
「まさか忘れてたの？」
「……つい」
そういえばあったな。連絡手段。
「ならこんな事しなくて良かったよな？」
だがもう他の生徒達も動いている。
「…仕方がない。やるぞ」
必要になれば後で取ればいい。一応セブルスに伝えるようにも頼んでいるのだし。
「分かった。でも―」
「しっ……ロン、アンブリッジがいる」
ロンが何かを言おうとした時にアンブリッジがちょうど俺達より先の廊下から現れた。
「ホントだ。ライカ、ネビル、行くよ！」
「は…？ロン！」
ロンは俺の制止を聞かずにアンブリッジの元へ行った。

俺はため息をついた後にネビルに声をかける。
「……ネビル、行くよ」
「う、うん」
俺とネビルはロンのあとを追った。
だが何故だかアンブリッジは俺達が近づいた途端にロンを捕まえた。
…らしい。
「ライカ、ロンが捕まっちゃたよ！」
「……は？」
そしてアンブリッジはロンのあとを追ってきた俺達を呪文にて素早く縛った。
「ロン……状況が分からない。何で捕まったの？」
「僕も分からない。何で？」
俺達は仲良くアンブリッジに連行された。
アンブリッジは部屋に行く前に『親衛隊』を連れてきて部屋へ向かった。
（何があってもいいように、か）
部屋の前でジニーとルーナも捕まり、部屋の中でハリーとハーマイオニーが捕まった。
あいつはみんながいる中で猫撫で声みたいな声で言った。
「先程ウィーズリーからピーブズが『変身術』の教室で物を壊している、と聞きました。残念ながらピーブズは望遠鏡のレンズを塗りたくっているとフィルチさんから聞いていたの。こいつらは貴方が差し向けたのよね？ポッター」
（ロン！？）
なんて事を言ってしまったんだ…
（悪戯で時間を稼ごうと思っていたのに…）
ロンの一言で捕まったのか、俺達は。
「貴方が誰かと連絡をとる事は分かったていました。誰と取っていたの？ダンブルドア？ハグリッド？ミネルバ・マクゴナガルはまだ弱っていますから違いますね」

「誰と話そうが関係ないだろう？」
ハリーは唸るように言った。
「自発的に言わないなら強制的に言わせるまで。ドラコ――スネイプ先生を呼んできなさい」
マルフォイは部屋を出て行った。
部屋には捕まった奴から逃れようとする音しか聞こえなかった。俺は捕まった奴の近くで座っているだけだがな。
（そう言えば…）
「ジニー、俺が頼んだのやった？」
俺はジニーに聞く。
「ああ！課題？やってないわ。難しかったもの」
「そっか……」
ジニーは上手く課題に例えて伝えてくれた。
（伝えてないか…キツイな）
「校長、お呼びですか？」
セブルスがこう言って部屋に入ってきた。
「ああ、スネイプ先生。『真実薬』をまた一瓶欲しいのですが、なるべく早くお願いします」
「最後の一瓶をポッターを尋問するのに持っていかれましたが。まさかあれを全部使ってしまったということはないでしょう？三摘で十分だと申し上げたはずですが」
それを聞いたアンブリッジはセブルスに甘く言った。
「もう少し調合していただけるわよね？」
「もちろん。成熟するまでに満月から満月までを要するので、大体一ヶ月で準備できますな」
「一ヶ月？私は今夜必要なのですよ、スネイプ！ポッターは誰かに連絡を取っていたの。こいつを尋問したいのよ！」
「すでに申し上げたとおり、『真実薬』の在庫はもうありません。毒薬を飲ませたいなら別ですが」
セブルスはアンブリッジにこう言った。

（嘘……かな？）
いつ必要か分からないからセブルスは大概無くなったらすぐに作りストックを作り、置いている。最低一瓶は。
（前俺が貰った時は次の日に貰った魔法薬を作っていたしな…）
だから最低でも一瓶はあるはずだ。最も尋問とやらが一ヶ月内に行われたなら本当に在庫が無いんだろうが。
「あなたは停職です！」
アンブリッジは金切り声で言った。
「あなたはわざと手伝おうとしないのです！もっとましかと思ったのに。ルシウス・マルフォイが、いつもあなたのことをとても高く評価していたのに！さぁ、私の部屋から出て行って！」
（我が儘女王かよ！何がわざとだ！）
真実薬が一ヶ月かかるのは本当だ。あんな強力な魔法薬がすぐに出来るわけないだろう！
「あの人がパッドフットを捕まえた！」
ハリーは叫ぶ。
「あれが隠されている部屋で、あの人がパッドフットを捕まえた！」
ハリーは出て行こうとしているセブルスに向かって叫んだ。
（よし、これでセブルスには伝わった）
後はセブルスが確認をしてくれる。
俺達が行く事を伝えられないがまぁセブルスなら分かってくれるだろう。
（後は……）
「スネイプ先生、もう少し力をつけないとあれは多いですよ？」
俺はセブルスに向かって言った。
「パッドフット？あれ？スネイプ、こいつらは何を言っているの？」
アンブリッジはセブルスに聞く。
「ポッターのはサッパリと分かりませんな。ただヒブカのは魔法薬の事でしょう。この前、魔法薬の本を持ってきて作れるか聞かれましたから」

「本当ですか？ヒブカ」
アンブリッジは俺へと聞いてきた。
「はい。魔法薬学の本の中で分からないものがあったのでそれを聞いたついでに作れるか聞きました。本物を見たことありませんでしたし」
セブルスは鼻で笑った。
「お前が心配などせずとも我輩は今のままで作れる。疑うならば今度見せてやるから我輩の部屋までこい」
「分かりました。先生。今度伺います」
「始めに伝えておく。我輩は忙しいので遅れていくかもしれん」
（遅れてくる…か）
「分かりました。必ず来てくださいよ。あまりにも遅いと野垂れ死にますから」
セブルスは再び鼻で笑った。
「そこまで我輩が遅れると？馬鹿にしているのかね？」
「いいえ」
「どうだかな……ポッター、我輩に向かってわけの分からんこてを喚きちらしてほしいときは君に『戯言薬』を飲用してもらおう。それからクラップ、少し手を緩めろ。ロングボトムが窒息死したらさんざん面倒な書類を作らねばならんからな。しかもおまえが求職するときの紹介状に、そのことを書かねばならなくなる」
セブルスはこう言って部屋を出て行った。
（セブルスが援護の人数もこれで寄越してくれる事が分かったな）
「いいでしょう。この件は学校の規律の枠を越えてます…ポッター、あなたがさせているのですから」
アンブリッジはハリーに杖を向ける。
「『磔の呪い』なら舌も緩むでしょう」
俺は自分の耳を疑った。『磔の呪い』だと？教師が生徒に？
「やめて！魔法大臣も望んではいないわ！」
ハーマイオニーが叫ぶ。

「知らなければいいのよ。コーネリウスは実際に私があなたに吸魂鬼を送り込んだ事を知らないもの」
（こいつが？ウ〝ォルデモートじゃなく？）
そんな奴がよく役人になれたな？
「クルーシ――」
アンブリッジがハリーに磔の呪いをかけようとしていた。
（くそっ、仕方がな―）
「やめてーっ！私、私教えるから」
ハーマイオニーが叫んだ。
「ほう、ほう、ミス何でも質問のお嬢さんが答えをくださるのね！さぁどうぞ、お嬢ちゃん、どうぞ！」
アンブリッジはハリーからハーマイオニーへと向きを変えた。
「みんな――みんな、ごめんなさい。ハリーは何とかしてダンブルドアと話そうとしていたの」
（成る程…嘘か）
アンブリッジは猫撫で声で聞いた。
「ダンブルドア？それじゃダンブルドアが何処にいるのか知っているの？」
「南極です」
俺はサラリと答えた。
「な、南極？」
アンブリッジは疑わしいように繰り返した。「はい。南極ならば魔法省は追ってきません」
「でも暖炉は使えないでしょう？」
「ダンブルドア先生なら暖炉くらい何とかすると……思っていたんですが……」
「つ、繋がらなくて」
ハーマイオニーが泣きそうな声で俺のあとを継いだ。
（すごい演技だな）
「だ、ダンブルドア先生にどうしても、ぶ、武器が出来たって伝え

たくて」
「武器？武器？」
アンブリッジが興奮したように聞いた。
「は――はい。わ、私達は詳しくは分からないわ。い、言われたとおりにつ、作っただけだから」
（ヤバイ……笑いそう）
アンブリッジの食らいつきように笑いそうになるのを必死に堪える。
「武器のところに案内しなさい」
「は、ハリーも一緒に…私、覚えているか不安で……」
「分かりました。ポッターとあなた、それに私に親衛―」
「そ、その人達は連れてこないで！」
ハーマイオニーはアンブリッジの言葉を遮った。
「あ、あの人達が勝手に武器を使って私達にう、打つわ。とっても、とっても威力が大きいのに！」
「分かりました。私とあなたとポッターで行きましょう」
アンブリッジがハリーとハーマイオニーを連れて部屋を出て行った。
それならはもう反撃が早かった。俺が何もしなくても『失神呪文』、『武装解除』、『妨害の呪い』などＤＡで鍛えた四人はあっというまに残された『親衛隊』を倒した。
（逞しくなってもんだな）
「ハーマイオニー達は森へ行ってる！」
ロンが窓から見たのだろう、こう言った。
「早く合流しないとな」
俺達はアンブリッジの部屋から出て禁じられた森へ向かった。
森へついて中を散策しているとハーマイオニーとハリーに会った。

「ライカ、やっぱりシリウスは捕まってた。早く行かないと！」
「捕まったか……」
（……ん？血の臭い？）
俺は血の臭いがしたので二人に聞いた。
「血の臭い……怪我した？」
「いいえ……ちょっとね」
ハーマイオニーはハッキリと言わなかった。
（ま、いいか。好都合）
「君達、何処かに行くの？」
ネビルが聞いてきた。
「あいつに喧嘩を売りに」
俺は適当に言う。
「じゃあ僕達も行く！」
「ダメだ！」
ネビルの言葉を聞いてすぐさまハリーが拒否した。
「アンブリッジじゃないんだ！」
「じゃあ誰なの？」
ジニーはハリーに聞いた。
「ウ〝ォルデモートだ。だから君達はついてきてはいけない」
「それなら尚更行かないとねー」
ルーナの言葉にハリーはキッパリと言う。
「ダメだ。これは遊びじゃ―」
「何の為のＤＡだったの？あの人に対抗するためでしょ？」
ネビルがハリーにこう言った。
「……好きにすればいい！」
ハリーはこの言葉に折れて一緒に行く事を許した。
「じゃあ行く前に行っとく。向こうにはウ〝ォルデモートやら『死喰い人』やらがいると思う。流石の俺でも皆を庇うとか出来ないから全て自分で守って戦ってね。あと死ぬ覚悟もしといてね。嫌ならまだ下りれるよ？」

誰も動かない。
ハリーはそれを見てから俺に聞いた。
「どうやって行くの？こんな大人数で」
俺は瞬時に答える。
「セストラル」
あっとハーマイオニーが言った。
「そろそろ人数分くらいは来るよ。大分時間たったし、君達血生臭いしね」
「血生臭いのが何か関係あるの？」
ハリーは血生臭いに疑問を持ったのか俺に聞いてきた。
「セストラルは肉を食べてたからね。血の臭いで来るよ。……ほら、来た」
森の奥地にいただろうセストラルが七頭こちらへと来ていた。

百十五話

『クルル…』
（おや？この魔力は確か―）
ハグリッドの授業中俺の隣にいたセストラルかな？
「君、ハグリッドの時いた子だよね？」
スリッと頭をなすりつけてきた。
「ああ、やっぱり」
俺はセストラルの頭を撫でる。
「今日は君達に頼み事があるけどいいかな？」
『クル……』
セストラルは頭を離した。
俺はそのセストラルに乗る。
「皆乗った？」
「こんなものどうやって乗るんだよ」
「あら、簡単だよ」
ロンが言った言葉にルーナが答え、ルーナはロン、ハーマイオニー、ジニーが乗るのを手伝っていた。
（へー…あの子も見えるんだね）
「さて…ロンドンにある魔法省来訪者入口まで頼むよ」
『クル……』
セストラルは両翼を広げ一気に急上昇した。
セストラルがもうスピードで飛んで行く中悲鳴が聞こえる。
（煩いっ…）
たかだかセストラルが見えないくらいで煩いな……こっちはずぅっっと前から真っ暗なままだっての！
もうスピードで走っているセストラルはそのまま急に前屈みみたいに下がっていく。
（そろそろか…）

セストラルはふわりと地面についた感じがした。
俺はセストラルから降りる。
「ありがとう。ホグワーツへ戻っててくれるかな？」
『クルル……』
全員がセストラルから降りた後にセストラルはホグワーツへ向けて去って行った。
「さて……行こうか？」
俺達はハリーを先頭に近くの電話ボックスに入った。
その電話に魔法省へのダイヤルを回し、コイン返却口から出てきたバッチを付けたらようやく魔法省への入室の許可が下りた。
電話ボックスがガタガタと揺れて、地下へと下がって行った。
ボックスが開くと同時に俺達は一斉に外へ出た。
（確か杖の検査があるって聞いたが…）
しかし歩いていても検査する人がいない。
（……しなくていいって事だな！）
俺達は魔法省のエレベーターに乗り『神秘部』がある九階をハリーが押した。
ガラガラとエレベーターが開き九階へ着いた。
「行こう」
ハリーのこの言葉で皆がエレベーターから出始めた。
ハリーが『神秘部』の扉を開き、中へ入っていく。扉は最後のネビルが閉めた。
しばらく歩くと少し広い場所につき回りに扉がいくつもついてるらしい。
ハリーが始めに近くにある扉を開く。
そして閉めた。
「中に脳みそがあった」
ハリーが言った言葉に誰も質問せず、ハーマイオニーがハリーが出てきた扉に焼印を付けた。
「これなら何処に入ったか分かるでしょ？」

「いい考えだよ」
ハリーがハーマイオニーの言葉にこう言った。
（俺分かんないですけど……）
いざとなれば『姿くらまし』をすればいいか。
次々と扉を開けていくが違うらしく入っては出るの繰り返しだった。
（……シリウスの魔力がないな？）
シリウスの魔力がないってことはいないって事になる。
だがもう何回目の扉か分からなくなったが開けた扉が当たったらしくハリーが「ここだ！」と叫んだ。
（言っても聞かないだろうし……別にいいか）
可愛い子には旅をさせろって言うし。
どんどん先へ行くハリーに後をついていく。
ハリーは一度右に曲がりまたズンズンと歩いていく。
「ここだ……」
先に歩いていたハリーがこう言って立ち止まった。
「どこか……このあたりだ」
ハリーは少しずつ歩いていく。
「シリウスはもしかしたら……」
ハリーはこう言いながら辺りをウロウロする。
「ハリー……ここにはシリウスはいないと思うけど」
ハーマイオニーがハリーを伺うように聞いた。
しばらく各自でウロウロとシリウスを探したが見つける言葉出来ずに誰も何も話さなかった。
静寂が続く中、ロンがハリーを呼んだ。
「ハリー？」
「なんだ？」
ハリーはふて腐れたように答えた。
「これ――これ、君の名前が書いてある」
ハリーはロンの近くへと寄って行った。
ハリー以外にもハーマイオニーやネビル、ジニーはロンの近くへと

寄りその辺で何やら会話をしていた。
（……ん？別の魔力？）
「よくやった、ポッター。さぁ、こっちを向きたまえ。そうら、ゆっくりとね。そしてそれを私に渡すんだ」
俺が魔力を感じたと共にハリーの後ろには『姿現し』をした死喰い人がいた。

百十六話（前書き）

悲しい事にテスト期間に入ります。
よって恒例?更新が二日に一話になります。
更新日は下の通りです。
１０日、１２日、１４日、１６日、１８日、２０日です。
２０日がテスト最終日なのでその日から元に戻し、毎日更新していきたいと思います。
更新が少し遅くなりますがこれからもよろしくお願いします。

百十六話

続々と死喰い人達は『姿現し』をして集まってくる。
集まった『死喰い人』はハリー達を囲み、一人だけ俺の後ろに立っていた。
「私に渡すのだ、ポッター」
「シリウスはどこにいるんだ?」
ハリーの質問に数人の死喰い人達が笑う。
「シリウスがどこにいるか知りたいんだ!」
ハリーは笑っている死喰い人達を無視したのか同じ事を聞いた。
俺はハリーに言う。
「ハリー……いい加減に分かるだろう?俺達は嵌められたんだ」
「そいつの言う通だな。いい加減現実と夢との違いが分かってもよいころだな?ポッター。さぁ予言を渡せ。さもないと我々は杖を使うことになるぞ」
「使うなら使え。ただ僕達の誰かを襲えばこれを壊すことになるぞ。手ぶらで帰れば、おまえたちのご主人様はあまり喜ばないだろう?」
ハリーは死喰い人にこう言った。
「それで――それでこれは何の予言なんだ?」
「ダンブルドアは、お前が額にその傷痕を持つ理由が、神秘部の内奥に隠されていると、お前に話していなかったのか?」
死喰い人は逆にハリーに質問をする。
「僕が――えっ?僕の傷痕がどうしたって?」
「あろうことか?」
死喰い人達は笑い出す。
「ダンブルドアはおまえに一度も話さなかったと?」
死喰い人はなお続ける。
「……成る程、ポッター、おまえがもっと早く来なかった理由が、これでわかった。闇の帝王はなぜなのか訝っておられた。その隠し

場所を、闇の帝王が夢でおまえに教えたとき、なぜおまえが駆けつけてこなかったのかと。闇の帝王は、当然おまえが好奇心で、予言の言葉を正確に聞きたがるだろうとお考えだったが…」
「そう考えたのかい？あいつは僕がそるを取りに来るように望んでいた……どうして？」
「どうしてだと？」
死喰い人は驚いたように言った。
「神秘部から予言を取り出せるのはその予言にかかわる者だけだからだ」
「それなら、どうして僕に関する予言を盗もうとしたんだ？」
「二人に関するものだ、ポッター。二人に関する……おまえが赤ん坊のとき、闇の帝王が何故おまえを殺そうとしたのか不思議に思ったことはないのか？」
ハリーは静かに聞いた。
「誰かがウ〝ォルデモートと僕に関する予言をした？―でもそれならあいつは自分で取りに来ない？」
「闇の帝王が魔法省に入り込む？省がおめでたくあの方のご帰還を無視しているのに？闇祓い達の前に闇の帝王が姿を見せる？」
（声が高い……女か）
死喰い人は今だハリーに話しかけている。
「いまだ！」
ハリー達は死喰い人達の話しの間に粉々呪文を使った。
（俺にも教えてほしかったなっ！）
俺は咄嗟に右へ飛び、後ろからの攻撃を避けた。
「ステューピファイ！麻痺せよ！」
俺は死喰い人目掛けて放った。
『失神呪文』は見事に死喰い人に辺り、倒れた。
（逃げないとな…）
俺はとりあえず前方へ走った。
（くそっ……扉の場所が分からねぇ）

走りながら俺目掛けて放たれた呪文を相殺したり、死喰い人に呪文を放ったり、回りに何かあると信じ適当に回りに呪文をぶっ放していた。時々ガラガラガッシャーンと何かが倒れ、割れるような音がしていたので何かに当たっているのだろう。
その前走っているとドッカーンとぶつかり、空へと放り込まれた。
（……扉があったのか）
ドスンと床に落ちる。
「何だ、お前一人か？」
しゃがれた声で死喰い人が話しかけてきた。
（老人か、だが…）
手加減はしない！
「だからといって手加減はせんからのぉ」
「「ステューピファイ！」」
ドーンと音が響き、呪文は相殺された。
「ほぅ……よくやる小童じゃな」
「小童はお前だろう！」
俺は死喰い人に失神呪文を使う。
「プロテゴ！」
しかし盾の呪文でふさがれた。
「あの方が一目置くはずじゃ。強いのぉ」
これでもわしはかなりの腕前なんじゃかのぉと死喰い人は言う。
「簡単だ。経験の違いだなっ」
俺は失神呪文を放った。
「同じ手は通用せん！」
死喰い人はまたもや盾の呪文でふせぐ。
「同じ手？そんなわけないだろう？」
俺は普通の失神呪文の倍の魔力を込め、死喰い人目掛けて鋭くついた。
「ぐっ……」
呪文は普通の光線の倍のスピードで相手に当たった。

「あまり早打ちは得意じゃないんだかな……」
まぁ相手は倒れたしいいか。
俺は不意に思い出す。
「そう言えばここは何処だ？」
戻ってもそこからハリー達の元へいけるか分からない。ならば…
「何時かと同じ事をするか」
俺は壁に向かって杖を向けた。
（燃やすか粉々にするか…）
燃やしたら後が大変になるかな？
俺は粉々呪文を使う。
「レダクト！」
ドウッという音をたてて壁が崩れる。
（さて、適当に行きますか）
前、右、左適当に粉々呪文を使い壁を壊して進む。時々死喰い人に会ったが早打ちを使い失神させていった。

（……殺していいかな？）
何人倒したか分からないがいい加減死喰い人に殺意が沸いて来た。
（何回かに一人はぶち壊したところにいるし…）
だだいま俺の前でギャーギャーハリーは何処だと騒いでいる死喰い人と交戦していながらついため息をついた。
（…面倒だな）
俺は早打ちを使い、魔力をかなり込める。
「レダクト！」
死喰い人は反応出来ずに粉々呪文をくらった。そしてかなりの魔力を込めたので死喰い人を巻き込んだまま後ろの壁を壊し、次の部屋

の壁に死喰い人は激突した。
俺は次の部屋に入る。
「ラ、ライカ？」
ハリーが怖ず怖ずと声をかけた。
「ハリー？……わぁお、皆捕まったんだね」
ハリー以外の皆は死喰い人に捕まっていた。
「んー……おや？」
俺の言葉の後に騎士団のシリウス、リーマス、ムーディー、トンクス、キングズリーが入ってきた。
（何とか間に合ったね…）
俺と騎士団メンバーは瞬時に他の生徒を捕まえていた死喰い人を攻撃した。
死喰い人は呪文を避けるために生徒から離れる。
そこから騎士団メンバーと死喰い人との戦闘に入り、呪文の嵐となっていた。
（ハリー達は…逃げてるね）
俺は横から打たれた呪文を杖を振り相殺した。
「よそ見とは余裕だな！」
そんな声と共に俺に向かって呪文が放たれた。
俺はそれを左へと避けて素早く失神呪文を放ち相手を失神させる。
「ダブルドー！」
ネビルが叫んだ事により戦っていた死喰い人達はダンブルドアに気づいて逃げ出した。
（……ん？シリウス？）
死喰い人はダンブルドアが見逃さないから俺は今だに戦っているシリウスの元へと走った。
シリウスはちょうど死喰い人の攻撃を避けたところだった。だが敵はもう第二撃のため魔力を込めていた。
（やばいっ！！）
俺は瞬時に魔力を込め早打ちの『武装解除』を打った。

「さぁ、来い。今度はもう少しうまくやってくれ！」
シリウスがこう言った後にドンッと言う音が響いた。

百十七話

ドンッという音が響いた後にシリウスは倒れていた。
（間に合わなかったか？……いや）
俺はギュッと拳を握る。
（倒れてやられたフリしてやがる！！）
シリウスの魔力は消えていなかった。ギリギリ俺の放った呪文が間に合っていたのだ。
だが俺以外は気づいていないみたいだった。いや……あの爺は気づいているだろう。
「きゃゃぁほぉぉい！殺った、殺った、ブラックを殺ったぁぁぁ！！」
（この声はベラトリックスか……）
こう叫びながらベラトリックスは逃げて行った。
「あいつが、あいつがシリウスを殺した！あいつが！」
ハリーが怒鳴る。
「あいつが殺した―僕があいつを殺してやる！」
「ハリー、止めるんだ！」
ハリーはリーマスの注意を聞かずに飛び出して行った。
「ライカ、この場を頼んじゃぞ！」
ダンブルドアはそう言ってハリーを追いかけて行った。
バタバタという足音も消え、部屋は静まり返る。
「で、どう責任をとるつもりだ？シリウス？」
俺がシリウスに言うとリーマスが俺に言ってきた。
「ライカ、シリウスは―「生きてるよ」……は？」
俺はリーマスの言葉を遮って言い、シリウスへ近づいた。
「謝るくらいはするよな？駄犬？」
俺は握っていた拳をシリウスの頭目掛けておもいっきし振り落とした。

「いっっでぇぇぇ」
シリウスは叫びながら立ち上がった。
「何すんだっ、ライカ！」
「君は人の事言えないよね？むしろあの呪文を相殺したライカにお礼を言う立場だよね？間違っても殴られたからって逆に怒ったりしないよね？ね、シ・リ・ウ・ス？」
リーマスはシリウスに向かってどす黒い何かを飛ばしながら言った。
「ス、スミマセンでしたぁぁぁぁ」
シリウスは地面に頭をつけて謝る。
「すみません？それだけで済むと思ってる？君が趣味の悪い悪戯をしたおかげでハリーはキレて死喰い人を追っていっちゃったよ？知っているだろうけどね？そして僕からも言わせて貰うね？どう責任を取るの？」
きっと今リーマスの回りは氷点下に近いぐらい下がっているだろうな。
「いや……ホント、スミマセンでした」
シリウスは再び頭を地面につける。
「……リーマス、この駄犬を煮るなり焼くなりしていいからさ、その黒い何かを出すの止めてくれる？近くにいるネビルがこっちまで震えてる音が聞こえる程怯えているからさ」
ネビルはさっきからこちらまで聞こえる程震えていた。
「ライカぁぁぁ、俺を見捨てな――ぶっ」
俺に縋り付いてきたシリウスを蹴飛ばし、踏み付ける。
「で、リーマスどうする？」
「そうだね。このままじゃネビルが可哀相だからライカの言う通りにしまってあげる。けれど今からそちらに向かうからそれ、離さないでね？」
「分かった」
シリウスはビクリと体が動いた。
「え？ちょ……リーマス？ライカ？」

「シリウス……死ぬなよ？」
「嘘だろ……」
シリウスはガタガタと怯え始める。
「嘘じゃないよ。覚悟はいいよね？シリウス？」
「ぐぇ……」
リーマスはこう言いながら既にシリウスを踏んでいた。
「じゃリーマス、殺るか？」
「そうだね。シリウス……死なない程度にするから、大丈夫だよ？」
「トンクス、ムーディー、キングズリーィィィ……助けてくー」
「「煩い、駄犬」」
「「「自業自得」」」
「ぐはぁ……」
騎士団に助けを求めるために叫んだシリウスを俺とリーマスはおもいっきし踏んみ、騎士団メンバーは切り捨てた。
「ちょっ……おまえら力強く踏みすぎ」
「…何か聞こえた？リーマス？」
「何も聞こえてないよ」
「そっか。俺の気のせいか」
「うん。駄犬が犬語を話しただけだよ」
「成る程」
「成る程じゃねぇぇぇぇ……ぐわぁ……ちょ……ス、スミマセンでしたぁぁぁぁ」
シリウスが泣き叫ぶものの無視。
「う……うぎゃぁぁぁぁぁぁ」
シリウスの叫び声が虚しく響いた。

「何であんなにシリウスはボロボロなんじゃ？」
ハリーを回収して戻ってきたダンブルドアが始めにこう言った。
「さぁ？」
「僕も分かりません」
「あたしもー」
「知らんな」
「何も知りません」
「……嘘じゃろう？」
ダンブルドアは俺達、騎士団メンバーに言う。
「なら、ネビル達に聞いたら？シリウスが何であなったか知ってる？」
「し、知らないっ」
「知らないわ」
「あたしも知らないかなー」
「僕も分からないよ」
「私もよ。何でなのかしら？」
「だってさ。シリウスが自分でしたんじゃない？」
「どう見ても自分で出来る範囲を過ぎているじゃろぉぉ！？」
「そんな事言われても知らないものは知らない」
シラをきる俺達にダンブルドアはため息をついた。
「全く……皆、ご苦労じゃった。生徒を先に帰そうかの」
「あー…俺は寄りたいところに勝手に寄るんで迎えをお願いします。どうせ魔法省に説明しに此処に来なきゃ行けないだろ？」
「図々しい―……何でもない。ではライカ以外を先に医務室へ送ろうかの」
ダンブルドアは『移動キー』を作りネビル達をホグワーツへ送った。
「タツキ、寄りたい所って？」
リーマスが俺に聞いた。
「秘密」
「教えてくれてもいいだろうが」

シリウスがフラフラと立ち上がり言った。
「あぁ……まだいたんだ」
「なんだそれ!?俺さっきそこで倒れていたよな?」
「じゃ俺はそろそろ行こうかな」
「僕はグリモールド・プレイスに戻って寝よう」
「うむ。リーマス、わしも戻る」
「あたしもー!流石に疲れたし」
「ダンブルドア、私は先に魔法省へ赴こう」
「うむ。キングズリー、頼む」
「なぁ、皆して無視?俺の事無視してるよな?」
「皆、お疲れじゃった。会議はホグワーツが夏期休暇に入ってからじゃ」
「おー、分かった。じゃあお疲れ様ー」
「お疲れー……じゃ、リーマス、ムーディー、帰りましょう」
「ああ」
「うん。そうだね」
「お疲れ様。さて、魔法大臣に会わなければ…」
「うむ。わしも先にホグワーツへ行かなければのぉ。ハリーが待っておる」
「孫馬鹿だな」
「つい可愛いくての」
全員シリウスを無視してリーマス達はバチンと『姿くらまし』をして帰り、キングズリーは上へと向かうために出て行った。
「じゃ迎え頼む」
「彼女のところじゃろう?」
「あぁ」
「うむ、分かった。わしも会いたいからのぉ」
「早く行け、爺。ハリーが癇癪でも起こしているだろうよ」
「……そうじゃな」
「部屋の物でも壊されればいい」

俺はこう言って歩きだす。
「……それは嫌じゃ。それではまた会おう」
ダンブルドアもこう言って『姿くらまし』をした。といってもホグワーツには直接しないから何処かへ寄るのだろう。
俺もギィィとキングズリーの後を追って行った。
「俺の事最後まで無視ぃぃぃぃ！？」
俺の後ろでシリウスの叫び声が虚しく響いた。

百十八話

トントンと静まり返る夜の街を歩いている。
（……もうそろそろだと思うけど）
夜風が足元をビュウビュウ吹きぬける。
（此処か……？）
壁に手を付き目的地かどうかを確認する。此処が聖マンゴかどうかを。
「此処だな。さて……忍び込むか」
俺は入り口をコッソリと音を立てずに入り込む。
（……確か、五階だっけ？）
俺は足音を立てずに階段を上る。
（こういう時は昔の経験が役立つよな）
五階にたどり着いたが部屋が分からなかったので壁に手をつけて探る。
「何をしているんです？それに今は見舞いの時間でもありません」
「……マクゴナガル先生」
俺の後ろにマクゴナガル先生が立っていた。俺はマクゴナガル先生に向き合う。
「……お元気そうですね？」
「ポンフリーのおかげで早く目を覚ます事が出来ました」
ああ、貴方も治療してくれたみたいですね、とマクゴナガル先生は言った。
「まだ体を動かすのはキツイですがどうしてもトイレに行きたくなったので行ってみれば帰りに貴方と会うなんて……」
マクゴナガル先生はため息をついた。
「学校はどうしたのですか？」
「あはは……話しが長いので病室で話します」
「話しが長い？貴方達またもや何か校則違反をしたのですか？」

マクゴナガル先生が厳しく言った。
「あ……はは」
「全く、貴方達は…」
マクゴナガル先生はため息をつく。
「特に貴方は……」
マクゴナガル先生は言葉を切った。
「マクゴナガル先生？」
「……いや、何でもありません」
マクゴナガル先生は歩きだす。
「ついてきなさい。どうせ病室の場所を聞いていないのでしょう」
「……はい」
俺はゆっくり歩くマクゴナガル先生について行った。
病室につくとマクゴナガル先生はベットに腰掛けた。
「貴方も座りなさい。椅子がありますから」
俺は側にある椅子に腰掛ける。
「さて、貴方達の校則違反の話しでも聞きましょうか」
「……今日、最後のフクロウで―」
俺は今日受けた『魔法史』のフクロウテストから話し、ハリーがシリウスが捕まった夢を見た。そしてフクロウが終わったとたんにハリーが助けに行くと言ったので確認を取る事とセブルスに言う事をハリーに強く言った事。そしてセブルスに伝える前にアンブリッジに見つかり、やむを得ずシリウスを助けるために魔法省へ向かったが魔法省にシリウスはおらずウ〝ォルデモートの罠にかかってしまい先程まで騎士団メンバーと一緒に戦闘をしていた事を話した。
話し終えた時にマクゴナガル先生は口を開いた。
「貴方がいたにしては随分と軽率ですね」
（うぐっ……）
確かにいつもの俺ならばまだ慎重に行動するかも知れない。
（どこかで俺も焦っていたのかもな…）
「ですが周りが見えていないポッターに確認やセブルスに伝える事

などを進言するくらいはまだ貴方は周りが見えていた、と言う事ですね」

ポッターにそれを言い聞かせるだけでも大変だったでしょう　？とマクゴナガル先生は言う。

「……それでも判断したのは俺ですから」

「そうですね」

マクゴナガル先生は俺の言葉を肯定した。

「ですが……本当によくやりました。貴方もポッターも。それからウィーズリーやグレンジャー、ロングボトムにラブグッドもですね」

マクゴナガル先生は帰ったら点を与えましょう、と付け加えて言った。

「……はい？」

「点ですよ。今年はあの人のおかげでグリフィンドール寮の砂時計は空っぽですから」

空っぽなのはグリフィンドール寮だけですからあの人がどれ程この寮を嫌っていたか分かりますよね、とマクゴナガル先生は同意を求めてきた。

「あー…確かに嫌ってましたね。ですが良いんですか？」

「何がですか？」

「先生の事ですから一人五十点とか入れるんですよね？そうなれば―」

「誰も文句は言いませんよ。いいえ、言わせません」

マクゴナガル先生はキッパリと言い切った。

「その心配は無用じゃ」

スウッと幽霊みたいに足音を立てずにダンブルドアが病室に入ってきた。

「無用？」

「魔法省がウ〝ォルデモートの復活を認めたんじゃ。アンブリッジ先生もその点数には文句を言えぬじゃろう」

「……認めたか」

「うむ。じゃから何人は来学期から来なくなるかもしれぬ」
空気が暗く沈む。
暗い空気の中、マクゴナガル先生が口を開いた。
「そんな事をしなければ良いんですが……各家庭にいるよりもホグワーツの方が安全です」
古くからの魔法で守られていますから、とマクゴナガル先生は言った。
「だからと言ってホグワーツが襲われないとは限りませんよ」
最も、そんなことをしたら即座に殺しますが、と俺は付け加える。
「そうなったら全力で戦うまでじゃ。……さてタツキ、帰ろうかの？」
「……そうだな。マクゴナガル先生、今日はもう帰ります」
「分かりました。私も明日には退院します」
マクゴナガル先生はサラリと言った。
「……は、早くないですか？」
「何を言っているのです！私は一刻も早くホグワーツへと帰り、教師を復帰します！」
「……そうですか」
「ええ。タツキ、アルバス、お見舞いありがとうございます」
「うむ、元気みたいでよかった。それでは明日、ホグワーツにてまた会おうぞ」
「もう帰ってくるのか……先生また明日ー」
俺はマクゴナガル先生にヒラヒラと手を振る。
「タツキ、それは戻ってくるなと言いたいのですか？」
「と、ハリーが言ってました。では、また明日」
俺はハリーになすりつけてからダンブルドアと聖マンゴを後にした。

百十九話

魔法省の出来事は翌日に『預言者新聞日曜版』にすぐに掲載された。
「うわー…本当に魔法省認めたよ」
俺はその新聞を広げ読み取っていた。……病室で。
「……何故貴方は此処にいるのですか？」
退院手続きを終えたマクゴナガル先生が病室の扉に立っていた。
「休みとは言えホグワーツから出ては行けないでしょう？」
「ダンブルドアから許可はもらいました」
俺は新聞を畳む。
「ダンブルドアがマクゴナガル先生も年だから一人では大変だろう、って言って此処まで連れて来てもらいました。グリフィンドール寮生代表って事で」
「別に貴方でなくても……というか貴方だと何かと誤解されますが」
マクゴナガル先生の声が少しイラついていた。…ダンブルドアが説教されるかな、これは。
「……誤解？」
「私に子供はいません」
あー…そう周りから見られるのか。
「……仕方ないですね。『姿くらまし』で帰りますか」
「どうやったらそんな結論になるのですか？」
マクゴナガル先生は聞いてきた。
「ホグワーツ特急を手配してもらったんですがそこまで行くのに……」
マグルが沢山いるんだよね。特に今日は休みだから。
「ですが『姿くらまし』ではホグワーツへ直接出ません。ですから―「出来ますよ。俺」……はい？い、今なんと？」
俺はマクゴナガル先生に話しをする。
「あの『姿現し』や『姿くらまし』を妨害している魔法ですがそも

そもかけたのは俺達ですので俺達は普通にホグワーツへ『姿くらまし』や『姿現し』は出来るんですよ。まぁ滅多に使いませんが」
後緊急時に校長は出来るようにしてあるのでダンブルドアも出来ます、と付け加える。
「ですが俺はホグズミードへ用があるのでホグワーツの校庭までになりますが、歩けますか？」
「杖があれば歩けます」
「なら、平気ですね」
俺は立ち上がりマクゴナガル先生に手を差し出す。
マクゴナガル先生は俺の手を握った。
「一――二――三」
俺は三つ数えた後にホグワーツへ『姿くらまし』をした。

バチン、という音を立てホグワーツ校庭に『姿現し』をする。
「着きました。さて……俺はホグズミードへ行きますね」
俺はマクゴナガル先生の手を離す。
「あ……ダンブルドアなら校長室にいますよ」
「貴重な情報ありがとうございます」
マクゴナガル先生はすぐさまこう言って城へと向かって行った。
（……本当に病人？）
俺はホグワーツ校門からダンブルドアに迎えに行く許可を出した変わりに頼まれたお菓子を買うためにホグズミードへ向かった。
（あ……羊皮紙も買わねぇと）
確か無くなりかけてるんだよな。
他に不足している用品がないか頭の中で考えながら俺は店の扉を引いた。

外伝・『石城の番人』

「―以上か？」
「うん。足りない物があったら自分で買いに行くよ。とりあえずその分だけ頼む」
「分かった。買っておこう」
夏期休暇に入ってから数日立った今日。セブルスが魔法薬学の材料をダイアゴン横丁へ買いに行くというのでついでに俺の作る魔法薬学に必要な材料を頼んだところだった。
『グリフィンドール！』
（まさか……）
俺はピクリと反応した。普段からグリフィンドールと嫌でも聞くので慣れたはずなのだが、この声は……
「タツキ！」
セブルスの焦るような声が聞こえた瞬間一瞬にして全身に冷水を浴びたような感覚に陥った。
『あ？わりィ、またやった』
（やっぱり、か）
「……石城の番人」
俺は静かにいつもより低い声で言い放つ。
「お前、どうされたい？消える？消えるか？消してやるぞ？あぁ体の一部を切り離すのもあるな……どっちがいい？」
『スミマセンでしたぁぁぁ！』
今、全力で俺に謝っているこの馬鹿は『石城の番人』と言う名でホグワーツにいるゴーストだ。…最も普段彼を見かける事はないが。
「タツキ……こやつは？」
セブルスは如何にも疑わしい声で聞いた。
「ホグワーツにいるゴーストだよ。名前は『石城の番人』」
「我輩は一度も見かけた事がないが？」

「そりゃ、そうだ。彼にはあいつらと違って別の事を頼んだからな」
「…あいつら？」
セブルスは疑っているような声を出す。
「ゴーストや動く図画をホグワーツへ置いたのは俺達だ。いくらホグワーツ内部を全て知っていてもつねに見ているわけではないからな。生徒達に何かあった時、ゴーストや図画達にすぐさま俺達に知らせるように頼んだんだ」
俺は一息つき、話す。
「けれど、彼……彼だけではないな。何人かには別の事を頼んだんだ。だから普段見かける事はない」
「別の事だと？」
「んー……それは『貴様の知るべき事ではない。請け負った俺達ですら詳しくは教えてもらっていないしな』……」
拗ねるように言う『石城の番人』に俺は思わず苦笑する。
「まぁ、君達に全てを教えたら危ないからね。俺達と違ってゴーストである君達に死はない。ということはもし教え、俺達が死んだ後に周りに話すという可能性もあるからね」
『そこまで信用しないのか？』
『石城の番人』は少し怒ったような拗ねた感じで言った。
「人間、いつ裏切るか分からないからね。……それに知らなくてもいい場合もあるし」
（まぁ、あまり重要な情報ではないけどね）
『それは経験かそれともパクリか？』
「さぁ？どっちだと思う？」
俺はニヤリと笑う。
『……教えはしない、か。相変わらずだな。お前達は昔から何も話さなかった』
「…話せるものなんて持ってないからね」
しんみりとした沈黙が流れる。
「…それより何か用があったんじゃないの？わざわざ来たんだし」

『いや、ない』
『石城の番人』はスッパリと言い切った。
「……は？」
『暇だったので来た。それだけだ』
俺はニコリと笑う。
「君……そんな理由で頼み事を放棄した？まさかね？」
『石城の番人』は何も言わない。何も言わずに少しずつ後退していく。
「タ、タツキ？」
「今すぐ消えたい？」
『すぐに戻ります！』
『石城の番人』は脱兎のごとき逃げていく。
「……寂しかったのではないか？」
セブルスはポツリと聞く。
「セブルス、一応周りに図画一、二枚は置いているんだよ？」
「……ダイアゴン横丁へ行ってくる」
セブルスは話題を変えた。
「逝ってらっしゃい」
「タツキ……漢字が違う」
チッと俺は舌打ちをする。
「はい、はい。行ってらっしゃい。頼んだやつよろしくね！」
「……分かった」
セブルスは不本意そうに答えたがホグワーツの校門へと向かって行った。
（さて……ブラブラと回るか）
俺は校内をうろつく為に階段へと向かった。

外伝・遺産

「タツキ、聞きたい事があるんじゃ」
ひょっこりと人の許可も取らずに入ってきた糞爺に俺は糞爆弾をぶん投げた。
「ノックぐらいしろ！」
俺の投げた糞爆弾はひょいと右へ避けられかわされた。
「……ちょっといいかの？」
普段のふざけた声ではなく真剣に聞いてくるダンブルドア。
「……何？」
俺はため息をついてダンブルドアに答える。
「聞きたい事があるんじゃ……それもゴドリックとして」
「……城の作りとかは無理だぞ」
「答えられる範囲でいい」
ダンブルドアがこう言った後に沈黙が続いた。そして俺は深く息を吸い、口を開く。
「……話せ」
「創設者の遺産を教えて欲しいんじゃ」
「……は？」
俺達の遺産を教えろ？いや、いや、いや、何でこいつに言わなきゃいけないんだ？個人の情報だろ？
「……理由は？」
俺はとりあえずダンブルドアに理由を聞く。
「それは……済まぬ、言えん」
「……ならばこちらも言えないな」
理由も無しに俺は教えたりはしない。
（まぁ理由があっても教える気はないがな）
だって遺産とか個人の情報になるしな。
「用がないなら出て行け」

俺はこう言って机に向かう。
「……頼む」
しかしダンブルドアは出て行かずになお頼む。
「話す気がないなら教える気はない。最も話しても教えるとは限らないがな」
俺は机に座り何か新しい魔法薬が出来ないかと片っ端に思い付いた材料を書いていく。
「……この通りじゃ」
ダンブルドアが床に頭をつけて頼み込む。
普通ならば偉大な魔法使いであるダンブルドアに此処までされたら話すだろう。だが俺に話す気はない。こちらもこちらでそう簡単に情報を渡せない。
（それにきっとそれだけじゃないだろうしな……）
あいつの事だ。他にも遺産に関わる俺達の情報を聞いてくるだろう。
俺はため息をつく。
「そこまでしてもそちらが話さないなら俺も話さん。話しを聞きたいならば拷問でもするんだな」
俺は拷問されようが話す気はない、と言う。
「……」
ダンブルドアは黙り込んだ。
（諦めたか？んー…ドラゴンの爪…と）
俺はガリガリと羊皮紙に思い付く材料を書いていく。
ダンブルドアは話さずに頭を床につけている。
「……そこにいられても邪魔だ」
俺はダンブルドアに言う。
しかしダンブルドアは微動だにしない。
俺は二度目のため息をついて立ち上がった。
そしてダンブルドアの元まで行き、首根っこを掴んで部屋から追い出す。
「何度来ても話す気はないからな」

俺は扉を閉める前にダンブルドアにこう告げて扉を閉めた。
（遺産、か……）
あいつが何でそんな物を聞きたかったのかは分からないが、んなものはホグワーツに沢山残っている。
（私部屋なんて物沢山残ってるしな）
あ……そういえば掃除してから随分やってないな。しかもやりかけだったし……
（……思い出さない方が良かったな）
まぁ時間が空いたら掃除しに行くか。
俺は扉から机に戻って行った。

ダンブルドアはあれから一度も俺に遺産の話しをしなかった。
（諦めたか……ならいいや）
俺は大広間で他の先生方とお茶を楽しんでいた。
話題はあの女について。皆、よほど嫌だったのかあいつ……えぇっと……あ！ギルデロイ！あいつの時より色々と話している。
「でもあの教師のやつの教育令には参りました。職員室にはあの人がいますし、生徒の前で話しは出来ない……タツキもあれに当て嵌まったとミネルバから聞きましたが…」
スプラウト先生から聞かれる。
「ああ、大変だった。俺は担当科目がないですって言ったらあいつはなら何一切情報を伝えるな、って言ってきたからな」
「そういえばマクゴナガル先生はどうやってそれを知ったんですか？」
生徒には話せませんよね？と付け加えながら高い声でフリットウィック先生がマクゴナガル先生に聞く。

「タツキが課題に小さく書いていてくれました」
後は私が先生方に伝えたんです、とマクゴナガル先生は言った。
「あー……そう言えばマクゴナガル先生よく読めましたね」
「まだ老眼ではありませんから」
マクゴナガル先生は俺の質問にスッパリと答える。
「じゃあ、あの暴れ花火はどうして分かったの？」
先生方に皆話しが回っていましたけど、と言いながらマダム・ポンフリーはマクゴナガル先生に聞いた。
「それも簡単です。仕掛けようとしたタツキを見つけましたから」
「……本当に何で見つかったんだろう」
相変わらず淡々と答えたマクゴナガル先生に比べ俺は落ち込む。
「それは先生から連絡が入ってたからです。貴方が授業に来ていないと。だから見回っていたんですよ」
ちょうど授業が空いてましたし、とマクゴナガル先生は言う。
「!?…な、何でそんな情報が……」
「今までの学生生活を思い返せば分かりますよ」
今までの学生生活？……何か先生達の間でそんなに回さなければいけない事をしたか？
（悪戯ならしたが…）
そんくらいだよな？
「俺、何かしましたっけ？」
ガタタ…と席を立つ音が聞こえた。
「あれ程授業をサボっていたじゃないですか！」
「私の授業に全く出ないから嫌われているのかと思ってましたよ！」
「最低限しかしなかった貴方に私は殺意を抱いたのが何回あった事か！」
マクゴナガル先生、フリットウィック、スプラウトが同時に叫んだのでサッパリと何を言っているのか分からなかった。
「同時に話されても分からないんですが……」
俺は叫び過ぎて息切れを起こしている三人にこう告げた。

ガタガタと席に着く音が聞こえる。
「……何でもありません。気にしないでください」
「？……そう、ですか？」
（俺、三人が叫ぶような事したかな？）
俺はお茶を飲もうと手を伸ばした瞬間バタンと大広間のドアが開いた。
「タツキ、至急頼む！」
ズカズカとセブルスが入って来たかと思えばセブルスはこう言って俺の手を掴み引きずった。
「……無理だな」
セブルスに引きずられて入ったらダンブルドアが右腕を負傷していた。
応急処置はセブルスがやり、俺に詳しく見てもらおうと連れてきたらしいがこの感じは…
「これ以上は無理だ。俺も、ポンフリーも」
「……そうか」
「ふむ。二人共、急呼び出して済まなかったの……」
「何故……何故もっと早く連絡をしなかったんですか！？」
セブルスはダンブルドアに激怒する。
「……済まぬ」
「あー…セブルス、落ち着け。右腕一本やられただけじゃ死にやしない」
「馬鹿か、貴様！腕は腕でも杖利きだぞ！」
「落ち着け。痛むが使えないわけではない」
セブルスはバンッと扉を開いて去って行った。
俺はため息をつき、ダンブルドアに言う。
「お前もお前だ。呪いがあると分からない学生じゃないだろう」
こう言って俺は部屋を出て行った。

百二十話

（スクリムジョールが後任か……）
俺はバサバサと汽車の中で此処数日の新聞を読んでいた。
（……あの、糞爺のせいで！）
俺は世間の情報が遅れているんだ！
ダンブルドアは俺に小鬼の接触任務を頼んだ。小鬼は前回もこちらにもあちらにも付かなかったので今回こそは、と言ったのだ。
任務には約一ヶ月くらいで小鬼をあちらこちら尋ねたので世間の情報を得る暇は無かった。しかもそれ程働いて得たのは小鬼と友好的になっただけだ。
（だが何で俺なんだろうな？俺は小鬼に正体ばれたら確実に嫌われるってのに）
俺の剣は小鬼の王、ラグヌック一世の物だった。まぁ……俺からしたら貰ったになるが小鬼には俺が盗んだと伝わっているので正体がばれたら信頼どころか袋だたきに会うかもしれない。いや、会うだろう。確実に。
（糞爺もそれを知らないわけではないだろうに……）
俺は新聞を畳みながらため息をついた。
カサリと何かが落ちた音がした。
（何か落ちたな…）
俺はそれを拾いあげる。
（ああ、これか…）
俺が落としたのは魔法省から配布されたパンフレットだった。
―魔法省公報
あなたの家と家族を闇の力から護るには
魔法界は現在、死喰い人と名乗る組織の脅威にさらされています。
次の簡単な安全指針を遵守すれば、あなた自身と家族、そして家を

護るのに役立ちます。
一、一人で外出しないこと
二、暗くなってからは特に注意すること。外出は、可能なかぎり暗くなる前に完了するよう段取りすること
三、家の周りの安全対策を見直し、家族全員が『盾の呪文』、『目くらまし呪文』、未成年の家族の場合は『付き添い姿くらまし』術などの緊急措置について認識するよう確認すること。
四、親しい友人や家族の間で通用する安全のための質問事項を決め、ポリジュース薬使用によって他人になりすました死喰い人を見分けられるようにすること
五、家族、同僚、友人または近所の行動がおかしいと感じた場合は、すみやかに魔法警察部隊に連絡すること。『服従の呪文』にかかっている可能性がある
六、住宅その他の建物の上に闇の印が現れた場合は、入るべからず。ただちに闇祓い局に連絡すること
七、未確認の目撃情報によれば、死喰い人が『亡者』を使っている可能性がある。『亡者』を目撃した場合、または遭遇した場合にはただちに魔法省に報告すること―
（俺なら遭遇したらただちに殺るがな）
俺はこの役に立ちそうもないパンフレットを新聞に挟んだ。
『次に停まります駅はキングズ・クロス。キングズ・クロス駅でございます』
（あー…降りないと）
バサバサと新聞を整理して汽車を下りる。
汽車から下りると俺にこんな面倒な事を言い付けた本人の声が聞こえた。
「元気そうじゃの」
「……迎えか？」
「そんなところじゃのぉ。任務は成功したかの？」
「んなもんするわけないだろ？あいつらを味方に入れるなんて出来

やしない」
「ふむ。ならばこの一ヶ月フラフラしておっただけかの？」
「……友好的になっただけだ」
「それだけで十分じゃ。ホグワーツへ帰ろうかの？」
「ああ……」
俺とダンブルドアは人混みから離れ、薄暗い細い通り道から『姿くらまし』を使った。
『姿現し』にてホグズミードへと現れ、そこから馬車道を通りホグワーツ城に入る。
（……ん？）
「ダンブルドア、犬を中へ入れたのか？」
「はて？犬とは？」
「シリウスだ」
「おお、ちょうど話しが会ったので今おるぞ」
「い、今？」
「なんじゃ？何か不都合でも―」
「タツキー！」
シリウスがダンブルドアの言葉を遮り俺に向かって突進してくる。
俺はそれをヒラリと交わした。
「ぐはぁぁぁ」
俺に交わされたシリウスは地面にダイブするはめになった。
「……で、俺にも関係があるの？」
「うむ。シリウスと共に隠れ穴へと泊まってほしい」
「こいつも！？」
俺はシリウスを指差しながら叫んだ。
「ハリーが隠れ穴に来るのでな。行きはわしがおるから隠れ穴はシリウスに。タツキは今まで通りに頼む」
今まで通りに警護的なものをしろ、か。
「出発は明日じゃ。今日はホグワーツにて休むがいい」
「……分かった」

（てことは、こいつも泊まるのか）
俺はため息をつく。
「俺、もう休む」
「お疲れじゃた」
俺はトボトボと教員用の部屋へと向かった。

百二十一話

「……行ってきます」
「気をつけるのじゃよ」
翌朝、俺はトランクを持ちながらシリウスと一緒にホグワーツを出た。
「タツキ、どうやって行くんだ？」
「ホグズミードにホグワーツ特急を手配してあるからそれでまずキングズ・クロス駅まで行く」
「それからは？」
「そうだな……暖かいし、歩くか？」
「冗談だろ！？」
どんぐらいかかると思っているんだ？とシリウスは言う。
「お前がいなければ今日中には着くな」
「は？嘘だろ？そんなに早く着く距離じゃない」
「頑張れば着ける。だがお前がいるから『姿くらまし』が妥当だろうな」
「ああ。俺もそっちがいい」
あんな距離を歩く気なんかしねぇとシリウスは愚痴る。
「あ、シリウス。俺まだ世間上は学生だから……」
「学生だから？」
「『連れ添い姿くらまし』よろしく」
「はぁぁぁぁ？」
シリウスの声が着いたばかりのホグズミードへと響く。
「出来ないなんて言わないよね？学年二位さん？」
シリウスは学年二位でホグワーツを卒業した。ちなみに首席はジェームズだ。
「確かに俺は学年二位だ。だけどお前も使えるだろう？」
「使えるよ？まぁ念のため」

あいつは俺と一対一で話したいみたいだしな、と呟く。
「あいつ？」
「闇の帝王」
俺はホグワーツ特急へと乗り込む。
シリウスも俺に続き、近くにあるコンパートメントに入った。
「何でだ？」
「俺が誰だか知ってるだろう？」
「……でもお前、あいつと話してないだろう？」
俺はハリーからそう聞いたが、とシリウスは言う。
「セブルスから聞いた。誘いがあった、ってね」
「はぁ？でどうした？」
「断った。何時でも話してやるから今は無理って」
「何時でもって……話し合う気か」
シリウスは呆れたように言った。
「俺はお前達と違って怖くないしな」
一度話し合うのも面白そうだろ？と俺は付け加える。
「俺なら死んでも無理だな」
「犬だからな」
良くも悪くも真っすぐなんだ。シリウスは。
「どういう意味だよ！」
「教えねぇ」
教えるつもりなんかない。
「何か一つでも教えろよ」
「嫌だね」
シリウスは俺がゴドリックだと知った日から隠し通路や隠し部屋、何でもいいから漏らしてくれないか、と必死だった。だから少し避けてたんだ。
俺はバサバサと読み終わった新聞を広げる。
（これ以上話したら俺が何言うか分からないしな）
新聞を広げ、読むフリをすることでもう話す意思がないことをシリ

ウスに伝える。
シリウスは分かったのか、何も話さなくなった。
静かになりガタンガタンと汽車に揺れる音だけが聞こえ、やがて汽車はスピードを緩めていった。
「……そろそろかな？」
俺は新聞を片付け始める。
俺が新聞をしまうと同時に汽車は停止し、九と四分の三番線に着いた。
俺とシリウスは汽車からプラットホームへ下りる。
「……行くぞ」
シリウスはふて腐れた声で俺の手を掴み『連れ添い姿くらまし』をした。

「……シリウス、ここどこ？」
シリウスが『連れ添い姿現し』にて出てきた場所はどうやら隠れ穴とは違ったみたいだ。何故なら隠れ穴の方向に散々歩いてもたどり着かない。
「そういえば俺、隠れ穴行ったことねぇ」
「……それ早く言ってくれるかな？」
場所知らないでよく『姿くらまし』をしたものだ。
「タツキとシリウスじゃないか！」
この声に魔力……
「アーサーさん？」
「そうだよ。二人共、任務かい？」
「いや、隠れ穴へ行こうとして……」
「『姿現し』したのはいいが、よく考えたら隠れ穴行ったことなくて……」

俺の言葉をシリウスが継いだ。
「……よくバラけなかったね、二人共」
アーサーは呆れ気味で言う。
「もうすぐで仕事が終わる。そうすれば一緒に向かおう」
だから先に魔法省に行っててくれ、とアーサーが言った。
「助かります。シリウス、行け」
「行けってなぁ……」
シリウスは俺の手を掴み『連れ添い姿くらまし』をした。

「今度は合ってたぞ！」
今度は無事、魔法省の近くへ『連れ添い姿現し』を出来た。
「出来てなかったらシリウス、君を疑う」
何せ魔法省だ。シリウスは嫌というほど世話になっている。
「ここには尋問とかで来たからな。大丈夫だ」
シリウスは自信満々に言った。
「そんなに勝ち誇って言う事？」
俺は思わずため息をついた。
（こんな奴が二位だもんな……）
天才と馬鹿は紙一重、か。
「シリウス、暇」
「だよなぁ。アーサーが来るまでは時間があるし、かといって俺達だけでは行けないし」
「暇ー」
「そう言われてもな……」
「なんかないかなー」
俺はシリウスの頭をポフポフと叩く。
「なんか今ガキを持ってるお父さんの気分だ」

「……誰がガキ？」
俺がシリウスに優しく聞いたらシリウスはすぐさま返した。
「何でもねぇ」
「そ？」
シリウスを叩いている力を強める。
「……アーサー早く来ないか？」
「アーサーさんに守護霊送ったら？」
「んな事で送れるか！」
「あ、アーサーさん」
アーサーの魔力が魔法省から俺達の元へと向かっていた。
「お、ホントか？後どんくらいだ？」
「もうすぐ来るよ」
「あぁ、こちらからも見れた」
シリウスはこう告げた。
「待たせたようだね」
アーサーは着くなりこう言った。
「行こうか」
アーサーは手を差し延べる。
俺はシリウスを掴みアーサーの手を掴んだ。そしてシリウスは俺のトランクを持つ。
「よろしくお願いします」
アーサーは俺の手を握ると『連れ添い姿くらまし』をした。

「ここだよ」
アーサーは『連れ添い姿現し』をし、隠れ穴の近くへ着いた。
「ありがとうございます。シリウスとは全然違うな」
俺はシリウスに向かって言う。

「そう言えばまだ確認してなかったね。私の夢は何？」
「うわっやるのか、それ」
シリウスは嫌そうに言った。
「確認しないとこれで死喰い人だったら家族が困るからね」
「だとさ、シリウス」
「……分かった」
恐らくダンブルドアにも質問されたのだろう。シリウスは嫌そうにしながら了解した。
「「飛行機が何故飛んでいるのか解明すること」」
「良かった。本人だね」
アーサーは安心したように言う。
「俺が死喰い人ならば全て調べるけどな」
「それは言えてるな。俺もそうするだろう」
俺とシリウスの意見が合った。
「君達からは質問しないのかい？」
アーサーがワクワクしたように聞いてきた。
「俺が魔力で調べてるからいらないだろ」
魔力までは変えようがないし。
「だな。俺も面倒だし」
「そうか」
アーサーは俺とシリウスの言葉に落ち込んだように言った。
それからはアーサーと一緒に隠れ穴まで向かい、隠れ穴に着いてからはモリーとアーサーのあの意味をなさないだろう質問のやり取りを聞いた後にやっと中へ入れてくれた。
「タツキにシリウス。ダンブルドアから話しは聞いています。よく来たわね。部屋は……ハリーと一緒でいいかしら？」
「ハリー来ているんですか？」
「いいえ。着くのは今夜よ。ああ、部屋は三階にあるわ」
「お世話になります。シリウス、部屋に行こう」
「あぁ。モリー、世話になる」

俺とシリウスは三階へと向かう。
ガチャリと扉を開き、部屋へと入る。
シリウスは俺のトランクを適当に置き、俺はベットへダイブする。
「シリウスー、俺今から仮眠を取るから起こしたら殺す」
「殺すのかよ！」
「お休みー…」
「おい、タツキー」
俺はシリウスの言葉を無視し、仮眠へと瞼を下ろした。

百二十二話

バーン、という音がして俺が目を開ける前にガクガクと揺さぶられた。
「ライカ、起きて！」
「ぐぇ……」
「ハリー、もう起きているみたいだからそれは止めたほうがいいわ」
「え？」
ハーマイオニーの忠告でハリーは揺するのを止めた。
「君達は朝から元気だね」
「話したい事があったからさ」
「話したい事？」
「一つはハリーが君も一緒に、って言ったから僕達もまだ聞いてない。もう一つは嬉しい知らせさ」
ロンはため息をつきながら言う。
（ため息をついて嬉しい知らせ？）
「シリウスは？」
嬉しい知らせと聞いて部屋にいるシリウスは？と思うと魔力がなかった。
「シリウスは下にいた。知らせの事はもう知ってる」
「そうなんだ。知らせとは実はフラーが来年ビルと結婚するんだ」
俺はすぐには理解できなかった。
「フ、フラー？確かボーバトンの代表選手だった？」
「あぁ。仕事でロンドンに来て今この家に住んでいるんだけど……」
ロンはまたため息をつく。
（ああ……もしかして）
「上手くいっていない？」
「ママとかね。ジニーもそう」
「……まあ、頑張れ」

きっとロンは板挟みになるだろう。
俺はため息をついているロンからハリーに聞く。
「ハリーの話しは？」
「……予言の事だよ」
「予言？けれどあれは壊れたじゃないか！」
予言と聞いてロンがすぐさま食いついた。
「あれだけじゃなかったんだ。ダンブルドアが予言を聞いていた」
ハリーは予言の内容を話し始める。
―闇の帝王を打ち破る力を持った者が近づいている……七つ目の月が死ぬとき、帝王に三度抗った者たちに生まれる……そして闇の帝王は、その者を自分に比肩する者として印すであろう。しかし彼は、闇の帝王の知らぬ力を持つであろう……一方が他方の手にかかって死ねばならぬ。なんとなれば、一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ……闇の帝王を打ち破る力を持った者が、七つ目の月が死ぬときに生まれるであろう……―
重い沈黙が続く。
俺はそんな中口を開いた。
「ならハリーが勝てばいい話しだな」
「そんな簡単な話しではないわ！ハリーがし、死んでしまうかもしれないのよ！？」
俺の言葉にハーマイオニーが鋭く言った。
「簡単な話しだ。予言はもうなされた。ならすべき事は悲観する事ではなく生き残る努力をすることだろ」
「僕もそう思う。それに今学期はダンブルドアの特別授業もあるし……」
ハリーは俺に続けて言う。
「特別授業？そんなのするんだね。頑張れ」
最も強力な呪文系ではないと思うけどな。強力なのを会得するには時間がない。
ハーマイオニーがベラベラとあれでもない、これじゃないかと喋っ

ている時にハリーが不意に思い出したように言った。
「そう言えば今日フクロウの結果届くってダンブルドアが言ってたな……」
「へー…今日なんだ」
「今日？」
俺は大した事ではないからスルーしていたがハーマイオニーは叫んだ。
「ふくろうが来ていないか確かめてくる」
散々叫んだ後ハーマイオニーはハリーとロンを連れて出て行った。

俺は着替え終わってから下へ下りると一階はピリピリとしていた。
俺はシリウスの隣に腰掛ける。
「なんでこんなにピリピリしてるんだ？」
「フクロウの結果だろ」
シリウスは呆れながら言った。
「お前も受けたんだろうが」
「結果なんて分かってるしな」
「ええ！きっと全科目落ちたわ！」
俺とシリウスとの会話にハーマイオニーがヒステリー気味に言った。
「落ちたらどうなるのかな？」
ハーマイオニーの言葉にハリーが聞いた。
「教えてやる。寮監と嫌というほどの話し合いだ。どういう選択を取るか、な」
俺はニヤリと答えた。
「どういう選択が―」
しかしハリーの言葉はハーマイオニーの叫び声で消えた。
バサバサとふくろうがやってきたのだ。

「お疲れ様」
俺はやってきたふくろうにそう言った。だが三人はピリピリとしていてそれどころではないようだ。
俺は封を切り、羊皮紙を広げる。
―普通魔法レベル成績
合格
優・Ｏ　（大いによろしい）
良・Ｅ　（期待以上）
可・Ａ　（まあまあ）
不合格
不可・Ｐ　（よくない）
落第・Ｄ　（どん底）
トロール並・Ｔ

タツキ・ヒブカは次の成績を修めた。
天文学　優
魔法生物飼育学　優
呪文学　優
闇の魔術に対する防衛術　優
占い学　可
薬草学　優
魔法史　優
魔法薬学　優
変身術　優―
（おや？）
奇跡的に占い学が可で合格している。
（まぁ取らないが）
占い学はフクロウだけでいい。
隣にいたシリウスが俺の羊皮紙を奪い取る。
「やっぱな……お前『占い学』以外は出来るんだよなぁ」

しかも占い学でも合格はしているし、とシリウスはぼやく。
「当たり前。じゃないと教えられるか」
今は教師の数が多いが前なんて俺達だけだったんだからそれくらいは出来ないと教えられるか、とシリウスに小声で言う。
「へー…なぁもっと詳しく―」
（場所を考えろよな……）
俺はガツンとシリウスの頭を叩いた。

百二十三話

翌日、俺が目を覚まして下へ下りれば居るのはフラーとシリウスだけだった。
「他のやつらは？」
「ダイアゴン横丁へ行ったぜ」
「ああ……そういえばそんな話しをしていたな」
「タツキは行かなくてよかったのか」
俺がシリウスの向かい側の席にに座りながらシリウスは聞いてきた。
「んー……欲しい物もないし、足りない物も無かったからモリーさんに教科書を頼んだ」
俺はシリウスに答える。
「ご飯でーす」
フラーが俺の前に遅い朝食を置いてくれた。
俺は朝食に手を伸ばす。
「ダイアゴン横丁と言えばオリバンダーがいなくなった」
シリウスが何気なく言った。
「オリバンダーが？」
「ああ。あそこはもうもぬけの殻だ。連れていかれたのか逃げ出したのか分かんねぇ」
「逃げ出しはないだろう。前回、逃げ出しなんてせずに杖を売っていたんだからな」
「だよなぁ」
そこで会話は途切れ、俺は食事に専念していた。
（……そういえば）
「後、二年か……」
「二年？」
「ハリーがホグワーツで学ぶ時間」
「ああ……そういえばそうだ。後、二年」

「長いな」
「短いだろう？」
俺はムシャムシャと朝食を食べながら言う。
「いや……長い……もう……すでに学んでいるからな」
「それを言うなら俺の時もそうだろ？」
「ああ。だから授業なんて受けなかっただろう？」
始めは新鮮で良かったが慣れたら退屈なんだよな、と付け加える。
「そう言えば始めは受けていたな」
「生徒、という視点が面白くてな」
俺は教える方だったしな、と付け加える。
「教えるってどんな気持ちだ」
シリウスが興味津々に聞いてきた。
「ん？馬鹿がいればいらつく職業」
「それ教師のセリフじゃないだろ！」
「なら、お前は教えられるか？」
俺は一旦食事を止める。
「昔、実技が本当にダメな子が居たんだ。呪文を唱えて杖を振れば爆発を起こして天井に穴を開けるし、魔法薬学では材料を刻んでやって後は入れるだけなのに何故か固形物が出来上がり、魔法飼育学では餌やりで生物を殺しかねなかった」
「……それ、嘘だろ。そこまで壊滅的はもはや魔法使いじゃない」
「その上悪戯好きだったから城はいつも何処かしら汚れ、壊れていた。決闘も好きだったな……だが実技がダメなあの子は相手に呪文がいかず周りに行くからもうめちゃくちゃで……」
俺はため息をつく。
「まず、俺達が後片付けだろ？それから補習をして怪我人の面倒も見なきゃいけない。そしてホグワーツの修理……」
俺は遠くを見るような仕種に哀愁を漂わせた。
「本当に七年長かった……」
「あのな……なんか悪かった。俺が悪かったからもう話すなぁぁぁ」

（……面白くないな）
俺は食事を取りはじめる。
「俺、教師になろうかと思ったが止めとく」
「あ？教師？なればいい。今なら『闇の魔術に対する防衛術』が空いているぞ」
最も最近は一年交代になっている職業だがな。
「……いや、止めておく」
「なんだ」
詰まらない。シリウスがその職業についてセブルスと喧嘩するなり怨まれるなりしてボロボロになれば良かったのに……
（……でもそうなったら俺が大変になるな）
俺はやっと朝食を食べ終わる。
そして不意に思うことがあったので聞いてみる。
「そういえばなんで教師になろうと思ったんだ？」
「タツキがやけに楽しそうだからな」
「……は？」
シリウスは話し出す。
「先程の話し。やけにブツブツと文句言っているわりには楽しそうだった」
「……そうか？」
「ああ……」
シリウスはそう言った。
（けれどそうかもしれないな……）
学校はずっと目標だった。あいつらに協力してもらって、建てて……けれど中々すぐには開校とならなかった。
だからこそ楽しかったんだ。
「シリウス、確かに楽しいよ。教師はね」
「そうか……」
「じゃ、俺は部屋にいるね」
「分かった」

俺は席を立ち、部屋へと向かう。
部屋で大人しく読書をしていたのだが昼過ぎくらいにはダイアゴン横丁に行ったメンバーが返ってきたのか下が騒がしくなった。
俺は少し煩いな、と思いながらも読書をしていたのだがバーンと扉を開く音が聞こえて顔を上げた。
「ハリー？」
扉を開けた人物の魔力がハリーのものなので間違いないはずだ。
「フレッドとジョージの悪戯グッズ専門店に行ったんだ。君の分もあるから渡しにきた」
「俺の分？」
ハリーはドサリと悪戯グッズを俺に渡す。
「ライカに聞いてなかったけど三大魔法学校対抗試合の賞金、フレッドとジョージに上げて専門店の資金にしてもらってたんだ」
「ああ、あれ二人にあげたんだ？俺は別に気にしないよ」
「良かった。で、これ二人から資金をしてくれたからって」
「んー別にいいんだが……まぁくれるなら活用しないとね」
「あとこれ、君の教科書」
ドサリと教科書を渡された。
「お？ありがとう」
「荷造りは出発の前の日には終わらせて欲しい、ってモリーおばさんから伝言」
「分かった。前日ね」
「じゃあ僕下に行くね」
「おー、わざわざ悪かったな」
ハリーはバタバタと出て行った。
俺はハリーが渡してくれた教科書を確認する。
（……全部あるな）
買い忘れはなく、頼んだ教科書が全てあった。
俺はその教科書の中から適当に一冊抜き取り、今さっき読んでいた本を床に置いた。

（……変身術か）

俺は思わず頬が緩んだ。変身術は得意分野だ。

（何か新しい事が載っているかな？）

俺はワクワクした気持ちで変身術の教科書を開いた。

百二十四話

ホグワーツへ行く当日。皆、モリーの言った通りに前日には荷物をまとめていてバタバタすることもなく余裕を持ってホグワーツ特急へ乗れた。
ホグワーツ特急に乗るとハーマイオニーとロンは監督生の仕事で監督生車両に乗り、ハリーとネビルは懐かしきのスラグホーン先生に呼ばれて確かスラグ・クラブだったか?それに行ってしまった。
なので俺は今ルーナとコンパートメントに座っている。
(あの先生もよくやるよな……)
あの先生は優秀な生徒を集めるのが好きだからな。
(俺もよく狙われたな……)
まぁ俺はそんなクラブには行かなかったが。
不意にガラリとコンパートメントが開く音が聞こえた。
「先輩、空いているので座っていいですか?」
「というか座らせろ」
ドサリと勝手に入り座ったライル。
「ちょっと兄さん!まだ返事聞いてないのよ!」
「構わん。どうせこいつくらいしか居ないんだ」
それに後輩だから黙認してくれるだろう?と付け加えてライルは言った。
「二人はいつも一緒だね?」
「そんなわけないだろう。お前と会う時がたまたまこいつがいるんだ」
早く座れ、邪魔だとライルはレイチェルに言う。
「す、すみません」
レイチェルはルーナに謝りながら隣に座った。
「別にいいよー。空いているし」
ルーナはレイチェルの言葉にあっけらかんと言った。

「今年ライルはイモリだっけ？んでレイチェルはフクロウか」
「そうですよー……嫌なフクロウ学生です」
現実逃避したいですーと呻いているレイチェル。
「フクロウよりイモリの方が高度なんだ。こっちが現実逃避したいな」
そんなレイチェルにライルはバッサリと言った。
「俺はこれで就職出来るかどうかの一つの目安が決まるんだ。邪魔はするなよ」
「邪魔？邪魔なんてしたこと無いわよ！」
「勉強を教えろ、とかだよ。俺は今年自分で手一杯だからな」
えぇ～！とレイチェルは悲鳴を上げる。
「ライル、どこに就職するの？」
俺は好奇心にて聞いてみる。
「ホグワーツだ」
「……教員？」
（て事はセブルスの後輩になるな……）
だがまさかホグワーツ教員志望とは。
「俺は助教授だ。ソーラスも同じだったな」
「助教授？」
……俺の立場どこにいくんだ？
「あぁ。あまり公な立場ではないけどな」
（二人か……俺、クビじゃないよな？）
まぁクビになったらなったで旅をするだけだが。
「へー…兄さん、教師志望だったんだ？」
「……まぁな」
ライルは短く答える。
そして不意に俺に聞いてきた。
「お前はどうするんだ？」
「俺？」
「ああ。面接は終わっているだろう」

「あー……決めてない」
「……そうか」
それ以来ライルは話しかけず、ガダンガダンとホグワーツ特急が走る音が響いた。
「そろそろかな？」
静かな空気の中レイチェルが言った。
「兄さん、私ルーナ先輩と一緒に出ていくから先輩と一緒に着替えてね」
レイチェルはそう言ってルーナと一緒に出て行った。
「……俺は着替える」
ライルは俺の反対側に行き着替え始めた。……と思う。
（俺も着替えるか）
俺も立ち上がり着替え始めた。
着替え終えて俺はライルに尋ねる。
「ホグワーツまでどのくらい？」
「あと少しだな」
（ならそろそろスラグ・クラブも終わるな）
「ライル、俺友達を迎えに行くね」
俺はトランクを持ちライルの返事を聞かずにコンパートメントから出て行った。
二、三両過ぎたところで減速し始め、ホグワーツ特急は止まった。
（急がないと出発ちゃうな）
俺は急いでハリーの元へ向かった。

百二十五話

「う……わぁ！」
ガダンと特急が動き始めた。
（……仕方ないな）
俺は近くのコンパートメントに入りそこの窓から飛び降りた。
ガツンッ
（ガツン？）
何やら引っ掛かった音が聞こえた。
「ライカ！トランクが窓に引っ掛かってる！」
「ハリー！？」
ハリーの声がプラットホームから聞こえた。
「何でここに？」
「それよりも、荷物を―」
しかしハリーの声はドンドン遠ざかって行き、俺は浮遊した状態になった。
（……どうしよう？）
荷物なら捨てても構わないが今日は荷物の中にフィンラがいる。
だが迷っている間に特急はガダンガダンと走り続ける。
（……よし）
俺はトランクをコンパートメントの中に入るように思い切り押して下へと落ちた。
ドボン、と言う音と共に空気が無くなり服が重くなった。
（湖？川？まぁどちらにせよ浮き上がらないとな）
足を蹴りだし、水面に向かって泳ぎはじめる。
服が水を吸って重くなっていて少々いつもの倍の力を使う事にはなるが、何とか俺は新鮮な空気を吸うことが出来た。
「げほっ……さて、どう帰ろうか」
（まず此処から出ないと……あ！）

グラッドでホグワーツまで運んでもらえばいいんだ！
俺は手の平を向き合わせ、不死鳥を呼ぶ。
『キュー！』
美しく？鳴きながらグラッドが現れた。そして俺の頭に乗る。
「……グラッドさん？俺の頭に乗らないでホグワーツまで俺を運んで―…イタッ」
グラッド嫌そうに鳴きながら俺の言葉を最後まで聞かずに俺の頭を突いた。
「俺が悪い。悪いが此処からホグワーツに行くにはこれしかないんだ」
『……キュ』
嫌そうに、本当に嫌そうにグラッドは鳴き、俺の頭から離れた。
「ありがとう」
俺が水の中から右腕を高く上げた。
腕が鋭く食い込む感覚がしたと思った次の瞬間には水の中から浮遊感覚がする空にいた。
（さて……）
ハグリッドかセブルスに連絡を取って警備強化された門を開けてもらわないと。
俺は左手で何とか取り出した杖を振って守護霊を作り、ホグワーツへ飛ばした。
『キュイ！』
ホグワーツ近くについた時にグラッドは俺をパッと離した。
「うわっ」
俺は着地体制などとっていなかったためドシャッとそのまま落ちた。
「いてて……」
俺がひょいと起き上がるとグラッドは俺の頭に座り込んだ。
「何を座っているのです？」
セブルスでもハグリッドでもなく聞き慣れた淡々とした声、マクゴナガル先生がいた。

「落とされたんです」
「そうですか。あ、貴方の荷物は部屋に運んであります。親切にもホグワーツ特急の従業員の方が届けてくれました」
俺は立ち上がり土を払う。
「それと宴会はとうに終わったので貴方は直接グリフィンドール寮へ戻ってください」
俺は一つの疑問を聞いた。
「守護霊を受けとったのはマクゴナガル先生ですか？」
俺はセブルスかハグリッドに送ったんだが……
「はい。フワフワと迷っていたみたいでしたので受け取りました」
……やっぱり今度から二人指定は止めよう。
俺はマクゴナガルについていきホグワーツへと入っていった。

百二十六話

翌日の朝、朝食が終わるとマクゴナガル先生は一人一人回り時間割を作っていた。
「ヒブカ……と」
マクゴナガル先生は俺の方へ来ながら言う。
「どうしますか？全て受講できますが……」
「全て受けたくないです」
「そんな事はさすがに受け入れられません」
マクゴナガル先生はスッパリと言った。
「なら……なるべく受けたくないです」
「そうですか……ならばどの授業なら受けますか？」
「『変身術』にあー…そういえばスネイプ先生は『闇の魔術に対する防衛術』に変わったんですよね？」
「……はい。そうです」
スラグホーン先生は俺達の頃から『魔法薬』の教授だったからなぁ。セブルスが移動か。
「なら『闇の魔術に対する防衛術』も」
「『変身術』と『闇の魔術に対する防衛術』……あと一つは受けなさい」
俺は悩む。あと一つ？あと一つ取らなきゃいけないのか？
「なら……『呪文学』」
俺はマクゴナガル先生に言った。
「分かりました。時間割はこれです」
俺はマクゴナガル先生から時間割を受け取る。
（お？『闇の魔術に対する防衛術』か）
今日の授業はそれだけだった。まぁ三つしか取っていないのだから当然なんだが。
（『闇の魔術に対する防衛術』まで一時間か……短いな）

今から隠し部屋にて弄る時間はないようだ。
俺は大広間からグリフィンドール寮へと戻り、授業準備をしてからゆっくりと教室へ向かった。
図画達と話しながら歩いていたせいか教室へ入ったのは授業が始まる二、三分前だった。
（危なかった……）
俺が席に着くと同時にセブルスが教室へ入ってきた。
（……本当に危なかったな、俺）
「我輩はまだ教科書を出せとは頼んでおらん」
セブルスは始めにこう言った。
「我輩が話しをする。十分傾聴するのだ」
（……長いんじゃないだろうな？）
「我輩が思うに、これまで諸君はこの学科で五人の教師を持った。同然、こうした教師達は、それぞれ自分なりの方法と好みを持っていた。そうした混乱にもかかわらず、かくも多くの諸君が辛くもこの学科のフクロウ合格点を取ったことに、我輩は驚いておる。イモリはそれよりずっと高度であるからして、諸君が全員それについてくるようなことがあれば、我輩はさらに驚くであろう」
セブルスはさらに低い声で言う。
「『闇の魔術』は多種多様、千変万化、流動的にして永遠なるものだ。それと戦うということは、多くの頭を持つ怪物と戦うに等しい。首を一つ切り落としても別の首が、しかも前より獰猛で賢い首が生えてくる。諸君の戦いの相手は、固定できず、変化し、破壊不能なものだ。諸君の防衛術はそれ故、諸君が破ろうとする相手の術と同じく、柔軟にして創意的でなければならぬ。これらの絵は―」
（……長い。長すぎる）
それからセブルスは長々と十分以上は話したと思う。…多分。俺は聞くことを放棄していたから詳しくは分からない。ただ気がついたらセブルスはこう言ったんだ。
「これから諸君は二人一組になる。一人が無言で相手に呪いをかけ

ようとする。相手も同じく無言でその呪いを跳ね返そうとする。始めたまえ」

（ん？無言？）

今日の授業は無言呪文の練習か？

俺が無言呪文の授業かどうかを考えている間にペアは決まっていき、俺は一人余ってしまった。

「……ミスター・ヒブカ、我輩とだ」

セブルスは不本意そうに言った。

「はい」

俺はセブルスと向き合い、杖を構える。

（……！『プロテゴ！』）

俺はセブルスが無言で放ってきた『くらげ足の呪文』に対して盾の呪文を使った。

（俺はこのままじゃ終わらせないよ？）

俺は無言でセブルスに向かって『くらげ足の呪文』を放つがセブルスは無言にて盾の呪文を使った。

（ちぇ……ならば……）

俺はセブルスに向かってめくらまし用の『失神呪文』と当てるつもりの『くらげ足の呪文』を放つ。

セブルスは本能的に何かを感じたのか広範囲に盾の呪文を使い、二つを防いだ。

（ちぇ、当てたいな。当てたいが……）

せっかくのセブルス初の『闇の魔術に対する防衛術』の授業だ。セブルスを潰さなくても良いだろう。

（諦めるか……）

俺は杖を下ろした。それを確認したセブルスはこう言う。

「お前はもう出来ているな。我輩は生徒を見て回る。ヒブカは『無言呪文』についてのレポートを書くのだ」

「はい、先生」

（レポート、かぁ）

こんな事になるならば諦めなければよかった、と思いながら俺は席につく。
（羊皮紙と羽根ペンは、と…）
かばんから羽根ペンと羊皮紙を取り出し『無言呪文』についてを書いていく。
（はぁ……つまらない）
俺はため息をつきながらカリカリと手を動かした。

百二十七話

（……よし、問題ないな）

俺は授業が入らずに自由な一日になった今日を使い、もう残り少ない隠し部屋の点検を行っていた。

（もう大分残り少なくなったな）

周りに気をつけながら隠し部屋から廊下へと出る。

「図書館にでも行こうかな？」

何かマダム・ピンズが本を紹介してくれるかもしれない。

俺はどこへ行くか迷っていた足を図書館へ向けた。

この辺りは回りに図画とかを置いてある数が少ないので呼び止められる事がなく、俺はスイスイと図書館へ向かっていた。

「タ―……ライカ！」

俺は聞いたことのある声に足が止まる。

「……よく俺の名前を知っていますね？スラグホーン先生？」

「ちょっと先生方から聞いたんでね。ところで君、何故『魔法薬学』を取らなかったんだ？」

俺はため息をつく。

全く、厄介な人に捕まったものだ。

「『魔法薬学』がスラグホーン先生に変わると聞いたので」

授業に出ればスラグ・クラブへ引き込まれる可能性が高い。それが嫌だから俺は『魔法薬学』を取らなかったんだ。

「それは、私が嫌いだと言っているのかね？」

「スラグホー…いやスラグ・クラブが嫌いなんです」

「今、ハッキリと言ったよね？」

「言ってません」

俺はシラをきる。

スラグホーン先生はため息をつきながら言った。

「私は君ほどクラブに入れたいと思った子はいないんだがね」

それに今度は俺がため息をつく。貴様が欲しいのは優秀な上、ゴドリックだからだろう？
「きっと先生はサラザール達がいたら同じ事を言うんでしょうね」
「そりゃ、生徒として教えたならば勧誘する。教えてなくても誘うが」
だがその前に君達が揃ったら畏縮してそれどころではないかもしれないが、とスラグホーン先生は柄にも無いことを言った。
（よく俺にしつこく勧誘していて、か）
「しつこく勧誘していた貴方がよく言いますね」
スラグホーン先生はクスクスと笑う。
「私は教えていた君と話しをするだけで毎回緊張しているんだよ」
まぁ、教えることなんてなかったが、とスラグホーン先生は言った。
「緊張、ね」
（嘘くさいな）
緊張しているような態度ではなかったぞ。
「あ、そうだ。ライカ、今度のパーティーに君も来てくれないかな？今度のパーティーにはハーマイオニーやハリー、ジニーやネビル……他にもグリフィンドール生は呼んでいる」
グリフィンドールだけではない、とスラグホーン先生は続ける。
「今年のスリザリン生にはあまりいないが、ライルなどもいるし、ハッフルパフからは―」
（……ヤバイ、自慢話しが始まった）
こうなったらスラグホーン先生はかなりベラベラと話す。
（図書館どころじゃなくなるぞ……）
俺は一呼吸して言った。
「あ、あそこにハリーがい―」
スラグホーン先生はとんでもないスピードで去って行った。
（ハリーがしつこいとか漏らしていたが……）
本当にハリーを狙っていたんだな。
（でもスラグホーン先生は去って行ったし、俺は図書館へ向かうか）

俺は図書館へと歩き出した。

百二十八話

「ウ〝ォルデモートの過去？」

昨夜、ハリーはダンブルドアの個人授業を受けた。授業内容はウ〝ォルデモートの過去を知ること。

昨夜はウ〝ォルデモートの母、メローピーと祖父、マールウ〝ォロ、叔父のモーフィン、そしてウ〝ォルデモートの父、トム・リドルの事を『憂いの篩』という記憶をある程度保存し、見る事ができる。それを使い、ハリーは実際に見たようだ。

「マールウ〝ォロはスリザリンの子孫、ということですごく傲慢でプライドが高かった」

「踏ん反り返った我が儘大王？」

「ぷっ……そうだね。そんな感じだ」

ハリーはクスクスと笑う。

「ダ、ダンブルドアが言うには家系がそうみたいで、このマールウ〝ォロの数世紀前にはもう先祖の遺産を使いきっていたんだって。だから貧困な生活でますます怒りっぽくなっていった……」

（あいつも金使いは荒かったけど……一族皆か）

俺はため息をつく。

「まぁ昨夜はこのくらいだったね。また授業があったら話すよ！」

「分かった」

「……あ、授業」

ポツリとハリーは呟いて談話室を慌てて出て行った。

（……大変だな）

俺は椅子に座ったまま杖を振り紅茶を机の上に出した。手を伸ばし、紅茶を飲んだが思ったより熱かった。

（熱っ……）

俺は紅茶を机の上に置く。

「無理だよっっ」

（……ん？）
何やら泣きそうな声が聞こえた。
「僕は君と違うんだ！君は簡単に出来るけど僕は……僕は……」
「じゃあそのままいつまでもウジウジしていろよ！！」
バタバタと駆けていく足音が遠ざかって行く。
「僕なんて……」
涙声でボソボソと呟いている。
（……ったく）
俺は声をかける。
「そこの泣いている子、こちらへ」
「え？ぼ、僕？」
まだ涙声に近かったが声の調子からして泣き止み始めているのだろう。その子は驚きながら言った。
「ああ。そこの椅子に座って？紅茶をご馳走してあげる」
俺は向かいにあるだろう椅子を指す。
「で、でも……」
泣いていた子はゴニョゴニョと呟く。
俺はニコリと笑って言う。
「何か？」
「な、何でもありません」
泣いていた子はすぐさま駆けてきて椅子に座った。
俺は杖を振りその子の分の紅茶を出した。
「あ、ありがとうございます」
「別にいいよ。暇だったし」
俺はアッサリと言う。……事実だしな。
「で、喧嘩したのか？」
うっ、とその子は戸惑い、話した。
「……はい。僕の変身術を見てくれていたんですが……出来なくて、それで……言っちゃったんです」
君とは違うって、とその子は言う。

「友達も、辛抱強く見てくれて……けれど僕はその友達に……」
俺は紅茶をゆっくりと飲む。
「なら、その変身術が出来れば良いんだな？」
「え？……む、無理ですっ。だって僕は―」
「無理じゃない。どんなのをしていたんだ？」
俺は話しを遮り、どんな事をしていたか聞く。
「ネズミをゴブレットに変える、です」
「ゴブレット、ねぇ。やってみて？」
子供はポケット？からネズミを出して杖を振るった。
だがチューと鳴くネズミの声が聞こえた。
（んー……ハッキリとは分からないな）
こんな時、目が見えないのが嫌になる。生徒がどんな風に振ったのか分からないのだ。
（直接教えた方がいいかな？）
俺は席を立ち、子供の隣に移動した。
「あ、あの……」
「変身術のコツを教えてやる」
俺はニヤリと笑いながら言う。
「変身術は想像力が必要だ。何がどれに変わるのかハッキリと想像する。そして―」
俺は子供の手を掴み、動かした。
「正しく杖を振る。あとは回数を踏んでいけば出来るよ」
「は、はいっ」
子供は少し時間を空けた後に杖を振った。
「で、出来た！」
「お？よかったな」
どうやら一発で出来たみたいだ。
（筋が悪いわけではないみたいだな…）
「あ、ありがとうございます！」
お礼を言ってからバタバタとその子は去って行った。……きっと友

達に話しをしに行ったのだろう。
（さ、俺も紅茶を飲むか）
俺は冷えた紅茶を口へと持っていき飲み干した。

百二十九話

（……ん？）

何やら背後からこちらへ向かってくる気配が感じられる。

（空気を切る音からして……インク瓶かな？）

このままでは後頭部に当たって痛いので俺は当たらない程度に右へ寄った。

インク瓶だろう物は俺には当たら無かったが割れるような音が聞こえなかったのできっと『浮遊呪文』を使っているのだろう。

「避けんじゃねーよ！！」

声が幼い。一、二年生辺りか？

「兄ちゃんからお前はホグワーツでただ一人のもんもー？居てはいけないって言ってた！」

だからお前を捕まえてほうり出してやる！と幼い襲撃者は言った。

（もんもー？……盲目の事か？）

「皆、行くぞ！」

「「「おーっ」」」

襲撃者の周りに友達だろう子供が四人ほど。皆、声を揃えてやる気満々だった。

（廊下での杖の使用は禁止なんだが……）

去年といい、見つからなければＯＫな奴らなんだろう。

（まぁ俺も守ってないからいいか）

俺はロープから杖を抜こうとした。

「フィルチさん！こっちです！」

幼く、しかし大きな声でフィルチを呼んだ。

（この声は……）

変身術が出来ない、と泣きべそをかいていた子だ。

「ちっ……行くぞ！」

ちびっ子達は蜘蛛の子のように散らばった。

「別に助けなくても良かったんだよ？」
一、二年生くらいに劣ったりはしてないし、と俺はその子に言った。
「す、すみません。けれど先輩困ってたみたいだったし…」
ドンドンと声は小さくなり、最後近くは全く聞こえなかった。
俺は頭をガシガシとかいた。
（ナメられたのか？でも、心配しての行動だしな）
「ま、ありがとな」
「え？」
俺は再度言った。
「助けてくれたんだろ？ありがと」
「でも、僕が助けなくても先輩は……」
「お前が助けてくれたからむやみに傷つけずにすんだ。それは立派なことだ」
子供は何も言わなかった。
そして震える声で言った。
「初めて、です。そんなことを言われたのは」
「そう？ところで…」
俺は深く聞かずに気になっていた事を聞く。
「名前何？」
子供はオドオドしながら答えた。
「あ……グリフィンドール寮一年生のフィンガン・ニスカです」
「俺はグリフィンドール寮六年生、ライカ・ヒブカ」
俺はよろしくな、と声をかけた。
「はい！」
フィンガンは元気に答えた。
「先輩、何をしているんですか？」
「……何だっけ？」
「え？」
どこかへ行こうとしたのは覚えてる。……何処だっけ？
「……忘れたんですか？」

「……忘れた」
（……何を頼むんだったっけ？）
何かを頼むためにわざわざ出てきたんだが……
悩んでいる俺に怖ず怖ずとフィンガンは聞いてきた。
「せ、先輩はホグズミードへ行かなかったんですか？」
「あーー！！」
「ど、どうしたんですか？」
いきなり叫んだ俺に驚きながらもフィンガンはこう言った。
「……思い出した。フィンガン、またね」
「え？」
俺はよく理解していないフィンガンを置いて走り出した。
（ホグズミードで思い出した！）
フィンラの餌が予想以上に早くきれたからダンブルドアに頼もうと思ってわざわざ寮から出てきたんだ！
俺はドタドタと校長室へ入り込んだ。
「どうしたのじゃ？そんなにドタドタと入って来たりして……」
ダンブルドアはため息をつきながら校長室へドタドタ入って来た俺に言った。
「ダンブルドア！フィンラの餌が無くなった！」
「そんなことで急いで来たのか」
俺は眉を潜める。
「そんなこと？じゃあフィンラの晩御飯にはフォークスの生肉を―」
「分かった。すぐに取り寄せよう」
ダンブルドアはすぐさま答えた。
「初めからそう言えば良かったんだ」
「……タツキ、わしは君から見たらどんな立場なんじゃ？」
「え？爺」
「……」
ダンブルドアは黙ってしまった。
「え？なら……校長？」

「校長は今、わしの職業じゃろう！？」
「ああ……」
俺はどうでもいいように答える。
「……餌を買ってこぬぞ？」
「ならフォークスが今日の晩御飯だね」
「……すまん。買って来るからそれは止めてくれ」
（これでフィンラの餌は確保出来た、と）
「じゃあよろしく！」
俺はヒラヒラと手を振りながら校長室の扉へと向かった。…出る際にため息が後ろから聞こえた気がしたが、気にせずに俺は扉を閉めた。

百三十話

「あ、先輩！」
トタタとフィンガンが俺の元へ駆けてきた。
（すっかり懐かれたな……）
俺は駆けてくるフィンガンに声をかける。
「そんなに慌てなくても……どうした？」
「勉強教えて下さい！」
「……どれだ？」
「魔法薬学です」
（魔法薬学ね……）
俺は頭の中で今日の予定を確認していく。
（……空いてるな）
授業は入っていなかったので、俺は引き受けた。
「いいよ。ならグリフィンドールりょ―「先輩ぃぃぃ！」……レイチェルか」
レイチェルが物凄く大声で俺の元へ寄ってきた。
「闇の魔術に対する防衛術を教えて下さいぃぃ」
涙声になりかけながらレイチェルは叫んだ。
「……先輩、この女性は誰ですか？」
「ああ…レイブ―」
「先輩！誰ですか、こいつ」
俺が答え終わる前にレイチェルが話しかけてきた。
「こっちは―」
「先輩、誰ですか？」
「……」
今度はフィンガンが俺の言葉を遮る。
「貴方こそ誰？先輩の何？」
「こちらこそ聞きたいですね。貴女こそ何なんですか？」

俺は何度も遮られたので黙っていると二人が直接言い合い始めた。
俺はそんな二人に向けてポツリと呟く。
「……もう教えない」
「「すみませんでした！！」」
二人はすぐさま言い合いを止め、謝る。
「二人なら大広間だね。行こうか？」
あ。個人で自己紹介していてね、と付け加えて言った。
「「はい！！」」
二人は元気よく答え、ついて来る。
（……犬みたいだな）
俺がクスクスと笑っている間に二人は自己紹介をし、仲良く話しをしていた。
（……ん？）
ペタペタと何やら軽い足音が俺の横から聞こえた。
『ニャー……』
「フィンラ？」
俺が止まるとフィンラはズボズボと肩まで上り、ほお擦りをしてきた。
（……何か変な物でも食べたか？）
俺は妙に甘えてくるフィンラを疑いつつも大広間へ向けて足を進めた。
ギィィと大広間の扉を開いて俺はグリフィンドール寮のテーブルへ座った。後ろで話していた二人も俺に続いて座る。
「分からないのはどこ？」
俺は二人に聞いた。

勉強を始めて数時間。
すでに分からないところは教え終わり俺は読書、フィンガンは課題、
レイチェルはうたた寝をしていた。
「うわぁぁぁぁあ」
うたた寝をしていたレイチェルは叫びながら起き上がり大広間を出
て行った。
「ど、どうしたんですか？」
「フクロウに落ちた夢でも見たんだろ」
フィンガンの質問を俺は適当に答える。
「フクロウ？」
「いずれ先生方が教えてくれるよ」
俺はペラリとページをめくる。
「……先輩？」
「……」
俺はもうフィンガンの言葉を聞かずに本へ集中していた。
フィンガンも答えないと分かったのか、何も言わなくなり俺の本を
めくる音が大広間に響いた。

百三十一話

「ウ〝ォルデモートの母親？」
談話室にてダンブルドアの授業内容を聞いていた俺はハリーに聞き返した。
「うん。ウ〝ォルデモートの母親はウ〝ォルデモートを産む時にお金が無くなったから家宝の一つ、スリザリンのロケットを売ったんだ」
俺は体が固まった。
「ス、スリザリンのロケット！？」
「う、うん。ウ〝ォルデモートの母親はスリザリンの子孫だから……」
（売った、か……）
俺は手の平を強く握る。
「しばらくして母親は死んだ。だからウ〝ォルデモートは孤児院に預けられた。ウ〝ォルデモートは当時から戦利品を集めるのが好きな子供で自分が妙な力を持った特別な存在と思っていた。そして魔法使いだと知っても動揺しなかった」
「……当時からある程度魔法が使えたって事か」
「そして蛇語もね」
俺は握りしめた拳をゆっくりと開いた。
「……それが昨夜の授業内容？」
「うん。昨夜はそこまでだった」
「分かった。ハリー、そろそろ授業だろ？」
「あ、ホントだ」
カタン、とハリーは席を立つ。
「じゃ僕行くね」
ハリーはバタバタと談話室を出て行った。
俺は座った状態から横たわりソファーへと体を沈める。

「まさか売ったなんてな……」
俺は思わずため息をついた。
「……見つかるか？」
流石に千年前に無くなったとかではないし……
ブツブツ呟いている俺の元にフィンガンがやって来た。
「先輩？あの……呼び出されてます」
ソファーに横たわっている俺に遠慮がちにフィンガンが聞いてきた。
「呼び出し？」
「は、はい。今グリフィンドール寮前で待ってますが……」
（……知らないやつの魔力だな）
確認を取ると確かに寮前に人がいるが知らない奴のだ。
（まぁ、伝言か何かかもしれないし……顔くらいは出すか）
「分かった」
俺は体を起こし、ソファーから離れる。
ガチャリと廊下へ出るドアを開くと二、三人が待っていた。
「ちょっと面貸してくれない？」
（……出るんじゃなかったかな、これは）
俺はキッパリと言った。
「嫌です」
「拒否は認めない」
俺はぐいっと腕を捕まれたかと思うとズルズルと引きずられて行った。
引きずられて十分くらいか？俺は今は使われていない空き教室へ連れて来られた。
「テメェ……この間は弟が世話になったらしいな」
「弟？あぁ……あの一年生？なら何もしてないけど？」
「嘘をつくんじゃねぇ！」
（いやいや、何もしてないけど……）
俺はブンブンと首を横に振る。
「弟がなぁ、お前にこの間殴られたって言ったんだ。かわいい悪戯

した弟にお仕置きだって言ってしたらしいな？お前のせいで弟は今見るに見れないくらい顔が腫れてる」

（へー……いつの間にそんな事になったのやら）

というか俺、生徒を殴るなら手加減はするよ？

「俺は殴ってない」

俺がそう言うとバキィと顔を殴られた。

（力だけはあるんだな……）

「弟の痛みはこんなもんじゃないぜ？やるぞ、おまえら」

それからはもう俺がボコボコに殴られるなり蹴られるなり暴力を受けた。

幸いなのはある程度殴り気がすんだのか、襲われるということはなかった。

「弟にはもう近づくなよ、盲目さん？」

こう俺に言ってから奴らは去って行った。

「ったく……力だけは強いんだな」

あちらこちら痛む体を無理矢理起こす。

「ま、伊達に奴隷をしてたわけじゃないしな。これくらいなら」

これくらいなら放っておいても治る。

俺は立ち上がり軽く飛んだりしてみる。

「ん、動くな」

俺は体が動く事を確認してから教室を出て行った。

百三十二話

「んー……」

現在、俺は大広間に誰かの魔力がないかを確認している。

「……誰もいないな」

それもそのはずだ。今日はクィディッチ試合で皆、それを見に行っている。だからこそ今日するしかない。

（それにこの大広間で最後だしな）

俺はグリフィンドール寮から大広間へ向かう。

廊下は静かで、遠くから歓声の声がわずかに聞こえるくらいだ。

そんな廊下を俺は駆け足で去って行く。

バタン、と大広間の扉を開いて中へ入る。

（さて……やるか）

俺は大広間に人が入らないように呪文をかけ、天井に向かって魔力を放った。

ビリビリと音が聞こえた後に大広間中に俺達がかけた魔法が確認出来るような魔力が満ちる。

此処では大広間にかけた魔法と外にかけた魔法が確認や調整、追加などが出来る。最も外にかけた魔法は確認・調整が出来るだけなので何かを追加したいならば外に出なければならない。

俺は大広間に満ちた魔力を記憶の中と照らし合わせる。

（……ん？）

サラザールが企画した守護魔法……俺達も協力した魔法だが、何かがおかしい。

（何かを押さえてる？）

何か守護魔法に入っているがそれが効かないようにされてある。

（……何だ？サラザールが押さえたならばそれなりの理由があるんだろうが）

時間も限られているのでとりあえずそれ以外の確認を進めるために

次へと向かった。

（よし、あとは残したやつだけだ）

意外に時間がかかってしまった。早くしないと生徒が戻って来てしまう。

（んー…これ何を押さえているんだろうな？）

俺は腕を組み、考える。

（生徒に危害はないと……思う。それにサラザールは『秘密の部屋』を作ってたし）

あ、今思い出してもイライラする。だがサラザールは『穢れた血』を排除するといっても仕掛けを二つ、三つ作ったりはしない。

それに『秘密の部屋』のバシリスクだけでも駆逐しようと思えば出来るしな。

（それに……守護魔法に仕掛けるほど面倒な事はしないし）

これには俺達も協力している。……最も協力したと言っても魔力をぶち込んだだけだがな。

（一番は勘が違うって告げてるしな）

俺は勘だけは抜群にいい。それが危害を与えないと告げているので平気だろう。

（……ん？）

ガヤガヤと生徒達の声が聞こえる。

（あー…もう戻ってきたのか。……もういいか）

俺はバリッと押さえていた呪文を解き、大広間に呪文を加えてから元に戻した。

そして人避け呪文を解く。

（大広間これで終わり！）

何やら大急ぎで無理矢理し終えた感じがあるが、生徒に疑いは持た

れたくない。
（それにもし何かあったら俺が止めればいいか）
バタン、と扉を開いて俺は大広間を後にした。

百三十三話

時間はどんどん過ぎていき、ホグワーツはクリスマスを迎えようとしていた。
ハリーやハーマイオニー、他にもいろんな生徒がスラグホーン先生主催のパーティーに出たり、寮にいたりで静かな廊下を俺は厨房から貰った一番度数が低い酒を水で薄め、最早酒と言えるか怪しい物を持って廊下を歩いていた。
（もうそろそろ着くな）
俺が目指しているのはサラザールが月がよく見える、と言っていた窓がある場所だ。
（まぁ俺は見えないが…）
見えないが、今日は月を見上げたい気分なのだ。それに確か今日は満月だ。見上げながら酒を飲みたくなるもんだろ？
（まぁ見つかっても平気なように度数を少なくしているからな……）
酒より水みたいなもんだから酔ったりも無いしな。
（お、ここだ）
俺はサラザールが言っていた場所の廊下へと着き、窓へと乗り出し座った。
風が気持ち良く髪を撫でた。
（気持ち良いな）
俺は持ってきた酒をつぎ、空を見上げながら飲む。
（きっと……きっと此処から見る月は綺麗なんだろうな）
空になったゴブレットに酒を注ごうと酒を入れている容器を傾けた時だった。
「……此処で何をしているんですか？」
ピタリと手が止まる。
「……マクゴナガル先生」
見回りに来ただろうマクゴナガル先生が俺に声をかけたのだ。

「何って……月を見たくなったんですよ」
だから空を見上げてます、と付け加える。
「貴方は目が見えていないでしょう？」
「見えてません。けれど……まぁ此処から見るのが綺麗だと聞いたのを思い出して……」
見たくなったんですよ、とマクゴナガル先生に言った。
マクゴナガル先生はそうですか、と言い別の事を聞いてきた。
「……それは何の飲み物ですか？」
「一番度数が低い酒を水で薄めた水です」
「水ではなく酒ですね」
今は飲んではいけません、とマクゴナガル先生に酒を入れている容器を没収された。
「……マクゴナガル先生」
俺はほんの少しゴブレットに注いでいた酒を飲みながら聞く。
「此処から見る月は綺麗ですかね？」
「……ええ、綺麗です」
「……そうか。変わらずに綺麗、なんだな」
フワリと風が優しく吹いた。
（あー……酒飲みたくなるな）
今度は高い度数の酒を持ってこよう。
（……なら、ハリー達が卒業してからか）
マクゴナガル先生は学生であるかぎり酒を飲む事を許さなそうだしな。
「……ん？」
つぅと冷たい何かが頬を伝う。
「雪ですよ。今、降り始めましたね」
マクゴナガル先生が丁寧に教えてくれた。
「雪か……」
少し手を伸ばすと徐々に伸ばした手が濡れていくのが分かる。
「積もりますかね？」

「積もると思いますよ。毎年積もっていますから」
俺は伸ばしていた手を引っ込める。
「さて、ライカ……そろそろ中へお戻りになっては？もう充分でしょう」
「……そうですね」
少し冷えてきたので俺はストン、と窓から下りた。
「それでは寮へ戻ります。おやすみなさい、マクゴナガル先生」
「就寝時間後は出歩かないでくださいね。おやすみなさい」
俺はスィとマクゴナガル先生の隣を通り、暖かいグリフィンドール寮へと向かった。

百三十四話

クリスマス当日。ハリー達は隠れ穴へと泊まっており、俺はホグワーツへと残った。
「今日はクリスマス・パーティーか」
ならご馳走にクラッカーがあるな。ただ今年はいつもより残っている生徒が多いから同じテーブルで、とはならないかもしれない。
（まぁ賑やかにはなるからいいか）
トントンと階段を下り、談話室へと入る。
「先輩！」
「フィンガン？帰らなかったのか？」
フィンガンは俺の元へやって来る。
「はい。今は家よりホグワーツの方が安全ですから！それより先輩……」
フィンガンはゴソゴソと音を立てている。
「あ、あった。先輩！これ、クリスマス・プレゼントです」
「へ？」
いきなりフィンガンにドサリとプレゼントを渡された。
「これは？」
「クリスマス・プレゼントですよ。先輩の出身が日本だと聞いたのでご家族の分もあります！」
あ、ちゃんとマグルのやつですよ、とフィンガンは付け加えた。
「……ありがとう」
俺はフィンガンにニコリと笑う。
「へへ……じゃ、友達のところへプレゼント渡しに行ってきます」
フィンガンは何故かふくろうを使わずに自分で渡しに行った。まぁ、手渡しが良いって奴もいるし、フィンガンはそちらが良いのだろう。
（……ダンブルドアとリーマスへやるか）
俺はフィンガンの貰ったプレゼントを持ちながら朝食のために大広

間へと向かった。
しかしこれが間違いだと後で気づくことになる。
「先輩、これクリスマス・プレゼントです」
「あ、私のも！」
「あ、ライカ君だーはい、クリスマス・プレゼント！」
あちらこちらでクリスマス・プレゼントを貰う……というか押し付けられる。しかも殆ど女子から。
（フィンガンのを持ってきたからか…）
どうやら最初の奴がフィンガンのプレゼントを持っていた俺を見て、
「あ、私もあげる！」などと言い押し付けてから雪崩のように数が増えた。
（ダンブルドアとリーマスで処理出来るか？）
最早持つことが出来ないくらい数が多く、俺は浮遊呪文を使って移動していた。
そしてその上にまたポンポンと置かれる音が聞こえる。
（……いざとなったら騎士団メンバーに処理してもらおう）
俺はバタンと大広間の扉を開け、中へ入った。
朝食を食べ終わる頃にはレイチェルから貰ったプレゼントにハグリッドからも貰ったので二つ加算されたプレゼントを浮遊呪文にて浮かし、大広間から校長室へと向かった。
俺は合言葉を言い、校長室まで階段を上るとノックもせずに扉を開きズカズカ入っていく。
「ダンブルドア、クリスマス・プレゼントを持ってきた」
「ノックくらいはしてくれるかの？」
俺は校長室にドサリと浮遊呪文で浮かせたクリスマス・プレゼントを下ろす。
「……それ全部じゃないじゃろうな？」
「え？ダンブルドアのだよ。リーマスのも含めているけど」
「……嘘じゃろ？それ、どう見てもお主が貰ったものじゃないのかね？」

「いらない。それに俺だけなら腐るだけだし」
一人ではこの量は捌けない。それに中身が何か聞きまくった結果、お菓子が多かったしな。
「じゃよろしくー」
「タツキ!?ちょっー」
俺は最後まで聞かずに校長室の扉を閉めた。

百三十五話

クリスマスが明けてからグリフィンドール寮の談話室に六年生が喜ぶ掲示が貼られた。
―「姿現し」練習コース
十七歳になった者、または八月三十一日までに十七歳になる者は魔法省の「姿現し」の講師による十二週間の「姿現し」コースを受講する資格がある。
参加希望者は、下に氏名を書き込むこと。
コース費用　十二ガリオン―
（姿現しか……俺はもう出来るしな）
俺はそっと名前を書こうと群れている生徒から離れた。
「ライカ！」
「ん？ハリー？」
俺はソファーに座り紅茶を飲んでいるとハリーが声をかけてきた。
「リストにライカの名前が無かったから書いておいたよ！」
「ぶっ……ゴメン、ハリー」
俺は杖を振り、吹きこぼした紅茶を綺麗にする。
「……名前を書いた？」
俺は再度ハリーに聞く。
「うん。ライカのもね」
「あぁ……うん。ありがとう、ハリー」
（書いたのか……）
俺は乾いた笑みを浮かべる。
（また受けるのか）
まぁ書いてしまったのだから仕方ないか。
「一緒に受かろうね！……て、ライカ誕生日いつ？」
「誕生日？ああ……」
俺は言い淀む。

「ライカ？」
「んー…遅いよ。だからハリーと同じかな」
「ホントに！？」
ハリーが嬉しそうにブンブン肩を揺らしながら聞いてきた。
「う……うん」
俺は頭がガクガクとなりながら答える。
「良かった。皆僕より前だったから……」
一人だったんだよね、とハリーが言う。
「大丈夫だよ、ハリー。そうそう一回で試験に受かる奴なんていないから」
「それは言い過ぎじゃない？フレッド、ジョージは一回で合格してるよ」
「へー…あの双子は一回目で合格したんだね」
俺は紅茶を継ぎ足しながら答える。
「……え？ホントに一回は珍しいの？」
俺の言葉を聞いてハリーが不思議そうに聞いてきた。
「ん？いや、合格するやつは合格するよ」
落ちる奴は落ちるけどね、と付け加える。
「そっか……」
「ハリー？」
先程とは違う声の調子に俺はハリーの名前を呼ぶ。
「何でもないよ」
ハリーは名前を呼んだ俺にこう言った。
（何でもない、ね……）
そんな感じの声の調子ではなかったが何かあったらハーマイオニーやロンに相談するだろう。
（……ん？）
いつの間にか飲んでいる紅茶が無くなっていた。
（いつの間に……）
俺は部屋に茶葉があったかどうかを思い出す。

（確か、無いな）
これで最後だったはずだ。
俺はガタンと席を立つ。
「ライカ？」
「ちょっと用事出来たから出ていくね」
俺はハリーにこう告げてグリフィンドール寮を出て行った。向かった先は地下室だ。
コンコンと地下室のとある扉をノックする。
「入れ」
俺はバタンと扉を開く。
「セブルス、紅茶飲みたい」
「帰れ」
セブルスは俺の言葉を聞くなり即座に答えた。
「俺、カモミールね」
「帰れと言っているだろう！」
俺はドサリとソファーに座る。
「はぁ……仕方ないな」
セブルスはテーブルに紅茶……匂いからしてカモミールか。それを出してくれた。
「ありがとう」
俺は紅茶を飲む。…うん、久々にセブルスの紅茶を飲んだ。
セブルスの部屋には静かな沈黙が続く。けれど不愉快なものでは無かった。
やがてセブルスが口を開く。
「我輩は採点で忙しい。飲んだら帰れ」
セブルスがこう言った後にカリカリと音が響き始める。
俺はカモミールの匂いを堪能しながらゆったりと時間を過ごした。

百三十六話

ダンブルドアの授業はウ〝ォルデモートの学生時代と卒業後だった。
「殺した?父親とその家族を?」
「うん。父親はマグルで母親を捨てて家庭を作っていたからかな?僕にはよく分からない。けれどあいつは、その家庭を殺したんだ」
ハリーは一息ついて話し出す。
「ウ〝ォルデモートはスラグホーン先生にホークラックスと言うのを聞いたんだけど、霧が現れて分からなかったんだ」
(ホークラックス?どこかで……)
どこかで聞いたというか、引っ掛かる。
けれど俺はハリーに別の事を聞いた。
「霧?妨害でもされたのか?」
「よく分かったね。スラグホーン先生は見せたくなくて、記憶を変えたやつをダンブルドアに差し出した。僕の宿題はスラグホーン先生から本当の記憶を貰うこと」
「……頑張って」
本当の記憶を手に入れる……並大抵の事ではない。ハリーは苦労するだろう。
「うん。手に入れないと授業ないしね」
(ハリーって以外と苦労人?)
苦労させているのはダンブルドアだろうが。
「ライカ。ライカはホークラックスを知らない?」
ハリーはふと、俺に聞いてくる。
「ホークラックスね……引っ掛かってはいる」
「ホント!?」
「けど思い出せない。思い出したら伝えるよ」
「そっか……分かった」
ハリーはしょんぼりとしたように言う。

（ホークラックス……ね。調べてみるか）
俺はガタンと席を立つ。
「ライカ？」
「ちょっと出ていくね」
「う、うん……」
俺は談話室を出ていく。
（時間がかかるかもしれないが……）
調べてみる価値はありそうだ。
俺はトントンと私部屋へと向かう。
（俺の部屋にあればいいがな）
そうでなければヘルガ、ロウェナ、サラザールの私部屋に不法侵入をするしかな……い。だけどな……うん。なるべく入りたくはないんだ。
（探して、出なかった時に考えよう）
あいつらも何かしら侵入対策はしているだろうし。
そう結論づけた俺は私部屋の扉を開く。
（あー……片付けが途中だったな）
所々、床に放置していた物品に躓きながらも俺は本棚へと、向かった。
（えーと……ホークラックスだったよな？なら……『闇の魔術』辺りを調べればいいか？）
大きさが不揃いな本に指を当て、右から左へと移動しながら書籍名を確認していく。
（……ダメだな）
俺はため息をついて、確認を止める。
（抜けすぎている）
書籍はあちらこちら抜けていて俺の手が本にぶつかり、どこまで確認したのかわかりにくくなってしまう。
「片付けが先か」
俺はひょいとしゃがみ込み、床に放置してある物を拾う。

（ハリーが先に解決するかもな、これは）
使っていない期間があるとはいえ、物品はかなりの数だ。一日じゃ終わらないだろう。
「住み込みは……ダメか。フィンラがいる」
物品が多い部屋にフィンラを連れ込みたくはない。……薬品も僅かながらあったはずだしな。
「ならやっぱり地道に片付けか」
俺はドスンと座り込む。
「分別からしないとな。こいつは……材料だから材料入れに……」
材料入れている棚へと向かうとここも何やらゴチャゴチャ。
「……俺、何をしたんだ？」
昔自分が何をしたのか気になりつつ棚を整理していく。
「えーと……こいつは先程の場所かな？」
いくつか整理をしていき、下にある材料を俺は先程別の材料を置いた少し上の方に置くために立ち上がる。
「よっと……」
背伸びをし、何とか材料を置く。
「……もう少し小さくて良かったか？」
しかし上までなんとか使えているので今すぐに、でなくてもいいだろう。
俺はガチャガチャと整理していく。

「ん？今何時だ？」
材料棚の整理が終わり、一段落したところで何時なのかを確認する。
「……就寝時間過ぎてないか」
時計はすでに就寝時間を過ぎていた。

「……戻らないとフィンラいるしな」
俺は私部屋から出ていく。
（今日の見回りの先生は……）
セブルス？と……マクゴナガル先生？何故二人もいるんだ？
（今日二人だったか？）
そんな見回りでは無かったはずだが……
（何かあったのか？）
だがそれなら好都合。俺が見つからない確率が上がる。
トントンとグリフィンドール寮へと階段を下りる。
階段から俺は静かな廊下を俺は歩いていく。
（これはこれで好きなんだよな）
生徒がギャアギャア騒いでいるのも微笑ましいものだが静かなホグワーツも良いものだ。
グリフィンドール寮の前にある図画に合言葉を言い、中へと入れてもらう。
（さて、早く部屋に戻ろう）
フィンラがお腹すいているはずだ。
俺は男子寮へと向かうために階段を上った。

百三十七話

（……ハリーはいないな？）

俺は現在ハリーから逃げている。理由は今日、『姿現し』の練習第一回目だが講師の先生が昔、ジェームズ達と受けた時と先生が同じなのだ。流石に皆がいる前で何だかんだ聞かれたくはないので今、ハリーから逃げているのだ。

（流石に行ったか）

談話室にハリーの魔力はない。練習場所の大広間にいる。

俺は寮の部屋から談話室へ下りる。

（……さて、私部屋へ行きますか）

汚い部屋の掃除をしないとな。

（それに……ホークラックスも調べないとな）

ホークラックス、と俺は思わずポツリと呟いた。

下りてきた談話室にはポツリポツリ多分七年生がいるだけで、俺はそこを素通りし廊下へと出る。

トントンと足音が聞こえるくらい廊下は静かだった。

（そういえばまだ授業中か……）

どおりで廊下が静かなわけだ。

俺は静かな廊下を歩いているといきなりガシリ、と腕を捕まれた。

「もしかして今、暇なのか？よければ話し相手をしてくれないかな？」

「……そういうのはダンブルドアに頼んでくれないか？スラグホーン先生？」

俺は腕を掴んでいるスラグホーン先生がいるであろう場所を睨みつける。

「ダンブルドアより君と話しをしたほうがよっぽど有意義ではないかね？」

「いいや。俺はそうは思わない。だから離してくれ」

しかしスラグホーン先生は離してはくれない。それどころか……
「うん？相手をしてくれる？いやー嬉しいね。年寄りになるとどうも寂しくなってね」
スラグホーン先生はなんと俺を引きずり始めた。
「いや、その前に病院へいけ」
誰も話しを聞くなんて言っていないぞ。
しかしスラグホーン先生は何も聞こえていない、と言い俺はズルズルと引きずられていく。
「糞爺。早く死ねや」
「誰が爺だ！」
俺がポツリと言うとスラグホーン先生は素早く答えた。
「そこは聞こえているんだな」
俺はスラグホーン先生に聞こえるように言う。
「何のことかね？」
（……こいつ！）
老人だと言って都合が悪い時は聞こえないと言っているな。
「……死ね、爺」
「ほう？君がダンブルドアにそう思っていたなんて……」
「誰がダンブルドアだと言った？」
これだから年寄りは……無駄に生きていないで早く死ねばいいのに。
ズルズルと引きずられながら俺はスラグホーン先生が早く死なないかな、いや、いっそのこと殺すか？などと考えていた。

（……こ、殺したい！）
俺は今、右手をつい左腰の昔あった剣の場所へ持って行き、拳を握ったり、解いたり、時々剣を抜くような仕種を繰り返していた。

（クソッ……ここに剣があったら）
「抜いて殺るのに」
「何の話しだ!?今はハリーの話しをしていたんだが!?」
「話しが長いんだよ、爺」
俺がスラグホーン先生に捕まってから半日以上……時刻はもう夜になっていた。
「ずっと自慢話しばかり……それは殺して欲しいんだよな？」
「いや、違――「スラグホーン先生！」……ハリー」
スラグホーン先生が俺の言った言葉に答える前にハリーとロンが部屋に入ってきた。
「ハリー……ロメルダはどこだい？」
「スラグホーン先生急にお邪魔してすみません。ロンが惚れ薬を飲んでしまったんです。ですから治療薬をお願いします。マダム・ポンフリーのところには連れていけなくて……」
ハリーはロンの言葉には答えずにスラグホーン先生に惚れ薬の治療薬を頼んだ。
「君ほどの名手なら治療薬を調合出来ると思うが……」
（名手？ハリーが？）
ハリーが魔法薬学得意だとは記憶していないが……
（後で聞いてみるか）
「でも、ちょうど治療薬がある。飲ませよう」
スラグホーン先生はハリーに治療薬を渡し、ハリーはロンにそれを飲ませたのか二人はロンを何故か俺の隣に座らせ飲み物の準備をしていた。
「ダンブルドアに贈るつもりだったが……まぁ構わないだろう」
スラグホーン先生はこう言って俺、ハリー、ロンの前にグラスを渡した。
（この臭い……オーク樽熟成の蜂蜜酒？けれどそれだけじゃないな）
俺はグラスを鼻に近づける。
（毒が入っている。何の―）

「ロン！」
ガッシャーンとグラスの割れる音が聞こえた。
（まさか飲んだのか！？）
俺は急いでロンの元に駆ける。
「スラグホーン先生！」
ハリーがスラグホーン先生に呼びかけいる間に俺はロンを診察する。
（ちっ……分からないな）
俺は息が荒くなっているロンから離れ、俺に渡された飲み物を少し飲む。
（成る程……これか）
俺は魔法薬学の材料が置いてあるところへ行き、小さい手頃なサイズを見つけてロンの元へ駆ける。
「ロン、口に含め。少しは落ち着く」
俺はロンに小さい石……ベゾアール石を含ませた。
「スラグホーン先生はマクゴナガル先生とマダム・ポンフリー、後は……スネイプ先生を呼んで来て下さい。それくらいは出来ますよね？」
「あ、あぁ……」
スラグホーン先生はこう言うと部屋を出て行った。
「よくベゾアール石を思い付いたね、ライカ」
俺が大分落ち着いたロンの容態を確認しているとハリーが聞いてきた。
「あ？ああ……ベゾアール石は小さいやつが一つくらいは―……」
（ん？一つくらいは？）
これは誰がそういう風にした？
（確か、サラザールがそういう風にしたんだ）
そうだ。そしてその話しをした時に本を借りたはず……
（あ……）
思い、出した。借りた本にホークラックスについて書いてあった。
（あの本は確かに返した。まだ読んでなかったみたいでサラザール

が必要以上に迫ってきたからな……）
よく覚えている。
「……ライカ？」
「ハリー……ゴメン、用出来た。ロンは急に容態変わったりはしないと思うから頼んだ」
「え？」
俺はスラグホーン先生の部屋を飛び出す。
（返したからサラザールの私部屋にあるはずだ！）
バタバタと廊下を走り、階段を上る。
階段を上りきりバタン、とサラザールの私部屋を開ける。
（確か……本棚はこっちだったな）
俺は本棚へと近づき、書名を確認していく。
（あった……この本の）
俺はペラペラとホークラックスが書かれているページへと開く。
（……そうだ。これだ）
俺は内容を読み取っていく。
（……そうだ。だからサラザールは調べていた）
俺はパタン、と確認し終えた本を本棚に戻す。
（ハリーに教えないとな）
俺はサラザールの部屋を後にした。

百三十八話

「ハリー……時間あるかな？」
「ライカ？」
俺は談話室にいるハリーを呼ぶ。
「……どうしたの？」
「ホークラックスが何なのか、分かったよ」
「ホントに！？」
「ハーマイオニーとロンには……ハリーが伝えて欲しい」
「分かった」
今此処にいないハーマイオニーとロンへの説明を俺はハリーに頼んだ。ハリーは早く話して欲しくてすぐに答える。
「あと……ハリーが『魔法薬学』の名手だと言われている理由を話してくれる？俺の話しが終わってから」
「ＯＫ」
俺はハリーの答えから一息つき、話し出す。
「ホークラックスとは人がその魂の一部を隠すために用いられる物を指す言葉で分霊箱のことなんだ」
「分霊箱……」
「そう。……魂を分断し、その部分を体の外にある物に隠す。そうすれば体が攻撃され、破壊されても死ぬことはない。魂の一部が残っているからな」
「ウ〝ォルデモートはそれをやった？」
「さぁな……だがそれを行う一つの条件は人を殺す事だ」
まあ、やったとするならば誰がこの情報を漏らした事になる、と俺は言う。
「え？何で？」
「図書館へ行っている俺やハーマイオニーが見つけられなかった。ならば図書館にはその本が置いてないんだ。誰からか聞くしかない」

「でも、ライカは？」
ハリーが怖ず怖ずと聞いた。
「俺は知ったのは……秘密。これで分霊箱について終わり」
さて、と俺は話しを続ける。
「君が魔法薬学の名手だと言われている理由は？」
「……魔法薬学の教科書だよ」
ハリーは渋々と答えた。
「教科書？」
「うん。『半純血のプリンス』の教科書。ホグワーツにこの教科書が置いてあったんだけど、これにはすごく書き込みがしてあるんだ。それがまた見事に正しくて僕は今完璧に薬を作れてる。これがスラグホーンが言っていた名手の訳」
「へー……書き込みねぇ……そいつはすごく勉強したんだな」
「だと思う。教科書の文字なんてろくに見えなかったし。後は……時々呪文も書いてる」
「呪文？」
「うん。耳塞ぎの呪文とか色々。『闇の魔術』か『呪文学』が得意だったんじゃない？」
「……勤勉だな」
「まあ、お陰で僕が今助かっているんだけどね」
「ま、とりあえずハリーが名手だと言われた理由が分かったよ」
「ハーマイオニーは僕がズルしていると思っているけれどね」
俺は苦笑する。
「ハーマイオニーはすごく勉強しているからね。ハリーが教科書とは違うやり方で完成するのが悔しいんじゃない？」
「僕は嫉妬だと思うけど」
どちらにしてもギャンギャンと忠告するのは止めてほしい、とハリーは付け加えて言った。
「まぁ、自分でよく考えて使うんだね。呪文が危険になっていけば使うのは止めること」

「ハーマイオニーに似てる事を言うんだね。君も」
「それを他人に使って何かあってからでは遅いからね。ハーマイオニーも君を案じているんだよ」
それくらいは分かっているよね？とハリーに問う。
「まあ……ね。あ、ライカ。君は今どの教科を取っているの？」
全然会わないよね？とハリーは聞いてくる。
「今？『変身術』に『呪文学』、『闇の魔術に対する防衛術』の三つだよ」
「三つ！？君何処に就職するの？」
「秘密。だからハリー達ほど忙しくはないしあまり授業では会わないよ」
「三つなら会わないよ……まぁ僕は三つともとっているけれど」
でもどおりで会わないはずだ、とハリーが言う。
「まあ……同じ寮生だし、いつでも会えるよ」
「そうだね」
ハリーが相槌を打ってから沈黙が続く。
（そういえば……）
「ハリー、スラグホーン先生から記憶は貰った？」
「う〝……まだなんだ」
スラグホーンは僕を避け始めたんだ、とハリーは言う。
「でもダンブルドアの授業は？」
「分からない。けれどダンブルドアもすぐに手にするとは思ってないみたいだし、まだ時間はある……と思う」
「早く貰ったほうが楽とは思うけど……避けられてるかぁ」
「うん……スラグホーンに関しては色々考えてみるよ。ダンブルドアをいつまでも待たせるわけにはいかないし」
「いざとなったらハーマイオニーに聞いたら？」
俺はハリーに提案をする。
「……ライカに聞くよ」
「良い考えがでなくても良いなら聞くよ」

ハリーの答えに俺はすぐさま答えた。
「……やっぱりしばらくは一人で頑張るよ」
「頑張れー」
ハリーの答えに俺は棒読みで答えた。
「……」
「ハリー……帰っていい？」
「それを僕に聞くの！？自分で決めなよ」
「じゃあ帰る。またね、ハリー」
俺はクルリと向きを変え、男子寮へと続く階段に足を乗せる。
「そして帰るんだね。またね、ライカ」
その言葉を最後に俺は談話室を後にした。

百三十九話

談話室のソファーに腰掛け、本を読んでいるとハリーから声をかけられた。
「ライカ……昨夜の授業内容まだ話して無かったよね？」
ハリーが疲労の溜まったような声で声をかけてきた。
「うん。……それよりハリー、大丈夫？」
「大丈夫。話し終えたら嫌というほど寝るから」
ハリーはドサリとソファーに座る。
「昨日は……そうそう。始めにウ〝ォルデモートがサラザール・スリザリンのロケットとヘルガ・ハッフルパフのカップをヘプジバ・スミスから奪ったんだ」
そこからだったよ、とハリーは言う。
俺はボトリと本を落とした。
「ヘルガ・ハッフルパフ？」
「うん。ヘプジバ・スミスはヘルガ・ハッフルパフの子孫なんだ。それでハッフルパフのカップを受け継いでいた。スリザリンのは店から高額な値段で買ったって言ってた」
ハリーが本は机に置いておくね？と言ってから机にパタン、と本を置く音がした。
「けれどこの人はウ〝ォルデモートに二品見せた二日後にウ〝ォルデモートに殺された」
「……それで二品はウ〝ォルデモートに渡った？」
「証拠はないけどその可能性が高いね。その次はウ〝ォルデモートがホグワーツ教員になりたいとダンブルドアに面接に来た記憶を見たよ」
ダンブルドアはそれを断ったけどね、とハリーは言った。
「後はスラグホーンの記憶がいるみたいで……」
「あぁ……おあずけ状態か」

「ま……まぁそんなところ」
「先輩！！」
ハリーとシンミリとした空気になっていた中でフィンガンが元気よく声をかけてきた。
「ちょっと―……すみません、タイミング悪かったですか？」
シンミリとしている空気を察したのかフィンガンはこう聞いてきた。
「いや、大丈夫だよ。どうした？」
「『変身術』をまた教えて欲しいんですけど……」
「レポート？」
「はい」
「分かった。此処じゃあ少し狭いから広い席へ移ろう」
「分かりました！」
フィンガンはタタッと俺の側から離れる。……多分席を取りに行ったのだろう。
「ハリー、俺はフィンガンに『変身術』を教えに行くね」
「うん。あ、ライカ。この本読んでいてもいい？」
「俺が読んでいた本？別に構わないよ」
「ありがとう」
「じゃ行くわ」
俺はハリーの側から離れ、フィンガンの元へと向かった。

百四十話

ガタンッ
「ん？」
今、俺は私部屋にいる。用はもう終わっているのだがどうせなら綺麗にしたほうが良いよな？……と思い、掃除をしていたのだ。
そんな最中にガタンと音が響いた。
（気のせいか？）
ガタン、ガタタ……
しかし今度もハッキリと聞こえた。
「誰かいるのか？」
しかし何も返事はない。そうなれば当然、部屋には誰もいない事になる。……魔力もないしな。
ガタン……ガタタ……ドッシャーン……
（何かにぶつかったな？）
『クゥ……』
僅かに聞こえた声。しかし俺は聞き逃さなかった。
（今の声……）
大きさからして俺の部屋ではない。ならサラザール達の部屋か？
俺は魔力を自分の部屋以外にあるかどうかを探る。
（いた……ヘルガの部屋か）
俺は自分の部屋から出て、ヘルガの私部屋へ入る。
『クゥ？……クルキュー！』
鳴き声がしたと思ったらドスン、と勢いよく俺に突っ込んできた。
「ぐぅ……」
（み、鳩尾に……）
『クゥ？』
俺はあまりの痛さにうずくまっていると心配そうにペロペロと舐めてきた。

この生物は当時から貴重な生物で、今はもう絶滅している魔法生物だ。此処にいるのは昔、最後の固体をヘルガが飼っていたやつだろう。

（だが、ヘルガに飼われていた生物は皆“処分”したはずなんだが……）

ヘルガの許可をもらい飼っていた生物なんかは皆、俺が殺したはずなんだが……

（残っていたのか）

痛みが取れてきた俺は立ち上がる。

（こいつの名前は確か……）

「イエロー……？」

『クゥ！』

イエローは元気よく鳴く。

「よく生きていたな？」

『クゥ？……クルキュー……』

イエローは俺の側から離れ、ズルズルと何かを引きずって来た。

「何を……？」

『クルキュー！』

イエローは引きずって来た何を俺の手の平に乗せる。

（袋の……端？）

俺はそれを手繰り、袋の入り口を見つけ中へ手を突っ込んだ。

中を探っているとグシャリ、と何かに突っ込んでしまった。

（……）

俺は手を抜き、ベトリとした手を舐める。

（甘い……もしかしてこれは……）

ヘルガが隠していた食べ物？

（これを食べて生きていたのか……）

それにしても、俺達が去ってから約千年、毎日食べて無かったとしても今まで残っているというのは……

（どれだけの量を隠していたんだ？）

『クゥ？』
俺は莫大な量を隠していたヘルガに対してため息をつきながらこれからについて考える。
（殺す……しかないよな）
イエローは今の時代にいない生物だ。それが居たとなるとわんさか魔法省の奴らが来て、研究するだろう。
（それに……）
俺が死んでからも此処で一人、食材が切れるまで生き、そして餓死するよりは殺した方が良いだろう。
イエローはペロペロと俺が食材に突っ込んだ手を舐めていた。俺はそんなイエローを撫でる。
（……仕方ない、か）
ならば準備をしないとな。
俺はイエローから手を離し、ヘルガの私部屋を出ようと扉へ向かう。
『クルキュー！』
「……ん？」
嫌な予感がする。
俺はイエローの名前を呼んだ。
「……イエロー？」
『クゥ！』
元気いっぱいな声が聞こえた。……俺の足元から。
「……あのな、イエロー。お前は此処から出られないんだ」
生徒はまだ知らないだろうからともかく先生にばれたら騒ぎものだ。
『クゥ……』
イエローは弱々しく鳴いた。だから俺は理解したと思い、ヘルガの私部屋から出て行った。

『クゥ！』
……情けない事にグリフィンドール寮の部屋につき、そこでイエローが鳴くまでイエローがついて来ている事に気づかなかった。
（油断した……）
はぁー…と長いため息をつく。
（どうしようか……）
今すぐ帰すには時間が遅すぎる。逆に危険だ。
「だが、あまり一緒にいるとなー……情が移るというか」
俺が殺しにくくなる。
（殺る時は殺るが……）
いつもよりもあまり気分の良いものではなくなる。
（……仕方ないな）
「フィンラ、イエローを此処から出ないように見張ってくれる？」
ニャーと元気よくフィンラは答えた。
「頼むよ」
俺はイエローが出て行かないように魔法を施し、ベットへと向かった。

百四十一話

「ウ〝ォルデモートはライカの言った分霊箱を作っていた。七個も」
いつも通りにダンブルドアの授業をハリーは教えてくれた。しかし、七個？
「……多いな」
「うん。僕もそう思う。そしてそれ程ウ〝ォルデモートは死を恐れたんだと思う」
七つの分霊箱を作るくらいに、か。
俺はハリーに分霊箱について聞く。
「ハリー、それで分霊箱について何か分かっているの？」
「分霊箱の中で、僕が二年生の時に壊した日記。そしてダンブルドアが指輪を一つ壊した。残りの分霊箱はダンブルドアの予想だけど、僕もその可能性が高いと思う。一つは必ずウ〝ォルデモート……本体にある。それにハッフルパフのカップにスリザリンのロケット、それにグリフィンドールかレイブンクローがかつて持っていた所持品……要するにグリフィンドールとレイブンクローの縁の物、そしてウ〝ォルデモートがよく連れている蛇のナギニだ」
（……カップにロケットもか）
それにグリフィンドールかレイブンクローの縁の物……夏期休暇のダンブルドアの“遺品”の話しは分霊箱になる可能性……いや、なっているだろう品物を俺に聞いてきたのか。
「グリフィンドールの組分け帽子と剣は今だ無事だけど……他にもあるかもしれない、ってダンブルドアは言っていた」
「それらを探し、壊せって？」
「そうしないとウ〝ォルデモートは死なないし……」
（別にハリーに何もかもさせなくていいとは思うが……）
糞爺はハリーが他人に任せず、尚且つ降りたりしないことを知っている……いや、そこを先に理解したのか？まぁどちらにせよ、ハリ

ーがウ〝ォルデモートから逃げない事を利用している、と俺は思う。
「そして今度、ダンブルドアと分霊箱の一つを壊しに行く事になった」
「……そっか」
（なら私情は禁止、命令絶対になるか？）
俺は覚悟してハリーに聞く。
「ハリー……俺もついて行ってもいい？」
「え？」
「ダンブルドアには俺が伝えるから」
「うーん……無理とは思うけど、一緒に行けたらいい……かな？」
ハリーは俺の問いに疑問になりながらもこう言ってくれた。

百四十二話（前書き）

初めて主人公以外の視点を書きました。
……口調これでいいのか？等と思いながら書いたのでおかしいところがあるかもしれません。
それでも楽しんで『英雄後談』を読んで下さると嬉しいです。

百四十二話

（う〝ぅ……なんか腹痛い……）
何か変な物でも食ったかなぁ……
俺は『変身術』の授業を終え教室からフラフラと出ていく。
（……下痢か？）
だとしたら最悪だ。腹が痛いだけではなくトイレと仲良しにならなければならない。
（何か変な物……昨日食べたのは……）
あ、ヘルガの私部屋から勝手に持って来たお菓子。あれか？
（イエローが食べていたから平気だと思ったが……）
どうやら魔法生物と人間じゃ胃袋も違うのかもしれない。
（だがあと二時間あるしな……）
今日は『変身術』と『呪文学』がある日だ。『変身術』は終わったからあと二時間『呪文学』を受けなければならない。
（立て続けにある時はあるから嫌なんだよなぁ）
俺はフラフラと廊下を歩き、『呪文学』の教室へと入る。
今の俺に席を選ぶ余裕もなく、近くの席に座り俯せる。
「では、今日はこの前と同じ呪文をしましょう！皆さん、さぁ始めて！」
生徒が揃うなりフリットウィック先生はこう言い放つ。俺は俯せのままそれを聞いていた。
（この前……あぁ、あれか）
この前の授業では酢をワインに変える呪文をしていた。だが、酢からワインに変えられた生徒は少なかった。おかげで俺は二時間酢のすっぱい匂いを嗅いだのを覚えている。
（だから今日もやらせるのか）
俺はもう出来ている。ならばもう練習しなくても支障はないらずだ。
俺はそう考え、起き上がろうとしていた顔をまた下げた。

（はぁ……食べるんじゃ無かったな）
後悔しつつ俺はお腹に片手を当てる。
（あー……痛てぇ）
俺は腹の痛さに堪えながらも酢のすっぱい匂いを二時間嗅いだ。
（限界。トイレに行こう）
『呪文学』の授業が終わるなり俺は急いで人気のないトイレに駆け込んだ。

（何か、もう出すものは無いな……）
ジャーと水を流し、俺は個室トイレから出る。
（腹はまだ痛いが…トイレに来る前よりかはマシだからいいか）
手洗い場にて手を洗っていると隣のトイレから言い争いが聞こえてきた。
（……隣は女子トイレだよな？）
だが言い争いをしている声は男の声だ。しかも二人とも。
（……誰か男子が使っているな）
俺はため息をつく。隣の女子トイレは『嘆きのマートル』がいるトイレだから使用率がほとんど無い。
（おかげでこちらの使用率も低いけどな）
俺は男子トイレから女子トイレへと入る。
「何をやってー……ハリー？」
女子トイレにいたのは魔力からしてハリーとドラコだった。
そしてハリーは何故か倒れている……多分。
俺はハリーを起こそうと近づいた。
「クルーー」
ちょうど俺がハリー前に着くくらいの近い距離でドラコが呪文を放

とうとしたがハリーが先に呪文を放った。
「セクタムセンプラ！」
その呪文は運悪く？ハリーの前……ドラコを庇うような位置にいた俺に当たった。
（つっぅ……）
呪文を受けた瞬間俺の体があちこち裂けて血が溢れ出していた。
（切り裂き呪文か……）
俺はフラリとよろけながらも裂けた右頬の血を素手で拭った。
「ラ、ライカ？何で―？」
ハリーが震えた声で聞いてくる。
「何で？それはこっちの台詞だよ。隣のトイレが煩いから来てみれば……こんなところで決闘？……ふざけるな」
俺は低い声でハリーに問う。
「ハリー……君はこれをドラコにするつもりだったんだよね？ドラコ殺す気だったの？」
「こ……こんな呪文だって知らなかった」
「知らなかった？知らなかったら許されるとでも？」
「……」
ハリーは黙り込む。
「知らないなら使うな。それか一度物で試せ！それとも……ハリーは責任を取れるのか？」
「……」
「よく考えるんだな。ドラコも。こんなところで決闘するなんて……」
俺は何も話さなくなったハリーからドラコに話しを変えた。
「それがスリザリン生のする事？」
「いや……違う」
ドラコは震えた声で答えた。
「ならするな。と言っても誰が始めたか知らないから……始めたのはドラコ？」

「……違う」
俺はその答えにため息をつく。
「分かった。今回はこちらが全面的に悪い。済まなかった」
俺はドラコがいるだろう場所に頭を下げる。
「それよりもお前……」
体は大丈夫なのか？とドラコが聞いてくる。
「大丈夫じゃない……だから医務室へ行ってくるよ」
「いや、動くな！」
俺は焦るドラコに手を振り、女子トイレから出ていく。
（あそこに居たら被害者のドラコまで罰則をくらうしな）
だが体は限界みたいだ。足取りも重いし、トイレから少し歩いただけで息も切れている。
（ずっと話していたし……仕方ないか）
二人がいる手前、平気そうに振る舞ったが、体は悪化していったみたいだな。
（医務室まで……行けるか？）
もはや俺は体重を支えられず壁によっ掛かりながらズルズルと歩いていた。
（あー……何だか無理そうだ）
次第に瞼が下りてくる。必死に開けようとするがその努力も虚しく瞼は下がっていった。
「タツキ！？」
（何か……マクゴナガル先生の幻聴も聞こえてきたな）
俺はもう歩く事も出来ずにズルズルと崩れていった。
【ク、ラク！】
またあの子供の声が響く。
（あの声は……）
声の主は誰なんだろうな？
俺が覚えているのは此処までだった。

いつも通りに難無く授業を終えて私は職員室へと向かっている時でした。
歩いている廊下の前からズルズルと壁にもたれながら歩いて来る生徒が目に入ったのです。
（全く、ご来客の方が―）
しかしそんな考えも徐々に見えてきた光景に消えていきました。
壁にもたれながら歩いていた生徒は私の監督する寮の生徒―…いや、正しく言うと私の監督する寮の創始者であるタツキ。そんな彼が血まみれでズルズルと歩いていたのです。
「タツキ！？」
私は驚いて思わずライカではなくタツキと言ってしまいましだがそんな事を気にしている間にもズルズルとタツキは崩れ落ちていきました。
（一体何が？）
急いで彼の元へと駆け付け、容態を確認します。
（酷い……）
体のあちらこちら裂けており、出血、呼吸が激しい。最早一刻を争う状態でした。
（ポンフリーとアルバスに……）
私は顔が青ざめていくのを感じながら素早く守護霊をアルバスへ飛ばした後に魔法で担架を出し、その担架にタツキを乗せました。
私は担架を魔法で運びながら急いで医務室へと駆け込みました。
「ポンフリー！急患です！」
医務室の扉を開くなり私は大きな声で叫びました。
「マクゴナガル先生？」
ポンフリーは医務室内にある事務室から飛び出して来ました。

「！これは……」
ポンフリーはタツキの容態を見て顔を青くしながら言い放ちました。
「先生、素早く処置をします。見られないように奥のベットへ運んでカーテンをしてください。後、服も脱がせておいて下さい」
こう言いポンフリーは薬品棚へと大慌てで向かって行きました。
私はポンフリーに言われた通りに奥のベットへ向かい、タツキを下ろしてから服を脱がせました。
「これは……」
服を脱がせると私はさらに驚きました。今回の怪我も深く、酷いものでしたが他にも沢山の傷痕や火傷の跡、殴られ続けたのでしょうか、あちこち皮膚が変色していたりもしてました。
（……彼の生きた時代は）
こんなになる程酷かったのでしょうか？
歴史ではただ、迫害されたとしか書かれていませんが……
シャッと短くカーテンが開かれ、沢山の薬品を持ったポンフリーが入ってきました。
「マクゴナガル先生、すみませんが……」
「分かりました」
私はポンフリーの邪魔にならないように少しカーテンを開き、ベットから離れました。
ポンフリーの治療が始まると同時に物凄い形相をしたアルバスが医務室に入ってきました。
「マクゴナガル先生、タツキの状態は？」
「すごく深く、またかなりの数を切り裂けられてます。今ポンフリーが治療をしていますが……」
「……そうか」
アルバスは近くの椅子にガタンと崩れるように座りました。
「ミネルバ、誰がやったのか分かるかね？」
アルバスの問いに私は右手をギュッと握りました。
（それは、私が知りたいくらいですよ！）

「……いいえ」
私の声を最後に医務室は静まり返りました。

どれくらい時間が経ったのかは分かりませんが、辺りがすっかり暗くなった頃にポンフリーがカーテンから出てきました。
「ポッピー……タツキは？」
始めにアルバスがポンフリーに問いかけました。
「何とか一命は取り留めてます。意識は無いですが……」
「まだ安心は出来ぬか……」
生きてはいる。しかし意識不明。
（タツキ……）
彼程の魔法使いが意識不明？
「一体誰がやったのですか？」
ポンフリーが苛立ちを見せながらアルバスに聞いていました。
「それは全員が知りたい事じゃよ」
その言葉を最後に医務室は沈黙に包まれ、誰ひとり話しをしませんでした。

百四十三話

重い瞼を開く。
するとボンヤリと天井が見えた。
（あれ？俺は―…ん？て、て、天井ぉぉう！？）
何故天井が見える？
俺はずっと真っ暗な闇しか見えないはずなんだが。
（何故―…あれ？）
声が出ない。それに金縛りにあったみたいに動けない。
（何なんだ？これ）
何故目が見える？何故声が出ない？何故、動けない？
（くそっ……分からない）
俺はハリーの切り裂き呪文を受け、廊下かどこかで倒れたはずだ。
（マクゴナガル先生の声が聞こえた気もする）
なら此処は死後の世界？
（いや、もし死後の世界だとしてもおかしい）
死後の世界ならば俺の目は見えないはずだ。
グルグルと思考している俺の前にヒョッコリと赤い髪の子供が現れた。
『あ、ラクおきたんだ？』
するとあんなに動かなかった手が子供の方に勝手に動く。
そして俺は勝手に言ったのだ。
『にーちゃ』
（兄ちゃん！？）
え？俺に兄なんていた？
俺は昔の記憶を引っ張り出す。
しかし小さい頃の記憶がごっそりない。
（あ、そういえば…）
俺の記憶は一人の時から始まっている。

（そして何故か武術なんかも少し出来てたしな）
もしかして、これは忘れている頃の俺の記憶？
（しかし、何故今更？）
今更必要か？家族も何もいないのに。
そんな思いをしている俺とは裏腹にガキの俺はその赤い髪で青い目をしている子供……兄だったっけ？に抱き着いていた。
『にーちゃ、ひま』
『いままでラクはねてただろー？でも、おきたからあそびにいこう？』
（……ん？）
前の鏡に写っているガキの俺の髪は赤く目は青い。まぁ元々こんな髪色で目もそうだったからそれはいいんだが、抱き着いている兄と身長が同じなのは何故だ？
（それに……）
ガキの俺は兄から離れる。それによって顔が見れた。
（俺とそっくりなのは何故だ？）
いくら兄弟でもそこまで似るか？
髪の色は一緒、目も一緒。身長も一緒だし、顔の作りも一緒ときた。
まるで先程みた鏡の俺をそのまま写したみたいだ。
（此処までそっくりな兄弟は一つだけ……）
双子、だ。
（一卵性か二卵性かは分からないが……）
俺には双子がいたのだ。しかも兄。
（俺が弟かぁ）
そこに少し違和感を感じながらも気分は不思議な感じだった。
『あそぶー！』
『あら？ラク起きたの？』
その声と共に薄い紫色の髪に青色の目をした女性が目の前に現れた。
『『ママ！』』
俺はその女性を見て驚いた。

（この、人……）
俺がまだ子供で、行き倒れをしかけていた時にお世話になった人だ。
（なら、あの男性が父親……か？）
そしてその家族にもう一人いたが確か俺と同じ孤児と言っていたからまだ此処にはいないだろう。
（……世話になったあの夫婦が実の親？）
俺は今だに信じられなかった。
あの仲の良く、家族思いの夫婦の子供ならば何故俺は一人だった？
『遊びに行くならもう少し待ってくれるかしら？ママも一緒に遊びたいし』
それともママと一緒は嫌かな？と母…親は告げた。
『え～～』
『いく！』
嫌そうに答えた兄とは違い俺は明るく答えた。
『にーちゃ、いこう？』
俺はコテン、と首を傾げながら兄に聞いていた。
『……わかった。まつ』
そんな俺達のやり取りをクスクス笑いながら母親は聞いていた。
『もう少しで終わるから……この部屋で遊んでいてね？』
『『はーい』』
そして俺の視界から母親が消えた。
（！？……あぁ、そうか）
わざわざしゃがみ込んでいたのだ。目の色や髪の色が小さい俺でも見えるくらい低く。
『にーちゃ、なにするの？』
子供の俺はそんな事を気にせずに兄に何して遊ぶかなどを聞いていた。
（子供の頃は案外気づかないんだよな）
ああいう些細な思いには。
『んー……ひるね！』

（それ、遊びじゃないよな？）
というかガキの俺、先程まで寝てなかったか？
兄は俺の手を握り、ゴロンと転がった。
ガキの俺も兄に続きゴロンと転がる。
（寝るのか、俺……）
今ならとてつもなくそんなに寝れない。やはり子供だからだろうか？
（あぁ……でも）
天井が高く感じる。最も大人の目線、というのを知らないから何だかおかしな気分だ。
大人がねっころがっても目線は同じなのか？
（……でも、よく考えたら）
立った時の目線は子供と大人で違うだろうがねっころがったら同じ気がする。
身長関係ないし。
（なら皆同じか？）
皆こんなにも高い天井を見上げて寝ているのか？
（それとも俺がそう感じるだけか？）
ガキの俺がいきなり首を動かして兄を見た。
（くぅ……いきなりか）
兄はスヤスヤともう寝ている。
（早いな。……だが）
やはり見れば見るほど俺がもう一人いるみたいだ。
（……暖かい）
兄と手を繋いでいるところから暖かい温もりを感じる。
（生きて……いるんだよな）
今はもう―…いや、昔から家族がいなかった。だからきっとすぐに別れがくるのだろう。
（それに……）
あの家族に双子であろう兄はいなかった。つまり俺と兄は―…
（捨てられた）

その上俺は一人だったから離れ離れになったか、それともう死んでいるかのどちらかだ。
（まぁどちらにしても俺は兄にあった覚えは無いし）
それに今は家族どころか時代が違う。気にしても何も変わらない。
（人間、どこで変わるか分からないな）
あんなに家族思いな夫婦でも、実の子供を捨てていた。そして何処の子供か分からない子を家族として迎えたのだ。
（あー…何だか眠くなってきた）
先程寝ていたはずなのだがユラリユラリと睡魔が襲ってきた。
（寝たはずだが……俺までね、眠い）
ユラユラと水が揺れているみたいに心地好くなってくる。
（こんな睡眠も……あるんだな）
今はもう瞼は閉じ、いつもと同じ真っ暗な闇が広がっている。
（もう……俺も寝るか……）
ユックリと、そして深く意識を沈めていった。

百四十四話

（う……ん？）

真っ暗な闇の中にボンヤリと明るい光りが見えてきた。

（朝……か？）

ガキの俺は瞼を開け、目を擦る。

（……どうやらあれから朝まで寝たみたいだな）

どれだけ寝てるんだよ、俺。

ガキの俺は眠たそうにまだ瞼を擦りながら隣を見た。すると隣はすでにもぬけの殻だった。

（あぁ……俺が起きるのが遅かったのか？）

どうやな兄はもう起きたみたいで部屋にはいない。

それはガキの俺にも分かったのかスクリと立ち上がりタトタトと怪しげな二足歩行で部屋を出ていく。

（……俺、歩くの下手だったんだな）

俺の言葉は今のところぶつ切り、しかし兄が結構話せているからそれなりに年はいっているはずなんだが……

（この差は何だろうな？）

まぁ成長が遅いのだろう。……俺だけ。

ガキの俺は部屋を出た後にまぁ……少しウロウロしてから階段を下り―…いや、転げ落ちた。

あちこち体をぶつけながら落ちて行き、最後にドスンと盛大にぶつかって落下は止まった。

（痛てぇ……）

暖かいなどと感じたからもしや、とは思ったがどうやらこいつが体験したことは俺も体験するみたいだな。

ガキの俺が落ちて来た体勢から何とか座ろうと一生懸命にバタバタしている時にドタドタと駆けてくる足音が聞こえた。

『ラク！？』

心配そうに夕焼け色の髪で薄い緑色の目を持った男性が俺を覗いてきた。
（あぁ……やっぱり）
この人が父親だったんだな。
ガキの俺は父親に引き出して、と言わんばかりに手を伸ばした。
『パパ～』
『たくっ……』
父親は手を伸ばした幼い俺の手ではなく脇を掴み、抱き抱えた。
『いつも言っているだろ？誰も居なくなったりはしないから階段はユックリ、良く見て下りるんだ』
（いつも言われているんだな……）
て事は俺はいつも落ちているんだな。
『むぅ～…』
『……唸っても毎回転げ落ちて痛い思いをするのはラクだぞ？』
『うぁ！？』
ガキの俺は今気づいたみたいな変な声を上げた。
そんな俺に対して父親はため息をつき、苦笑しながら言った。
『毎回同じリアクションだな……学習能力あるのか？』
ポンポンと俺の頭に手を置き、撫ではじめる。
俺は自分でも分かるくらいに頬が緩み、父親に抱き着いた。
『ったく、甘えるのだけは一人前だな』
そう言いながらも、声は嬉しそうで優しく俺の背中をポンポンと定期的に叩いた。
ガキの俺はそんな定期的なリズムに目がトローンと下がってきた。
『あー…おい、ラク起きろ！寝るんじゃねぇ！』
先程まで寝てただろうが！と父親は言う。
（同感だな。俺は猫か？）
そう思いながらも俺も眠い。
『あい……』
ウトウトとし、曖昧に俺は答えた。

『朝飯抜かれるぞ？』
父親はギュゥーと俺の頬を抓る。
『ひゃい！』
（確かに痛い……）
痛いと訴えた俺に父親はバッサリと言う。
『なら起きろ』
そう告げた後に抓るのを止める。
『うぅ～』
ガキの俺は涙目になりながらも抓られた場所をさすっていた。
『行くか』
父親は俺の頭をポフポフとした後、歩きはじめた。
父親が歩いている時にガキの俺は父親に抱き着いて後ろを見ていた。
（へぇー……）
この高さからでも随分見る世界が変わってくるんだな。
（俺が視力を失った時って……）
どのくらいだったっけ？
（なんかあまり高くなかった気が……）
まぁ伸びなかったし……仕方ない、か？
『あー！ラクいいなー』
リビングに入ってきた途端に聞こえた子供の声。それに―
『またいつものやり取り？』
クスクスと笑いながら朝ご飯を机に置いている母親。
（いつもって……毎朝じゃないだろうな？）
毎朝ならばどれだけ成長していないんだ？俺。
『これはコミュニケーションの一つだ！』
（いや、いや、いや！）
息子の成長の心配とかはしないのか！？
『ラク、ずるいー』
『お？アルもするか？』
『するー！』

うやらましそうに俺を見ていた兄に父親はこう言った。
『よし！ラク、後は一人で行けるよな？』
きっとこれが毎朝なのだろう。ガキの俺は何も言わずにスルリと下り、席へと向かった。
精一杯手を伸ばしガタンガタンと席に座る。
（これもまた違うな）
ほんの少し位置が違うだけで見える世界が違う。子供が高いところが好き、と言われるのはこれだからか？
目の前には並べられた朝食に目線が少し高くなり見えるようになった額縁の一部。
（一部ってのがまた）
子供だと思う。
ガタンという音が聞こえたと思えば母親が俺の前に座った。
『お二人さんー！朝食無くなるわよ！』
『うわぁ！アル、行くぞ』
『たべるー』
母親が二人に声をかけるとバタバタと駆けてくる音が聞こえた。
『何とか間に合った』
ガタンという音で母親の隣に父親が座る。
そして俺と同じようにガタンガタンと音を立てて隣に兄が座った。
『『『『いただきます』』』』
ムシャムシャと朝食を食べていく。
『ごちそーさま！』
いち早く食べ終えたのは隣の兄だった。
『ごちそーさん』
そして次に父親が食べ終わる。
『パパー！つづき！』
『んぁ？まだやるのか……』
そう言いながら二人は席を立つ。
一方俺は―…

（ね、眠い！）
ガキの俺は寝ないように必死に目を開けながら食べていた。
（俺の前世は猫だな……）
きっとそうだ。だからこんなにも寝るんだ。
母親は寝そうな俺を見ながらクスクスと笑っている。
（笑うな！こっちは睡魔との戦いなんだよ！）
子供にとって睡魔と戦うのがどれ程辛いか……
ガキの俺は必死に戦ってはいる。いるが……もう瞼がくっつきかけてる。
（頑張れぇぇ俺！せめて……朝食くらいは……）
しかしこっちも眠くなってきた。
（ね……む……）
ブツリと意識が消えた。

百四十五話

『―ク、ラク、あそぼー！』
（ぐはっ……）
兄が暇になったのか寝かされていた俺の上に乗ってきた。全体重をかけて。
大人ならばまだ堪えられる体重でも同じ子供に、同じ体重が乗って堪えられるか？
それは人それぞれイエスでもノーでもなるだろう。だが、どうやら俺の場合はノーだったみたいだ。
『うぐぇ……』
ガキの俺は潰れた声を出す。
しかし兄は気にせずに腹から上に上って来る。
（いや、これ以上こられたら……肺が……）
肺がやられる。
しかし俺の思いとは裏腹に兄は脇近くに座ってきた。
『けふぅっ……』
ガキの俺は……うん。死にかけてる。目に涙を浮かべながらヒューヒュー息が吸えなくなってきてる。
（く……苦しっ）
双子の兄に肺近くに座られただけで息が吸えなくなる体に色々と言いたい事はある。あるがその前に……
（お……下りてくれ）
『ラクー？』
ガキの俺はガクガクと足が奮え始める。
（あ、終わったな、俺……）
俺が密かに死を覚悟した瞬間に救いがきた。
『アル！あれ程ラクの上には乗らないって言ったでしょ！？』
バタバタと母親が駆けつけて来てベリッと兄を俺の上から下ろした。

おかげで呼吸が楽になった。
『けふっ……』
まぁまだ辛いが時期に良くなるだろう。
『ラク、大丈夫？何処か苦しいところない？』
母親が心配そうに俺の背中を摩る。
ガキの俺は大分楽になったのかヒューヒューとはならなくなっていた。
『アル、ラクの上には乗らない！ラク、苦しいでしょ？』
『くるしい？』
『あー…痛いって事に近いかな？』
『ラク、いたい？』
兄は辛そうな表情を浮かべながら俺を見てきた。
『……』
しかしガキの俺はまだ話す余裕はないみたいで返事は無かった。
『……ごめんなさい』
今にも泣きそうな顔になりながら兄は俺に謝る。
母親はため息をつきながらボソリと言った。
『何回繰り返したら学習するのかしら？』
（こいつもかぁー！）
早くラクの上に乗るのは危険だと学んでくれないとラクが危ないのよね、と呟くのが聞こえる。
（いや、危ないよりも死ぬから）
ガキの俺、息吸えてなかったからな？
『にーちゃ』
ガキの俺はまだ涙を浮かべながらも兄を呼んだ。
『ラク？』
『にーちゃ』
ガキの俺は兄を呼びながら手を伸ばす。そしてドスンとよかかった。
（こいつは平気なんだな）
俺が軟弱なのか？

『にーちゃ、あそぶ』
そう言いながら兄を見上げ笑う。
『ラク……』
兄は俺をギュッと抱きしめてから手を握る。
後ろから母親のため息が聞こえた。
『遊ぶなら今日は外ダメよ？雨が降っているからね』
クシャリと俺の頭を撫でてから母親は部屋を出て行った。
『ラク、あそぼ！』
こう言って兄はブロック？……みたいな物があるところに俺を連れていった。
『ぼくからつみあげるねー』
こう言って兄はブロックを積み上げて行く。
『つぎはラクだよ？』
『うん！』
こう言って俺もブロックを乗せていった。
始めは……うん。ちゃんと交互に乗せていた。だが……いつの間にか兄が椅子に乗りながら次々に乗せていき今目の前にあるブロックは視界から外れ高くなっていた。しかも―…
（グラグラしてないか？これ）
今にも倒れそうだった。
（倒れたら俺に来るよな？）
そう思った瞬間ブロックが俺のほうに倒れてきた。
（やっぱりー？）
俺は倒れてきたブロックに頭を打ち気を失った。

私は双子を部屋に残し、洗濯をしていた。

（ラク、大丈夫かしら？）
双子の息子は互いに仲が良い。それは嬉しい事なのだ。けれど―…
（ラクは何処かひ弱い、って言うのかしら？）
アルと比べよく寝る。これはまぁ子供だし、別に構わないのだけど言葉を覚えるのが遅いし、歩く事だってまだ覚束ない。
（片方出来が良いともう片方は悪いと聞いた事があるけれど……）
双子でもこんなに違うのかしら？と洗濯をしながら考えている時だった。
双子を残した二階からドッシャーンと何かが崩れるような音と子供の泣き声が聞こえてきた。
私は嫌な予感がして洗濯物を放り出して二階へ向かった。
バタンと扉を開くと泣いているアルに倒れたブロック。そしてそのブロックから子供の手が見えた。
『ラク！？』
私は嫌な想像をしながらラクの元へと駆け付けブロックを一つ一つラクの上から下ろしていく。
幸いあまり数は無く、すぐにラクを掘り出す事が出来た。
『ラクっ……』
ラクは頭からは血を流していて、私は震えながら手を首に当てた。
するとトクン、トクンと血が流れている様子が分かった。
『生き……てる』
私は一安心し、ため息をつく。
（良かった……）
頭の傷も流れている血の量ほど酷くは無かった。少し切ったくらいだ。
私はラクの体をヒョイと抱える。
そしてアルに声をかける。
『アル、ラクは大丈夫よ。とりあえず下に行きましょう？』
アルは泣きじゃくりながらも頷いて私の後をついて来た。
（アルはアルで……）

お兄ちゃんらしく見せようとしているのかただたんに何も考えずに遊んでいるのか分からないが何故かラクを事故に巻き込んでしまう。
（それでラクはいつも死にそうになるのよね）
これぱかりは本当に心臓に悪い。だから私は二人だけで外に出したのはただ一回だけ。その時もラクは怪我をして帰ってきた。
（あの時は怪我で済んだけれど……）
室内ではこんな状況はしょっちゅうなのだ。これでまた二人だけで外に出したら……
（今度こそラクが死んでもおかしくはない）
外は室内よりも色んな物がある。だからもう少しアルが落ち着くまでは自由にというのは無理ね。
私は無意識にラクをギュッと握りしめていた。
それに気づいて慌てて力を弱くしながら一階のリビングに入った。
私はテーブルにラクを寝かせ、包帯と消毒を取りに行った。
二つを持ち、テーブルに戻るとアルが椅子に座りながらラクの手を握りしめ見つめていた。
私はラクの上半身を浮かせ、支えながら手当てをしていく。
『ラク……』
私はラクの手当てをし終え、アルの方を見てみるとアルはせっかく泣き止んでいたのにまた泣き出しそうだった。
『大丈夫。少し寝てるだけよ』
私は優しくアルの頭を撫でる。
だからかしら？アルはボロボロと泣き出した。

百四十六話

（ん……）

ゴロリとガキの俺が寝返りを打つ。

（何か固くないか？）

ガキの俺もそう思ったのか単に目が覚めただけなのか分からないが目を開いた。

（……は？）

目の前には俯せになりながら寝ている母親と父親。

（……何で机？）

そして俺が寝ていた場所は朝食を食べた机の上だった。

（俺がご飯？）

んな事はないか。

ガキの俺は両親を起こしたりはせずにただ見ているだけだった。だから俺も見てるだけになっている。

『……ん？』

パチリと目を覚ました父親と目が合う。

『うわっ！？お、起きたのか、ラク』

だがガキの俺はジーと父親を見ている。

『ラク？』

クシャリと父親は頭を撫でる。

それによってガキの俺が笑顔になっていくのが分かった。

『大丈夫そうだな』

ホッとしたように父親も笑った。

『アルが落ち込んでいたぞー？』

ケラケラと笑いながら俺を抱え、机から下ろし膝に乗せる。

『にーちゃ？』

『ああ。自分のせいだって分かったんだろうな』

小さく多分、と言いながら頭を撫でる。

（多分なんだな）
ガキの俺はまだジーと見つめていたがやがて手を伸ばし、父親の頬に触れる。
『ねてない？』
父親は驚いたような顔になったがすぐさま笑顔に変わった。
『いや、寝てたぞ？』
『んー？』
けれどやがてガキの俺はフルフルと首を横に振った。
『ねてにゃい』
『ぷっ……』
上手く言えずににゃいなどと言ってしまったがそれが面白かったらしく父親はケラケラと笑いはじめる。
やがて震えた声で言った。
『眠いのか？でも確かに夜だしな』
『う？ちがーう！』
ガキの俺はそれを否定しながらもトロトロと瞼が下がっていた。
『……寝そうじゃないか。ったく』
父親は膝の上にいる俺をヒョイと抱え、リビングを出る。
父親は歩きながらも一定のリズムであやしてくれたので俺の睡魔がもうすぐ目の前にやってきていた。
けれどガキの俺は寝たくないのかゴシゴシ目を擦っていた。
（だが……眠いな……）
やがてガキの俺も擦る余裕もなくなり瞼がくっつきかけていた。
そんな俺を見てケラケラと笑いながらポンポンとあやしている父親。
（家族って……こんなものなのか？）
ボンヤリとそう思いながらも俺の意識は沈んでいった。

（……寝たか）
俺は先程より重くなったラクをよいしょ、と寝やすいように持ち替える。
（にしてもよく寝るなー…）
まぁラクは結構魔力があるみたいだし、仕方ないかな？
（でも先程は本当にビックリした）
ラクがずっと俺を見ているかと思えばいきなり寝てない、だもんなぁ。

（よく見ているのか、勘が鋭いんだか）
どちらにしても驚くべき事だ。
（災難ばかりだがな……）
頭に巻いてある包帯を見ながらそう思った。
ガチャリと俺は子供部屋の扉を開き中へ入る。
ベットの一つにはアルが今のラクと同じように寝ており、隣は空いていた。
俺はその空いているベットに頭を気をつけながらラクを下ろす。
ふぅーと息を吐き出す。
（何とか起きずに運べたか……）
俺はクシャリとラクとアルの頭を撫でてから子供部屋を後にした。

百四十七話

（……んぁ？）

もう何度目かの目覚め。いい加減慣れてきている。

（あまり目が見える事に慣れたくはないが……）

だがいつまでこれが続くか分からない。俺がこれを見始めた頃には結構な年齢だとは思うが……

（そろそろか？）

ガキの俺はいつも通りに目を擦り、階段から転げ落ちる。

いつもなら父親が来て抱えてくれていた。

けれど今日は来ない。

（仕事に行ったのか？）

外はかなり明るい。多分昼なんだと思う。だから仕事に行っている時間だ。

ガキの俺でも何となく分かっているのか単に馬鹿なのかは分からないがいつもみたいに父親を待ったりせずにリビングへと入って行った。

（……は？）

リビングには誰も居なかった。母親も、兄も誰も。

ガキの俺が泣き出しそうになるのが分かった。けれど泣かずにガタンガタンと椅子に上る。

しかし机の上にご飯はない。

（捨てられた？）

覚悟はしていた。俺の記憶は一人から始まっているのだから。だが実際にそうなると辛い。

そんな俺とは違いガキの俺は椅子から下り、台所へと向かった。

（自分で作る気か？）

ガキの俺は近くにある椅子を引きずり、それに乗ってから台所に立つ。

けれど料理なんてしたことがない。何が何だか分からなかった。
（今の俺なら分かるんだかな……）
しかしこれは俺がガキの頃。どうしようもなかった。
そんな右も左も分からない俺が手にしたのは包丁。
（いや、いや、待て！俺！）
しかし俺の思いとは裏腹にガキの俺は右手で包丁を握る。しかも握ったのは柄の場所ではなく刃先の方だった。
手に刃がギリギリと食い込みボタボタと台所に血が流れる。
（痛てぇ……）
しかしガキの俺に痛覚はないのか？ギリギリと力強く握るんだが……
おかげで台所はボタボタと俺の血が溜まっている。
だがガキの俺はその血を見てやっと分かったのか包丁を離した。
（やっと離した……）
だが俺は何を考えたのか左手で同じように持った。
（痛い、痛い！）
ただでさえ右手からボタボタと流れている血を放置しているのに左手も？
（……あいつらから馬鹿と言われた理由が分かった気がする）
とんでもなく俺は馬鹿だ。
ガキの俺は左手からも同じように血が出ている事に気づき、包丁を持ちながらワタワタと慌て始める。
（……まずは包丁を置こうよ、俺）
しかしそんな事を思ってもガキの俺には伝わらないわけで、ガキの俺は包丁を持ちながら椅子から飛び降りた。
包丁を持っているから手は空いておらず、顔から床に突っ込んだ挙げ句に包丁の持ち方も良くなかったのか右頬が軽く切れた。
（……もう嫌だ）
子供時代の自分を見て恥ずかしがったりするやつがいるがこれは恥ずかしいどころじゃないな。
（俺、ただの馬鹿）

しかも痛いし。
床にベチャリと着地出来たガキの俺は立たずに何故かキョロキョロとしている。
（もう何もしないでくれ……）
痛いのはもういい。
『ただいまー』
遠く？で母親の声が聞こえた。
（きゅ、救世主）
ガキの俺から早く刃物を取って……？
パタパタと駆けて来る足音が聞こえる。
『アル、外で遊んだんだから手を洗って来なさい』
『はーい』
『ラク、そろそろ起きた頃よね？リビングに―』
何処かしらキョロキョロして定まらなかった視点が定まった。そしてそこにいたのは青い顔をした母親。
『ラク！？』
パタパタと俺の元に母親が駆けて来る。
『ラク、これを離して？』
母親は包丁の柄を握りながらガキの俺に包丁を離すように言った。
ガキの俺はコクリと頷いて手を離す。
俺が離した瞬間母親は素早く俺の視点から消えた。……俺が包丁を触らないように届かないところに置いたのだろう。
そして俺の前にやって来た時には消毒に包帯、布を手に持っていた。
今にもぶっ倒れそうな青白い顔をしながら俺の手当てをしていく。
（いや、本当にすみませんでした）
本当にこれを見ていてそう思う。
ガキの俺はキョトンと首を傾げているが。
『ラク……どうしてこんな事したの？』
震えた声で母親が聞いてくる。
そんな母親にガキの俺はこう言った。

『いない』
『いない？』
訳が分からないのか母親は俺の言葉を繰り返す。
『いなかった』
その言葉に母親は黙った。
（きっと誰もいなかったから、と言いたいんだろうが……）
伝わるのか？
俺がそう思った瞬間、母親に抱きしめられていた。
『……ゴメン、ラク一人にさせてたね』
ギュッと力が篭るのが伝わる。
『……ゴメン』
（何で……）
何でたった一言で分かったのだろうか？
（ただ“いなかった”だけなのに）
『でも、誰も居なかったら椅子に座って待っててくれるかな？』
母親はそっと離し、俺の顔を見ながら言った。
『うん！』
それにガキの俺は元気よく答える。
『じゃあもう少しでアルが来るから一緒に待っててくれるかしら？』
『はーい』
ガキの俺は母親から離れ、リビングに戻る。
（分からないのは俺だけ、か）
ガキの俺はガタンガタンと椅子に上り座る。
そしてコクリコクリと頭が揺らぎ始める。
（眠くなってきた……な）
先程寝てたのにガキの俺はガクンと昼寝をし始めた。

百四十八話

（……ん）

パチクリと目を覚ますと何故か机とゴッツンコな状態だった。

（ぶつけたのか？）

ガキの俺もそう感じたのか額を擦る。

（あれ？）

俺はすぐに違和感を感じた。

（もしかして……）

ガキの俺がキョロキョロと見回したのでそれで確認をするが予想通りだった。

（二人がいない…）

けれどガキの俺は母親に言われた通りに動かずに椅子に座っている。

しかしずっと待っていても二人は帰って来ない。

どれくらいの時間かは分からないが俺が起きたころはまだ昇っていた日も今や傾き、もう少しで夜だ。

流石にガキの俺でも不安になり今は涙目になっている。

そんな時ガチャリと扉の開く音が聞こえて、俺はすぐさま笑顔になった。

『ママ！』

俺は椅子から飛び降り、音がした玄関へと駆け出した。

玄関へとたどり着くと母親が兄を抱えながら立っていた。

『ママ？にーちゃ？』

母親の抱えている兄は腕がプランと垂れていた。

（……殺された、のか）

兄は捨てられたのではなかったのだ。母親と出かけた先で。

（殺された……）

『にーちゃ！』

まだ兄が殺されたと理解出来ていないガキの俺は垂れている兄の手

を握る。
（……冷たい）
兄の手は冷たかった。
『にー…ちゃ？』
流石にガキの俺でも手が冷たければ何かしら気づく。
不思議そうに首を傾げていた。
『……ラク、中……行こう？』
掠れた声で震えながら母親が言う。
『うん！』
何かがおかしい事に気づいているだろう俺はそれでも明るく答えた。
ガキの俺は死んだ兄を抱えた母親と一緒にリビングへ向かう。
リビングへついて母親は兄を横に寝かせた。俺に見せないように母親は庇っていたがそれでも見えてしまった。
切り刻まれ、衣服が血に染まった兄を。
母親はしゃがみ込み、ガキの俺と目線を合わせながら震えた声で言った。
『ラク、アルは……アルはもう、帰ってこないの』
『かえってこない？』
『……いないって、事よ…』
『にーちゃ、いるよ？』
ガキの俺は母親の後ろを指差す。
『にーちゃ、いる』
『もう……居ないの。アルは……アルは死んだの』
そう言って母親は俺を強く、強く抱きしめた。
抱きしめられている俺の顔や肩に冷たい雫が当たる。
ガキの俺は上を見上げた。
けれど母親は顔を見せないように引き寄せ、強く抱いた。
（見られたくない、か……）
きっとまだ整理出来ていないんだと思う。だから尚更理解出来ない俺をまだ相手に出来ないはずだ。

『しんだ？しんだって？』
子供は時に残酷だ。理解していないからこそ、聞ける。残酷な事を、自分が理解出来るまで何回も。
『……ママ？』
母親は答える事が出来ない。
だからかガキの俺は兄に話しかけた。いつもみたいに返事が来ると思って。
『にーちゃ、しんだなに？』
けれど返事が返ってくる事はない。
もう二度と。
『にー…ちゃ？ねてるの？』
死が分からないガキの俺は兄が寝ていると思い、抱きしめられている母親の隙間から手を伸ばし、言う。
『にーちゃ、おきて！』
幼い俺のこの言葉がリビングにひどく響いた。

百四十九話

ザーザーと降り続く雨。この日に兄の葬式は始められた。
ガキの俺は休憩の合間を使い、葬儀場の回りをウロウロと探検をしていた。
（……）
今だに幼い俺は“死”が分かっていない。兄は今何処かに泊まっているみたいな感覚しかないのだ。
『あ！きれい…』
そんな俺は顔を泥沼な地面に近づけ石を見つけていた。
『にーちゃの！』
そう言ってガキの俺は泥まみれの石を拾った。
頬が緩んでいるのが分かる。きっと場所に似つかない笑顔でいるのだろう、俺は。
『……おい、ガキ』
俺が石を手に、ニコニコしていると後ろから声がかけられる。
『う？』
ガキの俺は不思議そうに振り返る。そこにはとてつもなく大きく、顔には傷痕があり、ガッチリと筋肉がついている男性が立っていた。
『それをよこせ。それは石ではない』
俺は石と男性をキョロキョロと見て、言った。
『だめ！にーちゃの！』
俺はギュッと石を握った。
『……もう一度言う。それをこちらへ渡せ』
『やっ！』
俺は拒絶した。
『なら、仕方ない。子供の一人や二人……』
殺しても害はないだろう、と男は言うと刃物を持ちながら襲ってきた。

この前、刃物でベタベタ血を流したのだから流石にガキの俺でも何なのか分かったのだろう、震えはじめた。
『にーちゃ！』
力強く石を握り、俺は兄を呼んだ。
すると目の前まで迫っていた男が何故か切り刻まれた。
赤い血が俺に付着する。
ドクドクと血を流しながら男は白目を向いて倒れた。
『あーあ、馬鹿が死んだよ』
何処からか現れた女性の言葉を俺は繰り返す。
『しんだ？』
それはつい最近、何度も聞いた言葉。
『そう、死んだ。馬鹿だよね』
女性はニコリと笑って俺と目線を合わせる。
『その石、綺麗だけどお姉ちゃんにくれないかな？』
しかしガキの俺は別の質問をする。
『しんだってなに？』
『あー……』
その女性は面倒くさそうに言う。
『にーちゃも、しんだ？』
そして何やら閃いた！と言わんばかりの顔で言ったのだ。
『“死んだ”を教えるからそれ、くれない？』
『これ？』
ガキの俺は石を見せる。
『そう、それ。にーちゃにはもっと綺麗な石をあげればいいし』
ここら辺にはいっぱいあるよ？と女性は言う。
『おしえてくれる？』
『あぁ、約束だ』
女性はニッコリと笑いながら言った。
『うん』
それに俺は笑顔で答えた。

『よし！“死んだ”てのはー……そうだな、もう二度と会えないんだ』
『あえない？』
『ああ』
女性は俺の言葉を肯定する。
『こうやって話したり出来ないんだよ』
俺は女性の言葉で目が潤んでくるのが分かった。
『うわわ……でもな、死んだ奴は空にいるんだよ』
泣き出しそうな俺を見て女性はすぐに付け加える。
『そ……ら？』
『あ、ああ……今は曇り空だけど青い空があるだろう？死んだ奴はそこにいるってお姉ちゃんは聞いたぞ？』
だから空を見上げれば一人じゃないんだ！と女性は言った。
『……うん！じゃ、にーちゃもそら、いる！』
『あ、あぁ……いるよ、空に』
ガキの俺は石を見る。そしてそれを差し出した。
『やくそく』
『あ、ああ。約束だったな。ありがとう』
女性はニコリと笑って、俺の前を去って行った。
女性が去ってからすぐに入れ代わるように父親が俺を探しに来た。
『ラクー？何処だー？』
『パパ！』
俺は父親に向かって声を上げる。
『お？そんなとこに―』
ガキの俺は父親を見ていた筈だがすぐに目の前が暗くなった。
『パパ？』
『ゴメン、ラク。少しこうしていいか？』
ガキの俺が不安になり父親を呼ぶと声は俺の後ろから聞こえた。
（後ろは確か……）
襲ってきた男の遺体がある。

（……見せないように、か？）

『……パパ？』

けれどガキの俺には訳が分からず不安に陥る。

そんな俺をギュッと後ろから優しく抱きしめた。まるで不安を拭うように。

『……戻ろうか』

そう言って目隠しをされ、抱えられたまま俺は式場内へと戻って行った。

百五十話

兄の葬式から二日後、ガキの俺はよく空を見上げるようになっていた。
『ラクー？』
『ママ！』
今日もガキの俺は空を見上げていた。……家の前でだがな。
兄の事件以来目の届く範囲くらいしか行けなくなっている。
（仕方ないな）
ガキの俺も何も気にしてないし。
（というか何も考えていないか？）
ガキの俺はトタトタと母親の元へと走っていく。
『ママ！』
『あ、いた。もうすぐ昼食―…』
しかし母親は最後まで言わなかった。
『ママ？』
ガキの俺はキョトンと母親を見上げる。
『先に、リビングに行っててくれる？ラク』
『うん？』
ガキの俺はトタトタと家の中へと入って行った。

ラクが家の中へ入るのを見届けると私は前を向いた。
『何のようですか？魔法省の役人さま？』
『ふん。気づいていたか』
数件先の家の間から魔法省役人であろう男性が出てきた。

『何のようですか？』
私は再度繰り返して聞く。
『……兄が亡くなったというのに暢気な弟な事だ。安心しろ、今回は縮小ではない。これをある年の子供の両親・保護者に渡しているのだがそれに貴様のところが入っただけだ』
そう言って魔法省役人は手紙らしき羊皮紙を差し出してきた。
私は疑いながらも受け取る。
『拒否は認められない』
『……そうですか』
私がそう言った時にはもう役人は背を向けていた。
『お前達も、運がなかったな』
『え？』
しかし役人は何も言わずに“姿くらまし”をして去って行った。
（運がなかった？）
私は最後に言われた言葉を気にしながらも渡された羊皮紙を広げ読んでいく。
『……そ、んな』
読んでいく事に顔が青くなっていくのが分かった。そして役人に言われた言葉が頭を過ぎる。
【拒否は認められない】
つまり、実行しか、ない。
私は震え出す。
今すぐに羊皮紙を握り潰したかったが、私以外にも見せなきゃいけない人がいるからそれはすんでのところで留まった。
『……実行は、今夜』
早過ぎる。あまりにも、早過ぎる。
（あ、……ラクの、ご飯……）
私はフラフラと家の中へと入って行った。

（顔が青いな？）
ガキの俺はリビングに入り、母親を待っていた。しばらくすると母親もリビングに入ってきたが顔が青い。
『ママ？』
ガキの俺でも気づいたらしく声をかけた。
『っあ……ラク』
ビクリと驚いた様子をみせる。
『昼ご飯、食べようか』
だがすぐさま貼付けたような笑顔を浮かべ、台所へと向かって行った。
（何かあったのか？）
しかしガキの俺は貼付けたような笑顔には気づかなかった。母親が台所へ向かうとすぐに視線がテーブルへと移った。
しばらく待つと料理が運ばれてくる。その料理を並べ終えるまで待ち、二人で食べる。
『『いただきます』』
ムシャムシャと昼ご飯を食べていく。
『ラク、昼ご飯食べ終わったらママと一緒に遊ぼうか？』
ただいつもと違うのは母親が片付けより俺を優先したこと。
『うん！』
しかしガキの俺は何も疑わずにニコニコ嬉しそうに笑っていた。
そんな俺を見て母親はふんわりと笑った。
『『ごちそうさま』』
俺はピョンと椅子から下りる。
『じゃあ、行こうか？』
母親はガキの俺に向けて手を差し出した。
俺はその手を握る。

『二階の……子供部屋がいいわね』
そう言って二階へと俺と手を繋ぎながら階段を上る。
階段を上りきり、子供部屋へと入る。
『何して遊ぶ？』
子供部屋の真ん中くらいでしゃがみ込み俺と目線を合わせた母親は言う。
ガキの俺は戸惑うことなく言った。
『ブロック！』
（……それで気を失ったよな？）
母親の表情が少し引き攣りながらも、ブロックが置いてある場所へと二人で向かった。
それからは色んな遊びをした。ブロックもやったし、手遊びもした。昔話しも聞いたし、童話や絵本も読んでもらったり……
まるで最後みたいに沢山、沢山遊んでくれた。
『お？下に居ないと思ったら此処に居たんだな』
『パパ！』
夕暮れを少し過ぎると父親が家に帰宅し、晩ご飯を食べるために下へ下りる。
しかしガキの俺がムシャムシャと晩ご飯を食べている時は父親は羊皮紙を何やら睨みつけるように読んでいて、母親と話しをしていた。
『これは絶対か？』とか『早過ぎる……』とか『……消すからな』とか部分的すぎてサッパリ俺にも分からない会話だったけど。
晩ご飯の後には父親を入れての二階での遊び。
これには激しいアトラクションも入った。父親にグルグル回してもらったり、馬変わりをしてもらったり……

おかげで俺はすぐにクタクタになってしまい、ウトウトとしていた。
『ラク……』
ふいっと俺の名前を呼んだ父親を見る。
『パパ……？』
辛そうな顔をした父親が俺と目線を合わせる。
『……ゴメンな？』
そう言って俺に手をかざし、魔法陣を作り出していく。
（こ、れは……）
この魔法陣は、今までの記憶を封印するやつだ。
（だから俺にガキの頃の記憶がないのか……）
『パパ……？』
ガキの俺が戸惑っている間にも魔法陣は完成していく。
父親はポツリと何かを呟いたが、声が小さすぎて俺には聞こえなかった。
『……ラク、また、な』
こう告げた父親の声を最後に俺は気を失った。

魔法陣が完成し、パタリとラクは倒れる。俺はそんなラクを急いで支えた。
そして同時に呼び鈴であるベルが鳴り響く。
俺はギュッとラクを抱きしめ、玄関に向かう。
玄関を開けると、魔法省役人が立っていた。
『……ちゃんとしたようですね』
そう言った役人に対し、俺は怒りを抑え切れず低い声で伝えた。
『あの羊皮紙が嘘ならば……容赦はしない』
『……子供を』

俺の言葉を無視し、なおかつ子供をと言いながらも俺の腕からラクを奪う。

『……確かに受けとった』

そう言って魔法省役人の奴は姿くらましをし、消え去った。

百五十一話（前書き）

バイト先探しとか、入試の方法先生に聞かなきゃとか、頭をフルに使って混乱しかけている今の時期にテストが来ました。
しかもいつの間にかテスト期間に入ってますし……

てな訳で更新を二日に一話にします。

読者の皆様にはご迷惑をおかけしますが、プチパニックが終わるまでお付き合いくださると嬉しいです。

百五十一話

（……ん？）

ボンヤリと目を開ける。しかし今まで見えていた色は無く、ただの暗い闇が広がる。

（っぅ……）

そしてすぐさま痛みが襲ってきた。

（何で……だっけ？）

俺がこうなったのは何でだったけ？

何で？何で？何で？

「タツキ？」

（タツキ？いや、それは……）

俺の、名前は―…名前は？

何かを思いだそうとすればするほどこんがらがってしまう。

（兄、は―……）

兄は死んだ。父も母も、死んだ。ならば俺は？

（いつ死んだ？）

「おい、タツキ！」

ザワリと風か纏い始める。

俺は誰？何をした？何故ここにいる？そして声をかけてきている奴は、誰―…？

俺が纏い始めていた風はどんどんと大きくなっていく。

今はいつ？此処はどこ？なぜ、なぜ俺は―……

死んでいない？

ドンッと爆発音が響き、俺の魔力が漏れはじめる。

「ぐぅっ……」

魔力はどこからもなく沢山漏れていき、魔力に耐え切らずにあちら

こちら崩れる音が聞こえる。
俺は最早意識は無く、暴走した魔力を出しているだけだった。
そんな中ピィィーと破壊音とは違う音が聞こえたかと思うとドンッと俺の中に入ってきた。
（この魔力は……サラザール？）
何故サラザールの魔力が？
何故かは分からないがサラザールの魔力が体全体に伝わり、鎮静剤みたいな役割を果たす。
ドサリ、と床に足をつく。
「ひゅっ……はっ」
（今、何を？）
何をしようとした？
「……タツキ？」
俺が息を切らしながら今だ混乱している頭でグルグル考えいる時にセブルスから声がかかる。
「……セブルス？此処は？」
「……あの方の屋敷だ。全壊しているがな」
（……あの方？）
「タツキ、大丈夫か？」
（タツキ？あー…）
ダメだ。何が何だか分からない。
（……ね、むい…）
プツリ、と意識は消えた。

百五十二話

パチリ、と目を覚ます。
（んぁ？……あぁ）
此処はホグワーツじゃないんだっけ？
珍しく深く寝たせいか前回ほどの混乱は起こらずに、現状を受け入れられていた。
（確か……）
俺はハリーの切り裂き呪文を受け、倒れた。それで俺がガキの頃の記憶を見て、意識を取り戻した途端に俺は理解出来ずに混乱し暴走しかけた。
（サラザールの魔力で止まったん……だよな？）
サラザールの魔力……何故此処にあるんだ？
「目が覚めたか？タツキ」
「セブルス……」
キィと扉が開く音が聞こえ、セブルスが部屋に入って来る。
（……あれ？）
暴走した、とまではいかなかったがしかけたのだ。屋敷なんかは跡形もないはずなんだが……
「セブルス、此処はどこ？」
「あの方の別の屋敷だ。初め別の屋敷に居たのだがお前がぶっ壊してな。移動した」
「あの方？」
あの方が分からない俺はセブルスに聞く。
「……例のあの人、だ」
（成る程……）
あそこにサラザールの魔力があったのは元はサラザールの屋敷だった、かな？
（それならばあいつが何らかの魔法をかけていたのかもしれないし

……）

「あの方がお前と話しをしたい、とおっしゃたからホグワーツ襲撃の際にお前をさらって来たんだ」

（さらったってな……ん？）

「ホグワーツ襲撃？」

何だか聞こえてはならない単語が聞こえた。

「あぁ……安心しろ。ホグワーツ城も生徒や先生方も無事だ。ダンブルドアだけが死んだ」

「……へぇ」

あの爺死んだのか。

「葬式も終わっている。ポッターは今あの家にいるが誕生日が過ぎればすぐに“隠れ穴”へ行くだろう」

お前はあの方との話しが終わったら我輩と一緒にホグワーツへ向かう、とセブルスは言う。

「その後は自由にしろ」

「……何か随分寝てたみたいだね」

ハリーなんか親戚の家に帰ってるみたいだし。

「マクゴナガル先生やダンブルドアが心配していた」

最も我輩も今はこちらにいるから最近の事は推測しか出来ん、とセブルスは言った。

「とりあえず、俺はあいつと話せば帰れるんだな？」

俺はセブルスから貰った情報を整理する。

「まぁそうだな」

だがあの方の機嫌を損ねたら我輩は知らん、とセブルスは言う。

「俺が殺られるとでも？」

俺はニヤリと笑う。

「……そうだな」

俺はトン、と立ち上がる。

「話せば帰れるなら早く話そうか」

「……体調はいいのか？暴走していたが」

「寝てたからもう快調かな？後……」
あれは暴走したに入らないよ、とセブルスに言った。
「……冗談もほどほどにしろ。あれが暴走じゃないだと？」
「うん。ガキの頃暴走した時は町一つ消えたし」
「……は？」
俺はセブルスの間抜けな声にクスクス笑う。
「貴様、冗談か……」
そんな俺の態度のせいかセブルスは冗談だと認識してしまった。
（ま、いいか）
「セブルス、行こう」
俺はセブルスを先頭にガチャリと部屋を出て行った。

百五十三話

「来たか……」
ガチャリとセブルスがドアを開け、中へ入るとすぐさまに聞こえた声。
（おや？）
感じる魔力は一人だけ。
「此処にいるのは君だけ？トム・リドル」
「貴方には多い方が好きかもしれないが俺様は違う」
「いや？この方が俺もいい。君が何を聞くか分からないからね」
バタン、と扉を閉めてセブルスは出て行った。
俺は適当に近くにある席に座る。
「で？用件は？」
俺は早く帰りたくて率直に聞く。
「ない」
しかしウ〝ォルデモートはバッサリとこう言った。
「なら帰っていい？君みたいに暇じゃないんだけど」
かなり寝てたみたいだし、ホグワーツに帰って情報を貰いたいんだけど……
「俺様も暇ではない。だが、それでも貴方と話しをする価値はある。ゴドリック・グリフィンドール殿？」
ウ〝ォルデモートは嬉しそうに？言う。
「俺にはない」
それを俺はバッサリと否定する。
「どうせ話している時にポロリと何かをこぼすのを期待しているんだろ？尚更話さないよ」
ウ〝ォルデモートはフン、と鼻で笑う。
「俺様の屋敷を壊したのだろう？」
（うぐっ……）

ヤバい、そうきたか。
「その修理代として俺様と話せ」
「ちっ……」
俺は舌打ちをする。
「話し……ねぇ」
正直話す事なんかない。
「そうだな……貴方は何でも知っているのか？」
「……は？」
知っている？……何を？
「ホグワーツを作り上げた創始者の一人、ゴドリック・グリフィンドール。ならば貴方は全ての魔法を知っているのか？」
全ての魔法……ね。
「んなもの知るわけないだろう」
魔法は時代によって変わる。全てを知っているわけないだろ？
「……閉心術か」
「まぁな。お前には悪いが探らせはしない。次の質問は？」
どうやらあの少しの間にウ〝ォルデモートは無言で開心術を使ったみたいだ。
（どれだけ疑い深いんだよ）
「……サラザール・スリザリンはどんな人物だ？」
俺は答える前にウ〝ォルデモートに聞く。
「俺の勝手な主観でいいならば言うが？」
「……教えてほしい」
「……そうだな、引きこもりの無口野郎かな？」
何かサラザールって言われたらこのイメージだよな。
「引きこもり？」
「引きこもり。あいつ部屋から出るイメージ無いし」
「……イメージの話しか！？」
「そんなもんだろ。知りたいならば“灰色のレディ”にも聞いてみればいい」

最も教えるか分からないけれど。
「はい、次ー」
俺は早く、と急かす。
「……長男か？」
「……は？」
何、その質問。なんで急に兄弟の話し？
（もしかして……）
「俺、男の方はダメだからな」
「俺様だってお断りだ！」
ウヴォルデモートは凄まじい勢いで言った。
（違うのか？）
「何だ、いきなりそう聞いたからそっちの気があるのかと……」
「貴方が急かすから長男かと思っただけだ！」
「あぁ……早く帰りたいし。後、俺は孤児だからな」
シーン…と静まり返る。
「何だ？貴様も孤児なんだから驚くもないだろ？」
「いや、まさか貴方も孤児だとは思わなかった」
「んなもんは沢山いる。お前だけではない」
んで質問は終わり？と俺は問いかけた。
「あー……暇だ」
「知らねぇよ、そんなこと」
「じゃあ……ダンブルドアの事をどう思っている？」
「糞爺」
素早く答えた俺に対し、ウヴォルデモートはうーん…と質問を考えていた。
「……ないなら帰る」
そう言って俺は席を立つ。
（これといった用件はないみたいだし）
「あ！ちょっ―…」
しかし俺は最後まで聞かずに“姿くらまし”をしてその場を去った。

百五十四話

パチン、と“姿現し”をした場所はホグワーツの校庭。
（確かもう夏期休暇だよな？）
なら顔を出したら隠れ穴へと向かうか。
トントンとホグワーツ城めがけて歩く。
ガチャリと扉を開き中へと入る。
（さて、先生方は……？）
夏期休暇ならば皆各自自由な時間になっているはずだ。
（ならマクゴナガル先生か……）
校長が決まっていれば校長に挨拶すれば良いだろう。
俺はフラフラと校内を歩く。
「誰ですか！」
大広間へと近づいた時、聞き慣れた声で呼び止められた。
「……マクゴナガル先生？」
「……タツキ？タツキですか？」
マクゴナガル先生は不安そうに聞く。
「はい？」
俺がそう答えるといきなりマクゴナガル先生がペタペタと俺に触れてきた。
「マ、マクゴナガル先生！？」
（一体何があったんだ！？）
え？俺が居ない間になにかあったのか？
（……生徒に魔法薬飲まされた、とか）
しかしセブルスなら有り得る事だが今はスラグホーンだし……
「無事だったんですね」
グルグルおかしな考えをしている俺から離れ、一息つきながらマクゴナガル先生は言った。
「心配していたんですよ。あの戦いの中スネイプに連れていかれて

……」

（寝てる俺を連れてったのか）

さぞや重かっただろう。

「ああ、そういえばスネイプが引きずっていたのであちこちぶつかってましたが……体は痛くないですか？」

前言撤回。どおりで痛いはずだよ。

（まぁ切り裂き呪文もある……か？）

「痛いですね。あちこち」

（あ……）

セブルスで思い出した。一緒に行くとか言いながら置いて来てたや。

「そうですか……ならポンフリーに「マクゴナガル先生」……何ですか？」

俺はマクゴナガル先生の言葉を遮る。

「俺、明日にはハリーのところへ向かいます」

「！……ですがっ」

「ハリー一人でやらせるわけにはいきませんから」

俺はニコリと笑う。

そんな俺を見てなのかマクゴナガル先生はため息をついた。

「……分かりました。ポッターは貴方に任せます」

ですが、とマクゴナガル先生は続ける。

「辛くなったらいつでも言いなさい」

俺は笑いながら言う。

「そうはならないと思いますが……分かりました」

「明日向かうとおっしゃってましたね。なら―」

今日は歓迎・退職パーティーでもしますか？と悪戯っぽくマクゴナガル先生は聞いてきた。

「退職はしません。それにパーティーって夏期休暇に入ったんですから各々自由に過ごしているでしょう？」

「それなら皆、集まりますよ」

心配していたのは私だけではないですからね、とマクゴナガル先生

は付け加える。
「パーティー、ねぇ……」
「皆さんを呼びますからタツキは大広間に居てください」
「分かりました」
マクゴナガル先生は俺の返事を聞いてからカツカツと別方向へ歩き出した。
（パーティーか……）
酒が出ればいいな。
俺はギィィと大広間の扉を開いた。

外伝・お使い

『おつかいを頼んでもいいかしら？』
ある晴れた日、ママはおれとにーちゃにこう言った。
『おつかい？』
『つかい？』
にーちゃもおれもコテン、と首を傾げる。
『うん。お店でお肉とパンを買ってきて欲しいんだけど……』
『わかった！』
『んー…？』
にーちゃは元気よく答えたけれどおれはよく分からない。
（つかい？）
『んー…じゃあお金はアルに持たせるね。ラクを置いていかないのよ！』
そんなおれを見てママはにーちゃに詳しく伝えてから初めて二人だけで外に出た。
『ラク、いこう！』
にーちゃはひょいとおれの手を握り、グイグイと引っ張る。
『にーちゃ、いたい』
おれはグイグイ引っ張る力が強くてむっとしたけれどにーちゃは気にせずにズンズン進んだ。
しばらくサンサンと輝く太陽の下を歩いたら目の前に川が流れていた。
『か……わ？』
ママと行く時にも川はある。けれどいつもかかっている橋が無い。
『にーちゃ……』
おれは不安になってにーちゃを見つめる。
にーちゃはニヤリと笑っていた。
『ラク、だいじょうぶだ』

この時におれは嫌な予感しかしなかった。
『いっくぞー！』
いつもより水かさが増えた川ににーちゃは手を繋いだまま飛び込む。
『に、にーちゃ？』
おれが驚きながら声を上げるとにーちゃはこう言った。
『つっこめばいけるよ！』
そう言ってグイグイと引っ張る。
『にーちゃ……いたい』
ザバザバと水の中を一生懸命に歩きながらおれは声を出した。
けれどにーちゃには聞こえなかったのか返事がない。
やがてスルリと手が離れる。
（にー……ちゃ）
『ぅあ……』
おれはズルリと足を石の隙間へと滑り落ちる。
『ふべふぅ！？』
バランスが崩れ、バッシャーンと水しぶきを上げながら顔から突っ込んでしまった。
『うぇ……』
全身ビショビショになりながらもおれは立ち上がる。
『……ん？』
前に進もうとしても先に進まない。
『……？』
グィと右足を動かそうとすると激痛が走る。
『にーちゃぁ……』
不安になってにーちゃを呼んでも、すでに川にはいなかった。
おれは不安で涙目になるのが分かりながらも泣く事はせずに右足がどうなっているのかを確認する。
『……』
ボンヤリとした視界の中で見えたものは岩の間に挟まっている右足。
おれはグイグイと右足を上げる。けれど岩の間からは抜けなかった。

『〜〜にーちゃ！』
足が抜けなくて不安で。
にーちゃに置いて行かれたんじゃないかって不安で。
おれは涙目だったけれど出来るかぎり大声でにーちゃを呼んだ。
『―ク、ラクー！』
声が枯れるくらいに叫んだ時、川の向こうからにーちゃの声が聞こえた。
『―…にーちゃ！』
カラカラの声だったけれどにーちゃはおれに気づいてくれた。
『ラク！』
ザバザバとおれの元へ駆けてくるにーちゃ。
『どうした？つかれた？』
心配したのか今にも泣きそうな顔でおれを覗くにーちゃ。
『あし……』
『あし？』
小さく呟いたおれの声も聞き逃さずににーちゃはおれの足元を覗く。
『はさまった？』
『うん』
にーちゃはおれに確認するとひょいと水に濡れるのを気にせずにしゃがみ、挟まった足の近くの石を動かそうとしていた。
『う〝ぬぅ〜！』
しかし石が少し大きくて持ち上げる事が出来ない。
『……どうしたの？』
不意に後ろから声がかけられた。
おれとにーちゃは同じタイミングで振り返る。
そこには透き通るくらい綺麗な金色の髪に碧の目を持った青年だった。
『ラクがはさまって……』
『挟まる？』
眉を潜めながらその人はおれの足元を見る。

『あぁ……岩の隙間に足が挟まったのか。なら……』
そう言って青年はひょいと石を除けた。
『抜ける？』
そう聞いてきたのでおれは足を上げる。するとスルリと抜け、石の上に乗せる事が出来た。
『！』
『抜けたみたいだね。歩ける？』
おれはそろりと右足を動かす。
『っ～～』
ズキリと右足が痛んだ。
眉を潜め、いかにも痛いですという顔をしているおれを見て苦笑しながらその人は言った。
『どうやら痛いみたいだね』
そう言うとひょいとおれを抱えザブザブと向こう側へと向かった。
向こう側へと着くとその人はストン、とおれを下ろし、右足を見る。
『んー……少し切れてるだけだから捻挫かな？』
そう言ってシュルシュルと包帯を巻いていく。
『右足は使っちゃダメだよ！君が支えてあげて』
最初の言葉をおれに、最後の言葉をにーちゃに言ってその人は去って行く。
『あ、ありがとう！』
『ありがとー』
去って行くその人の背中に向かっておれたちは叫んだ。
『じゃラクいこう！』
にーちゃは肩を回して支えるようにおれを持つ……掴む？ようにしてからこう言った。
『うん！』
おれは明るく答える。
『よーし、おつかいだ！』
そう言ってにーちゃはいつもと変わらない早さで歩く。

『にーちゃ、はやい！』

ウルウルと涙目になるのが分かりながら、おれは必死ににーちゃについていく。

右足はにーちゃに支えられているため左足を必死に使い、走った。

（は、はやい……）

その日はもう、にーちゃとはつかいに行きたくないと思った一日になった。

「あー…そう言えばダンブルドア死んだんですよね？」
マクゴナガル先生が開いた帰還パーティーで俺はマクゴナガル先生に聞く。
「はい。……スネイプに殺されました」
（……は？）
「セブルスが？」
セブルスがダンブルドアを殺した？
「知らなかったのですか？」
「はい……」
セブルスからはダンブルドアが死んだとしか聞かなかったし。
「殺されなければまだ生きたものを……」
マクゴナガル先生はダンッと音を立てる。
（そういえば……）
俺は不意に思った事をマクゴナガル先生に聞く。
「マクゴナガル先生。ダンブルドアっていくつですか？」
「年齢ですか？確か―１８８１年生まれですから……」
（ん？１８８１年？）
「１１５歳くらいですね」
俺はブッと飲み物を吹きこぼす。
（１１５歳？）
確か前死んだ歳は―あ、分からないや。
（でもタツキの時では今セブルスが中年みたいだから―）
セブルスと一緒に入学したからそれくらいか。
（前が８０くらいないと……）
ダンブルドアより下になるか？
「それ、本当ですか？」
「え、ええ。そのくらいですが……」

「……俺より上だ」
「「えぇっ!?」」
あちらこちらから驚きの声が上がる。……どうやら俺とマクゴナガル先生の会話を聞いていたらしい。
「タツキが下!?」
周りで聞いていたであろうポンフリーが驚きながら直接聞いてくる。
「あ……うん。前死んだ歳は分からないけど、タツキの時はセブルスと一緒に入学してセブルスが今中年だから、それをいれて考えても……」
前が８０くらいいってないと俺が下ですよね?と俺は言う。
「「……確かに」」
あちらこちらで賛同が上がる。
「いつ死んだか分からないんですか?」
マクゴナガル先生が俺に聞いてくる。
「はい」
それに俺は酒を飲みながら答える。
「俺は孤児でしたし、あいつらも恵まれてたわけでは無かったので……」
誰も自分の年齢なんて知らないんですよ、と俺は告げる。
「……そうですか」
「あ、ちなみにホグワーツ設立のやつもでっちあげですよ」
「はい?」
「あれ、いつ建てたのか誰も覚えていなかったんですよね。なのでっちあげました」
騒がしかった周りがシン……と静まり返る。
「でっちあげ?」
ビンズ先生が恐る恐る聞いてくる。
「はい。とりあえずこの時期だろうってことで」
適当に書きました、と俺は言う。
「……」

皆絶句している中で俺は更なる爆弾を落とす。
「魔法大臣が、ですけどね」
ニヤリと俺は笑う。
「さて、懐かしい話しをしましたし……他の先生方の昔話しを聞きたいんですが？」
「すみませんが私はまだ今日の準備が終わっていないのでこれで失礼します」
俺の言葉を聞くなりガタリとマクゴナガル先生が席を立つ。
「マクゴナガル先生？」
それを俺はニッコリ笑い、手を引っ張る。
「聞くだけ聞いて逃げるんですか？」
「いえ、本当に―」
「じゃ手始めにマクゴナガル先生から話してもらいましょうか！」
（逃がさないよ？マクゴナガル先生？）
久しぶりに……と言っても書類くらいの話ししかしていないが昔話しをしたのだ。これを理由に聞き出せるだけ聞き出してやろう。
「逃がしませんからね？」
俺はニコリ、と大広間にいる先生方に言い放った。

百五十五話（前書き）

やっとテストが終わりました。そして英雄後談も『死の秘宝』へと入ります。
あまりストックがありませんが……とりあえず追いつくまでは毎日更新します。

もう少し『英雄後談』にお付き合い下さい。

百五十五話

「じゃ、フィンラ、イエロー、食料は置いていくから此処から出るなよ？」
また新学期になったら戻ってくるから、と言いながら俺はフィンラの頭を撫でる。
いつもはフィンラも連れていくのだが今年はイエローがいる。こいつだけなら絶対に抜け出すのでフィンラを残すことを決めた。
ニャー……とやや不機嫌そうにフィンラは鳴く。
「悪い、フィンラ」
俺はグリグリとフィンラの頭を撫でる。
「イエローを見張って欲しいんだ」
ニャー……と今度は寂しげに鳴く。しかしまるで早く行けと言わんばかりにスルリと俺から離れた。
俺はクスリと笑い、部屋を出た。
バタバタとホグワーツを出ていく。
「タツキ！」
玄関ホールへと近づいた時にマクゴナガル先生から声がかかる。
「マクゴナガル先生？」
「気をつけてください」
マクゴナガル先生がいつもみたいなハキハキとした声ではなく少し震えた声で言う。
「……はい！」
俺はそんなマクゴナガル先生に驚きながらも元気良く答え、ホグワーツを後にした。
ガラガラとトランクを引きずりながら急いでホグワーツ敷地外を目指す。
（確か……）
去年ロンが結婚式がなんたらかんたら言っていた……な？

（あ……正装とか何も準備してない）
というかその前に結婚式終わってないよな？
（とりあえず隠れ穴へと着いてからアーサーに聞けばいいか）
ガラガラと引きずっていたトランクを俺は校門を出てからすぐに止めた。
「じゃ行くか」
俺はバチン、と『姿くらまし』をした。

バチン、と『姿現し』を隠れ穴近くでする。
「出てこれたか？」
俺は隠れ穴近くに出れたかどうかを確認する事を含め、隠れ穴があろう場所へ歩く。
しばらくガラガラとトランクを引きずっているとドンッと垣根にぶつかる。
「いってぇ……」
何気に拗ねに当たり、ジンジンする足をしゃがみこんでさすっている時だった。
「ライカ！！」
「……は？」
俺の名前を呼ばれたかと思った瞬間ドスン、と俺にぶつかった。
しゃがんでいたせいかぶつかってきた勢いを支えられずにバタン、と地面に倒れる。
「無事だったんだね！」
（この声は……）
「ハリー……？」
「スネイプが君を連れ去って行ったから心配したんだよ！？」

ハリーはガクガクと俺の肩を揺する。
「ハ、ハリー……ゆ、揺らさない、で」
「スネイプなんかはダンブルドアを殺した後にだよ！？医務室で眠っている君を戦乱のなか連れ去って言ったんだ！僕があいつに向かって切り裂き呪文や武装解除を放っても避けたり防いだりするし、大声でけなしても口喧嘩っぽくなるだけでライカは連れ去るし！」
「ハリー……頼、む」
揺らさないでくれ。
「ハリー、揺らすのを止めないとライカ苦しそうだよ！」
「そうよ、ハリー。話すのはライカの上から下りてからでもいいんじゃない？」
（ナイス、ハーマイオニー、ロン）
その調子でハリーを俺の上から除けてくれ。
「え？うわぁ！ライカ、ゴメン」
ハリーは慌てて俺の上から下りた。
「ハリー……話したい事があるのは分かったから、とりあえず家の中へ入っても良い？」
このままいたら絶対に此処でベラベラと話されてしまう。ならばせめて中へ入って聞きたい。
「そうだね。おじさんやおばさんも喜ぶよ」
二人共心配していたから、とハリーが言う。
（……二人の話しも聞かないといけなくなるか？）
寝ない、ということはモリーがいるから無いだろうが就寝時間遅くなるかな？
（ま、仕方ないか）
今まで暢気……ではないが寝ていた罰だ。話しくらいは聞かないと。
俺は家に入る少しの間でも騒いでいるハリー達と一緒に隠れ穴へと入った。

百五十六話

（今……何時だ？）
モソモソとベットから顔を出す。
（ん……六時？）
ならあまり寝てないな。
俺は昨日の事を思い出してため息をついた。
昨日、隠れ穴へと入るとモリーとアーサーに攻められた。
「生きていたのね」とか「どうやって帰って来たんだ？」とか、「ライカ、いますぐに夕食を食べるかしら？」「モリー、今私が話しをしているんだが？」「私も話しをしているんです！」「後にしなさい」「いえ、今話さないといけないわ」……どんどんと痴話喧嘩になっていった二人に安心していたらこの隙に、とハリーやロン、ハーマイオニー達に質問攻め。
ハリー達が就寝するまでに散々質問攻めに会い、ハリー達が終わると痴話喧嘩を終えた二人からの質問。
（就寝までしつこかったよな……）
結局寝れたのは四時。
時間を確認した時に六時だったから睡眠時間は二時間もない。
（……下に行くか）
今日は忙しいから早めに下りた方がいいだろう。
（結婚式があるからな……）
俺が気になっていた結婚式は明日だった。ギリギリ俺は間に合っていたのだ。
俺はモソリとベットから下り、ロープを着る。
パタンと扉を閉めてトントンと階段を下り、俺は一階へと下りる。
「おはよう、ライカ。いますぐに朝食を作りますからね」
一階に下りた瞬間モリーから声がかかる。
「あー……俺も手伝います」

どうせ他の人達の分も作るんですよね？と俺は聞く。
「えぇ……そうね。手伝ってくれるかしら？」
モリーは少し考えた後にこう言った。
「はい」
俺は返事をし、厨房へと向かう。
昨日みたいにギャンギャンと質問されずに調理に入る。
（昨日散々話したしな……）
流石にもう質問したりはないだろう。
モリーとせっせと料理を作り、ある程度出来るとモリーから声をかけられる。
「ライカ、手伝いは此処までで良いわ」
後は一人で出来るから朝食を食べなさい、とモリーは言う。
「……分かりました」
俺は素直にモリーの言葉に甘え、自分の分の朝食を持ち厨房を出ていく。
机に朝食を置いてからカタン、と椅子を引いて座る。
「おや、ライカ。早いんだね」
まさに朝食を食べようと手を伸ばした瞬間、アーサーから声をかけられた。
「……アーサーさん」
カタンとアーサーが腰掛ける音が聞こえる。
「ああ、食べていて構わないよ」
俺はアーサーの言葉に甘え食事を始める。
「ライカ、君に伝えなければならない事がある」
「ふぇ……？」
アーサーが深刻そうな声で俺にそう告げた。
「なんへふか？」
「一つは、ムーディーが亡くなった」
俺は眉を潜めながら急いで食べ物を飲み込み、アーサーに聞く。
「亡くなった？」

「ハリーをこちらに連れて来る作戦があちらにばれていた。おかげで奇襲に合い、ジョージは片方の耳を失いムーディーが殺された」
「スパイ……か？」
「それはまだ分からない」
アーサーはため息をつきながら誰かが漏らしたという可能性も無いわけではない、と言う。
「あともう一つ、ハリー、ハーマイオニー、ロンは今学期ホグワーツに戻らないみたいだ」
（……分霊箱か）
俺はアーサーの話しを聞きながら飲み物へと手を伸ばす。
「何をするのか、誰も話さない。ただ……私としては例のあの人絡みとは思う」
ダンブルドアが彼らにしか話さなかった事もあるだろうしね、とアーサーは言った。
「私が話しをしたかったのはこの二つだ。モリー私にも朝食をお願いできるかな？」
アーサーは厨房にいるモリーに声をかける。
俺は自然に止まっていた手を動かし飲み物を飲んでいく。
モリーがアーサーの分の朝食を持ってきたくらいにハリーやフレッド、ジョージやロン達がドタドタと上から下りてきた。
「ライカ、後で話しがあるから部屋に来てくれる？」
恐らく近くにいるだろうハリーがポツリと俺に言ってきた。
「分かった」
俺はハリーに小さくそう答え残りの朝食を食べはじめた。

「ハリー、話したいことって何？」
俺は朝食を食べ終え、早めにハリーが使っている部屋に勝手に入りハリーが戻って来たとたんに質問をした。
「うん。知らせたい事が二つあるんだ」
ドスンとハリーが座る音が聞こえる。

「一つは……ダンブルドアの遺言によって遺産が僕達に譲られたこと」
「遺産？」
遺産をハリー達に譲った？
「うん。ロンは火消しライター、ハーマイオニーは吟遊詩人ビードルの物語、僕はスニッチとゴドリック・グリフィンドールの剣」
俺はブゥッと思わず吹き出した。
（それ俺のぉぉぉ）
「ライカ、大丈夫？」
「う、うん……」
あの糞爺、俺に何も話さず勝手に譲るとは……
「でも、ゴドリック・グリフィンドールの剣は重要な歴史的財産であり専有財産ではない、とくれなかったよ」
（……歴史的財産？）
そんなもんになったのか？あれ。
「それでライカにはダンブルドアの全金貨……お金が渡されたよ。もう金庫に入ってるって」
「……お金？」
（次は金？）
何か珍しい物かと期待―…ん？俺？
「俺に？」
「うん。確か―…頼みごとした時のお礼だって」
（ハリーのやつか？）
なら遠慮なく貰おう。
「もう一つは……僕達は今学期ホグワーツには戻らない」
（やはり……）
「僕達は分霊箱を探しに行く。でもライカは―「行くよ」それはダメだ」
俺はハリーの言葉を遮り言ったのだがすぐに断られる。
「四人も消えたら怪しまれる！それに君は目が見えていない」

いつまでかかるか分からないんだよ？とハリーは言う。
「目が見えてないから何？生活に不自由は無いし、学校だって別に平気」
「平気じゃない！目が見えないって事はただでさえ長い旅がもっと―」
「もっと遅れる、か？」
俺はハリーよりも先に言いそうな言葉を言う。
「っ……」
図星だったらしくハリーは黙り込む。
「言っておくけど旅ならば君達よりは経験しているから。後、学校も問題ない」
俺は別に卒業しなくても平気だし、と俺は言う。
（戻らないからって魔法省へ連絡したりするやつはいないだろう）
それに―…それに分霊箱になっているのはあいつらの遺産だ。無視して安全な場所にいろってのは無理な話しだ。
「絶対に行く」
「～～分かった」
最後にはハリーが折れて一緒に行くことを許可された。
「じゃあ荷造りをしておかないとね」
もっとも俺一人なら剣と眼帯があれば何も要らないが……ハリー達も居るし何かしら持って行った方が良いかな？
「いつでも出られるようにね」
「分かった」
俺は立ち上がり部屋のドアへと向かう。
「早速荷造りしてくるよ」
俺はそう言ってパタンと部屋を出ていく。
（あ、フィンラとイエロー）
食料足りな―……いや、二匹に教えた場所以外にもヘルガの部屋から勝手に持ってきた食えそうな食料は隠してある。
（フィンラは賢いから―…）

きっと見つけるだろう。そしてある程度はイエローの食料も見てくれる……といいが。

（もう運しかないな……）

だが、フィンラは確実に生きているだろう。閉じ込めていた時期も何故か生きていたし。

運次第なのはイエローだけだな。

（……マクゴナガル先生に連絡するか）

最も連絡出来たら、だがな。

俺は部屋の前までたどり着き、ガチャリとドアを開き部屋へ入った。

（さて、荷造りに集中するか）

フィンラ達は気になるが今は荷造りをしなければ……

俺は持ってきたトランクを引きずり出して荷物を整理し始めた。

百五十七話

（……ん？）

朝か？と思いつつベットから起き上がった瞬間だった。

「ライカ、起きろ！」

バンッと勢いよくシリウスが部屋に入って来た。

俺はいきなり響いた大きな音に反射的に身を低くし、警戒したが入って来たのがシリウスだと分かるとシリウスに飛び膝蹴りを食らわせる。

「ぶっ……」

「何で駄犬がいるの？」

ガタンと倒れたシリウスに俺は跨がり顔か首かよく分からないがとりあえず絞める。

「タ……ライカ、首絞まってるん……だが」

どうやら俺が絞めているのは首らしい。

（……放さないけどな）

だが窒息死されても困るので俺は力を緩める。

「さて、何でいるのか聞こうか？シリウス」

「何でって……結婚式に来たに決まってんだろっ！」

手を放せっ！と言ってくるシリウスを俺は無視する。

「結婚式……あ、準備しないと」

しかしシリウスはここで信じられない事を告げた。

「式自体はもう終わったがな」

「……は？」

俺はシリウスの言葉に固まる。

「終わった？」

「あぁ……今は皆自由に飲んでる」

俺は拳を握る。

「シリウス？何で俺を起こさなかったのかな？」

「い……いや、そのな……あまりにもタツキがグッスリと寝てたし、モリーからも寝かせておくようにって……つい」
「へー……なら一発な？」
俺はニコリと笑いシリウスへと拳を下ろす。
「へ？あいたっ！」
ゴツンとシリウスの頭はいい音を出してくれた。
「とりあえず顔は出さないとな……」
制服しかないが……まぁ仕方ないだろう。
俺はシリウスから離れ制服のロープを探す。
（お、あったあった）
手探りでロープを探しだし、それを羽織る。
「シリウス、案内よろしく」
「……はぁ！？」
シリウスは何で俺が、と言い捨てる。
「なら人混みがありそうなところに一人で行け、と？」
「行けよ、そんぐらい」
シリウスはため息をつく。
「ガキじゃないだろ」
「……仕方ないな、ケチなシリウスに折れるか」
シリウスにも付き合いがあるのだろう。……多分。
（さて、行くか）
シリウスの相手もしたし、と俺は思いながらシリウスの隣をスッと通り会場へと向かう。
会場は隠れ穴の庭だ。ちなみにモリー達が一生懸命作ったらしい。
会場に近づくにつれ、騒ぎが大きくなる。
（騒いでいるなぁ……）
まぁめでたい日だし仕方はないだろうが。
（早く挨拶を済ませるか）
会場に入ると一際騒ぎが大きい。
そんな煩い中、俺は花嫁と花婿を目指しウロウロとする。

「ライカ！」
ガヤガヤ騒いでいる周りに負けずロンの大きな声が聞こえた。
「ロン？」
「やっと起きたんだな」
まぁね、と俺は言いながらロンに尋ねる。
「式も終わったらしいし、挨拶くらいはしたいからフラーと―…」
しかし俺は最後まで言う事は出来なかった。
ドンッと言う何か落ちてきた音が聞こえ続いてキングズリーの声が聞こえた。
「魔法省は陥落した。スクリムジョールは死んだ。連中が、そっちに向かっている」

百五十八話

キングズリーの声が途切れた瞬間会場はパニックに陥った。
俺はロンと離れないように手を掴む。
「ロン、ハーマイオニーとハリーを探そう」
「分かった」
ロンは俺の提案にそう答え、ハリー達を探しに走る。
「―ン、ロン！」
ハーマイオニー達も俺達を探していたみたいで合流した瞬間にハーマイオニーが『姿くらまし』をし会場からすぐさまに離れた。

「ここはどこだ？」
結婚式場から離れ、何処か見知らぬ場所に着いたのだろう。ロンが不思議そうに言った。
「トテナム・コート通りよ」
そのロンの疑問にハーマイオニーが答える。
「とりあえず歩いて着替えないと……」
そう言ってハーマイオニーは俺の手を掴みグイグイと先へ進んで行く。
ハーマイオニーは何やら狭いところ……路地だろうか、そこへ着いた瞬間手を話しガサガサと何かを出しはじめた。
「……ハーマイオニー？」
「今、ロンの服を出しているの……あ、ライカ。本当に悪いんだけど……」
俺がハーマイオニーの名前を呼ぶとハーマイオニーは答えてくれた。

しかし悪い事？
「貴方の荷物は入れて来てないの。だから……」
あぁ、だから俺は着替えがない、と。
「別に構わないよ」
元々入れていた荷物も少ないし、別に着替えなくても何か危険な時は姿を消せばいい。
「本当にごめんなさい。さて、二人とも着替えたらとりあえずカフェに入るわよ。あそこなら少しゆっくりと話せるから」
ガサガサと二人が着替えている音が聞こえたがやがて何も聞こえなくなった。着替えを終えたのだろう。
「ライカ、行くわよ」
ハーマイオニーは俺に声をかけて手を握った。
そのままハーマイオニーは俺を引っ張って行く。
（別に繋がなくても歩けるんだが……）
それに個人としては繋ないで歩くならもう少し遅く歩いて欲しい。
（まぁ我が儘だな）
それに今はそんな事を言っている状況ではない。
ハーマイオニーは俺を引っ張っりながらカフェへと入り椅子へ座らせた。
ハーマイオニーは俺の隣、ロンとハリーはその前に座る。
「カプチーノ三つ」
多分やって来たウェイトレスにハーマイオニーはこう注文をする。
「……僕としてはこれからグリモールド・プレイスがいいと思う」
ハリーがこう切り出した時にカランとドアが開く音が聞こえた。
（魔力……二つだから魔法使いが二人か）
他の気配は感じなかった。だから二人で間違いないだろう。
「こちらカプチーノになります」
ドスンと魔法使いが座る音が聞こえると同時にカプチーノが置かれた。
「ダメよ！あそこはスネイプが知っているわ。私としては地方へ姿

現しする方がいいと思う。そこから―…」
「ハーマイオニー」
俺はハーマイオニーの名前を呼んで注意を促す。
（もう遅いかもな……）
俺がそう思った瞬間ガタンと立ち上がる音が聞こえ呪文が放たれる。
俺はガタンと椅子から下り身を低く構えた。
「ステューピファイ！麻痺せよ」
ハリーの麻痺呪文が当たったのがガタンと人が倒れる音が聞こえた。
（あと一人か……）
「エクスパルソ！爆破」
もう一人の奴は爆破呪文を使い何処かのテーブルを爆破した。
「ステューピファイ！」
俺は爆破呪文を使ったばかりの奴に素早く失神呪文を放つ。
それは見事にあたり敵はバタンと倒れた。
「ハリー、どうする？……殺すか」
ロンは震えた声でハリーに聞く。
（……こいつらじゃまだ無理だろうな）
こいつらはまだ人を殺せない。例え殺されかけたとしても、まだ。
俺がそう思っている間にハリーはロンに告げた。
「……止めておこう。死体があったんじゃ僕達がここに居たって分かるし」
記憶を消すだけでいいよ、とハリーは言う。
「……僕、消し方分からない」
俺はそう言ったロンにため息をつきそうになりながらも言った。
「なら俺が消すよ。ハリー達は隠蔽をよろしく」
「「隠蔽？」」
「分かったわ」
ハリーとロンは二人して分からなかったみたいだがハーマイオニーが理解したようなので、ハーマイオニーに頼む。
「オブリビエイト！忘れよ」

俺が記憶修正をかけている間にハーマイオニーは俺が言ったように“隠蔽”つまり、何も無かったかのように壊した物を直してくれていた。
（もうそろそろで終わるな）
俺が記憶修正を終えた頃にハーマイオニー達も終わり、少し話し合った後にグリモールド・プレイスに行く事に決まった。
「行こう」
ハリーのこの言葉を合図にその場で『姿くらまし』をした。

バチンと『姿現し』をし、グリモールド・プレイスへと入っていく。
玄関から中へ入るとムーディーの声が聞こえた。
「セブルス・スネイプか？」
「ダンブルドアを殺したのはセ……スネイプだ。俺達ではない」
俺はハリー達の前に立ち、そう告げる。
ヒュッと冷たい風が通ったが『舌もつれの呪い』をくらう事は無かった。
（なんとか避けれたな……）
俺達は玄関からギシギシと音を立てながら客間へ入っていく。
客間へ入り、ドサリとソファーに座った時にトスンと軽い音が聞こえた。
「家族は無事。返事をよこすな。我々は見張られている」
（アーサーか……）
声はアーサーの声だった。きっとロンに向けたものなのだろう。
（見張られている、か……）
思ったより死喰い人の動きが速かったな。一日はかかると思ったのだが……

ハーマイオニー達はアーサーの言葉で安心したのかガサガサと寝る準備をし始めていた。
（おいおい、まさか皆一緒に寝るつもりか？）
敵に襲われるかもしれないのにそれはあまりにも無防備すぎる。
（だがここで一緒に寝なければハーマイオニー達が見逃さないだろう）
先程の不意打ちに近い襲撃もあったせいか、今のハーマイオニーは頭がよく回っていない。
多分俺が起きていると言っても何故か分からないだろう。
（仕方ないな……）
俺はボフンとソファーに倒れ、寝たフリをする。
（こうして時間が過ぎるのを待つか）
最低限三人が寝るまで待てばいいだけだし。
俺は早く三人が寝ないかな、と気配を探りながら目をつむった。

百五十九話

「あれ……ライカ？」
もう起きたの？と言いながらハーマイオニー達が起きはじめる。
「早く目が覚めてね」
見張りをしていたなどとは告げずに俺はハーマイオニーにそう答えた。
「そう……」
「ハーマイオニー、俺は朝食を作るから寝ぼけているのを起こしておいてくれる？」
勿論、君もね、と俺はハーマイオニーに告げる。
ハーマイオニーはクスクス笑いながら了解した。
「じゃ、頼んだね」
俺は行き慣れた厨房へと入り、僅かにあった食料で何を作るかを考える。
（んー…とりあえず適当に量があるように見える奴を作るか？）
材料を持ち、頭の中でどうごまかすか計算しながら刻んでいく。
材料を刻み、ジュージューとフライパンを温めている時に上からドタバタ音が聞こえた。
（何をしているんだか……）
思わずため息をつきながら刻んだ材料と別の材料をフライパンに入れ蓋をし蒸していく。
「ライカ、どいて！」
「……は？」
ハリーがそう言ったかと思うとドスンとぶつかった。
（……あ）
ちょうどぶつかった勢いで俺がよろけた瞬間、腕がフライパンの取っ手にあたりフライパンが宙に浮くのを感じた。
数秒後にガッシャーンと音が立つ。

（……朝食無しだな）
「……ない」
「そんなっ！」
俺は朝食の事を気にしていたがハリー達は違うらしく、パカリと何処かを開けた音がしたと思うと同時に残念そうな声で言った。
「……盛り上がってるところ悪いけどさ、朝食どうしてくれるの？」
「「「あ……」」」
（材料無いんだよなぁ……）
やはりこの旅が急だったせいかあまり材料は無く、そんな中で作っていたのだ。無駄に使える余裕はない。
（……どうしよう）
「朝食……それよりもライカ、分霊箱があったんだよ！此処に！！」
「分霊箱が？」
「でも……クリーチャーが持って行ったみたいで……」
ハリーはどんどん声が小さくなっていく。
（今はもう無いか）
俺はんー…と考える。
（クリーチャーを呼ぶか？）
しかしクリーチャーの主はシリウスだ。名を呼んだだけでは来ない。
（……頼むか）
俺はスィと厨房を離れ、グラッドを呼び出す。
「ライカ？」
黙って厨房を出て行ったせいかハリーが後ろからついて来た。
「わ、それ！」
「説明は後。グラッド！」
『キュウ？』
いつもとは違う俺の態度にグラッドも素直に差し出した腕に留まった。
「ハリー、羊皮紙と羽根ペン。早く！」
「わ、分かった」

バタバタとハリーは駆けて行き、しばらくするとまたバタバタと戻ってきた。
「ライカ、羊皮紙と羽根ペン！」
「ありがとう」
俺は片手でハリーから素早く受け取り机に追い手から必要な事を書き出す。
「……こんなものか」
急いで書き終え、俺はグラッドに告げる。
「これをヤギルに渡してくれるかな？」
『キュウ！』
「ん、頼んだ」
俺はフワリと頭を撫で、留まらせている手を高くあげる。
『キュ……』
名残惜しそうに鳴きながらグラッドが離れた。
そして羽ばたく音が聞こえたと思った瞬間燃えるような音が聞こえた。
「ライカ、今の不死鳥は……」
様子を見ていただろうハリーが怖ず怖ずと聞いてきた。
「俺の不死鳥だよ。名前はグラッド」
「……グラッド？」
俺は確認するように言ったハリーに俺は肯定する。
「うん。グラッドはダンブルドアのフォークスとは違って使役にしているんだよ」
「……使役？」
「使役ってのは……そうだね、簡単に言うと自分の都合で何処でも呼び出せる動物……かな」
他にも色々と出来るけどね、と俺は告げる。
「……いつの間にそんな事をしてたの？」
しかも不死鳥なんてそういない動物を、とハリーは言う。
俺はニヤリと笑いながら言う。

「秘密」
「秘密って……教えてくれてもいいんじゃないか？」
「ハリー……」
拗ねたように言ったハリーに俺は言い放つ。
「朝食の片付けしろよ」
「……え？」
「いや、お前達のせいで無しになった朝食」
床に散らばってるからよろしく、と俺は言ってソファーに座る。
「いや、いや、いや。そこはライカだろ！？」
料理はライカ担当だし、とハリーは言う。
「へー……ハリーは朝食いらないのか」
作る分が楽になるな、と俺が言うと慌ててハリーは去って行った。
（別に一人分くらい何も変わらないんだがな）
と言うよりも料理くらいは作れるようになったほうが良いのでは？
（結婚しても作る時は来るしな。……ん？）
いきなりボゥッと炎が燃えるような音が聞こえた。
『キュウ！』
「グラッド……」
俺は左腕を高く上げる。
しばらくすると鋭く食い込む感覚がした。グラッドが乗ったのだろう。
「早かったね。お疲れ様」
俺は左腕を水平に下ろし、グラッドを撫でる。
『キュウ……』
「……お休み」
俺は魔力をグラッドに流し込み、グラッドを戻す。
俺がグラッドを戻した瞬間にパチンと『姿現し』の音が響いた。
「……お久しぶりです、タツキ様」
「久しぶり、ヤギル」
仕事中に悪かった、と俺は付け加え言う。

「いいえ。頼まれた物を持ってきました」
「うん。それはありがたいんだけど……」
俺は材料とクリーチャーを連れて来るように書いたはず……
「ヤギル……何で魔力が三つあるの？」
「ドビーもいるからです。ドビーはハリー・ポッターを助けに来たんです！」
「あぁ……ならクリーチャーと一緒にハリーのところに行ってくれるかな？」
比較的、屋敷しもべ妖精は甲高いがドビーの声は普通の屋敷しもべ妖精よりも高すぎて少し耳が痛い……
「分かりました！」
そうドビーが言ってからもう一つの魔力と共に去って行った。
「ヤギル……耳が痛い」
「……申し訳ございません」
まぁヤギルに当たっても意味ないよな……
「別に良いよ。材料を持ってきてくれた？」
俺は重要な事をヤギルに聞く。
「はい。希望通りに日持ちするような材料を入れています」
「お？本当か？」
「はい。こちらになります」
ドサリとヤギルは材料を渡してくれた。
「ありがとう、あまりこっちは無くてね……」
危ないところだったよ、と俺は付け加える。
「いえ、屋敷しもべ妖精ならば当然です」
また用があったら連絡を寄越して下さい、と言ってヤギルは『姿くらまし』をした。
（これで食料の心配は無くなったな）
俺はガサガサと材料を持って厨房へと向かう。
「ライカ！」
片付けられた厨房で遅い朝食を後少しで出来る、というところでハ

リーから声をかけられた。
「何？」
俺は料理に意識を向けながら聞く。
「此処にあった分霊箱はマンダンガスが盗んだみたいだ」
だからドビーとクリーチャーに連れて来るように頼んだ、とハリーは告げる。
「へー……ハリー、これ持って行って」
「……ライカ、聞いてた？」
出来た料理をハリーがいるだろう場所に差し出すとハリーから呆れたように聞かれた。
「聞いてたよ。マンダンガスが盗んでここにはない。なら今は気にしなくていい」
「何でそうなるんだよ？」
少しカチンときたのか怒気を含んだ声でハリーは言う。
「俺が料理を焦がしてもいいなら一日中考えるけどね」
俺は目が見えていないんだ。俺は難しそうな分霊箱を考えながら料理を作るなんて、そんなに器用に頭は使えないんだよ、と俺はハリーに告げる。
「……ゴメン」
「じゃ、持って行って」
反省しているようなハリーを俺は容赦なく使う。
「後、ハーマイオニーとロンも別のところに居るならもうすぐ朝食兼昼食が出来る、って伝えてきて」
「……分かった」
やや頼んだ事に不服な感じな声を出しながらもハリーは去って行った。
（マンダンガスか……）
あいつ盗むのは俺並に素早いんだな。
料理の最終段階に入りながら俺はボンヤリとそう思った。

百六十話

ハリーはどうやらドビーにマンダンガスを連れて来るように頼んだらしい。クリーチャーも一緒に。
だがドビーは昨日もこの前も来なかった。
お陰でハリーやロン、ハーマイオニーはイライラが募り三人揃うと……いや、揃わなくてもこちらまでイライラが感染しそうなくらい最悪な空気をさらけ出す。
なのでここ最近は三人を避け、一人……いやグラッドと一緒に部屋に篭っている。
何故グラッドが居るかというと俺が単に一人では寂しいから。やるような事も無いし。
『キュウ？』
グラッドも何かを察しているのかいつもみたいに突いたりせずに大人しく一緒にいる。
「ん？……どうした？」
『キュー…』
バサバサと羽ばたく音が聞こえたかと思うとズシンと頭が重くなる。
（頭に乗ったのか？）
右手をスッと頭へ持っていくとフワッという感触と共に暖かい温もりが伝わってきた。
（……ん？）
玄関にリーマスの魔力が感じられる。
（よく来れたな）
確かアーサーが見張られてる……とか言ってなかったか？
俺は密かにリーマスの動向を探っているとリーマスがこちらへと向かっていた。
（……え？）
先にハリーの所へ行くと思っていたんだが……

（何故俺のところ？）
まぁリーマスが来たら分かるだろう。
やがてコンコンとノックがされた。
「入っていいよ、リーマス」
「失礼するね」
俺が入室を許可すると同時にリーマスがガチャリと入ってくる音が聞こえた。
「てっきり真っ先にハリーの所に行くと思ってたよ」
「その前に君に味方をしてほしい案件があってね」
「……味方？」
俺は眉を潜めながら聞き返す。
「うん。……僕が一緒に旅に行くことだよ」
「……リーマスが？」
リーマスはこの前トンクスと付き合ってるって聞いた気がするんだが……
「でもリーマス、君確かトンクスと付き合ってなかったっけ？」
「え？トンクスとなら結婚したよ？」
「……はい？」
（いつの間に？）
俺がわけが分からないような声を出すとリーマスはあぁ、と納得したように言った。
「そういえばタツキ、報告した時は居なかったね」
そう言ってリーマスはスゥと息を吸い込んだ。
「僕は、トンクスと結婚したんだ……」
「おめでとう！とうとうリーマスも家庭を持ったか」
でも、と俺は話しを続ける。
「トンクスがいながら何故旅を？」
俺がそう聞くとリーマスは突然言い出した。
「トンクスは妊娠している」
「なら尚更だろ」

突然の報告に驚きながらも俺は素早く言う。
「妊娠しているなら尚更側にいないとダメだろ」
「トンクスには両親がついている。だから大丈夫だ」
その言葉に自分の顔が歪むのが分かった。
「リーマス……そんなに馬鹿だとは思わなかった」
「馬鹿？私が？」
俺は息を吸い、リーマスに告げる。
「馬鹿だ。両親がいるから大丈夫？そんなわけないだろう。トンクスが何より一番居て欲しいのは両親ではなくてリーマスだ」
そんぐらい分からないわけじゃないよな？と俺は言う。
「私なんかは―「いなくていい、なんて言うんじゃないよな？」……ああ、そうだ。いなくていい」
君なら私が世間的にどんな所にいるか分かるだろう？とリーマスは言う。
俺はそう言ったリーマスに平手打ちを食らわせる。
パチン、という何とも気持ちいい音が部屋に響いた。
「親がいない子供がどんなに大変か分かるか？」
俺の問いにリーマスは答えない。
「今ではもうたった一人、という事はないがそれでも周りからは憐れみな目で見られるだろうし寂しいはずだ」
俺のこの言葉にリーマスはこう返した。
「父親が狼人間だと知られるよりかはマシだと思う」
「……俺からしたら例え父親が狼人間であろうとも居て欲しいけどな。周りからどんな目で見られようとも、将来的にその事で親子の仲に亀裂が入ったとしても……」
「……あの一人の寂しさより辛いものは無いと思う」
「……」
シン……とした空気が流れる。
「とりあえず、俺は賛成しない」
「……分かった」

そう言ってリーマスはフラフラと出ていく。
（はぁー……）
妊娠したってのもビックリだがリーマスの発言も驚いた。
（あれではまるで……）
死にたいと、言っているみたいで。
（そんなリーマスはハリーにでも説教されればいい！）
ハリーならきっとリーマスに説教をするだろう。
「なー、グラッド？」
『キュウ？』
「リーマス、説教されると良いな？」
『キュ！』
「お？グラッドもそう思うか」
まぁ、単に元気よく鳴いただけだろうがな。
それからはグラッドとの会話（一方的）をして過ごしていたんだが、いきなりノックも無しでバタン、と扉を開く音が聞こえた。
「ライカ！」
「ハリー…？」
何やら興奮したような声でハリーは素早く言う。
「此処にあった分霊箱、あれ今アンブリッジの所へ渡ったんだよ！」
……アンブリッジのところ？
「あ、アンブリッジ？」
「うん。それで今から分霊箱についての会議をするから下りてきてくれる？」
「分かった」
俺はヒョイと立ち上がり、ハリーの後に続いた。

百六十一話

ハリー達と話し合って魔法省に乗り込むのはポリジュース薬の関係でハリー、ロン、ハーマイオニーの三人で、俺は髪の毛を抜かれる本体の見張りとなった。
そしてそれを実行するに当たってはハリー達が何週間かかけて魔法省に勤めている人の行動パターンを調べ上げた。
その間暇な俺はハリー達が盗んできた新聞を読んで時間をつぶしていた。
そして、今持っている新聞には驚いたことにセブルスが校長だという事が乗っていた。
（セブルスが校長、ね……）
セブルスはきっとシリウスの爺を越し、歴代一嫌われた校長となるだろう。
（セブルスを嫌ってないのスリザリンだけだしな）
「ライカー？もう行くよ？」
「分かった。すぐに行く」
俺は新聞を畳み机に置いてから席を立ち玄関へと向かう。
「俺達より先にハーマイオニー達は行っているんだよね？」
「うん。そのはずだよ」
僕達も行こう、とハリーは言う。
「一――二――三」
ハリーの合図と共に俺達は『姿くらまし』をした。
パチン、と事前に話しをしていた場所に俺達は『姿現し』をした。

「それじゃ、手筈通りにやるわよ」
ハーマイオニーの言葉を皮切りにハリー達は動き出し、次々と成り代わる本人を連れて来た。
「ライカ、今は気絶しているけれどもし起きたら言い訳なりまた気絶させるなりしていいから」
ハリーはこの場所を離れる前に言った。
「分かった。気絶させる」
「頼んだよ」
この言葉を最後に三人は去って行く。
（見張り、と言われてもな……）
此処はあまり人が来ないから実質は待つだけだ。
（本人が起きたら大変だが……）
今のところ起きる気配は無いので大丈夫だろう。

（……遅いな）
どれぐらい待ったか分からないが数時間は待った気がする。
（何かあったの―……誰か来たな）
俺のいるところから反対側から一人、近づいて来る。
俺はスッと近づいて来る奴と向き合うように体を動かした。
「……タツキ・ヒブカだな？」
その言葉で俺は戦闘体制に入る。
「……お前は誰だ？」
先程の質問に肯定せず反対に俺は質問をした。
「どうせ死ぬ、お前には名乗らない！！」
そう言ったあいつはダンッと俺に向かって来た。

（この魔力は……）

……会った事が無いわけではないな。

あいつは三年前……あのクィディッチ・ワールドカップにて俺と会った死喰い人と同じ魔力だ。

（だが……何か襲われるようなこと―）

あ、俺今魔法界中から狙われているハリーと一緒にいるんだ。

（なら狙われて当然か）

俺はいつの間にか放たれていた呪文を避けながらそう結論つけた。

「ステューピファイ！」

「エクスペリアームス！」

放たれた失神呪文に対し俺は武装解除を放ち、相殺する。

ドォォン……と大きな音が響いた。

（これぐらい大きいならきっと……）

煙りがすごく立ち込めているはずだ。

俺は真っ正面にいるだろう位置からすぐさま右側に回り込み、失神呪文を放つ。

「ぐっ！？」

驚いたような声を聞いたかと思うとバタン、と大きな音が響いた。

（倒れたか……）

此処にいるのも危険になったな。なにせ死喰い人が来たのだし。

（かといってハリー達を待たないといけないしな……）

俺がそう思った瞬間だった。不意にハーマイオニーの声が聞こえた。

『ワールドカップの場所、森』

……森？

百六十二話

パチン、と俺は懐かしきのワールドカップが催された森へと来ていた。
（……へぇ？）
森へ入った瞬間の感想だった。
（ハーマイオニーだろうな。ハリーやロンがこんな魔法を覚えてるとは思えない）
日頃の成果がよく出ている。
（マグル避けや守護魔法、その他の出来る限りの対策をしているな……）
だが、完璧ではない。少し腕があるやつなら見破られるだろう。
（だが、そこまで長くは滞在しないだろうし……）
それにそこら辺の魔法使いなら気づかない。
（まぁ、合格点かな）
俺はザクザクと森を進む。
（……このあたりか）
このあたりが一番魔力が強い。
「ライカ！」
「ハーマイオニー？」
ガサガサと前方から駆けてくる音が聞こえる。
「良かった。無事に着いたのね」
「うん。まぁ何とか覚えていたからね」
「ホントに……良かった……」
ハーマイオニー安心したように言う。
「……何かあったの？」
俺はハーマイオニーの態度と連絡の遅さから何かあったのかと思い、聞く。
「ロンが……『姿現し』に失敗してバラけてしまったの」

俺は眉を潜める。
「……ロンは？」
「『ハナハッカのエキス』を使って今治しているわ」
「ハナハッカのエキス？呪文は使わなかったのか？」
呪文の方がすぐに治るだろうに……
「わ、私……呪文の方は恐かったの。もし、失敗したら……」
ハーマイオニーの声は段々小さくなっていく。
（まぁ、どうなるかは分からないしな……）
「で、ロンは？」
「あ、今テントで休んでいるわ。ハリーも一緒に」
「そっか……」
それから俺はハーマイオニーにテントの場所を聞く。
「ハーマイオニー、テントって何処？」
「え？テントなら此処から少し先にあるわよ」
「ハーマイオニー、先に帰ってて」
「……え？」
俺はクルリと向きを帰る。
「ロンが怪我をしているなら少なくとも今晩は此処にいるだろ？」
なら枯れ木とかを集めないとな。
「え、えぇ……そうする予定だけれど」
けれど、それがどうしたの？とハーマイオニーは聞く。
「燃やす材料がいるだろ？俺が集めてくるからハーマイオニーは先に帰ってて」
そこまで言うとハーマイオニーは分かった、と言って去って行く。
（さて、俺も行くか）
俺はガサリと歩き始めた。

（こんぐらいでいいか……）
俺はガサリと集めた枯れ葉を持ち上げる。
（一晩くらいならもつだろう）
俺はテントの方へと歩きだす。
テントまでは迷わずに行け、三人に顔を出してから俺は料理を作っていた。
作っている時に何やら揉めているような声が聞こえたが、今すぐに聞くことは出来なかった。
（後で聞くか）
覚えていれば、だがな。
ゴウゴウと熱く燃える炎の前で俺はそう思った。

百六十三話

あの時、ハリー達はどうやらハリーが見たウ〝ォルデモートについて話していたらしい。
確か……グレゴロビッチが死んだとか言ってたな。
（あの有名な杖職人がな……）
これならオリバンダーも捕まった線が強くなったな。
そして俺達は今、川が近くにある人気がないところにいた。ロンがまだ回復していなかったがあのまま留まるのは危険だと判断し、移動したのだ。
当然ロンはテント、ハリーとハーマイオニーも居たら邪ー……いや、あまり役に立たなかったのでテントにいる。
そして俺は今、川にてご飯の材料（魚）を捕まえている。
呪文を使えばすぐに手に入れる事は出来るのだが、運動不足なのか歳なのか最近体力が減っているように感じてしまう。なので杖を短剣に変えグサリグサリと魔法無しで魚を捕らえているのだ。
（一人二匹として……あと一匹か）
スルリと足元を魚が横切ったような感触がした後、俺は素早く足元近くの前方を刺す。
グシャリ、と肉を貫く感触が伝わる。
（捕まえたか……）
俺は魚を短剣に刺したままザバザバと岸辺へ向かう。
陸へと上がると同時に俺は短剣から魚を抜く。
（下処理とかしないといけないよなー…）
面倒だがきっとハリー達は内蔵付きの魚など食べれないだろう。
（……やるか）
俺は魚のお腹を確認してから切れ込みを入れはじめた。

「ライカっ！」
「……ハリー？」
ハァハァと息を切らしながらハリーは言った。
「来てっ……」
そしてハリーはぐいっと腕を引っ張って行く。
「う、わ……」
俺は驚きながらも引きずられないようにハリーと同じペースで走るしかなかった。

「ライカを連れて来たよ！」
パサリとハリーはテントに入って行く。
「一体何？」
「ホグワーツの校長室にジニー達がグリフィンドールの剣を盗んだって聞いたからフィニアス・ナイジェラスに確かめようとしてたところなのよ」
俺はパサリとテントに入った瞬間に何があったのか、と聞くとハーマイオニーが答えてくれた。
（盗みに入った？）
「ブラック教授？お願いですからお話しできませんか？どうぞお願いします」
「『どうぞ』は常に役立つ」
ハーマイオニーがこう言うと冷たい声が聞こえた。
「オブスクーロ！目隠し！」

すかさずハーマイオニーは目隠し呪文を放った。
その目隠しによってナイジェラスは怒っていたがジニー達が校長室に入った事と、罰則として禁じられた森へ行かされた事を教えてくれた。
（そんな酷い罰則ではないな……）
ハーマイオニー達も安心したのか、グリフィンドールの剣が学校にあるのかを聞き出す。
「ブラック教授、私達が本当に知りたいのは、誰か別の人が剣を取り出したかどうかです。例えば―磨くためだとか」
「マグル生まれめが――小鬼製の刀剣・甲冑は磨く必要などない。単細胞め。ゴブリンの銀は世俗の汚れを寄せつけず、自らを強化するもののみを吸収するのだ」
俺は思わず吹き出した。
（磨く必要がない？嘘だろ？）
あの野郎っ……磨く必要がないなら先に言え！
（今まで磨いていた俺は……）
すっごい間抜けじゃないか？
（サラザール達も教えてくれれば良かった―…）
俺はふと思う。
（……そう言えばサラザール達は知っていたのか？）
……分からねぇ。
（まぁ、良いか。別に磨いても問題はない―）
「嘘つけ！」
（……へ？）
ロンの怒鳴りつける声で俺の思考が止まった。
「君だってそう言ったじゃないか。失望したって。ハリーはもう少しわけがわかってると思ったって―」
「そんな言い方はしなかったわ――ハリー、違うわ！」
（喧嘩、か？）
どうやら俺が物思いにふけっている間にハリー達が喧嘩をしていた。

「それじゃ、どうしてまだここにいるんだ？」
しばらくの沈黙の後、ハリーはこう言った。
「さっぱり分からないよ」
「なら家に帰れよ！」
「ああ、そうするかもな！」
まさに売り言葉に買い言葉だ。
もはや勢いでドンドン言い合っている。
「妹の事をどう話していたか、聞いたか？ところが君は鼻にもかけなかった。僕は気にしていたのに」
「僕はただ―…ジニーは他の二人と一緒だったし、ハグリッドも一緒で―」
「ああ、分かった。君は心配していない。それに心配なのはジニーだけじゃない。『ウィーズリー家の子どもたちが、これ以上傷つけられるのはごめんだよ』って聞いたか？」
「ああ、僕―」
「でもどんな意味なんて気にしないだろう？」
「ロン！」
二人の喧嘩にハーマイオニーが割って入る。
「何も新しい事件があったという意味じゃないと思うわ。私たちの知らない事が起こったわけじゃないのよ、ロン。よく考えて。ビルはとうに傷ついてるし、ジョージが片耳を失った事は皆が知ってる。それにあなたは黒斑病で死にそうということになってるのよ？あの人が言っていたのは―」
「ハーマイオニー！」
俺はハーマイオニーの言葉を遮る。
（ロンを安心させたいんだろうが……）
核心がある情報ではないし、一緒に旅をするということは常に情報から遅れている。むやみやたらに言わないほうがいい。
（特に頭に血が上っているだろう時は）
だがどうやら止めるのが遅かったみたいだ。

「へぇ、たいした自信があるんだな？いいさ、じゃあ僕は家族のことなんかは心配しないよ。君たち三人はいいよな。両親が安全なところにいてさ――」
その言葉にハリーは大声で言った。
「僕の両親は、死んでいるんだ！」
「僕の両親も、同じ道をたどっているかもしれないんだ！」
ハリーに負けないくらいにロンも言い返す。
「なら、行けよ！黒斑病が治ったふりでもしろよ。そうしたらママがお腹一杯に食べさせくれて、そして―」
しかしハリーは最後まで言わなかった。ハーマイオニーが突っ込んできたロンを止めるために盾の呪文を使ったからだ。
「分霊箱を置いていけよ」
ハリーは言う。
「君たちはどうする？」
何かを投げたような音が聞こえた後にロンはハーマイオニーと……俺にも聞いてきた。
「残るよ」
俺は即答をする。……帰ってももうやる事は無いしな。
「私も……残るわ」
ハーマイオニーも残る事を選んだ。
「そうか。君たちはハリーを選んだ」
ロンはこう言って飛び出して行く。
「ロン、違うわ――お願い――戻ってちょうだい。戻って！」
ハーマイオニーは叫びながら追いかけて行く。
（初めから聞いてたわけじゃないからなぁ……）
ただ、途中からでもはっきりとどちらかが悪い、とは言えない。
言える事は出来ない。
俺はガシガシと頭をかきながら俺はロンが投げた分霊箱を探す。
「ハリー、分霊箱は俺が持つよ。まだ俺は持った事がないから魂の影響が少ないだろうし」

やっと見つけた分霊箱を俺は握る。
（……これは、）
サラザールのあのロケットか。
「分かった」
（……本当に分霊箱になっていたんだな）
今だに信じられないような気持ちでいる俺にハーマイオニーの声が聞こえた。
「い――行って――行ってしまったわ！『姿くらまし』して！」
昔を彷彿とさせながら俺はハーマイオニーの言葉を聞いていた。

百六十四話

ロンが出て行ってから俺達は誰もロンの事に触れず、あちらこちら移動をしていた。
その間にも季節はドンドンと過ぎて行き季節は冬になっていた。
そしてクリスマスが近づいてきたある日、ハリーがハーマイオニーにこう提案してきた。
「ハーマイオニー……僕、ゴー」
「ハリー、手伝ってもらえる？」
俺は二人から離れたところでポカポカと温まりながら話しを聞いていた。
（ハリー……気づかれてないな）
「この印しを見て」
何やらハーマイオニーはハリーに何かを見せているみたいだ。
そしてハリーはこう言った。
「グリンデルバルドの印しだ」
「何ですって？」
「グリンデルバルドはダームストラングの壁にこれを刻んだってクラムが言ってた」
「私聞いてないわ……」
それからハーマイオニーはぶつぶつと呟いていたがハリーがそれを遮った。
「ハーマイオニー、僕、ゴドリックの谷に行ってみたい」
その言葉でウトウトとしていた俺は一気に目が覚める。
「えぇ、私も考えていたわ。少し危険だけれど可能性があるならあそこしかありえないと思うの」
「あのー…あそこに何があるって？」
ハリーは戸惑いながら聞いた。
「何って……剣よ、ハリー。ダンブルドアはあなたがあそこに帰り

たいとわかっていたに違いないわ。それにゴドリックの谷はゴドリック・グリフィンドールの生まれ故郷だし―」

「えっ？グリフィンドールってゴドリックの谷出身だったの？」

ハリーのその言葉で俺は苦笑する。

「ハリー、あなた『魔法史』の教科書を開いたことがあるの？」

「んー……買った時に一回だけあるかもしれない」

ハーマイオニーは呆れながら言った。

「あのね、あの村は彼の名前を取って命名されたの。そういう結びつきだってことに気づいたのかと思ったのに……あの村について『魔法史』に少し載ってるわ。ちょっと待って……」

ガサゴソと探す物音が聞こえる。

やがてハーマイオニーの声が聞こえた。

「一六八九年、国際機密保持法に署名した後、魔法族は永久に姿を隠した。彼らが集団の中に自らの小さな集団を形成したのは、おそらく自然なことであった。魔法使いの家族は、相互に支え守り合うために、多くは小さな村落や集落に引き寄せられ、集団となって住んだ。コーンウォール州のティンワース、ヨークシャー州のアッパー・フラグリー、南部海岸沿いのオッタリー・セント・キャッチボールなどが、魔法使いの住む集落としてよく知られている。彼らは寛容な、または『錯乱の呪文』にかけられたマグルたちとともに暮らしてきた。このような魔法使い混合居住地として最も名高いのはおそらくゴドリックの谷であろう。英国西部地方にあるこの村は、偉大な魔法使い、ゴドリック・グリフィンドールが生まれたところであり、魔法界の金属細工師、ボーマン・ライトが最初の金のスニッチをいた場所でもある。墓地からは古からの魔法使いの家族の墓碑銘で埋められており、村の小さな教会にゴーストの話しが絶えないのも、これで間違いなく説明がつく」

「あなたのことも、ご両親のことも書いてないわ。バグショット教授は十九世紀終わりまでしか書いてないから……でも分かった？ゴドリックの谷、ゴドリック・グリフィンドール、グリフィンドール

の剣。ダンブルドアはあなたがこのつながりに気づくと期待したとは思わない？」

（……俺はそうは思わないな）

大体ハリーが一人ではこの繋がりに気づいたとは思えない。多分、あの爺は俺達が付いていく事を想定し、その上でハーマイオニーが気づくと考えたんじゃないか？

（まぁ本人がいないから確かめようもないがな）

「―カ、ライカ？」

「……え？」

「聞いてたの？ゴドリックの谷に行く事が決まったわ」

最も入念に準備はするからすぐにではないけれど、とハーマイオニーは言う。

「……分かった」

（……行くのか。なら……）

俺はコッソリとある事を決意した。

百六十五話

ハーマイオニーは宣言したように周到な準備が終わるまでゴドリックの谷へ行くことを許可しなかった。
（念には念を入れる、か……）
悪くは無いかな。
そこら辺のマグルの髪をポリジュース薬に入れ、飲むふりをしながら俺はそう思った。
「準備はいい？行くわよ？」
ハーマイオニーのその言葉で俺達はパチンと『姿くらまし』をした。

パチン、と俺はハリー達とは違う場所に『姿現し』をした。
（後で説教だろうなぁ……）
けれど説教されてでも俺は此処に来たかった。
俺が居るのはハリー達と同じゴドリックの谷。けれど此処は多分俺くらいしか知らないだろう。
此処はゴドリックの谷と呼ばれる前……風の谷と呼ばれていた頃、俺が最後に“景色”を見た場所だ。
「……花、持ってきて無いけど……まぁごちゃごちゃ言わないだろ」
俺は墓参り、と言うと此処に来る。
別に此処に墓があるから、とかではない。此処は墓場じゃないしな。
（なんでだろうな？……此処から見た景色が綺麗だったからか？）
此処からは村が一望でき、俺は此処から見る景色が好きだった。
物思いにふける俺をフワリと風がなびく。
（もう少し居ても……いいよな？）

俺は風を感じながら瞼をユックリと閉じていった。

好きなだけあの場所に居た俺は気が済んでから『姿くらまし』をし、ハリー達の魔力を感じた場所へと『姿現し』をした。

（此処……だよな）

ハリーとハーマイオニーの魔力を感じる。

（何かハリーが浮いてるな……ならばハリー達が居るのは家の中か）

……困ったな。勝手に入っても良いのだろうか？

（……もういいや！何か言われたら言わせておけばいい！）

俺はガチャリと中へ入る。

「ハリー？ハーマイオニー？」

バタンバタン、と二階から物音が聞こえる。

（……何をしているんだ？）

俺はトントンと二階へ上がる。

そしてガチャリと扉を開けた瞬間俺の顔の真横を何かが通り過ぎた。

「ライカ！蛇よ！」

ハーマイオニーのその言葉と同時にガシャーンと壁に当たる音が聞こえる。

「ロコモーター・モルティス！足縛り！」

俺は音が聞こえたところに足縛り呪文を放つ。……最も蛇に足は無いためしばらく動けなくするだけだろうが。

「ハーマイオニー、ハリーは？」

「一緒にいるわ！ライカ、こっちに」

俺は急いでハーマイオニーの元へと駆ける。

俺がハーマイオニーの隣へ着くとハーマイオニーは手を握り『姿くらまし』をした。

パチンと『姿現し』をする。
「んっ……ライカ、手伝ってくれない？」
「手伝う？」
「ハリーは突然倒れたのよ」
「あぁ……分かった」
ハーマイオニーだけでは運べないと。
（ハリー…意外と重いんだな）
こう思いながら俺はハリーを持ちかかえる。
（ん？……平均くらいじゃないか？）
ならハーマイオニーが力無いだけか。
「ライカ……力あるのね」
「そう？……ハーマイオニー、ハリーは何処に運ぶの？」
俺は何処に運ぶのかをハーマイオニーに聞く。
「……あ、テントがまだだわ」
「……」
ハーマイオニーがバタバタとテントを立てる音を聞きながら俺はハリーを抱え持つ。
「ライカ、中のソファーに下ろしてくれないかしら？」
「分かった」
テントが立ったのか、ハーマイオニーが俺に声をかけてきた。
俺は返事をし、テントへと入って行く。
（ソファーは此処か……）
俺はテントに入りソファーの位置を確認してからハリーを下ろす。
「ハーマイオニー、見張りは俺がしておくからハリーを見てて」
「分かったわ」
ハーマイオニーは俺の言葉にすぐに返事を返す。

（よし、行くか）
見張りをしに行くついでに保護魔法をかけに行かないとな。
俺はパサリとテントを後にした。

百六十六話

俺達はハリーが目を覚ましてからすぐにその場所を去った。
それからあちこち当てなくフラフラと移動をしていたが二人が相当落ち込んでいる雰囲気が漂っていた。
（仕方ないと言えば仕方ないだろうが……）
ロンは出て行ったし、剣があると思って行ったゴドリックの谷には敵は居たが剣は無い。
（だからってダラダラと動かれてもなぁ……）
現在二人は敵を警戒はしているがダラダラと歩いていてスピードが遅い。
そのおかげで現在、俺は珍しく二人より先に歩いている。
（ロンが帰って来たら少しはマシに―…）
二人の事を考えていたせいか回りの気配を探るのが怠りガツンと何かにぶつかってしまった。
（いっ―…て）
顔がぶつかったのかヒリヒリする。
（……一体誰だ！！）
こんなところに何かを設置するなんて……
俺はイライラしながらも正体を知るために“読み取り”を始める。
（……看板？）
右はランスター横町
左は黒の森
（黒の森？黒の森って確か……）
昔に来たことがある森だな。
（地形も知っているし……こっちに行くか）
俺は足を左へと向ける。
「ライカ！？そっちはダメよ！」
俺が森へ向けて歩きだした時焦ったようにハーマイオニーは言った。

「……え？」
「そっちは確か黒の森でしょ？黒の森は立入禁止なのよ！」
「た、立入禁止？」
いつの間にそんな事に……
「えぇ。理由は確か……ものすごく臭いから、だったかしら？」
（臭い？……あ）
ヤバイ……もしかして俺が昔あそこで使ったやつか？
（だが……）
使用したのはもう約千年前だ。俺ではない……はず。
「ライカ、右の村へ行きましょ？」
「分かった」
俺は足の向きを黒の森からランスター横町へと変える。
看板によるとランスター横町へはあまり時間もかからずにたどり着く事が出来た。しかし俺達は村から少し外れたところにいた。
「今日は此処に泊まりましょう」
ハーマイオニーはそう言った。
（まぁ目撃者を出したくないんだろうな）
「ライカ、テントを立ててくれる？」
「ん」
俺はハーマイオニーに短く返事を返しテキパキとテントを立てていく。
テントを立て終えてからは見張りを交代しながらも夕食を食べ、各自自由な時間を過ごしていた。
（……もう少しで俺か）
俺は時間を確認しパタンとハーマイオニーから借りた本を閉じる。
「さて、行くか」
俺がソファーから腰を上げた時だった。
「奴らだ！！」
見張りに出ているハリーの叫び声が聞こえた。
（死喰い人か！）

俺は杖を抜き急いでテントから出る。
（ハリーと……知らない奴が四人）
多分死喰い人だろう。
（ハリーが一人相手にしているから……）
俺が三人を相手にすればいい。
俺はこちらに意識を逸らす為になるべく大きな音がする呪文を放つ。
魔法は成功し、この辺り一帯にバーンと大きな音が響く。
「三人はこちらだよ」
「……もう一人居たのか」
舌打ちをしながらも死喰い人はそう言う。
「だが、ガキ一人だ。三人もいらないだろう。一人は弱そうだし」
（……弱そう？）
へー…そんなに弱そう？
（馬鹿はすこぉ～し、痛い目に合わないとなぁ？）
学習しないだろう。
俺は早打ちを使い瞬時に三人を気絶させる。
（此処からが本番だよなぁ？）
俺はニヤリと笑いながら敵の背に回った。

「……ライカ？」
「あぁ、ハリー生きてたんだ？」
俺は関節を抜きまくった三人から離れハリーへと近づく。
「何したの？」ハリーは恐らく三人を見たのだろう。こう聞いてきた。
「あぁ……悪い子にはお仕置きだよね？」
「……え？うん？」

ハリーは何だか分からないみたいだったが肯定をした。
「だから俺はお仕置きしただけだよ？」
ニヤリと口を上げながら俺は言う。
「……ライカ、ハーマイオニーが移動するって」
ハリーは聞かなかった事にしたのか話しを変えた。
「分かった」
その事に俺は内心つまらないな、と思いながらもハリーと一緒にハーマイオニーの元へと向かった。
「あ、来たのね。二人ともすぐに行くわよ」
ハーマイオニーの元へ着くなりハーマイオニーはそう言って手を繋ぎ『姿くらまし』をした。

百六十七話

パチンと『姿現し』をする。
「ハーマイオニー、ここは？」
ハリーがすぐさまハーマイオニーに問う。
「グロスター州のディーンの森よ。一度パパやママと一緒にキャンプに来たことがあるの」
そう言ってからハーマイオニーは続けて話す。
「ライカ、私がテントを立てるから周囲に保護呪文をかけてくれない？」
「分かった」
シュルリと俺は杖を抜く。
（敵に悟られないくらいでいいんだよな？）
流石にホグワーツみたいにしろとは言わないだろう。
（あれ、すごく疲れるしな）
俺は昔を思いだし、思わず意識が飛ぶ。
（あ、いや、いや。今は保護呪文をしないとな）
俺は無言で杖を振り保護呪文をかけていく。
ガサリッ
（……ん？）
保護呪文をかけている最中に何者かの足音が聞こえた。
（動物だったらいいが……）
また死喰い人だったら笑えない。
（……罠でもしておくか）
軽いやつならば出来る……はずだ。
（まずは手頃な木でも集めないとな）
あと蔦に変わるような物も。
俺は簡単に保護呪文をかけるとテントから離れた。

（……ん？）
俺は手頃な木を拾いながら森の中をうろついていた時だった。
（この魔力……セブルス？）
何でセブルスの魔力があるんだ？
「直接聞いた方が早いな……」
俺はセブルスの元へと駆け出した。

「セブルス！」
「……タツキ」
セブルスは困惑したような声を出した。
「……どうして此処に居る？」
「同じ言葉を返すよ、セブルス。何故此処に居る？」
「それは……」
セブルスは言いにくそうに話す。
「……グリフィンドールの剣をポッターにな」
「へー…ってグリフィンドールの剣？」
セブルスが持ってたの？と俺は問う。
「あ……あぁ。そうだ」
「へー……ねぇ、セブルス」
何だ？とセブルスは短く返事をした。
「校長ってセブルスでしょ？ダンブルドアに―…」
俺は空気を思いっきり吸い込み言い放った。

「何勝手に俺の物を遺産扱いでハリーに渡してるんだよってな」
「……分かった。伝えておこう」
「あ！ついでにあいつの肖像画も燃やしとけ」
「……」
セブルスは返事をしなかった。流石にそれは出来ないか……
「なら……今度肖像画をビリビリに引き裂くか」
「止めろ」
ポツリと言った言葉にセブルスが素早く止める。
「大丈夫。セブルスには迷惑かけないよ」
俺は笑顔で言う。
「お前は……」
セブルスは呆れたようにため息をついた。
「……我輩はそろそろ行く。精々我々にやられないようにな」
最もお前にボロボロにされているが、とセブルスは付け加えた。
「それはあいつらが悪い。ダンブルドアへの伝言忘れるなよー」
「ああ」
そう短く返事をし、パチンと『姿くらまし』をする音が聞こえた。
（さて、俺も早く集めないとな）
俺は持っている木を落とさないように歩き始めた。

（出来たっ！）
材料が十分とは言えないから逃げる際の時間稼ぎ用にしか作れなかったが十分だろう。
（ん？この魔力は……）
「ライカ！」
「……ハリー？」

ハリーはやけに嬉しそうに声をかけてきた。
「ロンが帰って来たんだ！」
（やっぱり）
ロンの魔力だったな。
「ライカ……」
少し罪悪感があるのか落ち込んだような声を出すロン。
「ロン、覚悟しておくんだね」
ハーマイオニーすごく怒っていたから、と俺は付け加える。
「……それ、ホント？」
ロンは恐る恐る聞いてくる。
「あぁ。ハーマイオニー、少し前まで泣いてたし。ね、ハリー？」
俺はハリーに話しを振る。
「え？ああ……うん。泣いてた」
それを聞いたロンは俺達から離れ、テントへと向かった。
（これで一段落つくな）
俺は今だに留まっているハリーに声をかける。
「ハリー、飯を作るの手伝ってくれる？」
ロンが居るから少しは豪華にね、と付け加える。
「え？……うん！」
ハリーは嬉しそうに言い、俺の元へと駆けてきた。
（さて、何を作ろう？）
ロンとの再開を祝ってロンの好きそうな物でも作ろうか。
「ハリー、火を起こしてくれる？」
「分かった」
ハリーに指示を出しながら俺は材料へと手を伸ばした。

百六十八話

ロンが戻ってきた事により、沢山の情報が分かった。
例えば保護呪文をかけているのに何故ロンがこの近くに来れたのか？
これは『火消しライター』が役に立ったらしい。
ダンブルドアは『火消しライター』に何か細工をしていたのだろう。
ロンが言うにはカチリと火を付けると青い炎がユラユラと現れて導いてくれたらしい。
きっとダンブルドアは見通していたんだな、とロンは言っていた。
次にセブルスが持っていた俺の剣。
あれは無事にハリーの手に渡り、そしてロンが剣で分霊箱を破壊した事も二人から聞いた。
（……あれで分霊箱壊せたんだな）
他にはウ〝ォルデモートは『禁句』を使っているらしい。
これは『禁句』とされている言葉を言うとその言った本人の場所が分かる、とやや扱いずらいような魔法だ。
何故扱いずらいかと言うとそれが効果的になるかどうかは時と場合によるから。
しかし今回の判断は感心するほど正しい判断だと思う。
ウ〝ォルデモートは『禁句』を『ウ〝ォルデモート』にした。普通の魔法使いは『例のあの人』と呼ぶので『ウ〝ォルデモート』と呼ぶのはハリーやウ〝ォルデモートに抵抗する者だけだからだ。
（本当に良くこんな魔法を知っていたよな……）
伊達にホグワーツを首席で卒業してはいないって事か。
そうして色々と情報を交換し終わった現在、俺達はゼノフィリウス・ラブグッドの元へと向かっていた。
何故、ラブグッドの元へと行くことになったのかと言うとあれだ……『グリンデルバルトの印』。あれをハーマイオニーがあちらこちらで見かけたらしい。

その時グリンデルバルトが生まれる前にもその印があったのを見つけたらしく、結婚式でもその印のアクセサリーをぶら下げていたらしいゼノフィリウス・ラブグッドにその印の話しを聞きに行きたい、とのハーマイオニーの意見から現在向かっている訳だ。

（何だか脱線しているような気がするが……）

まぁ元々が根拠のない旅だし、何か分霊箱に近づけるかもしれないしな。

「あ、あれかな？」

どうやらハリー達にはラブグッド家が見えてきたらしい。

「あぁ、間違いない」

あのラブグッドが住みそうな家だ、とロンが言う。

「とりあえず行ってみましょう？」

家の場所が分からない俺は三人から少し離れて後をついていく。

しばらくするとたどり着いたのかノックをする音が聞こえる。

「なんだ？何事だ？君たちは誰だ？何しに来た？」

苛立ったような声でラブグッドは言う。

「こんにちは、ラブグッドさん。僕ハリーです。聞きたい事があるのですが中へ入ってもよろしいでしょうか？」

「私は……私は残念な……いや、入りなさい。急いで！」

俺達は家に入り、二階へと案内される。

ラブグッドは一度紅茶を取りに行くとかで下におり、何やらまずそうな臭いを立ち込めながら戻ってきた。

（飲み物の匂いか？これ……）

絶対に口にはつけないでおこう。

少し雑談をした後、ハーマイオニーがグリンデルバルトの印について問う。

「ラブグッドさん、ビルとフラーの結婚式に首から下げていた印のことですけど、あれにどういう意味があるのかと……」

するとラブグッドはサラリと言った。

「『死の秘宝』の印のことかね？」

百六十九話

「死の秘宝？」
ハリーが理解出来ずに再度繰り返す。
（死の秘宝……俺も知らないな）
「聞いたことがないのかね？まぁ信じている魔法使いはほとんどいない。ふむ……君達は『三人兄弟の物語』を知っているのかね？」
三人兄弟の物語？
（……それなら知ってるな）
「あぁ」
「「はい」」
「いいえ」
俺とハーマイオニー、ロンは知っていたがハリーは知らなかったのか否定した。
「すべては『三人兄弟の物語』から始まる……どこかにその本があるはずだ」
「ラブグッドさん、私が持っています」
ラブグッドの言葉を聞いた瞬間素早くハーマイオニーが言った。
「なら声を出して読んでみてくれないか？」
その方が皆が理解するには一番良いだろう、とラブグッドは言う。
「あっ……分かりました」
少し緊張したようにハーマイオニーは答え、三人兄弟の物語を読みはじめる。
「昔々、三人の兄弟がさびしい曲がりくねった道を、夕暮れ時に旅していました。やがて兄弟は歩いては渡れないほど深く、泳いで渡るには危険すぎる川に着きました。でも三人は魔法を学んでいたので、杖を一振りしただけでその危なげな川に橋を架けました。半分ほど渡ったところで三人は、フードを被った何者かが行く手を塞いでいるのに気がつきました。そして『死』が三人に語りかけました

――」

そこまでハーマイオニーが言った途端にハリーが素早く聞いた。

「『死』が語りかけたって？」

「お伽話なのよ、ハリー」

「あ……ゴメン、続けてよ」

ハリーのその言葉を聞いてからゆっくりとハーマイオニーは語りだす。

「そして『死』が三人に語りかけました。三人の新しい獲物にまんまとしてやられてしまったので、『死』は怒っていました。というのも、旅人はたいてい、その川で溺れ死んでいたからです。でも『死』は狡猾でした。三人の兄弟が魔法を使ったことを誉めるふりをしました。そして『死』を免れるほど賢い三人に、それぞれ褒美をあげると言いました。一番上の兄は戦闘好きでしたから、存在するどの杖よりも強い杖をくださいと言いました。決闘すれば必ず持ち主がかつという、『死』を克服した魔法使いにふさわしい杖を要求したのです！そこで『死』は、川岸のニワトコの木まで歩いていき、下がっていた枝から一本の杖を作り、それを一番上の兄に与えました」

「二番目の兄は、傲慢な男でしたから、『死』をもっと辱めてやりたいと思いました。そこで人々を『死』から呼び戻す力を要求しました。すると『死』は川岸から一個の石を拾って二番目の兄に与え、こう言いました。この石は死者を呼び戻す力を持つであろう」

「さて、次に『死』はいちばん下の弟に何がほしいかと尋ねました。三番目の弟は兄弟の中でいちばん謙虚で、しかもいちばん賢い人でした。そして『死』を信用していませんでした。そこでその弟は『死』に跡をつけられずに、その場から先に進むことができるようなものがほしいと言いました。そこで『死』は渋々自分の持ち物の『透明マント』を与えました」

「『死』が『透明マント』を持っていたの？」

ハリーが不思議そうに聞いてきた。

「こっそり人間に忍び寄るためさ。両腕をひらひら振って叫びながら走って襲うことに飽きちゃうことが――ゴメン、ハーマイオニー」

ハリーの質問にロンが勢いよく答えたが、ハーマイオニーの語りを遮った事に気づき謝った。

ハーマイオニーは謝罪したからか特に二人に文句を言わずに物語の続きを読みはじめる。

「それから『死』は、道を開けて三人の兄弟が旅を続けられるようにしました。三人はいましがたの冒険の不思議さを話し合い、『死』の贈り物に感嘆しながら旅を続けました」

「やがて三人は別れて、それぞれの目的地に向かいました」

「一番上の兄は、一週間ほど旅をして、遠い村に着き、争っていた魔法使いを探し出しました。『ニワトコの杖』が武器ですから、当然、その後に起こった決闘に勝たないわけはありません。死んで床に倒れている敵を置き去りにして、一番上の兄は旅籠に行き、そこで『死』そのものから奪った強力な杖について大声で話し、自分は無敵になったと自慢しました」

「せの晩のことです。一人の魔法使いが、ワインに酔いつぶれて眠っている一番上の兄に忍び寄りました。その盗人は杖を奪い、ついでに一番上の兄の喉を掻き切りました」

「そうして『死』は一番上の兄を自分のものにしました」

「一方、二番目の兄は、一人暮らしをしていた自分の家に戻りました。そこですぐに死人を呼び戻す力のある石を取り出し、手の中で三度回しました。驚いたことに、うれしいことに、若くして死んだ、その昔結婚を夢見た女性の姿が現れました」

「しかし、彼女は悲しそうで冷たく、二番目の兄とはベールで仕切られているかのようでした。この世に戻ってきたものの、その女性は完全にはこの世には馴染めずに苦しみました。二番目の兄は望みのない思慕で気も狂わんばかりになり、彼女と本当に一緒になるために、とうとう自らの命を絶ちました」

「そうして『死』は二番目の兄を自分のものにしました」

「しかし三番目の弟は『死』が何年探しても決して見つけることが出来ませんでした。三番目の弟はとても高齢になったときに、ついに『透明マント』を脱ぎ、息子にそれを与えました。そして三番目の弟は『死』を古い友人として迎え、喜んで『死』とともに行き、同じ仲間として、一緒にこの世を去りましたとさ」

「……まぁそういうことだ」

ラブグッドが少し間をあけ、言う。

（……成る程）

三つの品が死の秘宝と呼ばれているのか。

「それらが死の秘宝であり、三つを揃えた者は『死を制する者』と呼ばれる。君達が聞いた印はこれらの秘宝を表したものだ」

なにやら書いている音が聞こえる。

（ハーマイオニー達に印でも書いているのかもしれないな）

まぁ目が見えていない俺にはどうしようもない。

（それより……秘宝は実在している事が問題だ）

今まで秘宝が実在することに気づかなかった俺を恨みたくなる。

（まずはハリーの『透明マント』）

ハリーのマントには普通に流通してある『透明マント』にかけられている魔法を感じる事がない。

つまり秘宝の一つである本物の『透明マント』だ。

（ニワトコの杖は確か最強だったか……）

それならば魔法史にて杖の名前は違うがたくさん記述されていた。

（多分すべて決闘し、相手から杖を得ているからニワトコの杖、と思ってもいいだろう……）

しかし魔法史では途中で途切れて今は誰か分からないはず……

（しかしマント、そして途切れてはいるがニワトコの杖もある）

ならば蘇りの石もあると思ってもいいだろう。

（全く……ただの作り話だと思っていたんだが……）

あいつから作り話を広めてほしい、と言われたからだか……

（事実ならそう言えよな）

事実ならば先に俺が壊したものを。
（大体あいつは代金も払って―…ん？）
いきなり魔力が二つ、増えている。
（家の前に二つ……客人か？）
おそらく『姿現し』で来たのだろう。
俺がここまで考えた時にリーンと玄関のベルが鳴った。
「……客人みたいだ。君達、すまないね」
そう言ってラブグッドはバタバタと部屋から出て行った。
「あー…本当に馬鹿馬鹿しいわ」
ハーマイオニーはそう呟く。
「死の秘宝だなんて！そんなものは実在しないわ。実在する証明もないし……」
「けど、ハリーのマントは本物だ！僕も呪文が切れたマントや穴が空いたマントとかは聞いているけどハリーのにはそれがない！」
それに新品でもないぜ、とロンは言う。
「でもロン、だからと言って石が―…」
しかしハーマイオニーは最後まで話さなかった。
「……何だか下騒がしくない？」
ハーマイオニーのその言葉でしん……と静まり返る。
（……言い争いか？）
この前はスノーカックスの角がどうのこうの、飾りと引き返えにルーナとか言う言葉が聞こえる。
（ルーナ？）
「我々も暇ではない。娘の事を助けたければもうくだらない事で呼び出さないでくれ」
「本当だ！本当にここにハリー・ポッターがいる！だからルーナを返してくれ！」
「ハリー・ポッターがこんなところを訪ねるとは思わんな」
（ルーナが捕まっている？）
それでハリーの居場所を知りたがっているのは―…

（死喰い人！）
死喰い人はルーナを捕まえた。そしてラブグッドはルーナを返してほしいからハリーを売った、か。
（何故ラブグッドがルーナを返してほしいと言うかは分からないが……）
今は素早く逃げないと。
「ハーマイオニー」
「えぇ、素早く逃げないとね」
さすがハーマイオニー。最後まで言わずとも理解している。
「ハリー、ロン、ライカ、手を繋いで」
すぐに『姿くらまし』をするから、とハーマイオニーは言った。
それを聞いた俺はすぐに隣にいたロンと手を繋ぐ。
「行くわよ、一――二――三」
俺達はパチンと『姿くらまし』をした。

百七十話

「全く……ハリー、私が馬鹿だったわ！」
『姿現し』をして死喰い人から逃れた瞬間にハーマイオニーはこう言った。
「『死の秘宝』だなんて！そんなものは無いのに……」
「でも『秘密の部屋』だって伝説上のものだと思われてたんじゃないか？」
ハーマイオニーの言葉にロンがそう言う。
「ロン、『死の秘宝』なんて、有り得ないわ！」
「じゃあ僕の『透明マント』はどうするんだい？」
今度はハリーがハーマイオニーの言葉に対して言い放った。
「『三人兄弟』はお伽話よ」
「ハーマイオニー、お伽話は大抵昔の出来事になぞらえて作られている場合が多いんだよ」
そして俺もハーマイオニーの言葉にこう言い返した。
「それにマントだけではなくて杖も証拠がある。魔法史にて『死の杖』とか色んな別名で出てはいるけど……あれらは『ニワトコの杖』の可能性はある」
そしてそれらは全て決闘をし、敗北者から得たものだよ、と俺は付け加えた。
「そう……わかったわ。杖もマントも実在するとしましょう。でも石は？」
「……きっとあの墓にあった子孫が持っているんだ！」
ハリーがきっとそうだ、と言わんばかりに自信満々に言った。
（……墓？）
「印がついていたお墓ね。その可能性は低いわ」
そう言ってハーマイオニーはガサガサと音を立てる。
「これはあの墓の家系図よ。そしてこれによるとこの家系はずっと

前に滅んでしまったわ」
最もペベレル、と言う家族名を変えた者の子孫ならいるかもしれないけれど、とハーマイオニーは言う。
「……マールウ〝ォロだ」
「マールウ〝ォロ・ゴーント！」
俺がハーマイオニーから家系図を貰った時にハリーが叫んだ。
「マールウ〝ォロ・ゴーント、『例のあの人』の祖父が『憂いの篩』でペベレルの子孫だと言っていた！」
それに、とハリーは続ける。
「分霊箱になったあの指輪にペベレルの紋章がついてた……だからあれが『蘇りの石』だよ！」
「それってダンブルドアが壊したんだっけ？」
ならもう無いね、と俺は言う。
「いや、ダンブルドアの事だからどこかに隠してるんだよ」
例えばスニッチとかに、とハリーは言う。
「ハリー、あなた少し取り付かれてるわよ！」
興奮したように言うハリーをハーマイオニーは注意した。
「私達は死の秘宝を探しているんじゃないわ！」
「でも―…あいつも……『例のあの人』もニワトコの杖を探している！」
「ちょっと待って！何でハリーはあの人がそれを探しているって思ってるんだ？」
俺はハーマイオニーとハリーの話しを止める。
「あいつはグレゴロビッチを捕まえていた。そしてきっとオリバンダーも捕まっている」
きっと杖のありかを聞いているんだ、とハリーは言う。
「ちょっと待って……ハリー、貴方オリバンダーはともかくグレゴロビッチが捕まっていたって言っていたわね」
それはどうやって知ったの？とハーマイオニーは言う。
「まさか……またあの夢を見たわけじゃないわよね？」

「……」
「見たのね？貴方、やっぱり閉心術を習得するべきよ！」
「今はそんな時じゃないだろ！」
ハーマイオニーの言葉にハリーは怒鳴りかえした。
「ロン、ライカ、貴方たちはどう思うの？」
そしてハーマイオニーはイライラしている口調で俺達に聞いてきた。
「うーん……僕個人は死の秘宝が気になるけれど、ダンブルドアはそんな事を言わなかった」
それは必要無いってことじゃないかな？とロンは言った。
「……俺もロンと同じかな。死の秘宝は気になる。けれど目的は分霊箱だ」
それにあいつがハリーの言う通りにニワトコの杖を探しているならばその間に一つでも探して壊した方がいいと思う、と俺は言う。
そんな俺の言葉にハリーはこう言う。
「あいつがニワトコの杖を探しているなら尚更こっちに先に見つけないと！」
あいつに最強の杖を渡せない、とハリーは言い放つ。
「……ハリー、俺は魔法使いの強さは杖の良さだとは思わない。確かに相性によっては魔法の威力が悪かったり、通常より少し強くなったりするけれど、魔法の威力が強いからと言ってそれは“強い”ではないんだよ」
「……え？」
「ハリー、今まであの人と何回対決したと思ってる？その時に常に一緒に戦った杖は最強の杖？」
「……」
ハリーは答えずに沈黙が続く。
「とりあえず、この話しはしばらく置いておいて、俺はご飯の準備をしてるから……」
「分かったわ。テントは私たちが立てておく」
「頼んだ」

俺はこう言ってハーマイオニー達から離れた。

（……こんくらいあれば大丈夫だろう）

ウロウロして見つけた川から水を確保し、テントへと戻っている時だった。

（沢山の魔力……まさか……）

死喰い人か！

（今からじゃハリー達は助けられない）

ならば俺だけが残り、あとで敵陣へと乗り込んだ方がいいか？

俺は向かっていた足を後ろへ動かし向きを変えた瞬間だった。

「そこのお前、動くな」

百七十一話

（どうやら俺も遅かったみたいだな……）
俺は腕をきつく縛られ、地面へと放られる。
「テントに居た仲間も俺の仲間が此処に来させる」
だからその前に名前を言え、と死喰い人は言った。
「アーノルド・パーティッシュ」
「アーノルド、ね……」
「おいっ！テントに居たやつらを連れて来たぞ！」
そう言って俺の近くにハリー達がドサリと下ろされる音が聞こえた。
「さて……君達の名前は？」
「バーノン・ダドリー」
「バーネー・ウィードリー」
（……ん？）
何だかロンの発音が悪い。何かしたのか？
そしてロンの次にハーマイオニーが毅然と答えた。
「ペネロピー・クリアウォーター」
「……まぁ調べれば分かる事だ」
そう言って仲間の一人が去っていく。
（……見つかるのも時間の問題だな）
「おい！」
「……何だ？」
「こいつらのテントにこんな物があった」
「……へぇ」
（……何か置いていたか？）
「……おい、そこの女」
「私？」
「そうだ。これ、お前とそっくりだ。……ハーマイオニー・グレンジャー。現在ハリー・ポッターと一緒に旅をしている『穢れた血』」

「違うわっ！」
ハーマイオニーはすぐさま否定した。
（だがすぐにばれるだろうな……）
「へぇ……なら」
死喰い人はハリーへと近づく。
「……この傷痕は何だろうな？」
「……」
流石のハーマイオニーも言い返す言葉がなく黙っている。
「おい、『例のあの人』のところへ連れていくぞ！」

……どうやら俺達を見つけた奴らは直接あの人を呼び出す事は出来ないらしく俺達はマルフォイ家の家へと連れて来られた。
マルフォイ家では死喰い人達によるハリーが本物がどうかの話し合い（尋問に近い質問）をしたのだが結局は分からずに牢屋へと入れられた。ハーマイオニー以外は。
（……早く助けないとな）
ハーマイオニーはグリフィンドールの剣の拷問で一人、俺達から離された。
理由はグリフィンドールの剣が死喰い人のグリンゴッツの金庫に預けられているらしく、死喰い人はあれが本物ならば困る、とハーマイオニーに今尋問しているのだ。
（ここだったな……）
ゴキィと音が響く。
「今の音はなに？」
「だ、誰の音だ？」
ちなみに此処牢屋には俺達以外に捕まっているルーナ、オリバンダ

ー、ディーンがいる。
（ここをこうしたら……）
腕を縛っている縄が抜けるはず。
（よし、抜けた！）
俺はスルリと縄を落とす。
それに気づいたのかハリーが聞いてきた。
「ライカ、どうやったの？」
「ん？間接を外しただけだよ」
俺はゴキィと外れた間接を戻す。
「先程の音はそれだったんだね……」
ハリーがそう言った瞬間パチンと姿現しの音が響いた。
「ハリー・ポッター！ドビーが助けに来ました！」
「ドビー！？」
ハリーが驚いたように言った。
「はい！ドビーは今ハリー・ポッターがピンチだと聞いたので―」
俺はドビーを無視し、鉄格子まで行き扉の構造を確認する。
（鍵穴か……これなら何とかなるか）
俺は結ばれていた縄をこっそりと鍵穴と同じ鍵を作り、差し込む。
鍵はすんなりと回りカチャリと音を立てた。
（お？開いた）
キィと扉を押すと開く。
俺は開いた扉からまだ話しているハリー達に近づく。
「ハリー、縄を解くから動かないでね」
「だからドビー、姿現しが出来る君に―…あぁライカ、頼んだ……
扉の向こうへ連れて行って欲しいんだ」
縄はあまり難しい結びにはなっていなかったのでハリーからロン、
ルーナ、ディーン、オリバンダーの順番で縄を解いていく。
「ハリー、その必要はないよー。だって扉開いてるし」
ほら、とルーナはハリーに声をかけた。
「え？あ、本当だ」

「だからその子にはハーマイオニーを助けてからすぐに皆を姿くらましする事を頼んだほうがいいんじゃないかな？」
「……じゃドビー、頼めるかな？」
「はい！ドビーめはよろこんでするのです！」
（俺にハリー、ロン、ルーナ、ディーン、オリバンダーにドビー……）
ハーマイオニーを助けるには人数が多いな。
やっとオリバンダーの縄を解き終わった俺はハリーに言う。
「ハリー、ハーマイオニーを助けるには人数が多いと思う。今は決戦じゃないし、助けるだけならば人数が多いと不利になったりしてしまう」
「……それもそうだね。なら、ディーン、ルーナ、オリバンダーさんは先に……えっと……「『貝殻の家』だよ、ハリー」……貝殻の家？」
場所をどこにするかで迷っていたらロンが『貝殻の家』と口を開いた。
「ティンワース郊外の『貝殻の家』でビルとフラーが暮らしてる」
あそこなら安全だよ、とロンは言う。
「ありがとう、ロン。ならドビー、三人を『貝殻の家』に」
「分かりました！」
パチンと姿くらましをする音が聞こえた。
「行こう」
ハリーの言葉で俺達はこっそりと牢屋を抜け出した。
牢屋を抜け出した俺達は今、ハーマイオニーがいる部屋の前へと来ていた。

（部屋には死喰い人数名にハーマイオニーと……小鬼？）
何故小鬼が此処に？
俺がそう疑問に思っていると部屋の中の会話が聞こえてきた。
「グリップフック、これは本物の剣かぃ？」
「……いいえ。違います」
（……成る程）
剣の確認か。
（あの剣は小鬼製だからな……）
小鬼なら本物かどうか一目で分かるだろう。
（だから居たのか）
いや、呼ばれたのかもしれない。
「ライカ、ロン、今死喰い人が隙を見せている。だから今からハーマイオニーを助けに行く」
最初に僕が行くからロンはハーマイオニー、ライカは小鬼を頼むよ、とハリーは言った。
「「分かった」」
「……行くよ！」
ハリーの言葉で俺達は部屋へと飛び込んだ。
「エクスペリアームス！」
まず始めにハリーが武装解除を放った。
「クルーシオ！」
しかし死喰い人の一人が武装解除を相殺する。
「クルーシオ！」
さらに別の死喰い人からの声があがる。
（狙いは俺かっ）
スルリと隠し持っていた杖を出し、相殺する。
「インセンディオ！」
しかし死喰い人はしつこく相殺された後もバンバンと呪文を放って来る。
（しつこいっ！）

向かってきた呪文に盾の呪文や別の呪文で相殺したり、時には相手に向かって失神させたりしていて俺は小鬼の元へとたどり着いていた。

「……グリップフックだっけ？」

「はい、そうですが」

「本物の剣を持ってハリーの元へ行ってくれないかな？」

道は俺が開けるから、と付け加える。

「……分かりました」

「じゃ行くよ」

俺は近くにいる死喰い人を確認し、走り出す。

「ステュービファイ！」

「インセンディオ！」

小鬼に向かって飛んで来た呪文を俺は相殺する。

他にも呪文が飛んできそうだったので回りに素早く盾の呪文を放つ。

するとすぐにバンバン、と何発か遮られる音が聞こえた。

（ハリーの元へあと少し……）

「ライカ！後ろ！」

ハリーの緊迫したような大声が響いた。

（ちっ……間に合うか）

俺が急いで振り向いた瞬間ガシャーンと何かが落とされたような音とパシンと呪文が当たった音が聞こえた。

「誰だ！シャンデリアを落としたのは！」

「ドビーです！」

どうやら姿現しをしたドビーが俺を助けてくれたらしい。

「ありがとう、ドビー」

「ドビーは自分のしたいことをしただけです！」

だってドビーは自由な屋敷しもべ妖精ですから、とドビーは言う。

「このっくそしもべが！」

ビュッと空気を切るような音が聞こえた。……恐らく音からしてナイフと思う。

「では、皆さんさようなら」
しかしドビーは気にせずにそう言ってパチンとは姿くらましをした。

グルグルと回りパチンと姿現しをする。
その瞬間にバシャという音とともに体が濡れた。
(あの……ナイフは?)
ドビーは気にしていなかったが……
(だが後ろの壁に刺さった音は聞こえなかった)
そこから考えるにあれは―…
(誰かに刺さってるはずだ)
「ドビー?」
目を覚ましただろうハリーがドビーを呼ぶ声が耳にやけに響いた。

百七十二話

（……魔力が、もう）

魔力がもう、ない。彼は此処へ着く前……いや、着いた瞬間に死んだ。

「ドビー……ドビー……」

「……ハリー、埋葬をしよう」

最早俺達に出来るのはそれしか、ない。

「……私、スコップを貰って来るわ」

魔法は使いたくない気分だから、と言ってハーマイオニーは去っていく。

俺はパシャパシャと足が濡れながらも小鬼……グリップフックの元へ向かう。

「貴方はどうしますか？」

「……付き合います」

「……分かった」

ハーマイオニーが戻って来るまで……否、戻って来てからも誰も話さずに場所を移動する。

「……此処ならドビーも気に入ると思う」

だから此処にしよう、とハリーは言った。

ハリーの言葉を皮切りに俺達は何も話さずに、ただ黙々と穴を掘っていく。

どのくらい時間がたったのか分からないがハリーがもう十分だよ、と言い作業を止める。

それからゴソゴソと物音が続いた。
（……ドビーを中へ入れているの……か？）
「ハリー…」
ロンが弱々しく呼ぶ。
「……悪いけど一人にしてくれないかな？」
「……分かったわ」
そう言ってハーマイオニー、ロン、グリップフック、そして俺はその場を離れた。
ハーマイオニーとロンを先頭にザクリザクリと家へと向かう。
「……ハリー・ポッター、物珍しい魔法使いですね」
ポツリとグリップフックは呟く。
「……まぁね」
ハリーは優しい。それが敵だろうが、別種族の生き物だろうが構わずに。
「……一度、話してみたいですね」
「話してみたらいい」
ハリーは少なくとも馬鹿な魔法使いではないよ。俺はそう思う、と付け加えて言う。
「そうですね……時間があれば、貴方とも話しをしても良いでしょうか？」
「……俺？」
「貴方の事は聞いています。どうやら我々と友好的にやっていける性格らしいですね」
最もそれが続くとは思ってません、とグリップフックは言う。
「俺と話し……ね」
（俺としてはあまり、な……）
話しているうちにボロを出しそうだ。任務の時だって常に頭の中で注意をしながらやっていたというのに。
「着きましたよ」
「あ、あぁ……」

そうだな、と俺は返事をする。
ロンがドアをノックし、合言葉を言うとガチャリと扉が開く音が聞こえた。
「ロン！？また戻って―」
しかしビルは最後まで言わなかった。
「……これはまたすごい傷だね。とりあえず中へ入って」
「ビル、後でハリーもこの家に来るから」
ロンが急いでビルに言った。
「ハリー？分かった」
ビルは文句を言わずに了承した。
（大物だな……）
俺達はビルに案内されながら中へと進む。
「―グリップフックは右の部屋、オリバンダーさんは左の部屋。ロン達は……一緒にその奥の部屋を使ってくれ」
「分かった」
素早くロンが返事をする。
「あ、そうそうライカ」
「ん？」
「確か君、薬学上手いんだっけ？フラーの手伝いをしてくれないかな？」
今、怪我している奴らの為に調合しているからさ、とビルは言う。
「分かった。フラーはどこ？」
「助かるよ、ありがとう。僕が案内するよ」
そう言ってビルは先は俺よりも先に歩いた。

「おひさしぶりでーす」

ビルに案内された部屋に入ると相変わらずな英語でフラーが出迎えてくれた。
「久しぶり」
「さーそくですがおねがいしまーす」
「分かった」
俺はフラーに何の魔法薬が必要かを聞き、作り始める。
しばらくして、火をかけた鍋がグツグツと煮える音を聞きながら俺は材料を切っていく。
（……このくらいだよな？）
まぁ多少違くても効果があればいいか。
俺は刻んだ材料をぽいっとほうり込む。
（あー……魔法薬って言ったらサラザールとセブルスだよな）
二人とも魔法薬を作るのが上手すぎて魔法薬って言ったら二人が最初に頭に浮かぶくらいに印象が残ってしまう。
（セブルス、死んでないと良いけど……）
ダンブルドアを殺したセブルスは教師からも嫌われているはずだ。
不意打ちなんか喰らわなければいいが……
（それとも逆に“お友達”と一緒にホグワーツを征圧しているかもな）
「次、ハナハッカをくわえまーすよね？」
「へ？……あ」
セブルスについて考えていたせいか次の過程を見逃すところだった。
（フラーに感謝だな）
俺は苦笑しながら急いでハナハッカを刻み始めた。

百七十三話（前書き）

私的にはキツイのですが、流石に短いので二話連続投稿しました。

後、最近映画の影響なのか最終巻に入ったからなのかは分かりませんがお気に入りが増えて来ています。
なので私、嬉しいあまりに時たまニヤケています。気をつけなければ周りからは変な人ですよね……
ですがこれを動力に最後まで突っ走るぞ！

あと少しですが、最後までこんな作者にお付き合い下さい。

百七十三話

「確か……これだったな」
出来上がった薬品の中から俺はハーマイオニーの分を取り出す。
「他のは……フラーが持って行くか」
クルリと体の向きを変え、ハーマイオニー達の部屋へと向かう。

（ここだったな）
ガチャリと俺は扉を開く。
「ライカ！？」
俺が部屋に入ると同時にハリーが驚いたように声をあげた。
「あー……入っちゃいけなかったか？」
俺はそう言いながらもハーマイオニーの魔力がする所へ向かう。
「ハーマイオニー、これ薬」
ちゃんと飲むように、と俺は言いながらハーマイオニーに薬を渡す。
「分かったわ」
そう言ってからハーマイオニーは戸惑うような雰囲気で怖ず怖ずと聞いてきた。
「ライカ、あの……この薬すぐに効くかしら？」
「……何故？」
すぐに効いても効かなくてもハーマイオニーやハリーが元気になるまでは移動は出来ない……いや、しないはずだ。
「ライカ……僕たち、知ったんだよ」
そしてもう手配もした、とハリーは言う。

（……どうか俺関連じゃありませんように）
そう思いながら俺はハリーに問う。
「何を？」
ハリーはしばらく話さなかったがやがて決意したように言った。
「レストレンジの金庫の中にハッフルパフのカップ……分霊箱が入ってる。だから僕たちはグリフィンドールの剣と引き換えにグリップフックの協力を得た」
（それは……）
俺の剣と引き換えに確実にグリンゴッツへ盗みに行く、と言うことか。
俺はハリーに確認をする。
「それはグリンゴッツに盗みに行くって事？」
「……うん。その通りだ」
だから早くハーマイオニーに回復してほしいんだよ、とハリーは言った。
「先にハーマイオニーが回復するかを聞いたのは……」
（俺を連れていく気が無いからか）
きっとハリー達は俺を此処で置いていく気だったのだ。
「ライカを連れていく気は無いからね」
ハリーがスッパリとこう言った。
（やっぱりな。今だに反対、か）
ならば、俺も勝手にしてやる。
「で、ハーマイオニーはいつ頃動かしても平気？」
連れて行け、と言われる前にと思ったのかハリーが素早くハーマイオニーの話しをする。
「私は今からでも平気なのだけれど……」
「ダメだ！」
ハーマイオニーとロンが言い合いを始める前に俺は口を開く。
「……出て行っていいのは翌朝からだから」
そのくらいの時間があれば、先に侵入している事なんて簡単に出来

る。
「分かった」
俺はハリーの返事を聞いてからクルリと向きを変え扉へと向かう。
「ライカ、ゴメン」
扉を閉めようと手をかけた時にハリーの申し訳なさそうな声が聞こえた。
しかし俺は聞かなかった振りをして扉をバタンと閉めた。

百七十四話

（くっ……思ったより鈍ってるな）

今、俺は地下にて土まみれになりながらも必死に移動をしている。

貝殻の家は前日、ハリー達の部屋を出てから気づかれないように去った。

そして現在グリンゴッツの地下を目指し地下を掘り進めているのだ。

（……そろそろスペースを作るか？）

……地下での移動は久々だから不安があったのだが掘り進めて行けば行くほど昔の感覚が戻り自信がついてきた。

その自信と久しぶりの俺の勘がそろそろだと告げる。

俺ははいつくばって掘っている状態から体制を変えるスペースを作る為にあちらこちら自分の回りの土を掘り始める。

「よしっ」

俺はかなりの労力だったが見事に立ち上がる事ができ、さらに数歩分くらいの隙間を作った。

「んー…近いなら多分」

俺はコンコンと前の壁を叩く。

すると回りに土が沢山あるならばなることがない、叩いた音が響く音が聞こえた。

（……ビンゴ）

俺はニヤリと頬を緩める。

思ったほどグリンゴッツの地下とも離れてはいないみたいだし、これならば威力をあげた蹴りだけで向こうに行ける。

（今日は久々な事ばかりだな）
こう思いながらも俺は足に魔力を溜める。
「行くか」
そして俺は壁を蹴った。
ゴシャァ…と何とも言えない音を響かせながらパラパラと土が僅かに落ちるような音も聞こえたので繋がったはずだ。
俺はそう信じ足を踏み出した。

「よっと……」
トンッと俺は無事に繋がっていた穴からグリンゴッツの地下へと下りる。
俺はパンパンと体についているだろう土を払いながら今後の行動を考える。
「個人的には早くヘルガのカップを取りたいが……」
だが、このグリンゴッツの金庫には小鬼以外が触れると何処かに行くという厄介な魔法がある。
目が見えない俺がそんな金庫を探すとなると時間がかかりすぎる。
（それに退路も見つけとかないと……）
視力がないから退路を先に確認しないと逃げ道を間違え、捕まる可能性もある。
「仕方ないな……退路が先か」
しかし、そう言っても緊急時には普通の退路……トロッコを使った出口はすぐに使えなくなるだろう。
（確か此処には盗人対策にドラゴンがいたはず……）
「そいつを使うしかないか」
ドラゴン自体は何とか出来るが何体か……ましてや囲まれたら俺で

もキツイ。配置されているドラゴンが一体ずつである事を祈ろう。
「さて、ドラゴンは何処に――……え？」
ドラゴンの居場所を魔力にて探し始めるとすぐさまにハリー達の魔力を感じた。
「思ったより来るのが早いなー」
ポリポリと頭をかきながらも俺はドラゴンの魔力を探す。
（お、あった）
運がいいのかドラゴンは一体のみ。
「一体ならば平気だな」
俺はドラゴンの場所へと駆け出した。

（こっち……か？）
いくらドラゴンの場所が魔力で分かっても目が見えてない俺にはあまり来ていないグリンゴッツでは道が分からない。
よって勘で進んでいたのだがそれが当たっているのかドラゴンとの距離は後僅かだった。
（次は左だぁぁぁ！）
ドタタ…と勢いよく走りながら俺は左側に向きを変え、足を踏み出した。
「げふぅっ」
足を踏み出した瞬間に思いっきりぶつかってしまった。
（い……痛い）
俺は左手で顔を覆いながら右手を前に差し出す。
すると右手はペタリと水平にくっついた。
（……壁か）
どうやら勘が外れたみたいだな。

俺はクルリと壁とは反対に向く。
（これで右も壁だったら笑えないな……）
そう思いながら俺は走り出す。

……暫く走ったが懸念していた壁はなくスイスイ行けた。
（ドラゴンとも後少し……）
俺がそう思った瞬間だった。
グォォォォ……
俺の前方からドラゴンの声が聞こえた。
（……俺に気づいている？）
まさか……な？
そう思いながら足を一歩踏み出した瞬間だった。
ブワァアと突風が吹き、同時にグルル……と小さいが、威嚇する声が聞こえてきた。
「ドラゴン、か……」
ドラゴンを調教によって従わせても良いが……此処は『服従の呪文』が早いだろうな。
俺は杖を取りだし、今だ威嚇しているドラゴンに向ける。
（空気が少し熱くなってきたな……）
火を吐く直前、か？
（その前に早くかけないと……）
俺は口を開く。
「インペリオ！服従せよ！」
俺が呪文を放つと同時にドラゴンから炎が放たれた。
「あっつ……」
俺は両手を頭の近くまであげ、頭を庇うようにしながら炎の中から

逃げる。
（慣れてるとは言え……）
「不意打ち過ぎるだろ……」
俺はブツブツと文句を言いながら火が服に移っていないかを確認をする。
（良かった。移ってはないな……）
「さて、お前は『服従の呪文』にかかったかな？」
俺は試しにドラゴンに黙って座るように命令をする。
すると音も無く座った事が魔力で分かった。
（効いたか……）
一発で成功とは思わなかったが……まぁいいか。
「次は金庫、だな」
レストレンジの金庫は何処だろうな？
（……ん？）
……ハリー達の動きが変則的と言うか、まぁすごい勢いで移動している。
（もしかしてモタモタしている間にハリー達がカップを取った？）
「……そうでなくても助けるべきか」
俺は座っているドラゴンを上り背中に乗る。
「よし、行こうか」
その言葉と同時にバサリとドラゴンは羽を動かし、飛んだ。
（ハリー達は……と）
此処から少し離れてるな。
（ま、ドラゴンに乗ってるし、そう遅くはならないか）
俺はドラゴンにハリー達がいる場所に向かうように指示を出した。
「……捕まんなよ」
向かい風を受けながらポツリと俺は呟いた。

百七十五話

（いたっ！）
逃げているだろうハリー達をやっと見つけた。
「っハリー！」
俺はドラゴンの羽ばたきに負けないように大声でハリーの名前を叫ぶ。
「乗れ！」
そう言ってドラゴンの飛行高度を下げていく。
「ロン、ハーマイオニー！乗ろう！」
グリップフックも急いで！とハリーは叫びながらドラゴンに近づいてくる。
俺は時間稼ぎにドラゴンの上からハリー達を追いかけてくる連中に向けて失神呪文を放つ。
「グリップフック！」
ドラゴンに乗ってきたハリーが大声で叫ぶ。
（まだ乗っていないのか！）
俺は思わずチッと舌打ちをする。
（『引き寄せ呪文』でも使うか）
そう思い、杖を取り出そうとした瞬間だった。
「泥棒！泥棒！泥棒だ！」
グリップフックは大声で叫びながら追っての群れに去って行った。
（こちらには来ない、か）
なら、早く逃げないと。
俺は止まっていた手を動かし、杖を下に向けた。
膨大な魔力を込め、呪文を放つ。
「デイフォディオ！掘れ！」
ドォォオと言う膨大な音が地下に響いた。
「そのまま地下を進め！」

俺のその声でドラゴンは俺が掘り進めている穴へと進んだ。

ドコォォオと地上に出る音が聞こえたと共にドラゴンは羽ばたき飛行をする。

「ハーマイオニー、何処かドラゴンを止まらせる場所はない？」

「ライカ……貴方、貝殻の家に居たんじゃないの？」

ハーマイオニーが疲弊した声で俺の質問には答えずに俺に質問してきた。

俺はそれにため息をつきながら答える。

「あのね……俺もグリフィンドール生だから」

友達が危険なところに行くのに、大人しく待ってないよ、と俺は続けて言う。

「それに、君達あそこで俺を置いていく気だったでしょ？」

「……えぇ」

ハーマイオニーは深く息を吸ったかと思うと肯定した。

「なら尚更居ないよ。それよりドラゴンの着地出来る場所、知らない？」

俺は再びハーマイオニーに問う。

「かなり先だけれど開けた場所があるわ」

「分かった。なら着くまでに情報を貰っても良いかな？」

「……そうね。ライカに全て教えるわ」

その言葉と共にハーマイオニーがポツリポツリと話して言った。

全てを聞き終えてから俺は口を開く。

「分霊箱は手に入れた。しかしグリフィンドールの剣はグリップフックに持って行かれた……か」

「そしてきっと敵にも気づかれたな。僕たちがそれを集めてるって」

俺の言葉にロンがつけ加える。
「ええ。確実に分かってしまったでしょうね」
そしてロンの意見にハーマイオニーも賛同する。
「それにグリンゴッツからカップを盗んだのだからきっと新聞にも乗るだろうな」
数年前にも乗ってたしな、と俺は苦笑しながら言う。
「そうなったら僕たち有名人になるよな？」
「もう十分有名よ。指名手配としてね」
俺の言葉の後に明るくロンとハーマイオニーも続いた。
「それより……ライカ、ハーマイオニー、ハリーが倒れたんだけど……」
どうすればいい？とロンの言葉が響く。
「……ハーマイオニー、目的地にはすぐに着く？」
「……いいえ。まだかかるわ」
「……ロン、ハリーを頼んだ」
俺はハーマイオニーの言葉を聞き、ハリーをロンに頼む。
「ロン、頼んだわ」
そしてハーマイオニーもロンに任せる。
「えっ？僕一人？」
ロンの驚いたような声に俺はサラリと答える。
「俺はドラゴンに指示を与えないと」
「着地地点を知っているのは私だけだから、私も外せないわ」
暇なのは貴方だけだから頼んだわよ、とハーマイオニーは言い放った。
僕だって休みたい、などと言う言葉が聞こえたが俺は無視をする。
（俺だって休んでいるわけでは無いんだがな……）
『服従の呪文』が何時まで効くか分からないし。
今だ後ろでグチグチ文句を言っているロンに俺はため息を漏らした。

百七十六話

「ライカ、この辺でいいわ」
長い時間ドラゴンに乗っていてあまりにもの暇な時間に俺の意識が飛びはじめる直前、ハーマイオニーがこう言った。
「分かった」
俺はドラゴンに下降するように指示を出す。
指示を出した途端に真下に落下するような感覚に見舞われる。
（こいつまさか頭から突っ込んでんのか？）
もしそうならば恐怖な映像になっているだろう。
（見えなくて良かった……かな？）
ブワァァアと下からの突風がしたかと思うとドスン、と着陸した音が聞こえた。
「早く下りよう」
ドラゴンを何処かにやらないと行けないし、と俺は言いながらトスンとドラゴンの背中から地面に着地する。
「ライカ、ハリーは？」
ロンが声を張りながら聞いてくる。
「投げろ」
「……え？」
ロンは間抜けな返事をする。
「受け止めるからハリーを俺の方へ投げて」
俺は少々呆れながらもう一度繰り返す。
「あ……分かった」
そうロンは答えてからハリーをドラゴンの上から俺の方へ投げた。
……いや、突き落としたのかもしれない。
「……え？うわぁぁぁぁぁぁぁあ」
俺が受け止めようと待ち構えている間に不運にもハリーは目を覚ましたのか叫びだした。

（声、大きいな……）
しかしドスン、と俺が受け止め地面に下ろすまでハリーの叫び声は止まらなかった。

「……ゴメン」
ハリーが落ち着いてから先程に至った状況説明をするとハリーは謝ってきた。
「いきなり大声で叫んだのには謝るよ。でも……君達、そんな方法でしか下ろせなかったの？」
「抱えられる俺はもう下りてたし……」
「僕じゃ突き落とすよりもっと酷い事になりかねなかったよね」
俺とロンの言葉を聞いてハリーはやや諦めたような声で言った。
「寝てた僕が悪かったんだね……」
ハリーの言葉の後に少しいいかしら？とハーマイオニーが聞いてくる。
「ライカ、あのドラゴンどうするのかしら？」
「んー…此処より何処か遠くにやって魔法を解こうとは思ってるけど」
「あ、それなら」
俺がハーマイオニーの言葉に答えるとすぐにハリーが話し出す。
「ホグワーツに行ってからでいい？」
「「「ホグワーツ？」」」
俺、ハーマイオニー、ロンの言葉が見事に重なる。
（何故、ホグワーツ？）
「あいつは僕たちが分霊箱を探している事に気づいた。それで蛇のナギニを側に置いて各地の分霊箱を確かめに行くみたいなんだ。け

れどホグワーツだけは安心だと思ってあいつは確認しに行かない」
だから次の分霊箱はホグワーツだ、とハリーは告げた。
「残っているのはナギニと―」
「グリフィンドールかレイブンクローの縁の品、よ」
確認をするように話すロンをハーマイオニーが引き継ぎ話した。
（俺のは組分けと剣しか残していない）
ならばロウェナしかない。
（ロウェナの残した品……）
……何か残していたか？
「ライカ、ドラゴンをホグワーツへ向かう事は出来る？」
俺の思考を遮るようにハリーが尋ねてきた。
「え？あぁ……ドラゴンより『姿現し』の方が早いけど？」
「……それもそうだね」
ハリーはそう言って黙り込む。
（ロウェナ……ロウェナの物……）
書籍とかは私部屋にるし……
（ん？もしかして……）
サラザールのもヘルガのも彼らが一番大切にしていた品だった。
ならばロウェナのも彼女が一番大切にしていた物？
「……ロウェナの髪飾りか？」
「「「え？」」」
ポツリと呟いてしまったらしくハリーが聞き返してきた。
「ライカ……今ロウェナの何って言った？」
ハリーに続きロンも聞いてくる。
「髪飾りって言ってたよな？」
ロウェナは確か……とロンが続けようとするとハーマイオニーが答えた。
「レイブンクローよ。ロウェナ・レイブンクロー」
「なら、それがレイブンクローのやつだ！」
よく分かったね、と付け加えてハリーは言う。

「きっとそれがホグワーツにあるんだ！」
「でも、私たちは誰もレイブンクローの髪飾りを知らないわ」
ハーマイオニーの言葉でハリー達は黙り込む。
「……それは向こうで考えよう。今はいち早くホグワーツに行かないと」
あいつが来る前に、とハリーは言う。
「……ならドラゴンは移動させない」
ホグワーツについてから呪文を解くよ、と俺はつけ加える。
「……そうね。早く行くにはそちらが良いわ」
「……行こう。ホクズミードだ」
ハーマイオニーの後に言ったハリーの言葉を合図に俺達は同時に『姿くらまし』をした。

パチンと俺達はホクズミードへ『姿現し』をする。
姿現しをした瞬間にギャーと言う叫び声みたいな警報がなる。
（何かをしていたか……）
多分この時間帯に外に出る事を禁止でもしているのかもしれない。
「お前ら、二階へ上がれ！」
俺達の右側から声がかかる。
「早く！」
俺達は言葉に甘え、二階へと急いで向かう。
「誰なんだろうね？」
二階へと上がった時にロンが問うように言う。
「さぁな……」
それに俺は答えずに下の会話を盗み聞く。
「貴様か！『夜鳴き呪文』を鳴らしたのは」

「フンッ、俺は猫を出したい時は『夜間外出禁止令』なんか気にせずに出す」
……どうやら俺達を庇ってるみたいだな。
「ほら、散れっ！何か文句があるならお前達にもうこの店を使わせないからな！」
少し言い争った最後にこう怒鳴ってから俺達を匿った人物がトントンと上へ上がってきた。
「こんな時期に此処に来るなんて馬鹿共が」
俺達の元へと来た第一声がこれだった。
「たくっ……お前らは朝早くに此処から出て行くんだな」
「あのー…」
グチグチと言っている奴にロンは恐る恐る聞く。
「貴方は誰ですか？」
「あ？俺はアバーフォースだ」
「……あの、助けてくれてありがとうございます」
ハリーがまずはアバーフォースにお礼を言う。
「でも、僕たちは逃げません。ホグワーツに行かないと」
「……お前達は俺の兄貴……ダンブルドアに何かを言われたのか？」
いや、兄貴の賢い作戦か？とアバーフォースは尋ねる。
（兄貴？ならアバフォースはあの糞爺の弟？）
爺に弟なんていたんだな。
「はい！」
ハリーはアバーフォースの言葉に力強く答える。
「ならば忘れろ。そして国外に逃げるんだな」
「……え？」
ハリーは間抜けな声を出す。
「兄貴は賢い。そして、兄貴の言うことは正しい。だが嘘も同時にあった」
アバーフォースはスゥと空気を吸う。
「兄貴は君に例のあの人との戦いの術を教えたのだろう。だが、何

故君が犠牲にならなければならない？」
「……時には自分の身の安全よりも、大きな善をなさなければならない」
ハリーはユックリと、しかし最後まで言い切る。
「……犠牲、ね。あんたからすれば犠牲かもな。俺達は確かにダンブルドアの賢い作戦を今もしているし、もしかしたらこうなるように嵌められたかもしれないが、それでも例のあの人と戦うと決めたのはハリーなはずだ」
そうだろ？と俺はハリーに同意を求める。
「うん。……ライカの言う通りに僕たちはダンブルドア先生に嵌められたかもしれない。でも、例のあの人と戦うと決めたのは……そう覚悟したのは僕だ」
「僕たちだってそうだよ」
ハリーの言葉にロンも同意する。
「……とんだ馬鹿共だな」
アバーフォースはため息をつきながら言う。
「少なくとも逃げろなんて言う腰抜けの奴よりかはマシだけど？」
俺はそんなアバーフォースにこう言う。
「腰抜け、か……舐めるなよ？ガキが」
そう言ってアバーフォースは歩き出す。
「今や頑丈に見張られているホグワーツへ行く道はただ一つ。これだ」
そう言ってガチャリとドアか何かを開く音の後に、ネビルの声が聞こえた。
「君が来ると信じていたよ、ハリー！」

百七十七話

「ネビル？」
ハリーが驚いたように言う。
「ほら、話しなら向こうに行くまでの道中で話せ」
俺達が話し出す前にアバーフォースが先に言う。
「「「ありがとうございます」」」
押し出されながらもハリー達が揃ってお礼を言う。
「またな！」
俺は礼すら言わなかったが。
「オイ、お前だけ礼がないぞ？」
脅すような低い声でアバーフォースが言う。
「……どうせ、奴が攻めて来たらホグワーツに来るだろ？」
それともやっぱり腰抜けなんだ？と俺は挑発気味に言い放つ。
「フンッ、礼儀知らずのお前を殴りに行ってやるよ」
その言葉に俺はニヤリと笑いながら言う。
「期待せずに待ってる」
言いたい事を言った俺はクルリと向きを変え、ホグワーツへと駆け出した。

（此処は……）
先に行ったハリー達の後を追い、ホグワーツへと入る。
（この魔力配置……『必要の部屋』か）
多分、何かを願いその結果があそこへと道を繋いだのだろう。
（大概の事は現れるようにしたんだが……）

何を願ったのか気になる。
「ライカ、遅かったね」
「あの人と少し話してたからね。それより……何でこんなに人が居るの？」
『必要の部屋』には多くの人がいる。……魔力が多すぎて若干気持ち悪いが。
「ネビルが『ダンブルドア軍団』を呼んだみたい」
他にもルーナとか騎士団を呼ぶとか言ってたよ、とハリーは告げた。
「ハリー、僕たちは君が戻って来た時こそ革命の時だと信じてた。今こそあいつらを追い出すんだよね？」
（あいつら？）
ホグワーツで何か起きてんのか？
「いいや、違う。――…皆、レイブンクローの髪飾りを知らないか？」
例のあの人を倒す手助けになるんだけど、とハリーは必要の部屋にいる全員に向けて言った。
（髪飾り……多分それであっているはず）
だが髪飾りは失われた。
（それがホグワーツにある……）
ヘレナは誰かに髪飾りの場所を話したのか。
「それって失われた髪飾りの事？」
レイブンクロー生だろう生徒が言う。
（ん？この魔力は……）
ルーナ、か？
（もう少しで此処に着くな）
「う、失われた？」
「ウん、そうだよ」
俺達が通った時と同じ場所にルーナが現れた。
「けれどレイブンクロー寮に髪飾りをつけてるレイブンクロー像があるよ。……見に行く？」

ハリーはしばらく悩んだ後に言い放つ。
「行く」
「ならあたしが案内してあげる。こっちだよ」
そう言ってルーナは部屋を出ていく。
そしてルーナに続いてハリーも部屋を出て行った。
ハリーが部屋を出て行き、静まり返った中ハーマイオニーが口を開いた。
「皆、多分例のあの人はホグワーツへ来るわ」
だから、その準備をしていてくれないかしら、とハーマイオニーは付け加えて言う。
「此処に居てもどうしようもないし」
ロンのこの言葉を最後に集まっていた奴らも部屋から出て行く。
「皆も行ったし……行きましょう？」
ハーマイオニーのこの言葉にすぐさまロンがくいついた。
「行くって何処にだよ、ハーマイオニー」
「何処って……分霊箱を壊しに行くのよ」
（分霊箱を壊しに？）
分霊箱は強力な物でしか壊せない。
「ホグワーツの地下には強力な生き物がいたでしょう？」
（……成る程。あのバジリスクか）
確かバジリスクの毒は分霊箱を破壊出来たな。
（……だが、）
「ハーマイオニー、やりたい事があるから俺は別行動をするよ」
「「えっ？」」
二人が揃って驚いた声を出す。
俺は申し訳ないような顔をしながは言う。
「どうしてもやりたいんだ」
「……分かったわ。気をつけてね」
「……ありがとう」
ハーマイオニーから許可を貰った俺は『必要の部屋』を出て行った。

百七十八話（前書き）

こんばんは、カイラです。

最近暑いですね……

皆様は夏バテや熱中症などにはなっていないでしょうか？

私は暑さでダラけてこそいますが、元気で暮らしています。

今回は後書きに次回作、創設者時代の予告をしています。

興味がある方はぜひ後書きまで読んでみて下さい。

百七十八話

（急がないとな）
バタバタ、と俺は廊下を走る。
（敵が来るなら）
あのままではいくら寮が離れているとはいえ、フィンラ達が危険だ。
（最低限の保護魔法はかけないと）
部屋……いや、フィンラ達にかけた方がいいかな？
（何かあったら困るし、そうするか）
そう思いながら俺は右へと曲がった。
「婦人、開けてくれっ！」
グリフィンドール寮へと着くとすぐさま俺は『太った婦人』にこう言った。
「……緊急みたいね。分かったわ」
婦人はこう言って何も言わずにパカリと開いてくれた。
俺はすぐさま中へと入り自分の部屋へと入る。
「フィンラ、イエロー！」
『クゥ？クルキュ！』
「ぐわぁ」
俺が名前を呼んだ瞬間、よく分かっていないような鳴き声を出したくせにイエローはすぐさま俺の顔へと突っ込んできた。
（一体どうしたら顔に突っ込んでくるんだ？）
『クゥ！』
イエローは少し体をずらしペロペロと俺の顔を舐めはじめる。
「ちょっ……フィンラ、いる？」
俺が再び名を呼ぶとニャーと小さな声で返事が返ってきた。
「今……近くに……いるか？」
俺がそう問うとフィンラはカリカリと足元を引っ掻いて存在をアピールした。

「よし、なら―……あのな、イエロー」
俺は言おうとした言葉を飲み込みイエローの名を呼ぶ。
『クキュ？』
「……いつまで……俺の……顔を、舐める……気だ！」
イエローは現在進行でずっと顔をあちらこちら舐めている。
おかげでこちらは話しにくい。
（誰に似たんだか……）
俺はベリッと顔からイエローを離す。
『クキュー……』
寂しそうにイエローは鳴く。
「……さて、フィンラ、イエロー。よく聞いてほしい」
先程のイエローの鳴き声に少し心が動くが俺は無視をし二匹に話しかける。
「今から大規模な戦闘が起こる。だから決してこの部屋から出ないで欲しい」
そして君達にも保護魔法をかける、と俺は告げる。
『クルキュー！』
『ニャア！』
二匹は元気よく答えた。
（なんかアッサリだったな？）
前出ていく時には苦労したんだが……特にイエロー。
俺がそう思って気を緩めた瞬間だった。
イエローはバリッと掴んでいた俺の手を引っ掻いた。
「いっ……」
俺は咄嗟にイエローを離す。
「イエー……」
説教しようと思い口を開くとバリバリと爪を引っかけている音が聞こえきた。
（こんなのをするのは―…）
「フィンラ？」

俺の声に答えるようにニャーと鳴きながらフィンラが俺の足元を上って来た。
「お前まで――……って」
俺が離し、下へ落ちただろうイエローもフィンラと同じように……否、フィンラよりもバリバリッと嫌な音を立てながら上って来る。
「いてっ……ちょっと、イエロー……いたっ！」
そしてイエローはフィンラみたいに加減をせずに上って来るので足に爪が刺さっていた。
「イエロー！手加減くらいしろぉぉ」
『クルキュー！』
イエローは元気よく答えた。答えたが……
「いてっ……イエロー～！」
『キュ！』
……どうやらイエローには手加減は無理みたいだな。
「お前ら……早く下りろ！」
俺の怒声が虚しく響いた。

「……おい」
二匹が大人しくなったところで俺は声を出す。
「……お前ら、フードから下りろ」
結局二匹はバリバリと上りきり、ロープに付いているフードの中へと入っていた。
『クルキュ』
イエローは俺の言葉に何故か元気よく答えフィンラは返事すらしない。

（……下ろすか）
二匹を危険な目には合わせられないし。
（……ん？）
何だか……大量の魔力がホグワーツに近づいて来てる。
「……決闘、か」
多分……否、莫大な戦闘になる。
（先に生徒を逃がさないとな）
もう、時間が無い。二匹は諦めよう。
「絶対そこから出るなよ、フィンラ、イエロー」
俺は二匹にこう告げ杖を振る。
（皆を起こすなら……）
談話室が一番良いかな。
（あそこなら女子寮へも音が響くし）
俺はキィと部屋の扉を開け、階段へと出る。
階段を下り、談話室へと着くと俺は片耳へ指を突っ込み杖を掲げる。
「一――二――」
三、と言う前にとバタンと扉の開く音が響いた。
（マクゴナガル先生？）
カツカツと談話室へとマクゴナガル先生は近づいてくる。
「タツキ？貴方は探し物をしないのですか？」
談話室へと着いたマクゴナガル先生の第一声がこれだった。
（……探し物？）
レイブンクローの髪飾り、の事か？
「探し物……ですか？」
「おや？ポッターは何やら探し物の為に来たとおっしゃてましたが？」
（やっぱり）
レイブンクロー寮かは帰る最中にでもマクゴナガル先生に見つかったか。
「それはハリーに任せてるんです」

「……そうですか。ところで貴方は今何をしようとしているのですか？」
「え？生徒を起こそうと思って」
避難させないといけないでしょう？と俺は付け加えて言う。
「なら、貴方にお願いします」
早く起こさせて下さい、とマクゴナガル先生は言う。
俺はそれに頷き杖を振った。
次の瞬間バーンと竹みたいな大音量が響く。
その音を聞いてすぐさま起き出し、談話室へと下りてきた生徒達にマクゴナガル先生は告げる。
「今すぐに大広間に集まってください。今すぐにですよ！」
（……あれ？此処ですぐに伝えないんだな）
そう思いながら俺はマクゴナガル先生と一緒にグリフィンドール寮生が寮を出ていくのを最後まで確認していた。

百七十八話（後書き）

いまを去ること一千年、そのまた昔その昔

「オマェ……発音が違うぞ」

そのころ生きた四天王

「う？あい！！」

いまなおその名をとどらかす

「……ゴドフィル、ヘルフィ？」

荒野から来たグリフィンドール
勇猛果敢なグリフィンドール

「ゴメン、サラ！」

谷川から来たレイブンクロー
賢明公正レイブンクロー

「ゴドフィル、ヘルフィ……あんたらねぇ」

谷間から来たハッフルパフ
温厚柔和なハッフルパフ

「……大丈夫！サラなら許してくれるよ！」

湿原から来たスリザリン
俊敏狡猾スリザリン

「……お前達は少しは落ち着け」

ともに語らう夢、希望

「学校、協力してくれないかな？」

数年の後、ただ一人学び舎を離れる

「……これが、最後になるだろう」

語られる事のない、物語が今、始まる。

「……じゃあな」

次回作、創設者時代（予定）

百七十九話

大広間に着いた時はもう多くの生徒達が居た。
（騎士団や先生方も来てるな）
セブルスは居ないみたいだが。
カツカツとマクゴナガル先生は生徒達の前へと進むと避難の説明をし始めた。
「――避難を監督するのはフィルチさんとマダム・ポンフリーです。監督生は、私が合図したら、それぞれの寮をまとめて指揮をとり、秩序を保って避難地点まで移動してください」
「戦いたい人はどうするのですか？」
一人の生徒の質問からパラパラと拍手が湧く。
「成人に達した者は残っても構いません」
「スネイプ先生はどこですか？」
「スネイプ先生は俗な言葉でずらかりました」
そのマクゴナガル先生の言葉で歓声があがる。
（……何をしたんだ、セブルス）
「――城の周りには、すでに防御が施されています。しかし、補強しないかぎり長くは堪えられないでしょう。ですから皆さん、迅速かつ静かに移動するように―」
しかしマクゴナガル先生の話しは別の人間によって遮られてしまった。
「おまえたちが、戦う準備をしているのはわかっている」
（ウ〝ォルデモート、か）
あちらこちらで悲鳴が上がる。
「何をしようが無駄なことだ。俺様には敵わぬ。しかし俺様はホグワーツの教師に多大な尊敬を払っているのだ。魔法族の血を流したくはない」
大広間はその言葉に静まり返る。

「ハリー・ポッターを差し出せ」
ウ〝ォルデモートはこう告げる。
「そうすれば、誰も傷つけはせぬ。ハリー・ポッターを差し出せば学校には手を出さぬ。差し出しさえすればおまえたちは報われる」
言いたい事は言ったのかプツリと声は終わった。
「……それでは皆さん、急いで避難してください。初めにスリザリンから！」
マクゴナガル先生の言葉でゾロゾロと生徒達は動き出す。
俺はそれに反抗するようにマクゴナガル先生の元へと向かった。
「マクゴナガル先生、俺は生徒が途中で抜けてないか回ります」
「……分かりました。頼みますよ」
マクゴナガル先生の許可をもらい、俺は大広間を出て行った。

（……ん？）
生徒達の最後尾に沿いながら、俺は校内に誰か居ないかを確認している時だった。
（少しずれた所に一人……抜け出しているのが二人）
とりあえず少しずれた所の子は置いて行かれたのだろう。
（そちらから行くか）
スッと最後尾から離れ、数m先の廊下を右に曲がる。
そしてその少し先に一人、生徒が居た。
「……ほら、逃げるぞ」
そう行って俺は手を差し出す。
「……うんっ！」
（声が幼いな……）
一年生、かな？

俺は乗せられた手を握り、先程の最後尾へと向かう。
「マダム・ポンフリー！」
最後尾へと着くと俺は最後尾の監督をしているマダム・ポンフリーの名前を呼ぶ。
「どうしました！」
「迷子です。後、二人ほど抜け出しているので連れ戻して来ます」
だから避難通路はまだ閉じないで下さい、と付け加えて言う。
「分かりました」
よろしくお願いします、と言ってから俺は最後尾を抜ける。
（急がないとっ）
死喰い人の最初の団体がやって来る！
俺がそう思いながら廊下を走っている時だった。
（……っ来た）
いきなり魔力が先程よりも大量に増える。
（……ちっ、運が悪い！）
数人の死喰い人の現れた場所が、ちょうど抜け出した生徒の近くだ。
（このままなら見つかるな）
俺は校内でパチンと『姿くらまし』をした。

パチンと生徒がいる場所に『姿現し』をすると同時に死喰い人がこちらへと辿りついていた。

「居たぞ！」
その言葉を合図に呪文がビュンビュンこちらへと飛んで来た。
「伏せろっ」
俺は生徒二人の頭をグイッと床へと押し、上半身を少し後ろへと反

らす。
俺が体を反らした瞬間に数本の呪文が生徒の頭があった場所を過ぎるのが感じられた。
だが、予想とは違い一本の呪文が他の呪文より低く、俺の手に掠る。
ジュゥと嫌な音を立て、手が熱くなる。
（『インセンディオ』か！）
俺はすぐさま生徒の頭から手をのかし指貫き手袋を外す。
（『アグアメンティ！』）
俺は杖無しの無言術を使う。
ザバァと水が出るには出たみたいだが杖がある時と比べると少し勢いがありすぎた。
お陰で滝に打たれたみたいに手が痛い。
（ま、火は消えたみたいだな）
俺はジンジン痛む手をロープに突っ込み杖を取り出す。
「この人数を一人でやるつもりか？」
見下したように死喰い人が言う。
そんな死喰い人に俺はニヤリと笑う。
「今は相手をしないよ」
俺はガシリと生徒の頭を掴み、パチン、と『連れ添い姿くらまし』をした。

パチン、と避難通路前に『姿現し』をする。
「ポンフリー、こいつらの説教を頼む」
少しイライラしながらニッコリと俺は言う。
「わ……分かりました」
マダム・ポンフリーは生徒二人を受け取りながら返事をした。

「さて、行きますよ」
そう行ってマダム・ポンフリーは二人と共に通路へと向かって行った。
「……さて、塞ぐか」
俺は手に持っている杖を振り避難通路を隠す。
「……フィンラ、イエロー、絶対に俺から離れるなよ」
俺はフードの中にいるフィンラとイエローを撫でながら言う。
『ニャア！』
『クルキュ！』
二匹は当たり前だ、と言わんばかりに元気良く鳴いた。

百八十話

（んー…と、一番酷い所は）
かなりの魔力がある校庭か。
俺は避難通路場所から廊下へと出て、校庭へと走り出す。
校庭に行くまでに数人、死喰い人に会ったがそこはすぐさま“失神”させた。
「リーマス！」
校庭へと出た瞬間に四人の死喰い人がリーマスを囲んだ。
「ステューピファイ！」
俺はリーマスを取り囲む死喰い人の一人に失神呪文を放つ。
俺が放った失神呪文は外れずにドスン、と人が倒れる音が聞こえた。
「……俺抜きで祭を始めないでくれる？」
俺はリーマスの隣に向かいながら死喰い人達に言う。
「タツキ……」
「リーマス、大丈夫か？」
「タツキのお陰でね」
「そりゃ良かったっ！」
そう言って俺は死喰い人に呪文を放っていく。
「インセンディオ！」
「プロテゴ！」
しかし始めの死喰い人みたいにはいかず盾の呪文で塞がれる。
「っ……リーマス、伏せろ！」
俺は叫びながら急いでしゃがみ込む。
リーマスがしゃがみ込めたは分からなかったが俺の頭の上を呪文が通ったのでそれをくらってはいないだろう。
「ちっ……ステューピファイ！」
死喰い人は俺達が呪文を裂けると舌打ちをし、失神呪文を放つ。
「エクスペリアームス！」

しかしその失神呪文に対しリーマスが武装解除を放った。
「コンファンド！」
俺は錯乱呪文を唱えた後に無言で“失神呪文”を放つ。
「プロテゴ！」
死喰い人はすぐに盾の呪文を使う。
ただし、死喰い人が使ったのは俺が唱えた錯乱呪文にだけだった。
「ぐっ……」
そして失神呪文は見事に当たり死喰い人は倒れる。
（後……二人）
一人はリーマスが相手をしている。ならば後、一人は？
「はっ！おまえ達はこんなもんか」
そう言いながらズルズルと失神させただろう死喰い人を引きずりながらシリウスがこちらに向かって来た。
「ワリィ、一人貰った」
「……来てたんだ」
「こんな事になってるのに俺が来ないわけないだろ？」
シリウスがそう言った瞬間にドンッと言う音が響く。
「やっと終わったよ……」
音からして死喰い人を飛ばしただろうリーマスが言う。
「あの死喰い人、無駄にしつこくて……あんだけしつこいと葬りたくなるよね」
「そうだね」
恐ろしいような単語も聞こえたが俺は普通に相槌をうつ。
「リーマス、今日は手加減無しでいいんだぜ？」
葬ってやれ、とシリウスはリーマスに言う。
「葬るも何も皆が頑張ったお陰で死喰い人はもう居ないよ」
まぁ、中にはまだ居るだろうけれどね、とリーマスは言う。
その言葉を聞いてからシリウスが深刻そうな声で聞いてきた。
「……タツキ、おまえ何人やった？」
「二人」

「二人ぃ!?くそっ、俺はまだ一人なのに……」
「はい、はい。まだ戦闘は終わってないからね」
ブツリブツリと呟き始めるシリウスにリーマスは歯止めをかける。
「……タツキ?」
いつもと少し違う俺にリーマスが俺の名前を呼ぶ。
「リーマス、まだ何か居ないか?」
この場に死喰い人だろう魔力は無い。だが、俺の勘が何かを告げる。
「……何も居ないけれど?」
リーマスがそう告げた瞬間だった。
(っ……セブルス?)
沢山の消えていく魔力の中にセブルスの魔力があった。
(死んだ?……だが)
セブルスの実力ならば他の奴に早々殺られはしないんだが。
(ハリーにはまだ余裕だろうし……)
俺がセブルスの魔力が消えた事に戸惑い、考えている時に低い、ウ〝ォルデモートの声が響く。
「おまえたちは戦った。勇敢に。ウ〝ォルデモート卿は勇敢さを讃えることを知っている」
「しかし、おまえたちは数多くの死傷者を出した。俺様に抵抗し続けるなら、一人、また一人と全員が死ぬことになる。そのようなことは望まぬ。魔法族の血が一滴でも流されるのは損失であり浪費だ」
「ウ〝ォルデモート卿は慈悲深い。俺様は我が勢力を即時撤退するように命ずる」
「一時間やろう。死者を尊厳をもって弔え。傷ついた者の手当をするのだ」
「さて、ハリー・ポッター、俺様はいま、直接おまえに話す。おまえは俺様に立ち向かうどころか、友人たちがおまえのために死ぬことを許した。俺様はこれから一時間、『禁じられた森』で待つ。もし、一時間の後におまえが俺様の許に来なかったならば、降参して出てこなかったならば戦いを再開する。そのときは、俺様自身が戦

闘に加わるぞ、ハリー・ポッター。おまえを俺様から隠そうとしたやつは、男も女も子供も、最後の一人まで罰してくれよう。一時間だ」

そう言って声は止んだ。

「何を言ってる？俺達のハリーが降伏するだと？」

ジェームズに似ているハリーがそんな事をする訳ないだろう、とシリウスは吐き捨てる。

「……シリウス、リーマス、少し抜ける」

俺はブツブツ言っているシリウスと静かなリーマスにこう告げる。

「……どうしたの？」

リーマスが静かに問う。

「……セブルスが、死んだ」

シン……とその場が静まり返る。

「遺体を、回収しないと」

俺はやっとの事でそう告げる。

「……僕も行くよ」

タツキ一人じゃキツイだろうから、とリーマスは言う。

「……俺も」

最後が気になるし、とシリウスは付け加えて言う。

「……シリウス」

「……ワリィ」

リーマスがシリウスの名を呼ぶとシリウスは謝った。……流石に場違いの発言をしたのが分かったのだろう。

俺は最後に感じた時に居た、『叫びの屋敷』へと向かう為に足を踏み出した。

「……何とも皮肉だな」
『叫びの屋敷』に着き、もう四年前くらいの時にシリウスと再開した場所でセブルスは殺されていた。
それを見ただろうシリウスはポツリと言った。
「おまえの最後が此処なんて、な」
「……そうだね」
けれど、僕は君達ほど彼を嫌いでは無かったよ、とリーマスは言う。
「リーマス、セブルスは……どう殺された？」
目が見えない俺はリーマスに問う。
「……体中に深い噛み傷がある」
多分蛇か何かに噛まれての大量出血だと思うよ。
（蛇……ウ〝ォルデモートのナギニか？）
ならばセブルスはウ〝ォルデモートに殺られたんだな。
俺がそう思った瞬間だった。
「タツキッ！」
部屋の奥に居たのか存在が気づかれなかった蛇がシャーーと威嚇しながら俺を攻撃してきた。
「っ……」
俺は咄嗟に左へと避けるが、蛇の鋭い牙が右頭に掠るのを感じた。
「インセンディオ！」
リーマスが蛇に向けて呪文を放つ。
「インカーセラス！」
それに続きシリウスも蛇に向けて放っていく。
俺は右手を右頭に当てながら杖を左手に持ち替え、二人の補助をしていく。
（……眼帯がない）
ヤバいな。あの攻撃で切れたのか。
（今二人は攻撃に集中しているが……）
この目を見たら気持ちの良いものではないだろう。
（だが、今出来る事は右目を閉じる事だけだしな）

俺は眼帯の外れただろう右目を閉じる。
（近くに落ちてないか？）
ゴソゴソと近場を探すが見当たらない。
（……仕方ないか）
俺はため息をつきながらそう思った。
「ちっ……逃がした」
「タツキ、大丈夫？」
蛇を追っていたシリウスは少しイライラしながら、リーマスは少し息を切らしながら俺の元へと来た。
「「っ……」」
そして二人が息を呑むような、驚いたような僅かな声も、近くに居たせいか聞こえてしまった。
「……セブルスを此処から出して埋めないとね」
俺はそんな二人を責めずセブルスの元へと向かう。
「あ、俺はセブルスを運ぶからシリウス、リーマス、俺の眼帯を探して置いてくれないかな？」
「……あぁ」
「分かった」
ヒョイと俺はセブルスを抱える。
「じゃ、俺は埋め終えたら大広間に向かうから」
多分そこが一番人が集まっているだろうしね、と俺は付け加える。
そして俺は二人の返事を聞かずに叫びの屋敷を後にした。

百八十一話（前書き）

最近、創設者時代の執筆が遅れているカイラです。

『英雄後談』があと数話ありますがこの話しは今までの伏線モドキを出来るかぎり回収したため二番目に長い話しとなっています。

初めての“長さ”に『何があったっけ?てか何か書いてた?』と途中でプチパニックになっていたので……少し話しが繋がりにくいかつ分かりにくいかもしれません。

それと確認は一応しましたが誤字脱字、何か此処おかしくね?みたいな事がありましたら面倒でしょうが報告をお願いします。

百八十一話

「……何を、刻めばいいかな？」
セブルスを抱えながらもウ〝ォルデモートに会わないようにして入った『禁じられた森』に埋め、その上に少し大きめな石を置いた。
そして今、墓碑銘を働かない脳で考えている所だ。
（んー…）
俺は杖を取り文字を書きはじめる。
“陰なる英雄、此処に安息を得たり”
そしてその文字を石に刻んでいく。
「じゃ……な、セブルス」
俺はクルリと向きを変えホグワーツへと歩き出す。
『ピュー……』
（……ん？）
何だかコカトリスの声が聞こえるんだが……気のせいか？
（此処にコカトリスなんて生息していないし……）
疑問が残る俺は魔力を確認する。
（……は？）
俺達の魔力がする。
（なら……こいつは作られたって事だよな）
しかも俺達も協力している。
（だが、此処にかけた魔法で皆の魔力を使うなんて……）
無いはずだ。
（……いや、確かサラザールが最後にかけたホグワーツ防衛のやつに俺達の魔力を入れたな）
俺はふ、と引っかかる。
（そういえば、大広間でそれを確認をした時に魔法を止めるようにかけられていた奴を外したな）
それを外したからこいつが出て来たって事か？

（しかし、それならば何故俺のところ？）
今のホグワーツには現れる場所は沢山あるのに。
（あちらこちら危険な場所ばかりなのに俺のところへと来た）
それは……サラザールがそう作ったからか？
そこまで考え、俺はピンと来た。
（サラザールはホグワーツを去る時にこれをかけた）
その前まで話していた事はマグル出身者の入学について。
そして、俺達が生きていた時の“穢れた血”は切り刻む魔法しか使えなかった。
全てが繋がった俺は頬が緩みだす。
（全く……）
心配ならばそう言えば良かったのに。
（マグル出身者に俺達が殺されないように置いたんだろ？）
当時、マグル出身者を入れる事には将来的にはメリットもあったが、デメリットしかなかった。
（殺される事くらい覚悟していたんだが……）
けれどサラザール……サラには堪えられなかったのか。
（……戻さないとな）
俺は杖を持ち、振る。
杖を振り終えると同時に俺達の魔力も消える。
「ありがとう、サラ」
俺は久々に友の名を呼び、ホグワーツへと向かった。

（……静かだな）
ホグワーツ校内は夏期休暇の時と同じ位に静かだ。
（皆は……大広間か）

大広間には……騎士団やウ〝ォルデモートも居る。
大広間の前へと着くと何やら話し声が聞こえる。
（……暢気だな）
ガチャリと扉を開く。
「―ゴドリックグリフィンドールだ」
（……は？）
扉を開いた途端に何やらゴドリックとか聞こえたが……気のせいだろう。
「ほーら、話しをしているとご本人の登場だ」
ウ〝ォルデモートがゴドリックグリフィンドール殿？と聞いてくる。
（……だ……誰のことかなぁ？）
俺は口が引き攣りながら苦笑いをする。
「先程あな―…その目……」
ウ〝ォルデモートは言葉を遮り、驚いたように目の事を言った。
「……なんだ、人を殺してるお前でもえぐられた目を見るのは初めてか？」
俺はニヤリと笑いながら右目に触れる。
しかし触れた右目には目玉の感触が無い。
（相変わらず、か）
『グリフィンドール先生！』
（……へ、レナ？）
『何で頭の傷の手当てをしていないんですか！』
ヘレナの言葉で大広間が静まり返る。
「……くっ」
俺は我慢仕切れず声を漏らす。
（全く……）
「……ヘレナ、別にこの程度の傷なら死んだりしないよ」
堪えられずにくつくつと笑いながら俺は答える。
『グリフィンドール先生、頭の傷を甘くみてはいけません』
大体、甘くみるなと教えてくれたのは先生方でしたよね！？と投げ

やりにヘレナは言う。
（……そうだっけ？）
言った気もしない訳ではないが、言ってない気もする。
ギャンギャンと声を上げているヘレナの言葉を聞き流しながらそう思った時だった。
「レイブンクローの愚かな娘か」
ヘレナの騒いでいる声の中で、小さく聞こえた低い声。
「あのレイブンクローの娘だと聞いた時は期待したが……」
何も変わらない……否、普通より劣っていたな、とウ〝ォルデモートは続ける。
「あんな言葉だけでペラペラと話したのだからな」
（……へぇ？）
ヘレナが劣ってる？
俺はギュッと手に力を入れる。
（見る目がないガキが！）
俺は杖を剣に変え、足に魔力を込め走り出す。
足に魔力を込めたお陰でスピードが増し数秒でウ〝ォルデモートの懐へと潜り込む。
そして俺はそのまま右手に握った剣を下から上へと振り上げた。
グシャリと肉を切り裂く感覚の後にボトリと切り取った左腕が落ちる音が聞こえた。
「ぐわぁぁぁぁあ」
俺はその音を聞くと瞬時にウ〝ォルデモートから離れる。
「っ……貴様！」
「ま、俺からの罰かな」
お前の利き腕は殺ってないだろう？と俺は言う。
「あいつらが大切にしていた物を分霊箱にした事と……ヘレナを侮辱した分」
俺はニコリと笑いながら言う。
「……アダバ―「インセンディオ！」―…アグアメンティ」

ウ〝ォルデモートが死の呪文を放つ前に俺は呪文を放った。
お陰であいつは死の呪文から俺の放った呪文の反対呪文を唱えるしか出来なかった。
「お前が俺を殺れるとも？」
最もお前を殺るのは俺じゃなく、ハリーだろうが、と俺は言う。
「じゃ、ハリー……交代だ」
俺はハリーに向かってそう言い大広間の端に寄せられている人混みへと向かう。
人混みへと向かった理由は二つ。
一つはリーマスやシリウスが居たから。
もう一つは端に人混みがあるならばそこには邪魔にならないように退いた負傷者がいる可能性があるからだ。
俺はそんな人混みの中、先にリーマス達の元へと向かう。
「……タツキ」
良かったの？とリーマスは向かって来た俺に言う。
「何が？」
「タツキがグリフィンドールだと否定しなくて」
「……ヘレナも思いっきり先生って呼んだしね」
俺は苦笑いでリーマスに答える。
「……ヘレナってレイブンクロー寮のゴースト、『灰色のレディ』の事？」
ゴドリックの時の教え子？とリーマスは付け加えながら先程から呼んでいる“ヘレナ”について質問をしてくる。
「うん」
俺はクスクスと笑いながら答える。
「んだよ？まだ何かあるのか？」
不意にシリウスが会話に入ってくる。
「あー…シリウス達は知らないのか」
「だから何だよっ」
「ヘレナはロウェナの娘だよ」

イライラと、俺の言葉を急かしていたシリウスは一瞬で黙り込む。
そして理解したのか叫びだした。
「はぁぁぁぁあ！？」
「シリウス、煩い」
リーマスは叫ぶシリウスに注意をする。
「黙ってられるか！」
何でおまえらはそうあちらこちらに居るんだよ！とシリウスはリーマスに怒鳴った後に俺に聞いてくる。
「……おまえら？」
「あー…おまえら創設者だ！」
（……居るのは俺だけなんだが）
こいつ、とうとう頭がおかしくなったか。
「だってよ、グリフィンドールのお前は何故か居るし、レイブンクローの娘は居るし、スリザリンの子孫のあいつは居るし」
確かハッフルパフの子孫も居ただろう？とシリウスは問う。
「僕の記憶が合っていれば、居たよ」
リーマスの言葉にほらな、とシリウスは言う。
「……俺はともかく、あいつらの子孫は居てもおかしくないだろ」
「それにしても集まり過ぎるだろ」
「そんなに騒ぐ事か？」
「お前はグリフィンドール本人だからそう思うんだろうな」
魔法族生まれの俺からしたら、とんでもない事だ、とシリウスは言う。
「創設者って言ったら詳しい文献も無いから伝説みたいなもんだし」
「……あぁ」
文献……そう言えば燃やした気がする。
「ねぇ、タツキ」
今まで黙って俺とシリウスの会話を聞いていたリーマスが口を開く。
「フードの中にいるの……何？」
「フード？」

（フード……あ）
フィンラとイエローが居たな、確か。
（だが二匹には呪文かけたはず）
……ん？
（あ、姿を消すの忘れてた）
「君が飼っている猫と……よく分からない生物」
「あー…こいつは―」
『危ないっ！』
舌足らずな声が俺の言葉を遮る。
「今のリーマ――…ちっ」
リーマスが言ったのか、と聞きたかったが多分、ハリー達の決闘からズレた呪文がこちらに向かっていた。
「インセンディオ」
俺はその向かってきた呪文に相殺するように魔法を放つ。
「……リーマス、今の声、君？」
「僕じゃ無いよ。シリウスじゃない？」
「俺があんな舌足らずな声を出すか！」
シリウスが冗談じゃねぇと言い捨てる。
「タツキ、声は君の方から聞こえたけど？」
シリウスがブツブツと文句を言っている時にリーマスは俺に向かってこう言った。
「……俺は舌足らずじゃない」
舌足らずなんてのはガキの頃だけだ。
『喋ったのはゴドリックさまではありません』
（……ん？）
何だか後ろから声が聞こえる。
『初めまして、ふぃんらです』
「「「う……うぎゃぁぁぁあ」」」
俺とリーマス、シリウスは同時に悲鳴を上げ、後ずさる。
「静かにしなさい！」

やっと例の――いえ、ウ〝ォルデモートを倒したと言うのに貴方達は！とマクゴナガル先生から怒鳴られたが……それどころではない。
『……後ずさっても、いみ、ないですよ？』
後ろから聞こえた声に俺はビクリと体が反応する。
（あぁ……そういえば）
フィンラはフードに居たな。
「……え？タツキ、貴方のペットは、ね、猫……ですよ……ね？」
フィンラが喋った事によって騒がしくなった大広間の中、マクゴナガル先生が説教をせずに、逆に驚きながら俺に問いかけてくる。
「……そのはずなんですけど……ね」
何で話しているんでしょうか？と俺は付け加えて言う。
『……ぼくは猫ですよ。けれど、ただの猫ではありません』
俺の後ろからフィンラが話す。
『ぼくのいちぞくは、代々ゴドリックさまの母方についていた猫です』
「……え？」
（ついていた？）
え？呪いか何かの類いか？
（でも猫って言っているしな……）
……誰か、脳みそを数人分下さい。
俺は何が何だか分からず頭が混乱していく。
しかし分からないのは俺だけでは無かったみたいだ。
「タツキ……貴方孤児って言っていませんでしたか？」
ああ、でも貴方が居るって事は産んだ両親は居るって事ですよね……とマクゴナガル先生も混乱していた。
そんな混乱している頭で出しただろう結論がこうだった。
「タツキ、説明しなさい」
「俺もさっぱり分かりません」
俺は即座にこう答える。
「僕達の方がもっと分からないんだけど？」

タツキって？しかもゴドリック？全て教えてくれるよね？とハリーが声を上げる。
「え？あー……」
（ろ、ロウェナぁぁあ）
俺は何から手をつければ良いのだろうか……
俺よりも、いち早く冷静になったのかマクゴナガル先生が仕切りだした。
「ポッター……そうですね。貴方達の質問は後にしましょう」
それらについては微力ながら私達でも話せますからとマクゴナガル先生は言う。
「まず先に本人ですら理解しきれていない話しから聞きましょう」
良いですね？とマクゴナガル先生はハリーに尋ねる。
「……分かりました」
教えてはくれるからかハリーはこう答えた。
「さて、フィンラ……分かりやすく全て説明してくれますか？」
『はい』
スゥと息を吸いフィンラは話し出す。
『ぼくのいちぞくはずっと、ずっと昔、嫌われていたらしいんです。とくにこれと言ったなかまとの違いもなかったから理由はわからないけれど、嫌われてたんです』
『初めはなかまからははずれてたんですが……しだいにその地域でのかりも出来なくなり、いちぞくはいきのこるためにその地域からはなれました』
『けれどきこうも、たべものも全然わからない場所で、ぼくのいちぞくはかずがわずかになりました。でも……』
『そんな時にゴドリックさまの母方のずーっと前のかたがひろってくれたんです』
『……それからずっと、ずっと一緒にくらしたと聞いています。そしてそのなかでぼくのいちぞくは“言葉”を覚えたんです』
『そして、ぼくのいちぞくは興味ほんいに聞いたんです。何でひろ

ったのか、と』
『『私達みたいに化け物でも無い貴方達が周りに避けられる理由がないでしょ？』こう言ったんです』
「化け物……」
ポツリと俺は呟く。
『……ゴドリックさまの母方のいちぞくは人間です。けれど化け物と言われていました。それは、母方のいちぞくのかたは不定期にさつじんてきしんりになるんです』
「殺人的心理？」
シリウスが不思議そうに問う。
『はい。ぼくのいちぞくはみなそう言います。それに陥っているきかんは人を……血をあびるとこうふんする人格になってしまうんです』
『だから、人からさけられていたんです。まわりはいちぞくを人をころしてよろこぶ最悪なやつらだって』
『もちろん、そのきかんにならなければそんな風におもいませんし、そのきかんになったからといって毎回人をころしたりはしていません。いや……むしろころしている事のほうが少ないんです』
『けれど、いちど血をあびればトリッパーいがい、もうだれもそれを止められず人を、動物をずっところし続けます』
『それでも、ぼくのいちぞくはずっと一緒にいました。……いや、最後までいます』
「……何で？いくら拾われたからって君には直接な関係は無いだろう？」
化け物なんかとさ、と辛そうな声でリーマスは言う。
『……たしかに、ぼくにはずーーっと前のことです。もう、子孫もいないって聞いていて……ぼくじしん、作りばなしって思っていました。でも、ゴドリックさまのあれを見てから――本当なんだって』
「……あれ？」
シリウスが繰り返し言う。

『ひだりほほに浮かぶ、蔦です』
（あ―……あれか）
確か数年前、浮かび上がってたな。
（やけにフィンラがべったりと側にいた……）
『あれはあいずみたいなもの、だと聞いています。しろは何もかわらない、ふつうな状態なんですがくろだとさつじんてきしんりに陥っているから気をつけろって……』
『ゴドリックさまのそれを見てから、あぁあれは本当なんだって。なら、ゴドリックさまは……嫌われるのかな、と思って。悲しいかおをするのかなって思って……』
『なら、なら最後の最後までぼくが一緒にいればいいんだっておもったから』
「怖く……ないの？」
震える声でリーマスが問う。
『……しょうじき、怖い。でも、怖くても悲しい顔はみたくないし、ぼくが一緒に居たいから』
（……それでずっとついていた、か）
だが……確か初めて蔦を聞いた時は黒だったんだが……
（何で白になってるんだ？）
黒ならば人を殺しまくるんだよな？
俺が必死に考えている中、シン……と静まり返った大広間の中、マクゴナガル先生が口を開いた。
「すみません、トリッパーとは何ですか？」
『トリッパーは……きじゅんとかはよく分からないんですが、さつじんてきしんりに陥って血をあびたいちぞくでも唯一止める……もとのせいかくに戻せるんです。にんずうにもせいげんは無いみたいで人によってはすうにんいたんだとか……』
「……つまり、一人ではない、と？」
『はい。ですが、ひとりも出ない人もいます』
「……そうですか」

（……フィンラの言う事が合っているならば）
俺はあいつらに止められたって事か？
「……貴方のことは大体分かりました。話せる理由も」
「さて……次は貴方ですよ、タツキ」
何もかも吐き出してくださいね、とマクゴナガル先生は言った。
（……あー、とうとう来ちゃたか）
自分の事を話すの、苦手なんだよね……
（仕方ないか）
俺は一息つき、話し出す。
「俺の名前はゴドリック・グリフィンドール。タツキやライカは偽名だ」
「偽名？何で―」
「それは有り得ないわ！」
ハリーが俺に聞こうとしてハーマイオニーが遮る。
「ゴドリック・グリフィンドールは千年前の人物なのよ！今生きているはずないわ！」
「……そうだな。俺は一度死んでいる」
だから今の年齢は同期のリーマス達と一緒だよ、と俺は言う。
「死んでいる？なら尚更有り得ないわ！」
「……俺は此処、ホグワーツにやり残している事があった。だから無理や――いや、無理を言って生きてるこの世界に来させてもらった」
まぁ、この辺りの事は詳しく聞かないでくれると有り難いかな、と俺は付け加えて言う。
「やり残していたこと？」
それって何？とネビルが聞いてくる。
「……今はもう終わったが、ホグワーツにはある魔法をかけ忘れていたんだ」
よくこのホグワーツはもってたよな、とポツリと呟く。
「ある魔法って―」

「ライカ、タツキやライカが偽名ってどういう事？」
ネビルの言葉を遮り、ハリーが聞いてくる。
（ネビルのその魔法については答えたくないな……）
まさか俺達が死んでからも城の呪文が動くようにする魔法をかけ忘れてた、なんて。
（……言えないな）
俺達の作った土台が機能してなかったら……うん。魔法は解け、マグルに見つかっていただろう。
俺はネビルの言葉を無視しハリーの質問に答える。
「ゴドリック・グリフィンドールの名前は今じゃ知られ過ぎてるからな。しかも千年前の人物」
一々細かく説明するのも嫌だから偽名を使ったんだ、と付け加えながら言う。
「ヒブカは俺を少しの間だけ引き取ってくれた家族名。ちなみに日本な」
タツキはその家族がつけた物で、ライカは適当に考えた物、と俺は付け加える。
「……ライカが僕と同じ年に入学したのは？」
シリウスと同い年なのに、とハリーは付け加えながら聞く。
「それは……まぁ、依頼されたからかな」
「依頼？」
「……これ以上は秘密な」
俺は苦笑いを浮かべながら言う。
「ライカ……貴方がゴドリック・グリフィンドールならば髪は赤髪じゃないのかしら？」
貴方は黒髪よね？とハーマイオニーが聞く。
「これは魔法で染めているんだ。……赤髪だと日本人には見えないだろ？」
日本は黒髪が多いって聞いたからね、と俺は付け加える。
（今は赤髪も染めているのだが……言わなくて言いか）

『はい！』
先生、良いですか？とヘレナが勢いよく聞く。
『先生の右目と両手にある入れ墨は何ですか？』
（……そこ聞くのか）
俺は小さくため息をつきながら答える。
「両手の入れ墨から答えようか……左手はまぁガキの時の勢いって奴だな。“繋がり”系統の魔法陣だ」
「魔法陣？それって何かしら？」
俺の言葉にすぐさまハーマイオニーが聞き返す。
「……もう知らないだろうな。俺達がガキの頃、杖が基本的で少し魔法陣が残っていた程度だったし」
俺は一息つき、話し出す。
「魔法陣は杖の前に魔法使いが使用していた魔法だ。杖は媒体を杖……木にしているが、魔法陣は媒体を陣にして使っている」
そうだな……と続けながら左手の甲を皆に見えるようにあげる。
「これは刻んであるが、魔法陣は通常魔力を使い空に円を書く。そして中にある変な模様は魔法の種類や、例え同じ魔法でも一人一人違う」
こんな風に使うんだ、と言いながら俺は右手で魔法陣を書いていく。
「発動は書いた魔法陣に魔力を込めるだけだ」
こうやってな、と俺は言い僅かに魔力を込める。
するとボッと火が出る音が聞こえた。
「うわっ！ねぇ、ライカ。それ僕たちにも出来る？」
ロンがワクワク、と言わんばかりの声で聞いてくる。
「んー…出来ない事は無いだろうが……独学が出来る人じゃ無いとダメだよ？」
「え？ライカが教えてくれるんじゃないの？」
ロンが驚いたように問う。
「一人一人違うって言っただろ？皆、独学で学んでいるんだよ」
一からね、と付け加えて言う。

「右手は……まぁマグル界での奴隷の印し、かな」
最も、マグル界でももう奴隷は居ないから何の効果も無いけど……
と俺は告げる。
「そんな！」
ハーマイオニーが悲鳴を上げる。
しかし俺はハーマイオニーの悲鳴を無視した。
「右目は……まぁこれもガキの頃のやんちゃだな」
ちょっとやり過ぎて罰でえぐられた、と付け加える。
「あ、リーマス、シリウス、眼帯見つけた？」
「あ、はい。これ」
そう言ってリーマスが俺の手に眼帯を置いてくれた。
「ありがとう」
俺は手早く眼帯をつける。
「よし。後は……何か話してない事あったかな……」
俺の正体も言ったし……まぁ予想外だったが目や魔法陣も話した。
此処にいる理由も少し。
（もう無いよな？）
「タツキ、その変な生き物は何？」
リーマスから再び聞かれる。
（あー…どうしようか……）
此処にいる皆を信用して正直に話すか……ごまかすか。
「タツキ？」
……うん、全てを話さなければいい。
「こいつは……ヘルガのペット」
名前はイエローだよ、と付け加える。
「ハッフルパフの？」
千年も生きてたの？とリーマスは驚きながら問う。
「……さぁな。閉じ込められてたから分からない」
何かされたのかもな、と俺は思わせぶりで言う。
（こう言えば……）

皆、何かあったのだろうと思い千年も生きていたとは思わない。
（誰もイエローを調べたりはしないだろう）
最も、文献があるとは思わないが。
（それでもばれたら仕方がない）
処分するまでだ。
次第にザワザワと騒がしくなっていく大広間の中、ハーマイオニーがいきなり声を上げる。
「あ！そうだわ」
ライカ、とハーマイオニーは言う。
「ライカなら何とか出来るかも知れないわ」
「……何が？」
俺がそう尋ねるとハーマイオニーは言いずらそうに言った。
「あの……『必要の部屋』あそこが炎上したの」
「……え？はぁぁぁぁあ！？」

百八十二話（前書き）

次の話しで最終話です……
なんだか死の秘宝に入ってからはあっという間に終わりましたね……

あ、次回で最終話ですがいつも通りに外伝がありますので“完結”になるのは後数日後ですね。

あー……後もう少しで終わっちゃうのか……

百八十二話

「『必要の部屋』が燃えたって……何をしたの？」
「クラップが『悪霊の火』を放ったの」
クラップは此処で教えていた死喰い人のおかげで使えるようになったんだと思うわ、とハーマイオニーは付け加えながら言った。
「ちょうど良いですね」
ハーマイオニーの話しを聞いていたのかマクゴナガル先生はこう言う。
「貴方に頼もうと思っていたんです。『必要の部屋』でしたか？そこを含めたホグワーツの修復をお願いします」
「……俺がですか？」
「貴方以外に誰がホグワーツ全体を知っていると言うのです？」
キッパリとマクゴナガル先生は言う。
（それはそうだが……）
このホグワーツがどれだけ広いと思っているんだ？
（隠し通路や隠し部屋を除いてもかなり広いのに……）
俺がため息をついた時だった。
「安心しなさい。貴方一人に“全て”は押し付けません」
ただ、とマクゴナガル先生は続ける。
「隠し部屋や隠し通路などは頼みます。他の場所なら私達教員で直しますから」
「……隠し部屋や隠し通路だけで良いんですね？」
「はい。まぁ流石に敵が隠し通路を通ったくらいですから被害はその『必要の部屋』くらいだとは思いますが……」
それでも確認を頼みます、とマクゴナガル先生は言った。
「……分かりました」
俺は渋々引き受ける。
（とりあえず『必要の部屋』からか）

そう思い、立ち上がろうとした時だった。
「タツキ、今日は死者数の確認を取るだけで良いですよ」
皆さんも疲れているでしょうし、今日はあちらこちらでパーティー状態でしょうし、とマクゴナガル先生は告げる。
「……そうですね」
勿論此処もですよね？とざわめきの中から聞こえる歓喜の声に負けないように俺は問う。
「勿論です。今や待ちきれずに歓喜の声をあげているくらいですから」
マクゴナガル先生は少し呆れたように言った。
「……死者数はこちらで数えるので貴方には今夜の宴会の準備を頼めますか？」
リーマスやシリウスも連れて行って下さい、とマクゴナガル先生は言う。
「二人……いえ、シリウスが居れば作業は出来ないでしょうから」
「リーマスだけではダメですか？」
何気にシリウスを押し付けているマクゴナガル先生に俺は問う。
「ダメです。シリウスも連れて行きなさい」
「なぁ……二人の中での俺、どんな存在？」
シリウスが俺とマクゴナガル先生との会話で生まれただろう疑問を聞いてくる。
「「居ると手間がかかる厄介者（です）」」
俺とマクゴナガル先生は同時に答える。
「……タツキなんて嫌いだぁぁぁあ」
そう言いながらシリウスは去って行く。
（……何で俺だけ？）
マクゴナガル先生も同じ事を言ったのだが……
「……仕方ないですね。二人に頼みましたよ」
マクゴナガル先生はため息をつきながら言う。
「あ、後で二人に話しがあるので私の所へ来て下さい」

「……僕も、ですか？」
リーマスが繰り返し聞く。
「えぇ、リーマス、貴方もです」
ちゃんと来てくださいね、と言ってマクゴナガル先生も去る。
「……リーマス、行こうか」
「うん。先程の通りだからハリー達は休んでなさい」
俺は立ち上がり、リーマスと共に大広間を後にした。

宴会の準備を頼まれた俺達はホグワーツ校内の厨房に来ていた。
「思ったより大変なんだね」
準備するのって、と疲弊した声でリーマスが言う。
「普段は此処までしないよ」
屋敷しもべの人数が少ない今回だけだ、と俺は付け加える。
「それに、この宴会も急だしね」
そう言いながら俺はトントンと材料を切る。
「……でも、料理をしたことが無い人にさせないよ……ね？」
ダンッと材料を切っているとは思えない音を出しながらリーマスは言う。
「あ、あの……もう十分切ってもらいましたから！後は私たちでします！」
いらつきながら黒い何かを出しているリーマスの言葉を聞いたヤギルが素早く言う。
「そう？タツキ、こう言っているから上に行こう？」
「……そうだな」
（言わせたん……だよな？）
リーマスは屋敷しもべにまで黒い何かを使うのか。

（……よく教師をしていたな）
「タツキ？」
止まっていた俺に休もうか？とリーマスは聞いてくる。
「あ、いや、平気だよ」
俺は止まっていた包丁を下ろす。
「タツキ様、私たちは大丈夫です！」
だから行ってください、とヤギルは言う。
「じゃ、頼んだ」
「はい！！」
俺はリーマスと忙しそうにバタバタ言っている厨房を後にした。

俺達が大広間へ着いた時は相変わらず煩かった。しかし、リーマスが言うにはもう宴会が始まっているらしい。
「確かマクゴナガル先生が呼んでいたよね？」
煩い中リーマスが俺に確認してくる。
「うん」
それに俺は短く答えマクゴナガル先生の魔力を探す。
（マクゴナガル先生は……居た）
いつもと変わらずに教員テーブルがあるだろう場所に居る。
「リーマス、行こう」
俺とリーマスは生徒や騎士団の人々の間を抜いながら向かう。
「マクゴナガル先生！」
マクゴナガル先生の元へと着くなり、息切れをしながらリーマスが名前を呼んだ。
「話しとは何ですか？」
「あぁ……とりあえず、二人とも座りなさい」

マクゴナガル先生のその言葉で俺とリーマスは空けてもらった席に座る。
「さて……二人を呼んだのは教師についてです」
「教師……ですか？」
マクゴナガル先生の言葉に不思議そうにリーマスは繰り返す。
「そうです。……知っているかも知れませんが校長がウ〝ォルデモートに殺されました。よって正式な校長が決まるまでは副校長である私がしなければいけません」
「マクゴナガル先生……そういう話しは教師ではない僕は聞かない方が良いのではないでしょうか？」
マクゴナガル先生の先程の教師と校長の話しを聞きリーマスはこれ以上聞いてはいけないのでは、と問う。
「いえ、貴方にも聞いてもらわなければいけません」
しかしマクゴナガル先生はハッキリとこう言った。
「今、教師はかなり抜けています。『マグル学』、『闇の魔術に対する防衛術』、『変身術』、『魔法薬学』です」
（……え？）
変身術はマクゴナガル先生だが……
（そんなに抜けたのか？）
「マクゴナガル先生、死喰い人が教師であった『闇の魔術に対する防衛術』や教師がウ〝ォルデモートに殺された『マグル学』、マクゴナガル先生が一時的でも抜ける『変身術』ならば分かりますが……『魔法薬学』はどうしてですか？」
リーマスが素早くマクゴナガル先生に問う。
（マグル学の先生……殺されてたのか）
「スラグホーン先生が先程来学期前には引退すると言ってきました」
マクゴナガル先生は嫌そうに答える。
「本音を言うならば……今の時期に抜けて欲しくは無いのですが」
流石に先程の戦闘でもう教師をする程の体力も無いと分かったらしいです、とマクゴナガル先生は続ける。

「それに2年だけだがそれでも自分では緊急事態に対応出来ないと分かった、と言われれば……仕方がありません」
「そこで、『闇の魔術』をリーマス、貴方に。他の教科はタツキ……貴方に任せます」
「「……異議（あり）（があります）！」」
俺とリーマスの声が重なる。
「人狼である私を教師に？4年前を忘れたわけではないでしょう！？」
「仕事多過ぎません？しかも俺、助教授であって教師ではありません」
「勿論、そのままにはしません。助教授希望が二人居ますからそれぞれに付けます」
そして、とマクゴナガル先生は続ける。
「タツキ、貴方は助教授から教師になってもらいます」
「いや、そうされても仕事量は変わりませんよね！？」
ホグワーツの修復もしなければいけませんし、と俺は付け加える。
「グリフィンドールである貴方なら三教科くらいは大丈夫でしょう？それにずっとではありません」
教師が見つかるまでの一時的です、とマクゴナガル先生は言う。
「貴方には最終的に一つ余った教科を担当してもらいます」
そして三教科を担当している間はその分給料を上げますよ？とマクゴナガル先生は告げる。
「悪くはないと思いますが」
「マクゴナガル先生！」
リーマスはマクゴナガル先生に言う。
「僕は人狼ですし……前回の事もあり上の人達も許可はしないかと」
「そこは私が何とかします。貴方達は今教師をするかどうかを決めて欲しいんです」
どうですか？とマクゴナガル先生は俺達に聞く。
「……三教科が一時的ならば俺は構いません。やります」

「……また、教師が出来るならしたいです」
「……分かりました。よろしくお願いしますね。リーマス、タツキ」
マクゴナガル先生は安心したように言う。
「良かったですね、ミネルバ」
二人が引き受けてくれて、とマダム・フーチ先生が言う。
「えぇ、本当に」
正直、賭けでした、とマクゴナガル先生は言いマダム・フーチ先生と話していく。
「タツキ、助教授って何をするの？」
マクゴナガル先生の話しが曖昧だが終わりリーマスが声をかけてきた。
「助教授は基本、教授の補佐だよ。授業前に必要な物を用意してもらったり、レポート等を返却してもらったり」
「ただし、助教授は授業をする事は出来ない。授業中は見てるだけか生徒に少しアドバイスするくらいかな。後、寮から減点する事も出来ない」
俺はレポート返しや授業準備は呪文で済ませて授業には出なかったけど、と付け加えて言う。
（……ん？）
ヤバい。嫌な予感がする。
そっか、と言いながらリーマスは言う。
「なら、満月の時期はどうするのかな？」
「……」
（……マクゴナガル先生が俺に振りませんように）
リーマスの質問には返事をせずに、俺は心の中でそう祈る。
「後でマクゴナガル先生に聞いとかないと。あ、『魔法薬』タツキがするんだよね？なら僕の薬も頼んで良いかな？」
「……分かった」
頼むよ、とリーマスは言った。
（……明日から忙しくなるな）

ゆっくり出来るのも今日までか。
（さらば、余裕のあった学生生活）
明日からは、教師だ。
「あ、タツキ！」
「ん？」
リーマスは俺を呼び、前には言えなかった事だね、とか言いながら告げる。
「明日から同業者だよね。よろしく！」
「……よろしく、ルーピン先生？」

百八十三話

朝……いや、昼に近い時間なのに俺の周りはガヤガヤと騒がしい。
（相変わらずだな）
ガサリと物凄い量の荷物を持ち直しながらそう思う。
（ハリーがウ〝ォルデモートを倒してからもう、十九年か）
カツカツと九と四分の三番線を歩きながらそう思う。
（……あれから大変だった）
授業を掛け持ちし、ホグワーツの修復のために城の中を動き回り、マクゴナガル先生から押し付けられたハリー達の編入の手続きをしたり……
（助教授への説明も俺だったし……）
今まで働かなかった分、やりますよね？と言われんばかりに働かされた。
（やっと落ち着いてきたら……）
ハリーの息子、ジェームズが入って来て俺の仕事は増えたし……
（あいつはジェームズそっくりに悪戯の毎日だしな）
唯一違ったのはリリー馬鹿な所が無い事だろう。
「おい、グリフィンドール先生？何故此処にいる？」
不満そうにライルが俺に聞いてくる。
「んー？ここら辺に商品を頼んでいる商人がいるはずなんだよね」
「早く見つけろ」
イライラとしたような声でライルは告げる。
（あー…リーマスが羨ましい）
マクゴナガル先生が言っていた助教授はライルとソーラスだった。
二人はマクゴナガル先生からの命令でライルは俺に、ソーラスはリーマスの教科へと着いた。
（確か……リーマスと一緒だから十九年か）
十九年助教授……二人とも成長してないな。

「グリフィンドール先生！」
「ん？」
物思いに耽りながらも商人の魔力を探していた時に声がかかる。
「お久しぶりです。凄い荷物ですね？授業に使う奴ですか？」
「ベイカー、久しぶり。荷物は……ライルが持っている分が授業用のだね」
「……先生の持っている荷物は？」
不思議そうに聞いてくる生徒。
「……秘密。ほら、早く乗らないと出るぞ」
「ちぇ……またね、先生！」
そう言って生徒はパタパタと去って行く。
（……何だか昔みたいだな）
あいつらはもう居ないのにそう思うのは今でもグリフィンドール先生、と呼ばれるからか？
（ヘレナのが移ったんだよなぁ）
ヘレナがグリフィンドール先生、グリフィンドール先生と呼ぶからいつの間にかグリフィンドール先生で呼ばれるようになったんだよな……確か。
「おい、あいつじゃないか？商人の格好をしている」
そう言いながらライルが小さく方向を教えてくれる。
（あ、この魔力は）
「うん、あいつだよ」
ライル、ありがとうと礼を言いながら近寄って行く。
商人に声をかけ、二言三言話してから商品を受けとった俺はついて来なかったライルの元へと向かう。
「さ、帰ろうか」
そう言った瞬間にガタンとホグワーツ特急が動く音が響いた。
「……早く帰るぞ」
そう短く言うとライルはすぐさまパチン、と『姿くらまし』をした。
そんなライルにため息をつきながら俺はパチンと『姿くらまし』を

した。

「……もうすぐ時間か？」

ホグワーツに着いてから授業用はライルに片付けさせ、個人的な荷物を教員へ与えられた部屋に仕舞っていたところだった。

「新入生の歓迎パーティーが始まるな」

時間を確認すると後五分あるかないかだった。

「遅刻はマクゴナガル先生……いや、校長に怒られるし……そろそろ行かないと」

俺はパタンと扉を閉め、大広間へと向かう。

急いで向かった大広間に入るとザワザワと騒がしく在校生、教員がすでにおり俺が最後みたいだった。

カタンと俺は教員テーブルへと座る。

「遅かったね」

俺が座ると同時に隣にいるリーマスから声がかけられた。

「荷物を片付けててね」

君の魔法薬とかの材料とかね、と付け加えて言う。

「……それは大変だったね」

「まだ終わってー」

しかし俺が言い切る前にカンカンカンと言う音の次に「静まりなさい」と言うマクゴナガル先生の声が聞こえた。

その言葉でシン……と大広間が静まり返った瞬間ガチャリと扉が開く音が聞こえ体力の魔力が大広間へ入ってくる。
（一年生か……）
ハグリッドを先頭に歩いてくる。
そしてピタリと一年生とハグリッドと止まった。
静かな大広間にあの歌が響き出した。
―昔々のそのまた昔
当時その名を馳せた
四人の魔法使いが共に学び舎を興す

知識のレイブンクロー
忍耐のハッフルパフ
狡猾のスリザリン
勇気のグリフィンドール

彼らはそれぞれの寮を作り、自分好みの生徒を選び入れる

彼らの亡き後、寮への選別を任されたのはボロイ帽子であるこの私！

賢い私が君達の頭を覗き入るべき寮を導こう！

レイブンクロー！
ハッフルパフ！
スリザリン！
グリフィンドール！

少し煩いだろうが私は寮の名を叫ぶ！

さぁさぁスッポリと私を被り、楽しい組分けを始めよう―
パチパチと拍手が上がる。

（……煩い自覚あったんだな）
あるならばもう少し音量を下げてくれ。
「名前を呼ばれた生徒から前に出ろ。えーアッサム……アッサム・ローラン」
ハグリッドが大きな声で生徒の名を呼ぶ。
「……ハッフルパフ！」
「ビーロスト・ルタ」
「……レイブンクロー！」
次々に生徒の名前が呼ばれて行く。
「マルフォイ・スコーピウス」
「スリザリン！」
（……マルフォイ？）
ドラコの子供か？
俺がそう思った時に隣のリーマスがポツリと呟いた。
「あの髪……マルフォイ家の子だね」
（やっぱり……）
「ポッター・アルバス」
その名前が出ると大広間がザワザワと騒ぎ出す。
（前のジェームズの時もそうだったな）
最もすぐに寮は決まったが。
だがアルバスはジェームズほどすぐに寮の名は上がらなかった。
（ハリーの時も長かったよな……）
アルバスはハリーに似たのかもしれない。
「……グリフィンドール！」
ようやく出た寮名にグリフィンドール生が盛大な拍手を送る。
「もうあの家はグリフィンドールだろうね」
クスクスと小さく笑いながらリーマスは言った。
「もう一つあるよ」
グリフィンドールの家系がね、と俺は言う。
「ウィーズリー・ローズ」

「グリフィンドール！」
ワッと拍手が沸く。
「そうだった」
ウィーズリー家もだったね、とリーマスは言う。
「リーマス」
今だ続く組分けを聞きながら俺はリーマスを呼ぶ。
「なんだい？」
リーマスは軽く答える。
「今年も賑やかになりそうだね」
「騒がしいのがホグワーツだよ」
いつの間にか組分けが終わったのかカンカンカンと音が鳴り、マクゴナガル校長が食事開始の一言二言を告げる。
「でも」
リーマスが話し出す。
「あのジェームズが居る限りは騒がしいで済まないかもね？」
「……確かに」
でも、賑やかで良いことだよ、と俺は付け加えて言う。
「君は被害を受けないからね」
後片付けもした事ないだろ？と少し攻めるようにリーマスは言う。
「……リーマス、グリフィンドールの寮監は俺だよ？」
説教なら嫌というほどしているよ、と俺は言う。
「……そっちの方が嫌かな」
そう言いながら頑張れ、とリーマスは付け加えた。
「リーマス、見つけたら君も説教しないといけないんだからな？」
それは気をつけないと、とリーマスは明らかに説教をする気ゼロで言う。
（……リーマスの分が俺に回らなければ良いんだが）
グリフィンドール寮監であるかぎり無理だろう。
俺はため息をつきながら料理へ手を伸ばした。

外伝・慰安旅行（前書き）

今までで一番長い話しになりました。
……外伝なのにね（苦笑）

……執筆も凄く苦労したのを覚えています。
その一つが最終的には気力が尽きてプツリと切っちゃた事、とか……
ごっちゃになっていろんな物を詰め込んだ、とか……

お陰で確認も大変でした。

そんな苦労をした一つ目の外伝をどうぞ↓

外伝・慰安旅行

ミーンミンミンやジジジジ……と色々な蝉が煩く鳴いている日本の山を俺とハリー、ロン、ハーマイオニーに暇な騎士団員二名で上っていた。

「……あっつい！」

こんなに暑いなんて聞いてないぞ！と歩きながらシリウスが怒鳴りこんで来る。

「イギリスは西岸海洋性気候だけれど日本は温暖湿潤気候だから仕方がない」

俺は騒いでいるシリウスにそう答える。

「し、湿潤気候？」

「何？その湿潤何とかって」

シリウスに続きロンまでもがそう聞いてくる。

「……西岸海洋性気候はイギリスの気候で割と安定しているんだ。夏は涼しく、冬は高緯度の割には激しい冷え込みはない」

「温暖湿潤気候は夏は高温多雨……とても暑くてよく雨が降る。冬は乾燥するのが特徴だ。後、四季の変化があるのも大きな特徴だな」

まぁこの気候の中でも特に日本が蒸し暑いけどな、と俺は付け加えて言う。

「タツキ！何で事前に―」

「四季って何？」

シリウスの言葉をハリーが遮る。

「四季は……イギリスは夏と冬だけだがそこに二つほど季節が入って、春、夏、秋、冬となるのが四季だ」

これも日本がよくハッキリとしているよ、と付け加えて言った。

「もっと詳しく聞いて良いかしら？」

春とか冬とか……とハーマイオニーが聞いて来る。

「春は……そうだな、イギリスにも桜があったよな？あれが一斉に

咲くらしい。夏は……ちょうど今の時期だから見たら分かるよな。秋は紅葉が始まり山が多い日本はあちらこちら綺麗らしい。冬は……一部を除いて雪が降るくらいだな」

もっとも積もる所もあれば降らない所もあるけどと付け加えて言う。

「なら……何で夏なのに温泉に来ているんだ！」

「お前達が慰安旅行で行きたいとか言ったからだろ」

「ぐっ……だが、俺は日本は冬だと思って」

「……日本は南半球には無いけど」

「……」

ザクザクと歩く音が聞こえる。

（……全く）

そんな事だろうと思ってなるべく川に近い場所を選んでいて正解だったな。

「少し下ったら川があるが……行く？」

その言葉に一番早く飛びついたのはシリウスだった。

「行くっ！行きます！！」

その素早さに俺は苦笑いをするしかなかった。

「すっげぇー涼しい～」

水がすげぇ気持ちいいーとシリウスの声が他の奴らよりも大きく響く。

「シリウス、あんなに楽しそうにはしゃいで……」

ハリー達と比べてどちらが大人だろうね、と隣にいるリーマスが言う。

「ハリー達を差し置いて真っ先に川に入るし……」

覚悟は出来てるのかな？あの駄犬、とリーマスは言い放つ。

「どうぞ、リーマスのお好きに」
俺は恐ろしい雰囲気を放っているリーマスに適当に答える。
「ただ、旅館に着いてからにしてくれないと今、使い物にならなくなったら俺が困る」
俺はシリウスを担いで旅館まで行く気力はないから、と付け加える。
「……大分疲れているみたいだね」
「引率も楽じゃなくてね」
俺は皆が知らない日本からの案内だけに注意をしていたんだが……
（まさか飛行機の搭乗も知らないなんて……）
それでも現代人か、と思わず言いたくなってしまった。
（いくら魔法使いでマグル界に疎いとはいっても……）
全員が純血では無いのだから飛行機くらいは知っていて欲しかった。
（旅館の手続きも俺だろうし……）
予約はしていないし、かなりの人数だから手続きも大変なんだろうな……
思わずため息が出る。
「この慰安旅行、タツキにとっては慰安にならないみたいだね」
リーマスは申し訳ないような雰囲気を出しながらクスクスと笑う。
「……ま、旅館の手続きまでだから大丈夫だよ」
その後は各自の責任で行動してもらうよ、と付け加えながら言う。
「流石にそれくらいは皆分かっているさ」
それよりいつ旅館に向かう？とリーマスが聞いてくる。
「んー…多分シリウスが一番はしゃいでいるだろうからシリウスが川から上がってきたら向かう」
俺はそう言いながらゴロリと横になる。
「じゃシリウスが上がってきたらタツキに知らせるね」
「頼んだ」
シリウス達の騒ぎ声をＢＧＭに俺は空へと顔を上げた。

「タツキ、皆上がったよ」
「分かった」
俺はリーマスの言葉で起き上がる。
「よっしゃ！タツキ、早く行こうぜ！！」
川で思う存分遊んでエネルギーを溜めただろうシリウスが早く、と急がせる。
「この調子なら後数時間歩いても大丈夫そうだね」
「……は？」
俺の言葉でシリウスは先程の高いテンションから一瞬で落ち着いた。
「旅館の一番近くにある川でも旅館からはかなり離れているんだよ」
「はぁぁぁぁあ！？」
シリウスはこれでもか、と叫ぶ。
「叫ぶ気力があるならまだ大丈夫だね。行くよ」
「ふざけるなぁぁぁあ」
俺は叫ぶシリウスを放っておき、歩き始める。
「シリウス、君が川へ行きたいって行ったんだよね？」
まさか文句を言ったりは……しないよね？と最早脅しにしか聞こえないリーマスの言葉が僅かに聞こえる。
（知らぬが仏……だったか？）
俺は聞かなかった事にし、シリウスの絶叫を聞きながしながら川を後にした。
「た、タツキ……まだか？」

息を切らしながらシリウスが聞いてくる。
「もうそろそろ旅館が見えると思うけど？」
俺の予想が合っていれば、と付け加える。
「……どうやら合っていたみたいだよ」
旅館が見えてきた、とリーマスが教えてくれた。
「よっし、一番乗り！！」
そう叫ぶなりシリウスはダダダダと音を立てながら走っていく。
「……シリウス、息切れていたよね？」
「そして先程まで疲れたとかなり煩かったよ」
隣に居るだけで疲れたよ、とハリーが言う。
「……でも、シリウス日本語分かるのかな？」
ハリーに続きロンが言う。
「分からないでしょうね」
ハーマイオニーがスッパリと言い切る。
「……さて、皆疲れているだろうしユックリと行こうか」
旅館はすぐそこみたいだし、と俺は告げる。
「「うん」」
「そうね」
「たまにはシリウスも苦労するべきだよね」
俺達はそう言って歩くスピードを落とした。
数十分くらいかけ、たどり着いた旅館に入ると中は凄く面白かった。
『あの……すみません、宿泊するためにはお客様のお名前をお願いします。後、靴は玄関で脱いで下さい』
「お？これは何だ？」
『あ！お客様、申し訳ございませんがその展示品には触れないで下さい！』
「あ、……壊れた」
『お客様！？申し訳ございませんがこれは弁償になります。後で請求をしますのでご住所をお願いします』
「ん？サインか？」

『……お客様、お名前……でしょうか？それしか書かれていませんので、ご住所の方もお願いします』
「あ？またサインかよ！」
（……流石に止めるか）
面白くはあるが……これ以上は泊まるどころか店員に通報されてしまう。
「シリウス、それはサインじゃなくて住所を書いて欲しいんだよ」
シリウスにそう伝えながら俺は靴を脱ぐ。
「後、日本では家に入る時などは靴を脱ぐ文化だから」
俺のその言葉でバタバタと靴を脱ぐ音が聞こえた。
「……マジで？」
「とりあえず、履いているなら靴は脱いでね」
俺の言葉でシリウスがこちらにやって来る。
『あ、あのお客様！！』
店員が焦りながら声をかけ、パタパタと追う。
『逃げませんよ。靴を脱ぎに行っただけです』
『え？……はぁ』
店員は俺の言葉と玄関にいるシリウスを見たのだろう。パタパタと追うのを止めた。
『あの、すみません。予約をしていないのですが泊まれますか？』
俺は戸惑っているだろう店員に聞く。
『……あちらの方々と、ですか？』
『あー……シリウス達にはよく聞かせておきます』
勿論、シリウスに壊した物は弁償させますから、と俺は付け加える。
『六名様ですね？』
『はい』
『分かりました。受け付けをしますのでこちらへ』
（良かった……）
飛び入りＯＫな上に、シリウスの事も許してくれたみたいだ。……弁償はしなくてはいけないが。

「受け付けしてくれるから、店員についていって」
俺はシリウス、と続ける。
「君が壊した物、後で請求が来るから」
「はぁ？」
何でだ？とシリウスは聞いてくる。
「あれは触れてはいけない展示品みたいでね。それを触れて壊したのだから弁償は当たり前だろ？」
マグルが沢山いる此処での魔法も危険だしね、と俺は付け加える。
「……仕方ないな」
シリウスは舌打ちをしながらも弁償に承諾をした。
（これで何とか泊まれるな）
俺が安心したのもつかの間、すぐにタツキーとリーマスが呼ぶ声が聞こえた。
俺はすぐにシリウスと共にリーマス達の元へと向かう。
「これ、何書くの？」
リーマス達の元へとたどり着いた瞬間にはい、と何かを渡されそう聞かれた。
『あ、そこに宿泊する人数分の名前と住所を書いて下さい』
住所は代表者一人で大丈夫です、と日本語が話せる俺が来たからか店員が説明をしてくれた。
「名前を書いて下さいって」
名前くらいは自分で書いて、と俺はリーマスに押し付ける。
「あ、代表者でシリウスは住所も」
「……分かった」
シリウスは不服そうに了承した。
数分もするとすぐに俺の元へと戻って来た。
（名前……タツキで良いか）
俺はサラサラと火淵竜季と名前を書き、スイッと差し出す。
『……真に申し訳ありませんが、火淵様以外の名前の所にカタカナを振って貰えますか？』

達筆すぎて読めません、と店員に告げられる。
（英語の本場、イギリスの方々だからなー）
俺は苦笑いをしながら分かりました、と受け取り何とかカタカナを振っていく。
『真に申し訳ありませんでした。ありがとうございます』
スッと俺が差し出したと同時に受け取り、礼を述べる。
『部屋は一部屋二人ずつになりますので……三部屋ですね』
こちらが鍵になります、と鍵を渡される。
『三二一号室、三二二号室は三階、四二一号室は四階になります』
『分かりました』
「一部屋二人だから三組に別れて」
店員に聞いた事を英語で訳して伝える。
「ハリー！俺と一緒の部屋に―」
「ロン、一緒の部屋で良い？」
「うん！なら今夜さ―」
俺の言葉を聞いたシリウスはすぐさまハリーに声をかけるがハリーは先にロンと一緒になってしまった。
「んー…ハーマイオニーはどうする？」
一人が良いなから店員に頼むけど？と俺はハーマイオニーに問う。
「……そうね。悪いけれどそうしてもらえるかしら？」
「分かった」
ハーマイオニーの言葉を聞いた俺は恐る恐る店員に聞く。
『あのー…申し訳ないのですが、一人だけ女性なので二人の所を三人で使っても構わないでしょうか？』
『え？あ……その分少し狭くなると思いますが』
それでも宜しいでしょうか？と尋ねられる。
「シリウス、リーマス、狭くてもいいだろ？」
「僕は構わないよ」
「俺も別に良い」
俺は二人の返事を聞き、店員に話す。

『はい。お願いします』
『分かりました』
三人でお使いになる部屋はどちらになりますでしょうか？と店員に聞かれる。
（……別に四階でも良いよな）
『四二一号室です』
『分かりました』
「ハーマイオニー！」
店員と話し終えた俺はハーマイオニーを呼ぶ。
「俺はシリウス達と一緒に四階の部屋を使うからハリー達と三階のどちらかの部屋を使って」
そう言ってハーマイオニーに三階の部屋の鍵を渡す。
「ありがとう、ライカ」
「四階いぃいぃ」
ハーマイオニーがお礼を言うと共に話しを聞いていただろうシリウスが叫ぶ。
「シリウス、煩い」
「そうだよ。君は叫び声だけはやけに大きいんだからさ」
静かにしてくれる？とリーマスが告げる。
「……はい」
「じゃ各自自由時間で」
ただし責任ある行動を頼むなー、と伝えてから俺は一人先に階段があると聞いた場所へ向かう。
「あ、タツキ待て！」
すぐさまシリウスが後を追ってきたが。
「こんな所で置いて行くなよ！」
「こんな所って……大人なんだから俺が一緒について回らなくてもいいだろ？」
「言葉が分からない所で大人もなにも無い！」
タツキが俺と同じ状況ならばどうする？とシリウスは付け加えなが

ら聞く。
「俺なら魔法を使う」
「……は？」
シリウスは間抜けな声を出す。
俺はため息をつきながら言葉を付け足す。
「翻訳する魔法を使えば言葉の不自由はしないだろ」
「……あ！」
それがあった！とシリウスは喜んだように言う。
「……シリウス、君達はもう使えないよ？」
「は？」
国に入ったらもう使えない魔法なのか？とシリウスは聞く。
「君達、旅館に入ってからもずっと英語で話してるんだよ？日本語なんてカケラもないのにいきなり日本語ペラペラになったら……まず怪しまれるな」
目をつけられるね、俺以外はと付け加える。
「……それもそうだな」
シリウスは納得したのか反論をしなかった。
「あ、シリウス。俺部屋の確認をしたら温泉に入りに行くから……お留守番よろしく」
「はぁ？何で俺が？」
シリウスは嫌そうに言う。
「部屋に入ってリーマス一人だったらまた何か言われるよ？『伝言くらいはしてくれないかな？』とか」
特にシリウスに当たるんじゃない？と俺は付け加える。
「げっ……」
「リーマスが来たら好きにして良いし」
「……分かった」
シリウスは渋々と言った感じで返事をした。
「よっと……シリウス、四階に着いた？」
俺はそう言いながらトン、と階段を一段上る。

「後一段だな」
「……まだあったのか」
俺は最後の一段を上りきる。
「四二一号室だから……何処だろう」
「こっちじゃないか？」
そう言いながらシリウスは右へと曲がる。
「シリウス？」
何故分かる？と思いつつも俺はシリウスについて行く。
「お、あった」
右に曲がってから今度は左に曲がり、少し歩いた時にシリウスはこう言った。
「よく分かったね？」
俺はシリウスを少し見直しながら言う。
「階段を上った所のプレートに四二一からは右側って書かれていたからな」
そのあとも一号室は左側ってあったし、とシリウスは言う。
「……よく読めたね？」
それとも訳でも書かれてた？と俺は聞く。
シリウスはいや、違うと言い、続ける。
「右側に数字だけ書かれたプレートがあった」
きっと言葉が分からない人でも行けるように数字にしてるんだろ、とシリウスは言う。
「そう思うと日本人てのはよく気が利いてると言うか……よく考えてるよな」
「なら、シリウスも此処で暮らすべきだな」
何でだよ？とシリウスは聞いてくる。
「子供な部分が少しは消えるだろ？」
「誰が子供だ！」
ブツブツとシリウスは呟く。
（……子供だろ）

この旅館にシリウスを連れて来るだけでどれだけ疲れたか。
（疲れた、とかまだ着かないのか、とか歩き疲れたとか……）
ずっと聞かされ、時たま休憩させられたこちらの身にもなって欲しい。
俺はため息をつきながら貰った鍵を使い部屋の中へと入る。
「荷物は……ここら辺でいいか」
俺はドサリと荷物を置く。
「お？これ何だ？」
俺の後に続き入ってきたシリウスがそう言う。
そしてすぐにシリウスではない声が聞こえた。
『では、次のニュースです。昨夜、去年の泰田和咲さんの殺人の疑いで取り調べを受けていた田那満久さんが取り調べをしていた警察官を刺し殺し逃亡しました。現在警察は田那満久さんの行方を追っています』
「何だこれ！？」
箱に人が居て何か話してるぞ！とシリウスは興奮気味に言う。
「マグルはこんな物を使っているのか……」
魔法を使えばこんなのいらないのにな、とシリウスは一人で話していく。
「シリウス、俺温泉へと行くからな！」
俺はまだ一人で話していくシリウスに一言告げ着替えを持ってから部屋を出て行く。
（温泉は……一階だろうな）
俺はトントンと階段を下りていく。
「ライカ？」
「ハリー？」
俺が階段を下りていると少し上の方から声をかけられた。
「何処に行くの？」
「温泉」
誰かのおかげで汗かいているからね、と付け加えて言う。

「僕も行くよ」
少し待っててね、と言ってパタパタ去って行く音が聞こえた。
「元気だな……」
子供は元気過ぎるくらいがちょうどいい。
（……ん？）
子供……いや、確かハリーは十七歳になってたな。
（もう……大人か）
年月が過ぎるのは早いもんだな。
（俺が子供の頃なんか一日が長く感じたんだが……）
今では一日が短いな。
（まぁ、一日中一瞬でも気を抜けなかったし……仕方がなかったと言えば仕方がなかったな）
「……いや、仕方ないで済ませてはいけないか？」
（ま、終わった事だかな）
今更ゴチャゴチャ考えなくてもいいか。
「ライカ！」
待たせた、とハリーが息を切らしながら話しかけてきた。
「別に構わないよ。行こうか」
俺はこう言いながら階段を一段一段ずつ下りていった。

「ライカ！」
温泉の場所へと着き、温泉に入る準備をハリーとは別々に終えた俺はガラリと温泉へ入る扉を開けた瞬間にハリーが声をかけてきた。
「その体……」
（体？）
「ん？あぁ……」

（そう言えば何もしてなかったな）
ボロボロに傷ついたこれをハリー達には見せない方が良かったよな……
俺はため息をつく。
「……いつの？」
少なくとも最近じゃないよね、とハリーは聞く。
「……ゴドリックの時だよ」
俺も若くてヤンチャだったんだ、と付け加えて言う。
「……あまり気にするな。もう痛くはないし」
「……うん」
ハリーの気を遣うかの様な言葉を聞いてから俺は浴槽へと向かう。
（気を遣わせたか……）
久々にしてはいけないミスしたな。
俺はもう何度目か分からないため息をつきながら湯へと入る。
（あー…気持ちいいな）
ずっと浸かっていたら色々な事を忘れそうだな。
（シリウスの馬鹿とか馬鹿とかホグワーツの事とか）
ホグワーツについては帰ったらすぐに『必要の部屋』の修理だし。
（よくもあんなに燃やしたものだ……）
慰安旅行に出る前に確認をして来たが……酷かった。
（自動修復魔法が一応機能しているが……）
あれでは元に戻るにはかなり時間かかるだろう。
俺は苦笑するしかなかった。
（やりたくは無いが、明日には帰るしな……）
そしたら作業をしないとマクゴナガル先生に説教されるだろう。
（……うん。忘れよう）
この一時だけでも忘れよう。
俺はチャプンとお湯へと深く浸かった。

「あー…気持ち良かった」
温泉から出た俺は旅館の一階、リビングに置いてあるソファーだろう物にドサリと座る。
（気持ち良かったが、少し浸かりすぎた……）
少しフラフラするし。
（ハリーと一緒に上がっていれば良かったか？）
だがハリーは上がるのが早かったんだよな。
「あれで成人してるなんて―…」
しかし俺は最後まで言えず、ガシリと首を後ろから軽く締められ刃物……だろう物を当てられる。
（……ん？）
あ、後ろに人が居る。
（気づかなかったな……）
いくらのぼせているとは言えこんなに近づいた人間に気づかないなんて。
（平和ボケしたな……）
帰ったら久々に訓練をしよう。
俺が訓練を決心した次の瞬間、野太い声が響いた。
『このガキが殺られたくないなら動くな！』
この言葉で騒がしかった一階が一瞬にて静まり返る。
『おら、立てガキ』
「ガキはお前だろ」
俺はわざと英語で返す。
『あ？何言ってんだこいつ？』
ハーフではなく、もしかして外人か？と呟く声が聞こえる。
（面倒だな……）
俺はため息をつき、日本語で話す。

『立てばいいんだろ？』
俺はそう言って立ち上がる。
『こいつ……日本語話せたのか』
ザワリと後ろから殺気が出始める。
（触れた、か……）
俺の発言の何処かに怒りの琴線に触れてしまったのだろう。
（激怒しているわりには生温い殺気だが）
残念だが、こんな生温い殺気に怯えるような温い生活はしていない。
（……さて、どうしようか）
『……田耶満久』
何処からかポツリと聞こえる。
（確かニュースであってたな）
殺人犯だったか？
『そうだ。俺が田耶満久』
後ろから嬉しそうに殺人犯は言う。
『だからこのガキも殺ろうと思えば殺れる』
そう言って刃物を立て、首を少し切る。
（……痛っ）
この少し切られるのが場合によっては普通に切られるより痛かったりするんだが……
（こいつ……）
バッサリ切れば良いものを……許さねぇ。
俺はニコリと笑顔を張り付ける。
『覚悟しろ。田耶満久？』
『は？』
何だこいつ、人質の理解してないのか？と殺人犯は言う。
俺はそれを無視し、グッと首に回された腕を掴んでから深く懐へと入り左足を払う。
『……っ』
殺人犯は急に仕掛けてきた俺に驚いたのか狙い通りにバランスを崩

す。
俺はその隙を見逃さず掴んでいた手を引き寄せ、殺人犯の体を床へと叩きつける。
ダァァンと打ち付けた音が響く。
『……ぐっ』
『こんなもので……まだ済まないからね？』
俺は張り付けた笑顔で言う。
そして殺人犯の言葉を聞く前にグィと掴んでいた手を寄せる。
『俺より痛いかもね？』
後、このくらいでは死なないから安心してね、と付け加えて言ってから俺は引き寄せた腕を折る。
バキリと嫌な音が聞こえたかと思うと叫び声が響いた。
『うわぁぁぁぁぁぁあ』
（煩い……）
俺は眉を潜めながらもビリリと殺人犯の服を破いていく。
（このくらいか）
適当な長さに引き裂いた服を持ち、殺人犯の後ろだろうところに回る。
そして折った腕と無事な腕を動かし両腕を引き裂いた服で縛っていく。
『ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ』
折った時よりも痛いのか殺人犯は叫び続ける。
『店員さん、警察呼んでくれる？』
俺は居るか分からなかったがとりあえず聞いてみる。
『は、はい！』
（……居たのか）
パタパタと店員が駆けて行く音が聞こえる。
（殺人犯も手は出せないし……部屋に戻るか）
俺は依然静まり返っている一階から借りた部屋へと向かった。

ガチャリと扉を開き部屋へと入ると声がかけられる。
「お帰り、タツキ」
「ちゃんと留守番してたからな」
リーマスに続き、シリウスが言う。
「温泉良かった？僕達も後で―…」
リーマスは最後まで言わなかった。
「……その傷どうしたの？」
「……あ」
そういえばあいつは薄く切り付けてたな。
俺は首に手を近づける。
（んー…どちらでもいいか）
魔法を全体にかければいい。
俺は小さく呪文を唱え、リーマスの質問に答える。
「殺人犯に会ったんだよ」
「さ、殺人犯！？」
こんなところにか？とシリウスは言う。
「捕まったのを逃げたんだよ」
ニュースで言ってた、と付け加える。
「で、その殺人犯は？」
リーマスが問う。
「まだ叫んでるんだと思うよ？」
腕を折っただけなんだけど……最近の奴らは腕を折られただけでもすごく叫ぶんだな、と俺は愚痴るように言う。
「いや、誰でも腕を折られたら叫ぶだろ」
「……へぇ」
「……なぁ、リーマス。俺何か間違えたか？」

「タツキがおかしいだけだから安心していいよ」
俺はコッソリと話しているつもりの二人に聞く。
「叫んだりしたら見つかるだろ？」
「「何に！？」」
シリウスとリーマスの声が重なる。
「誰かに見られてるのか！？」
シリウスがすぐさま聞いてきた。
（叫んだら敵に見つかるだけで）
見られてはないし……
「見られてはないけど」
「なんだ……」
ビックリした、とシリウスは言う。
「てっきり俺はタツキが狙われてるかと思った」
（……誰に？）
俺に恨みを持っている奴らは皆死んだぞ？
俺達の会話が途切れた頃に控え目にノックがされカチャリと扉が開く。
『すみません、そろそろ夕食の時間ですが……』
運んでもよろしいでしょうか？と尋ねられる。
『あ、お願いします』
『分かりました』
そしてカチャリと扉が閉められる。
「何だったの？」
「夕食を運んで来るって」
机使っているなら物をしまって、と付け加えて言う。
「分かった」
それからはバタバタと俺達は片付け、旅館の方は夕食の準備をした。
『ごゆっくりとどうぞ』
俺達が片付けを終えると同時に夕食が並ばれ、旅館の人はこう言って去って行く。

「じゃ、食べようか」
リーマスのこの言葉で食事が始まった。

「上手かったー」
食事を終えたシリウスはそう叫ぶ。
「美味しかったね」
シリウスの言葉にリーマスも同意した。
「さて……就寝まで何をしようか？」
旅館の方が布団を引くまでは部屋に居られないし、と俺は告げる。
「俺、マグルの遊びを聞いた」
だからハリーたちとそれをしよう！とシリウスは言う。
「二階に集合な！」
そしてシリウスは一方的に言って出て行った。

「たっきゅう……？」
おう！とシリウスは元気良く言う。
「ルールは敵のコートに球を入れれば良いんだって」
「良くルールを知ってるね？」
自信満々に言うシリウスにリーマスが問う。
「他のを見て理解したんだ」
「それだけ理解したって事か」
リーマスが少しいらついたように言う。

「は、早くやろうぜ」
シリウスはリーマスをこれ以上怒らせない為かそう言って“たっきゅう”を始めた。

カコンカコンと音が響く中、俺は椅子に座りボンヤリとしていた。
「ライカはしないの？」
結構楽しいわよ、とハーマイオニーが声をかけてきた。
「目が見えてないし……今日はしない」
「何故？」
ハーマイオニーは鋭く聞いてくる。
「疲れた」
俺はそんなハーマイオニーに短く答える。
「……そういえばそうよね」
何もかもライカが案内してたのよね、とハーマイオニーは言う。
「……ライカは……その、寂しくなかった？」
ハーマイオニーが怖ず怖ずと聞いてくる。
「何が？」
俺は質問の意味が分からずに聞き返す。
「いきなり知らない時代に来て」
「んー…どうだろう？」
辛い事もあったし、あいつらに会いたいとも思った事も……ある。
「寂しかった、かな？」
でもそれ以上に有名になっていて驚いたな、と付け加える。
「……え？」
「当時もまぁ有名だったのは有名だったけど……」
それは危険人物という方面での有名だったし……

「此処まで有名ではなかったんだよ」
俺は笑顔で言い、ごまかす。
「そうだったの？」
「まぁね」
ハーマイオニー！とロンが呼ぶ声が聞こえる。
「ロンが呼んでるよ？」
「……ええ」
一体何？と言いながらハーマイオニーは去って行く。
（眠くなってきたな……）
けれどシリウス達は何だか一生懸命にしているし……
（先に帰るか）
俺は騒がしくしているシリウス達の元をそっと抜け出した。
四階へと上がってからカチャリと部屋へと入り、布団を確かめてから中へ入る。
（あ、そうだ）
仮眠でも邪魔はされたくないから……
俺はパチンと魔法をかける。
（これで安眠出来る）
俺はモゾリと布団へ潜り襲ってくる睡魔に身を任せた。

（……ん？）
朝かな？
目が覚めモゾリと布団から出る。
（今日は確か……）
帰りも飛行機だから早めに此処を出ないといけなかったな。
（……何だか慰安な気はしないが）

殺人犯は来るし、シリウス達の引率は大変だし。
（ま、こんな旅行もたまにはいいか）
俺はクスクスと笑いながら布団から出てシリウスとリーマスを起こしにかかった。
「リーマス、シリウス、ホグワーツへと帰るぞ！」

外伝・日常風景（前書き）

この話しで完結となります！

想像以上に長かったですね……

あ、この話しに『魔法薬学』の先生が出ていますが、これはリアルの友達から頂きました。
その友達もハリポタの小説を書くと言っていたので……
何処かで見かけるかもしれません。
ですがちゃんと許可は貰いましたので、見かけた時はああ、これかの程度でスルーして下さい。

此処までお付き合い下さいありがとうございました！

m（＿＿）m

外伝・日常風景

今日もホグワーツ中に響き渡っているだろう音量で管理人のフィルチが一人の生徒の名を呼ぶ。
「ジェームズ！」
（あー…またか）
事務室の前に糞爆弾を仕掛けたのは！とフィルチは叫ぶ。
「またお前か！」
ジェームズは嬉しそうに言う。
「僕は置いただけだよ」
「仕掛けたのは別の奴さ」
（あいつか……）
俺がため息をつくとともにフィルチの叫び声が響く。
「スティル！仕掛けたのはお前だな！」
「それくらい避けられないと♪」
（……俺に飛び火しない内に逃げるか）
俺はフィルチの声が響く中、リーマスの元へと向かった。
『闇の魔術に対する防衛術』の教室をコンコンとノックをしてから扉を開く。
「リーマス、いる？」
「タツキ」
入るよ？と言いながら俺は中へ入って行く。
「グリフィンドール先生」
俺がリーマスの元へと着くと声をかけられる。
「……ソーラスも居たんだ」
「分かってたのにその反応はないんじゃないかな？」
むぅ、と少し拗ねたようにソーラスは言う。
「悪かった。リーマス、これ今日の―」
俺の言葉を遮りバタンと後ろ側の扉が開いた。

「こんなところにいたな、グリフィンドール先生」
「あれ？ライル」
どうしたの？とソーラスが尋ねる。
「ルーシュタット先生がグリフィンドール先生に用があるってな」
だが、部屋には居なかったから探す羽目になった、とライルは言う。
「何？」
俺は『魔法薬学』新任のルーシュタット先生に問う。
「グリフィンドール先生、ドラゴンの心臓を持ってませんか？」
（ドラゴンの心臓？）
それならば材料を保管してあるところにあるはず……
「それなら保管庫に無かった？」
俺がそう問うとサラリとルーシュタット先生は言う。
「盗まれました」
俺はその言葉にため息をつく。
「ちゃんと防衛しとけよ」
それなら持ってるから後で届けさせるよ、と俺は言う。
「ありがとうございます」
そう言ってルーシュタット先生はカツンと歩きだす。
「そのかわり何か奢れよ」
ドラゴンの心臓は容易に買える金額ではない。
俺はルーシュタット先生が去る前にそう言った。
「リーマス、これ今日の分」
ちゃんと飲んでね、と言って俺はリーマスに薬を渡す。
「はい、はい」
リーマスは分かってる、と言いながら受け取る。
「ライル、ドラゴンの心臓のやつ頼んだ」
「ちっ……分かった」
舌打ちしながらライルは出て行く。
「俺のところは入るなよ！」
授業用のところに置き忘れであるから、と去って行くライルに伝え

る。
「自分で行かないなんて珍しいね」
相変わらず嫌な味だった、と言いながらもリーマスは問う。
「客人が来たからね」
「客人？」
リーマスが誰か来る予定あった？と聞いてきたが俺は無視をする。
（どうせすぐに分かるしな）
「ルーピン先生！」
「グリフィンドール先生！」
教室へとやって来た生徒が同時に叫ぶ。
「……成る程」
確かに客人だね、とリーマスは言う。
「グリフィンドール先生！探したんですよ！」
俺に用があるだろう生徒が叫ぶ。
「部屋か教室に居なかったら別の先生に聞けって言ってるだろ」
「先生がそこに居た事があってから言ってください」
そう言いながら二人の生徒は近づいて来る。
「俺が居る時は誰も来ないんだ」
お前らのタイミングが悪いんだろう、と俺は言う。
「いや、先生のタイミングが悪いんです」
「……どちらでもいいよ。どうしたの？」
グリフィンドール先生を探すくらいだから何か用があったんじゃない？とリーマスは言う。
「私の名前を呼んだ君の用は？」
リーマスはそう言って話しを催促する。
「……どうした？」
俺も名前を呼んだ生徒に問う。
二人は同時に同じ内容を言った。
「「ジェームズが悪戯しようとして階段から落ちかけてます」」
「……どういう事かな？」

リーマスが詳しく話してくれないかな?と聞く。
「……ジェームズが、向かい側の階段を渡る人に悪戯しようと思ったのか階段の手摺り部分に乗り上げていたんです」
「そしたら、階段がいきなり動いてジェームズは咄嗟に手摺りを掴んだんだけど……」
生徒は交代しながらも答えた。
(手摺りを掴んでぶら下がっている状態か)
俺とリーマスは同時にため息をつく。
「分かった。すぐに行く」
俺は生徒にそう言い、扉へと向かう。
「私も行こう」
ガタンとリーマスも立ち上がり、俺の方へと向かって来る。
「リーマス」
俺は近づいて来るリーマスの名前を呼ぶ。
「今はダメだ」
満月が近いだろう、と付け加えて言う。
「昼なら平気だよ。それにもし何かあったら君が止めるだろう?」
俺は二度目のため息をつく。
「分かった。行こう」
バタバタと俺とリーマスは階段がある方向へ向かった。

(後、少し)
俺とリーマスは右へと曲がる。
そして残り数メートルを急いで走る。
今だ勢いを殺し切れない俺とリーマスが階段へと着いた瞬間だった。
「ジェームズぅぅ」

一人の生徒の叫び声と数人の悲鳴が響いた。
そして、少し遅れてからジェームズの叫び声が響く。
「うわぁぁぁぁぁあ」
（ちっ……）
間に合わず落ちたか。
俺は急いでロープから杖を抜き振る。
「……え？」
（止まった、か）
俺のかけた魔法が効きジェームズの魔力の下降が止まった。
（上げないと……）
俺はもう一度杖を振る。
「わっ……」
俺のかけた魔法はユックリと、しかし確実にジェームズの魔力は上がっていき階段へと着地させた。
「……グリフィンドール先生」
ジェームズは罰が悪そうに言う。
俺はそんなジェームズにニコリと笑い告げる。
「どれだけ自分が迷惑をかけたか分かってる？」
「……」
「生徒は俺に知らせるために城中を探して回った」
「……」
「リーマスだって満月が近くてキツイのに俺と一緒にすぐに駆け付けた」
「……」
「そしてそうなった理由が……悪戯をしようとして、だったか？」
「……ごめんなさい」
俺はため息をつき、ジェームズに伝える。
「罰則は……そうだな、書き取りでは今までと同じだから……一週間、ただ働きの助教授だな」
ちなみに分かっているだろうが、助教授でも減点とかは出来ないか

らな、と俺は付け加える。
「……え？」
ジェームズは有り得ない、と言う。
「いや、やるぞ。マクゴナガル校長先生には俺から伝えておく」
「それなら確実にあるじゃないか！」
俺はその言葉にニヤリと笑う。
「覚悟しとけよー」
うげぇーとジェームズは嫌そうに言う。
「あ、私からも良いかな？」
リーマスがこう言ってからジェームズに告げる。
「私からは君のご両親に手紙を書くだけで済ませよう」
グリフィンドール先生がしっかりと働かせるだろうし、私からはこれくらいにしておくよ、とリーマスは言う。
「ルーピン先生！そ……それだけは」
「何かな？」
うぐっとジェームズは口ごもる。
「……さて、俺はマクゴナガル校長先生の許可を取りに行くか」
「グ……グリフィンドール先生ぇぇぇ」
俺はジェームズの叫び声を無視し、階段から校長室へと向かう。
（……少し厳し過ぎたか？）
だが、いくら書き取りをさせても反省はしない。
（自業自得と言う事で）
悪戯で此処まで他人に迷惑をかける事を俺は許す気はない。
（……他人の事はあまり言えないけどな）
過去の自分の行動で俺は思わず苦笑する。
（だが、叱らなければ調子に乗りはじめる）
そうなれば被害者が出てもおかしくない。
（難しいものだな）
悪戯の線は何処までだろう？
（少なくともジェームズよりも俺の線は緩いな）

ジェームズと違うのは……他人に心配させないところか？
（悪戯の線……分からなくなってきた）
頭が混乱してきたし、今はマクゴナガル先生に許可をもらう事だけを考えよう。
俺はポツリと辿り着いた校長室前で合言葉を告げた。

外伝・日常風景（後書き）

『英雄後談』も終わりましたのでリクエストを受け付けます。
未来世代の話しを読みたい！などありましたらどうぞ感想にて書いて下さい。
ちなみに、こちらに載せるか短編で載せるかは不明です。

えーと……後は……あ、創設者世代ですが8月1日に掲載予定です。
ですがこちらは原作などありませんので今作みたいに毎日は無理かと……
後、原作設定と違ったりします。
迫害所ではありません。
人、バンバン死んでます。
そういう系統がダメな方はスルーしてください。

これだけだったかな……？

後書きまで読んでくれてありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9125p/

英雄後談

2011年8月21日06時10分発行